

令和元年度
博士論文（指導教員 丁 鋒）

明治期北京官話教科書『官話指南』
及び学習補助教科書の総合研究

大東文化大学大学院外国語学研究科
中国言語文化学専攻博士課程後期課程
（学籍番号 15231102）

孫 云偉

目 次

序論.....	1
0. 1 研究背景と研究対象.....	1
0. 1. 1 研究背景.....	1
0. 1. 2 研究対象.....	4
0. 2 研究範囲と研究意義.....	7
0. 2. 1 研究範囲.....	7
0. 2. 2 研究意義.....	9
0. 3 先行研究.....	10
0. 4 研究方法.....	14
0. 5 論文構成.....	15
本 論	
上編 『官話指南』の総合研究.....	20
第一章 『官話指南』の語法的研究(1) — 語彙的側面について.....	21
1. 1 先行研究の概要とその成果.....	21
1. 2 語彙の再検討.....	24
1. 2. 1 北京語辞典に収録されている語彙と収録されていない北京語語彙.....	24
1. 2. 2 “兒化詞”.....	33
1. 2. 3 文語の使用実態.....	35
1. 3 語彙の北京語特質.....	37
第二章 『官話指南』の語法的研究(2) — 文法的側面について.....	40
2. 1 先行研究の概要とその成果.....	40
2. 1. 1 太田辰夫の研究.....	41
2. 1. 2 周一民の研究.....	42
2. 1. 3 その他の研究.....	45
2. 2 文法の再検討.....	46
2. 2. 1 名詞、動詞、形容詞、量詞、代詞.....	49
2. 2. 2 副詞、介詞、助詞、語気詞.....	59
2. 3 文法の北京語特質.....	69
第三章 『官話指南』の教科書研究(九江版との比較).....	72
3. 1 先行研究の概念とその成果.....	72
3. 1. 1 内田慶市、氷野善寛の研究.....	72

3. 1. 2	張美蘭と李穎、齊燦の研究	73
3. 2	九江版『官話指南』右文の版本研究	75
3. 3	九江版『官話指南』にみられる南北官話の差異	80
3. 3. 1	名詞、動詞、形容詞、代詞と連語構造類	80
3. 3. 2	介詞、副詞、語気詞類	82
3. 3. 3	その他	83
3. 4	『官話指南』（初版）に見える南京官話表現	85
3. 4. 1	南北共通の表現	86
3. 4. 2	介詞、副詞類	87
3. 4. 3	その他	90
3. 5	『官話指南』北京官話特徴の再認識	91
	上編結論	93
	中編 『官話指南』学習補助教科書の総合研究	95
	第四章 学習補助教科書の翻訳研究	96
4. 1	『官話指南』学習補助教科書の補助内容	96
4. 1. 1	『總譯』	96
4. 1. 2	『自修書』	97
4. 1. 3	『精解』	100
4. 2	『總譯』『自修書』『精解』における翻訳の文体的特徴	101
4. 2. 1	『總譯』の文体的特徴	109
4. 2. 2	『自修書』の文体的特徴	111
4. 2. 3	『精解』の文体的特徴	112
4. 3	三書の翻訳内容	113
4. 3. 1	三書の言語使用	113
4. 3. 2	『總譯』『自修書』における翻訳上の問題	115
4. 3. 3	『自修書』『精解』のすぐれた点	117
4. 4	三書の翻訳における学習補助的価値	118
4. 4. 1	中国語教科書編纂史上における『總譯』『自修書』『精解』の位置づけ	118
4. 4. 2	学習補助価値	122
	第五章 学習補助教科書の注釈研究	124
5. 1	『總譯』『自修書』『精解』三書の注釈	124
5. 1. 1	三書の内容における特徴	124
5. 1. 2	三書の注釈における特徴	125

5. 2	三書の語彙注釈.....	132
5. 2. 1	北京語語彙と北京語文法の注釈.....	132
5. 2. 2	生活用語の特徴について.....	134
5. 2. 3	役所用語の特徴について.....	136
5. 3	三書注釈の学習補助価値.....	137
5. 3. 1	中国語教科書編纂史上における『總譯』、『自修書』、『精解』の位置づけ.....	137
5. 3. 2	注釈の学習補助価値.....	138
第六章	学習補助教科書の音声研究.....	141
6. 1	『官話指南』の「凡例」における北京語音声の説明.....	141
6. 2	『總譯』『自修書』『精解』三書の表記.....	144
6. 3	『自修書』仮名表記の研究.....	146
6. 3. 1	『自修書』における仮名表記の特徴.....	146
6. 3. 2	明治時代における仮名表記の北京官話教科書.....	156
6. 4	『自修書』の「重念」の研究.....	163
6. 5	『精解』のローマ字表記と『語言自邇集』.....	165
6. 5. 1	『語言自邇集』の音韻体系.....	165
6. 5. 2	『官話指南精解』と『語言自邇集』との関係.....	167
6. 6	三書注音の学習補助価値.....	172
6. 6. 1	注音の学習補助価値.....	172
6. 6. 2	明治期中国語教育における学習補助教科書の位置付け.....	173
中編結論	175
下編	『官話指南』の著者及び鄭永邦の編纂によるその他北京官話教科書の研究	177
第七章	『官話指南』の著者と編纂過程の研究.....	178
7. 1	呉啓太の再検討.....	178
7. 1. 1	呉啓太の履歴書.....	179
7. 1. 2	外務省漢語学所での学習.....	180
7. 1. 3	ブラッセル大学での学習.....	182
7. 2	鄭永邦の再検討.....	182
7. 2. 1	東京外国語学校の入学時期.....	184
7. 2. 2	鄭永邦の履歴書.....	184
7. 2. 3	任職受勲.....	190
7. 2. 4	在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録.....	191

7. 2. 5	中国での中国語教育の実践	192
7. 3	呉啓太・鄭永邦比較年表	193
7. 4	初版『官話指南』の編纂過程	201
7. 4. 1	『官話指南』の体裁	201
7. 4. 2	「應對須知」	203
7. 4. 3	「官商吐屬」	204
7. 4. 4	「使令通話」	204
7. 4. 5	「官話問答」	205
7. 5	改訂版『官話指南』と金國璞	206
7. 6	『官話指南』の著者と編纂過程	207
第八章	鄭永邦『北京發音反切表』の研究	209
8. 1	『反切表』の構成	209
8. 1. 1	『反切表』の内容	209
8. 1. 2	声母、韻母	209
8. 1. 3	特殊な音節字	212
8. 1. 4	“声介合母”	213
8. 1. 5	「発音心得」	214
8. 2	『反切表』の注音	216
8. 2. 1	『語言自邇集』との関係	216
8. 2. 2	『反切表』の反切注音	217
8. 2. 3	『反切表』の仮名表記	218
8. 3	鄭永邦による北京語音声研究の獨創性	218
第九章	鄭永邦による北京語多言語対照教科書の研究	220
9. 1	『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』	220
9. 1. 1	『日漢英語言合璧』	220
9. 1. 2	『日清英露四語合璧』	221
9. 1. 3	両書の先行研究	223
9. 2	二書の北京語表現	223
9. 3	二書の北京語仮名表記	225
9. 3. 1	『語言合璧』と『四語合璧』の発音表記	225
9. 3. 2	声母と韻母	227
9. 3. 3	音節の対応性と特殊な仮名表記	228
9. 3. 4	鄭永邦による仮名表記と『亜細亞言語集』との関係	232
9. 4	『語言合璧』『四語合璧』の語彙と音声の特徴	233
下編結論		234

終 論.....	236
1 本研究の成果.....	236
2 今後の課題.....	242
参考文献.....	244
既発表論文と各章の関係.....	251
附録 『総譯』『自修書』『精解』三書における注釈一覧表.....	252
謝辞.....	398

図 表 目 次

上編の図表

第一章

表 1 先行研究で指摘された『官話指南』の北京語語彙（ピンイン順）	22
表 2 先行研究で指摘されていない『官話指南』の北京語語彙	25
表 3 『官話指南』の文語	35

第二章

表 4 太田辰夫（1950、1965、1969）と周一民（1998、2002）が扱った北京語文法の対照表	43
表 5 『官話指南』の各巻における北京語文法表現の分布と使用頻度	46

第三章

表 6 先行研究で扱われた九江版『官話指南』の南北官話表現の対応表	73
表 7 初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の文言差異対照表	76
表 8 名詞、動詞、形容詞、代詞、量詞、連語構造類の双行注における南北官話の対応表	80
表 9 介詞、副詞、語気詞類の双行注における南北官話の対応表	83
表 10 初版『官話指南』に見られる南京官話の表現	85
表 11 初版『官話指南』の北京語固有表現と九江版『官話指南』左文表現の分布	91

中編の図表

第四章

表 1 『總譯』『自修書』『精解』三書翻訳の特殊用例対照表	102
表 2 明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書一覧表	119

第五章

卷末附録 『總譯』『自修書』『精解』三書における注釈一覧表	252
-------------------------------	-----

第六章

表 3 『自修書』の音節字表	147
表 4 明治時代における仮名表記中国語教科書一覧表	156
表 5 明治時代における北京官話教科書仮名表記の変遷年表	160
表 6 『語言自邇集』の声韻対照表	166
表 7 『精解』におけるローマ字表記の音節字表	167

下編の図表

第七章

図 1 ベルギーの官費留学生として提出した履歴書	180
図 2 鄭永邦の任職履歴書	185

表 1 鄭永邦在職期間の賞典	191
表 2 鄭永邦在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張日期と場所	192
表 3 吳啓太・鄭永邦総合年表	193
第八章	
表 4 『反切表』の反切上字と現代漢語の声母対照表	210
表 5 『反切表』の韻母〈ung/eng〉と声母の配列表	211
第九章	
表 6 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の音節字表	229
文末附録図表	
『總譯』『自修書』『精解』三書における注釈一覧表	252

序 論

0.1 研究背景と研究対象

本研究は明治時代に呉啓太、鄭永邦の両氏が編纂した『官話指南』に先行研究を踏まえながら再検討⁽¹⁾を行ったうえで、『官話指南』から派生した学習補助教科書⁽²⁾3種の総検討、両名と学習補助教科書編纂者の伝記の再考察、鄭永邦が著した他の北京官話教科書との関連研究を含めた『官話指南』をめぐる包括的な総合研究を目指したものである。本研究は『官話指南』を中心に据え、研究視野を広げ、日本における明治時代の中国語教育史を探索し、特に明治初期の北京官話教育史における位置づけの解明を研究目的とする。

0.1.1 研究背景

日本社会における中国語の教育は江戸時代の長崎唐通事の育成にさかのぼるが、近代日本の中国語教育は明治時代に発足したこととなる。六角恒廣は論文「中国語教育史の時代区分」⁽³⁾において戦前の中国語教育史を7期に分け、その第1期を「明治4年(1871)～同10年(1877)」の6年間とし、氏は「近代日本において最初に中国語教育をとりあげたのは、明治4年2月に開設された外務省の漢語学所である。」⁽⁴⁾と述べ、近代日本における中国語教育史の発端は外務省漢語学所(1873年に東京外国語学校の漢語科に移管)の設立にはじまるとした。第1期の中国語教育の特徴は以下3点にまとめられる。

(1)漢語学所の開設は外務省が日清両国の正式な国交成立にそなえる措置であり、教育目的は外交上の実務に従事できる中国語要員の養成である。

(2)漢語学所の漢語教師は江戸時代の長崎通事を招き、生徒も殆ど唐通事の子弟で、教科書も教育法も唐通事時代と変わりなく、教育された中国語は唐通事時代の南京語である。

(3)官立学校以外の各地漢語学校に実施されたのも南京語教育である。

第2期(「明治10年(1877)～同19年(1886)」)の最も大きな特徴は「南京語教育から北京官話教育への転換」である。その契機は「日本政府が清国駐在公使を派遣するにあたり、北京官話が必要となったことにあった」⁽⁵⁾として、中国の南方で使用する南京語は首都北京では通用しないため、やむをえず現地で北京官話の通訳を採用した。この予想外の事態に対応するため日本政府は「東京外国語学校漢語科の生徒3名を選び北京公使館において北京官話を学習させる」こととし、「東京外国語学校の漢語科は明治9年(1876)9月の新学期から北京官話の教育に転換する」という、この2点の緊急対策を講じた。東京外国語学校漢語科の教育内容の方針転換は「これ以後、日本の中国語

⁽¹⁾ 本論文の「再検討」とは、先行研究を踏まえた再検討を行うことである。

⁽²⁾ ここで言う学習補助教科書とは、『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』などの『官話指南』の学習を補助するために編まれた教材を指す。

⁽³⁾ 『早稲田商学』1985年総第313号。また『中国語教育史論考』(1989年、不二出版)第7-43頁に再録される。

⁽⁴⁾ 同上、149頁。

⁽⁵⁾ 同上、152頁。

教育では北京官話の教育をおこなうこととなった⁽¹⁾ ことの要因である。

第2期の10年間、日本で使用された北京官話の教科書は六角恒廣『中国語関係書目(増補版)』(2001:7-8)によると、以下の4種類にとどまる⁽²⁾。

- 1) T.F.Wade 編著『語言自邇集』(1867年初版)
- 2) 中田敬義訳『北京官話 伊蘇普論言』(1879年初版)
- 3) 広部精が『語言自邇集』に基づき再編した『亜細亜言語集』(1879年初版)
- 4) 吳啓太、鄭永邦共編『官話指南』(1882年初版)

そのうち日本人が関与した3種について、2)は翻訳書であり、3)は1)の再編本であるため、4)が実質的に当時の日本人が編纂した最初の北京官話教科書となる。この『官話指南』は本研究のタイトルに掲げる北京官話教科書の書名であり、本研究の基礎研究、課題設定、論述展開、総合考察の出発点となる文献資料である。

『官話指南』の編纂者は吳啓太(ゴ ケイタ 1858-1895)と鄭永邦(テイ エイホウ 1862-1916)であり、鄭永邦は清国北京日本公使館に派遣された「東京外国語学校漢語科の生徒⁽³⁾」である。両氏は公使館の「通弁見習」として勤務する傍ら北京語を学習し、『官話指南』の編集、出版に取り組んだ。『官話指南』の本文は約五万五千字あり、全四巻81章の会話文から成る。巻之一「應對須知」は簡潔な会話で一問一答の形式をとり、巻之二「官商吐屬」は商売、日常生活に関する内容の問答で40章から構成され、巻之三「使令通話」は主僕(主人と下僕)の会話、下僕が商売の従業員との会話などで20章からなり、巻之四「官話問答」は清国公使館及び清の官吏との外交交渉の会話が多く見られる。前三巻に比べて少々硬い表現を用い、全20章から成る⁽⁴⁾。

『官話指南』は北京官話の会話教科書として、初版の1882年から20世紀初めまで数十回も再版され、中国語教科書のベストセラーとなった。また、『官話指南』は英語版、フランス語版、方言版および『官話指南』の学習補助教科書などは全45版ほど出版され、北京官話学習者の必読書としての地位を有していた⁽⁵⁾。内田慶市、氷野善寛『官話指南の書誌的研究:付影印・語彙索引』(2016)は、『官話指南』及びそこから派生した各版を「重印版」、「『官話指南』から派生した会話書」、「方言学習としての『官話指南』」、「(国語)学習に利用された『官話指南』」の4大類に分類し、現存する関連版本を全面的に整理し、詳細な分析を加えた。

『官話指南』が明治時代の中国語教育史に与えた影響は大きく、学術分野の重要な研究対象にされてきた。中国語教育史研究の権威である六角恒廣の数多くの著書⁽⁶⁾において『官話指南』に関

(1) 同上、152頁。

(2) 六角恒廣『中国語関係書目:1867~2000』2001、7-8頁。

(3) 吳啓太は1878年5月に公使館に赴任し、その前の漢語学習歴はまだ見当たらない。鄭永邦は1880年4月に公使館に赴任し、その前は1873年11月から東京外国語学校漢語科に在学していた。

(4) 氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』2012、10頁。

(5) 徐麗 石汝杰《『官話指南』的版本和语言》2010、77頁。

(6) 六角恒廣の関連著書は『近代日本の中国語教育』(1961)、『中国語関係書目:1867~1945』(1985)、『中国語教育史の研究』(1988)、『中国語教育史論考』(1989)、『中国語書誌』(1994)、『中国語学習余聞』(1998)、『中国語関係書目:1867~2000』(2001)、『中国語教育史稿拾遺』(2002)など9冊となる。

する研究は以下の4分野に整理できる。

(1) 著者研究

- 1) 『中国語書誌』(1994: 40-42) と 『中国語関係書書目: 1867~2000』(2001⁽¹⁾: 106)

『官話指南』は北京日本公使館の通弁見習である呉啓太、鄭永邦の共編により、楊龍太郎を出版人として1882年出版され、日本人が初めて編纂した北京官話教科書であると記述した。

- 2) 『中国語学習余聞』(1998: 255-258)

『官話指南』の「凡例」について解説し、この凡例では主に呉啓太が執筆した内容であると指摘した。また、「凡例」によると金國璞と黄裕寿は『官話指南』の原稿を校閲しており、このことから両者は呉、鄭両氏の北京官話の先生であると述べた。そして、鄭永邦が著した『生財大道』の「序」によると、明治17(1884)年から明治20(1887)年の間に鄭永邦は「北京公使館で勤務する余暇に金國璞、黄裕寿および駱珣について中国語を学んでいた」とも指摘した。また、宮島大八により開設された善隣書院⁽²⁾で使用していた中国語教科書の中には『官話指南』と、鄭永邦と呉大五郎が共編した『日漢英語言合璧』及び『生財大道』がある⁽³⁾と述べた。

- 3) 『中国語教育史稿拾遺』(2002: 104-105)

鄭永邦は大訳官である鄭永寧の三男であり、長兄は永慶、次兄は永昌である。そして、鄭永寧の長女虎は『官話指南』の出版人である楊龍太郎に嫁いだ。もう一人の著者である呉啓太の養父は鄭永寧の実父呉用蔵の第四子呉碩であるため、「『官話指南』編者の二人はいとこの関係である」と指摘した。その上で氏は両著者の略歴を紹介した。

(2) 書誌研究

- 1) 『近代日本の中国語教育』(1961)の「付録Ⅱ」

- 2) 『官話指南』と『官話指南』のフランス語訳版、日本語訳版の書目を収録している。

『中国語関係書書目: 1867~2000』(2001)

『官話指南』の初版、複製版、改訂版、外国語版、『官話指南』の学習補助教科書、全11種の書誌情報を説明した。

- 3) 『中国語書誌』(1994: 40-46) 『官話指南』、『官話指南』の日本語訳版、日本語対訳版、英訳版、フランス語訳版、フランス語注釈版、複製版、学習補助教科書の『官話指南自修書』と『官話指南精解』の各書の構成、成立事情、著者と各版本の関係を解説した⁽⁴⁾。

(3) 語学研究

- 1) 『中国語学習余聞』(1998: 61-67)

『官話指南』の「凡例」における「四声」についての記述を紹介した上で、その「四声」の発音

⁽¹⁾ 『中国語関係書書目: 1867~1945』(1985)の増訂版である。

⁽²⁾ 明治27年(1894)に清国留学から帰国した宮島大八が明治28年(1895)5月に東京の平河町に開いた詠帰舎が前身であり、1898年(明31)6月に善隣書院と改称した。

⁽³⁾ 六角恒廣1998、131頁。六角恒廣『中国語への道』(1975: 70)もその点について論述した。

⁽⁴⁾ 同じように英語訳版、フランス語訳版、複製版の書誌を紹介したものに『中国語学習余聞』「海を渡って日本の北京官話」(1998: 292-300)と『中国語教育史稿拾遺』(2002: 104-110)がある。

説明は「適切な指摘」であると論じた。そして、中国人の間で広く言い習わされている現象「三声が二つ続くと、上の上声は下平に変わる」という変調の説明も『官話指南』から始まると述べた。

(4) 教科書使用

1) 『中国語教育史の研究』(1988 : 238-240)

明治 32 (1899) 年東京外国語学校が成立し、『日漢英語言合璧』と『官話指南』はそれぞれ 1 年生と 2 年生の教科書に採用されたと述べた。

2) 『中国語教育史論考』(1989 : 42)

『官話指南』は昭和 20 年 (1945) まで中級レベルの教科書として使用されたと言及した。

六角恒廣の中国語教育史論ないし『官話指南』に関する多方面に渉る考察と論述は先駆的な成果と言えるだけでなく、長年に亘り世界に日本学术界を代表して発信し続けた功績は計り知れない。近年、日本以外の研究者、特に中国の研究者は明治時代の中国語教科書に高い関心を示し、『官話指南』関連の研究成果についても多数発表され、研究の機運が高まっている。

しかし、『官話指南』は清末北京官話の「名著」として、また明治時代の中国語会話教科書の代表作として、教科書言語の総括研究、教科書の特徴解析、編纂過程や編纂者に関する再検討などの諸側面においてはまだ探究の余地があり、更なる研究が待たれる。その上、『官話指南』の学習補助教科書は数種類も存在するが、ほとんど研究されていない。また、『官話指南』の編纂者が執筆した他の北京官話教科書(北京語音声解説書、北京語多言語対照教科書)の整理分析、および『官話指南』との関連性の解明は明治時代の中国語教育史の全分野にわたる研究作業の一部であるため、研究する必要性が高いことは言うまでもない。以上の六角恒廣が提示した語学、教科書、著者の研究成果を参考にし、本研究の研究課題を設定する。

0. 1. 2 研究対象

本研究は『官話指南』3 種、『官話指南』の学習補助教科書 3 種、『官話指南』編纂者が編纂した『官話指南』以外の北京官話教科書 3 種、計 9 種を研究資料とする。

(1) 『官話指南』3 種

1) 初版『官話指南』(1882)

本研究では、初版『官話指南』は内田慶市、氷野善寛『文化交渉と言語接触研究 官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』(2016)の「影印本文」の影印本(第 1-74 頁)を利用した。

2) 改訂版『官話指南』(1903)

金國璞が著した改訂版『官話指南』は、『官話指南』の巻之一「應對須知」が削除され、「酬應瑣談」が新しく加えられている。本研究では 1945 (昭和 20) 年の第 45 版を底本とした。

3) 九江書会版『官話指南』(1893)

九江書会版『官話指南』(以下、九江版『官話指南』と略称する)は九江印書局から 1893 年に出版された『官話指南』の改編本であり、著者は不明である。また「九江」は地名(中国江西省境内の九江市)なのか、印書局(出版元)の名称なのかについても不明である。張美蘭の〈十九世紀末漢

語官話词汇的南北特征—以九江书局版《官話指南》为例 (2008) では「九江書会」がその著者名であると指摘している⁽¹⁾。九江版『官話指南』は「應對須知」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」から構成され、全 190 頁あり、序文と奥付などがない。全書にわたり一部の字句が双行注となっている。双行注は改訂増加箇所のみ一回り小さい字で 2 行にされ、右 (右文) に『官話指南』の原文、左 (左文) に著者の九江書会が追記した南京官話を配置している。太田辰夫「北京語の文法特点」(1965) には九江版『官話指南』が初版『官話指南』の方言改定版であると主張し、張美蘭(2008) もこれに同調した。しかし、一見すると九江版『官話指南』と『官話指南』の内容配置は一致しているようであるが、精査すると細部においては初版『官話指南』との相違個所が多く見られる。本研究では九江版『官話指南』の底本は内田慶市、氷野善寛 (2016) が示した影印本 (第 75-124 頁) を利用した。

(2)『官話指南』の学習補助教科書 3 種

1)『官話指南總譯』(1905)

『官話指南總譯』は吳泰壽 (ゴ タイジュ) が金國璞改訂版『官話指南』(1903) を底本に翻訳した日本語全訳本である。著者吳泰壽は『官話指南』の編纂者吳啓太の従弟にあたり、明治 14 年 (1881) 旧東京外国語学校漢語学科に入学し、北京官話を学び始める。明治 34 年 (1901) 11 月から明治 35 年 (1902) まで、東京外国語学校清語学科の初代教授として在職し、同時に東京高等商業学校の講師を兼任した。吳泰壽の著書には『支那交際往来公牘：北京語直譯附』(1902)、『支那交際往来公牘訓譯』(1903)、『日清往来尺牘』(1904)、『官話指南總譯』(1905) などがある。

『官話指南總譯』は「酬應瑣談」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」「應對須知 (舊版)⁽²⁾」から構成され、全 264 頁となる。『官話指南總譯』の本文は『官話指南』訳文、訳文の上欄に配置する注釈の二部分から構成され、『官話指南』の原文は付されていない。本研究は六角恒廣が編集した『中国語教本類集成』第 1 集第 2 巻に所収の初版 (第 133-199 頁) を底本に利用した。

2)『官話指南自修書』(1924、1925、1926)

『官話指南自修書』は飯河道雄 (イイカワ ミチオ) が上海商務印書館発行の《官話指南 The Guide to Kuan Hua with English Translations》⁽³⁾ を底本に、「譯註」(全訳)、「聲音」(カナ表記)、「重念」(重音) を付け、初学者自修のために編纂した『官話指南』の学習補助教科書である。本書は「應對須知篇、使令通話篇」、「官商吐屬篇」、「官話問答篇」の 4 巻 3 冊からなり、それぞれ大正 13 年⁽⁴⁾ (1924)、大正 14 年 (1925)、大正 15 年 (1926) に大連の大阪屋號書店より出版発行され、海外で出版された唯一の『官話指南』学習補助教科書である。本書の編纂に当たって、吳、鄭両氏共

⁽¹⁾ 張美蘭 2008、396 頁。

⁽²⁾ 『官話指南總譯』は金國璞改訂前の「舊版官話指南を蔵せらるゝ人士の為」に、舊版『官話指南』における「應對須知」章の翻訳文も加えている。

⁽³⁾ 氷野善寛 (2016 : 34) によると、該書は 1902 年に出版された中英両語の対訳版で、著者は不明である。4 巻 1 冊からなり、全 260 頁となる。

⁽⁴⁾ 1924 年版の本文と奥付には『官話指南自修書』と記されているが、表紙と見返しには「官話指南自習書」と書かれている。

編の『官話指南』と吳泰壽『官話指南總譯』を詳細に比較したが、初版の『官話指南』を使わずに、英語対訳版を底本として使用した理由は不明である。本書全三冊の「例言」にそれぞれ「大正十三年三月 大連飯河研究室同人識」、「大正十四年二月 旅順にて飯河道雄識」と「大正十五年一月 旅順にて飯河道雄識」と記されている点から、飯河道雄は中国遼寧省の大連、旅順に長期滞在しながら本書を編纂した可能性が高い。本研究は『官話指南自修書』の初版を利用した。

3) 『官話指南精解』(1939)

『官話指南精解』の編纂者木全徳太郎(キマタ トクタロウ)は愛知県出身で1907年5月に満州に渡り、私立浄土宗旅順夜学校と東洋協会旅順語学校支那語科の学業を修了後、1919年5月に大連取引所錢鈔信託会社に入社した。1924年満鉄に移り本社文書課に勤務し、1926年6月秘書役心得兼務をしながら、大連語学校及び大連実業補習学校支那語科講師を兼ね、『支那語教科書総訳』を著したことがある。1939年東京の文求堂から出版された『官話指南精解』は「緒言」、「酬應瑣談」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」から構成され、全384頁である。各巻は「新出字」(「各章別に新出字を掲げてウェード注音を附し」)、「語句」(「新出字を基礎とするもの並に既出字を以て組成する主要語句に就き解釋を為し」)、「摘要句」(「各章の核心を為す主要句を新出字の配合状態に依り選擇し、特に之れを白文として掲げたるは、學習上の體驗に依り讀法の修練と解釋の練磨とに資せんとするに在り、而して對譯には勉めて字句解釋に偏せず、摘要句自體の内容と全章に互る脈絡を斟酌し、以て其の主意を徹底せしむることに留意せり」)、「例句」(「各章の内容と直接間接に連環ある例句を撰出し應用の指針たらしめんとせり」)の4項目からなり、「摘要句」と「例句」にも日本語訳を附した。本研究は『官話指南精解』の昭和14年(1939)版を利用した。

(3) 『官話指南』以外に鄭永邦が編纂した北京官話教科書3種

1) 『日漢英語言合璧』(1888)

『日漢英語言合璧』は鄭永邦、吳大五郎の共編により、明治21年(1888)に出版された多言語対訳教科書である。本書は劉慶汾の序、島田胤則の序、「凡例」、「自序」及び本文の5部分から構成され、全195頁である。本文は「單辭」、「短章」、「談論篇」の3つの部分に分かれ、各部分に日本語、中国語、英語による3言語の対訳形式となっている。さらに、中国語表現と英語表現の真上には仮名で注音を付している。本書は明治中期に多方面で使用された会話教科書であり、明治40年までの20年間ですでに10回も版を重ねた⁽¹⁾。本研究は六角恒廣が編集した『中国語教本類集成』第1集第2巻に所収の初版(233-338頁)を利用した。

2) 『北京發音反切表』(1904)

『北京發音反切表』は鄭永邦が編纂し、明治37年(1904)に東京文求堂より出版された。本表は「北京發音反切表」、「凡例」、「發音心得」の三部分から構成され、全二枚である。「反切表」は縦77cm、横40cmであり、縦に声母の代表字、横に韻母の代表字を配置し、交差するところに該当の音節字を配し、計461字が採用されている。本表におけるいわゆる「反切」とは實質上声母と韻

⁽¹⁾ 楊杏紅《日本明治时期北京官话课本语法研究》2014、11頁。

母を代表する例字のことで、中国音韻史でいう「反切（第1字目の文字は注音される文字「被切字」という）と声母が同じであること、第2字目の文字は注音される文字と韻母が同じであり、声調も同じであること、である。」⁽¹⁾とは異なる。「凡例」は「反切表」の構成と北京音の特徴について説明するとともに、「北京語學習者カ發音ヲ講究スルニ便センカ為メニ編製セシモノ」とその編纂目的を記している。「發音心得」は「反切表」の声母、韻母及び「北京音」の發音方法について詳しく説明している。音注について、仮名表記やローマ字表記（「英字綴」という）を附した。本表は当時の北京語發音を細密に記録しており、貴重な資料である。本研究は国立国会図書館所蔵の初版（複写）を利用した。

3) 『日清英露四語合璧』(1910)

『日清英露四語合璧』は前述『日漢英語言合璧』の姉妹編であり、出版時期に12年間の隔りがある。本書は全361頁あり、「辯言」、島田胤則の序、「自序」、「凡例」、本文から構成される。島田序と「自序」は『日漢英語言合璧』の内容と全く同じで、「凡例」は『日漢英語言合璧』に無かった項目として「開口齒音 zi, ci, si」だけが追加され、そして、本文を読みやすくするために句読点が施された。『日清英露四語合璧』は『日漢英語言合璧』と構成や内容についてはほとんど変更は見られないが⁽²⁾、最大の特徴はロシア語の対訳部分が新增された。本研究では国立国会図書館デジタルコレクションで公開された初版を利用した。

0.2 研究範囲と研究意義

0.2.1 研究範囲

本研究は近代日本の中国語教育史の全体を見渡しなが、『官話指南』、『官話指南』の学習補助教科書と『官話指南』編纂者の関連北京官話教科書⁽³⁾を中心とし、教科書の語学研究、教科書の編纂研究、教科書の編纂者研究の3分野を研究の範囲とする。

第一に、『官話指南』、学習補助教科書、鄭永邦が編纂した北京官話教科書関連の語学研究である。

1876年9月、明治政府外務省の管轄下において北京官話の教育が開始された。当時の日本には北京官話の教科書はなく、英国人 T. F. Wade（トーマス・ウェード、中国名威妥瑪）の『語言自邇集』（1867年初版）を使用した。このような状況を変えたのは当時、在清国北京日本国公使館に勤務する通弁見習の呉啓太、鄭永邦の両氏が1882年夏に出版した会話教科書『官話指南』であり、日本人が最初に編纂した北京官話教科書として、画期的なものであった。初版以降、『官話指南』は日本に広く流布し、北京官話教科書の「バイブル的地位」⁽⁴⁾にあったと言われている。この日本の中国語教育に大いに寄与した『官話指南』は学界に注目され、今日までに版本、語学、著者など多方面にわたる研究成果が蓄積されてきた。しかしながら、『官話指南』に対する書誌学研究、教科書

(1) 李思敬著、慶谷壽信 佐藤進編訳『音韻のはなし：中国音韻学の基本知識』1987、35頁。

(2) 単語十数か所の修正に止まる。

(3) 鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』のことを指す。

(4) 六角恒廣1994、40頁。

研究^①、編纂者研究の多分野にわたる全容解明と総合研究はまだなされていない。

その上、『官話指南』の初版以降、海外では外国人学習者向けの各種方言版、英語訳版、フランス語訳版等教科書シリーズ^②が現れた。それと同じ時期に日本では『官話指南總譯』（1905）、『官話指南自修書』（1924、1925、1926）、『官話指南精解』（1939）など『官話指南』の学習補助教科書が出版された。これらの学習補助教科書はそれぞれの時代において『官話指南』とセットで使用する必要があり、明治から大正、昭和時代になっても『官話指南』が依然として日本社会から重要視されていた教科書だったことがうかがえる。しかし、これらの学習補助教科書は今日まで殆ど研究されていない現状にある。この空白を埋めるために、本研究は、学習補助教科書の注釈、翻訳、音声、補助内容の四つの方面から整理分析を試み、各教科書の編纂過程と『官話指南』に対する補助価値を探究する。また、『官話指南』及びその学習補助教科書は北京官話という言語基礎を共有しており、そのため、『官話指南』の編纂者の一人である鄭永邦が著した北京語音声教科書『北京發音反切表』、北京語と多言語の対照教科書『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』も北京官話研究の好材料であり、本研究の研究対象となる。『官話指南』は会話教科書として、語彙と文法の面で語学研究に資するが、発音に関しては「凡例」における簡単な解説に止まっている。以上の鄭永邦が編纂した北京官話教科書関連の内容は『官話指南』に使用された北京官話の音声に関連しており、『官話指南』「凡例」との関連性の解明が期待される。

第二に、『官話指南』と学習補助教科書の教科書研究である。

『官話指南』は会話教科書として日本で前例のない編纂理念に基づいて編まれた。その編纂手法がどこから影響を受けたものなのかについては解明が必要である。編纂過程に関しては短い序文の陳述から判断するしかないが、疑問点は多々ある。また『官話指南』初版（1882）の序文執筆者の一人である金國璞がその初版から20年後に『官話指南』改訂版（1903）を独自の編纂で出版した。呉、鄭版と金版の関連性については興味深いものがあり、改訂の詳細や理由の究明が待たれる。

また、『官話指南』には多数の改編版があるが、そのうち九江書會が著した九江印書局出版のものに北方官話表現と南京官話表現の双行対照版『官話指南』（1893）がある。この対照版は中国語の広大たる官話区域における南北区分の課題に深い関連があり、日中両国の学者から注目されてきた。本研究は先行研究を参考にしながら、九江版『官話指南』が利用した版本、『官話指南』に見える南京官話表現、『官話指南』各巻の言語などについて研究の幅を広げ、結論を出したい。

学習補助教科書の編纂は明治時代における中国語教科書編纂史の一大特徴であり、今日までその伝統が受け継がれている。『官話指南』は日本人が編纂した最初の中国語教科書として、学習補助教科書の種類も多く、内容も翻訳から注釈、音注（ローマ字表記、仮名表記）、漢字解説、句型練習至るまで充実している。本研究はそれらの学習補助教科書の形態を考察（翻訳比較、注釈比較、音注比較など）しながら、それぞれの項目が初版『官話指南』に係わる学習補助教科書として果た

^① 本研究では『官話指南』、およびその学習補助教科書に対する編纂過程、編纂分担、体裁、学習補助内容と価値など面の分析は教科書研究と呼ぶ。

^② 本研究では『官話指南』から派生した中国語教科書を「教科書シリーズ」と呼ぶことにする。

した役割と教育効果を論述する。

第三に、教科書編纂者の研究である。

『官話指南』の編纂者である呉啓太、鄭永邦の両氏について複数の伝記資料が存在するが、そのほとんどは両氏が清国北京公使館に勤務していた時代から記載した。両氏はそれぞれ 1878 年、1880 年に北京に派遣されたが『官話指南』の成書は 1882 年であり、わずか数年間でどうして「国際的名著」⁽¹⁾を執筆できたのだろうか。この点を明らかにする為、両氏が通弁見習になる前の学習状況、中国語の運用能力について解明する。また、呉啓太は 37 歳の若さで逝去し、著書は『官話指南』しか残していない。鄭永邦は『官話指南』以外に北京官話教科書の『北京發音反切表』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』を編纂したが、各教科書の編纂事情と当時の鄭永邦の活動との関連性を解明する必要がある。鄭永邦は「支那語通譯官としては無雙の譽があった」⁽²⁾が、本研究では日本の中国語教育史上にどのように貢献したのか、そして、鄭永邦の音声研究の北京語音声研究史における価値、明治末期の中国語教材における位置付けなどを論じる。

『官話指南』の学習補助教科書編纂者（『官話指南總譯』の編纂者呉泰壽、『官話指南自修書』の編纂者飯河道雄、『官話指南精解』の編纂者木全徳太郎）については、簡単な伝記資料しか伝わっていない。本研究はより多くの資料収集に努め、更なる解明を試みる。

0.2.2 研究意義

本研究の位置づけは主に以下の数点となる。

第一に、『官話指南』の語学再検討は学術意義を大いに有する。『官話指南』の北京語語彙⁽³⁾、北京語文法に対する全容解明を試みた研究はまだ見当たらない。本研究では、まず先行研究の北京語語彙を整理し作表する。次に、先行研究で指摘されてこなかった北京語語彙を北京語辞典の利用や筆者の考証でさらに抽出する。このような再検討の結果として『官話指南』の語彙における北京語の特質が一層浮き彫りになる。北京語文法は太田辰夫、周一民の論述を基にして、各巻の北京語文法表現の分布状況とその用例数をまとめる。統計により『官話指南』の4巻のうち「官話問答」巻における北京語表現の使用頻度が最も低く、「使令通話」巻では逆に極めて高いことが明らかになる。

第二に、『官話指南』の教科書研究で最新の研究成果を提出する。九江版『官話指南』については張美蘭・李穎（2007）、張美蘭（2008）、齊燠（2016）、内田慶市・氷野善寛（2016）などの研究結果がある。それらの研究を踏まえ、九江版『官話指南』の南北官話表現を整理する。それらの南京官話表現を『官話指南』の表現と比較し、『官話指南』の全書にある南京官話表現の使用例を検出する。また、各巻の南京官話と北京官話における特有の表現の分布状況を調査する。『官話指南』

⁽¹⁾ 六角恒廣 1994、40 頁。

⁽²⁾ 東亜同文会編『対支回顧録』下巻 1936、37 頁。

⁽³⁾ 北京語語彙は北京官話の中に北京語の方言の特徴を持っている語彙、或いは北京語辞典などに収録されている語彙である。

において本文内容の分析及び唐話教科書との比較を通して、『官話指南』の体裁が『唐話使用』の巻五と巻六の体裁と類似し、同様に短く簡潔な会話により一問一答式であると分かる。『官話指南』著者呉啓太と鄭永邦は唐通事の末裔として、父呉碩、鄭永寧の膝下で教育を受けたことから、この体裁はおそらく唐話教科書の影響を受けていると考えられる。また、「使令通話」と「官話問答」は呉啓太と鄭永邦が執筆した内容であることも把握できる。

第三に、『官話指南』の学習補助教科書における補助価値の探究は、明治期中国語教育史における教育発展の軌跡により鮮明な視点を提供することになる。学習補助教科書『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』の注釈、翻訳、音声の比較分析を通じて、その正確性、内容の完全性、可読性、学習ストラテジーの方面から『官話指南精解』の補助価値は高いと考えている。『官話指南精解』は『官話指南』全書の全容説明ではないが、現代の語学教科書と共通する編纂方式を導入している。このような編纂方式は学習者にとって、『官話指南』を学習する際に役立つだけでなく、知識の定着を助け、日常生活への応用ができるように工夫している。これらの工夫は教授法や教材編纂の側面でも参考になる。

第四に、鄭永邦の北京語音声教科書における独創性と学術性の解明は北京語研究史と明治期中国語音声研究史に対する参考意義を有する。鄭永邦が編纂した『北京發音反切表』にある韻図、反切、ローマ字表記、仮名表記などの音韻表現から、鄭永邦の高い中国音韻学に関する知識がうかがえ、独創性に秀でていたことが分かる。同じように鄭永邦の著書『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』に用いられた仮名表記の特徴を解明するために、明治期に出版された 84 種類の仮名表記のある中国語の教科書や辞典と比較すれば、その独自性を考察できる。ローマ字表記は『語言自邇集』(1867)の表記規則と照合すると改善点が見られ、有気音、卷舌音、撮口呼、齒茎音など中国語の特殊な発音に対して特殊な表記符号をつけた試みは、明治末期の日本人がどのように北京語の音声認識していたのかという点を評価するのに役立つものとなる。

0.3 先行研究

六角恒廣は明治時代における中国語教育史研究の第一人者であり、『官話指南』に関する著者紹介、版本調査、書誌情報、語学論述などの論考、資料は率先的な先行研究となる。六角恒廣の関連著書は前述の通りであり、本研究の研究設定の基礎となっている。六角恒廣はまた『中国語教本類集成』(全 10 集 1991-1998)も出版され、本研究の版本参照にもなっている。六角恒廣の先行研究は主に『官話指南』の版本記載、著者紹介、教育史事情の諸関連事項及び『官話指南』学習補助教科書の書誌状況などを重点的に考察しており、本研究における教科書の書誌研究、教科書の編纂者研究に深く関わっているが、教科書の語学研究、学習補助教科書の研究や教科書の編纂研究との関連が比較的少ない傾向にある。それ以外の先行研究は以下に紹介する。

(1) 教科書の語学研究

『官話指南』に関する先行研究で語学面の文法、語彙、音声を扱ったものはそれぞれ太田辰夫(1950)、那須清(1970)、李无未(2007)を嚆矢とする。

1) 文法研究

太田辰夫「清代の北京語について」(1950)は「北京語に獨特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「咱(咱)們」、「您」、「倆(仨)」、「別(禁止)」、「得(děi 須要)」、「多咱」、「給(介詞)」、「的慌」、「是(似)的」、「來着」「罷咱」の12語を提示した。その上で、『琉球本官話問答』、『兒女英雄傳』、『官話指南』、九江版『官話指南』等7種の清代北京語資料にそれが現れるかを考察し、『官話指南』は「罷咱」以外は全て存在し、九江版『官話指南』は「您」しかないことを指摘した。孫錫信《〈官話指南〉語法拾零》(1997)と山田忠司〈北京話的特点—围绕太田博士提出的七个特点—〉(2015)、山田忠司〈太田辰夫の北京話研究〉(2016)は共に太田辰夫の北京語における7項目の特徴^①を基にして、『官話指南』に対する考察を行った。張美蘭〈清末北京官話的句法特點—以幾部域外北京官話資料為例〉(2009)は清末の北京官話に新しく出現した文型を考察した。さらに、楊杏紅《日本明治时期北京官話課本語法研究》(2014)、徐麗《〈官話指南〉常用句式》(2014)、李磊《〈官話指南〉虛詞研究》(2016)、趙葵欣《〈官話指南〉助動詞系統研究》(2017)などは『官話指南』の副詞、介詞、連詞、助詞、疑問句、処置句、被動句、比較句、助動詞などについて考察した。

九江版『官話指南』の文法について張美蘭、李穎〈清末汉语介詞在南北方言中的區別特征—以九江書局改寫版《官話指南》為例〉(2007)は『官話指南』と九江版『官話指南』における南北官話の介詞の特徴を分析した。張美蘭〈十九世紀末汉语官話詞匯的南北特征—以九江書局版《官話指南》為例〉(2008)は九江版『官話指南』の名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞等の面から南北官話を考察し、全126組に分類した。齊燠〈19世紀末南北北京官話介詞比較研究—以《官話指南》《官話類編》注釋為例〉(2016)は19世紀末期における南北官話の介詞の比較研究を行い、九江版『官話指南』に使用した時間類、憑借と方式類、原因と目的類、対象と範囲類、処置と被動類に分類し分析を行った。張美蘭《〈官話指南〉匯校與語言研究(下)—〈官話指南〉(六種)異文比較研究》(2018)は九江版『官話指南』と『官話指南』の南北官話の差異についても論じた。

『官話指南』の学習補助教科書についての先行研究は園田博文『『官話指南總譯』(明治三八年刊)の日本語—一当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに—』(2016)のみであり、翻訳教科書を使用した日本語文法の研究成果である。

2) 語彙研究

那須清「(改訂)官話指南の語彙」(1970)は改訂版『官話指南』に対する最初の語彙研究である。『官話指南』に関連した初めての北京語語彙研究は張美蘭の〈明治期間日本汉语教科書中の北京話口語詞〉(2007)であり、『官話指南』にある北京語語彙92例を挙げた。その後、吳麗君〈日編北京口語教材《官話指南》的言語特點分析〉(2008)、魏薇《北京官話教科書詞匯研究》(2013)、徐

^① 『中国語学新辞典』(1969)で太田辰夫執筆の「近代漢語」は「一人称代詞の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。」、「介詞〈給〉を有する。」、「助詞〈來着〉を用いる。」、「助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。」、「禁止の副詞〈別〉を有する。」、「程度副詞〈很〉を状語に用いる。」、「〈(〜)多了〉を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。」という北京語における7項目の特徴を提示した。

麗《日本明治时期汉语教科书研究—以〈官话指南〉、〈谈论新篇〉、〈官话急就篇〉为中心》(2014)、陈明娥《东亚汉语史书系日本明治时期北京官话课本词汇研究》(2014)は共に『官話指南』にある北京語語彙を検討した。また、李无未、杨杏红《清末民初北京官话语气词例释—以日本明治时期北京官话课本为依据》(2011)、颜峰・徐丽《〈官話指南〉的代詞》(2011)、陈明娥・李无未《清末民初北京话口语词汇及其汉语史价值—以日本明治时期北京官话课本为例》(2012)、邓苗雯《〈官話指南〉词汇研究》(2013)、徐丽《〈官話指南〉副詞研究》(2013)、曹保平・邓霁月《〈官話指南〉的敬辞、谦辞初探》(2019)などの論考は四字熟語、謙讓語、副詞、代詞、尊敬語、役所用語、慣用語、ビジネス用語などの面から『官話指南』を含めた北京官話教科書の語彙特徴を考察した。特筆すべき最新の研究として内田慶市、氷野善寛『官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』(2016)は研究篇・資料篇・影印本文の三部から構成され、『官話指南』全語彙索引と「九江書會版『官話指南』双行注対照表」などの部分は『官話指南』の語彙研究に大いに寄与する労作である。また、杨杏红、杨艳君《日本明治时期北京官话课本语言的词法偏误分析》(2013)は『日漢英語言合璧』、『英清會話独案内』の中英対訳について考察した。氏は名詞、動詞、形容詞、量詞、代詞、副詞、介詞、連詞、助詞、語氣詞に分け、各教科書の対訳には誤用、“誤加”、“残缺”、“重复”、“位置不当”などの問題が存在することを論じた。

3) 音声研究

音声研究については李无未《十九世纪末叶北京官话声调初探—以日本人编〈官話指南〉为依据》(2007)と徐麗、石汝杰《〈官話指南〉的版本和语言》(2010)の2篇のみである。李无未は“四声、轻声、儿化、变调”の面から『官話指南』における3037個の注音漢字を分析し、“所标记的北京官话语音声调与今北京话声调基本一致”⁽¹⁾と評価した。徐麗、石汝杰(2010)は「凡例」の発音説明を解説し、「四呼」の混乱及び声調の変化などの音声上の問題について論じた。

また、鄭永邦が著した北京語多言語対照教科書『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』の先行研究には吳菲《〈日漢英語言合璧〉语音教学研究》(2007)、林晓京《〈日清英露四語合璧〉的汉语语音词汇研究》(2014)、王雪「明治・大正期における日本人のr化音の学習」(2017)の三篇がある。

吳菲(2007)は明治時代における日本の北京官話の音韻体系及び音声の教育方法を解明するために、『日漢英語言合璧』の仮名表記を声母、韻母、声調の3つの方面から分析し、さらに発音表記符号、表記方法について考察した。林晓京(2014)は音韻と語彙の両面から『日清英露四語合璧』を分析した。音韻は声母、韻母、声調を考察し、発音教育上の方法と不十分な点について論じた。語彙は英語、漢語の対訳を中心に、『日清英露四語合璧』の語彙、外来語の特徴を考察した。その分析により、漢語音韻、語彙の特徴及び日本人の語音に関する教育方法を明らかにした。王雪(2017)は『日漢英語言合璧』のr化音(アル化音)に焦点を絞り、明治・大正時代の13点の北京官話教科書に記されているr化音を比較分析した。『日漢英語言合璧』については「ほぼ完璧に発音を表しうる仮名表記系統をもち、r化音と音交替に対する科学的な認識は、当時最高の位置付けがなさ

⁽¹⁾ 李无未2007、272頁。

れる。」⁽¹⁾と評価している。

(2) 教科書の編纂研究

太田辰夫「北京語の文法特点」(1965)は九江版『官話指南』の編纂事情を紹介した。王禮華「日編汉语读本《官話指南》的取材与编排」(2006)は中国語を学習する外国人にとって母語と中国語の対照がないことは『官話指南』の不備な点であると指摘し、またその後出版した『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』、『日漢英語言合璧』は『官話指南』を学習する際の補助資料であると論じた。

氷野善寛『『官話指南』の多様性—中国語教材から国語教材』(2010)は先行研究の成果を踏まえ、初版及びそこから派生した版本を整理し、『官話指南』を「中国語学習書」、「方言学習書」、「国語学習書」の3つに分類した。また、『官話指南總譯』の著者、出版年、形態及び「改訂版に対応する日本語訳版だが、改訂の際に削除された「應對須知」の訳もついている」⁽²⁾と指摘した。氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』(2012)、及び前述の内田慶市、氷野善寛(2016)は『官話指南』を中心に、著者、版本及び『官話指南』の来歴等についても分析した。内田慶市、氷野善寛(2016)は更に「影印本文」の部に『官話指南』の初版、九江版『官話指南』など5種類の珍蔵本を影印出版し、学術研究に利便性を提供した。

前述の徐麗、石汝杰(2010)は『官話指南』の版本については初版、改訂版、方言版、日本語訳本、英語訳版、フランス語訳版等を紹介し、その中には漢語版のみ約45版が出版され、数年間で刊行されたと指摘した。古市友子の博論『近代日本における中国語教育に関する総合研究—宮島大八の中国語教育を中心に』(2014)には『官話指南』は中級レベルの教科書として、善隣書院、東京帝国大学、清語同学会などの漢語学科に広く使用されていたことをと述べた。

(3) 教科書の編纂者研究

『官話指南』の著者である呉啓太と鄭永邦に関する先行研究はそれぞれ8点と14点見つかった。

呉啓太について、最初の著作は何盛三の『北京官話文法』(1928)であり、東亜同文会『対支回顧録』下巻(1936)の叙述が一番詳細で、生家の状況、ベルギー留学、外務省での勤務などに触れている。『中国語学新辞典』「官話指南」(1969:255 尾崎実執筆)、楊保筠主編《华侨华人百科全书 人物卷》(2000:538)、前述の氷野善寛(2012:39)などの呉啓太に対する紹介は『対支回顧録』下巻(1936)とほぼ同じである。長崎博物館所蔵渡辺文庫未刊行資料『史料摘録』(著述年不明)は呉啓太の家系を紹介し、宮田安『唐通事家系論攷』(1979:785)は『史料摘録』を基礎に、呉家の世代譜系をさらに研究した。楊鉄錚の博論『明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』を中心として』(2017)は呉家系の墓地の構造図を作成した上で、墓の位置、呉系の三代目から代々唐通事の家系であると指摘し、呉啓太の墓地についても紹介した。

鄭永邦についての先行研究は呉啓太より多く存在する。最も古い著作は長崎県教育会編纂『大礼記念長崎県人物伝』(1919)であり、東亜同文会編纂『対支回顧録』下巻(1936)は鄭永邦の生涯

⁽¹⁾ 王雪2017、141頁。

⁽²⁾ 氷野善寛『『官話指南』の多様性—中国語教材から国語教材』2010、246頁。

について、生年月日、生家所在、東京外国語学校の学業、清国北京公使館への派遣、外交官としての活躍、病死と埋葬地なども詳細に記述している。その後、出版された多数の鄭永邦に関する紹介は新たな内容がなく、ほとんど『対支回顧録』下巻を利用した⁽¹⁾。『唐通事家系論攷』は『史料摘録』(前述)を参考にし、鄭家系の始祖である鄭宗明から始め、鄭永慶、鄭永昌、鄭永邦まで論述した。野中正孝『東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち』(2008)は鄭永邦の漢語学科を中退してからからの状況を簡単に紹介した。更に鄭永邦は外交官として重要な任務を果たしながら、日本の中国語教育にも大きな貢献をし、「南に御幡、北の鄭」と評された。前述の楊鉄錚(2017)は鄭家の家族墓地、鄭永邦の著作及び鄭永邦の子である鄭審一を紹介した上で、鄭永邦は鄭永寧の三男であることも紹介し、他の研究とは異なる見解を提示した。

上述の通り、今日に至るまで、『官話指南』の語学研究、特に語彙、文法、音声の面で先行研究が数多く現れている。日本では近代漢語研究の大家太田辰夫をはじめとする学者が取り組んだ北京語特徴についての研究以外に、近年では中国の学者が『官話指南』に使用された清末北京官話に対する関心度が高まり、研究の機運が多分野に広がっていることが関連資料からうかがえる。これらの先行研究は更なる探究の良いステップとなり、今後の研究進展への役割が期待される。語学研究に関して、『官話指南』の語彙、文法の先行研究については不備があるため、まだ研究の余地を残している。九江版『官話指南』の南北官話の総合研究については今まで十分な検討がなされていない。更に学習補助教科書の翻訳、注釈、音声の関連研究と鄭永邦編纂の北京官話音声教科書三種の語学研究が空白状態あるいは不十分な現状にある。教科書の編纂研究はいままで内田慶市、氷野善寛が刊行された『官話指南』に関する一連の論文、資料集は『官話指南』の教科書研究に大いに貢献した。それと同時に、『官話指南』の学習補助教科書に対して、教科書の編纂方法や補助理念の研究はまだ出現していないし、それらの学習補助教科書が明治期の中国語教育史上における位置づけは未だに未解明のままである。教科書の編纂者研究の分野は『官話指南』の編纂者呉啓太と鄭永邦に関しては伝記資料を掲載する文献も数多く見られるが、内容が重複したものを記述する傾向にあり、新たな資料が乏しい。学習補助教科書の編纂者の伝記研究もこれと同じ状況にある。

0.4 研究方法

本研究は、主に整理法、比較法、分析法、考証法、統計法、製表法などの研究方法を総合的に採用する。

『官話指南』の語彙研究においては、まず、張美兰(2007)、吴丽君(2008)、魏薇(2013)、徐丽(2014)、陈明娥(2014)などの先行研究を整理し、先行研究で扱われた語彙の北京語語彙表を作成する。そして、複数の北京語辞典と照らし合わせながら、『官話指南』に現れる北京語語彙を

⁽¹⁾ それらの著作は黒竜会『東亜先覚志士記伝』(1936)、平凡社『大人名事典』(1953)、国务院外事辦公室編著《日本人物辞典》(1959)、尾崎実『中国語学新辞典』『官話指南』(1969)、中国社会科学院《近代来华外国人名辞典》(1981)、日外アソシエーツ『人物レファレンス事典 郷土人物編』(2008)、中村義など『近代日中関係史人名辞典』(2010)、氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』(2012)などとなり、そのうち平凡社(1953)と氷野(2012)は『東亜先覚志士記伝』、《近代来华外国人名辞典》などを参照した。

抽出し、先行研究の補足を行う。さらに、北京語辞典に収録されていない北方語語彙に精査を加え、考証を通して『官話指南』の北京語語彙を再検討し、統計により結論を導く。『官話指南』における文法の全般的な研究は北京語文法研究の第一人者の太田辰夫が著した「清代の北京語について」(1950)、「北京語の文法特点」(1965)^①、「近代漢語」(1969)^②と周一民が著す《北京口語語法(詞法卷)》(1998)と《現代北京話研究》(2002)の論述を整理し、両氏の学説を考量した上で、文法項目を総括する。多くの項目について品詞、句型などで分類し、品詞に意味分類をさらに行った上で製表する。この総表は本研究における北京語文法研究の規準となり、『官話指南』に出現したすべての文法現象を網羅し、『官話指南』における文法項目の全容解明の一助となる。『官話指南』は巻ごとに文法項目の分布状況は異なり、字数と出現回数の統計により『官話指南』各巻の言語特質はより明確に見えてくる。

九江版『官話指南』と初版『官話指南』の比較研究を行う際、内田慶市、氷野善寛(2016)が整理した対照資料を活用し、比較法により南北官話の差異を浮かび上がらせる。南京官話の表現は初版『官話指南』にも散在しており、それを問題設定として考究する。各巻における南京官話表現の分布状況は異なり、唐話教科書、『語言自邇集』(トーマス・ウェード、1867)、九江版『官話指南』との比較を通して、『官話指南』の問答式体裁の由来や各巻の編纂過程の解明を試みる。

学習補助教科書である『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』はそれぞれ補助理念が違い、注釈、翻訳、音声表記の面で互いに同異併存している。そのため、注釈、翻訳、音声表記それぞれについて比較し、その特徴を解明した上で、製表、統計、論述の手法により『官話指南』に対する補助価値を明らかにする。

鄭永邦は『官話指南』が出版された後に『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』を著す際、音声表記に仮名またはローマ字を採用し、反切注音の概念も使用した。また鄭永邦の北京語音声研究が『官話指南』「凡例」の記述とどのような関連性を有しているのかについても考察する。鄭永邦の仮名表記とローマ字表記をそれぞれ明治期で最初に現れた仮名表記北京官話教科書『亞細亞言語集 支那官話部』(広部精、1880)と代表的な北京語ローマ字表記教科書『語言自邇集』の音韻体系と表記体系を比較する。鄭永邦の音韻学術の軌跡を追究するため、音韻学の用語考証を行う。

0.5 論文構成

本研究は序論、本論、終論の3部分からなり、本論は更に上編、中編、下編とし、全9章による構成となっている。

序論は5節からなる。第一節は「研究背景と研究対象」について。本研究の研究目的を明示し、研究の背景である明治時代の中国語教育史および当時『官話指南』がどのような存在であったのか

^① 太田辰夫(1965)は「名詞、代詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、介詞、副詞、助詞」の8種類に分けて北京語、北方方言、南京官話及び他の方言との差異を検討し、全72項目、100個以上の語彙を叙述した。

^② 「近代漢語」の項目説明に前述の北京語における7つの特徴を挙げている。

を論述し、六角恒廣の先駆的な先行研究を紹介する。第二に、本研究の研究対象である初版『官話指南』、改訂版『官話指南』、九江版『官話指南』、『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』、『北京發音反切表』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』の9種の研究資料の概略を述べる。第二節は「研究範囲と研究意義」について。第一に、9種の研究資料を中心に教科書の語学研究、編纂研究、編纂者研究の三分野を研究の範囲とし、紹介する。第二に、研究の意義を叙述し、第三節は前述の研究範囲に関わる先行研究を教科書の語学研究、教科書の編纂研究、教科書の編纂者研究の順で紹介する。第四節は研究方法を叙述する。第五節は本研究の章節配置及び内容構成を述べる。

本論の上編は『官話指南』の総合研究について、第一章から第三章までである。

第一章は『官話指南』における語彙についての研究である。第一節「先行研究の概要とその成果」では張美兰(2007)、吳丽君(2008)、徐丽(2014)、魏薇(2013)、陈明娥(2014)などの先行研究を紹介し、研究成果として『官話指南』の教科書に使用した北京語語彙を集約し作表する。第二節「語彙の再検討」では、まず、9冊の北京語辞典を参考にし、『官話指南』の先行研究に提示されなかった北京語語彙の再検討を行う。次に、『官話指南』の文中到北京語辞典には見当たらないが北京語や北方方言の特徴を有すると考えられる語彙を取り出して考証する。それから、『官話指南』の文中にある“兒化詞”を抽出し、分析した。最後に、『官話指南』の文語を取出した上で、各巻の使用頻度を統計し、作表した。第三節「語彙の北京語特質」は、第一節と第二節の分析を踏まえ、『官話指南』の全書に存在する北京語語彙の全容を明らかにする。それらの北京語語彙の各巻分布の状況と北京語語彙の使用数から、北京官話教科書としての『官話指南』の北京語語彙の特質について論じる。

第二章は『官話指南』における文法についての研究である。第一節「先行研究の概要とその成果」では第一に、『官話指南』の先行研究を紹介する。第二に、前述の太田辰夫(1950、1965、1969)に提示した北京語の文法特徴を整理する。第三に、前述の周一民(1998、2002)に提示した北京語の特徴を有する文法項目をまとめる。第四に、両氏から提示された北京語の特徴を有する文法項目を整理し「太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)が扱った北京語文法表現の対照表」を作成する。第五に、そのほかの北京語文法に対する研究を論じる。第二節「文法の再検討」は前述の北京語文法の対照表を参考にし、『官話指南』の北京語特徴を有する文法項目を品詞ごとに用例を挙げながら分析した上で、それらの文法項目の各巻における用例数に基づく使用頻度を明らかにする。第三節「文法の北京語特質」では第二節の研究結果を踏まえ、『官話指南』文法の北京語の特徴を具体的に論じる

第三章は『官話指南』の教科書研究(九江版との比較)について。初版『官話指南』と九江版『官話指南』の比較研究を通して、九江版『官話指南』の再検討、初版『官話指南』言語的特徴の再認識に関する研究である。第一節「先行研究の概念とその成果」では、まず内田慶市、氷野善寛(2016)の研究結果を紹介し、張美兰、李颖(2007)、張美兰(2008)、齐灿(2016)の研究をまとめ、九江版『官話指南』の南北官話表現の対応表を作成する。第二節は「九江版『官話指南』右文

の版本研究」について。初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の文言差異から九江版『官話指南』右文の版本問題を解明する。本節では「初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の文言差異対照表」を作成し、分析の基礎材料とする。第三節は「『九江版『官話指南』にみられる南北官話の差異』について。九江版『官話指南』全書の双行注に挙げられた南京官話を品詞、連語構造、不对応に分類し、総数約千例に上る項目を表にまとめ、南北官話の差異が顕著である項目を重点的に分析する。第四節は「『官話指南』(初版)に見える南京官話表現」について。初版『官話指南』の文中に存在する九江版『官話指南』南京官話表現を集約し、初版『官話指南』に存在する九江版『官話指南』の南京官話表現の原因究明を試みる。第五節は「『官話指南』北京官話特徴の再認識」について。初版『官話指南』にある南京官話の考察を通して、初版『官話指南』には北京官話、南京官話、南北共通の言葉の3種類が共存していると解明できた。初版『官話指南』の言語における多面性についても確認された。また、初版『官話指南』の各巻にある南京官話の分布から、「應對須知」に南京官話表現が最も多いことがわかり、その理由についても言及した。

中編は「『官話指南』学習補助教科書の総合研究」で、第四章から第六章までである。

第四章は「学習補助教科書の翻訳研究」について。第一節は「『官話指南』学習補助教科書の補助内容」について。学習補助教科書である『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』の内容、構成、著者などを紹介する。第二節は「『總譯』『自修書』『精解』における翻訳の文体的特徴」について。3書のそれぞれの文体を考察する。第三節「三書の翻訳内容」について。3書における誤訳文、不適切な訳文などの代表的なものを検討するため、「『總譯』『自修書』『精解』三書翻訳の特殊用例対照表」を作成した。この表を参照しながら、各教科書の誤訳、翻訳漏れ、すぐれた点などを比較分析する。第四節は「三書の翻訳における学習補助価値」について。第一に、「明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書一覧表」を作成し、明治時代の学習補助教科書の中では三書の翻訳面の位置づけを検討する。第二に、三書における翻訳の学習補助価値について論じる。

第五章は「学習補助教科書の注釈研究」について。第一節「『總譯』『自修書』『精解』三書の注釈」について。第一に、三書の注釈数、状況などを説明する、第二に、三書の注釈を整理し、それぞれの注釈特徴について述べる。第二節「三書の語彙注釈」について。三書の北京語語彙と北京語文法の注釈、生活用語、役所用語などの注釈を比較し、三書は学習補助教科書とした補助価値を分析する。第三節は第四章に提示した「明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書一覧表」を参考にし、三書の注釈面の位置づけを検討する。さらに、三書における注釈の学習補助価値をまとめる。「附録:『總譯』『自修書』『精解』三書における注釈一覧表」は本章の資料収集の成果と分析用データである(文末の「附録」として添付)。

第六章は「学習補助教科書の音声研究」について。第一節は「『官話指南』の「凡例」における北京語音声の説明」について。「凡例」に挙げられた「四声」、「軽重音」、「四呼」、「軽重念」を説明する。「四呼」の説明に不適切な箇所も見えるが、北京語の声調、発音方法、軽重音に至るまで紹介していることから、著者は一定の音声学、音韻学知識を持っていたと推測できる。第二節「『總

譯』『自修書』『精解』三書の表記」は『總譯』『自修書』『精解』三書の注音状況を紹介する。第三節は『『自修書』仮名表記の研究』について。仮名表記の音声対応を分析し、先行資料と比較した上で、表記の変遷過程を検討する。「明治時代における仮名表記中国語教科書一覧表」は本節の分析に基づくデータである。第四節「『自修書』の「重念」の研究」は『官話指南自修書』の「重念」の来歴、および『官話指南』の「軽重念」との関係について論じる。第五節は『『精解』のローマ字表記と『語言自邇集』』について。両書ローマ字の異同関係を分析し、その源流を探る。第六節は「三書注音の学習補助価値」について。第一に、『官話指南』の北京語音声説明と学習補助教科書の関係、『自修書』と『精解』の補助価値、および音声面の位置づけについて論じる。第二に、明治時代の学習補助教科書の中における『總譯』『自修書』『精解』それぞれの位置づけを解明する。

下編は『官話指南』の著者及び鄭永邦が編纂によるその他北京官話教科書の研究」で、第七章から第九章までである。

第七章は「『官話指南』の著者と編纂過程」について。第一節は「吳啓太の再検討」である。吳啓太に関わる先行研究を踏まえ、その生涯を紹介した上で、先行研究で触れられていない「吳啓太の履歴書」、「外務省漢語学所での学習」、「ブラッセル大学での学習」について論じる。第二節は「鄭永邦の再検討」である。鄭永邦に関わる先行研究を整理し、先行研究で触れられていない「東京外国語学校の入学時期」、「鄭永邦の履歴書」、「任職受勲」、「在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録」などについて考察する。第三節ではそれらの研究結果を踏まえ、「吳啓太・鄭永邦比較年表」を作成する。第四節は「初版『官話指南』の編纂過程」である。前述の両著者の生涯、『官話指南』序文の記述、教科書の内容などの面から総合的に分析し、『官話指南』の体裁、各巻の編纂などの問題点を解明する。第五節「『官話指南』改訂版と金國璞」は改訂版『官話指南』の分析、及び改訂者金國璞との関わりについて論じる。第六節「『官話指南』の著者と編纂過程」は本章の研究結果をまとめる。

第八章は「鄭永邦『北京發音反切表』の研究」について。第一節「『反切表』の構成」は『北京發音反切表』の構成を紹介し、「声母韻母の分布状況」、「音節字」、「声介合母」と「發音心得」を分析する。第二節は「『反切表』の注音」について。『語言自邇集』の音韻体系と比較し、『北京發音反切表』とローマ字表記との相違点を検討する。さらに、『北京發音反切表』の声、韻母の仮名表記を分析し、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』との関係を述べる。第三節は「鄭永邦による北京語音声研究の独創性」について。上述の分析を通し、『北京發音反切表』は反切注音、仮名表記、ローマ字表記を全て収録している総合性のある声韻対照表としてその優れた点を評価する。

第九章は「鄭永邦による北京語多言語対照教科書の研究」について。第一節『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』は両書の構成、成書目的などを紹介する。第二節は「二書の北京語表現」の考察であり、教科書に使用した北京語語彙を分析する。第三節「二書の北京語仮名表記」では、両書の「凡例」に示した発音表記を紹介し、声母、韻母、音節字、特殊な仮名表記の面から両書の仮名表記を研究する。第四節では『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』の語彙、音声特徴について論じる。

最後は終論として、研究成果のまとめ、今後の研究課題を提示する。

本 論

上編 『官話指南』の総合研究

第一章 『官話指南』の語法的研究(1)

一 語彙的側面について

1.1 先行研究の概要とその成果

『官話指南』は日本人が初めて編纂した北京官話教科書として多くの学者に注目されてきた。語彙、文法の研究も多く刊行されたが、『官話指南』に対する北京語語彙、“兒化詞”、文語の徹底的な考察は未だない。本章は『官話指南』に関する先行研究を踏まえ、それらの語彙を検討する。

那須清「(改訂)官話指南の語彙」(1970)は改訂版『官話指南』に対する最初の語彙研究である。『官話指南』の北京語語彙の研究は張美蘭(2007)、吳麗君(2008)、魏薇(2013)、徐麗(2014)、陳明娥(2014)などの研究がある。張美蘭(2007)は明治期の“北京話口語詞”を考察する為に、当時の北京官話教科書である『燕京婦語』、『官話指南』、『官話篇』、『急就篇』、『士商業談便覽』、『生財大道』、『清語教科書』、『談論新篇』、『官話應酬新篇』、『北京官話伊蘇普喻言』、『參訂問答篇國字解』などの11冊教科書を検討し、全202例の北京語語彙を抽出した。そのうち92例は『官話指南』に見える語彙である。また、張美蘭(2007)が提出した202例の北京語語彙は北京語辞典に多数収録され、しかもそれらは“日本明治时期汉语教材中出現的有些北京口語詞現在只有老北京才懂”

(筆者訳：日本明治期の中国語教材に使われた北京の話し言葉の一部は、今では生粋の北京の人にしか理解できない)(167頁)と述べた。しかも、それらの北京語語彙は“北京土語方言詞典”を編纂する際に極めて重要な材料であると指摘した。

吳麗君(2008)は近代漢語の語彙、文法と比較しながら、『官話指南』における言語の特徴について分析した。“語法”の面では『官話指南』にある“所、子、儿、您納、俺們、这、那、这么、那么、哪、什么、怎么、多嘴、在、解、打、从、那儿的话”などの“詞綴”、人称代名詞、指示詞、疑問詞、介詞、副詞、“常用句式”などを研究した。語彙面では、北京語語彙、“成語、四字格、俗語、歇後語”などの言語的特徴を検討した。これらの考察により、氏は『官話指南』の語彙は“北京口語中級水平的教材”(筆者訳：北京口語の中級レベルの教科書である)と指摘した。

魏薇(2013)は『官話指南』、『實用日清會話』、『清語正規』の3書における語彙の特徴を説明する為に、“單音詞”、“雙音詞”、“三音詞”、“四音詞匯”に分け使用頻度を調査し、各教科書の「詞匯頻度統計」の字表を作成した。その表は『官話指南』の語彙4243個を収録し、その中に北京語語彙45個を取り上げ、解釈を加えた。また、4243個の語彙には多くの“新詞、熟語、對聯、酒令、燈謎、段子、宮廷話、土話、行話”が含まれていると指摘した。

徐麗(2014)は“常用詞匯、稱謂語、北京口語詞匯、外來詞等新詞語、慣用語、成語、歇後語、逆序詞、詞綴”などの側面から『官話指南』、『談論新篇』、『官話急就篇』を考察し、明治期の教科書は“真實地反映了当时的北京官話特征。”(筆者訳：当時の北京官話の特徴を如実に反映している)と結論付けた。また『官話指南』に見える北京語語彙として27個も提示した。

陳明娥(2014)は1881年から1907年の間に出版された『官話指南』、『日漢英言語合璧』など18種の北京官話教科書にある使用が1度でもある北京語語彙を考察した。三書の語彙は“單音口語詞”、

“双音口语词”、“三音口语词”、“四音口语词”、“儿化词”、“惯用语”、“客套话”、“委婉语”、“俗语”などに分類し、各教科書での用例を分析した。その分析した結果は“日本汉语教科書中の北京官話词汇，80%以上都是复音词，反映了清末民初北京官話的真实面貌。”（筆者訳：日本の中国語教科書における北京官話語彙は80%以上が複音節語で、清末民初の北京官話の實際の様相を反映している）と主張した。なお、『官話指南』については北京語語彙134例を提示した。

以上の先行研究は明治時代の北京官話教科書の実態、『官話指南』の語彙の特徴を明らかにするための重要な参考資料として大いに有用である。また、これらの先行研究に取り上げられた『官話指南』の北京語語彙は、重複を除き全218例あり、下表に列挙する。

表1 先行研究で指摘された『官話指南』の北京語語彙（ピンイン順）

音順	北京語語彙（意味解釈） ⁽¹⁾
A	愛(容易发生<倾向于>某事)、挨說(受批評, 受責罰)、熬夜(夜間不睡)
B	巴結(努力; 奮進)、白給(不是對手, 不堪一擊)、梆硬(很硬)、寶局(賭場)、抱砂鍋(比喻貧窮到末路)、被窩(被子)、背陰兒(陽光照不到的地方)、背<背運>(運氣不好, 倒霉)、不中用(沒有用處)、不管那些個(不理會, “個”要重讀)、不礙事(不嚴重, 沒有危險)、不差甚麼(事情齊備, 差不多)、不敢當(謙詞)、不得勁<兒>(不好意思, 難堪)、布<菜>(往別人碗或盤兒里夾菜, 表親切)
C	草雞毛(比喻做事畏畏縮縮的人)、茶船兒(一種長形的茶托)、稱呼(當面問別人的姓名)、成衣舖(裁剪縫制衣服的店鋪)、抽冷子(猛然, 突如其來, 不及防備)、出外(到外地去)、出門子(女子出嫁)、出馬(指醫生到病人家裏診治)、出息兒(人的志氣, 事業的前途)、磁實(壯實, 結實; 扎實, 穩固)、從先(以前, 從前)、從新(重新)
D	打尖(旅途中的簡短用餐)、打眼(指买东西時未看清質量而受騙。)、帶累(牽連; 連累)、打前失(多指馬、驢等行走中突然向前跌倒)、打夜作(夜里工作)、打印子(借印子錢, 整借零還)、打圍(打獵)、大夫(醫生)、打茶圍(舊時逛妓院時, 拉婦女陪伴喝茶, 飲酒或彈唱)、打(從)、搭幫(結伴)、擔待(承擔; 寬容)、盪(量詞, 次)、道乏(向人家道謝或慰勞)、到底(最終)、得了(①完成, 竣工, 做好了②表示行了, 好了, 可以了③用于句尾, 表示緩和語氣)、燈虎(燈謎)、底下(下面, 或指接下來)、定規(商定, 決定)、抖擻(抖動)、撒(顛簸; 震動)、對不過(常表示道歉時的客套話)、對不住(對人有愧疚, 道歉時用的客套話)、對勁(指人與人相處很融洽和諧)、墩布(抹布)、多嚙<多咱>(什麼時候, 何時)、短(少; 丟失)、多兒(多少)、多宗晚兒(什麼時候)
E	訛(欺詐財務或委以罪責)、哦噠半片(指物品沾污或浸濕嚴重, 痕跡明顯的樣子)
F	乏(沒力氣, 疲勞)、放印子(放高利貸)、彷彿(想像, 好像)
G	嘎拉兒(角落)、趕到(等到; 到…的時候)、敢自(當然, 表示求之不得)、趕(等)、敢情(原來,

⁽¹⁾ 意味解釈は諸先行研究を参考に記入する。

	沒有想到)、攔(放; 摺置; 停頓; 加入)、姑娘(年輕女子; 女兒; 女孩兒)、估衣舖(出售衣服的店舖)、逛(游玩)、拐彎兒(道路的轉彎處)、拐(碰撞; 帶)、趕(從)、光景(情況; 大概, 可能)、歸着(收拾, 整理)
H	好歹(意外的變故, 多指死亡)、耗子(老鼠)、黑下(夜色降臨的時候; 當然)、回頭(以後; 過一會兒)、會子(一段時間)
J	忌(戒)、雞子兒(雞蛋)、見個情(看情面, 在交易上給予優惠和方便)、見天(天天, 每天)、見天黑下(每天晚上)、簡直(索性, 的確, 確實; 直接)、將就(勉強承受或湊合使用)、狡情(不講理, 不承認錯誤)、腳下(目前)、結了(完了, 行了, 算了)、解(從)、街坊(鄰舍, 鄰居)、盡自(不斷地; 總是)、盡溜頭兒(盡頭; 末頭)、竟管(不必考慮其他)、竟自(竟然; 出乎意料)、竟(表示綜括, 全部)、就手兒(順便)
K	康健(精神好, 身體好)、渴想(本指非常想念, 後逐漸形成一種見面問候語)、苦力(從事力氣活的僱傭工)
L	懶怠去(不願意動身)、勞動(勞駕, 客氣的说法)、老子娘(爹娘)、冷孤丁(猛然, 突然)、冷不防(突如其來, 不及防備)、愣(失神, 發呆)、力把兒頭(外行)、理會(注意)、倆(兩個)、兩下裏(兩方面)、了手(結果, 完備; 了結)、零碎兒(不重要的東西)、遛(活動, 慢走)、溜達(緩慢行走)
M	忙忙叨叨(忙亂; 慌張)、磨不開(難為情, 羞愧)、磨(糾纏, 麻煩)、磨蹭(推延時間; 慢騰。)、磨稜子(磨蹭耗時)、沒落子(沒着落)
N	腦門子(額頭; 前額)、您納(第二人稱的單數的敬稱)、娘兒們(指婦女)、弄(做; 辦; 搞)
P	排幾<行幾>(排行第幾)、嘮(吹噓)、盤費(路費, 車票錢)、跑海子(舊時的一種人力車車夫, 供租坐的車子不在一定地點等客人)、平(秤)、破(把整錢換成零錢)
Q	齊截(整齊, 齊全, 齊備)、欺生(欺負新來的、陌生的人)、沏茶(泡茶)、瞧門脈(指醫生在家庭坐診)、輕省(輕微; 輕鬆)
R	認得(認識)
S	嗇刻(吝嗇)、刷白(煞白, 特別白, 慘白)、晌覺(中午覺)、晌午(中午)、甚麼的(表示…之類)、使喚(使用)、使(用)、使得(能用, 可以)、拾掇(收拾, 整理, 修理)、實誠(誠實, 老實)、舒坦(舒服)、耍(賭錢, 賭博)、說合(調節)、死肉(比喻沒有活勁兒的人)、收拾(整理, 修理)素日(平日, 平素)、索性(土音, “索” suǒ變調)、所(全, 也)
T	臺階兒上(土坡、岩石上的踏腳點)、挑字眼兒(挑毛病; 找缺點。)、停當(完備)
W	望看(看望)、汪(積)、物件(東西)、無賴子(刁頑耍奸, 為非作歹的人)
X	瞎(無目的, 無計劃)、下剩(在…之外, 其他, 此外)、下賤營生(有失身分、職務或高貴地位的生意)、瞎咧咧(胡說八道)、下餘(剩下)、閒在(舒適; 悠閒)、先頭裏(從前)、些個(一些)、新近(最近)、學房(學堂)
Y	言語(說<話>)、眼前歡(暫時的利益, 快樂不會長久)、漾(因滿而溢出)、邀(稱)、咬羣(表示

	不团结)、胰子(肥皂的旧称)、銀號(比钱庄或钱铺大的小银行)、迎着頭(迎面)、由(从)、有耐心煩兒(有耐心)、有眼裏見兒(会见机行事)、雲山霧罩的(形容说话玄虚不着边际)、約摸(估摸, 估计)、勻溜(稀稠适中)
Z	僭們(我们)、攢足了勁兒(用尽全力)、喳(是)、扎掙(勉强支撐着)、宅門子(官宦或其他富有人家的住宅)、摘(挪, 借)、撮布(用來擦餐具、桌子等用的抹布)、站住(停下来)、掌櫃的(店鋪老板)、招(放, 攔)、着忙(着慌; 着急)、着比(经常用在表示假设的句子中, 以引起下文。如果, 比如, 假如)、找補(补上不足的)、這還用說麼(不用说, 沒问题)、這程子(最近一段时间, 这些日子)、這麼着(这样, 这种情况)、這是甚麼話呢(这是什么意思呢, 表示不满)、整天家(天天; 一天到晚)、主(指某类人。前面可加表示某种类型的词语)、住家<兒>(居住; 住戶)、重落(旧病复发)、跣窩(指道路的凹凸不平之处)、子兒(束, 多用于手指掐住的细长的东西)、自各<兒>(自己, “各”也写作“个”)、字兒(书信; 字条)、縱(有皱, 起皱)、嘴硬(自知理亏而口头上不肯认错)、走動(大便)、左皮氣(怪皮气)、作<做>臉(增添光彩或体面; 反语, 表示丢臉)

魏薇 (2013) が収集した北京語語彙はわずか45個が取り上げたが、その北京語語彙は“多咱”、“竟”“老子娘”、“整天家”などのように北京語の特徴がより強い表現である。しかしながら、魏薇 (2013) は“底下”を“下面, 或指接下來”と釈義しているが、原文は「那個客人聽這話就說, 我的銀子已經都買了貨了, 現在我手底下連一兩銀子也沒有。」となっていて、ここの“手底下”は“手頭裏, 手裏”と解釈の方がより適切であると考えられる。

また、上述した先行研究のうち、陈明娥 (2014) は『官話指南』の北京語語彙を最も詳細に分析しているが、134個のみ提示しているため、『官話指南』の北京語語彙に対する徹底的な分析がなされていないとは言えない。『官話指南』は北京官話教科書として、上述の先行研究に提出された約200個に限らず、再検討の余地が充分に残されている。また『官話指南』の文中では大量に“兒化詞”を使っているが、先行研究においてそれがあまり提示されていない。しかも、北京語語彙以外の文語についての分析もされていない。以上は『官話指南』に関する語彙研究の現状でもある。したがって本章では先行研究を踏まえて語彙の再検討を行う。

1.2 語彙の再検討

『官話指南』の語彙を全面的に考察するため、(1) 北京語辞典に収録されている北京語語彙、(2) 先行研究および北京語辞典などで扱われていない北京語語彙、(3) “兒化詞”、(4) 文語、この4部分に分けて分析する。

1.2.1 北京語辞典に収録されている語彙と収録されていない北京語語彙

金受申《北京话语汇》(1964)、宋孝才・马欣华《北京话词语例释》(1982)、陈刚《北京方言词典》(1985)、徐世荣《北京土语辞典》(1990)、常锡桢《北京土话》(1992)、陈刚・宋孝才・张秀珍《现

代北京口语词典》(1997)、齐如山《北京土话》(2008)、傅民・高艾军《北京话词典》(2013)、刘延武《老北京方言俗语趣味词典》(2015)などの北京語辞典9冊を利用して、『官話指南』に使用された語彙に精査作業を行い、諸辞典に収録された“兒化詞”以外の北京語語彙を340個検出した。そのうち先行研究に指摘のないものは122個あり、諸先行研究で提示された総数218個の55%になる。紙幅の関係上、例文を省略して、この122語を表2に列挙する。

表2 先行研究で指摘されていない『官話指南』の北京語語彙

音順	北京語語彙 (意味解釈) ⁽¹⁾
B	罷(助词, 同“吧”)、拜匣(一种长方、扁浅的小木匣, 拜客或庆吊时用, 内装“拜帖”、名片或礼单)、棒子<草>(玉蜀黍, 也叫玉米<玉米杆>)、報子(大幅的文字或文图皆有的广而告知的宣传品。如戏报子)、本錢(资本)、彼此彼此(谓彼此同样, 用于客气的应对)、不像(不成体统, 反常, 过分)、不論(不管, 不受约束)
C	裁縫鋪<舖>(称代客缝制衣服的小作坊)、差事(①同“事由儿”, 即职业、工作②指临时被派遣的事)、草字(旧时礼俗, 问人姓名)、茶錢(房租)、吃不了兜着走(处于难堪的境地)、吃食(吃的东西)、出恭(婉语, 上厕所)、戳子(图章, 印章)、抽屜(家具上可抽拉的匣子。“屜”tì变读, 或变 dei)
D	打發(应酬, 应付)、當舖(古时候抵押东西换钱的地方)、冬子月(农历十一月, “子”或读 si)、兜着(承担责任, 后果等)、抖(抖动)、…得慌(缀于某些形容词之后, 表示人的身心某种不快慰的感觉)、賭氣子(谓因恼怒而做出决绝的行动)、底下人(指仆人)
E	恩典(给予的好处, 恩惠)
F	方便(上厕所的婉語)、放着(该做的而不做, 去做别的事)、飯(午饭)、飯莊子(指高级的大饭馆)、封印(清代衙门, 从腊月下旬到明年正月中间, 停止辦公, 叫“封印”)、廢物(无能的, 不会辦事的人)
G	敢保(肯定, 保证)、告假(先离开、早退席时的敬語)、怪不得(难怪)、管保(肯定, 保证)、櫃上(店铺, 商店)
H	行市(市面商品价格)、好容易(好不容易)、好些個(很多)、好死(善终)、合式(符合某种情况、要求)、壞事(找麻烦, 使事不成)、幌子(店铺招牌)、衚衕(又作“胡同”, 小巷子的意思)、夥計(旧时商家、厂里雇佣的员工)
J	講究(在意, 注重)、借…吉言(对别人说的好话表示好感的客套话)、景致(风景)、經紀(旧时的一种管事人)、揪(扭打, 厮打)、就算(表示姑且承认)、舉薦(指人事上的推荐。“举”jǔ变调) ² 、覺着(自我感觉)
K	炕(旧时, 北方人习惯睡炕, 系用土垒成的平台; 几乎占一间屋子的一半, 是家庭生活中重要

⁽¹⁾ 意味解釈は諸北京語辞典を参考に記入する。

⁽²⁾ 徐世荣 (1990: 214) は“舉薦”を“jǔjian”と読む。

	的处所, 写字、算帐、都在炕上。晚上睡觉, 叫“上炕”, 决不叫“上床”。北京人忌讳“上床”一词, 死后停尸于板, 才叫“上床”)、磕打(向硬物上撞击)、可不是(对对方的话表示赞同)、苦子(苦头, 使人痛苦、苦恼的事情)
L	來着(用于句尾, 表示曾经发生过什么事情)、勞駕(向别人询问某事或求别人帮忙做某事, 为表示礼貌而用的客套话)、老公(宦官的俗称, 太监)、愣着(失神, 发呆)、歷練(实践锻炼)、了不得(不得了, 表示惊讶语)、零碎(不洁净的言语, 即骂人话)、溜溝子(又作“溜勾子”, 阿谀奉承, 溜须拍马)、論(按照一定的亲属、亲戚、师徒或其他人际关系排辈分)
M	罵(所做的事使人难堪或暗含讥讽、嘲弄意思)、茅廁(又作“毛厕”, 义同“茅房”)、茅房(厕所)、昧(又读“mì”, 暗中将不属于自己的财物据为己有)、沒有的話(不可能, 不会)、門面(指商店)、悶得慌(闲着没事而感觉无聊)、迷迷糊糊(看不清, 神志不清的状态)
N	年下(春节)、您哪(又作“您呐”。客气语, 向对方表示尊敬, 亲热等)
Q	齊化門(朝阳门, 元明时旧城)、起(从)、錢舖(兑换钱币的私人商号)、俏貨(价廉物美的货物)、屈心(昧着良心, 歪曲事实, 冤枉人)
R	人家(别人)、人行(人的行为)
S	撒開了(尽情, 无拘无束)、賞臉(让人脸面过得去)、身子(身体)、生分(感情淡薄, 关系疏远)、生事<兒>(惹事生非)、束脩(旧时教读的报酬)、俗家(僧道是“出家人”, 称其生身父母之家叫“俗家”, 或称“娘家”)、說開了(说明真相, 表明态度)、說話之間(指时间相当短, 时间不长)、死鬼(已死的人。特指已死的丈夫, 亡人)、耍手藝(靠自己的技艺赚钱吃饭)、隨和(指性情温和, 不与人争, 跟大多数人关系很好)、所(量词, 等于“座”)
T	通行(懂行)、頭年(本年的前一年)、妥了(好了)
W	往外(又作“望外”。望、往: 表趋向时。“望”变读 wàng。以外, 开外)
X	下夜(夜间值班巡逻)、消停(安静)、行走(供职, 任职)
Y	牙貼(又作牙帖。即营业执照, 也叫官帖)、野貓(野兔)、野牲口(虎狼之类的野兽)、一程子(一段时间, 一阵子)、一層(一方面)、一節(一样儿, 一点)、一清早<兒>(早上)、引薦(又作“引見”。当面介绍他人互相认识)
Z	早起(早晨)、怎麼着(怎么样)、着了(作动词的补语, 表示行动的结果或程度)、掌燈(指天黑之际)、招(招惹)、着落(头绪, 下落)、正經、(①正事、正体“经” jīng 变调②正派)、住店(投宿旅店、宾馆、酒店)、抓局(抓赌)、字號(商店、饭店、茶馆等的名字)、嘴巴(称对腮旁的殴打)

表1と表2で『官話指南』の北京語語彙は計340個になる。この他にも北京語辞典には見られな
いが、北京方言の特性を持つと考えられる語彙もあるため、ここでそれらの語彙を取り出し、釈義
を試みる。紙幅の関係上、例文の多いものは引用を控えた。

例 1. 擺台：上菜。

你請我來吃飯，怎麼還磨蹭着不擺台，是幹甚麼來着。因為剛纔送煤的送煤球兒來了，我邀了邀。又因為他開來的帳錯了，小的查了一查摺子，瞧瞧他是送了多少回來，就為這個可就耽誤了擺台了。(3-4)

(^① (お前はおれに飯を食べに来てと言つて、なぜまだ愚圖々々して食卓も列べないで、何を為て居たのか。今し方炭屋が炭團を持って参りましたから、私は目方を掛けたり、又そのつけて来た書付が間違つて居たものですから、通帳を調べて、何遍持つて来たかを見たりして居たものですから、食卓を列べるのが、遅くなりました。)^②)

例 2. 別致：特別，有諷刺的意思。

你們這個相好的，也真別致，怎麼你勸他忌烟他倒惱了你了。(2-25) (このご親友も亦本當に變物ですな、何故あなたが禁煙をお勧めなすつたのに、却てあなたを怨んだのですか。)

例 3. 本家：有血緣關係的族人，家人。

家裏底下人們也都散了，就剩了他們本家的人了，腳下是吃一頓挨一頓。(2-23) (家の召使共も皆やめてしまつて、たつた本家の者ばかり残して目下は食ふや食はずの有用様です。)

例 4. 補報：報答。

素日受您的栽培，我本就感激不盡。現在為這件事又承您抬愛，像這麼疼我，怎麼補報您的情呢。(1)

(日頃あなたのお仕立てを蒙つて、私はもとから深く感謝致して居ります、今此事で又御親切に預つて、このやうに非常に可愛がつて戴いて、私はどうしておなさけにお報いしてよいでせう。)

例 5. 不啣了：不，不必，表示委婉拒絕。

您忙甚麼了，再坐一坐兒罷。不啣了，我舖子裏還有事哪。(2-9) (何を御急ですか。もっとごゆつくりして下さい。さうして居りません、私は店に又用がありますから。)

例 6. 潮腦：即樟腦。

趕到明兒早起，再照舊的擱在箱子裏，一層一層兒的都墊上紙，下上潮腦拿包袱蓋上，四周圍都掖嚴了，再蓋上蓋兒，不然潮腦就走了。(3-10) (明日の朝になつてからまた元の通りに箱に入れて、一重ね毎に紙を挟んで樟腦を入れ、風呂敷をかぶせて、あたりを皆おし付け、それから蓋をする、さうしなければ樟腦が直になくなってしまふ。)

例 7. 趁願：如願，如意。

他怕是他妹妹聽見說他丟了銀子衣服了，又不趁願又不找他來問他，所以他也沒敢到衙門去報他家裏失盜。(2-30) (その妹が彼が金錢衣類を盗み去られたといふ事を聞いたならば、必ず好い氣味だと喜び、又必ず處に様子を聞きに来るだらうと、それを恐れてそれで彼は役所にも盜難届をしないのみならず、)

例 8. 粗知大概：略通一二。

^① 括弧内の数字は巻と章を示す。「3-4」は巻之三の第4章を指す。ただし、巻之一は章に分かれていないため、単に(1)とする。

^② 本研究における『官話指南』に関わる訳文は『官話指南自修書』を参照した。『官話指南自修書』は翻訳漏れ、誤訳の部分は『官話指南總譯』、『官話指南精解』を参照にし、2書ともない場合は筆者による訳を付す。

我這不過粗知大概，那兒就能說到會呢。(4-18) (私はほんの大體をざつと知つて居るだけでなかなか能く話せるなどとは申されません。)

例 9. 搭配：指動物交配。

有兩個狗在那兒搭配，一個姑娘握着眼睛不肯瞧。(1) (筆者訳：二匹の犬はあそこで交配し、ある少女は目を覆いて直視することができない。)

例 10. 大好：指身體恢復得很好。

因為我這幾天有點兒不舒坦，所以沒出去。現在倒大好了。是大好了。(2-9) (私は此頃少し不快でしたから、外出しませんでした。只今は餘程好くおなりですか。はい、大變好くなりました。)

例 11. 倒過：收買店鋪。

是因為我倒過一個舖子來。倒過一個甚麼舖子來呀。倒過一個錢舖來。(2-9) (店を一軒讓受けたからです。何店を讓受なすつたのですか。兩替店を讓受けました。)

例 12. 斷就：下定論。

我早給他斷就了，他父親死之後他一定抱沙鍋。(2-17) (私は疾つくから彼の父親が死んだ後で、彼は屹度乞食になると判斷をして居ります。)

例 13. 多心：掛心，放在心上。

那兒的話呢，我這不過效點兒勞你倒不必這麼多心。(1) (どういたしまして、私はこれはほんの少しばかり御盡力をしたに過ぎません、あなたはこのやうに御心配なさるに及びません。)

例 14. 犯潮：濕氣侵蝕。

牆上的紙，因為犯潮都搭拉下來了(3-14) (壁紙も濕氣を受けて皆だらっと下りました。)

例 15. 封貨：從當舖購入所當之物。

兄台，您這是解舖子來麼。不是，我是到天盛當舖封貨去了纔回來。(2-20) (あなたは今店から御出でられたか。いいえ、私は天盛質屋へ質の流れの入札に行つて、今し方歸つて来たのです。)

例 16. 各人：自己，指本人。

這個看園子的，是僇們給他找啊，還是他各人找呢。(2-13) (その畑番は私共が其の人に雇つてやるのですか、又彼れ自身に捜すのですか。)

例 17. 跟人：僕人、隨從。

這麼着又打發了一個跟人過去，問了問鑣車，他們說是明兒早起五更天起身。(2-29) (そこで又一人の従者をやつて、護衛者に問ひ合すと、彼等が言ふには「明朝四時の出發である」と…。)

例 18. 跟班：舊時跟隨在官員身邊供使喚的人。

有一天早起，來了一個人，打扮的是宅門子裏跟班的樣兒。(2-37) (或日の朝、一人の者がやつてきました、身なりは従僕のやうでした。)

例 19. 勾：導致舊病復發。

我是給人管了件閒事，受了點兒氣，把肝氣的病勾起來了。(2-27) (私は他人の為めに一ツつまらない事に関係して少し腹を立てて肝癩病を起したのです。)

例 20. 黑下白日：晝夜。

那是自然的，總得找一個人，黑下白日在園子裏看看纔行哪。(2-13) (それは勿論です、是非一人雇ひ入れて晝夜共に園内に居て看守させなければなりません。)

例 21. 滑稽：東西。

趕插在裏頭之後，可得拿滑稽或是棉花揷磁實了，別叫他在裏頭搖擺纔行哪。(3-17) (詰めてしまつたならば、藁屑か、綿かで、しっかりと詰めて、中の品物が動かないやうにしなければいけない。)

例 22. 回片子：回帖。

說是老爺起外頭大遠的帶了點兒東西來，留着自己用就結了，又何必費心惦記着我呢。實在我心裏不安得很，這麼着給了我一個回片子，給老爺道費心。(3-18) (「旦那が大變遠方から持つて御出になったのなら澤山もない品を、自分で御使ひなされば好いのに、なんだつて私にまで御心配下さるだらう、誠に痛み入ります。」と仰つしゃつて返禮の名刺を下され、旦那へ宜しくと御禮を述べられました。)

例 23. 會錢：湊錢。

既然如此僂們就同席吃飯，各自會錢就是了。如此我便可以去。(4-17) (さういふことでしたら、私共會食して各々錢を出し合へば可いではありません。)

例 24. 傢伙：餐具，廚具，臥具等日常用具。

這邊打算要帶太太逛去，所有應用的各樣兒的傢伙，你先都說給我聽聽。(3-8) (今度は妻を連れて行く積りだから、いろいろ必要な手廻り道具を前以ておれに言つて聞かしてくれ。)

例 25. 講論：議論。

例您這麼辦是公道極了，親友們決不能有甚麼講論您的了。(2-11) (さういふ風になされば至極公平です、親戚や友人の人々も何にもあなたに對して異議を唱へることはできません。)

例 26. 局子：指店鋪，作坊。

我們局子裏，有一對比這個小的，是作樣子的，不是賣的。(2-7) (私共の店には一對これより小さいのがありますが、それは見本に作つたので、賣品ではありません。)

例 27. 居停：主人，東家。

因為我們那位舊居停去年調任雲南了，打算要邀我一同去。(2-24) (それはかういふわけです、私共のあの舊主人が昨年雲南へ轉任され私を御連れになるつもりでした。)

例 28. 膀：以半個屁股坐在邊緣上。

你可以膀在車沿兒上，跟了我去罷。(3-6) (お前車の脇に乗つて隨いて来い。)

例 29. 攞：即“落”、短少。

請客人點點件數對不對。客人說都對了，還有趕車的說還攞他兩塊錢的車錢哪。(3-14) (御客様に數が合つて居るかどうかわかりませんが、見ていただきます。御客様が皆合つてると仰つしゃるぞ。それから御客様が、馬車賃がまだ二弗足りないと申します。)

例 30. 兩造：指被告和原告。

此事我原無成見，如今既然兩造各供一詞，難以定案，道台所想的辦法也很妥當。(4-8) (此事件に

就ては拙者元より成案はありませんが、只今既に兩造から、別々に申立を聞えたのでは判断し難いから、道臺の御考の方法も至極結構であります。)

例 31. 累肯：對對方表示客氣的話語，您受累了。

那兒的話呢，我也該回去了，僂們改天見罷。您回去了，累肯您納。好說好說。(2-14) (どう致しまして、私はもう御暇致します、何れ近日御目にかかります。君御歸りか、御苦勞でした。)

例 32. 落：得到。

我告訴明白您納，您給的這茶錢，並不是我落，也不是我那個朋友得，是給我的那個朋友的底下人們大家分的。(2-1) (私はわかるやうにお話し致しませう、あなたのお遣りな成るこの茶錢は決して私の手に入れるものではありませんし、又私のあの友人が取るのでもありません、これ私のあの友人の召使等大勢に分けてやるのです。)

例 33. 棉被窩：被子。

可就嫌棉被窩太薄了。(1) (木綿の掛蒲團が餘り薄くって困りました。)

例 34. 那層：那一方面，那件事。

我想那層倒沒甚麼可慮的，腳下房子住外租着很容易。(2-1) (わたしはその事は何にも心配することはないと思ひます。目下家を外に借すのは大變容易なことです。)

例 35. 平西：夕陽西下至地平線。

趕到了山上，我們先是竟打了些個野雞野貓。趕天有平西的時候，忽然跑來了個野豬，我們倆就拿槍一打，可就打死了。(2-15) (山上に着いて私共は初めには唯少しの雉や兎を獲ったばかりでしたが、日が傾いた時分に突然一疋の猪が驅けて来ましたから、私等兩人は鐵砲を一打ち打つて直ぐに打止めました。)

例 36. 平和：穩定。

今年皮貨的行情怎麼樣。今年皮貨的行情還算是平和。(2-2) (今年は皮物の相場は如何ですか。今年は皮物の相場はまあ普通です。)

例 37. 舖保：保人。

那麼我還得有舖保罷。舖保自然是得有的。(2-1) (そんなら私は尚保證人がなければならぬのでせうな。保證人は勿論なければなりません。)

例 38. 讓：請。

這麼着我就叫倆底下人攙着他，溜了半天可就好了，然後我就把他讓到書房裏去了。(2-25) (そこで私は直ぐに二人の召使に彼れを扶けて暫く運動させて漸く直つたから、夫れから私は彼を書齋に案内しました。)

例 39. 撒俐：整齊，乾淨。

你還得換上乾淨點兒的衣裳，平常在家裏做粗活那原不講究，到別的宅裏去，總得要撒俐纔是樣子哪。

(3-18) (それからおまへもう少し綺麗な着物と着換へなければならんよ、平生宅で荒仕事をして居る時分には何うでも宜いが、外の屋敷に行くには、是非小綺麗にするのが當り前だ。)

例 40. 實端：全部說出來。

我心裡想着他若是一定不依，我就給他實端出來怎麼樣。(1) (私は心中考へて居ますが、若し彼がどうしても私に従はないならば、私は彼に事實を打ちまけてやらうと思ひます、如何でせう。)

例 41. 刷牙散：牙粉。

刷牙散在那兒了。(3-3) (齒磨粉は何處にあるか。)

例 42. 說倒：從中介紹，促成別人的事。

我認得是那邊兒張老二跟前的，若給你們令親說倒也配得過。(1) (私は知つて居ます、あその張老二さんの娘です、若しあなた方の御親戚の爲めにお話しになったら、矢張りめあはずことができます。)

例 43. 通達：通曉，了解。

這錢行的買賣您也通達麼。(2-9) (この両替屋の商法にもあなたに熱くご存じですか。)

例 44. 無怪：難怪，怪不得。

那兒的話呢，老兄如此大才，無怪上游器重，況且又愛民如子，如今升任太守，實在是彼處百姓之福也。(2-5) (どう致しまして、あなたの様に大才では、上官があなたの器量を重んぜられるのも道理です。その上又人民を愛せられること子のやうですから、今度太守に御昇位になつたのは誠に彼の地の人民の幸福です。)

例 45. 下保：做保證人。

那是這麼着，若我給他找的人，那自然我得下保，若是有偷果子賣的事情，有我一面承管了。(2-13) (それはかうです、若しも私が其の人の為に雇入れたものであったならば、それは無論私が保證しなければなりません、若しも其の者が果物を盗んで賣る様な事があらば私に一切責任があるので。)

例 46. 相公：相貌俊美的年輕男演員。

那總是有相公陪客坐着的時候，吃東西的多，甚麼叫相公，您沒瞧見常在戲台上傍邊兒站着的小戲子，長得那麼很標緻的麼。(3-11) (それは大抵あの相公が客に付いて居る時には物を食べる者が多う御座います。相公とは何か。あなたは、始終舞臺の傍らに立つて居るある小供役者で、生れ付き器量のいいのを御覽になりませんでしたか。)

例 47. 小取：占小便宜。

他就這麼小取，那幾年我吃了總有幾百吊錢的虧。(2-27) (彼はかういう風に少しづつ引込ます者ですから、その數年間には私はどうしても數百吊文の損を食はされました。)

例 48. 斜過去：太陽偏西。

就是有要緊的事也要待一會兒，等太陽斜過去涼快些兒再出門去罷。(1) (大切な事があつても、暫らくお待ちにならなければなりません、太陽が斜めになつてから、お出懸けなさい。)

例 49. 謝和：以財物作為答謝。

你等一等，我們把那個丟銀票的那個人找來。你們兩人當面一說，他也不能白了你，總得謝和你幾兩銀子。(2-6) (あなた暫く待つて居なさい、私共は其の手形をなくした當人を呼んで来るから、あなた方二人で面談なされば、其人もあなたに無駄骨は折らせません。屹度あなたに何両かの謝禮を

しなければならぬのです。)

例 50. 揔：塞，往容器或空間里填滿東西。

趕插在裏頭之後，可得拿滑稽或是棉花揔磁實了，別叫他在裏頭搖擺纔行哪。(3-17) (詰めてしまったならば、藁屑か、綿かで、しっかりと詰めて、中の品物が動かないやうにしなければいけない。)

例 51. 依實：依從，聽從。

若是大人肯依實我們，也就不布了。(4-1) (若し公使閣下か本當に御遠慮下さらなければ我々どももそれでは取つて差上げますまい。)

例 52. 應活：找到活計。

你這回來應着甚麼活了沒有。還沒應着活了。(2-10) (おまへは歸つて来て何か仕事を請負ふたか。)

例 53. 月裏頭：這個月內。

月裏頭有一天，夜裏頭有三更多天，我剛睡着，就聽見我們後頭院子裏，咕咚的一聲，跳進一個人來，把我嚇醒了。(2-25) (此の月の或る日の夜、子の刻過ぎてあつたが私が眠むり着いたばかりの時に、私共の宅の後の庭内でごんと音がして一人の者が飛び込んだ来たので、私は驚いて目を醒ました。)

例 54. 眼頭裏：眼前，面前。

心裏說怪不得皇上眼頭裏的東西，都添上一個御字呢。(2-39) (心中思ふには道理で天子様の御手許の物には皆んな御の字を上を添へるんだな。)

例 55. 勻：抽出，分出。

您是勻出多少間來出租，我可以替您找住房的。(2-1) (あなたが私に幾間つかそれぞれ貸出すといふことをお話になれば、わたしはあなたに借手を捜してあげませう。)

例 56. 糟蹋：即“糟蹋”。

那梯子為甚麼拿開了。因為人多上去竟混糟蹋。(1) (その梯子は何故取外づしたのですか。それは人が澤山登つて行つて、唯無暗に踏み荒すばかりだからです。)

例 57. 粘連：連帶着…一起。

這麼着沈掌櫃的就寫了一張呈詞，粘連那張批單，在縣裏就把泰和棧告下來了。(2-19) (そこで沈番頭は直ぐに一枚の訴狀を認め、かの注文書を添へて縣衙門へ泰和棧を告訴した。)

例 58. 招定：招供，指承認自己的罪行。

知縣不信就動刑拷打和尚，叫他招定了。(2-38) (知縣は信じないものだから、和尚を拷問にかけ白状させようとした。)

例 59. 折：斷了。

我瞧瞧，這個鐘是鍊子折了。(2-14) (私が拝見しますに、この時計はゼンマイが切れて居ります。)

例 60. 整工夫：完整的一段時間。

我是不能整工夫在舖子裏做活，總是在外頭辦事的時候多。(2-14) (私はきまつて店で仕事することは出来ません、どうしても外で仕事をする時の方が多う御座います。)

例 61. 中人：中間人，擔保人。

兄台知道當初令親借銀子的時候有中人沒有，我知道有一個中人名字叫高五，去年冬天已經去世了。

(4-19) (あなたは、最初御親戚が金をお借りになる時に中立人が有ったかどうか御存じですか。)

例 62. 宗：種，様。

你不知道，凡這宗沒良心的人，大概都是這麼着。(2-16) (御承知の通り、凡そこの様な良心の無い人間は大概皆んなこんなものです。)

上述の考証を経て、これまで指摘されなかった北京語語彙がさらに 62 個増えて、『官話指南』の本文には全 402 個の北京語語彙が採用されていることになる。陈明娥、李无未 (2012: 56) は“我们对日本明治时期十种官话课本进行穷尽考察后，整理出了 1510 个北京话词语。” (筆者訳：日本明治期の官話教科書 10 種に対して徹底的に考察した結果、北京語語彙 1510 個を見出すことができた) と述べた。その 10 種官話教科書の中には『官話指南』も含まれている。陈明娥 (2014) は『官話指南』に現れた北京語語彙を 134 例提示したが、そのほかの北京官話教科書に現れた北京語語彙は『官話指南』にも大量に存在する。また、张美兰 (2011: 110) は“《语言自述集》中与现有的北京方言词典相对应的词就达 200 余条” (筆者訳：『語言自述集』には現行の北京方言辞典と対応するものだけでも 200 語余りある) と指摘した。以上のことから、本章の考察では『官話指南』に限っても 402 個の北京語語彙に達したことから、この教科書の強い北京語の特質が一層浮き彫りになった。

1.2.2 “兒化詞”

“兒化詞”は北京語語彙の重要な一要素で、『官話指南』にも大量の“兒化詞”が使用されている。李思敬《汉语儿音史研究》(1986: 43) は“‘儿化’现象不是现代才有的，早在明末清初，就有了记录‘儿化音’的音韵学文献。” (筆者訳：「兒化」の現象は現代になって発生したものではなく、明末清初の頃にはすでに「兒化音」を記録した音韻学の文献がある) と述べ、それぞれ明末の《西儒耳目資》と清初の《拙庵韻悟》を捉える。

周一民《北京口语语法(词法卷)》(1998: 9) は“儿”是北京话里最活跃的名词后缀。(筆者訳：「兒」は北京語のなかで最もよく使用される名詞接尾辞である。) と述べた。また、賈采珠が著した《北京话儿化词典》(1990) でも『官話指南』(1906 年版) の“兒化詞”の用例を引用している。本節は賈采珠の研究を踏まえ、『官話指南』の“兒化詞”をすべて抽出し、以下に示す。

(1) 名詞

今兒、後兒、昨兒、明兒、茶盤兒、茶船兒、錫鑲罐兒、胰子盒兒、茶机兒、痰盒兒、車沿兒、官帽兒、烟盤兒、雞子兒、鹽盒兒、村莊兒、笑話兒、米粒兒、花兒、烟捲兒、燈罩兒、燈苗兒、皮箱兒、繩子扣兒、尾兒、車箱兒、宅門兒、傍帳兒、工夫兒、各樣兒、人家兒、地名兒、月頭兒、草稿兒、字眼兒、榜樣兒、瓜子兒、門口兒、菜名兒、官座兒、外邊兒、七星罐兒、牙籤兒、藍白線兒、坎肩兒、汗褸兒、褲腳兒、西邊兒、倒座兒、東嘎拉兒、夥伴兒、毛稍兒、杏兒、脆棗兒、白牆兒、市口

兒、新手兒、信兒、山兒、傍邊兒、屁股蛋兒、榻板兒、銀盤兒、錢數兒、手縫兒、歲數兒、外面兒、每樣兒、閒空兒、伴兒、腔調兒、邊兒、借字兒、馬尾兒、地方兒、住家兒、煤球兒、燈虎兒、小孩兒、台階兒、勁兒、北邊兒、對面兒、水聲兒、銀數兒、麻繩兒、賞封兒、紅封兒、筋筋兒、棍兒、小吃兒、眼裏兒、聲兒、底半截兒、四面兒、價兒、道兒、板凳兒、性兒、那家兒、儘溜頭兒、蓋兒、零兒、一會兒、自各兒、背陰兒、跑堂兒的、歇歇兒、頑兒、耽悞兒、等一等兒、挨一挨兒、（照應）點兒、（慢）點兒、（便宜）點兒、（有）點兒、照樣兒（定燒一對）、得空兒、就手兒、拐彎兒、（轉過）灣兒、搭伴兒、向陽兒、澆花兒、復元兒、耍馬前刀兒、兩邊兒⁽¹⁾。

前兒個、昨兒個、明兒個、今兒個、大前兒個。

(2) 動詞

坐一坐兒、坐坐兒。

(3) 形容詞、副詞

零碎兒、耐心煩兒、準兒、有趣兒、多兒、活活兒的（餓死）、細細兒的（數了一數）、好好兒的（拿熨斗熨一熨）、悄悄兒的（進來）、爛爛兒的（燉）、體面些兒、涼快些兒、一塊兒⁽²⁾。

(4) 代詞

這兒、那兒、這邊兒⁽³⁾、那邊兒、這陣兒、那塊兒、那個兒、這麼樣兒、這樣兒的。

(5) 數量詞

一點兒、一季兒、一所兒、幾分兒、幾樣兒、十子兒、（打了）兩下兒、兩樣兒、一送兒⁽⁴⁾、四季兒、一半兒、一層一層兒的（都墊上紙）。

『官話指南』の“兒化詞”は、以下の特徴がある。

1) 『官話指南』は計504個の“兒化詞”があるが、重複するものを除くと168個となる⁽⁵⁾。そのうち名詞の“兒化詞”は上掲の147例となる。魯允中《普通語的轻声和儿化》(1995:72)は“带‘儿’字的词,绝大多数是名词,所以一般可以把‘儿’字当做名词的标志。”(筆者訳:「兒」字をとまなう語はその大多数が名詞であるため、一般的に「兒」を名詞の標識と見なしてよい)と指摘したが、この説は『官話指南』にも適応する。贾采珠(1990:11)によると「伴兒」には“同伴”と“伴侶”の意味があり、『官話指南』では“同伴”の意味を表している。また、上述の“兒化詞”多くは北京語の口語文で使用されているが、“官座兒(剧院专为军阀官僚准备的坐席)”、“倒座兒(一院之内,与正房相对的房屋,通常坐南朝北)”、“傍帳兒(车篷两侧的遮阳帘)”、“跑堂

⁽¹⁾ 俩袖子往兩邊兒外頭一折,然後再一合就得了。(3-10) (両袖は両側の外に折曲げ、それからまた合はせればそれで好い。)

⁽²⁾ 我已經約會了吳老爺一塊兒逛去。(3-5) (おれはとうに呉さんと一所に行く約束をした。)

⁽³⁾ 這邊兒有水那邊兒有鬼。(2-40) (是は這邊兒有水、那邊兒有鬼です。)

⁽⁴⁾ 老爺若是在那兒有耽悞兒,我想莫若就雇一送兒倒好。還是雇來回得好,免得又累贅。你雇的這個車,乾淨不乾淨,車箱兒大小驢子好不好。(3-6) (旦那あそこで若し御暇が取れるやうなら、片道だけ御雇になる方が好からうと思ひます。)

⁽⁵⁾ 表1の先行研究に存在している“不得勁兒、茶船兒、出息兒、多兒、多宗晚兒、嘎拉兒、拐彎兒、盡溜頭兒、就手兒、零碎兒、臺階兒、挑字眼兒、有眼裏兒、有耐心煩兒、攢足了勁兒、住家兒、子兒、自各兒、字兒”も含まれている。

兒的（饭馆儿，酒店里为客人吃住服务的人）”等のように清末でしか使用されなかった“兒化詞”もある。

2) 丁锋《〈官話萃珍〉所見清末北京話兒化現象》(2000:9)は“兒化韻在汉语书面语言里, 是用汉字‘儿’纪录下来的”, “但並非所有的人都把这种‘儿’字写出来。”(筆者訳: アル化韻は漢語書面語の中に“儿”という漢字で記録しているが、全ての人々がこのような‘儿’の字を書くわけではない。)と述べているが、『官話指南』にもこのような現象が存在している。

例 63. 你等一等兒 我就換衣服同你走 (2-40) / 你等一等, 我們把那個丟銀票的那個人找來…。(2-6)
 (一寸待つて下さい、私は直ぐに着物を着換へて御伴をしますから。/ あなた暫く待つて居なさい、私共は其の手形をなくした當人を呼んで来るから…)

例 64. 你看四季的時候那一季兒好。(1) / 四季兒各有好處, 你喜歡那季兒。(1)
 (あなたは四季の時候の中どれが一番好いとお考へですか。/ 四季はそれぞれ好い處があります。)

例 65. 我很想他, 有閒空兒請他來坐坐。(1) / 請大人再畧坐坐兒, 多盤桓一會兒。(4-4)
 (私は張君に會ひたいと思つているから、暇があつたら宅に来てくれるように言つて下さい。/ どうか閣下今暫く御緩くりお寛ろぎ下さい。)

以上、“兒化詞”は北京語の重要な言語現象で、北京官話教科書の『官話指南』にも大量の“兒化詞”が使われていることから、『官話指南』が北京語の特徴を有していることがより明らかになった。

1.2.3 文語の使用実態

上述の分析から、『官話指南』は北京語語彙を多く含むことが分かる。ところが『官話指南』の北京語以外の語彙については今日に至るまで研究されていない。本節はこの不足を補うため、北京語語彙以外の文語⁽¹⁾と四字熟語について分析する。

表 3 『官話指南』の文語⁽²⁾

音順	文語 (意味解釈) ⁽³⁾
A	碍難 (难于 (旧时公文套语))
B	不成格局 (不成敬意, 不成结构)、拜會 (拜访会见)、不足為憑 (指不能当作凭证或根据)、稟控 (指向上控告)、彼時 (那时, 当时)、不甚 ^① (表示程度不是很高)、包攬 (兜揽过来, 全部承担)、弊端 (指弊害的所在)、彼處 ^② (那個地方)

⁽¹⁾ 松村明が著す『大辞林』第三版 (2006:234)により、文語は「もっぱら文書を書くときに用いられる言葉」と指摘し、本論文では中国語の書き言葉として捉える。

⁽²⁾ この表3に示した語彙は全て「官話問答」に用例がある。また「應對須知」、「官商吐屬」、「使令通話」にも用例がある時は語彙の右下に付した①、②、③の番号を付した。なお「使令通話」には1つも用例がない。

⁽³⁾ ここでは《現代汉语词典 第5版》を参考に意味を解釈する。収録されていない語彙は管見の限りに積義してみた。

C	從命 ^㉔ （听从吩咐）、初會（第一次见面）、呈遞（恭敬地递上）、承問（多谢问候）、辰正（辰时）、飭令（上级命令下级）、催討（催人归还）、蹭蹬（困顿；失意）、春間（春天）、
D	斷令（判断命令）、斷無（绝无）、膽戰心寒（害怕之极）、丁憂（旧指遭到父母的丧事）、季間（四季）
F	福庇（赐福保护）、奉告（敬辞，告诉）、風聞（经传闻而得知）、煩冗（事情烦杂，头绪多）、放行（指岗哨、关卡准许通过）、奉懇（表示恳切的请求）、奉承（逢迎、谄媚，用好听的话恭维人）、奉委（接受委任）
G	高壽 ^㉕ （敬辞，用于问老人的年纪）、閣下 ^㉖ （敬辞，称对方，从前书函中常用，今多用于外交场合）、各執一詞（形容意见不一致）、甘結（旧时交给官府以承担某种义务或责任的保证书）
H	何幸如之（没有比这更荣幸的事了）、何足掛齒（不值得一提）、何以（意思是以何，也有用反问的语气表示没有或不能等意思）
J	簡慢（怠慢失礼）、獎譽（嘉奖名誉）、及至（等到）、舉此一端（单单从这方面来看）、堅請（坚决请求）、藉詞（托词，借口）、竭蹶之虞（困难之处）、吉言（吉利的话）、佳音（指好的消息）、晉謁（敬辞。进见地位高的或辈分高的人）、進益 ^㉗ （学业、品德上的进步）、揀發（清代官制用语。谓在候选人员中挑选分发任用。）
K	口出不遜（说出的话非常不谦逊）、昆仲 ^㉘ （称呼别人兄弟的敬词）
L	理當（应当；理所当然）、列位（位次；次第）、勒令（用命令的方式强制人做事）、立判（马上判处结果）、率允（轻易允诺）
M	謬膺重任（接受重任）、門丁（旧时专门给官府或大户人家看门护院的人）、謬獎（过奖）
N	年逾（年龄超过）、捏詞（编造的言词，谎言）
P	盤桓（徘徊；逗留住宿）、俾伊（俾是使的意思，伊是第三人称的代词）、憑信（指相信；信赖）
Q	啟節（古代使臣出行，执节以示信）、起服（启程）、契厚（解释为交往密切，感情深厚）
R	榮膺顯秩（光荣的获得显赫的官位）、水腳（水路运输的费用）、日新（指发展或进步迅速，不断出现新事物、新气象）
S	上座（古代宴饮礼仪中客人的座次“以左为上，视为首席”）、盛設（盛大的设宴）、掃榻以待（以待把坐卧用具打扫干净等待客人到来）、生事端（产生事故；纠纷）、實不可解（实在令人费解）、設疑（设问）、設若（假如）、素識（认识，相识）、守制（指守孝，遵行居丧的制度。旧时，父母或祖父母去世后，儿子或长孙需在家守孝 27 个月，期间不得婚嫁、应考、上任，现任官员需离任）、水乳（情意融洽无间）、熟諳（熟悉）
T	彈壓（用武力压制）、陶鎔（陶铸熔炼。比喻培育、造就）
W	無足輕重（无关紧要）、無涉（没有牵连；不涉及）、萬安（萬全）、枉顧（敬辞，称对方

	来访自己)、問道於盲(向瞎子问路。比喻求教于一无所知者, 没有助益)
X	些須微意(一点点的微薄的心意)、為然(是这样)、詳報(详细报告)、行文(指的是一个机关单位给另一个机关单位的发文)、幸免之詞(侥幸免祸; 侥幸避免的言辞)、希圖(心里打算着达到某种目的)、先期(意思是在预定的某个日期以前)、形跡(礼貌)、先容(事先为人介绍、吹嘘或疏通)、下懷(指自己的心意)
Y	尤重(极为重视)、於心不安(从心里常觉得不能安定)、雅囑(是应他人嘱咐, 或按照他人指定内容书写的作品)、以慰遠念(以慰对远方人或物的思念)、言明(讲清楚, 说明白)、愚見(谦辞, 称自己的意见或见解。也说愚意)、以為何如(你觉得怎么样)、因何(什么缘故)、伊等(第三人称的复数说法)、驗放(检验放行)、以勤補拙(用勤奋补救笨拙, 含有自谦之意)、一切未諳(对事情不熟悉)、肄業(指在校学习, 指没有毕业或尚未毕业)
Z	周旋(交际应酬)、照會(是指国际间交往的书信形式, 是对外交涉和礼仪往来的一种重要手段)、滋事(为生事, 制造纠纷)、轉飭(转达命令)、札飭(旧时官府上级对下级发文训示)、知會(通知; 告诉)、酌情(按照实际情况和发展态势, 仔细斟酌)、正辦(依法惩办)、總未得暇(总是没有时间)、足見。(表示足以做出某种推断)、造次(轻率)

『官話指南』の本文には「碍難」が2箇所に見れ、意味も異なっている。その用例は以下の通りである。

例 66. 若是劉雲發完清稅項, 海關沒有暫行扣留貨物之例, 此事碍難(“难于”)照辦。(4-7)

例 67. 如今此案據理而斷並無礙難(“为难”)之處, 又何必用此權變之法呢。(4-9)

また、表 3 から本研究で取り上げた文語は「官話問答」に全て用例があり、「使令通話」には全く用例がないことがわかる。そのうち「應對須知」、「官商吐屬」に用例があるのは「不甚、彼處、從命、高壽、閣下、進益、昆仲、足見」のみである。また、文語の使用頻度から見ると、「閣下」が最も高く 59 回、「不甚」と「從命」の 7 回がこれに次いでいる。特に「閣下」は「應對須知」には 1 回「官商吐屬」には 2 回しか現れないが、「官話問答」には 56 回も使用されている。以上のことから、語彙の面から「官話問答」篇は文語的な特徴が極めて強いと言える。

1.3 語彙の北京語特質

『官話指南』の語彙の特徴について多くの研究者が論述している。尾崎実(1969: 256)によると、『官話指南』の語彙は「当時のもっとも新しい北京語を反映している。」と述べ、吳麗君(2008: 181)は“《官話指南》是一部不可多得的北京话口语教材”(筆者訳: 『官話指南』は数少ない貴重な北京語の話し言葉の教材である)と指摘した。六角恒廣(1988、1998、2001)の研究によると、『官話指南』は北京官話の中級レベルの教科書として、当時多数の学校で使われていたという。本章は『官話指南』の全語彙を考察することで、『官話指南』の北京官話教科書として特性を一層浮き彫りにすることができた。

(1) 『官話指南』の北京語語彙

本章は『官話指南』の北京語語彙の再検討を徹底するため、前述の先行研究で扱われた『官話指南』の北京語語彙を統計した上で、9冊の北京語辞典と照らし合わせながら、『官話指南』に現れる北京語語彙、北京語辞典に収録されていないが、北京語の特徴を持っている語彙及び“兒化詞”の面から考察した。北京語語彙の全調査を通し、再検討では重複を除き、先行研究の数量218個より1.5倍以上の北京語語彙を見出した。『官話指南』には合計570個にも達する北京語語彙が使用されていると分った。以上の分析から『官話指南』が北京官話教科書であるという根拠がさらに鮮明になった。北京官話の「誠善本」⁽¹⁾と言われる『官話指南』が時代を超えて影響力を持ち続けた理由の一つに、語彙の面から解答が得られたことになるとも捉えられる。

(2) 卷之四「官話問答」には文語が多い。

『官話指南』にある文語に関する研究は未だになく、本章は文語の考察を通し、大部分の文語が「官話問答」にのみ使用されていることが確認できた。これは「官話問答」が前三巻と異なり、外交交渉、清国官吏との対話など、より正式な場面での問答で構成されているからだろう。一方、「官話問答」の北京語語彙が一番少ないことも明らかになった。また、「應對須知」「官商吐屬」「使令通話」の三巻は市井の会話により構成され、“兒化詞”は言うまでもなく、北京語の特徴を持つ語彙は8割以上がその三巻に集中しているとわかった。

(3) 『官話指南』の北京語語彙から見た北京の文化事情と社会風情。

徐世榮(1990:説明3)は“当代生活日常用語,称“常用土語”;清末至解放前用語,称“旧京土語”。(中略)反映了旧京特有的名物制度,風土人情等。”(筆者訳:現代の日常生活用語は「常用土語」と呼ばれ、清末から解放前までの用語は「旧い北京土語」と呼ばれる。〈中略〉それは旧北京特有の事物制度、風土人情などを反映している)と述べた。『官話指南』にもそのような北京語語彙があり、例えば“當舖、局子、寶局、裁縫舖、成衣舖、草字(旧時礼俗,問人姓名)、茶船兒、放印子、刷牙散、飯莊子、拜匣、封印、打茶圍、估衣舖、盤費、停當(完備)、銀號、掌櫃的、走動(大便)などである。これらの北京語語彙は北京語特有の語彙で、清末の北京の社会風情、文化を反映している。時代の変遷にともない今の北京語からすでに消えた語彙もある。

(4) 『官話指南』の“兒化詞”から見た会話教科書の特性

『官話指南』の“兒化詞”については前述の先行研究がわずかに提示されたのみである。本章では『官話指南』全書を綿密にチェックし、約500個の“兒化詞”を見出した。丁鋒(2000:8-11)は“儿化是北京话最重要的语言特点之一。(中略)‘儿’的附着,增加的只是一种北京口语味儿,所谓‘京味儿’。”(筆者訳:兒化は北京語の最も重要な特徴のひとつである。〈中略〉「兒」を付けることで付加されたのは一種の北京語話し言葉の「味わい」であり、いわゆる「北京風」というものだ)と論述した。『官話指南』には大量の“兒化詞”が使われていることから、この教科書は会話教科書の特徴が強いと言える。

(5) 『官話指南』における北京語語彙の特徴

⁽¹⁾ 『官話指南』の金國璞、黃裕壽「序」に「誠善本」(誠に善本である)と記載がある。

卢小群《老北京土话语法研究》(2017:574)は“俗語是北京土话语汇的最大特点。(中略)在老北京土话中存在着大量生动活泼的词语,它们由老北京特有名词、隐语、俗语、四字格成语、谚语、歇后语、外来语等构成,创造了老北京人俗白浅显的口语。”(筆者訳:俗語は北京方言語彙の最大の特徴である。〈中略〉北京方言には生き生きとした語彙が大量に存在し、それは北京方言特有の名词、隱語、俗語、四字成語、諺、洒落言葉、外来語などで構成され、生粋の北京の人々の俗で平易な話し言葉を創造してきた)と指摘した。『官話指南』に“炕、抱砂鍋、梆硬、打尖、瞎咧咧、踉窩、雲山霧罩的”など北京語特有の語彙、“四字格成语”も多く見られるため、『官話指南』は北京語の特徴が極めて強い教科書であることが分かる。

第二章 『官話指南』の語法的研究(2)

一 文法的側面について

2.1 先行研究の概要とその成果

先行研究で述べたように、『官話指南』の文法の面では太田辰夫(1950)、孫錫信(1997)、張美蘭(2009)、楊杏紅(2014)、山田忠司(2015、2016)などの研究があり、すでに多くの成果が発表されている。しかし『官話指南』に対する全面的な研究は未だ発表されていない。本章は『官話指南』の先行研究を踏まえ、『官話指南』全書の北京語文法を検討する。

『官話指南』に関する最初の北京語文法の研究は太田辰夫「清代の北京語について」(1950)である。太田辰夫(1950)は「北京語に獨特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「嗑(咱)們」、「您」、「倆(仨)」「別(禁止)」、「得(děi 須要)」、「多嗑」、「給(介詞)」、「的慌」、「是(似)的」、「來着」「罷咱」の12語を提示した。その上で、『琉球本官話問答』、《兒女英雄傳》、『官話指南』、九江版『官話指南』等7種の清代北京語資料にそれが現れるか否かについて考察し、『官話指南』は「罷咱」以外は全て存在し、九江版『官話指南』は「您」しかないと指摘した。

張美蘭(2009)は『語言自邇集』、『談論新篇』、『官話指南』、『官話類編』等の北京官話教科書に現れた“VP+去”、“VP+0 不 VP 式”(妳愛這個不愛? 『語言自邇集』⁽¹⁾)、“VP (0) 沒有”(妳上那兒去過沒有? 『語言自邇集』⁽²⁾)、“把…給 VP”、“‘給’字使役句”、“‘給’字被動句”、“叫…給 VP 被動句”、列挙を表す“甚麼(什麼)的 A、B”(還有他的鋪蓋甚麼的,也都叫他一塊兒拿來罷。『官話指南』⁽³⁾)、また“A、B 甚麼(什麼)的”の8項目を取り上げ分析した。『官話指南』には“VP+0 不 VP 式”と列挙を表す“甚麼(什麼)的 B”、また“A、B 甚麼(什麼)的”以外の6項目がある。『官話指南』の中に“VP+去”と“VP (0) 沒有”の用例はそれぞれ26例、9例あると述べた。しかも、“這些句式大部分是清末北京官話中新出現的句式。”(筆者訳:これらの文型はほとんどが清末の北京官話に新たに現われた文型である)(137頁)と指摘した。明治時代の北京官話教科書を用いた北京語の“句法”の研究は極めて少なく、張美蘭の研究は当時の北京語の“句法”の特徴を説明するのに役立つものである。

顔峰、徐麗《〈官話指南〉的代詞》(2011)は『官話指南』の代名詞を人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞に分け、それぞれ12例、32例、18例を挙げて検討した。『官話指南』の代名詞の使用状況を見ると、“《官話指南》所代表的十九世紀晚期的北京話已經和現代漢語非常相近。”(筆者訳:『官話指南』は19世紀末の北京語を代表し、すでに現代漢語とほぼ同じである。)と述べた。

徐麗《〈官話指南〉副詞研究》(2013)は副詞を時間副詞、範圍副詞、頻率副詞、程度副詞、語氣副詞、肯定・否定副詞、情態副詞に分け、それぞれ28個、8個、4個、14個、15個、10個、8個の用例があるという。それらの副詞の分析を通し、“《官話指南》的副詞系統大致和現代漢語相同,其

⁽¹⁾ 張美蘭 2009、144 頁。

⁽²⁾ 張美蘭 2009、147 頁。

⁽³⁾ 張美蘭 2009、155 頁。

中有一些用法，是只有在清代末期出现并使用的，早期的近代汉语中还没有出现过，因此具有特殊的意义。”（筆者訳：『官話指南』の副詞はほぼ現代漢語と同じであり、そのうちある用法は清末にのみ出現し使われ、早期の近代漢語にはまだ現れていないため、特殊な意味を持っている。）と指摘した。

楊杏紅（2014）は『官話指南』を含む明治期の北京官話教科書10冊を対象とし、“詞法”と“句法”の2方面から当時の北京語文法の特徴を考察した。さらに、それ以外の特殊な語彙も提示し、名詞は“后来、底下、目下”、動詞は“短、邀、微”など、指示代名詞は“这儿、这里、那儿、那里、那么、这般”など、人称代名詞は“我们、您纳、他纳”、副詞は“忒、较比、些微、短、竟、所”など、介詞は“解、打、从、自从、由”など、語気詞は“吧、哇、罢、咯”などの語彙の由来、意味、各教科書の用例数を述べた。“‘您纳’作主语和宾语的例子只在《官话指南》中出现。”（筆者訳：「您纳」が主語と目的語になる例は『官話指南』にのみ現れる。）（70頁）と初めて「所」を使った北京官話教科書は『官話指南』であると指摘した。また、“句法”の面では“疑問句”で“多咱、多少、几儿”などを、“被动句”で“被、叫、给”などを、“处置句”で“把、将、给”などを挙げて分析した。“处置句”の“将”は“只出现在《官话指南》中，其他课本中未见到”（筆者訳：『官話指南』にのみ現れ、ほかの教科書には見えない）と述べ、さらにこの“将”は「官話問答」の第五、六、七章にしか現れていないと指摘した。楊杏紅（2014）の研究は明治期の北京官話教科書における文法表現の特徴、使用の実態および『官話指南』における北京語文法の特徴などを理解するのに非常に役に立つと思われる。

山田忠司の〈北京話的特点—围绕太田博士提出的七个特点—〉（2015）と〈太田辰夫の北京話研究〉（2016）、孫錫信の《〈官話指南〉語法拾零》（1997）はともに太田辰夫（1969）の論述に基づいて『官話指南』における北京語文法の特徴を検討し、下述の1)から6)までは『官話指南』にも見られると指摘した。

また、中国語の文法は“句法”と“詞法”^①に分類できるが、本章では統一する為、「文法」で総括する。北京語文法の研究領域において代表的な研究者は太田辰夫、周一民である。本章は先行研究を踏まえて、両氏の北京語文法の研究成果に基づき、『官話指南』における北京語文法の特徴を検討する。

2.1.1 太田辰夫の研究

太田辰夫は北京語の特徴について前述の「清代の北京語について」（1950）、「北京語の文法特点」（1965）、「近代漢語」（1969）などの論作を発表した。太田辰夫（1950）は「北京語に獨特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「咱（咱）們」、「您」、「倆（仨）」、「別（禁止）」、「得（děi 須要）」、「多咱」、「給（介詞）」、「的慌」、「是（似）的」、「來着」「罷咱」の12語を提示した。太田辰夫（1965）は品詞ごとに名詞、代詞、数詞、量詞、形容詞、動詞、介詞、副詞、助詞に分けて「北京語」、「北

^① 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編、松岡榮志 古川裕監訳『現代中国語総説』（2004：244）では「文法〔“語法”〕は語構成論〔“詞法”〕と統語論〔“句法”〕の二分野に分けることができる」と指摘した。

方方言」、「南京官話」及び他の方言との差異を検討し、全 72 項目、100 個以上の語彙を詳論した。以下にその 72 項目の中に北京語の文法特徴を持つ表現を示す。

名詞は「兒、頭、兒個」、形容詞は「多了」、代詞は「咱們と我們、您哪(納)、他納、各人、自各兒、這兒、那兒、往這麼來、往那麼去、多嚒、這程子、這麼着、那麼着、多麼(疑問、感嘆を表す)」、量詞は「一点、一点兒、整、兩人、這些個、那些個、好些個」、動詞は「得(děi)、得慌、上來」、介詞は「起、解、打、趕、給、跟、按、給」、副詞は「抽冷子、冷不防、冷孤丁、老、所、儘自、白、管保、頂、更」、助詞は「咖、來着、似的、得(dé)了、就結了」で、全 51 項目ある。

『中国語学新辞典』(1969)で太田辰夫は「近代漢語」を執筆し、北京語の文法特徴について以下の 7 条を提示した。

- 1) 一人称代詞の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を「咱們」「我們」で区別する。「俺」「咱」などは用いない。
- 2) 介詞「給」を有する。
- 3) 助詞「來着」を用いる。
- 4) 助詞「哩」を用いず「呢」を用いる。
- 5) 禁止の副詞「別」を有する。
- 6) 程度副詞「很」を状語に用いる。
- 7) 「～多了」を形容詞の後ろにおき“ずっと、はるかに”の意を表す。

2.1.2 周一民の研究

周一民は北京語の領域に精力的に研究し、数多くの成果を残した。以下は周一民の《北京口语语法(词法卷)》(1998)と《现代北京话研究》(2002)を踏まえ、『官話指南』の北京語文法を考察する。

周一民(1998:1)の〈自序〉は

本书从研究对象上廓清了范围，彻底排除了不属于口语的书面语因素，以纯净的，包括北京土话在内的北京方言语法作为研究对象。(筆者訳：本書は研究対象の範囲を明確に規定し、話し言葉に属さない書き言葉の要素を徹底的に除外し、純粋な北京土語を含む北京方言の文法のみを研究対象とする。)

と述べている。周一民(1998)は北京語を名詞、形容詞、動詞、数詞、量詞、代詞、副詞、介詞、連詞、助詞、語気詞、嘆詞、擬声詞の 13 種類に分けて、1988 年からの国内外の北京語に関する研究成果を踏まえて、音声、語義、語用の面から北京語文法の特徴を持つ文法現象を解説している。その特徴は他の文法書に見られない解釈、詳細さの面である。

周一民(2002)は“语音”、“词汇”、“语法”、“北京话和现代汉语”等の章から構成されている。第 4 章では“助动词‘得’(děi)、“怎么 VP”特指问句、北京方言的介词、表示否定的‘什么’、北京

話里的‘差点儿没 VP’ 句式”の5つの項目を取り上げた。

周一民 (1998) の文法分類は太田辰夫の研究より更に詳細に分けている。しかし、種類が多くて、本節では北京語の文法特徴を持つ表現のみを整理する。『官話指南』の本文には音声表記がないため、音声による北京語文法の特徴を識別する項目は扱わないことにする。太田辰夫と周一民が扱った北京語の文法特徴を持つ表現の対照表を作成すると表4の通りである。

しかしながら、「來着」については太田辰夫と周一民は同様な意味に解釈しているが、前者は助詞の項目下に収録され、後者は語気詞として収録されている。王力《中国現代語法》(1985:222) “‘來着’表示的是‘近過去貌 一凡表示事情过去不久者，叫做‘近過去貌’。” (筆者訳：「來着」は「近過去相」を表す、つまり事柄が過ぎ去ってすぐのことを表すので「近過去相」と呼ぶ) と述べ、呂叔湘《中国文法要略》(2002:194) は“也将‘來着’看作表时态的助词，把其归为‘指一个动作已经有过’的‘后事相’” (筆者訳：「來着」も時態を表す助詞と見なし、これをひとつの動作がすでに発生した「後事相」に分類する) と述べた。このため、本研究は太田辰夫、王力、呂叔湘の論説にしたがって、“來着”を助詞に分類することにした。また、周一民 (1998:288) は擬声語について提示したが、“北京口语拟声词的某些发音超出了普通話的语音系統。不過就總體而言，擬聲詞採用的語言形式基本上还是在普通話语音系統的范围之內的，超系統的现象所占的比例并不很多。”と主張し、例えば biā (用力貼紙聲)、duàng (撞擊聲)、piāng (打槍聲) などの擬聲語は共通語の音韻體系と異なるが、北京語特有の表現であると指摘した。周一民の説により、上述の北京語特有の擬聲詞以外に、共通語とほぼ同じであるため、ここには表4に入れないことにする。また、『官話指南』には音声表記がないため、太田辰夫と周一民が挙げた“這 (zhèi)、那 (nèi)、在 (zài)、比 (pǐ)” 及び北京語において音変が発生する例は確認できず、判断に迷うものも表4には入れていない。

表4 太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)が扱った北京語文法表現の対照表

品詞 ⁽¹⁾	著者	文法表現
名詞	太田辰夫	兒、兒個。
	周一民	前綴 (接頭辭) ⁽²⁾ : 老。後綴 (接尾辭) : 兒。構詞後綴 : 們兒。
動詞	太田辰夫	得 (děi)、上來。
	周一民	趨向動詞 (方向動詞) : 起去、起下來、起出去。重疊式 (重ね型) : AB・AB式。助動詞 : 得。後綴 (接尾辭) : 達、巴。VP+去、來 VP 來。
形容詞	太田辰夫	…得慌、多了。
	周一民	重疊式 (重ね型) : AA 兒、的慌 (慌)。
量詞	太田辰夫	一点、一点兒、整、兩人、這些個、那些個、好些個。

⁽¹⁾ 表4の品詞分類は太田辰夫、周一民の論説によるものである。

⁽²⁾ 括弧内は括弧外の漢語文法と対応している日本語の呼び方である。“程度副詞”のように日本語と中国語は同じの呼び方の場合は、特に説明がせずに、或は周一民、太田辰夫の呼び方を参考にし、注で説明する。

	周一民	<p>集合量詞^①：對兒、身兒。</p> <p>部分量詞^②：箍筋兒、箍揪兒。</p> <p>不定量詞^③：丟丟兒、抠抠兒。</p>
代詞	太田辰夫	<p>人称代詞（人称代名詞）：咱們、我們、您哪（納）、他納、各人、自各兒。</p> <p>方向代詞（指示代詞）：這兒、那兒、往這麼來、往那麼去。</p> <p>時間代詞：多咱、這程子、這麼着、那麼着、多麼（疑問、感嘆を表す）</p>
	周一民	<p>人称代詞（人称代名詞）：咱們、恁、我們、您、丫、別人兒、人家。疑問代詞：多暫、多前兒、多晚兒、哪門子、怎麼着。時間代詞：這程子、那程子、那暫兒、這當兒。処所代詞（場所を表す代詞）：這兒、那兒、哪兒。情狀代詞（動作、行為を表す代詞）：這麼着、那麼着、這麼樣兒、那麼樣兒。反身代詞^④：自個兒、個個兒。</p>
副詞	太田辰夫	抽冷子、冷不防、冷孤丁、老、所、儘自、白、管保、頂、更。
	周一民	<p>程度副詞：忒、倍兒、較比。頻率副詞（頻率を表す副詞）：從新、緊着、緊着力兒、一劲儿、隔三差五兒。情狀副詞：愣、瞎、白、瞅不冷子、麻利兒、敞開兒、好生兒。語氣副詞：敢情、許是、橫是、興許、高低、准保、管保、保不齊、興許、整个兒、好歹、归齊。否定副詞：別。範圍副詞：一塊堆兒、攏共、歸了包堆、統共、光、淨。時間副詞：立馬兒、壓根兒、不差嘛兒、接茬兒、且。量度副詞（概略副詞）：玄玄兒、將將。否定副詞：甬。処所副詞（場所を表す副詞）：滿市街、滿處兒。</p>
介詞	太田辰夫	起、解、打、趕、給、跟、按、給。
	周一民	<p>処所介詞：挨、跟。起点介詞（起点を表す介詞）：打、解、由、起、自從、從、且、打从。処置介詞（処置を表す介詞）：管。目標介詞：奔、照、朝、冲。憑藉介詞（動作の依拠を表す介詞）：靠、就。時間介詞：趕、等。範圍介詞：論。施事介詞（受け身を表す介詞）：叫、給。工具介詞：使。依從限制介詞（“依從的路線”を表す介詞）：沿、掙。目的原因介詞：冲、奔。対象介詞：問、管。施事介詞：让、叫。遵照介詞（遵從を表す介詞）：按、依、照。</p>

① 周一民（1998：146）によれば、集合量詞は“用來计量两个以上的多数事物。”（筆者訳：二つ以上の事物を計る際に用いる）と解説している。

② 周一民（1998：146）によれば、部分量詞とは“用來计量不足一个或不论个（不可数）的事物（筆者訳：一個に足りないか、一個一個数えられない事物を計る際に用いる。）”。例如：块兒（面包）、滴（水）と指摘した。

③ 周一民（1998：146）によれば、不定量詞は“也称约量词。计量相对少量的事物。”（筆者訳：また约量詞と言い、少量的な物を計る際に使う。）と解説している。

④ 周一民（1998：160）は“反身代词在句子里指前面已出现的表人代词。它可以复指三身代词中的任何一个，可以表示单数，也可以表示复数”（筆者訳：反身代詞は文章の中において前に現れた人称代名詞を表す。それは一人称、二人称、三人称のいずれも指し、単数でも複数でも表すことができる。）と解説している。

助詞	太田辰夫	不咖、(過去の追憶を表す助詞) 來着、(類似を表す助詞) 似的、(文末に用いる助詞) 得 (de) 了。、就結了。
	周一民	結構助詞(構造助詞) : 的、地、得、似的。約略助詞 ¹ : 郎噹兒、伍的、拉多。時體助詞 : 來着
連詞 (接続詞)	太田辰夫	跟
	周一民	茲、茲要是。
語気詞	周一民	哪、哈。

表4に挙げた語のうち一覧表で重複するものを除くと、北京語の文法特徴を持つものは142語となる。そのうち“的慌”、“咱們”、“多暫”は『官話指南』に見えないが、用字の異なる「得慌」、「俺們、咱們」、「多噲、多咱」は『官話指南』にある。ただ、『官話指南』にないものとしては“們兒、起出去、兩人、瞅不冷子、麻利兒、好生兒、郎噹兒、伍的、拉多、箍節兒、箍揪兒、哈”などがあげられるが、表4の半分を占めている。特に周一民が提示した語の多くは『官話指南』にないことが判明した。これは周一民の文法論は現代北京語にも深く関わっていたと関係がある。

また、楊杏紅(2014)は明治期の北京官話教科書10冊の文法表現を考察したが、やはり『官話指南』にない表現についてはほとんど言及されていない。このことから、周一民(1998)が提示した北京語の文法特徴を持つ表現は19世紀末においてはあまり使用されていなかったか、あるいはまだ出現していなかった表現を含み、そのために『官話指南』では用例がない語も多くなったと考えられる。

また、太田辰夫(1969)が指摘した北京語文法特徴の7条について、周一民(1998)では1)「一人称代詞の包括形と除外形を「咱們」「我們」で区別する。「俺」「咱」などはいない。」、5)「禁止の副詞“別”を有する」、3)「助詞“來着”を用いる」及び2)「介詞“給”を有する」の4条に言及しているが、4)「助詞“哩”を用いず“呢”を用いる。」、6)「程度副詞“很”を状語に用いる。」、7)「“~多了”を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。」の3条には触れていない。周一民(1998)では“呢”を“語気詞”に分類し、助詞として扱っていない。程度副詞“很”は“普通話”表現として省略され、“~多了”は“句法”でもあるので扱っていなかったと考えられる。両氏の説を一覧表にして比較すると、太田辰夫(1950、1965、1969)が挙げた北京語の文法特徴の方がよりはっきりとした北京語の特徴を有し、典型的な表現が多い。

2.1.3 その他の研究

卢小群《老北京土话语法研究》(2017)の研究にも太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)が提示した文法事項が大量に収録された。

卢小群(2017)は“北京語語音”、“形态”、“词法”、“句法”、“构词和句法的语用表达”の5方面

¹周一民(1998:257)は“約略助詞是附着在名词或名词性词语的后面,表示约简省略的助词。”(筆者訳:約略助詞は名詞、名詞性語彙の後ろに付き、おおよそ省略の意味を表す助詞。)と指摘した。

から“老北京土話”を研究した。“词法的特点”、“词类特点”、“句法的特点”はそれぞれ“从构词形态上看，主要采用重叠和语缀的构成形式。”、“老北京土話的形容词构造形式复杂，存在大批四字格的形式”、“语序倒置”、“老北京土話基本不用‘把’字句、‘被’字句，使用表示处置的‘把’字句、和表示被动的、‘被’字句时，只在文学作品中的口语文体里出现。”（筆者訳：構造形態から見ると、「主に重ね型と接辞を採用している。」「古い北京の土語には“把”構文、“被”構文はほとんど使わず、処置を表す“把”構文と受身を表す“被”構文を使うのは文学作品の口語文のみである。」）などの特徴があると述べた。卢小群（2017）の北京語文法は周一民の研究が提示した文法と類似している。またその文法表現は北京語文法に属しているが、太田辰夫（1950、1965、1969）の研究と比べ、百年前から明治期の官話教科書にある北京語の文法特徴として用いられていた副詞の「所」、介詞の「解」などが卢小群（2017）に収録されていない。しかしながら、この著作は10000語以上の“北京土話”を収録し、最新の北京語研究における力作と言える。

2.2 文法の再検討

本節は表4の太田辰夫と周一民の研究結果を踏まえ、『官話指南』に見える北京語の文法特徴を持つ表現を品詞により分けて、『官話指南』の各巻における使用頻度とあわせて表5に示す。

表5 『官話指南』の各巻における北京語文法表現の分布と使用頻度

語彙		各巻					総数
		應對須知	官商吐屬	使令通話	官話問答		
名詞	前綴（接頭辞）：老	1例	78例	115例	76例	270例	
	後綴（接尾辞）：兒	73例	127例	223例	34例	457例	
	兒個	2例	28例	18例	2例	50例	
動詞	趨向動詞（方向動詞）：起去				1例	1例	
	趨向動詞（方向動詞）：起下來		1例		1例	2例	
	VP+去	2例	5例	9例	9例	25例	
	上來		1例	1例		2例	
	AB・AB式		1例	1例		2例	
	後綴（接尾詞）：達		5例			5例	
	得（děi）	5例	43例	48例	8例	104例	
形容詞	重疊式（重ね型）：AA兒			1例		1例	
	重疊式（重ね型）：	2例	1例	7例		10例	

	AA儿 tə					
量詞	一點兒	6 例	4 例	9 例	5 例	24 例
	整				1 例	1 例
	這些個	1 例	3 例	2 例		6 例
	那些個		3 例	8 例	1 例	12 例
	好些個	1 例	2 例	2 例		5 例
人稱代詞	我們	1 例	138 例	6 例	112 例	257 例
	咱們(僭們)	3 例	36 例	2 例	17 例	58 例
	您納	6 例	13 例			19 例
	他納		1 例			1 例
反身代詞	自各兒			2 例		2 例
	各人	1 例	5 例	3 例		9 例
	人家	2 例	12 例			14 例
	自己	3 例	22 例	2 例	2 例	29 例
疑問代詞	多咱(多嗒)	1 例	14 例	6 例	1 例	23 例
指示代詞	這程子		2 例			2 例
	這麼着	5 例	96 例	1 例	6 例	108 例
	那麼着		1 例	2 例	1 例	4 例
	多麼		3 例	1 例		3 例
	這兒	3 例	18 例	17 例	2 例	40 例
	那兒	4 例	9 例	14 例	8 例	35 例
	往這麼來				4 例	4 例
範圍副詞	所		7 例			7 例
程度副詞	老	2 例	3 例	6 例		11 例
	頂	1 例	1 例			1 例
	更	1 例	12 例	3 例	5 例	21 例
	白		1 例			1 例
否定副詞	別	4 例	11 例	17 例	7 例	39 例
語氣副詞	敢情		5 例	2 例		7 例
	管保		2 例		1 例	3 例
時間副詞	抽冷子	1 例	1 例			2 例
	冷不防	1 例				1 例
	冷孤丁		1 例			1 例
	儘自	1 例				1 例

頻率副詞	從新			1 例		1 例
起点介詞	打	1 例	1 例	3 例		5 例
	解		8 例	2 例		10 例
	由				15 例	15 例
	從	1 例		2 例		3 例
	自從				2 例	2 例
	起	1 例	38 例	5 例		44 例
処置介詞	給	1 例	3 例			4 例
目標介詞	奔		1 例			1 例
施事介詞	叫	1 例	3 例			4 例
	被		5 例	4 例	1 例	10 例
時間介詞	趕	1 例	108 例	15 例	16 例	140 例
	等	2 例	20 例	7 例	10 例	39 例
範圍介詞	論	1 例	1 例	3 例		5 例
遵照介詞	按			1 例	5 例	6 例
	依	1 例	3 例		2 例	6 例
	照		1 例	1 例		2 例
助詞	不咖		1 例	1 例		2 例
	得 (dé) 了	1 例	4 例	2 例		7 例
	就結了		1 例	1 例		2 例
	來着	2 例	15 例	4 例	1 例	22 例
語気詞	哪	10 例	44 例	24 例	14 例	92 例
補語	…的慌		1 例			1 例
各卷総数		156 例	974 例	604 例	370 例	2004 例
各卷字数		3003 字	28299 字	10280 字	12631 字	54213 字
各卷頻度		5.1%	3.4%	5.8%	2.9%	3.7%

表5の各巻総数は単語、文字ともにあり、各巻字数は文字のみを取り上げたため、各巻頻度のパーセンテージは厳密とは言えない。各巻において使用頻度のパーセンテージから見てからおおよその傾向は以下の通りである。「應對須知」、「使令通話」には北京語の文法特徴をもつ表現が一番多い。「官話問答」の北京語の文法表現が一番少ないことがわかった。また、「應對須知」には“後綴‘兒’”が各巻総数の約半分を占めて、そのほかの文法表現は「應對須知」に1、2例しかない。このことから、「應對須知」の口語性はより強いということが明らかである。

表5の文法表現について詳細分析は以下の通りである。

2.2.1 名詞、動詞、形容詞、量詞、代詞

(1) 名詞

1) 前綴（接頭辞）“老”

周一民（1998：8）は、北京語の“前綴‘老’”は“语义已经虚化，一般没有‘年纪大’的意思。”（筆者訳：接頭辞“老”は語義がすでに虚化となり、通常“年纪大”という意味がない。）と指摘した。『官話指南』にも“前綴‘老’”は用いられ「老爺、老兄、老弟、老伯大人、老父台」の5語があり、それぞれ154例、65例、42例、1例使われている。

2) 後綴（接尾辞）“兒”

“兒”は北京語の重要な特徴である。

周一民（1998：10）は“‘儿’后缀是名词的构词标志。绝大多数带‘儿’后缀的词都是名词。一些动词、形容词、加上‘儿’后缀以后也就变成了名词。”（筆者訳：“儿”の接尾辞は名詞の印である。“儿”の接尾辞を伴う語彙はほとんど名詞である。一部分の動詞、形容詞は“儿”の接尾辞を伴った後、名詞に変わる。）と述べた。太田辰夫（1965：40）は“後綴‘兒’”を「名詞接尾辞<兒>」と称した。

『官話指南』には504例の“兒化詞”があり、重複を除くと168個となる。そのうち名詞が128個を占めることから、周一民の指摘は『官話指南』にも適応すると考えられる。また、周一民が提示した“們兒”は『官話指南』には使われていないが、“插入合成词中的语缀‘儿’”の「娘兒們」は1例確認することができた。これは北京語の俗語である^①。

また、杨杏红（2014：31）は明治時代の北京官話教科書について、これらの教科書は“是为了日常实际需要而编写的，其语言十分口语化，所以，我们能从中发现大量其他书面文献中少有的词缀的使用形式。”（筆者訳：日常生活の需要に応じて編集されたもので、その言葉は非常に口語的であるため、ほかの書き言葉の文献では珍しい「詞綴」の使用例を多く見出すことができる。）と指摘した。『官話指南』には重複を含む766例使用されていることから、“詞綴”の使用は実に豊富だと言える。同時に『官話指南』が口語教科書である根拠を更に明確にしている。

3) “兒個”

太田辰夫（1965）では“兒個”の用例のみを挙げ、解説していない。賈采珠（1990）、杨杏红（2014）、卢小群（2017）にもそのことについての論述が見えない。『官話指南』には“前兒個”、“昨兒個”、“明兒個”、“今兒個”、“大前兒個”の用例がある。丁锋（2000：13）は“活活兒的”、“一層一層兒的”、“細細兒得”等のような“兒的（得）”の用法について、“‘儿’貌似因‘的’而存在的语言成分，但它不是‘的’的附属，而是附着在前面的词或词组后，共同起修饰作用，表达口语体功能的。（中略）可见，‘儿’不是一种固定组合。”（筆者訳：「兒」は「的」のために存在している言語成分のように見受けられるが、「的」の付属ではなく、直前の語あるいはフレーズの後ろに付いて、共

^① 卢小群 2017、163 頁。

に修飾の役割を果たし、口語体の作用を表している。〈中略〉これにより「兒」は固定の組み合わせではないと分かる)と指摘した。丁鋒(2000)の結論によると、“兒個”は固定の組み合わせではなく、単に前の語彙を修飾し、各々が個別の存在であると言えよう。また、表5を見て分かるように名詞の多くが“兒化詞”で、さらに「使令通話」に用例が集中していることから、「使令通話」の巻において北京語特徴が非常に著しいと言える。

(2) 動詞

1) 趨向動詞(方向動詞) “起去、起下來”

钟兆华〈动词“起去”和它的消失〉(1988)、周一民(1998)、卢小群(2017)はともに“起去”を北京語の俗語と認定しているが、いずれも釈義はない。“起去”は現代北京語ではすでに使用されなくなった。『官話指南』には“起去”は1例のみで、“起下來”は2例である。周一民は“起下來”を取り上げたが、解釈は加えていない。次の用例を見ると、“起去”と“起下來”はそれぞれ“拿走”と“拿下來”の意味を表す。

例 68. 趙錫三藉詞挑剔，不肯將貨物起去。(4-8)

(趙錫三は言を左右に托して跳付け、荷物を引取することを承知しない。)

例 69. 叫他一個跟人帶着到船上去，把行李起下來。(2-21)

(彼の一人の従僕を付けて船にやり、手荷物を卸した。)

例 70. 劉雲發用撥船，將貨物起下來裝上了，運到海關門口候驗。(4-7)

(劉雲發は荷船に貨物を卸して積み換へ、税關に運んで検査に出し。)

2) “VP+去”

周一民(1998)では“VP+去”を北京語文法として提示したが、詳細な説明はない。太田辰夫(1965:49)は“VP+去”を連動句と見なし、「その多くは目的をあらわす」と指摘した。陆俭明〈关于“去+vp”和“vp+去”句式〉(1985:27)によると、北京語文法では主に“VP+去”を使い、西南官話、下江官話、闽方言、粤方言、湘方言、吴方言などでは主に“去+VP”を用いるという。張美蘭(2009:156)は“VP+去”は“是清末北京官話特點的句式”(筆者訳:清末において北京官話特徴を有する文型である。)と述べた。『官話指南』には“VP+去”の用例が25例あり、表5から「使令通話」と「官話問答」にその例が多いことが分かる。

例 71. 你上那兒去。我想上張老師那兒拜客去。(1)

(わたくしは張先生の處へ訪問に往かうと思ひます。)

例 72. 我這兩天還要到府上給老弟送行去哪。(2-3)

(私はこの一兩日中に尚ほお宅にお別れに参ります。)

例 73. 那麼我出城買去罷。(3-19)

(それでは私は城外に買ひに参りませう。)

3) “上來”

太田辰夫 (1965 : 48) は「上來」について「状態の完成への接近」と説明している。『官話指南』には2例ある。

例 74. 這個時候天也就黑上來了，他就找了一個破廟將就着住了一夜。(2-15)

(その間に空も暗くなって来たので、彼れは一つの荒れ寺が捜し出し、我慢して一夜を明した。)

例 75. 往後你瞧着，多咱這罐子裏頭的茶葉完上來了，就是我不告訴你說你就續上罷。(3-2)

(今後おまへ氣を付けて、何時でも、この罐の茶が無くなりかけたならばおれが言ひ付けなくても、お前直ぐに足して置け。)

「天黒上來了」と「茶葉完上來了」はそれぞれ“天快黑了”と“茶葉快用完了”の意味を表す。

4) “動詞 AB・AB 式”、後綴 (接尾辞) “達”

周一民 (1998 : 76) は北京語の“AB・AB 式重叠在時間上表现出時量短的语法意义” (筆者訳 : AB・AB の重ね型は、時間上に短いという文法意義を表す。) と指摘した。『官話指南』に AB・AB 式は2例ある。また『官話指南』に“後綴達”の例は“溜達”しかなく、その5例は全て「官商吐屬」にある。『官話指南』にある AB・AB 式の用例は以下の通りである。

例 76. 不過是在家裏坐着也是悶得慌，睡晌覺起來也是不舒服，莫若出去溜達溜達倒好。(2-11)

(唯内に居ても退屈でたまらないし、午眠をして起きると氣分が宜くないものですから、いっそ出掛けてぶらっく方が可からうと思っただけの事です。)

例 77. 他原來是我們的街坊，人很聰明，可是向來沒當過跟班的，所以得叫他慢慢兒得歷練歷練纔行哪。(3-1) (彼は原来私共の隣の者で、人間は至極伶俐です、併しこれまで奉公をしたことがありませんから、だんだんあれに稽古させるやうにしなければなりません。)

例 78. 趕涼快殼了，我這纔溜達着回來了。(2-11)

(十分涼しくなってからやっとぶらぶら歸つて来たのです。)

例 79. 趕第二天，我們就在店裏吃完了飯，把那兩匹馬，寄放在店裏了，我們倆就槓着槍溜達着上山去了。(2-15) (翌日になつて私共は旅館で飯を食べてしまつて、その二頭の馬は旅館に預けて置いて、私共兩人は鐵砲を擔いでぶらぶら山に登りをした。)

5) “得 (děi)”

太田辰夫 (1965 : 46) によると、「得 (děi)」は「時間や費用がかかる」の意味を表わし、北京語である。周一民 (2002 : 129-130) は北京語には「得 (děi)」と「得 (dé)」のどちらもあるが、「得 (děi)」は助動詞であり、“应该、要、会”の意味を表し、「得 (dé)」は“许可；能；便于、宜于”の意味を表す。『官話指南』には“便于、宜于”という意味の用例はないが、そのほかの例

は以下の通りである。

例 80. 那總得請大夫好好兒治一治就得 (dé) 了。(1)

(それはどうしてもお医者をお呼びになってよくよくお手あてをなさらなければいけません。)

例 81. 但是我有要緊的事, 沒法子得 (děi) 出門。(1)

(ですか、大切な事があるものですから、仕方なしに外出しなければなりません。)

例 82. 舖保自然是得 (děi) 有的。(2-1)

(保証人は勿論なければなりません。)

周一民 (2002 : 129) は“得”の用法について、“通常总是否定居多”と述べた。『官話指南』には2例ある。

例 83. 他把小的搭出去說了會子話, 所以就悞了這麼半天, 沒得稟知老爺。(3-13)

(私を外に連れ出して暫らく話をして居ましたので、このやうに長く暇取つて、旦那に申上げることが出来ませんでした。)

例 84. 只因家事煩雜, 還沒得過去拜訪, 今日一見深慰下懷。(4-16)

(今日御目に懸り誠に深く恐悦に存じます。)

動詞の使用頻度をみると、『官話指南』においては“VP+去”、“得 (děi)”の使用が最も多い。特に“得 (děi)”の用法はほとんど「官商吐屬」、「使令通話」に集中し、話し言葉の特徴がより強い表現である。

(3) 形容詞

1) 重疊式 (重ね型) “AA 兒”、“AA 兒 tə”

北京語の「形容詞重疊式」は、「AA」、「AA tə」、「AA 兒」、「AA 兒 tə」⁽¹⁾の4つの類型がある。『官話指南』には「AA 兒 tə」が7例あり、「AA 兒」が1例ある。

例 85. 依我說不如把他活活兒的埋了就完了。(1)

(私の考へでは、彼を生埋めにでもしてお仕舞にした方がよいと思ひます。)

例 86. 牙沒了, 甚麼都嚼不動了, 燉的爛爛兒的纔好哪別弄的那麼挺梆硬的不能吃。(1)

(歯がなくなつて何もかめない、煮るがよろしい。ガヂガヂ硬くて食はれないやうに煮てはいけない。)

例 87. 後來是因為他挨着一個吃烟的朋友, 慢慢兒的可就吃上癮了。(2-25)

⁽¹⁾ 「AA」、「AA tə」、「AA 兒」、「AA 兒 tə」はそれぞれ「慢慢、狠狠」、「懶懶的、緊緊地」、「薄薄兒、慢慢兒」、「慢慢兒的、鼓鼓兒的」のような例を指す。「A」は「A」の一声 (陰平調) を表す。

(其の後或阿片の好きな友人に近づいて、しまひには癮者になるまで吸ひ上げたのです。)

例 88. 他原來是我們的街坊，人很聰明，可是向來沒當過跟班的，所以得叫他慢慢兒得歷練歷練纔行哪。(3-1) (彼は原来私共の隣の者で、人間は至極伶俐です、併しこれまで奉公をしたことがありませんから、だんだんあれに稽古させるやうにしなければなりません。)

例 89. 你告訴他說，得留點兒神洗，還得多用點兒粉子漿，噴上水，叫他好好兒的拿熨斗熨一熨，那纔能周正了。(3-5)

(お前さう言つてやれ、少し氣を付けて洗濯して、今少し澤山糊粉を使って、水を吹つかけて、十分に火熨斗でははずと能くきちんとなくなるのだつて。)

例 90. 昨兒個你拿我的茶葉，我悄悄兒的進來瞧見了。(3-15)

(昨日おまへがおれの茶を取つたのを、おれはそつと這入つて来て見たのだ。)

例 91. 你歇歇兒去罷。(3-18)

(おまへ行つて休むがいい。)

表 5 から見ると、北京語の文法特徴を持つ形容詞は『官話指南』には少なく、しかも「使令通話」に集中している。

(4) 量詞

太田辰夫 (1965) が挙げた量詞のうち「一點兒、這些個、那些個、好些個、整」のみが『官話指南』に見え、これらは北京語の文法特徴を持つ語であり、南京官話の場合は「一些、這些、那些、好些」を用いた。また、太田辰夫 (1965 : 45) によると、下の「家母今年整六十。」のような「整」は北京語の使い方であるが、南京官話は「～整」のように数詞の後におくことがあると述べた。

例 92. 再去吩咐廚子，不必給我預備飯，就給我熬一點兒粳米粥，要爛爛兒的，可別把米粒兒弄碎了，要不稀不稠勻溜的纔好。(3-7)

(それから又料理人に、おれの飯の仕度はするに及ばない、只おれに少しうる米の粥を炊いてくれるやうに言付けてくれ、柔かくよく煮えたのが宜い、併し飯粒が碎けないやうにして餘りうすくもなく濃くもなく、むらのないのが好い。)

例 93. 就像甚麼小筆筒、小印色盒子、小燻燈，這些個小物件。(2-7)

(それは何か小さな筆立か、小さな肉池か、小さな手燭の様な、小道具さ。)

例 94. 貨怎麼短的，那些個夥計們都說不知道。(2-23)

(品物がどうして不足したのかと聞いても、それ等の手代共は誰も皆知りませんと言ふ。)

例 95. 他又封打了眼了，不但不能賺錢，倒還得賠出好些個錢去。(2-20)

(其人が更に入札に見損をするので、金儲が出来ない許りでなく、却て尚ほ澤山の金を持出さなければならぬことになります。)

例 96. 家母今年整六十。(4-15)

(母は今年丁度六十歳になります。)

表5にあるように量詞は全48例あり、使用頻度が最も高いのは“一点儿”である。特に「使令通話」に使用される傾向が確認できる。一方、周一民(1998)が提示した“箍節兒、箍揪兒、抠兒”のような北京語の文法特徴が強いものは『官話指南』には見られない。

(5) 代詞

表5から見ると、代詞の用例はほとんど「官商吐屬」にある。「官話問答」には「包括形を表す“僭們”」と「除外形を表す“我們”」以外の代詞は極めて少ない。

1) 人称代詞(人称代名詞)

① “咱们、我們”

太田辰夫(1969)が主張した「包括形を表す“僭們”」と「除外形を表す“我們”」の用法は周一民(1998)も言及しているが、『官話指南』でも“咱们”ではなく、“僭們”を使用している。そして、『官話指南』に262例の「我們」があり、そのうち除外形は257例で、包括形は5例のみ、「應對須知」に4例、「官話問答」に1例ある。

包括形を表す“僭們”

例97. 所有僭們逛過的這些個名勝地方，就是我們今兒晌午到的那座山上景致好的很。(1)

(我々がこれまで遊びに往ったあらゆる名所の内で、我々が今年日正午に行ったあの山上の景色こそ非常によろ御座います。)

例98. 這是甚麼話呢，僭們這樣兒的交情您用這點兒銀子，還提甚麼利錢哪。(2-9)

(これ又、何を仰つしゃるのですか、お互にかう御懇意な間柄なのに、あなたがこれ位の金を御使ひな猿のに、それでも尚利息が戴けませうか。)

例99. 僭們今兒個這麼空喝酒也無味，莫若僭們都斟滿了滑幾拳罷。(2-39)

(我々は今日この様にただ酒ばかり飲んで居ては趣味がない、それよりは皆波々ついで拳をうたうではないか。)

除外形を表す“我們”

例100. 我們有個親戚前幾天打圍去了，不但沒打着甚麼，倒把他的一匹馬丟了。(2-15)

(私共の或親戚が数日前獵に行つたのですが、何も獲物な無つたばかりでなく、彼れの一匹の馬まで無くしてしまひました。)

例101. 我們老爺下天津去了。(2-18)

(手前共の旦那は天津へお出てんりました。)

例102. 幸虧我們舍弟身上有一個銀兜子裏頭裝着有十幾兩金子，還有幾十兩銀子沒丟。(2-28)

(幸にも私共の舍弟の身體に一つの財布があつて、内には幾両の金と尚數十両の銀がなくならないでありました。)

ここに挙例したものは少ないが、その用例から見ると、“我們”の後ろに「老爺、先伯、大人、領事、舍親、局子、道台」などの第三者の名前、人称、場所などが付く場合、必ず「除外形を表す“我們”」を表示することが分かった

② “您納、他納”

太田辰夫(1965)は「您納」を北京語の文法特徴を持つ語として指摘しているが、周一民(1998)は「您納」については述べていない。楊杏紅(2014:70)は“‘您納’作主語和賓語的例子我們只在《官話指南》中發現”(筆者訳:「您納」が主語と目的語になる例は『官話指南』にのみ現れる。)と指摘した。調査により、『官話指南』には19例の“您納”があり、約330例の“您”がある。そのために、時代の変遷につれて、清末民初から「您納」が「您」に交替していき、次第に「您納」が消滅していく傾向が見られる。

例 103. 您納貴姓。賤姓吳。(1)

(あなたのお名前は? 吳と申します。)

例 104. 您納可以一塊兒搭伴兒去，與我也很方便了。(1)

(あなたが一緒に連れ立ってお出でになることが出来れば、私に取つて大變好都合です。)

例 105. 您納說話聲音太小，人好些個聽不清楚。(1)

(あなたお話聲が餘り小さくて、外の人がはつきり聞こえないことが澤山あります。)

例 106. 好啊，富老爺倒好。好啊，您納買賣好啊。(2-14)

(無事でございます、富旦那にも御機嫌よろしうございますか。)

例 107. 請問您納是老爺先瞧，是太太先瞧。(2-37)

(伺ひますが、旦那を先に御覽下さいますか、奥様を先に御覽下さいますか。)

例 108. 我告訴明白您納，您給的這茶錢，並不是我落，也不是我那個朋友得，是給我的那個朋友的底下人們大家分的。(2-1)

(私はわかるやうにお話し致しませう、あなたのお遣りな成るこの茶錢は決して私の手に入れるものではありませんし、又私のあの友人が取るのでもありません、これ私のあの友人の召使等大勢に分けてやるのです。)

例 109. 我請問您納，像您這貴行都是學幾年哪。(2-14)

(御尋ねするが、君の様な職業は何年位で覚えられるのかネ。)

また「他納」も1例ある。

例 110. 我們先伯就到後頭院裏出恭去了。趕他納到了後頭院裏一瞧，有三間屋子，一間是茅房，那兩間是堆草料的屋子。(2-29)

(私共の伯父は後の庭に大便に行つてあたりを見廻すと、三間の一棟がある、一室は廁で二室は秣部屋でした。)

张卫东译《语言自述集：19 世纪中期的北京话》（2002:129）は“您 nin²，更普遍的是说：你纳 ni-na，这又是你老人家 ni lao jên chia 的缩略形式。”と指摘した。杨杏红（2011：99）の主張によると、“你纳”は“你老”から派生し、「他纳」の出現は恐らく“‘你纳’的类推”であるという。また、『官話指南』には「你老」が 1 例ある。太田辰夫（1965：41-42）は「北方語では<你老>が用いられるが北京語では用いない。」と指摘し、例外もあるようである。

例 111. 你老別理他，他自然就不來了。(1)

(あなたはいつまでも彼に構つてはいけません、さうすると自然に来なくなります。)

2) 反身代詞

① “各人、自各兒、自己”

周一民（1998）では、“自个儿”、“自己”、“自己个儿”、“个个儿”を“反身代詞”としている。北京語でよく使われているのは“自个儿”、“个儿”は「gèr」と発音する。『官話指南』では“自个儿”、“自己个儿”、“个个儿”はともに使用されていないが、「自己」、「各人」、「自各兒」はあり、それぞれ 29 例、9 例、2 例使用されている。“自各兒”は“自个儿”と同じ意味で、文字が異なるのは用字の問題にすぎないと思われる。

表 5 から反身代詞 40 例のうち“自己”がより頻繁に使用され 40 例の半分以上を占めていることが分かる。当時“自己”がすでに「自称の代名詞」の主流になっていたと言える。また、太田辰夫（1965：42）は「自称の代名詞」の“自己”は南京官話だと指摘しているが、北京語官話教科書の『官話指南』には大量の用例があることから、“自己”は恐らく南北共通表現であったと考えられる。詳細は第三章の九江版『官話指南』の研究で論じる。

例 112. 給你鑰匙，你自各兒開罷。(3-10)

(お前に鍵をやる、お前自分で開けろ。)

例 113. 那是我各人買的。(3-15)

(それは私自分で買ったのです。)

例 114. 這個看園子的，是僇們給他找啊，還是他各人找呢。(2-13)

(その畑番は私共が其の人に雇つてやるのですか、又彼れ自身に捜すのですか。)

例 115. 我自各兒沏上罷。(3-2) (おれが自身で煎れる。)

例 116. 他都是自己起廣東置來的貨，價值比別的棧裏全便宜。(2-2)

(皆廣東から仕入れて来た品物で、値段は外の間屋に比べれば全く安いのです。)

② “人家”

周一民（1998:156）によると“人家”は第三者人称代詞で、“指提及的某人之外的某个人或某些

人。”という意味を表す。“別人”との違いは“人家”は“一般是确指的，指特定的人”である。『官話指南』での“人家”の用例は全て第三人称代詞であり、その使用例は「官商吐屬」に集中している。

例 117. 凡事也不可太刻薄，人家既肯認不是也就罷了，何若老沒完呢。(1)

(人がもう既に自分の悪いといふ事を認めた上は、もうそれでよろしい、何を苦しんでいつまでもやめにしないのですか。)

例 118. 他就寫了一封回信告訴人家說，沒留下銀子。(2-17)

(彼は直ぐに一封の返信を認めて金子は残って居ないと云つてやつた。)

3) 疑問代詞

疑問代詞“多暫”は“什麼時候”の意味を表し、用字に違いがあり、“多僭”、“多嗜”、“多咱”と書かれることもあるが、全く同じ意味である。『官話指南』でも“多僭”、“多嗜”、“多咱”を共に用いている。“多僭”を使う用例は1例のみである。“多咱”と“多嗜”を使う用例はそれぞれ9例と13例ある。

例 119. 他老子娘也不管他麼，這麼由着他的性兒鬧多僭是個了手啊。(1)

(彼の両親も彼を構はないのですか。)

例 120. 您打算多嗜瞧那房子去。(2-1)

(あなたは何時その家を見にお出になるお積りですか。)

例 121. 老兄大概得多嗜上新任去呀。(2-5)

(あなたは大概何日頃御赴任なさらなければならぬのですか。)

例 122. 老弟你是多咱回來的。(2-24)

(あなたは何時お歸りでしたか。)

4) 指示代詞 (指示代名詞)

① “這程子”

太田辰夫(1965:43)は「〈這程子〉も南京官話では用いず〈這些時〉という。」と指摘した。傅民、高艾軍《北京话词典》(2013:1065)によると、“最近一段时间，这些时候，这些日子。”と同義である。陈明娥(2014:97)は、“這程子”は“清代北京官话口语中出现的现代词”(筆者訳：清末の北京官話口語に新しく出現した代詞である。)と述べた。『官話指南』では2例のみ用いたが、当時の最も新しい北京語表現を採用していたと言える。

例 123. 怎麼這程子我總沒見你呀。(2-10)

(どうして此頃は一向見受なかつたのか。)

例 124. 老兄怎麼這程子我總沒見您哪。(2-12)

(あなた何故此頃は一向御見受しなかつたのですか)

② “這麼着、那麼着”

太田辰夫(1965:43)は“這麼着”、“那麼着”の「このようである。そのようにする」および連詞「そこで」の意味を表す用法は南京官話にはないと指摘した。楊杏紅(2014:60)によれば、明治時代の北京官話教科書において“這麼着”“那麼着”はほとんど代詞として使われているという。『官話指南』も全て代詞として用いられている。“這麼着”は108例あり、9割以上が「官商吐屬」に採用されている。

例 125. 這麼着他這天晚上，就到泰和棧裏問這件事情去了。(2-19)

(そこで沈番頭はその晩泰和棧にこの事を尋ねに行つた。)

例 126. 您就告訴他，錢是借不出來找事是沒有就得了嗎。這麼着我就照您這話告訴他，免得他望了。

(2-17)

(あなたは彼に金は借りる事は出来ず、奉職口はないと御話になつたら宜ではありませんか。そんなら私は御忠告通り彼に話して望を絶たせませう。)

例 127. 那麼着小的找根棍兒穿上，掛在那釘子上罷。(3-10)

(それでは私は何か棒を一本捜してそれをぬき通してあの釘に掛けませう。)

例 128. 我們大人說，既是那麼着就從命了。(4-1)

(我が公使閣下は、左様なれば仰せに従ひますといふことです。)

③ “這兒、那兒”

場所を表す“這兒、那兒”は現代漢語の“這裏、那裏”に相当する。太田辰夫(1965:250)は“這兒、那兒”について、それらの表現は南京官話では用いられず、“這裏”“那裏”を用いると述べた。楊杏紅(2014:58)は日本の明治時代北京官話教科書に“這裏、那裏”は1例も見当たらないという。

例 129. 你在這兒可以隨便，不要拘禮。(1)

(お前ここでは氣儘にして、遠慮するには及ばない。)

例 130. 昨兒個有僭們一個同鄉的朋友，告訴我說你到這兒辦貨來了，住在這個店裏了。(2-31)

(昨日吾々の或同郷の友人が、あなたが當地に商内に来て此旅館に泊つて。)

例 131. 今年你們那兒年頭兒怎麼樣。(2-10)

(今年おまへ遠の地方は作柄はどうだ。)

例 132. 他說我並沒上那兒去，就是忽然我肚子疼，到茅房去出了一回恭。(2-33)

(彼が言ふには「私は別段何處へも行きませんでした、唯突然腹が痛かったものだから、便所に

行き大便をしました。』)

また、『官話指南』において“那兒”には“哪兒”の意味がある。

例 133. 瞧着好面善, 不記得在那兒會過, 失敬得很, 不敢冒昧稱呼。(1)

(好くお目懸け申したやうにお見受け致しますが、何處でお目に懸ったことがあるのか記憶致しません。)

例 134. 你現在要上那兒去。(3-5)

(お前今何處に行かうとしてゐるのか。)

④ “往這麼來、多麼”

太田辰夫 (1965 : 43) は方向を表す“往這麼來”と疑問、感嘆を表す“多麼”はともに北京語の表現であり、南京官話にはないと述べている。

例 135. 我們大人在上海住了不過兩天, 就往這麼來了。

(我が公使閣下は、上海には僅か二日逗留せられたばかりで當地へ参られたのです。)

例 136. 你瞧他這宗人性有多麼可惡。(2-27)

(なんと此種の人間は随分悪いではありませんか。)

例 137. 那個茶沏的殼多麼醜, 苦得簡直的喝不得了。(3-2)

(あの茶の煎し方はなんとひどく濃いんだらう、苦くてとんと飲むことが出来なかった。)

2. 2. 2 副詞、介詞、助詞、語気詞

(1) 副詞

前述の徐麗 (2013) は『官話指南』中の副詞を 87 個提示し、北京語の特徴を有しているとした。ところが“所”、“白”、“竟”、“冷不防”、“冷孤丁”、“儘自”などの副詞は提示されていない。そのために、本節では一覧表を踏まえて、『官話指南』の北京語の特徴を持つ副詞を再検討する。該当する副詞の使用頻度は上述の表 5 の通りである。また、一覧表を見ると、副詞は代詞と同じく、「官話問答」には用例が少ない。太田辰夫 (1965 : 52) は「抽冷子、冷不防、冷孤丁、儘自、別、敢情、敢自」が北方語であると主張した。徐麗 (2013) は“所、冷不防、冷孤丁、敢情”については言及していない。

1) 範囲副詞

① “所”

副詞の“所”は周一民 (1998) には収録されていないが、太田辰夫 (1965 : 53) は“所”は「すっかり、ぜんぜん」の意味を表すと指摘し、また齊如山《北京土話》(2008 : 144) は“所, 簡直也, 成总也。如云‘所不是那们回事’, ‘这们好好东西所吃不下客’。”と述べている。そして、陈明娥 (2014 :

131) によると、副詞の“所”は清末以前の中国本土の北京官話教科書にはあまり使用されていない語であると指摘した。さらに楊杏紅(2013:216)は“所”が初めて出現した教科書は『官話指南』であり、“副詞‘所’的特征性和其他的副詞不一样，可以看作是具有充分条件的语法特征，即如果文献中出现这一用法就可判断文献属于清末的北京官话材料。”(筆者訳：副詞“所”の特性は他の副詞と異なり、十分な条件をもつ文法特徴が見られ、即ち、文献の中にはこの用法を出現したら、この文献は清末の北京官話材料であることが判断できる。)と指摘している。そのために、『官話指南』は北京語の特徴が極めて高いと言える。また、序論にも述べたように「官商吐屬」は商売、日常生活に関する内容の問答である為、その表現もより口語的である。表5を見ると分かるように“所”は全て「官商吐屬」に採用されていることから、「官商吐屬」は北京語の口語文法の特性が現れていると思われる。

例 138. 趕開了印之後，就所沒甚麼閒工夫了。(2-4)

(御用初になつたら、すっかり何の閑もなくなります。)

例 139. 現在的莊稼所都長起來了罷。(2-11)

(今の作物はすっかり皆大きくなったでせうネ。)

例 140. 這個工夫兒天忽然下起雪來了，他就頂着雪各處找了會子所沒有。(2-15)

(その内に俄に雪は降る彼は雪を冒して此處彼處と暫らく捜したが矢張り居ない。)

例 141. 江西那幾年事情倒很好，就起到了蘇州之後，事情就所不順了。(2-24)

(江西に居た數年間は都合は好かつたのですが、蘇州に行つてからは全く都合が悪うございました。)

例 142. 客人是所不答應，要定了箱子了。(2-21)

(客人はどうしても承知しない、是非にと自分の鞆を要求する。)

例 143. 敢情是這幾年買賣發了財了，東家所不上鋪子了，竟在家裏納福，(2-23)

(成程近年商賣は儲かつたのですが、主人は全く店に出て来ず家にはばかり居て樂をして居りました。)

例 144. 先吃的還不多，後來是一天比一天吃的多，到了去年他臉上所帶了烟氣了，精神也不佳了。(2-25)

(後には一日増しに吸ひ方が多くなり、昨年になったら、彼の顔に全く煙氣を帯びて精神も勝れないのです。)

2) 程度副詞

① “老、頂、更”

“老”は時間副詞として“总是”⁽¹⁾の意味を表わす。太田辰夫(1965:51)は「〈頂〉は〈最も…〉ということで〈挺〉は〈とても…〉ということであるから意味が異なる。」と主張した。しかも、「頂」、「老」は北京語で、「挺」は南方語であると指摘した。

⁽¹⁾ 卢小群 2017、326 頁。

例 145. 這個不用問，誰不是頂喜歡的春暖花香…。(1)

(これは聞くまでもありません、誰だって春の暖く花香ばしき時侯を好まない者はありませんし、)

例 146. 我告訴過他好幾回了，他老不聽。(3-15)

(私は彼に何遍も言つたのですが、彼は一向聴入れません。)

例 147. 馬怎麼老不上膘呢。(3-16)

(馬が何うして何時までも肥えないのだらう。)

“頂”と“更”は現代中国語でも使われているが、表5の使用頻度から『官話指南』では程度副詞としてよく使われているのは“更”であることが分かる。

② “白”

太田辰夫(1965:54)によると、北京語の「白」は「ちょっと、ためしに」の意味を表す。周一民(1998)、卢小群(2017)、杨杏红(2014)などはいずれも「白」を収録されていない。恐らく、太田辰夫が利用した資料は19世紀末期から20世紀初めまでの古い文献であり、周一民は北京語の現代口語の資料を検討したためだと推測できる。

例 148. 我白問一問，像這對得多少塊錢。(2-7)

(おれはただ聞いてみるのだが、この様な花瓶は何圓かかるか。)

③ “竟”

“竟”は太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)の研究では提示されていないが、『官話指南』には3例ある。杨杏红(2014:90)は“‘竟’是日本明治时期北京官话课本中出现频率很高的一个范围副词。”(筆者訳：“竟”は日本において明治時期の北京官話教科書の中に頻繁に出現した範囲副詞である。)と述べ、“都”と“只、光、只是”の意味を表示していると指摘した。以下に示した例文を見ると、ここの“竟”は“只、只是”の意味を表していると考えられる。

例 149. 他竟把東西給那個人寄回家去了，可就把那一千多兩銀子昧起來了。(2-16)

(『官話指南精解』:あの人は品物丈を家へ届けてやつて、千両餘りの金子は着服してしまいました。)

例 150. 他最愛耍錢，他整天家竟在寶局上。(2-17)

(彼は賭博が大變好きで、終日賭博場にばかりゐます。)

例 151. 那麼就應當竟叫這兩家沾過光的賠銀子。(4-9)

(その時には當然唯御蔭を受けた兩人に賠償させ、)

2) 否定副詞

太田辰夫(1965:54)は「<別>は北方語で、南京官話では<莫>という。」と指摘した。『官話指南』

は「莫」も使用しているが、「十字口中擻，莫作田字猜，無頭又無尾，悶死一秀才，我猜的是魚字，揭了來了。」のような文語の中に用いた。

例 152. 別弄的那麼挺槓硬的，不能吃。(1)

(ガチガチ硬くて食はれないやうに煮てはいけない。)

例 153. 你們倆別胡說，我一個財主和你們無賴子耍錢，你們真是發昏了。(2-26)

(おまへ等馬鹿を言ふな、おれは一個の資産家だ、おまへ方無賴漢と博奕をしたとはおまへ方は本當に氣が違つたのだ。)

3) 語氣副詞

「敢情」は太田辰夫(1965)と周一民(1998)は共に提示され、“原來，沒有想到。”の意味を表す。また、太田辰夫は「敢自」も北方語として取り上げた。「敢自」は『官話指南』に「那敢自很好了。(3-1)」の1例のみである。また、北京語としての「管保」は“肯定，保証”^①という意味を表している。

例 154. 敢情先頭裏，每月做這麼些個手工哪。(2-14)

(本當にまあ以前はそんなに澤山仕事が出来たのか。)

例 155. 我們先伯心裏說，怪不得我看那幾個店家那麼賊形可疑的，敢情真是個黑店。(2-29)

(私共の伯父は心で點頭づき、道理で自分があれ等店員はどうも泥棒づらをして居ると疑つたが、果してこれは真の泥棒店だ。)

例 156. 敢情還有這麼件不方便的事情哪。(3-8)

(なるほどまだそんな不便な事があるのかなあ。)

例 157. 還有一件事你管保不知道，在僑們沒認得他之先，他已經就作過一件屈心的事了。(2-16)

(外にまだ一事件ありますが、あなたは屹度御承知になるまい、吾々がまだ彼を知らない前に、彼は既に一つ悪事を働いたことがあるのです。)

例 158. 請貴鄉親竟管放心，此事既是我承辦，我管保萬無一失。(4-13)

(何卒御友人にはすつかりご安心なすつて下さい、此事を已に私が引受けしましたからには、私は萬に一つもしくぢりはないと保證します。)

4) 時間副詞

太田辰夫(1965: 52)は「抽冷子」、「冷不防」、「冷孤丁」は共に「忽然」の意であり、「儘自」は「くしきりに、やたらに」の意であり、北方語特有の副詞である」と論述した。

^① 高艾軍、傅民 2013、337 頁。

例 159. 我在台階兒上站着，他抽冷子把我望後一推，幾乎沒栽了個大筋斗。(1)

(『官話指南總譯』：私が坂に立つて居ると、あれは不意に私を後方に突きあぶないこと、蜻蛉轉りを為る處でした。)

例 160. 他要招着我，我就攢足了勁兒，給他一個冷不防，叫他吃不了得兜着走。(1)

(『官話指南總譯』：若し私に仕掛けて来たならば、私は力を籠めてかれに一つの不意打を食はし、あれをしてあれを逃つびきならぬ目にあはせれやります。)

例 161. 那匹馬冷孤丁的聽見一聲槍響，嚇的可就驚下去了。(2-32)

(其馬は不意に一發の銃聲を聞いたものだから驚いて駆け逃げて行つてしまひました。)

5) 頻率副詞 (頻率を表す副詞)

周一民 (1998 : 206) は “‘從新’ 即是普通話的 ‘重新’，北京話說成 *cóng xīn*。” と述べ、重複という意味を表す。『官話指南』には 1 例のみ使われている。

例 162. 那麼我今兒個拉到獸醫樁子上去，再從新釘一回罷。(3-16)

(それでは、私は今日獸醫の處に引いて参りまして、また打換へませう。)

(2) 介詞

1) 起点介詞

楊杏紅 (2014 : 135) は、起点を表す介詞は “日本官話課本中出現了 7 个具有明显口語特色的北京官話詞匯：‘起’、‘打’、‘從’、‘由’、‘解’、‘接’、‘跟’。” (筆者訳：日本の官話教科書の中にある “起”、“打”、“從”、“由”、“解”、“接”、“跟” の 7 つは明らかに口語の特徴を有する北京官話語彙である。) と述べた。『官話指南』は “接、跟” 以外をすべて使用している。

例 163. 老弟是起家裏來麼。(2-3)

(あなたはお宅からお出でになりましたか。)

例 164. 頂好是打那竹徑轉過灣兒去，在那塊大石頭上坐着，聽那水聲兒真叫人萬慮皆空。(1)

(一番好いのはあの竹徑から曲つて往つて、あの大きな岩の上に腰をかけて、あの水聲を聴くことです。本當に何でもすつかり忘れてしまひますネ。)

例 165. 那麼叫他解多咱來伺候您哪。(3-1)

(それでは彼に何日から御用をさせませうか。)

例 166. 我們大人是因為行李太多，打算由水路走。(4-3)

(我が公使閣下には、行李が非常に多く御座いますから、水路から行かる筈で御座います。)

例 167. 從這兒起身一住店，有一件老爺想不到得用的東西，為太太可是很要緊。(3-8)

(此處から出立して宿屋に御泊りになると、旦那の御考の及ばない道具が要るのです、奥様の為めには、併し極大切な道具。)

“解”について太田辰夫（1965：50）には「南では用いない。」と述べている。周一民（1998：217）は“‘且（qiě）’在风格上更土一些，它还有两个变体‘起（qǐ）’和‘解（jiě）’，它们的来源有待考察。”（筆者訳：“且（qiě）”は形式上より古く、それにはさらに“起（qǐ）”と“解（jiě）”二つの変体があり、それらの出所については考察が待たれる。）と述べた。『官話指南』で起点を表す“解”は10例ある。

表5から“起”は44例あり、“起点介詞”の全数76例の半分以上を占めていることから、『官話指南』の主要な“起点介詞”とすることができる。

2) 処置介詞

太田辰夫（1969）は處置介詞“給”を提示したが、詳細な説明はない。ただ、太田辰夫が著した「〈鏡花縁〉考」（1974）では“給”について次のように説明した。

「給」の用法は、大きく二つに分けられる。その一は、「給」を動詞の直後におくもの、その二は、動詞の前方（おおくは中間に名詞・代名詞をいれる）におくもの、である。どちらも現代では普通語となった。（59頁）

前者の“給”は『官話指南』に大量に使われている。後者の“給”は『官話指南』にも見える。下記のような例がる。

例 168. 趕他們到了銀號就這麼一罵，把櫃上的一個夥計他揪出來給打了，把攔櫃上擱着的算盤也給摔了。（2-6）（彼の悪党共は銀行に着くや否や罵り出して店に居た、一人の番頭を引摺出して打擲し、又帳場にあった算盤もほうり出した。）

例 169. 我現在回棧裏去先雇一個小車子把姓徐的那倆白皮箱給他推了去，把那倆紅皮箱就換回來了。（2-21）（私は今し方店に歸つて先づ一臺の一輪車を雇つて、徐氏のその二個の白鞆を送届け、その二個の紅鞆を引換へて歸りました。）

また、山田忠司（2015）は北京語では「動詞の前方におく」“給”は受身と“替”の意味を表す状況もあるとしているが、『官話指南』にはそれぞれ5例、3例ある。

①受身を表す“給”

例 170. 偏巧走到大街上叫下夜的兵給拿住送了衙門了。（2-30）

（生憎大道へ出て夜廻の兵に捕はれ役所に拘引せられました。）

例 171. 我打算雇人抄寫，雇人謄寫，怕是給抄錯了，那麼怎麼辦好呢。（2-38）

（人を雇つて寫させたら恐らく寫し違ひが出来るでせう。）

②“替”を表す“給”

例 172. 因為他現在等錢用，託我把他這地畝園子給他典出去，所以我來問問您納。(2-8)

(彼は只今金が要るので、その地面と畝とを質に入れて呉れと私に依頼しました。それで私はあなたに御尋ねするのです。)

例 173. 我說現在我手底下沒錢，等我上別處給你借去，若是借着了你就使喚。(2-17)

(今自分の手許には金が無いから、外の處へ行って借りて来るのを待つて居なさい。)

例 174. 我是不長於做詩，不過去給眾位研墨就是了。(4-17)

(私は詩を作ることは下手ですから、唯行つて諸君の墨を磨る位のことです。)

3) 目標介詞

周一民 (1998 : 220) は“北京口語中不说‘向’；表示目标、方向的介詞常用的是‘朝’‘奔’”(筆者訳：北京口語の中には“向”を使わず、目標、方向を表す介詞としてよく使われているのは“朝”“奔”である。)と指摘した。『官話指南』では“奔”のみが用いられ、その例は1例である。

例 175. 這麼着他們這倆車就奔了那個燈光去了。(2-29)

(そこで彼等の二輛の車はその火の光を目指して参りました。)

4) 施事介詞 (受事を表す介詞)

太田辰夫 (1950、1965、1969) は“被”について提示していないが、周一民 (1998) にはそのことが提示されている。周一民 (1998 : 222) によると、北京語の文法特徴を持つ介詞は少なくないが、“在”、“從”、“為”、“替”、“由”、“往”など一部の介詞はすでに“普通話”に転化し、さらに“北京口語里沒有介詞‘被’，表示施事或動作行为主体主要用‘让’和‘叫’偶尔也用‘給’。”(筆者訳：北京口語の中に介詞の“被”がなく、動作主また動作の行為を表す際に“让”と“叫”を使い、偶に“給”も使用する。)と指摘している。『官話指南』において“施事”を表す介詞“讓”、“叫”、“給”、“被”はすべて使用しており、施事介詞の“被”は10例ある。周一民 (1998 : 222) では一部分の受事を表す‘让’、‘叫’、‘給’都可以用‘被’替换，不过替换后的句子北京话不说，属于普通話。”(筆者訳：让’、‘叫’、‘給’は共に“被”と交替できるが、交替した文は北京語ではなく、“普通話”である。)と指摘していることからみると、『官話指南』の“被”の用法は“普通話”に転化する前の北京語の使用例と考えられる。

例 176. 老弟，我聽見說你們那位令親王子泉被叅了，是真的麼。(2-22)

(あなた、私はあなた方の御親戚の王子泉が弾劾せられたと聞きましたが、本当ですか。)

例 177. 縣城裏頭有一個錢鋪被劫，搶了有幾百兩銀子賊去。(2-22)

(縣城内の或両替店が強盜に罹つて數百兩の金を取られた。)

例 178. 趕車的起車上，把烟土卸下來了，被巡役看見了…。(4-13)

(馬車夫が車から阿片を卸すところを巡役に見つけられて…。)

5) 時間介詞

周一民 (1998 : 227) は“北京口语里不说‘当’，‘当…时候’是普通话的说法。与‘当’语义、功能近似的有‘赶’、‘等’。”(筆者訳：北京語の口語では「当」を使わない。「当…時候」は普通話の言い方である。「当」の意味と作用が似ているのは「趕」と「等」である)と指摘した。表 5 から、“趕”は 140 例、“等”は 39 例あることが分かる。“当”の介詞用法はない。また、複合介詞の“趕到”は『官話指南』にも 40 例採用されている。以上のことから『官話指南』では“趕”が時間介詞として最も多く使用されている。

例 179. 趕這事定妥的時候，您還得先照回地去哪。(2-8)

(この事がきまる場合には、あなたやはり先づ地所を御覽にならなければなりませんまいネ。)

例 180. 趕明天我就見江老爺去給你說說。(2-10)

(明日江さんに遇ひに行つておまへのことを能く話してやらう。)

例 181. 等他有甚麼話，我再來見你罷。(2-13)

(何か申したならば復た来て御目にかかりませう。)

例 182. 等底下我再來的時候給帶來罷。(2-18)

(その内復た来る時に持参致します。)

6) 範囲介詞

周一民 (1998 : 230) は“論”について“表示所談的方面，也表示计量的单位。”と主張した。『官話指南』の“論”は全て測定単位の意味を表す。

例 183. 這個地方買牛奶，是論斤哪，還是論瓶呢。(3-3)

(ここで牛乳を買ふには、目方でいふのか又は瓶でいふのか。)

7) 遵照介詞 (遵從を表す介詞)

周一民 (1998 : 227) は“‘按、照、依’都是表遵照的介词，有相同之处，都能后附‘着’”。(筆者訳：“按、照、依”は遵從を表す介詞であり、同じものにはともに後ろに“着”を付ける。)と述べた。『官話指南』には「按着」が 9 例、「照着」が 1 例あるが、「依着」の用例はない。

例 184. 按着腳下看，今年準可以豐收的。(2-11)

(今の様子で見れば、今年は屹度豊作でせう。)

例 185. 通行都是按七錢銀子一塊合。(3-12)

(普通は皆七錢兩の銀が一弗に當るのです。)

例 186. 照你這麼說僂們倆豈不餓死了麼。(1)

(あなたがこんなに仰つしゃると、我々二人は餓死してしまふぢやありませんか。)

例 187. 我回去就照着你所說的這話告訴我那相好的…。(2-13)

(私は歸つて御話の次第をその友人に話しまして…。)

例 188. 依我勸您，他託的這兩件事您都別給他管。(2-17)

(あなたにお勧め申したいのですが、彼れの頼んだこの二つの事はあなた一切構つておやりなさいますな。)

また、楊杏紅 (2014) が挙げた “起”、“解”、“打”、“从”、“由”、“在”、“自从”などは『官話指南』にも見えることから、『官話指南』の介詞は実に豊富であることが分かる。

(3) 助詞

1) “不咖”

太田辰夫 (1965 : 55) は「北京語では〈咖〉(jia 又は jie) という接尾辞を用いる。意味は全く無く、単に語調から添えられるにすぎない。」と述べた。「不咖」は「いいえ」、「別咖」は「だめです」の意味を表す。『官話指南』には2例のみあり、ともに「不咖」の用例である。

例 189. 您忙甚麼了，再坐一坐兒罷。不咖了，我舖子裏還有事哪。(2-9)

(何を御急ですか、もつとごゆっくりして下さい。さうして居りません、私は店に又用がありますから。)

例 190. 那麼這粗重的傢伙也都帶了去麼。不咖。那我打算託朋友都把他拍賣了。(3-17)

(それではこの重い物も皆持つて御出になりますか。いや、それは友人に頼んで皆競賣にしてみました積りだから。)

2) “得 (dé) 了”

太田辰夫 (1965 : 55) は“得 (dé) 了”は文末に用いる表現で、北京語であると述べたが、意味についての解釈がない。『官話指南』には7例ある。用例から見ると、「それでよい」という意味を表す。

例 191. 您把這兩隻紅箱子就交給他們帶回去就得了。(2-21)

(あなたはこの二個の紅鞆をその者に渡してお返へし下さればそれですみます。)

例 192. 如今我見個情，你賠我五十兩銀子就得了。(2-32)

(今私が事情を汲んで五十兩だけ辨償してもらへば宜しい。)

また、『官話指南』には助詞“地 (de)”の用例がなく、“的”“得”のみが使われている。ちなみに“得 (de 助詞)”、“得 (dé 動詞)”、“得 (děi 助動詞)”3つの用法は全て使用されている。

例 193. 我聽見說您這西院裡那處房要出租是真得麼。(的) (2-1)

(『官話指南總譯』: 承りますれば、西方の御邸内にある家を御貸になるさうですが、事實ですか。)

例 194. 去年他家裏辦白事, 再三得求我給約兩位朋友, 在他家裏幫著他熬熬夜…。(地) (2-27)

(去年彼の家に凶事があった時、再三私に二人の友人と一緒に自分の宅へ通夜をする…。)

例 195. 這麼着我就叫他們那幾個夥計, 把棉花包起棧房裏又都盤到院子來, 細細兒得數了一數。(地) (2-33)

(そこで私は先方の手代等に棉花の包を倉庫から、復た皆んな庭に運び出させて、丁寧に數へた。)

例 196. 你別不認帳, 昨兒個你拿我的茶葉, 我悄悄兒的進來瞧見了。(地) (3-15)

(おまへ白呆けるな、昨日おまへがおれの茶を取ったのを、おれはそつと這入つて来て見たのだ。)

例 197. 叫他好好兒的拿熨斗熨一熨, 那纔能周正了。(地) (4-5)

(十分に火熨斗でははずと能くきちんとなくなるのだつて。)

3) “就結了”

太田辰夫 (1965 : 55) は“就結了”を北京語として挙げたが、説明はない。『官話指南』には 2 例のみ使用されているが、陳明娥 (2014 : 123) はそれを“好了 ; 算了 ; 行了”と釈義している。

例 198. 昨兒個晚上把貨也起了去了, 銀子也兌了, 就等明兒個沈掌櫃的在縣里遞一張和息呈詞就結了。

(2-19) (昨晚品物も引取り金も渡しました、それで明日沈番頭は縣衙門に一枚の願下書を差出せばそれで落着するのです。)

例 199. 說是老爺起外頭大遠的帶了點兒東西來, 留着自己用就結了, 又何必費心惦記着我呢。(3-18)

(旦那が大變遠方から持つて御出になったのなら澤山もない品を、自分で御使ひなされば好いのに、なんだって私にまで御心配下なさつたらう。)

4) “來着”

太田辰夫 (1969) によると、北京語としての“來着”は助詞であり、「過去または回憶」の意味を表す。『官話指南』には 22 例あり、「官商吐屬」に集中している。『官話指南』の例から見ると、“來着”は叙述文と疑問文の文末につく傾向が多く見られる。

例 200. 前幾天我去的時候他也托我問您好來着。(1)

(二三日私が参りました時に、あの方もあなたによろしくと言つてお居でになりました。)

例 201. 我剛纔問他來着…。(2-7)

(私は今しがた彼に尋ねましたら…。)

例 202. 老兄剛纔那個姓馬的進來找您是說甚麼話來着。(2-17)

(今し方あの馬君が来てあなたを尋ねて何を話して居たのですか。)

例 203. 你幹甚麼來着。(3-18)

(おまへは何を為て居たのか。)

(4) 語気詞

1) “哪”

杨杏红 (2014 : 144) は“‘哪’在日本明治时期的北京官话教科书总是一个常见的语气词, 主要表示感叹语气。”(筆者訳: 「哪」は日本明治期の北京官話教科書においてよく見られる語気詞のひとつであり、主に感嘆の語気を表す) と述べた。『官話指南』には語気詞の“哪”は 92 例あり、そのうち疑問を表すのは 35 例である。

例 204. 看過《史記》纔知道歷代的興敗人物的好歹哪。(1) (感叹语气)

(史記を讀んで始めて歴代の興敗、人物の善悪がわかるのです。)

例 205. 所以總還是說明白了典幾年纔好哪。(2-8) (感叹语气)

(それでどうしても矢張幾年の質入とはつきり書いた方がよい。)

例 206. 你昨兒去遊湖回來早啊是晚哪。(1) (疑問を表す)

(あなたきのふ湖水遊びにお出でになつて、御歸りは早うご座いましたか晩う御座いましたか。)

例 207. 您問的是甚麼小物件哪。(2-7) (疑問を表す)

(あなたの御尋ねになるのはどんな小道具ですか。)

上述の用例から疑問を表す“哪”は現代の“呢”の意味に相当すると考えれる。

また、周一民 (1998) は“的慌”を形容詞の“北京话多音后缀”とした。太田辰夫 (1965 : 256) は動詞に区分し、北京語の文法特徴を持つ語と主張した。陈明娥 (2014 : 52) によると、“的慌”は“主要是不愉快的身体感觉或精神体验”の意味を表し、形容詞、動詞の後ろに付き、程度を表すと指摘した。陈明娥の解釈から、“的慌”は補語であると指摘した。本論文は陈明娥の論説に従って、補語として分類することにした。また“的慌”は『官話指南』では“得慌”と書き、1 例しかない。

例 208. 不過是在家裏坐着也是悶得慌，睡响覺起來也是不舒服，莫若出去溜達溜達倒好。(2-11)

(唯内に居ても退屈でたまらないし、午眠をして起きると氣分が宜くないものですから、いつそ出掛けてぶらっく方が可からうと思っただけの事です。)

2.3 文法の北京語特質

『官話指南』の文法について諸先行研究は指示代名詞、副詞、介詞、語気詞を詳細に分析したが、『官話指南』の本文でどのように使用されているか、その使用頻度はどうあるかについての考察されていない。また、本章は文法の面から『官話指南』の北京語の特徴を考察するため、太田辰夫と周一民が提示した北京語の文法特徴をもつ表現を整理し、約 140 項目を取り出した。注意すべき点

は、太田辰夫と周一民が提示された接頭辞“老”、“兒個”、重ね型である“AA儿 tā と AA儿 tā”、方向動詞を表す“起去、起下來”、“上來”、“動詞 AB・AB 式”、接尾辞“達”、量詞“一点儿、這些個、那些個、好些個”、人称代名詞“他納”、指示代名詞“往這麼來、多麼”、程度副詞“白”、語気副詞“敢情”、範圍介詞“論”、遵從を表す介詞“按、照、依”、助詞“不咖”については『官話指南』の諸先行研究に提示されていない。また、両氏の文法特徴から見ると、太田辰夫が指摘した文法特徴はそのほとんどが明治時代の北京官話教科書に収録されている表現であり、周一民の指摘した特徴は現代北京語と類似している所が多く、しかもより北京城内およびその近郊で使用される方言の表現も内包している。このことが『官話指南』に太田辰夫が提示した文法特徴の9割以上が現れ、周一民の文法方言をあまり使用しなかった理由なのであろう。以下は両氏の研究を踏まえ、『官話指南』における文法面の特徴をまとめる。

(1) 『官話指南』文法の北京語の特徴が非常に著しい。

本章は太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)の研究を参考にした上で、『官話指南』を分析すると、68個の北京語の文法特徴を持つ表現を見出した。その結果、『官話指南』には前綴“老”と後綴“兒”を大量に使用していることが判明し、その口語教科書の特徴がさらに認識可能となった。動詞、形容詞、量詞については『官話指南』での用例数はそれほど多くないが、北京語の特徴がより強い表現である“VP+去”、得(děi)が多く現れたことが明らかになった。人称代詞では“我們”の後ろに第三者の名前、人称、場所などが付く場合、必ず除外形を取ること、“您納”に「您」と交替していく傾向がすでに見られることが確認できた。明治時代の北京官話教科書にある7つの北京語の特徴を有している起点介詞である“起、打、从、由、解、接、跟”のうち、『官話指南』には“起、打、从、由、解”の5つが現れている。一覧表の使用頻度から、『官話指南』では“起”を主要な起点介詞として用いたことが分かる。指示代詞“哪兒”は『官話指南』で全て“那兒”と表記されており、“哪”は語気詞のみに使用されている。また、“哪”は“呢”に相当する疑問の用法が多く確認できた。副詞の“白、所、抽冷子、冷不防、冷孤丁”などは『官話指南』における用例数は少ないが、明治時代の北京官話教科書によく使用される表現である。そのため、それらの北京語の特徴を有している文法の表現は『官話指南』にも存在していることから、『官話指南』は北京語の特徴が顕著であると言える。

(2) 北京語文法の分布状況から見た『官話指南』各巻の特徴が異なる。

北京語の特徴を有している文法の全調査により、各巻の分布状況と使用頻度の百分率を見ると、「應對須知」、「使令通話」にある北京語の特徴を有している文法表現が最も多い。「官話問答」の北京語の文法表現は一番少ないと分かった。また、第一章の1. 2. 3に述べたように、文語はほとんど「官話問答」に集中している。北京語語彙は7割以上が「官商吐屬」と「使令通話」に集中し、「應對須知」の北京語語彙は総数の1割ぐらゐを占めている。したがって、北京語語彙、文法、文語の分布から「官商吐屬」と「使令通話」に北京語特性がより強い傾向が見られ、「官話問答」は文語的な特徴が他の三巻より極めて強い傾向が見られる。

(3) 『官話指南』文法特徴の時代性と典型性

太田辰夫（1965）の研究は明治時代の北京官話教科書を取り入れた研究で、より典型的な北京語の表現を提示している。『官話指南』には太田辰夫が提示した文法特徴がほとんど含まれているため、『官話指南』は北京語の文法特徴を多く反映した明治初期の北京官話教科書の代表と言える。さらに、“您納”、“所”、“這程子”などの表現から『官話指南』は当時の最新の北京語表現を採用していたことがうかがえる。また、太田辰夫（1965：38）が「北京語は北方語の一方言であるが勢力が強く、また両者は厳密に区別のつけられないことも多い。」と述べたように、『官話指南』にも北京語の特徴だけではなく、北方方言の表現も見られる。

（4）文法面から『官話指南』の清末北京官話会話教科書としての価値の再認識。

孫錫信（1997）は『官話指南』にある北京語文法の特徴は“对现代北京话中的某些语法成分的溯源来说，《官话指南》是有重要价值的。”（筆者訳：現代北京語の幾らかの文法成分の溯源探求において、『官話指南』は重要な価値を持つ。）と論じた。徐麗（2014）、楊杏紅（2014）、李磊（2016）などの研究もともに『官話指南』は明治期の北京官話教科書の文法特徴を反映した極めて重要な言語材料だと論じた。本章は北京語文法の再検討を通して、北京語の特徴を持つ表現が『官話指南』に大量に見えることを明らかにしたうえで、北京官話教科書としている根拠について文法の面からさらに認識できた。

第三章 『官話指南』の教科書研究（九江版との比較）

3.1 先行研究の概念とその成果

九江版『官話指南』は明治26年（1893）に九江印書局から出版された。全書は「應對須知」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」から構成され、計190頁から成る。序文と奥付などがないため、成立事情は不明である。序論にも述べたように全書にわたり一部の字句が双行注となっている。双行注では初版『官話指南』⁽¹⁾の原文を右（右文）に記載し、左（左文）に著者の九江書会が追記した南京官話を配置している⁽²⁾。「一般的に右が北京官話、左が南京官話」⁽³⁾であるが、追記した部分について必ずそれが南京官話であるという明確な記述はない。また、太田辰夫（1965）は九江版『官話指南』が初版『官話指南』の方言改訂版であると主張し、張美蘭（2008）もこれに同調した。しかし、一見すると九江版『官話指南』と初版『官話指南』の構成および本文の内容は一致しているようであるが、精査すると細部には初版『官話指南』との相違箇所も多く見られる。詳細は3.2節で紹介する。また、九江版『官話指南』にある南北官話についての研究成果は主に内田慶市と氷野善寛、張美蘭、齊灿などの研究である。

3.1.1 内田慶市、氷野善寛の研究

内田慶市、氷野善寛（2016）は研究篇、資料篇、影印本文の3部から構成され、『官話指南』全語彙索引と「九江書會版『官話指南』双行注対照表」を作成した。また、九江版『官話指南』に関する研究では次のように結論付けた。第一に、九江版『官話指南』は初版『官話指南』の著者である吳啓太、鄭永邦とは関係がなく、おそらく「九江書会が独自に編纂し刊行したもの」である。第二に、1890年代以降に九江版『官話指南』のような注を施した教科書に『官話類編』⁽⁴⁾（1892）、『無師初學英文字』⁽⁵⁾（1897）、『華語拼字妙法』⁽⁶⁾（1913）などが見られる。内田慶市、氷野善寛（2016）が作成した「九江書會版『官話指南』双行注対照表」は、双行注の右文（原文）における1文字目の漢字を取り出しピンイン順で掲載頁順に配列し、左文（追記部分）、原文、巻と章番号、頁数、例文を提示している。

本著は初版『官話指南』の語彙研究、九江版『官話指南』の南北官話を考察する際に大いに寄与する労作である。

(1) 本章では九江版『官話指南』との比較が中心となり、混乱を避けるため吳啓太、鄭永邦共編の『官話指南』初版本を「初版『官話指南』」と称す。

(2) 本研究ではそれぞれ「左文」と「右文」と称する。

(3) 内田慶市、氷野善寛2016、302頁。

(4) 『官話類編』は1892年に出版し、C. W. Mateerが著した中国語教科書である。『官話類編』について尾崎実は『官話類編』所収方言詞対照表」という研究があり、『或問』第6号（2003）に収録されている。

(5) 『無師初學英文字 Romanization of the Mandarin Dialect, A Primer for Scholastic and Self-instruction』は Charles Leaにより編纂し、1897年に出版した。

(6) 『華語拼字妙法 Two Years' course of study in the Chinese Language Volume I Analytical Primer In Four Volumes』は萬應遠、夏葭塘により編纂し、1913年に出版した。

3.1.2 张美兰と李颖、齐灿の研究

张美兰、李颖 (2007) は九江版『官話指南』の双行注に見られる南北官話の特徴を考察した。この研究は介詞、南北官話と対応する表現を中心に考察した。分析の結果としては南北官話で対応する表現 78 組を挙げた。介詞については“在、赶、解、往、用、把、拿、给、被、叫、和、同、对、跟”などを中心に、南北官話の差異と特徴を論じ、これらは“分別代表了 19 世紀末汉语北方官話和南方官話的特征。”(それぞれ 19 世紀末の北方官話と南京官話の特徴が表れている)と述べ、さらに“趕、打、解、起、按、叫、給”などが当時の北京語の特徴を有する介詞であるとも指摘した。

张美兰 (2008) は张美兰、李颖 (2007) を踏まえて、九江版『官話指南』の双行注に見られる名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞などを再考察し、さらに 48 組の南北官話で対応する表現を新たに挙げ、右文の語彙は今日の北京語辞典あるいは方言辞典、および北京語の口語で使われる、と指摘した。

齐灿 (2016) は九江版『官話指南』と『官話類編』を中心に、19 世紀末期の南北官話の介詞を「時間類」、「憑借・方式類」、「原因・目的類」、「対象・範囲類」、「処置・被動類」に区分し、比較研究を行った。時間類は“在、到、赶、从、起、打、往、由、上、及、至、当、於、临、自从、及至、解、届”の 18 個、憑借・方式類は“拿、用、按、照、依、以、随、论、仗、从、据、如、按照、遵照、在”の 15 個、原因・目的類は“因、以、为”の 3 個、対象・範囲類は“和、跟、同、与、连、带、除、除了、在、到、给、为、替、以、比、于、如、对、乎、论、至于、由、起”の 23 個、「処置・被動類」は“把、将、以、被、叫、教、给、等”の 8 個があると指摘した⁽¹⁾。さらに、これらの介詞を《兒女英雄傳》、《普通話基礎方言基本詞彙集》、《漢語方言大詞典》、《南方方言志》などと比較し、九江版『官話指南』と『官話類編』に使用された介詞の種類が豊富で、介詞の用法も比較的揃っていて、多くの介詞の使用状況が当時の南北官話の実情と符合すると論じた。

张美兰、李颖 (2007)、张美兰 (2008)、齐灿 (2016) の研究により、九江版『官話指南』における南北官話の差異を把握することができる。本節ではこれらの先行研究で扱った九江版『官話指南』の南北官話の特徴を持つ語彙を下表のようにまとめた。品詞分類は先行研究に従った⁽²⁾。

表 6 先行研究で扱われた九江版『官話指南』の南北官話表現の対応表⁽³⁾

品詞	北京官話 (右文) / 南京官話 (左文)
名詞	案子/棹子、成衣鋪/裁縫鋪、匙子/挑子、大夫/郎中、醫生、燈虎/燈謎、墩布/抹布、隔扇/榻子、耗子/老鼠、黑下/黑夜、晚上、胡同/巷、巷子、雞子兒/雞蛋、街坊/鄰居、今兒/今天、今日、今兒個/今天、今日、炕/鋪、床、苦力/挑夫、挑子、小工、茅房/茅廁、明兒/明天、明日、明兒個/明天、明日、娘們兒/婦女們、鋪保/保人、晌午/中時、下午、

⁽¹⁾ 齐灿 (2016) は初版『官話指南』の介詞も取り上げたが、本稿は双行注にある介詞のみを本表に収録した。

⁽²⁾ 张美兰、李颖 (2007) と齐灿 (2016) で重複する介詞は 1 回のみ取り上げた。

⁽³⁾ この対応表は、「/」で右文と左文を区分し (右文/左文)、右文の別の語彙を挙げる時に「、」で区切った。右文に対応する左文に 2 つ以上の語彙がある時は「、」で並列を示した。例えば、右文の“大夫”に対し、左文に“郎中”と“醫生”がある時は「大夫/郎中、醫生」と表記した。

	師傅/先生、書櫃子/書架子，書板、鑊子/練子、屋子/房子、宅門子/公館，宅，屋，家，人家、棧/店、掌櫃的/老闆，管帳的，管事的，司務、鎮店/鎮市、昨兒/昨天，昨日、昨兒個/昨天，昨日、早起/早晨、新近/初次，剛才，近日、前兒個/前幾天，前天、工夫/功夫，時候，一會兒、腳下/目下，眼前、見天/一天天，每天、這兒/這裏、野貓/兔子、學房/學堂、這程子/這些時、早傘/布傘、幌子/招牌、蠟燈/燭台、零兒/零頭、時令/時症、書櫃子/書架子，書板上、醒鐘/鬧鐘
動詞	巴結/造就、布/動手、丟/掉、不得勁/下不去、蹭蹬/遲滯、出門子/出嫁、打圍/打獵、短/少（15）、對勁/合式、封/估、服侍/照應、幹/做、逛/玩、逛逛/玩玩、逛一逛/玩一玩、逛逛/蕩蕩、逛/游、給（給予）/把（給予）、瞎咧咧/多談、忌/戒、覺着/覺得、狡情/嘴硬、遛達/遊蕩、遛達遛達/游蕩游蕩、溜打/蕩蕩、落/跌，疊、掉/跌、沒/沒有、沒落子/沒着落、磨稜子/挨、瞧/看、瞧瞧/看看、沏茶/泡茶、讓/請，引、扔/丟、撒謊/掉謊，撒白話、上/到、上/往、上/進、上、在、睡/困、折/斷、使/用、使喚/使用、使得/可以，可得、拾掇/收拾、耍/賭，玩、耍手藝/做手藝、忘/忘記，丟、邀/稱，平、望看/奉看、喳/是，唯，哦，來、扎掙着/免強的、招/加、作/做、掌燈/點燈、掙/賺、知道/曉得
形容詞	背/閉、磁實（結實）、得了/好了，成功、得了/好了，是了，夠了、賤/便宜、齊截/齊全、舒坦/舒服，熨貼、涼/寒、雲山霧照/海闊天空、晚/晏、左/怪、俐儷/乾淨、熱（水）/滾（水）
量詞	倆/兩個、盪/回
代詞	多咱，多僭/多早，麼早，兒早、那兒/那裏，那裏、哪兒/哪裏，那裏、您納/您、誰/那個，哪個、僭門/我們
介詞	按/照、按着/照着，據着，看着，把/拿、打/從、趕/及、趕/到、趕/從、趕/正、趕/至、趕/候、趕/等、趕/剛、給/被、給/等、給/把、給/將、給/和、給/與、給/個、給/得、給/發、給/替、給/同、叫/被、叫/等、叫/為、叫/或、解/由、解/從、起/在、起/從、起/由、起/往、往/朝、往/同、得是/為的是
副詞	別/莫、敢情/原來，當真，那曉得，那曉，想情、管保/包管，保管、約摸/大約、約摸/想着、敢自/竟
助動詞	得/要、用/要
助詞	來着/來的，來呢，來呀，呢、着/的
連詞	可/卻
語氣詞	了/得，呢，呀，咯，來

本研究の第1、2章で考察した初版『官話指南』の北京話語彙と文法から、表9で示した右文の“出門子、娘們兒、布、別、敢情、來着、這麼着、多僭、解”などは全て北京語の特徴が比較的強

い表現である。それを左文では“出嫁、婦女們、動手、莫、原來、來的、這麼的、多早、從”などに追記している。このことから、左文の表現は北京語の特徴をもつ語彙ではなく、南京官話の特徴を持つ語彙を使用している傾向がうかがえる。

また、南北官話について、多数な研究の中に述べたが、Edkins, Joseph と郭锐、翟贇、徐菁菁らが南北官話についての論述は『官話指南』とより類似していると思われる。Edkins, Joseph が編纂した『A Grammar of the Chinese Colloquial Language, Commonly Called the Mandarin Dialect』（官話口語语法）（1864：10）によれば、帝国宮廷で使用される言葉を習得したい人は、北京官話を学習すべきである。北京語特有の要素を取り除いた北京官話が帝国官話であると指摘している。また、郭锐、翟贇、徐菁菁〈汉语普通话从哪里来？—从南北官话差异看普通话词汇，语法来源—〉（2017：8）は“来自北京官话的词汇具有口语色彩，较为通俗；来自南京官话的词汇具有书面语色彩，较为正式。”（筆者訳：北京官話に由来する語彙は口語の色彩を有し、南京官話に由来する語彙は文語の色彩を有し、より公式的である）と指摘している。

『官話指南』は清末の北京官話教科書として、上述の特徴を反映している。しかも、上表にある表現を見ると、確かに南京官話の部分はより文語に近く、北京官話の部分はより口語に近い。そのために、本研究の北京官話は帝国官話を取り除いた上流階級が使う言葉であるという定義づけを試みる。そのうち北京官話の中で北京語特徴を有する言葉を本章の分析の重点とする。このため、本章では郭锐ら（2017）の南京官話の論説、双行注右文の表現が北京語辞典などに収録された語彙であること、双行注左文に複数回の追記があること、などが南北官話を区分する基準とした。その上で、双行注において先行研究が指摘していない南北官話の表現を考察する。そして、南京官話に属する表現を初版『官話指南』と比較し、初版『官話指南』に南京官話がどのくらい使用されているのか、その分布状況はどうのようになっているのかについて新たに考察を行う。

3.2 九江版『官話指南』右文の版本研究

九江版『官話指南』の底本を明らかにする為、初版『官話指南』から九江版『官話指南』までの間にある1882年（初版）、1886年2月に上海脩文活版館に出版された版本、1886年12月に出版された国家図書館に所蔵している版本、1887年版（フランス語対訳版）の4版本を九江版『官話指南』右文と比較したが、いずれも九江版『官話指南』の底本ではないことが判明した⁽¹⁾。

九江版『官話指南』の底本は初版『官話指南』そのままではなく、多くの相違箇所が見られる。ただ、これらの相違が刻板や印刷上のミスによるものなのか、この点を明らかにするために、本節では両版本の比較を行い、「初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の文言差異対照表」を作成した。表7に掲載する用例における斜線の前項は初版『官話指南』の原文で、後項は九江版『官話指南』の右文である。提示の順は「着/著(2)」のように、前項の「着」は初版『官話指南』右文の表現で、「著」は九江版『官話指南』右文の表現で、「(2)」は両版本において、このような相

⁽¹⁾ 韓国學中央研究院が所蔵する『官話指南』も確認したが、著者、出版年不明であり、九江書会版の内容とも一致しない。

違の箇所は2回が出現したことを示す。「以/已」のように数字が表示されていない部分は両版本の相違箇所は1回のみ出現したことを表す。“×”は『官話指南』の原文表現が削除されたことを示す。また、脱字、誤字、増字の項目における下線は初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の相違箇所である。

表7 初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の文言差異対照表

	初版『官話指南』/九江版『官話指南』右文 (回数)
異体字	礙/碍 (2)、百/佰、盃/杯 (3)、布/佈、吃/喫 (3)、窓/窗 (2)、胆/膽、盪/盪、櫂/凳 (3)、弔/吊、疊/叠 (2)、二/弍、鏽/锈 (2)、趕/趕 (7)、個/箇、雇/僱 (2)、館/館 (17)、菓/果 (4)、狠/很 (3)、胡同/衚衕 (5)、俱/具、淨/净 (2)、裡/裏 (3)、裏/裡 (14)、糧/粮 (4)、麪/麵 (2)、拿/拏、舖/鋪 (58)、鋪/鋪 (13)、曬/晒 (9)、升/陞 (2)、十/拾、拾/十 (2)、階/階、擡/抬、儻/倘、誤/悞、碁/棋 (2)、驗/驗、驗/驗 (2)、藥/药 (14)、以/已、備/備 (5)、于/於、着/著 (2)、著/着 (3)、桌/棹 (9)、作/做 (2)、槍/鎗 (4)、款/欸、朱篋園/朱小園、景致/景緻。
脱字	這實在/實在 (2)、都得有個榜樣兒/都有個榜樣兒、那層倒沒甚麼/那層沒甚麼、多少房錢麼/多少房錢、販來/販、是竟瞧門脈呀/是瞧門脈呀、小一點兒的/小一點兒、您納、您倒好/您倒好、若是/若、事情都辦完了/事情辦完了、也不用先給錢/也不先給錢、他願意/願意、偷果子賣的事情/偷果子的事情、那搭窩棚用的/搭窩棚用的、那個包果子的/那包果子的、這麼些個/這麼個、天也就黑上來了/天就黑上來了、忽然/忽、百兩銀子/百銀子、又跟過一回官/跟過一回官、趕過幾天/趕幾天、早起起的身/早起起的、都是/都、這麼早上西街去/這麼早上西街去、各棧裏/各棧、舖子裏/舖子、回棧裏去/回棧裏、事情/事、幾回/幾、他宦囊怎麼樣/宦囊怎麼樣、這麼些個/這麼個、總沒有/沒有、那些個/那些、有件要緊的事/有緊的事、那個/那、原先本/原本、還不算多/還不多、怕是/怕、他連/連、這麼寫/這麼、不去耍去了/不去耍了、這麼樣兒的/這麼樣兒、這天晚上/天晚上、怎麼/怎、肝氣的病勾起來/肝氣的勾起來、有一個/有個、他們/他、就定規/定規、若是/是、真湊不出/湊不出、人家的便宜/人家便宜、我們的東西/我們東西、來告訴/告訴、眼睛/眼、我們先伯/我先伯、趕偌門/偌門、就回家去了/回家去了、聽見/聽、這件事/這事、有一個/一個、借給/給、一根/根、那棧裏的/棧裏的、出來了/出了、就和/和、給您打回來/給打回來、拿來/來、趕小的到了家/小的到了家、他的這個妾/這個、他家裏/他家、一兩銀子來/一兩來、假的麼/假的、就求/求、這包/這、銀子/銀、有個/有、見天/見、明兒個/明兒、那個人/那個、就是剛纔/剛纔、昨兒個/昨兒、自然是/自然、偌們/偌、客人/客、鄰封知縣/鄰封、我就/我、笑話兒/笑話、早叫人/叫人、一個是/一個、節孝祠的/節孝祠、他們的/他們、您願意/願意、地方的人/地方人、說的話/說話、原來/原、得要

	<p>/要、這個/個、這件事/這事、瞧見/瞧、真是個/真是、等着/等、你就開飯/你開飯、碗給拐躺下/碗拐躺下、請老爺/老爺、借給/給、大夫的/大夫、請個別的大夫/請別的大夫、細細兒的/細細兒、東西的/東西、今天得/今天、去把/把、還照舊/照舊、都照舊/照舊、那綢子/綢子、官座兒/官座、若是現在/現在、四吊的/四吊、屋裏的/屋裏、甚麼/甚、大門外頭/大門頭、告訴過他/告訴過、我昨兒個/昨兒個、悄悄兒的/悄悄的、把我的/我的、這些個/這些、不咖/不、那我/我、把這零碎兒/把零碎兒、那把早傘/那早傘、磁器/器、盛開的時候/盛的時候、打辮子/辮子、乾淨/淨、都拾掇/拾掇、這是/是、夾拿着/拿着、那位/那、回稟/稟、那幾個/那個、我到他們那/到他們那、趕你回頭/你回頭、可以/可、小的的工錢/小的工錢、拿着/拿、這個/這、俄國公館/俄國、先挨一挨/挨一挨、實在是/實在、也就/就、癸未那年/癸未、就是了/是了、一準/準、我明早/明早、倘有/有、他這不過是/他不過是、遊歷/歷、督撫轉飭各地方/督撫各地方、他們/他、闔下這一向/一向、領事官/領事、晉昌號/晉昌、辦理/辦、我到府上/到府上、兄弟是/兄弟、府上/府、我也是/我是、我現在是在此/我現在此、今日/今、我們舍親/我們、明日就見/明日見、你們/你、也是/是、裏頭/裏(2)、慢慢兒的/慢慢兒(2)、叫他/叫(3)、今兒個/今兒(3)、京東的人/京東的(5)、說合/說(2)、掌櫃的/掌櫃(4)、錢舖的人/錢舖的、多少石/少擔、哼，你打洗臉水來罷/你打洗臉水來罷、這個工夫兒天忽然下起雪來了/天忽然下起雪來了、你自己不幹了要回來/你自己不幹了、那一案前日我已經照會領事官了/前日我已經照會領事官了、還富餘五千多兩銀子哪/還富餘五千多兩銀、這麼着他要把/他要把、走路的時候/走路、院子/院(2)、走到/走、將來/將、票子/票。</p> <p>九城的錢舖都按着這一個行市。每天買銀子的賣銀子的不能一定，一天是一個行市。/×、那麼您見天在家裏作甚麼呢。/×</p>
增字	<p>鬧多僭/鬧到多僭、房/房子(4)、間/間數、落/落腰、出了盪外/出了一盪外、問他/問過他、銀/銀子、我回去/我就回去、會子/一會子、沒/沒有、個/一個、我必/我就必、找去/去找去、當舖/當舖裏、死了/病死了、回來/回來的、京/京裏、院裏/院子裏、慢慢兒/慢慢的兒、斷/穩斷、你們到我家/你們可以到我家、你們是幹什麼的/你們是來幹什麼的、聽這話/聽見這話、點/一點、趕起衙門/趕起在衙門、做買賣/做買賣了、洩漏的/洩漏出的、趁願/趁願的、驚下去了/一個驚下去了、盤貨/盤貨的、竟/竟是、送信的/送信的人、一百錢/一百個錢、帶/帶了、那個人說/那個人就說、碰/碰着、牆/門牆、猜/猜着、臉水/洗臉水、帶着個/帶着、東嘎拉兒/東邊嘎拉兒、照舊/照着舊、喜歡武戲/喜歡聽武戲、還得/還得以、可得/總可得、小爐/小爐子、這些/這些兒、竟剃頭/竟先剃頭、跟他在那兒/跟他去在那兒、可是/可就是、想/想是、貴館/貴公館、看/看見、沒/沒有、同座/同座的、伯母大人/老伯母大人、暇/暇的、緊用項/要緊用項、回來了/回來拿了、上學房/上學學房、初八/初八日、聽/聽說、人/人家、家/我家、幾年/幾年的、聽/聽見、你/你的、膩/油膩、是和大人面商一事情。請教是甚麼事呢/是和大人面商一事情。哦，請</p>

	教是甚麼事呢、你們是幹什麼的/你們是來幹什麼的。
誤字	<p>幾分兒/幾分面、像您這到省之後/想您這到省之後、包賠/包陪 (2)、夜裏頭/月裏頭、腳蹠了很疼/腳蹠子很疼、長得很標緻/長的很標緻、遇見過兩回/遇見個兩回、爬到牆上去/扒到牆上去、道謝/到謝、一項多地/一項多地、會子/會了、把/打、沒錢借給他/錢沒借給他、巡檢/巡檢 (2)、也許/也許、是個/是過、拿着/那着、就/究、無/吾、恰/洽 (2)、今兒/今年、麵包/丐包、飯/餘、摺子/摺字、這個領子漿得這麼軟/這個領子漿的這麼軟、那有/如有、騎牲口/吃牲口、袂的和棉的/夾的和棉的、所有/所以、記性/記心、把衣裳一撤/把衣裳一撤 (2)、沒用/沒有、那麼你得把那溝眼通開纔好哪。/那麼你得把那溝眼開通纔好哪、妥當/丟當、禮物/李物、油泥/油呢、得/我、十子兒/十仔兒、首尾/手尾、每日/每月、但是/但見、逛/往、辦/辨、構訟/構頌、二百兩/二伯兩、叫我/叫他、道乏/道丟、茶葉/茶簾、勉強/免強、正在/正再、纔能勾往上巴結哪/纔能殼往上巴結哪、城外頭/城裏頭 (2)、您給/您納、對不住/不對住、又必趁願/又不趁願 (2)、石/擔 (4)、倒/到 (12)、形跡/形迹、托/託、拉躺下/拉淌下、溜達/溜打 (3)、他知道/也知道、別/卻、有/請、你回頭把我脫下來的東洋衣裳給疊起來/你回頭把我脫下來的東洋衣裳快疊起來、您的/老爺。</p>
類義表現	<p>待/等、那麼說/這麼說、賤姓吳/敝姓吳、置貨/買貨、是還得/還是得、升任/陞了、櫃/攔櫃、是砧藍作的人/是作砧藍的人、就是/是的、得/要 (2)、您/你 (14)、你/您 (4)、年紀/年歲、莊稼地裏/莊稼地方、出去/出外、倆/兩個 (3)、倆/兩 (13)、倆人/兩人 (4)、那倆/那個、下保/保下、僭們/我們 (3)、換替/替換、終久找的着/久總找的着、六套書/六部書、買賣/買貨、如今/於今、問/說、那個/那些、啟封/取封、都是/就是、這麼着/這麼樣、那麼/就麼、就是了/那是了、那家兒/他家兒、輪個一萬八千去/輪個一萬八千的、一座大樹林子/一個大樹林子、妹妹/妹子、前兩天/前幾天、丟了/失了、解/從、搬出/搬了、聽說/聽見、向着/同着、可就/就可、往回裏/往回頭、一看/一瞧、小的/小弟、看了/瞧了、給/把、樣兒/樣子、打尖的/打腳的、帶到/帶進、押起來/押取來、咧/哪、得/的、給/和、七星罐兒/七星罐子、瞧見/看見、衣裳/衣服、琉璃廠/玻璃廠、前面/門前、板櫈兒/板凳 (2)、很妙/很好、叫/要、那麼/那個、得/可、拴到/拴在 (2)、都/好、趕/等、零兒/零頭、那兒/那裏 (2)、了/呢、愣着/挨着、得/就、老/總、多宗晚兒/多早晚兒、得/要 (2)、怎麼辦/怎麼樣、花園子/花園裏、要謊價/說謊價、棗兒/棗子、得了/有了、碰船/撞船、撞折了/碰折了、撞壞了/碰壞了、碰折了/撞折了、賠多賠少/多賠少賠、升任/陞運、春天/春間、共總/總共、罕見得/罕見了、往來/同來、公務/公事、竹板/板子、這麼着/這麼的、正晌午/正當午、您那棧裏/棧您那裏、肚帶/帶肚、在家了/在了家、若是隨便/雖若是便、拜客去/去拜客、領贓去/去領贓、賣去了/賣了去、起下誓了/起下了誓、又愛要錢/又要愛錢、底下我/我底下、誰知道/知道誰、就回手/回手就、再到他家/再他到家、邀了邀/了邀邀、倒換多了/倒多換、今日是初到/是今日初到、</p>

到的京/到京的、動的身/動身的、先找馬去了/先找了馬去。

文言差異の対照表および初版『官話指南』と九江版『官話指南』の比較から見えてくる両版本の相違は以下のようにまとめられる。

(1) 初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文は異体字、脱字、増字、誤字、用語表記の相違などの5項目において計797箇所の一不一致がある。

(2) 両書の異体字による相違は53例ある。変更回数が多いものに「舖/鋪」^①、「館/館」、「裏/裡」がある。「舖」は8割以上「鋪」に変更しているが、卷之四「官話問答」の「舖」は九江版『官話指南』で9割以上「鋪」を用いた。

(3) 九江版『官話指南』右文には脱字もあり、文章の脱落もある。脱字は「願意/您願意」、「是瞧門脈呀/是竟瞧門脈呀」、「悄悄的/悄悄兒的」、「事情辦完了/事情都辦完了」など^②、文章の脱落では「那麼您見天在家裏作甚麼呢。」、「九城的錢鋪都按着這一個行市。每天買銀子的賣銀子的不能一定，一天是一個行市」、「這個工夫兒」などの例がある。この他に、初版『官話指南』の「他的這個妾、我們舍親、百兩銀子」などを、九江版『官話指南』右文で「這個、我們、百銀子」などに変更したことで、文意に差異が生じている。これらの状況から、脱字は印刷上のミスによるものではないと断定できる。

(4) 初版『官話指南』は「配個套了、辨、賊裏³、持來謝步、必致貽笑大方、馬頭」のような誤字もあり、九江版『官話指南』はそれらの誤字を「配個套子、辦、/賊了、特來謝步、必至貽笑大方、碼頭」を修正した。

(5) 初版『官話指南』にある動詞“置”、代詞“這麼着、俗們”、介詞“趕、待”、“VP+去”形式である“買貨去、拜客去、請安去、領贓去”などの北京語特有の表現は、九江版『官話指南』右文でそれぞれ“買、這麼的、我們、等、等、去買貨、去拜客、去請安、去領贓”に変わった。また、初版『官話指南』の「起下誓了、賣去了、先找馬」などを、九江版『官話指南』右文では「起下了誓、賣了去、先找了馬」と変更した箇所が多い。何度もとなく「動詞+了+vp」の形式に変更したことから、変更後の形式は南京官話表現の傾向が見られる。また「碰船、撞折了、撞壞了、碰折了」を「撞船、碰折了、碰壞了、撞折了」に変更したことから、「碰」と「撞」が混同している。

太田辰夫(1965:39)が「右側が原文(北京語)、左側が改訂文(南京官話)となっている」と指摘しているところから、九江版『官話指南』左文に追記した部分は、実は大多数が南京官話であると考えられる。たとえ九江版『官話指南』右文の底本が何であるのか分からないとしても、その底本はいずれにしても初版『官話指南』と関係があるため北京官話の特徴を有する版本であることに違いない。そして、初版『官話指南』と九江版『官話指南』右文の比較を通して、初版『官話指南』の一部の北京語の表現が、直接本文で南京官話に変更されており、双行注の形式を取らずに体

① 斜線の前項が九江版『官話指南』右文で、後項は初版『官話指南』の原文である。

② 横線箇所は脱字である。

³我當是有了賊裏，就趕緊的叫底下人們起來，快打着燈籠照照去。(2卷-25章)

現されている。これは九江版『官話指南』の双行注作業による改訂が文面に乱れを生じたことを意味する。

(6) 太田辰夫 (1965) と張美兰 (2008) はともに、九江版『官話指南』は初版『官話指南』の改定版である、と述べたが、本研究の調査により全書に 797 箇所もの相違があることが判明したことから、九江版『官話指南』右文の底本は初版『官話指南』ではないと考えられる。そして、不一致の箇所についての分析を通して、おそらく底本に使用した版本は『官話指南』の正規の版本ではなかったか、あるいは著者である九江書会が編纂の際に底本を混同させてしまった可能性もあると推測できる。

3.3 九江版『官話指南』にみられる南北官話の差異

3.3.1 名詞、動詞、形容詞、代詞と連語構造類

前述の先行研究ですでに九江版『官話指南』の南北官話の対応語彙の一部を挙げた。本節では「九江書会本『官話指南』双行注対照表」に基づき、先行研究で触れなかった南北官話表現について再度整理する。まず、九江版『官話指南』の全書には 3078 箇所の双行注があり、重複する表現を除くと 1087 種になることが確認できた。本節では双行注を名詞、動詞、形容詞、代詞、量詞、介詞、副詞、助詞、語気詞、フレーズ、不对応に分類し分析する。また、太田辰夫 (1965)、氷野善寛 (2012) によると、九江版『官話指南』における左右の対立はそのまま南北官話の対立を絶対的に表示したものであるのではないので、ここでは北京語特有の語彙を主とする。言い換えれば、北京語特有の語彙に属し、さらに九江版『官話指南』の双行注で追記されたものを収録する。このため、本節は本研究第 1、2 章に挙げた初版『官話指南』の北京語語彙、文法項目等の研究を踏まえて、九江版『官話指南』にある南北官話表現を表 8 にまとめる⁽¹⁾。

表 8 名詞、動詞、形容詞、代詞、量詞、連語構造類の双行注における南北官話の対応表

音順	北京官話 (右文) / 南京官話 (左文) (回数) ⁽²⁾
B	白給/白的、辦結/辦了 (2)、寶局上/寶廠裏、抱沙鍋/扞棍兒、北上/到京、比/如、不多/不過、不舒坦/不舒服、不得勁/下不去 (2)
C	攏/拉 (2)、承/蒙、出馬/出外 (2)、出馬/出街 (2)、出息兒/出息的、岔/錯、窗戶/窗子 (3)
D	打圍/打獵 (6)、搭/叫、打着/打的、打/退、打點/打算、耽悞兒/耽悞的、道兒/路、道/路 (2)、道乏/道謝、道費心/道謝、得/是 (2)、得了/好 (2)、冬子月底/冬月底、賭局/賭廠 (4)、對面兒/對面那、對/關、對/是、對不住/對不過、墩/抹 (2)、多咱/幾年、倒/頂 (8)

⁽¹⁾ 表 8 は表 6 の先行研究以外の南京官話を取り上げた。

⁽²⁾ 表 8 では九江版『官話指南』で改訂回数が 1 回の場合は特に注記せずに、2 回以上の場合には括弧内にその数を記した。

F	犯潮/有潮、飯莊子/包席館 (3)、房/房子 (4)、剛纔/方纔、封/估 (10)
G	蓋兒/蓋子、幹/弄、剛才/方纔、各樣兒/各樣、各人/自己 (2)、給/兌、給/付、工夫兒/工夫、勾起/引得、瓜子兒/瓜子、拐彎兒/轉彎兒、官帽兒/官帽子、歸着/歸齊、貴甲子/貴庚
H	好好兒/好好的、好/好啊、行情/行市 (3)、合宜/合式、黑上來/黑、後兒/後天、胡吹混嘮/驚天動地、花兒/花、幌子/招牌、回頭/一會、回頭/等下兒、會子/會兒 (3)
J	家兒/家屋 (2)、家兒/家、家/家裏、家兒/家裏、價兒/價錢、價兒/價錢、澆花兒/澆花水、今天/今兒、居停/東家
K	開出/開發、可不是/果然是、可作/可以做、可是/實在、都是、到是、正是 (6)、口氣/氣、虧短/虧空 (4)
L	老公/太監、累肯/累煩、累心/操心、裏頭/裏 (2)、兩樣兒/兩樣的 (2)、落下/着落
M	馬尾兒/馬尾、忙忙叨叨/忙忙碌碌、沒復元兒/沒有復元、煤球兒/煤兒、煤球兒/煤、昧/瞞 (2)、沒見着/沒看見、沒拿到/沒拿着、沒了/沒有了、
N	那層/那麼、那邊兒/那邊、拿下去/拿過去、腦門子/頭子、你/您、年頭兒/年歲、年歲/年紀、您納/您駕、弄錢/賺錢、挪/搬、那兒的話/那裏的話 (15)
P	傍邊/傍邊兒、破/拆
Q	前些年/前幾年 (2)、遣/打發、叫 (2) 錢/價、瞧門脈/在家看下、瞧門脈/上門看脈、瞧着/看了 (13)、瞧瞧/看看 (13)、起的/動的身、起身/動身 (3)、輕省/輕鬆、欽佩/佩服、親身/親自、屈心/虧心 (3)
R	讓/請 (4)、認苦子/吃虧、認得/認識、日子/日期
S	撒開/撒胆、山兒/山、晌飯/午飯、上/去、上/着 (2)、上/進 (9) 聲兒/聲音、實誠/誠實、說/曉得、四季兒/四季、數兒/年幾、舒坦/舒服 (3)、上京/進京、似乎打了兩下/打了兩下兒似的、受/蒙、舒坦/熨貼、耍/做 (4)、耍/賭 (15)、耍/玩、所兒/處所
T	討擾/叨擾、套/布 (10)、頭/匹
W	外邊兒/外邊、完上來了/完了、往後/以後 (2)、為得是/為的是 (2)、屋/房 (2)、屋裏/房裏 (10)、屋門/房門、屋子/屋裏、
X	瞎咧咧了/多談了、下/下來、下落/着落、現時/現在、些個/許多 (2)、些個/些 (2)、些個/好些、些個/些兒、些個/好多、些個/些微、心煩兒/心煩呢、杏兒/杏子、性兒/性子、新近/近來 (2)
Y	咬羈/欺生、要準兒/說定準、一茶一房/一茶一租、一盪/一回、一塊兒/一路兒 (2)、一會子/一會兒 (2)、一塊兒/一起的 (2)、應着/做倒、原本/本來、月頭兒/月頭、勻溜/勻勻
Z	咱們/我們 (2)、偌們倆/我們兩個 (2)、偌們倆/我兩個、偌們倆/我們兩人、怎麼着/麼的、扎掙着/免強的、宅門兒/公館裏 (2)、宅/公館 (4)、宅裏/公館 (2)、長/多 (4)、招/引、照樣兒/照樣的、這幾樣兒/這幾樣的、這一程子/這些時的、這麼着/這麼樣 (24)、這麼/這麼 (2)、這麼個/這些、掙/賺、重落了/翻了、指使/差使、知道誰/那曉得、粧假/作

表 8 には、1087 種のうちの南北官話表現 208 組を挙げた。そのうち、20 個の“耍”はそれぞれ“做、賭、玩”に追記され、“耍”が北京話特有の語彙であることが分かり、南京官話は“做、賭、玩”を使用する傾向がある。“抽冷子”は北京語で、“冷不防”と“不防備”に追記された。ただ、“冷不防”は北京語であり⁽¹⁾、“不防備”に追記したことから、“冷不防”は南北共通の表現である。“打發”は元々北京語語彙⁽²⁾で、九江版『官話指南』は右文の“遣”を左文の“打發”と追記したことから、“打發”は南北共通表現のように見える。右文の“家兒”はそれぞれ左文の“家、家裏”と追記し、また“家”は“家裏”と追記したことから、“家”は南北共通の表現であり、“家裏”は南方表現と思われる。右文の“可是”は左文の“實在、都是、到是、正是”と追記し、“可是”は南京官話ではなく、追記の左文は南京官話の傾向がある。また、九江版『官話指南』には“哦噠半片、跑海、跣窩、筋筋兒、拐躺下、磨蹭着”などの北京語の表現は見えず、それに代わる南京官話の表現もないため、これらは南京官話に対応する表現がないのだろう。そして、九江版『官話指南』は“兒化詞”の“昨兒、明兒、今兒”などを“昨天、明天、今天”に追記しているが、“今天、一會子、些個、那裏”を“今兒、一會兒、些兒、那兒”に追記するのもあり、それは誤植だと思われる。このことから、表 8 にある左文の表現は南京官話で、南北共通の官話表現の要素も含まれている。

また、『官話指南』の“上”は九江版『官話指南』において“到、去、進、着”に替えられた。“到、去、進”は動詞で、この動詞追記から九江版『官話指南』は初版『官話指南』より南京官話の動詞が豊かであると言える。また、“店裡住上(着)了。”の“上”は方向補語であるが、追記した“着”は助詞で、「している」の意味を表す。

例 209. 我可就上(到)衙門去，把他告下來了。(2-12)

(私は直ぐに役所に行つて彼を訴へました。)

例 210. 該帶上(去)的東西和吃食，趕都歸着好了…。(3-8)

(持つて行かなければならない道具や、召上り物の荷造りが皆出来次第…。)

例 211. 您先請在書房裏坐一坐，我上(進)裏頭告訴我們老爺去。(2-14)

(あなた先づ書齋に居て下さい、私は奥へ行つて主人にさう言つて来ます。)

例 212. 我在城外頭店裡住上(着)了。(2-2)

(私は城外の宿屋に泊まりました。)

3.3.2 介詞、副詞、語気詞類

介詞、副詞、語気詞のうち、介詞の追記が一番多く計 19 例ある。ここでは北京語特有の表現を

⁽¹⁾ 張美蘭 2007、157 頁。

⁽²⁾ 高艾軍、傅民 2013、163 頁。

中心に、先行研究および先行研究で扱わなかった介詞、副詞、語気詞を全て列挙する。このことにより九江版『官話指南』における介詞、副詞、語気詞の南北官話の対応状況が明らかになる。それらの表現は表9の通りである。

表9 介詞、副詞、語気詞類の双行注における南北官話の対応表

音順	北京官話（右文）/南京官話（左文）（回数）
A	按着/照着（4）、按着/據着、
B	白/不過、別/莫（38）
C	從/解、抽冷子/冷不防、抽冷子/不防備
D	打/從、打/從（5）、等/待、都/總、大概/隨便
G	趕/等（100）、趕/到（7）、趕/及（12）、趕/從、給/替（62）、給/把（129）
J	叫/被、竟/光是、
L	老/總（8）、老/又、冷孤丁/忽然、冷不防/不防備、來/呢（3）、
M	沒/不
N	啊/呢
Q	起/從（31）、起/在（8）、起/由（2）、起/往、全/都（2）、全都/都
S	所/都、所/定、所/數、所/就、所/是、所/已、所/總、所/實、上/往（19）
Y	呀/呢
Z	按/照（5）、罷/着

介詞については張美蘭（2008）が詳細に分析したためここでは扱わず、それ以外の副詞、語気詞について見たい。

表9から、語気詞の“啊、呀”は“呢”に追記した。“呢”は南京官話としている傾向が見られる。副詞“別、老、所”は北京語の表現であり、九江版『官話指南』は“別”を“莫”に、“老”を“總、又”に、“所”は“都、定”などを追記したことから、“莫、總、又、都”を南京官話と見なしている傾向が見られる。また、楊杏紅（2014：135）により、起点を表す介詞は“日本官話課本中出现了7个具有明显口语特色的北京官话词汇：‘起’、‘打’、‘从’、‘由’、‘解’、‘接’、‘跟’。”（筆者訳：日本の官話教科書に現れた7つの明らかに北京官話の特徴を有する口語語彙“起”、“打”、“从”、“由”、“解”、“接”、“跟”である。）と述べた。そのために、九江版『官話指南』右文の“從”を左文の“解”に追記したことは誤植であると判断できる。

3.3.3 その他

九江版『官話指南』に追記した後に、左文が右文の意味に合わなくなるところがある。ここでは文意不对応の箇所、原文を削除した箇所に分けて分析する。

- (1) 双行注における左右文意不对応の箇所

- 例 213. 後來是因為他挨着 (相與) 一個吃烟的朋友⁽¹⁾。(2-25)
- 例 214. 有多麼背 (閉) 呀。(2-15)
- 例 215. 那位和公待我倒還罷了, 得 (却) 就是這回辭館的時候…。(2-24)
- 例 216. 攙多一半兒水/攽多少的水。(3-3)
- 例 217. 瞧着好 (您駕我) 面善。(1-18)
- 例 218. 使 (可) 得罷。(3-17)
- 例 219. 睡晌覺 (睡中醒) 起來。(2-25)
- 例 220. 夥計們也都着 (看) 了忙了。(2-21)
- 例 221. 你們怎麼會叫他賺 (忽) 了呢。(2-36)
- 例 222. 安心 (用心) 調養纔好哪。(1-7)
- 例 223. 總得 (在) 下月初間…。(2-9)
- 例 224. 您點了對不對 (錯不錯)。(3-12)
- 例 225. 可以放下 (放出) 外任呀。(2-8)
- 例 226. 一味的愛說大話, 胡吹混嘮 (驚天動地)。(1-6)
- 例 227. 近來 (向來) 我的耳朵有點兒聾。(1-16)
- 例 228. 你先喝酒回頭再批評 (說)。(2-39)
- 例 229. 新近 (現在) 有我們一個同行的人。(2-14)
- 例 230. 那麼我們這 (將) 就走罷。(2-14)
- 例 231. 永遠 (向來) 沒小心過。(3-15)
- 例 232. 身體倒還 (想必) 康健。(4-15)

以上の例は、追記した後に原文と全く意味が違っている。例えば、“背”は“運氣不好”、“睡晌覺”は“睡午覺”⁽²⁾の意味であるが、追記した後の“睡中醒”と“閉”にはその意味はない。また、《現代漢語詞典》第5版によると、“近來”は“指过去不久到现在的一段时间”、“向來”は“从来；一向”、“永遠”は“表示时间长久，没有终止”という意味を表している⁽³⁾。“近來”を“向來”に追記すると、「耳遠い」のが「最近のこと」から「昔から」の意味になってしまう。“永遠”と“向來”の意味は似ているが、“沒小心過”と一緒に使うと、前者は少し違和感がある。

(2) 原文を削除した箇所

- 例 233. 我倒不覺很乏。⁽⁴⁾ (2-38)
- 例 234. 你瞧瞧你的袖子把這個碗給拐躺下了。(3-4)

⁽¹⁾ 下線を付けた表現は右分であり、括弧内は追記された左文である。

⁽²⁾ 張美蘭 2007、148 頁、159 頁。

⁽³⁾ 《現代漢語詞典》第5版 2010 の 714 頁、1489 頁、1641 頁。

⁽⁴⁾ 例文は九江版『官話指南』右文で、下線部は九江版『官話指南』右文で削除された所である。

- 例 235. 吆喝罷。(3-7)
 例 236. 啊, 先生歇過乏來了。(2-38)
 例 237. 是, 閣下也歇過乏來了。(2-38)
 例 238. 那纔是有眼裏見兒哪。(3-15)
 例 239. 平常是放印子為生。(2-35)
 例 240. 您上回叫我找的那十幾歲的小孩子。(3-1)

九江版『官話指南』右文で原文を削除したのは計 53 箇所あり、内容の重複するものを除くと、計 25 箇所になる。その中には削除後も、文意が変わらないものもあるが、上述のように削除後に文意が通じないものは計 8 例ある。初版『官話指南』と細密に比較した結果、九江版『官話指南』右文は多くの誤植、錯乱、文意不対応の問題点が存在し、版本的価値についてはなお検討を要する。

3.4 『官話指南』(初版)に見える南京官話表現

上述の通り、九江版『官話指南』の双行注の左文は南京官話の表現に傾いていて、その表現が初版『官話指南』に見られるのか、どのくらいの割合を占めるのか、各巻での分布状況はどうであるのか、本節はこれらを考察の重点とする。調査の結果、初版『官話指南』にある九江版『官話指南』と同じ南京官話の表現は 117 例ある。本節は南北共通の表現、介詞、副詞、その他に分けて分析する。この分析は九江版『官話指南』の左文に追記された南京官話表現を利用して、初版『官話指南』の言語層と言語性質をより縝密に解析できるため、学術的意義を有する。また、初版『官話指南』に存在する九江版『官話指南』左文と同じ南京官話の表現は、表 10 の通りである。

表 10 初版『官話指南』にある南京官話の表現

音順	初版『官話指南』にある九江版『官話指南』の左文表現/ (北京官話表現と回数)
B	辦了(辦結)、搬(挪 11)、被(叫 12)、不(沒)、部(套 20)、本來(原本 2)
C	操心(累心)、指使(差使 4)、從(趕、解、起、打 9)
D	打的(打着 4)、打(退)、打算(打點 15)、大約(約摸 5)、待(等 7)、道謝(道費心、道乏 3)、到(上 81)、到京(北上 14)、對不過(對不住)、等(趕 28)、東家(居停 14)、動身(起身 2)、打發(遣 20)、叨擾(討擾)、多(長 74)
F	房子(房、屋子 14)、房裏(屋裏 16)、方纔(剛纔)
G	關(對 7)、貴庚(貴甲子、工夫、工夫兒 5)、果然是(可不是)、公館(宅、宅裏 6)
H	行市(行情 12)、合式(合宜 3)、剛纔(方纔 23)、回(盪 17)、忽然/冷孤丁(18)
J	今天(今兒、今兒個 3)、今日(今兒 34)、叫(搭 3)、幾年(多咱 23)、家裏(家、家兒 36)、價錢(價兒)、價(錢 17)、進京(上京 2)、近來(新近 3)
K	開發(開出)、可以做(可作)、虧空(虧短 8)、看看(瞧瞧 10)、可以(使得 5)

L	拉(攏)、路(道25)、來呢(來着9)、老太監(老公6)、裏(裏頭4)、兩個(倆12)、冷不防(抽冷子)
M	蒙(承、受9)、每天(見天)、明日(明兒、明兒個9)、茅廁(茅房)、沒見着(沒看見)、沒(沒有71)、明天(明兒、明兒個7)、煤(煤球兒5)、莫(別2)
N	那就是了(那就對了11)、那兒(那裏35)、弄・做(幹31)、您(你、您納330)、年紀(年歲2)
P	便宜(賤8)、佩服(欽佩3)、匹(頭19)、平(邀32)
Q	氣(口氣)、欺生(咬幫)、前天(前兒個2)、前幾天(前兒個8)、前幾年(前些年4)、親自(親身2)
R	如(比6)、認識(認得5)、日期(日子)
S	少(短23)、時候(工夫71)、實在(可是64)、舒服(舒坦4)、上司(上游2)、聲音(聲兒2)、是(喳106)、隨便(大概)
W	晚上(黑下25)、完了(完上來了33)、往(上22)、屋裏(屋子25)
X	現在(現時109)、性子(性兒)
Y	要(得19)、由(解、起28)、又(老2)、以後(往後2)
Z	自己(各人、自各兒29)、嘴硬(狡情2)、着落(落子、下落3)、賺錢(弄錢3)、照(按9)、這麼着(這麼着8)、這樣(這麼5)、這些個(這麼個6)、賺(掙15)、昨日・昨天(昨兒7)、做事(做活)、總(老、都17)

3.4.1 南北共通の表現

表10を見ると、九江版『官話指南』の左文の表現は初版『官話指南』に117個現れる。表にある“嘴硬、狡情”は全て北京語特有の語彙であるが、九江版『官話指南』は右文の“狡情”を左文の“嘴硬”に追記しており、これは“狡情”が“嘴硬”よりも北京語特徴がさらに強いことを表している。そして、“嘴硬”は初版『官話指南』にも使われているため、“嘴硬”が南北共通の表現と言える。同様に、“咬幫、各人、自各、邀、道乏、居停、您納”などはいずれも北京語特有の語彙であるが、“欺生、自己、平、道謝、東家、您”などは南北の語彙である。また、右文の“昨兒、性兒、聲兒、明兒、今兒、今兒個”などの“兒化詞”を左文の“昨天、昨日、性子、聲音、明天、明日、今天、今日”などに追記している。“兒化詞”は確かに北京語の特徴をもつ語彙であるが、しかし左文の追記した後の表現も南北共通の語彙である可能性がある。特に現代漢語と一致する“昨天、今天、明天”のような語彙は、南京官話と言うより南北共通の表現の傾向がある。“今日、昨日、明日”などは文語の傾向が強い。このためこの種の語彙の多くは南京官話の傾向にある。その他、方纔、剛纔のように、九江版『官話指南』の右文の“方纔”が左文の“剛纔”に追記され、同時に右文の“剛纔”が左文の“方纔”に追記され、しかも初版『官話指南』に2種類の表現がある状況下においては、この種の語彙は南北共通の表現であることを意味している。このため、表10

の大部分の左文の表現は、南北共通の語彙である。このように類推していくと、初版『官話指南』にも多くの南北共通の表現が存在する。もちろん、“貴庚、貴甲子”のように左右文ともに比較的
に文言的な表現もある。このような表現は初版『官話指南』にもあるが、その大部分は「官話問答」
に見える。また、“方纔、剛纔”と同じく、左、右文ともに用いられ、しかも初版『官話指南』に
もその二つの語彙を共存している場合、この二つの語彙は南北共通の表現と言える。

3.4.2 介詞、副詞類

(1) 介詞

張美蘭、李穎 (2007)、齊燠 (2016) は九江版『官話指南』の双行注に見える介詞について、詳細に分類している。張美蘭、李穎 (2007) の研究によると、北京語の特有の介詞は起点を表す“趕、起、解、打”、介詞“給”、“遵從方式”を表す“按” および“使、叫”がある。南京官話の傾向がある介詞に起点を表す“及、到”、“遵從方式”を表す“照”、被動を表す“被、等”がある。南北共通の介詞には、時間場所を表す“在”、起点を表す“等、由、從”、目標方向を表す“朝、望、向、往、到”、手段を表す“拿、把”、遵從方式を表す“據、依、憑”、關係を表す“和、同”がある。そのうち、起点を表す“及、到”、“遵從方式”を表す“據”、被動を表す“等”などの介詞は初版『官話指南』には見られない。このことから、初版『官話指南』に使用されている介詞は南北共通の表現と北京官話の傾向がある。

また、張美蘭、李穎 (2007)、齊燠 (2016) に提示されていない介詞“到/上、往/上”についての分析は以下の通りである。

1) 往、到 (上)

例 241. 我可就到衙門去，把他告下來了。(2-12)

(私は直ぐに役所に行つて彼を訴へました。)

例 242. 我們大人在上海住了不過兩天，就往這麼來了。(4-3)

我が公使閣下は、上海には僅か二日逗留せられたばかりで當地へ参られたのです。

例 243. 沿路上走着，往這麼來，也很遠哪。(4-3)

(途中御陸行で御出になれば可なり遠路です。)

太田辰夫 (1958 : 254) によると、“往”を介詞として用いることは唐宋五代に始まるようである。“上”が介詞として用いられるようになったのは極めて新しいようで、「中世にも介詞の如く用いた例はあるが、いずれも<上がる>という原義を失っていない。」と指摘した。上述の例から、この“上”は介詞である。太田辰夫 (1965 : 50) は「方向をあらわす<上>は南ではおおく<到>または<往>を用いるようである。」と述べた。また、九江版『官話指南』においては介詞の“上”はほとんど“往”に追記された。初版『官話指南』にはわずか4例しかないことから、方向介詞“往”が南京官話として使われる傾向がある。

(2) 副詞

1) 莫 (別)

例 244. 是十字口中擡，莫作田字猜，無頭又無尾，悶死一秀才。我猜的是魚字，揭了來了。(2-40)
(「十の字を口といふ字の中にはめ、田の字とは考ふる勿れ、無の頭と無の尾、一秀才を悶死せしむ。」といふ題です。私は魚の字と判じて中りました。)

楊杏紅 (2014 : 97) は、“古代汉语の否定副詞如‘莫’、‘勿’、‘否’等，除了引述古语的时候之外，在北京官话课本中很少见到。”(筆者訳：古代漢語の否定副詞、例えば“莫”、“勿”、“否”などは古語を引用する時以外めったに北京官話教科書には現れない。)と述べた。太田辰夫 (1969) が提示した北京語における7項目の特徴に禁止を表す副詞「別」がある。九江版『官話指南』において“別”を“莫”に追記した箇所は38例あるが、初版『官話指南』には禁止副詞としての“莫”は1例しかない。しかもそれは「迷語」で、やや古い言葉である。すなわち、南京官話の禁止副詞「莫」は古代漢語と同じものである。

2) 總 (都)

例 245. 他來過幾回我總沒大理他。(1)

例 246. 老兄，怎麼這程子我總沒見您哪。(2-12)

“都”は“全部”⁽¹⁾の意味を表し、北京官話である。初版『官話指南』には副詞としての“總”は17例あり、そのほか、“總是、總得”などの用法に用いることも多い。“總”は南京官話によく使われているが⁽²⁾、九江版『官話指南』では1例のみしか追記していないため、“都”と“總”は南北共通の表現であると言える。

3) 總、又 (老)

例 247. 我聽見說，這京裏賣得牛奶裏頭，總攪多一半兒水，這話是真的麼。(3-3)

(おれはお前に尋ねる事がある、この北京で賣る牛乳の中には、屹度半分以上も水を混ぜるといふことを聞いたが、この話は本当だろうか。)

例 248. 怎麼這程子我總沒見你呀。(2-10)

(どうして此頃は一向見受なかつたのか。)

例 249. 你真是個廢物，我那麼用心的教給你怎麼又忘了，太沒記性了。(3-10)

(お前本當に役に立たない奴だな、おれがあんなに一生懸命で教へてやつたのに、どうして又忘れたのか、あまり覚えが悪い。)

⁽¹⁾ 卢小群 2017、332 頁。

⁽²⁾ 太田辰夫 1965、61 頁。

“老”は時間副詞として“总是”⁽¹⁾の意味を表わしている。九江版『官話指南』では副詞“老”を“總”、“又”に追記し、それぞれ2例と1例であるが、“老”は北京語特有の副詞として、“又”に追記することから、南京官話の傾向が見られる。初版『官話指南』では時間副詞の“總”、“又”の例は少なく、ほぼ“總是”を用いている。

4) 忽然(冷孤丁)、冷不防(抽冷子)

例 250. 可是赶到了夜深了，忽然颳起一陣風來，黑雲彩在滿天上直飛打的霹靂很利害。(1)

(ですが、夜が更けて来たら、忽ら風が颳と吹いて来て、黒雲が空一面に飛び、雷がひどく鳴りました。)

例 251. 趕天有平西的時候，忽然跑來了個野豬，我們倆就拿槍一打，可就打死了。(2-15)

(日が傾いた時分に突然一疋の猪が駆けて来ましたから、私等兩人は鐵砲を一打ち打つて直ぐに打止めました。)

例 252. 他要招着我，我就攢足了勁兒，給他一個冷不防，叫他吃不了得兜着走。(1)

(『官話指南總譯』：若し私に仕掛けて来たらば、私は力を籠めてかれに一つの不意打を食はし、あれをしてあれを逃つびきならぬ目にあはせれやります。)

太田辰夫(1965:52)は“冷孤丁、冷不防、抽冷子”のいずれも“忽然”の意味を表わし、“冷孤丁”は北京語特有の時間副詞としている。初版『官話指南』には“冷孤丁、冷不防、抽冷子”それぞれ1例しか見えず、その他は全て“忽然”を使用した。九江版『官話指南』の双行注では右文の“抽冷子”を左文の“冷不防”に追記した。このことから“冷孤丁、冷不防、抽冷子、忽然”のうち“抽冷子、冷孤丁”は北京語の特徴が最も強いと推測でき、その次が“冷不防”である。一方、“忽然”は九江版『官話指南』の左文に現れるだけでなく、初版『官話指南』でも大量に使用されているため、“忽然”は南北共通の傾向がある語彙である。

5) 大約(約摸)

例 253. 今日已經打發人雇去了，大約明日可就雇齊了。(4-3)

(今日既に使を出して雇ひにやりましたから、大方明日は皆揃ふだらうと存じます。)

例 254. 那麼明早是在何時啟節呢。大約就在巳初罷。(4-4)

(それでは明朝何時に御出發ですか。大抵午前九時頃でせう。)

初版『官話指南』では“約摸”は北京語の文法特徴を持つ表現として3例あり、“估摸、估計”⁽²⁾の意味を表している。九江版『官話指南』はそれぞれ“相着、大約、想着”に追記していることから、南京官話では“約摸”を使わないのだろう。“相着”は“想着”と同じ意味であり、“相着”

⁽¹⁾ 卢小群 2017、326 頁。

⁽²⁾ 张美兰 2007、152 頁。

はおそらく誤植によるものである。

3.4.3 その他

1) 就得了 (就是了 73)

例 255. 那麼這件事，就按着那麼辦就是了。(3-1)

(そんならこの事はまあそんな風にしよう。)

例 256. 他若實在不聽勸那沒法子，只可由着他分家就是了。(2-11)

(あれが若しも本當に御意見を入れなければ致し方がありません、彼の言ふ通り分家させるだけのことです。)

2) 就得了 (就好了 2)

例 257. 明兒個不用餒他就好了。(1)

(『官話指南總譯』：明日は彼に喰はさないが宜い。)

3) 得了 / (穀了 4)

例 258. 白糖穀不穀。穀了。(3-3)

(白砂糖は足りですか。)

4) 那就對了 (那就是了 11)

例 259. 老爺不知道，他們那大字號都是言無二價，不敢要謊的。那就是了。(3-19)

(旦那は御承知ありませんが、彼等のあの大きな商店では、何處でも掛値は致しません。)

九江版『官話指南』は“就得了”の“得”をそれぞれ“好”、“是”に替えた。“就是了”と“就好了”はそれぞれ8例、4例ある。孟琮〈口語里的“得”和“得了”〉(1986:17)によると、北京語口語の文末に用いる“就得了”は2つに分けられる。1つは“‘得’上有重读音时,表示某种条件,即说话人要求的事或肯定的事。”(筆者訳：“得”を強く読む時、ある種の条件、つまり発話者が要求することあるいは肯定することを表す。)“就得了”の意味は“就可以了;就行了”である。もう1つは“‘就得了’轻读,即未然的事”(筆者訳：“就得了”を軽く読むと、未然の事)を表し、語気詞“得了”に相当する。李宗江〈近代汉语完成动词向句末虚成分的演变〉(2008:158)は孟琮の研究を踏まえて、語気詞“‘就得了’輕讀後,省去‘就’便成為‘得了’。”(筆者訳：“就得了”を軽く読んだ後、“就”を省略すると“得了”になる)と指摘している。楊杏紅(2014:150)によると、“就是了”は“日本明治时期的北京官话课本中表示语气的短语词”(筆者訳：日本明治期の北京官話教科書では語気を表す“短语词”である)であり、“就这样了”の意味を表している。以上のことから、“得了”と“就得了”はともに北京官話である。九江版『官話指南』は“得了、就得了”を“就好了、就是了、穀了”の3種類の南京官話に類似している言葉を追記した。そのうち“就是了”は南北共通の表現である。

3.5 『官話指南』北京官話特徴の再認識

本章は3つの方面から考察を行った。

まず、九江版『官話指南』の底本について考察を行った。比較を通して、初版『官話指南』の出版後から九江版『官話指南』が出版されるまでの間にあった版本は、いずれも九江版『官話指南』の底本ではないことが分かった。九江版『官話指南』と初版『官話指南』の比較から797箇所もの異同があることも明らかになった。具体的には異体字、脱字、増字、誤字、誤字の修正、用語表記の相違などの6種に分けられる。この6種の相違に対する分析から、九江版『官話指南』の底本は『官話指南』の正規の版本ではないことが明白である。

次に、九江版『官話指南』の双行注の研究に関する先行研究の成果を踏まえて、双行注の左右文の南北官話の特徴を分析した。さらに郭鋭らの論述と右文が北京官話であるなどの条件を基礎として、九江版『官話指南』の双行注についてより詳細に分析した。分析を通して、先行研究の成果も含め九江版『官話指南』において382組の南北対応の官話表現を見出した。そのうち双行注の右文の大部分は北京語特有の表現で、例えば、名詞の“成衣鋪、耗子、雞子兒、鋪保、野貓、出馬(指医生到病人家里診治)”など、動詞の“巴結、布、拾掇、耍、邀”など、代詞の“咱們”、副詞の“白、別、老、抽冷子、所”など、介詞の“解、趕、打、起”など、“兒化詞”である。そして、これらの表現が追記された左文は、南京官話あるいは南北共通官話の傾向があると思われる。

最後に、本章第4節においてこれらの用語を初版『官話指南』と比較した結果から、初版『官話指南』には以下の傾向が見られる。

- (1) 初版『官話指南』の各巻における北京語特有の表現、南京官話表現、南北共通表現の分布

本章は九江版『官話指南』の双行注の考察を通して、南北官話の差異を取り出した。その上で、南京官話の表現は初版『官話指南』に使用された例を見つけた。ここでは本研究の第一章、第二章の分析結果と合わせて、初版『官話指南』にある北京語特有の表現と九江版『官話指南』の左文表現(南京官話表現、南北共通の表現)の各巻における分布状況を整理する。詳細は次の通りである。

表 11 初版『官話指南』の北京語特有表現と九江版『官話指南』左文表現の分布

	應對須知	官商吐屬	使令通話	官話問答	合計
各巻の字数	3003 字	28299 字	10280 字	12631 字	54213 字
北京語特有の表現	230 例	1633 例	866 例	474 例	3203 例
北京語特有の表現割合	7.6%	5.8%	8.4%	3.8%	
左文の表現	49 例	413 例	105 例	172 例	1280 例
左文の割合	1.6%	1.4%	1%	1.4%	

表 11 の北京語特有の表現と左文表現の割合は表 5 と同じく、厳密なパーセンテージとは言えない。それぞれのパーセンテージから見たおおよその傾向は以下の通りである。北京語特有の表現の

割合から見ると、4巻のうち北京語特有の表現が最も多いのは「使令通話」である。「應對須知」は「使令通話」に次いで多いが、統計により、「應對須知」は“後綴‘兒’”のみが3分の1を占めている。「官話問答」は北京語特有の表現が一番少ない。また、初版『官話指南』にある九江版『官話指南』の左文表現の割合を見ると、「使令通話」の左文表現が一番少ないことが分かった。言い換えれば、四巻のうち「使令通話」は北京語特有の表現が最も多く、左文表現が一番少ないことから、「使令通話」は北京語特性が最も強いと言える。左文表現が一番多いのが「應對須知」である。左文表現は各巻における分布状況を整理している時に、“剛纔、忽然、自己、明天、兩個”などの南北共通の表現が、「應對須知」に多く現れるため、これも「應對須知」に左文表現が比較的多い原因であると言える。同時に“今日、明日、大約、由、保人、虧空、東家、兩個”などの南京官話は、基本的にそのほとんどが「官話問答」に現れているが、郭鋭ら(2017)の論述に従えば、これは「官話問答」に文語が比較的多いことと関係している可能性がある。“忽然、那就是了、自己、打發”などの南北共通表現は各巻それぞれに少数ながら使われている。以上の分析から、初版『官話指南』には北京官話、南京官話、南北共通の3種類の表現があり、初版『官話指南』の言語における多面性がうかがわれる。

(2) 九江版『官話指南』の双行注からさらに認識される初版『官話指南』の北京官話の特徴

本章は九江版『官話指南』の左文の表現と初版『官話指南』との比較を通して、初版『官話指南』に114個の左文の表現があることが分かった。これらの左文の表現は大部分が右文の北京官話から南京官話に追記されたものであり、特に右文の用語、何度もほかの用語に追記されたもの、その追記の回数から、このような語彙が北京官話の特性をもっていると判断できる。例えば、第一章、第二章で収録しなかった、北京語辞典にも収録されていない“讓、上、長、知道、瞧瞧、瞧瞧、可是、了、那兒的話、取”などの表現は北京官話の傾向が見られる。ほかに、初版『官話指南』の介詞“從、由、在、依、朝、向、望”などは九江版『官話指南』左文で追記されていない。例えば、九江版『官話指南』で北京話特有の起点介詞“解、起、打”などは全て“從、由”に追記されたが、“從、由”はほかの介詞に追記されていない。これは初版『官話指南』で追記しなかった部分が北京官話と南北共通の表現であるという根拠になる。

(3) 初版『官話指南』に含まれる南北官話の共通表現

上述の分析から、双行注の左文の表現でも、初版『官話指南』と九江版『官話指南』の文言差異においても、追記された部分の半数以上は北京官話から南京官話あるいは南北共通の表現に追記されたものである。特に大部分の南北共通の表現は初版『官話指南』にも存在する。これらの南北共通表現は南京官話の特性を有するが、北京官話の特性をも有する。これにより、初版『官話指南』が北京官話の特徴が比較的濃い教科書であること、また細部には前述した通り、北京官話の表現、南京官話の表現、南北官話共通の表現も教科書に共存していること、即ち、中国語官話の特性を体現化していることをさらに裏付けている。

上編結論

本編は語学の視点から『官話指南』の北京語語彙、北京語文法の分布状況を再検討し、また、教科書の使用言語に関して九江版『官話指南』と多方面にわたる比較分析を行った。本編の探究で『官話指南』は明治前期における北京官話教科書の代表作の位置づけはさらに実証され、『官話指南』の言語表現の多面性について解明できた。研究成果として以下に総括する。

(1) 北京語語彙の先行研究成果(218語)に基づき、各種文献資料を利用して、『官話指南』における北京語特有の語彙、“兒化詞”などさらに1.5倍に上る語数(353語)を精査・選出した上に考証を加えた。語彙使用の側面から『官話指南』は清末北京官話会話教科書として北京語の地域性、時代性と口語性を実証した。

(2) 北京語文法研究権威である太田辰夫(1950、1965、1969)と周一民(1998、2002)の論説を包括的に導入し、『官話指南』における文法表現について全般的に再検討を行い、北京語の特徴をもつ文法表現約70種を導き出した。文法使用の側面から『官話指南』は清末北京官話会話教科書として北京語の地域性、時代性と口語性を実証した。

(3) 教科書研究として、版本精査、初版と九江版右文の比較、相違文言の分析などの手法を運用して、異体字、脱字、増字、誤字、誤字の修正、用語表記の相違など約790箇所の一見不一致を見出した。初版『官話指南』と異なる箇所が数多く表れたことから、九江版『官話指南』右文の底本は正規な『官話指南』版本ではなく、編纂者が編纂作業の際に底本を混同させた誤植、誤記の多い不正規なものであることが結論づけられた。この点は九江版『官話指南』の最新研究成果としての意義が大きい。

(4) 九江版『官話指南』の双行注の諸先行研究を踏まえながら、九江版『官話指南』の左文が追記した南京官話の特徴を有する語彙をさらに探し出し、品詞、連語構造、不対応に分類、分析した。その分析から、双行注で追記した左文の部分は南京官話の特徴を有し、右文の部分は北京官話の箇所であることがわかった。そこから、『官話指南』の北京語特性が非常に強いことと九江版『官話指南』左文の南京官話の特質が強いことの両側面が一層浮き彫りにすることができた。

(5) 初版『官話指南』にある南京官話表現を品詞ごとに分析し、出現頻度も考察した。その分析から、『官話指南』の本文には北京官話、南京官話、南北共通表現の3種類が共存していることが確認され、その上北京官話が大多数を占め、南京官話、南北共通の表現はわずかであることが分かった。また、4巻のうち南北共通の表現は「應對須知」、「官商吐屬」、「使令通話」に存在し、南京官話の表現が9割以上も「官話問答」に存在していることが解明できた。

(6) 初版『官話指南』の南北官話の割合から、「應對須知」「官商吐屬」「使令通話」に南北共通の表現が多く、南京官話の特徴を持つ表現、及び文語はほとんど「官話問答」にあることが明らかになった。そこから『官話指南』における語彙の多層面の特徴が見られた。

(7) 北京語の語彙、文法の考察を通して、北京話特有の表現が最も多いのは「官商吐屬」、「使令通話」である。なお、「使令通話」において九江版『官話指南』の左文表現が最も少ないと分か

った。このことから、四巻の中には「使令通話」の北京語特性が最も強いということが解明できた。

(8) 九江版『官話指南』の双行注で追記されていない部分は大部分が北京官話と南北共通の言語表現であることが確認された。

中編 『官話指南』 学習補助教科書の総合研究

第四章 学習補助教科書の翻訳研究

4.1 『官話指南』 学習補助教科書の補助内容

4.1.1 『總譯』

(1) 『總譯』の構成

『官話指南總譯』（以下は『總譯』と略称）は金國璞改訂版『官話指南』（1903）を底本に翻訳した日本語全訳本である。『總譯』の初版は明治38年（1905）東京で出版され、著者は呉泰壽、発行者は田中慶太郎、発行所は文求堂書店である。『總譯』は改訂版『官話指南』の総訳本であるが、「凡例」の訳は付されていない上に、『總譯』の成書背景、目的などについての紹介もない。『總譯』は「酬應瑣談」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」「應對須知（舊版）」から成る。『總譯』の本文は1本の横線により上下2欄に分けられ、訳文の上欄に注釈があり、底本の『官話指南』の原文を載せていない。なお、『總譯』は翻訳と注釈の2方面から『官話指南』の学習の補助を設定している。発音については注釈にいくつか提示されたのみである。前述の改訂版『官話指南』で削除された「應對須知」を扱う点から『總譯』は『官話指南』（1882）と改訂版『官話指南』（1903）の2書の学習補助教科書であると言える。

(2) 著者呉泰壽について

呉泰壽に関する記述は少ないが、『日本人物情報大系』11巻（1999:122）の叙述が最も詳細であるが、他の書籍にも記述が点在する。また、国立公文図書館にも呉泰壽に関する任職の資料がいくつか保存されている。これらの資料に基づいて呉泰壽の生涯についてこれまで紹介されてこなかった事項を補充する。

呉泰壽は慶応元年（1865）2月、肥前国西彼杵郡下長崎村に生まれた。妻はいね、長男泰方、次男泰次郎、三男泰三、四男正雄、五男五郎、次女たね子⁽¹⁾であるが、長女の名は不明である。『史料摘録』の記載によると、呉泰壽の父は呉敬十郎であり、呉敬十郎は後に呉安來と改名した。呉安來は鄭永寧、呉碩の兄弟であり、「呉家の六駿」⁽²⁾と称された。そして、『官話指南』の著者呉啓太と鄭永邦の父はそれぞれ鄭永寧と呉碩である。そのため、呉泰壽と『官話指南』の著者呉啓太、鄭永邦はいとこ同士である。明治4年（1871）、呉泰壽は神戸で父呉敬十郎のもとで「漢学」と「清国南話」を学び始める。明治14年（1881）、官費生として東京外国語学校漢語学科で北京官話を学び始める。その後、東京高等商業学校でも学習する。明治18年（1885）3月、日本が清国政府と中日天津条約を締結する時、呉泰壽は伯父の鄭永寧と共に通訳を務め、伊藤博文大使に随行し天津と北京に行った。明治20年（1887）に呉泰壽は帝国水産学校教授の職を辞し、大阪内外棉株式会社に就職した。その後、上海清国の「原棉の買賣及金銀為替買賣」を調査するために、現地に「上

⁽¹⁾ 『日本人物情報大系』19巻（1999:212）によると、一家全員楽器を得意としていた。呉泰壽は13歳から父にシチリキを教わり、大連で雅学会を立ち上げた。長女と次女はピアノ、長男と三男はバイオリン、次男はヴィオロンチェロをそれぞれ得意としていた。

⁽²⁾ 『対支回顧録』下巻1936、32頁。

海出張所」を設置し、上海に滞在した。後ち、この「上海出張所」を神戸に移転させた。明治 27 年 (1894) 7 月、日清戦争時に随軍出征した。明治 28 年 (1895)、台湾が日本に占領された後、台湾に入り行政方面の仕事に従事した。明治 29 年 (1896)、台湾の淡水支庁陸軍通訳をしていた時に執筆した「学事上申書」⁽¹⁾は『秘書類纂第 台湾資料』18 卷 (1933 : 376) に収録されている。その後、台湾總督府法院の通訳を務め、従七位勳七等を授与した。明治 33 年 (1900) 7 月、陸軍通訳官⁽²⁾を務める。明治 34 年 6 月、休暇で日本⁽³⁾に戻るが、北清事変の時に再び随軍出征した。明治 34 年 (1901) 11 月、東京外国語学校の清語学科の初代教授に就任し⁽⁴⁾、東京高等商業学校講師も兼任した。明治 36 年 (1903) 4 月、東京外国語学校を離職した。「東京外国語学校教授吳泰壽以下二名依願本官並本職被免ノ件」⁽⁵⁾に添付された「診断書」を見ると、「脳神経衰弱症」を患ったために東京外国語学校教授職を辞した。明治 37 年 (1904) 3 月、大本營の「清語通譯」に任じ、月俸百円⁽⁶⁾であった。同年、日露戦争時に 3 度現在の東北地区に出征した。明治 38 年 (1905) 12 月、日本に凱旋する。その後、三井物産穀肥部の囑託を受けた。明治 39 年 (1906)、大連で「特産物」と「地金銀」の商売に従事した。その後、自ら和泰錢莊を創設すると同時に、「日華興業」、「大連證券交換所」、「大連製油各株式会社」で重要な職務に就いた。吳泰壽は合わせて 4 種の書籍を出版し、『支那交際往來公牘：北京語直譯附』(1902 年)、『支那交際往來公牘訓譯』(1903 年)、『日清往來尺牘』(1904 年)、『官話指南総訳』(1905 年)である。前の 2 種は金國璞との共編である。吳泰壽は商業の面で活躍したばかりでなく、外交、教育方面においても卓越した貢献を残した。

4. 1. 2 『自修書』

(1) 『自修書』の構成

『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書』(以下は『自修書』と略称)は飯河道雄が著した「譯註」(全訳)、「聲音」(仮名表記)、「重念」(重音)を附けた『官話指南』の学習補助教科書である。『自修書』の底本は上海商務印書館発行の『官話指南 The Guide to Kuan Hua with English Translations』である。『自修書』は 3 冊から成り、第 1 冊は大正 13 年 (1924) 出版、「應對須知」、「使令通話」を収録する。第 2 冊は大正 14 年 (1925) 出版で「官商吐屬」を、第 3 冊は大正 15 年 (1926) 出版で「官話問答」をそれぞれ収録する。3 冊とも大連の大坂屋號書店から出版され、ともに「例言」、各巻の「目次」、「飯河道雄先生著書目録」、本文から構成される。本文は横線 2 本により上中下の 3 段に分けられ、『官話指南』の原文(中国語)を中間に配置し、その上欄に『官話指南』の難解語

⁽¹⁾ 吳泰壽は公務の餘暇を以って日本語を教えていたが、段々と学生が増えて適切な校舎がないため、日本語学校を建ててほしいというのが「学事上申書」の趣旨である。

⁽²⁾ 国立公文書館所蔵。件名：「台湾總督府法院通訳官吳泰壽任官ノ件」。請求番号：任 B00241100

⁽³⁾ 国立公文書館所蔵。件名：「陸軍通訳官吳泰壽休職ノ件」。請求番号：任 B00266100

⁽⁴⁾ 野中正孝『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』2008、154 頁。

⁽⁵⁾ 国立公文書館所蔵。請求番号：任 B00332100

⁽⁶⁾ 防衛省防衛研究所所蔵。件名：「木下賢良、岡部次郎、西川光太郎、吳泰壽を第 2 軍司令部通訳に村田勤、松尾音次郎、酒井勝軍、中村邦佐を大本營付通訳採用方移牒村田勤削除の件」。請求番号：C09121994700

句の注解を、下欄に『官話指南』の日本語訳をそれぞれ配置している。中国語の一部の文字には右側に仮名表記、「重念」の記号などをつけている。「例言」によると、『自修書』は「且つ難語句には註解を加へ、尚ほ本文には、發音、四聲の圈點及重念の符號を附け、以て初學者の自修の便宜を圖つたものである。」という目的で編纂された。また、「例言」は『自修書』と底本の関係、および創作部分について次のように述べている。

本書は、本文と譯文及註解との對照を容易にせんが為めに、此三者を成るべく同行中に置くやうにし、且つ本文の各節に番號を附け、これに對應する譯文及註解にもそれと同じ番號を附け置てた。

例えば、

注釈の場合は、 1. 你看 看は見る又は思ふ。

訳文の場合は、 1. 這件東西你看是真的是假的。 1. 此物はあなた本物と思ひますか贋物と思ひますか。

本文各課の番號の下に、括弧内に入れて其課の題目を掲げたのは、全く譯者の私見によつて書き加へたもので、原文には無いのである。原文を汚す虞ありとは考へたけれども、學者の索引の便を圖らんが為めに、かく蛇足を加へたのである。

本書は文求堂から發行せられてある鄭永邦、吳啓太兩氏著「官話指南」とは全然第一篇の應對須知の部を異にし、他の三篇官商吐屬・使令通話・官話問答の三篇は殆んど大差無いやうである。

本書編纂に當り、前項の「官話指南」及吳泰壽著「官話指南總譯」に師事する所甚だ多い、茲に兩書著者に對し深甚の謝意を表する。

以上の記述から分かるように、『自修書』の日本語訳と注解は『總譯』を多く参考にしている。なお、「例言」では述べられていないが、『自修書』は『官話指南』の學習補助教科書として、注釈、翻訳、音声の3方面から學習の補助を設定した。

書名について、1924年出版の『自修書』の表紙と見返しには「官話指南自習書」と書かれているが、本文と奥付には『官話指南自修書』と記されている。本研究では便宜上『官話指南自修書』に統一した。また、この3冊は全て飯河道雄が編纂したものであるが、「例言」には若干異なる箇所もある。1924年出版の「應對須知篇、使令通話篇」と1925年出版の「官商吐屬篇」を比べると、「例言」の内容はほぼ同じであるが、「例言」文末において相違があり、1924年の方は「大正十三年三月 大連飯河研究室同人識」と書かれ、1925年の方は「大正十四年二月 旅順にて飯河道雄識」と記されている。そして、1926年出版の「官話問答篇」の「例言」では、その内容は先に出版した2冊と異なる箇所が多く、仮名表記の方法を紹介する項目もより詳細になっている（第六章第三節で詳述する）。そして、「例言」文末に「大正十五年一月 旅順にて飯河道雄識」と記されている。

このことから、1924年出版の『自修書』の「例言」は、飯河道雄自身が書いたものではなく、研究室の同僚が代筆したものであると推測できる。

(2) 著者飯河道雄について

飯河道雄の経歴については郭精宇（2015）《飯河道雄在华文化活动研究》が最も詳しい。国立公文図書館にも飯河道雄の在職についての資料が保存されている。ここでは郭精宇（2015）の研究成果と国立公文図書館の資料を合わせて飯河道雄の生涯についてこれまで紹介されなかった事項を補充する。

飯河道雄は明治15年（1882）12月に福島県北会津郡門田村に生まれた。明治37年（1904）1月から明治39年（1906）3月まで、官費学生として東京高等師範学校数学専修科に在籍した。明治39年（1906）11月から明治44年（1911）10月まで、河南省開封の優級師範学堂で理化科と数学科の教習⁽¹⁾を務めた。教学の業績が突出していたため、明治44年（1911）9月に清国政府から寶星勳章を授与された。同年10月、河南を離れ、東北地区的南滿洲鉄道株式会社（略称「満鉄」）に任職した。飯河道雄は満鉄において会社の中国人教育を主に担当した。大正2年（1913）、「満鉄教員講習所」を立ち上げ、大正4年（1915）4月にそれを「満鉄教育研究所」に改称し、主任に就いた。満鉄の行政職務を担当する以外に「満鉄付属地学校」でも勤めた。大正6年（1917）初め、長春公学堂で堂長を担当した。同年3月、満鉄内で唯一の中国人向けの中等学堂である南満中学堂を創設し、初代堂長に就任した。このほかにも、満鉄で仕事をした10数年間に飯河道雄は満鉄付属地域内の複数の公学堂と日語学堂の創設に関わった。大正12年（1923）1月、関東庁中国語奨励協會委員を務めた。大正13年（1924）9月、関東庁立旅順第二中学校教諭を務めた。同年、飯河道雄は大連で「東方文化会」を設立、その宗旨は中国文化研究に従事することであった。大正14年（1925）7月、関東庁中学校校長に就き、昭和2年（1927）3月まで務めた。その間の大正13年（1924）と昭和2年（1927）に年2度関東庁高等試験委員に選出された。昭和2年（1927）3月、精神衰弱を患い、退職願を提出した。同年4月2日依願退職した⁽²⁾。昭和5年（1930）から昭和9年（1934）まで、《泰東日報》の編集長に就任した。昭和9年（1934）、瀋陽で東方印書館と東方印刷廠を創設した。大正13年（1924）から昭和12年（1937）まで、中日言語文化に関する書籍を大量に編集発行した。華北分離工作の後、「冀東防共自治政府」で職務に当たった。昭和12年（1937）2月、設立委員として「新民学院」⁽³⁾の創立に参加し、学校規程制度などを起草した⁽⁴⁾。同年、東方印書館が倒産したため、新たな印書館の創設を計画した。昭和12年（1937）12月、「軍特務部第三課（文教課）」の関係者として、外務大臣に「特務部第三課文教課組織案」⁽⁵⁾を報告した。昭和13年（1938）4月9日、新民印書館を創設し、飯河道雄は中国側の副社長に就任した。昭和13年（1938）6月、病気のため瀋陽で逝去し、享年56歳であった。飯河道雄により出版された書籍は全53冊があり、

(1) 外務省外交史料館所蔵。件名：『清国傭聘本邦人名表』「安徽省／河南省／湖北省」請求番号：B02130225600。

(2) 国立公文書館所蔵。件名：「関東庁中学校校長飯河道雄退職ノ件」。請求番号：任B01354100。

(3) 新民学院とは中華民国新官吏養成の目的を作った満洲国の大同学院に相当する短期大学である。

(4) 外務省外交史料館所蔵。件名：「新民学院講師並課目ニ関スル件」。請求番号：B05016176200。

(5) 外務省外交史料館所蔵。件名：「軍特務部第三課（文教課）組織表送付ノ件」。請求番号：B05016158900。

主に教科書類、辞典・字典類、文学作品の三類に分けられる。『自修書』の以外の語学著書は『速修日本語讀本：中日對譯』（1913）、『本社支那人教育施設の目的に關する私見』（1920）、『支那語分類會話讀本』（1923）、『支那に於ける外人の文化事業論』（1923）、『支那國語尺牘：聲音重念附』（1924）、『支那京音四聲一覽表：ローマ字引片假名引』（1928）など約30種以上も出版した。

4.1.3 『精解』

(1) 『精解』の構成

『官話指南精解』（以下は『精解』と略称）の著者は木全徳太郎で、昭和14年（1939）に出版され、発行者が田中慶太郎、発行所が文求堂書店である。『精解』は「緒言」、「酬應瑣談」、「官商吐屬」、「使令通話」、「官話問答」から構成され、計384頁である。本文は「新出字」、「語句」、「摘要句」、「例句」の4部分からなる。版面について基本的に縦書きであるが、ローマ字注音だけは横書きである。配置は「語句」と「新出字」を上下に配し、「語句」と「新出字」の左に「摘要句」、「例句」の順に配置されている。

「緒言」は「新出字」、「語句」、「摘要句」、「例句」について以下のように説明している。

「新出字」は各章別に新出字を掲げてウェード注音を附し、「語句」は新出字を基礎とするもの並に既出字を以て組成する主要語句に就き解釋を為し、「摘要句」は各章の核心を為す主要句を新出字の配合状態に依り選擇し、特に之れを白文として掲げたるは、學習上の體驗に依り讀法の修練と解釋の練磨とに資せんとするに在り、而して對譯には勉めて字句解釋に偏せず、摘要句自體の内容と全章に互る脈絡を斟酌し、以て其の主意を徹底せしむることに留意せり、「例句」はとして各章の内容と直接間接に連環ある例句を撰出し應用の指針たらしめんとせり。

「新出字」、「語句」、「摘要句」⁽¹⁾はそれぞれ『官話指南』の難解字、句に対する注音、注釈、翻訳である。『官話指南』での用例を部分的に取り出して補足説明しているが、注釈、翻訳、音声の3方面から『官話指南』の學習を補助する役割を担っている。また、『總譯』、『自修書』にない特徴として文型練習（「例句」）も充実している。

「緒言」に「邦譯として、吳泰壽官話指南總譯（文求堂版）は研究者の伴侶として其の令名あり、而して本書の要旨は前述の如く、原著の内容檢討に独自の立場に於て執筆し、書外一方應用上の示唆を與へんことに力を致せり、若し夫れ彼我参照の勞を惜まざれば、會得を深からしむるに便益あることを信ず。」とあり、『總譯』が『官話指南』の日本語訳本の嚆矢として、日本の中国語學習にとって重要な参考書であり、かつ高い評価を獲得したことがわかる。

(2) 著者木全徳太郎について

木全徳太郎について、その生涯を記録した著作は2種しか見つからなかった。『日本人物情報大

⁽¹⁾ 本章では統一のために「翻訳」と呼ぶ。

系 12 卷』(1999)と『日本人物情報大系 15 卷』(1999) 満洲篇 5 であるが、両書の記述はほとんど同じで主に職歴を紹介している。教育方面に関する紹介は非常に少ない。国立公文書館所蔵資料においても『外務省報第二百十三号』にその著作『中国電報声音字彙』を載せるのみである。木全徳太郎は明治 27 年(1894) 8 月に、愛知県名古屋市東区小川町に生まれた。明治 40 年(1907) 5 月、満州に行き、その後「私立浄土宗旅順夜学校」で「中等普通学」を学んだ。さらに、谷信近とともに支那語を学習した。東洋協会旅順語学校支那語科の学業を修了後、東洋協会支那語一等通訳試験、満鉄第一回支那語特等検定試験に参加し、どちらも合格した。大正 3 年(1914) 3 月、家督を相続した。大正 8 年(1919) 5 月、大連取引所銭鈔信託会社に入社し、庶務係に就く。大正 13 年(1924) 満鉄に入社し、文書課、総務部、庶務課、総裁室、人事課などを経験し、最後に総局人事局養成課に務めた。大正 15 年(1926) 6 月、満鉄を退社した。その後、大連語学校と大連実業補習学校支那語科講師を兼任した。生涯で 9 冊の著作を残した。『支那語教科書総訳』(1922)、『中国電報声音字彙』(1930)、『適用支那語解釈』(1935)、『支那語旅行會話』(1937)、『初歩北京官話』(1938)、『官話指南精解』(1939)、『支那語書取研究』(1941)、『初歩官話字彙』(1941)などである。また、『適用支那語解釈』(1935)、『支那語旅行會話』(1937) 『支那語書取研究』(1941)の「例言」、「緒言」、「序言」の後ろにそれぞれ「昭和十二年二月十五日 大連市伏見町三午堂にて 著者識す」、「昭和十年五月十日 大連神社春季大祭の日 伏見町三午堂にて 著者識す」、「昭和十六年三月二十六日 在大連 著者識す」と記されたことから、木全徳太郎は主に大連で活躍したことが推測できる。また、『初歩官話字彙』(1941)の「例言」は

時維れ皇紀二千六百年請暇歸國の旅次恰かも紀元節に逢ひ、初次 樞原神宮に詣て曠古の盛典を奉拜し得たるは赤子の光榮何そ之に比すべき、況んや編者弱冠郷關を出て満州に僑居茲に三十有四年倚門の望を充し得ざること常ならざる(後略)。(昭和十五年二月十七日 名古屋城南三午艸廬に於て 編者識す)

と記される。「例言」の情報から、先行研究と異なり、木全徳太郎は明治 39 年(1906)すでに満州に行ったこととなり、またこの 34 年の間に一回にも帰国せず、しかも昭和 15 年(1940)の時、初めて日本に戻ったのである。

4.2 『總譯』『自修書』『精解』における翻訳の文体的特徴

3 書の翻訳は共に漢字と平仮名を使用した。『總譯』、『自修書』は訳文の右側で、小部分の語彙に振り仮名をつけている。この振り仮名は対応している日本語の読み方、また「菓舖、正午、」などのようにその意味を解釈している。本節は 3 書のそれぞれの直訳文、誤訳文、不適切な訳文、および 3 書の中にどれが他の 2 書と比較し、より優れている訳文なのかその代表的なものを探し出し、『總譯』『自修書』『精解』三書翻訳の特殊用例対照表』を作成した。この表と照らし合わせて 3 書の翻訳文体、使用言語などを分析する。各書の『官話指南』に対する翻訳面の補助価値を考察す

る。

表1 『總譯』『自修書』『精解』三書翻訳の特殊用例対照表

『官話指南』の原文	『總譯』	『自修書』	『精解』
應對須知			
您納貴姓。	伺ひますが御號は。	あなたのお前は？	
我那天看你病纔好，臉上氣色還沒復元兒哪。	此間御見受申した時には御病氣後で御顔色もまだ本當出なかつた。	私は先日あなたのご病氣が好くなつたばかりで、お顔のお色もまだ元に還へらないやうに拝見いたしました。	
你想和他要準兒，那算是白用心了。	あなた彼の人を當てにしようとおもふのはそれは駄目です。	あなたがあの人をあてにしようとお考へなさは無駄といふものです。	
這回您病的日子久了。	今度の御病氣は永い間でした。	今回あなたのご病氣の日数が長うございました。	
我想上張老師那兒拜客去。	私は張先生の許に人を訪問に往く積りです。	わたくしは張先生の處へ訪問に往かいと思ひます。	
那是一定的理。	其は定まつた道理だ。	そりや全くです。	
究竟上天不生無祿的人，等慢慢再打算就是了。	畢竟天は無祿の人を生ぜずまゝ寛寛篤と工面するまでのこと。	畢竟天道様は無祿の者を生まない、(何かしら誰でも天から福祿をさづかつて居るのでから、) ゆつくり考へるがよろしいです。	
您納說話聲音太小，人好些個聽不清楚。	貴方の御話聲は餘り低いから人が多く聞き取れませぬ。	あなたお話聲が餘り小さくて、外の人がはつきり聞こえないことが澤山あります。	
那廈門的話別處不甚懂。	あの廈門の語は別の處ではあまり通じません。	あの廈門語は外の處では餘りわかりません。	
官話南北腔調兒不同，字音也差的多。	官話は南北に因つて語調は異ひますが字音は餘り差違はありませぬ。	官話は南北口調が違ひますし、又字音も大變違つて居ます。	
真叫人萬慮皆空。	眞に何んとも申されませぬ心地です。	本當に何でもすつかり忘れてしまひますネ。	
夜景比白天還好足有	夜景は白晝よりも尚ほ佳いの	夜の景色は晝よりも一層好うご	

加倍的好看。	で十分に二倍の眺めです。	座います、景色のよいことは二倍分はたつぷりありますよ。	
有一層的塔梯如今拿開了不好上去了。	第一層迄の梯が有りましたが當時は取外まして登ることができませぬ。	一つ梯子がありました、今は取外づして登れません。	
昨兒前半夜月亮很好。	昨夜夜半前は月が大層好しかつた。	昨晚よひの内は月が大變好いものですから。	
炕	暖床	炕	
早起天纔亮 我起來出去走動 看見瓦上的霜厚的很。	今朝夜が明けたばかりの時に起きて便所に行つて瓦上の霜を見ましたが大層厚うございました。	今朝夜が明けたばかりの時に、私ば起きて外に出て便所に行きましたら、瓦の上に霜が大變厚く降つて居るのを見ました。	
可就嫌棉被窩太薄了。	とんと綿入蒲團が大層薄くてよわかりました。	木綿の掛蒲團が餘り薄くつて困りました。	
這個表走到三點鐘了。	あの懐中時計を見やう、この懐中時計は三時になつて居る。	私の懐中時計を見ませう、この懐中は三時に廻つて居ます。	
四季兒各有好處。	四季共に各長處があります。	四季はそれぞれ好い處があります。	
聽說你上學房住那兒啊。	聞けば汝は學校に行かるさうですが、何處に在るのです。	君は塾に上がったさうだが、何處にあるか。	
大和尚在山上麼。	大和尚は御山でしたか。	大和尚さんはお出でですじか。	
請您帶我去見一見令尊大人致賀。	汝私を連れ御父様に御目通りして賀辭退下しますせ。	尚どうか私をお連れ下さつて御尊父にお祝を申し上げるようにお引き合せをお願い致します。	
阿彌陀佛。	はい	南無阿彌陀佛	
作好官的皇上一定喜歡，不會作官的。	良官たるものは必ず厭慮に叶ひ良官たらざる者は必定逆鱗に觸れます。	好い役人は皇帝は必ずお喜びになるが、	
上行下效	上が行へば下倣ふから。	上のする事を下の者が之を見真似ねるやうにしなければならん。	
俗語兒說的馬尾兒穿豆腐提不起來了。	諺に謂ふ豆腐にかすがいでやぐにたゝず。	諺に「馬の尻尾で豆腐通せば持ち上げることが出来ない」と云	

		ふことがあります。	
我心裡想着他若是一 定不依，我就給他實端 出來怎麼樣。	私が了見ではあれが若も斷乎 として應じなければ私はあれ に鼻あかさせてやらうと思ふ が如何でせう。	私は心中考へて居ますが、若し 彼がどうしても私に従はないな らば、私は彼に事實を打ち負け てやらうと思ひます、如何でせ う。	
官商吐屬 第1章			
我租給我們一個親戚 了。	私共親戚の者家は既に貸付け ました。	私はわたくし共の親戚の者に貸 しました。	
那就是了。	左様でしたか。	ハア、そうでしたか。	
那麼我就是包租了。	それでは私が借大家ですな。	そんならわたしは借大家をする のですな。	では私が全部借受け ることにしませう。
不錯，您包租。	左様汝が借家主。	いかにも、あなたが債資借りを なさるのです。	
那好辦。	それは御易い事です。	それは何でもないことです。	
那麼着很好了。	それならば至極結構です。	そういふ風に出来れば至極結構 です。	
沒有別的中人。	別に中人はないのですけれど も。	外に中人はないけれども。	外に世話人はありま せんけれども。
也不是我那個朋友得。	又私の彼の友人の所得にもな らなのです。	又私のあの友人が取るのではあ りませんし。	あの友達が貰ふので もありません。
就是一茶一房。	家賃と同額です。	即ち家賃だけの茶錢です	つまり一ヶ月分の家 賃を茶錢として出す のです。
那就是了。	左様ですか。	それでよろしうご座います。	
您找得出舖保來麼。	汝は請人を拵へることが出来 ますか。	あなたは保證人を捜すことが出 来ますか。	貴下は店舗保證を頼 めますか。
官商吐屬 第2章			
總是因為貨短的緣故。	全く貨物が少なかつたからで す。	つまり品物が不足であつたから です。	つまり品薄の為なの です。
是做過買賣。	商賣を為たことがあります。	はい商賣をしたことがありま す。	
我現在是在行醫。	私は只今醫者を為て居りま す。	私は今醫者を開業して居りま す。	私は只今醫者を致し て居ります。

不過是不像做買賣那麼累心就是了。	唯商賣を為る程の心配が無いばかりの事です。	唯商賣のやうに心配がないばかりです。	只だ商賣する程に氣苦勞がないだけです。
官商吐屬 第3章			
老弟這盪是連家眷都去嗎。	汝今度は御家族も纏めて御出になるのですか。	今度はご家族も皆お出になるのですか。	貴下は今度御家族も一緒にお越しですか。
那麼老弟這幾天總在家罷。	それでは汝此頃は始終御在宅でせうね。	そんならあなたは此二三日は大概ご在宅でせうね。	
官商吐屬 第4章			
也不過五六天就拜完了。	いや僅五六日で廻りきれます。	ほんの五六日で、すぐ廻りきれます。	
得多啻回來。	何日御歸りにならなければならぬのですか。	何日お御歸りにならなければならぬのですか。	
不喝了。	いただきますまい。	もう戴きません。	もう結構です。
官商吐屬 第5章			
請問老兄都是榮任過甚麼地方。	伺ひますが、貴兄の官邊の御履歴は。	伺ひますが、あなたは一體どういふ處を御榮任なさいましたか。	伺ひますが、貴下はどの方面に御在勤になつたことがありますか。
官商吐屬 第6章			
前幾天晚上	數日前の夜	五六日前の夜	
銀号	銀行	銀行	両替店
總得謝和你幾兩銀子。	屹度汝に何程かの禮金致さねばならぬです。	屹度あなたに何両かの謝禮をしなければならぬです。	屹度貴下に多少のお禮を差上げる筈です。
官商吐屬 第7章			
是我過幾天給您拿來罷。	はい持參致します。	はい、二三日中に持つて参ります。	
你回去了。	御歸りか。	御歸り。	
官商吐屬 第8章			
我是出了盪外。	私は一寸旅行をしました。	私は一寸旅行をしました。	
官商吐屬 第9章			
現在倒大好了。	大きに快くなりました。	只今は餘程好くおなりですか。	

總得五百兩銀子。	是非五百兩要るのです。	是非五百兩なければならぬのです。	
這倒很妥當。	それは却て安全です。	それは好都合です。	
你回去了。	そう歸るのか。	お歸り。	
沒有不認的理。	承認しない理はありませぬ。	認めないわけはありません。	認めぬと云ふ法はございませぬ。
作甚麼不認呢。	何も認めないことはありません。	何も認めないことはありません。	認めぬことはありません。
母錢鋪	小さな錢屋	小さな錢屋	
趕緊的	直に急いで	急いで	
打了他一個嘴巴。	その口元の處を毆ちます。	その口元の處を毆ちました。	彼の頬を叩きました。
先生歇乏過來了。	お、先生御疲れは息まりましたか。	お、お疲れをおやすめでしたか。	
空喝酒	無駄酒	ただ酒	只酒
你瞧如何	見へ給何うです	君どうだい。	
官商吐屬 第 14 章			
怎麼那位姓朱的擱下了麼。	如何してあの朱様は暇を取られたのですか。	どうしたのでせう、あの朱さんは暇を取られたのですか。	あの朱サンはお辭めになったのですか。
可不是麼散了。	如何にも左様、あの方は辭されました。	以下にもさうです、あの方は自分で暇を取られたのです。	
官商吐屬 第 16 章			
他竟把東西給那個人寄回家去了，可就那把一千多兩銀子昧起來了。	只道具のみをその人の家に戻し、それからかの一千餘兩の金は曖昧に附すしてしまつた。	唯道具だけをその人の家に戻し、それからその一千兩餘の金は曖昧にしてしまつた。	あの人は品物丈を家へ届けてやつて、千兩餘りの金子は着服してしまひました。
官商吐屬 第 23 章			
腳下是吃一頓挨一頓。	此節は全く食ふや食はずです。	残して目下は食ふや食はずの有様です。	今では喰ふや喰はずと云ふ様な惨めきで。
官商吐屬 第 26 章			
我認得那個相好的姓江的。	私の識つて居る、あの親密なる江氏です。	私は親密にして居る江といふのを知つて居ますが。	
官商吐屬 第 28 章			

你告訴我說是怎麼遇見賊了。	汝私に御聞かせ下さい、それは何うして盜賊に遇はれたのですか。	どうして盜賊にお遇ひになつたのか聞かせて下さい。	
官商吐屬 第33章			
老兄，昨兒個我到榮發棧裏去了。	汝昨日私は榮發店に行つて。	あなた昨日私は榮發店に行つて。	
官商吐屬 第35章			
看了一個熱鬧。	一の騒動を見て来ました。	一つの騒動を見て来ました。	騒ぎを見ました。
使令通話 第1章			
是我呀。	はい私です。	私です。	
我想這院子儘溜頭兒那白牆兒後頭。	私はこの庭外れの、あの白塀の後にお湯殿の西に沿ふて…。	私はこの庭外れの白塀の後にある。	この庭の一番隅の方のある白い塀の後の…。
使令通話 第2章			
請先生瞧那盃茶好就喝那盃罷。	先生に何の茶碗の茶が佳いか御覽に入れて佳いのを何れなり御あげ申せ…。	先生に何の茶碗の茶が佳いか御覽に入れて、佳いのをどれでも御あげ申せ…。	先生にどの茶碗の茶が佳いかお見せして、お好きなのを飲んで戴きませう。
老爺開水來了。	檀那湯が参りました。	旦那湯が参りました。	
使令通話 第3章			
誰叫門了。	誰だ戸を叩くのは。	誰だ	
使令通話 第4章			
老爺你的跟班的來說飯得了。	檀那あなたの従僕が御飯が出来ましたから。	旦那、あなたの召使が御飯が出来ましたから。	
使令通話 第5章			
我已經約會了吳老爺一塊兒逛去。	私は吳様と一所に行くことに約束がしてある。	おれはとうに吳さんと一所に行く約束をした。	私は吳旦那と御一緒に散歩に出掛ける約束をしてあるのだが。
這副鈕子我很不愛	この一組の鈕は私は甚好かぬ。	このボタンはおれは大變きらひだから。	
使令通話 第6章			
你雇的這個車乾淨不乾淨車箱兒大小騾子	汝が雇ふたこの車は清潔か不清潔か、箱は大きいか小さい	お前今雇つた車は奇麗なのか箱は大きいのか、騾馬は好いか。	

好不好。	か、騾馬は好いかわるいか。		
站口子的車	宿車	辻待車	
跑海的車	辻車	ひろひ乗りの車	
他們老爺	われらの檀那	その旦那	彼等の御主人
不但騾子肥…。	騾馬が肥太り居るばかりでなく…。	騾馬は肥つて居りますし…。	
還有一層	今一事ある	それから	
你不是有兩項官帽兒麼。	汝は二個の官帽があるだろう。	お前官帽を二つ持つて居るぢやないか。	帽子を二つ持つてたネ。
使令通話 第7章			
點心	菓子	パン	點心
開三賓酒罷。紅酒若有也拿來罷。點心和菓子瞧有甚麼就可以拿甚麼來。	シャンパン三鞭を開けよ、葡萄酒も有つたら持つて来い、菓子か果物か見てあるものを何でも宜いから直に持つて来い。	三鞭を開ける、葡萄酒も有つたら持つて来い、菓子か果物か見てあるものを何でも宜いから直に持つて来い。	シアンパンを抜きなさい、葡萄酒が若しあつたらそれも出して、お菓子と果物が、何かあつたら持つて来なさい。
是在那櫃子裏頭榻板兒上了，和趕錘在一塊兒了。	あの戸棚の内の棚の上に、栓抜と一所に在る、茶を持つて来い。	それはあの戸棚の中の棚の上に、ねじ廻しと一所に在る、茶を持つて来い。	戸棚の棚に罐切と一緒に置いてある。
怎麼剛纔他沒告訴我説呀。	何故あの人は私に言はなかつたのだらう。	何故あの方はさつき私に言はなかつたのだらう。	
使令通話 第8章			
過兩天	一兩日を経る	一兩日経る	二三日する
使令通話 第9章			
今兒纔租妥了一所兒房子。	今日一個家を借り出した。	今日家を一つ借りることを取極めた。	
本來是一個小廟。	元來それは一の小さな寺だが。	もとは小さな寺だつたが。	
使令通話 第10章			
給你鑰匙。	汝に鍵をやる。	お前に鍵をやる。	
等太陽壓山的時候…。	太陽の入る時分になれば…。	日の入る時分になれば…。	お陽サンが沈む頃…。
使令通話 第13章			

先給你三塊另外我賞給你一塊錢。	まづ三弗渡し、別に一弗おまへに遣る。	今三弗渡して別に一弗おまへに遣る。	不取敢三圓と別に私から一圓心付として上げる。
你既打算今兒個趕出城去…。	おまへそんなに今日出城の積りならば…。	おまへ今日城を出る積りだと言ふならば…。	今日急いで歸る積りなら…。
使令通話 第14章			
現在天長、一天總可以完了。	唯今は日長がですから一日で大丈夫出来上ります。	唯今、日が長うご座いますから、一日で大丈夫出来上ります。	
現在來了信了，不行了，客人回頭就到了。	今手紙が来たが駄目だ、客人は跡から直ぐ着と。	今手紙が来たが大變だ、お客は後から直ぐ来るとよ。	
使令通話 第19章			
老爺打那麼沒別的事了麼。	檀那あちらへ外に御用はありませぬか。	旦那あちらへ外に御用はありますか。	
官話問答 第2章			
列位中堂大人們這一向也都好。	大臣各位には其後無事に居らっしゃいますか。	大臣外各位にも其後御機嫌よろしく。	
官話問答 第13章			
你們這位貴鄉親現在到京了麼。	汝の此の御同郷の人は現在京に着されたのか。	あなたの此の御同郷の方はもう北京に到着されましたか。	
我們那個敝鄉親道不怕多花幾個錢。	私共の彼の同郷人は金の多く要るのは構はないので。	私のその同郷の者は幾らか多く金を遣ふ事は構ひません。	友人は少し位多く費用がかかっても頓着しません。
官話問答 第17章			
是同着幾位朋友到西山遊玩去了。	数人の友人と打連れ西川へ遊覧に参りました。	四五人の友達と西山へ遊びに参りました。	

表1からみると、3書の中には『總譯』の誤訳、不適切な訳文などが一番多い。

4.2.1 『總譯』の文体的特徴

明治初期以降、「漢文訓読体」、「候文」、「和漢折衷体」、「雅俗折衷体」、「講述体」、「問答体」、「和文体」、「談話体」、「俗文体」などさまざまな翻訳文体⁽¹⁾が現れ、それらは文語体に属している⁽²⁾。

(1) 森岡健二『文体と表現(現代語研究シリーズ6)』1988、47頁。

(2) 古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門 漢文訓読体の地平』2013、4頁。

そのうち「漢文訓読体」は当時の文章の主流を占めていた⁽¹⁾。古田島洋介(2013)は「文章の体裁」、「文字」、「語彙」、「発音」、「文法」の面から漢文訓読体の基礎について論じた。例えば、漢文訓読体の場合は「ㄱ」の符号によって段落の終結を表すことや、旧字体を使うことや、歴史的仮名遣い、古代の文法を用いることなどである。また、氷野的(2011)「明治初期の翻訳文体規範：予備的考察」は山田孝雄(1935)『漢文訓読によりて傳へられたる語法』や築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』、高野繁男(1991)「漢文訓読体の語法」の研究に提示された漢文訓読体の特殊な語法をまとめ、全42種の語法を提示し漢文訓読体判定基準としたが、そのうち漢文訓読体に使われる典型的な助動詞は「〈過去・完了〉キ、タリ、タ。〈未来〉ム。〈打ち消し〉ズ。〈受身〉ル、ラム。〈使役〉シム。〈推量、可能〉ベシ。〈断定〉ナリ。〈状況〉ゴトシ。」を提示した。

また、氷野的は中村正直が翻訳した『西国立志篇』を取り上げ、この翻訳は漢文訓読語が多く使用されていると指摘した。その翻訳は以下の通りであり、下線を付けている箇所は漢文訓読語である。

天ハ自ヲ助クルモノヲ助クト云ヘル諺ハ確然(シカト)經驗(タメシココロミ)シタル格言ナリ
僅ニ一句ノ中ニ歴(アマネ)ク人事成敗ノ実験(ためし)ヲ包蔵(こめてある)セリ 自ヲ助クト
云コトハ能ク自 主自立シテ他人力ニ倚(ヨラ)ザルノコトナリ 自ヲ助クルノ精神(たましひ)ハ
凡ソ人タルモノノ才智ノ由テ生ズルトコロノ根原ナリ 推シテコレヲ言ヘバ自助クル人民多ケ
レバソノ邦國必ズ元気充実シ精神強盛ナルコトナリ○他人ヨリ助ケヲ受テ成就セルモノハソノ
後必ズ衰フルコトアリ シカルニ内自助ケテ為ストコロノ事ハ必ズ生長シテ禦(フセグ)ベカ
ラザルノ勢アリ 蓋シ我モシ他人ノ為ニ 助ケテ多ク為サンニハ必ズソノ人ヲシテ自己励(ハゲ)
ミ勉ムルノ心ヲ減セシムルコトナリ 是故ニ 師傳(かしづき)ノ過嚴(きびしすぎる)ナル者
ハ其ノ子弟ノ自立(ヒトリダチ)ノ志ヲ妨グルコトニシテ 政法(セイジ)ノ群下(シモノモノ)
ヲ压抑(アツヨク)スルモノハ人民ヲシテ扶助ヲ失ヒ勢力(イキホヒ)ニ乏(トボシ)カラシムル
コトナリ「中村正直『西国立志篇』(明治3年1870)」

これらを『總譯』の原文と比較すると、段落終結の符号にしても、上述の「〈推量、可能〉ベシ」以外には全て使わず、文語体の特徴はわずかに残っている。

明治中期になると文語体のうち漢文訓読体の特徴が徐々に弱まっていく。明治20年(1887)に、二葉亭四迷や山田美妙からの言文一致小説が発表され、その文末表現の「だ」体(二葉亭四迷)と「です」体(山田美妙)を創作し、世間の注目を浴びた⁽²⁾。松村明『大辞林』第三版(2006:532)は言文一致体(口語体)について、「日常用いられる話し言葉によって文章を書くこと。(中略)明治40年代以降、小説の文体として確立した。」と示した。下の小部分の訳文を見ると、『總譯』の

⁽¹⁾ 高野繁男「漢文訓読体の語法」1991、383頁。

⁽²⁾ 杉崎夏夫「明治時代語の一考察：言文一致と標準語教育と新聞の文体の関係を中心に」2017、48頁。

文末に「です」体を用い、しかも全書にも大量の「です」体を使っていることから、『總譯』は文語体というより口語体の傾向が見られる。

汝の御姓は。痛み入ります、私の姓は李、未^{マタ}汝の御姓を承りませぬが伺ひたう存じます。私の姓は趙。御處は何處^{ドコ}ですか。郷里は張家口です。北京に御出になつたのは何ういふ御用向けですか。（『總譯』官商吐屬 第二章）

また、『總譯』の一部分の訳文は直訳の現象が存在している。例えば、

例 260. 俗們倆前年在張二家一個桌子上喝酒您怎麼忘了麼。（1）

御互兩人は一昨年張二様の處で一つ卓で分りましたが汝は如何して御忘れになりましたか。

例 261. 誰叫門了。（3-3）

誰だ戸を叩くのは。

例 262. 這副鈕子我很不愛。（3-5）

この一組の鈕は私は甚好かぬ。

例 263. 你雇的這個車乾淨不乾淨車箱兒大小騾子好不好。（3-6）

汝が雇ふたこの車は清潔か不清潔か、箱は大きい小さいか、騾馬は好いかわるいか。

以上のことから見ると、明治末期に出版した『總譯』は文語体の特徴がすでになくなっているものの、口語体の特徴があることは確認できる。なお、一部の訳文にはまだ直訳の現象が存在している傾向が見られる。

4. 2. 2 『自修書』の文体的特徴

『自修書』は『總譯』の約 20 年後に出版されたが、これは『官話指南』に対する 2 番目の学習補助教科書である。前述のように、『自修書』は底本の原文と訳文との対照を明確にするために、上下に配置し、なるべく同一列に収まるように工夫している。一方、『總譯』には底本の原文を載せていない。また、『自修書』の「例言」により「本書編纂に當り、吳泰壽著「官話指南總譯」に師事する所甚だ多い、茲に訳者に對し深甚の謝意を表す。」と述べている。前文で示したように『總譯』は直訳の傾向が見られるが、『自修書』は『總譯』と文体においてどのような区別があるのか、ここでは重点的にその点を分析する。

両書の訳文を対照し、『自修書』は『總譯』の一部文の訳文をそのまま引用したことが確認できた。なお、『自修書』が引用した部分は『總譯』と同じ口語体、直訳の特性を持っていると思われる。飯河道雄が翻訳した部分はどんな文体なのか。ここでは『總譯』の訳文取り出し、『自修書』と比較して分析する。用例は以下の通りである。

例 264. 那是一定的理。(1)

其は定まつた道理だ。『總譯』

凡そりや全くです。『自修書』

例 265. 我剛纔聽見自鳴鐘噹噹的打了兩下兒似的。(1)

私は今方時計はがブンブンと二ツ打つたやうに聞へました。『總譯』

私は今目醒時計がビンビン鳴つたのを聞いたばかりですが、二時のやうでした。『自修書』

例 266. 真叫人萬慮皆空。(1)

眞に何んとも申されませぬ心地です。『總譯』

本當に何でもすつかり忘れてしまひますネ。『自修書』

例 267. 請問老兄都是榮任過甚麼地方。(2-5)

伺ひますが、貴兄の官邊の御履歴は。『總譯』

伺ひますが、あなたは一體どういふ處を御榮任なさいましたか。『自修書』

例 268. 誰叫門了。老爺天不早了，您快起來罷。(3-3)

誰だ戸を叩くのは。檀那もう晩う御座います、疾く御起床なさいませ。

誰だ。旦那もう晩くなりました、早く御起きなさい。

例 269. 你先喝酒，回頭再批評。(2-39)

汝先づ飲むべし、後で批評をしませう。『總譯』

君まお酒を飲み玉へ、後で論すべしだ。『自修書』

例 270. 我就問他，你方纔接籌的時候沒上別處去麼。

私はその者に問ふたには、汝は今し方籤を受取られた時、他の處には行かれはしなかつたか。『總譯』

私はその者に「あなたは今し方串を受取られた時、外の處にはお出にならなかつたか」と聞く。『自修書』

上述の例から見ると、『自修書』の語順は『總譯』と異なり、對話時の発話内容を明確に区分するために鉤括弧「」を活用し、動詞と目的語の位置が入れ替わっている。話題の流れ的には『自修書』の方が優れていると思われる。また、上述の「誰叫門了。」「你先喝酒，回頭再批評」などのような文脈により、『自修書』の「誰だ。」「君まお酒を飲み玉へ、後で論すべしだ。」は意識したものと見える。以上の分析と資料二を合わせて見ると、飯河道雄が自分で翻訳した部分は意識文を用いた傾向が見られる。

4. 2. 3 『精解』の文体的特徴

『精解』の「緒言」によると、訳文は「新出字を基礎とするもの並に既出字を以て組成する主要語句に就き解釋を為し」ものである。すなわち、『精解』は底本の部分訳であり、難解字の注釈を主な目的としている。そのため、『精解』の翻訳部分は『總譯』と『自修書』に比べ比較的少ない。

また、上述でも触れたように、大正時代末期に「口語体」の呼称が現れた。その「口語体」は今日の「口語体」にいたっている⁽¹⁾。『精解』は昭和14年に完成しており、その時はすでに完全に「口語体」の天下であったと言える。さらに、表1「『総譯』『自修書』『精解』三書翻訳の特殊用例対照表」を見ると、確かに『精解』の訳文は『総譯』と『自修書』とは異なる。ここには『総譯』や『自修書』と比較した場合、どのような相違があり、その文体はより口語的であるかについて考察する。例えば、

例 271. 老弟這邊是連家眷都去嗎。(2-3)

今度は御家族も纏めて御出になるのですか。『総譯』

今度はご家族も皆お出になるのですか。『自修書』

貴下は今度御家族も一緒にお越しですか。『精解』

例 272. 這個字號很好。(2-9)

此の屋號は至極好い。『総譯』

此の屋號は大變よろしうございます。『自修書』

立派な屋號ですネ。『精解』

例 273. 是在那櫃子裏頭榻板兒上了，和趕錐在一塊兒了。(3-7)

あの戸棚の内の棚の上に、栓抜と一所に在る、茶を持つて来い。『総譯』

それはあの戸棚の中の棚の上に、ねじ廻しと一所に在る。『自修書』

戸棚の棚に罐切と一緒に置いてある。『精解』

例 274. 等太陽壓山的時候…。(3-10)

太陽の入る時分になれば…。『総譯』

日の入る時分になれば…。『自修書』

お陽サンが沈む頃…。『精解』

上に挙げた例から、『精解』の訳文は『総譯』、『自修書』とは異なり、いっそう中国語の意味を重視していて、自然で読みやすい表現を使っている。『自修書』に比べると『精解』の意識体の特徴はさらに明確である。また、「お陽サンが沈む」、「立派な屋號」などのような日本語の表現は、現代の日本語と類似している。このことから『精解』の翻訳は『総譯』、『自修書』の枠を完全に抜け出し意識を主としている。『精解』の訳文は現代の日本語を基準にすれば、理解しやすくなった。

4.3 三書の翻訳内容

4.3.1 三書の言語使用

(1) 『総譯』

⁽¹⁾ 松村明 2006、532 頁。

『總譯』は歴史的仮名遣をたくさん使用している。

『總譯』では日本語の仮名で促音を表している小さな「っ」は「感じて居つた、送つて」のように大き「つ」で表している。「よう」は古文の「やう」と書いて、推量を表す「ましよう」は歴史的仮名遣の「せう」を使い、「伺い、願ひ、言ふ、先ず、いずれ、おまえ、誂える、かお」などはそれぞれ古文の「伺ひ、願ひ、言ふ、先づ、いずれ、おまへ、誂へる、かほ、」となる。

また、人称代名詞では、「您、您納、兄台、老兄」などを「汝、貴下、貴兄」などと訳している。理解しやすくするために「あなた」という注をつけている。中国語の「張老師」は「張老先生」と訳しているが、おそらく誤植だろう。そして、一部の「彼」は「あれ」と読む現象が見られる。柳父章『翻訳とはなにか 日本語と翻訳文化』（1976：172）は翻訳語「彼」について、「「彼」は代名詞として使われた時期が明治以前に遠く遡られる。その時で「彼」は人を指すよりも、ものを指すのがふつうであった。」と指摘した。しかも、人を指す場合には「軽蔑感をこめたり、特異な存在」を表示していた。『總譯』ではこのような「軽蔑感」という意味がない。また、中国語の「大哥、四更、五更」はそのまま中国語を使って訳している。

(2) 『自修書』

『自修書』が使用した歴史的仮名遣と『總譯』は一致している。しかし、『總譯』の「てうづ」を「かおはらひ」を改訂し、現代日本語の「顔あらび」の意味と同じである。

他に、『自修書』は『總譯』の部分の注を削除するが、その注と同じ内容を直接訳文に取り入れることがある。例えば、「猶（ヤハリ）、何故（ナゼ）、先（マヅ）、餘（アマリ）、閑（ヒマ）、尚（マタ）、廉（ヤスイ）、邸（ヤシキ）、直（スグ）、父親（チチオヤ）、後（アト）、訪（タズネ）、仔細（ワカルヨウニ）、結局（ツマリ）、他人（ヒト）、眞實（ホントウ）、歸宅（カヘリ）、從來（コレマデ）、寛（ユルリ）、理由（ワケ）、薬舗（クスリヤ）、必定（キット）、逗留（トマリ）仔細（ワカルヨウニ）、結局（ツマリ）」などについて『自修書』は『總譯』の漢字表記を引用せずに、振り仮名のみを引用した。また、『自修書』には別の語を使用した例もある。例えば、「包租、住」は『總譯』で「借家人」、「逗留」と訳し、『自修書』は「借大家」、「宿がお取り」と訳したが、このような例は少ない。

第二人称代名詞「您、您納、兄台、老兄」などは『總譯』では「汝、貴下、貴兄」などと訳し、『自修書』は「您、您納、兄台、老兄」は全て「あなた」と翻訳している。また、不定称の代名詞「前幾天晚上、前幾天、幾百兩、過幾天」などを『自修書』は「五六日前の夜、二三日前、数百兩、二三日中に」と訳したが、『總譯』は「前幾天晚上、幾百兩」を「數日前の夜、数百兩」と訳した。ただ、『總譯』は「過幾天」を翻訳していない。不定称の代名詞を「前幾天晚上／五六日前の夜、前幾天／二三日前」などのような具体的に時間を採用しているのは『自修書』のみである。これはおそらく翻訳者の漢語に対する理解度と関係している。

また、『總譯』には少ないが、『自修書』の訳文には大量の主語省略の形式がある。

例 275. 托福都好了, 我的咳嗽纔輕省一點兒。(1)

お蔭様ですすつかりよくなりました、せきもやつと少し軽くなりました。

例 276. 不用雇車去, 離這兒不遠, 我可以走着去罷。(3-5)

車は雇はなくても良い、此處から遠くないから歩いて行かう。

例 277. 賤姓…。(1)

…と申します。

例 278. 也是新近纔補的缺。(2-3)

いいえ、矢張此頃漸缺に補せられたばかりで…。

(3) 『精解』

『精解』は「貴下」と「あなた」は第二人称を表す。『精解』の「貴下」は『總譯』と『自修書』とは異なり、単に「あなた」の意味を表すのではなく、主僕の対話あるいは上下関係がはっきりした対話の時に、よく「貴下」を用い、第二人称を表す。このため、『精解』の「貴下」は“你”の敬称に似ていると思われる。また、『總譯』と『自修書』は歴史的仮名遣を用い、『精解』は部分的に歴史的仮名遣が残っている。例えば、促音の「つ」、「買ひ」、「云ふ」、「替へられる」、「せう」などの書き方がまだ見られる。総合的に言えば、『精解』の翻訳は昭和時代の翻訳書であるだけに、歴史的仮名遣も少なくなり、その訳文も現代日本語に近い。

4.3.2 『總譯』『自修書』における翻訳上の問題

(1) 『總譯』

1) 翻訳漏れ

『總譯』では文章の翻訳漏れは「那個姑娘剛纔起這兒過也不知是誰家的，長得很標緻，又穩重，明兒給我們舍親作個媒。這個姑娘真不錯。我認得是那邊兒張老二跟前的，若給你們令親說倒也配得過。(1)」、「有兩個狗在那兒搭配，一個姑娘握着眼睛不肯瞧。雖然是那麼樣，可又從手縫兒裏偷着看，你說可笑不可笑。人到了歲數兒了，春心是要動的，外面兒雖是害羞，難道他心裏就不動情嗎。這也怪不得他。(1)」、「盛飯來。喳。(3-4)」の三つのみである。語彙の翻訳漏れは「是我過幾天給您拿來罷。(2-7) / はい持参致します。」、「我想這院子儘溜頭兒那白牆兒後頭…。(3-1) / 私はこの庭外れの、あの白墻の後に…。」、「你想喝他要準兒，那算是白用心了(1) / あなた彼の人を當てにしようとおもふのはそれは駄目です。」のような例に見られ、「過幾天」、「儘溜頭兒」、「要準兒」を訳していない。また、「(前略)叫他明天照樣兒配一個來。是。(3-13)」のような時に、返事「是」を訳していないことも多く見られる。

2) 誤訳

『總譯』の誤訳はそれほど多くないが、9箇所ある。それらの誤訳は原文の意味をしっかりと理解していなかったか、直訳したために誤訳になったかの2つに分けられる。誤訳には次の例がある。

例 279. 這回您病的日子久了。(1)

今度の御病氣は永い間でした。

例 280. 我想上張老師那兒拜客去。(1)

私は張先生の許に人を訪問に往く積りです。

例 281. 官話南北腔調兒不同字音也差的多。(1)

官話は南北に因つて語調は異ひますが字音は餘り差違はありませぬ。

例 282. 有一層的塔梯如今拿開了不好上去了。(1)

第一層迄の梯が有りましたが當時は取外まして登ることができませぬ。

例 283. 大和尚在山上麼。(1)

大和尚は御山でしたか。

例 284. 作好官的皇上一定喜歡。不會作官的，皇上必要有氣的。(1)

良官たるものは必ず厭慮に叶ひ良官たらざる者は必定逆鱗に觸れます。

例 285. 請先生瞧那盃茶好就喝那盃罷。(3-2)

先生に何の茶碗の茶が佳いか御覧に入れて佳いのを何れなり御あげ申せ…。

例 286. 是我呀。(3-1)

はい、私です。

また、「是在那櫃子裏頭榻板兒上了，和趕錐（螺丝刀⁽¹⁾）在一塊兒了。(3-7) /あの戸棚の内の棚の上に、栓抜（瓶の栓を抜く道具⁽²⁾）と一所に在る、茶を持つて来い。」などの誤訳も存在している。

(2) 『自修書』

1) 『自修書』の翻訳漏れ

『自修書』の翻訳漏れはそれほど多くない。その底本の「應對須知」にある「有兩個狗在那兒搭配，一個姑娘握着眼睛不肯瞧。雖然是那麼樣，可又從手縫兒裏偷着看，你說可笑不可笑。人到了歲數兒了，春心是要動的，外面兒雖是害羞，難道他心裏就不動情嗎。這也怪不得他。(1)」と「官商吐屬」の第一章にある「是真得麼。不錯是真的，怎麼您要租麼。是，我打算要租。(2-1)」を『自修書』は訳されない。ただ、『自修書』疑問文の回答の時に用いる「不是」、「是」については多くの翻訳漏れの現象がある。

2) 誤訳

『自修書』の訳文は『總譯』のように原文の語序に従って訳されていない。特に「誰叫門了。」は『總譯』では誤訳文であるが、『自修書』は正確に原文の意味を訳した。また、『自修書』は『總譯』の誤訳まで参照することがあるが、このような状況はそれほど多くはない。下記の例のように、漢字の書き方については、あるいはより理解しやすい語で表しているが、訳文の意味は変わらず、

⁽¹⁾ 《現代汉语词典》第5版(2010:437)は“改錐”と書いているが、「趕錐」と同じ意味であると思われる。筆者は北方方言を使う遼寧省丹東の出身であり、故郷では「趕錐」が螺丝刀の意味である。

⁽²⁾ 『新明解国語辞典』第5版2001、791頁。

『總譯』と同じで、やはり誤訳である。その誤訳は以下の通りである。

例 287. 有一層的塔梯如今拿開了不好上去了。(1)

第一層迄の梯が有りましたが當時は取外まして登ることができません。『總譯』

一つ梯子がありました、今は取外づして登れません。『自修書』

例 288. 這回您病的日子久了。(1)

今度の御病氣は永い間でした『總譯』

今回あなたのご病氣の日数が長うご座いました。『自修書』

例 289. 大和尚在山上麼。(1)

大和尚は御山でしたか。『總譯』

大和尚さんはお出でですか。『自修書』

例 290. 老爺你的跟班的來說飯得了。(3-4)

檀那あなたのご従僕が御飯が出来ましたから『總譯』

旦那、あなたの召使が御飯が出来ましたから。『自修書』

以上のことから、『自修書』の著者飯河道雄は『總譯』の訳文に修正を加えたい意識はあるものの、残念ながら正確な訳文にはなっていない。

4.3.3 『自修書』『精解』のすぐれた点

『自修書』と『精解』は意識体として、その訳文は部分的に『總譯』より優れている⁽¹⁾。例えば、

例 291. 那床若是不好搭，可以卸下來等拿過去…。(3-9)

あの寝臺は若しも乗らなければ、取外して持つて行つてから。『總譯』

あの寝臺は若しも載せらなければ、取外づして持つて行つてから。『自修書』

あの寝台が車に積みにくかつたら、取り外して運んで。『精解』

例 292. 還有那跑堂兒的酒錢和戲價，明兒個就起你手裏給他們罷(3-11)

そうして給仕の酒代や、演劇費は明日おまへの手から彼等に渡せばよろしい。『總譯』

さうして給仕の酒手や、芝居の費用は、明日おまへの手から彼等に渡せばよろしい。『自修書』

それからボーイの心附と芝居の観覧料は、明日お前から拂つて呉れ『精解』

例 293. 本來是一個小廟。(3-9)

元来それは一の小さな寺だが。『總譯』

もとは小さな寺だつたが。『自修書』

例 294. 還有一層…。(3-6)

⁽¹⁾ 対応する訳文がない場合はその書名を省略している。

今一事ある…。『總譯』

それから…。『自修書』

上記の例において、その訳文は正確であるが、『自修書』と『精解』は『總譯』に比べて訳文はさらに正確で、簡単明瞭である。例えば、①の“不好搭”、意味は原文と通じ、言い方が異なるだけである。『總譯』の「乗らなければ」に比べると、『自修書』と『精解』の翻訳はさらに正確で、特に『精解』は現代日本語に近い。

以上のことから、使用した言語であれ、語彙の翻訳であれ、いずれも時代の変化と文体と切り離すことはできない。現代人の視点から見ると、『總譯』の用語はやや古く、翻訳の内容も流暢とまではいかない。しかし、明治時期においてこのような翻訳はあの時代特有の産物である。当時の読者にとっては理解できるものである。『自修書』の翻訳は、その半分以上を『總譯』から引用したため、使用している言語は『總譯』と同じである。しかしながら、『自修書』の著者飯河道雄は『總譯』を全てそのまま引用したのではなく、自らの原文に対する理解も加えている。翻訳に使用した言語から見ると、『自修書』から主語省略の形式が大量に現れ、訳文も簡単明瞭の方向へ変化している。また、『總譯』の翻訳漏れと誤訳の部分は『自修書』と『精解』に比べるとかなり多い。『自修書』の翻訳漏れはほとんど応答語であり、誤訳は基本的に『總譯』と同じ箇所である。例えば、「打了他一個嘴巴。(2-35) / その口元の處を毆ちます。 / その口元の處を毆ちました。」など。『自修書』は『總譯』を参照しつつ『官話指南』を翻訳しているが、参照と同時に『總譯』の誤訳に対しては修正を加えるべきであったが、残念ながら『自修書』はその修正を徹底していない。一方、『總譯』は最初の『官話指南』の翻訳教科書で、その著者吳泰壽は唐通事の後裔であり、幼少の頃より漢語を学び、かつて東京外国語学校清語学科の初代教授に就任している。その吳泰壽が翻訳した『總譯』は当時比較的權威のある翻訳書であったと言えるだろう。このことも飯河道雄が翻訳時に修正できなかった箇所を修正しなかった原因のひとつだろう。『精解』も「例言」で『總譯』に言及したが、相当に高い評価を与えた。『精解』の訳文は少ないとはいえ、『自修書』と完全に異なり、『總譯』の誤訳を全て正確な訳文に修正した。このことから、『精解』は3書の中で翻訳の精確さが比較的高い本であると言える。

4.4 三書の翻訳における学習補助的価値

4.4.1 中国語教科書編纂史上における『總譯』、『自修書』、『精解』の位置づけ

『總譯』、『自修書』、『精解』の明治時代における中国語学習補助教科書としての位置づけを考察するために、六角恒広『中国語教本類集成』(全10集)(1991-1998)、李無未主編《日本明治教科書匯刊(江戸明治編)》(2015)、張美蘭《日本明治時期汉语教科書會刊》(2011)を参考にし、表2「明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書総表」を作成した。

表 2 明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書一覧表

書名	種類	著者	出版年	発行所
『語言自邇集』	中国語教科書	トーマス・ウェ ード	1867	Kelly&Walsh L.T.D
『新校語言自邇集 散語の部』	『語言自邇集』 改訂版	興亞會支那語学 校	1880	飯田平作
『亜細亞言語集 支那官話部』	『語言自邇集』 改訂版	廣部精	1879- 1880	青山清吉
『参訂問答篇國字解』	『語言自邇集』 日訳版	福島九成	1881	丸善
『清語階梯 語言自邇集』	『語言自邇集』 日訳注釈版	トーマス・ウェ ード	1881- 1882	慶応義塾
『官話指南』	中国語教科書	吳啓太鄭永邦	1882	楊龍太郎
『官話指南』	『官話指南』 双行注版	九江書会	1893	九江書局活字印
『自邇集平仄篇 四聲聯珠』	『語言自邇集』 改訂版	福島安正	1886	陸軍文庫
『官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin』	『官話指南』 フランス語対訳版	Le pere Nenri Boucher S. J	1887	Imprimerie de la Mission Catholique
『總譯亜細亞言語集 支那官話部』	『亜細亞言語集』 日訳版	廣部精	1892	青山清吉
『滬語便商』	中国語教科書	御嶺雅文	1892	修文書館
『滬語便商意解』	『滬語便商』日訳版	御嶺雅文	1892	修文書館
『粵音指南』	『官話指南』 広東語訳版	不明	1895	Hong Kong
『官話指南 The guide to Kuan hua :a translation of the “Kuan hua chih nan” :with an essay on tone and accent in pekinese and glossary of phrases 』	『官話指南』 英訳版	L. C. Hopkins	1895	Kelly &Walsh L. T. D
『滬語指南』	『官話指南』 上海語訳版	曹鐘橙菊人	1897	上海美華書館
『北京官話談論新篇』	中国語教科書	金國璞 平岩道知	1898	平岩道知

官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin	『官話指南』 フランス語注釈版	H. Bourher, S. J.	1900	Imprimerie de la Mission Catholique
『官話指南 The Guide to Kuan Hua with English Translations』	『官話指南』 英語対訳版	記載無	1902	Commercial Press
『CHATS IN CHINESE』	『北京官話談論新篇』 英訳版	Charles Henry Brewitt-Taylor	1901	Pei T 'ang press
『清国時文輯要』	中国語教科書	足立忠八郎	1902	石丸鉄三郎
『時文輯要総訳：清国時文』	『清国時文輯要』日訳 版	足立忠八郎	1902	石丸鉄三郎
華語跬歩	中国語教科書	御幡雅文	1903	東亜同文会
『官話急就篇』	中国語教科書	宮島大八	1904	善隣書院
『華語跬歩総訳』	『華語跬歩』 日訳注釈版	伴直之助	1904	裕隣館
支那語教科書	中国語教科書	岡本文正	1904	文求堂
『官話指南總譯』	『官話指南』 日訳注釈版	吳泰寿	1905	文求堂
『北京官話士商叢談便覧』	中国語教科書	金國璞	1905	文求堂
『東語士商叢談便覧』	『北京官話士商叢談 便覧』 日訳版	田中慶太郎	1905	田中慶太郎
『土話指南』	『官話指南』 上海語訳版	師中董訳注釈	1908	土山湾慈母堂
『華語跬歩総訳』	『華語跬歩』日訳版	御幡雅文	1910	文求堂
『官話急就篇総訳』	『官話急就篇』 日訳版	杉本吉五郎	1916	満書堂書籍部
『官話急就篇詳訳』	『官話急就篇』 日訳版	大橋末彦	1916	文英堂書店
『最新官話談論篇』	中国語教科書	張廷彦 李俊漳	1921	文求堂
『最新官話談論篇訳本』	『最新官話談論篇』日 訳版	石山福治	1922	文求堂
『支那語教科書総訳』	『支那語教科書総訳』 日訳注釈、ローマ字表 記	木全徳太郎	1922	文求堂

『急就篇を基礎とせる支那語独習』	『官話急就篇』仮名表記、ローマ字表記、日訳版、練習問題	打田重治	1924	大阪屋號書店
『譯註 聲音 重念附 官話指南自修書應對須知篇 使令通話篇』	『官話指南』日訳注釈、仮名表記	飯河道雄	1924	大阪屋號書店
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇』	『官話指南』日訳注釈、仮名表記	飯河道雄	1925	大阪屋號書店
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官話問答篇』	『官話指南』日訳注釈、仮名表記	飯河道雄	1926	大阪屋號書店
『訂正粵音指南』	『官話指南』広東語訳版	Herbert Richmond Wells	1930	Wing Fat & Company
『急就篇』	『官話急就篇』改訂版	宮島大八	1933	善隣書院
『談論新篇総訳』	『談論新篇』日訳注釈	岡本正文訳 水野絮輔補訂	1933	文求堂
『急就篇総訳』	『急就篇』日訳注釈	宮島大八	1934	善隣書院
『羅馬字急就篇』	『急就篇』ローマ字表記	宮島大八	1935	善隣書院
『急就篇發音』	『急就篇』仮名表記、ローマ字表記	宮島大八	1935	善隣書院
『官話指南精解』	『官話指南』日訳注釈、ローマ字表記、文型練習	木全徳太郎	1939	文求堂

表 2 から見ると、最も早くに学習補助教科書の形式で出現したのは『語言自邇集』(1867) とそこから派生した教科書である。『語言自邇集』は当時のイギリス外交官トーマス・フランシス・ウェードが編纂したもので、最初の北京官話教科書である。その後、この本から複数の教科書が派生した。『語言自邇集』から派生した『參訂問答篇國字解』(1881) は最初の日訳版の学習補助教科書である。その後、出版した『新校語言自邇集 散語の部』(1880)、『亜細亞言語集 支那官話部』(1879～1880)、『自邇集平仄篇四聲聯珠』(1886) などは『語言自邇集』の改訂版である。次に、同じく広部精が訳した『総訳亜細亞言語集 支那官話部』(1892) は 2 番目の日訳版の学習補助教科書である。そして、『官話指南』は日本人が初めて編纂した北京官話教科書として、当然教育界に重視さ

れた。『總譯』は明治38年(1905)1月に出版され、それ以前は『自邇集平仄篇四聲聯珠』、『総訳 亜細亜言語集 支那官話部』以外に日訳版の学習補助教科書はなかった。『精解』(1939)が出版される前、日訳版の学習補助教科書は合計6種が世に出た。それらは『北京官話士商叢談便覧』(1901)の日訳版『東語士商叢談便覧』(1905)、『官話急就篇』(1904)の日訳版『官話急就篇総訳』(1916)と『官話急就篇詳訳』(1916)、『官話急就篇』(1904)の日訳版『急就篇を基礎とせる支那語独習』(1924)、英語対訳版『官話指南』(1902)の日訳版『自修書』(1924-1926)、『急就篇』(1933)の日訳版『急就篇総訳』(1934)である。

また、『官話指南』のほかの翻訳版については本研究では考察は行っていないが、『官話指南』のフランス語対訳版『官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin』(1887)と英語対訳版『官話指南 The guide to Kuan hua: a translation of the “Kuan hua chih nan” :with an essay on tone and accent in pekinese and glossary of phrases 』(1895)は言及に値する、これは明治時期最初のフランス語対訳版、英語訳の北京官話教科書である。以上列記した教科書の翻訳版から見ると、『官話指南』だけが唯一3度も日本語に翻訳された教科書である。『官話指南』は日本の中国語教育に大きな影響力を持っているため、何度も日本語に訳したと考えられる。そして、表2を見ると、『官話指南』は1887年から1902年にかけて、わずか15年間でフランス語対訳版、英語訳、上海語訳版、英語対訳版、広東語訳版の5種類の異なる言語の版本が出版された。このことから『官話指南』が日本だけではなく国際的にも影響力があったと言えよう。

4.4.2 学習補助価値

『總譯』、『自修書』、『精解』は成立の時代によって翻訳文体、使用用語などが異なっている。3書は『官話指南』を学習する際、その翻訳面での補助的価値について以下のように結論付けることができる。

明治時代の翻訳文体である文語体、口語体と『總譯』の比較を行い、『總譯』の訳文は文語体の特徴がわずかに存在し、すでに口語体(文言一致)への転換傾向が見られ、そのうち一部分の直訳文も存在していることが確認できた。『總譯』の訳文は現在の日本語らしくない言葉も多く用いているが、当時の社会状況に即した表現を使用したにすぎない。『總譯』は『官話指南』を学習する際の補助教科書として、言語表現を一対一対に置き換える翻訳方法は当時の学習者が『總譯』のすべての語彙を理解するのに役立つと思われる。

『自修書』の翻訳は『總譯』の用語、文体を半分以上引用している。このような引用は誤訳の部分までも及んだ。『自修書』の創作による部分を見ると、その翻訳文体は直訳というよりは、意識と類似していると思われる。また、『自修書』の出版は大正末期であり、明治前期に流行した文語体に比べ、当時の学習者にとっては、口語体の方がさらに受け入れやすかったのではないかと思われる。そのため、明治、大正時期の使用した文体により、『自修書』は『官話指南』の学習補助価値としての補助的価値は『總譯』より弱いと考えられる。

『精解』の編纂目的は『總譯』と『自修書』とは異なり、その構成も異なっている。『總譯』と

『自修書』は『官話指南』を自習するために編纂され、『精解』は日常生活の応用をメインに編纂されたものである。『官話指南』の原文に対する翻訳はそれほど多くない。それでも、それらの訳文から、『精解』の翻訳文体はすでに意識になったことが分かる。その訳文の考察から学習者に原文を理解させるのが『精解』の翻訳目標であることがうかがえる。

本章で詳述した3書はそれぞれに翻訳特徴が異なっているが、『總譯』と『自修書』の間には影響関係が見られた。『總譯』は『官話指南』の日本語訳版の嚆矢として、その影響力は強い。『總譯』、『自修書』、『精解』は明治、大正、昭和の3つの時代を経て、編纂目的、使用対象によりその文体、用語も変化している。それらの教科書は当時の学習者にとっては、『官話指南』を学習する際極めて重要な参考書だったに違いない。しかしながら、3書の中には翻訳内容、難易度、誤訳、使用対象などから見た場合、『精解』が『官話指南』を学習する際、最も良い学習書であったと言えよう。

第五章 学習補助教科書の注釈研究

5.1 『総譯』『自修書』『精解』三書の注釈

『官話指南』の学習補助教科書である『総譯』、『自修書』、『精解』の翻訳面における学習の補助効果は第四章で述べた。3書の注釈における補助効果はどのような点にあるのか、本章ではそれを重点的に考察する。主に注釈の特徴から『官話指南』を学習する際にどのような補助的な役割を果たしているのか見ていく。

5.1.1 三書の内容における特徴

『総譯』の注釈は語彙⁽¹⁾、フレーズ⁽²⁾合わせて1580例の注釈がある。そのうち発音に言及する注釈は「倒ノ讓ノ意上声ニ読ム」⁽³⁾、「倒過ノ讓受、買受、注意倒字上聲ニ読ム倒過」、「當舖ノ質店、注意當字去聲ニ読ム」、「當是ノ必定…センコトト思ヒノ意常字上聲ニ読ム」、「看果子的ノ果園ノ番人、看字上平聲ニ読ム」の5個のみである。注釈では漢字と片仮名を使用し、いくつかの漢字に片仮名でルビを振っている。注釈の内容は他の教科書または辞典などを参照した痕跡が見当たらないため、著者の学識に基づく解説であると思われる。また、『総譯』の注釈には『官話指南』と改訂版『官話指南』のどちらにも用例のない「撒了」、「您々」に「退職せり」、「遊歩、散歩」と解説を付けている。『総譯』の注釈の位置、注釈の意味から推測すると「撒了」、「您々」は『官話指南』原文の「散了」、「逛逛」に対応し、『総譯』は誤植と思われる。そして、『総譯』の注釈は「亦錶ト書シ懷中時計。」、「…マデモ…デサヘモ。」、「陶潛歸去來辭ニ雲無心以出岫鳥倦飛而知還景翳以將入撫孤松以盤桓トアルヨリ出ヅ」「真誠意外ニ當ルヲイフ。」などの解釈のみがあり、その解釈と対応している表現がないのも存在している。その意味と原文の位置が推測すると、「亦錶ト書シ懷中時計。」、「…マデモ…デサヘモ。」、「陶潛歸去來辭ニ雲無心以出岫鳥倦飛而知還景翳以將入撫孤松以盤桓トアルヨリ出ヅ」はそれぞれ「表」、「不論」、「盤桓」の解釈であるが、「真誠意外ニ當ルヲイフ。」と対応している表現がない。

また、「齒」「這陣兒」のように原文を挙げているが、意味の解釈がないのは二箇所のみである。

第四章に述べたように『自修書』は『官話指南』の底本の原文を載せている。原文の上に1本の横線により、注釈と原文を分けている。その注釈は漢字と平仮名を使用し、ルビを振らない。全書の注釈は語彙、フレーズ合わせて2497例の注釈がある。その中には初の出現ではない語句もあり、その場合は「五更天ノ午前四時頃（本巻二一の註を見よ）」のように記している。発音に関する注釈は「已經ノ已も經も共にすでに、經は此時は第四聲に讀む、經過する意の時は第一聲。」、「都ノ皆の意、此時はトウと讀み、其他はトウ。」、「好好兒ノ同じ字が二つ重なる時は下の字一聲に讀

⁽¹⁾ 本章で言う「語彙」は単音語、2音節語、3音節語、4音節語の総称である。

⁽²⁾ 本章で言う「フレーズ」は「語彙」以外の語句、慣用語などを指す。例えば「至好的朋友ノ極く親しい友人、也不過ノ罷ノまあノ位なものでせう。」など。

⁽³⁾ コロン「/」の前は注釈対象の語句、後ろは注釈の内容である。以下同。

む。」「一治／一は原来唯一つ讀むときは第一聲、下の字が第四聲ならば變じて第二聲となる。」「調養／ととのひ養ふ、この場合は調は有氣二聲。」「當舖／質店、此場合當字去聲に讀む。」「四更天／昔、日没に漏刻を設け、漏の盡くる迄を五分して初更（戌刻八時）二更（亥刻事時）三更（子刻十二時）四更（丑刻二時）五更（寅刻四時）と稱せり、更はチンと讀むに注意。」「埋没／埋める、没は此時は「モオ」と讀む。」「到過舖子／倒過は讓受買受などにて引取ること、第三聲に讀む。」「會子／暫くの間、第三聲に讀む。」「解銅／解は看守の意、シエと讀む。」の11例がある。また、『自修書』では対応する原文を挙げずに、「蒙ニ你賞ン我的」の解釈を提示したが、『官話指南』の原文を見ると、「蒙你賞我的」の意味解釈であると思われる。

『精解』は『總譯』と同じように底本の原文を載せていない。翻訳を必要とする原文、注釈を必要とする用語、発音の注記が必要な単語のみを収録した。『精解』に語彙、フレーズを合わせて2304例の注釈がある。注釈では漢字と平仮名のみを使用し、ルビを振らない。『精解』の注釈は読点を活用している点で『總譯』とは異なる。また、『精解』の注釈は解説だけでなく、「(註)」の標記を入れ中国語の解説を加えることもある。例えば、「情有可原／事情に恕すべき點がある。(註) 在情理方面、可以原諒。」のように注釈している。ここから分かるように「事情に恕すべき點がある」は「情有可原」に対する日本語の解説で、「(註) 在情理方面、可以原諒。」は日本語の解説を中国語に翻訳している。さらに、「房東／家主。類例：東家（主人）」、「敢情／何んとも。(例) 敢情他也會説廣東話。」のように注釈での対象語彙を使い例文を作成したり、あるいは類義語を挙げることもある。この種の例は『精解』の注釈の三分の一程度を占める。

3書で『總譯』だけが改訂版の「應酬瑣談」をも収録したが、『自修書』と『精解』の注釈の数量は『總譯』を大きく上回り1000個があまり多い。『自修書』と『精解』の注釈が比較的充実していることが理解できる。3書は総計6300余りに上る語句注釈を有し、明治・大正・昭和時代における日本の学者にとって中国語の語彙注釈の好材料である。本章は3書の注釈の全体像を示すために『總譯』『自修書』『精解』三書注釈総表を作成し、文末に附録として添付した。

5.1.2 三書の注釈における特徴

本章における注釈の分析は文末附録「『總譯』『自修書』『精解』三書注釈総表」を参照しながら行い、より典型的な用例を取り出して文中に示す。

(1) 『總譯』の特徴

前述したように『總譯』には1580例の注釈があり、語彙の注釈はその半分以上を占めている。『總譯』の注釈の特徴は以下の通りである。

1) 語彙の意味を簡潔明瞭な言葉で説明する。

例えば、「洋藥／阿片」、「地勢／位置」、「多禮／丁寧」、「老爺／長者又ハ主人ヲ尊敬シテ呼ブ称、白契／官ノ朱印ナク個人間ノ讓受渡ノ證書」、「保鑣的／護衛者」、「自鳴鐘／鈴打チ時計」、「下剩／

其餘、殘餘」、「下餘／下剩ト同ジ」、「新手兒／新參ノ者」、「従先／従前、以前」、「多心／心遣」、「冷不防／突然、不意」、「找／搜也、尋也」、「瞧門脈／宅診」など。

以上の注釈のように、より簡潔な言葉を使用することで学習者は語彙の意味を素早く理解できる。

2) 中国特有のものは日本の事物を例に挙げて解釈する。

例えば、「首飾行／我ガ国ノ鍔（飾リ）屋ノ如キモノニシテ婦人ノ頭飾用ノ物、其他金銀ノ細工ヲ為ス店ナリ」、「武夷山／崇安縣ニアリ有名ノ茶場ちゃじょうニシテ猶如我國ノ宇治うじノ如シ」。

この例は2例しかないが、学習者に対象物を容易にイメージさせている。

3) 常用の意味だけでなく、文脈に則した訳語を提示する。

例えば、「師傅／所謂師匠ナ今棟樑ト譯ス」、「磚瓦窯／甎ハ敷瓦、瓦ハ屋根瓦、窰ハカマナリ、今假ニ瓦屋ト譯ス」、「傍帳兒／車篷兩側窗沿摺帳也、今假ニ窓ノ日覆ト譯ス」、「外間屋裏／入口ノ座敷、今假ニ玄關ト譯ス」、「當缺的／役所ノ書記ナド言フ、今假ニ書記生ト譯ス」、「管事／支配スル人、今假ニ執事ト譯ス」、「衙役／役所ノ小吏、小吏ノ如キモノ今假ニ小使ト譯ス」、「炕／支那北方ニ於テハ磚ニテ土床ヨリ凡ソ二尺計リ積上ケ其中ニ火道ヲ通ジ暖ヲ取ル工夫ヲナシ上面ハ泥ヲ以テ塗り蘆席ヲ敷キタル一種ノ臥床ナリ今假ニ煖床ト譯ス」など。

このことから意味の正確性はもとより、学習者の理解しやすさにも配慮していることがうかがえる。

4) 地名及び北京地域特有の事物は詳細に説明する。

例えば、「東單牌樓總布胡同／北京城内東西ニ各四牌樓、單牌樓アリ十字街上四個ノ樓門アリユエニ之ヲ四牌樓トイフナリ、一條街ニ一個樓アリ單牌樓トイフ都テ之ニ依テ界區トナスナリ」、「東關外頭／東門外頭也」、「後門／清國皇城ノ後門ナリ地安門トイフ」、「上元縣／江蘇省江寧府ノ管轄ニ屬スル縣」、「西河沿／北京城正陽門外御河ニ沿ヘル地東岸ヲ東河沿トイヒ西岸ヲ西河沿トイフナリ」など。

地名を解釈する際、その具体的な位置まで詳細に紹介していることから、著者は地名に関する資料を参照したと推測される。

5) 中国語そのまままで解釈する。

例えば、「打眼／看錯也」、「堂上／衙門内會審室詢問所」、「白事／喪葬祭祀謂之白事也」、「出了邊外／出了一次外也」、「臃／肥盛貌、肥胖長肉也」、「食之者寡／寡婦食之之意」、「算是／可謂也」、

「還得／尚須也」、「肯叫／敢使也」、「一會兒／暫時」、「到底／畢竟也、究竟也」、「嗒／歎聲、嗚呼也」、「性兒／意思」、「滿地的／許多也」、「緣故／理由、所以」、「短／不足、寡少」、「始終／到頭」、「就見／忽見也」、「入字牆／官府之門形八字土牆」、「沒點的言字／謂沒言字、首頂一點畫也、即言形耳」、「哦噠／湯水漬痕也」、「前失／跪也、馬前蹄躓跌也」、「船幫／船傍也」、「首縣／府內最繁之縣也」、「抱屈／嘆人落第之言也」、「五個嘴巴得／官不大不能專自用刑五個嘴巴得還可以打人」、「六路通詳出得／雖小官可以通同東西上下官府」、「覆試／再考一會看其真才蓋恐前其者作卷也」、「兩塊竹板拖得／典史走道不能大搖擺列只可以拖兩片竹板喝道而走也」など。

そのまま中国語で解釈している語彙は 29 個ある。ただ、中国語で語彙を解釈する際、その内容が理解しにくい場合もある。例えば、「五個嘴巴得／官不大不能專自用刑五個嘴巴得還可以打人」、「六路通詳出得／雖小官可以通同東西上下官府」、「覆試／再考一會看其真才蓋恐前其者作卷也」、「兩塊竹板拖得／典史走道不能大搖擺列只可以拖兩片竹板喝道而走也」などのように、その解釈は中国語通じない。このように理解しにくい注釈も少なくない。著者は注釈対象の語句に対する理解が不十分だった可能性がある。なお、「食之者寡」については《大学》⁽¹⁾に“生之者众，食之者寡”とその出典があり、“生产的多，消费的少。形容财富充足。”の意味である。『官話指南』では「一個是節孝祠の祭品，打四書一句。是食之者寡。(2-40)」のように用いている。《大学》の意味と同じであるとわかるが、『總譯』の翻訳は「寡婦食之之意」となっており、《大学》での意味は一致しない。著者が間違った理解をしていると思われる。

6) 同一の語句に文脈から異なる注釈をつけることがある。

例えば、「看一看／①看察スル②試ニ見テクレトノ意」⁽²⁾、「就是／①即也②タトヒ③唯也」、「敢自／①実ニナドノ意②マア本当ニノ意」、「合式／①式ニ合ウ意②茲ニハ気ニ入ルチ訳ス③凡テ物ノ能適ヘルヲ合式ト言フ」、「打聽／①聞キ合ス②尋ネ」など。

“看一看”に対する「試ニ見テクレトノ意」の注釈から、動詞の重ね型に「試しに～する」の意味があることを認識しているとわかる。“就是”は接続、仮定、程度を表す「即也」、「タトヒ」、「唯也」。「敢自」は共に副詞である「実ニ」、「本当ニ」の意味を表したが、その意味が異なっている。それ以外「合式／①式ニ合ウ意②茲ニハ気ニ入ルチ訳ス③凡テ物ノ能適ヘルヲ合式ト言フ」、「打聽／①聞キ合ス②尋ネ」などのように同じ意味で異なる日本語で解釈している注釈もある。

また、『總譯』には「栽培／世語」、「幸虧／幸福にも、幸而也」、「接過／渡す」、「爬到去／爪にて搔き上る」、「野猫／兔」のような注釈がある。

上述の注釈の原文は以下の通りである。

⁽¹⁾ 《大学》は中国儒家学派の入門書「四書」のひとつである。

⁽²⁾ ①②③はそれぞれ別の意味項目を表す。原文にこの標記はない。

例 295. 素日受您的栽培我本就感激不盡…。

例 296. 這麼着那羣賊，就把箱子和包袱、現錢都拿了去了，就是把鋪蓋給留下了。幸虧我們舍弟身上有一個銀兜子，裏頭裝着有十幾兩金子，還有幾十兩銀子沒丟。(2-28)

例 297. 這是起浙江來的銀信。那個賣錫子的人，把銀信就接過去了。(2-36)

例 298. 因為沒地方藏所以他就爬到牆上去，跳到這院裏來了。(2-25)

例 299. 打了些個甚麼野牲口來。打了些個野雞、野貓、還打了個野豬。(2-15)

「栽培」は「世話」を訳し、おそらく「世話」の誤植だと思われる。「世話」には「面倒をみる」の意味があり、「〇〇先生の世話になる」と言った場合、その先生のもとで勉強するという意味もあり、視点を変えると「〇〇先生が～を育てるや、教育する」の意味にもなる。そのために、「栽培」は世話とは関連性があると言える。

“接過”は「受け取る」の意味であるが、恐らく訳者の視点から、「渡す」と訳したのであろう。「幸虧」を「幸福にも、幸而也」と訳しているが、文脈を合わせてみると、ここの“幸虧”は「幸而」の意味を表し、即ち「幸いに」の意味である。なお、「幸福にも」の意味を捉えるのは、おそらく賊に遭遇して、命が助かった時に可能となる表現であろう。

“爬到去”は「はい上がる」の意味を表し、例 298 の“爬到牆上去”は「壁をはい上がっていく」の意味を表すと思われる。『總譯』は“爬到去”を「爪にて搔き上る」と訳し、誤謬だと思われる。

「野貓」は“野兔”⁽¹⁾の意味を表している。例 299 の原文を見ると、狩りをする場面なので、『總譯』の「兔」より、「野うさぎ」のがより適切であると考えられる。

以上の特徴から見ると、学習者により正確な意味を理解させるために、独自の方法で語彙を解釈している。そして、『總譯』は著者の視点により、解釈の意味も変わり、不適切な釈義もある。このような解釈は学習者の理解にも影響を与えることになる。また、一部の注釈は直接中国語を使っているが、これを理解するためには学習者は一定の漢語の知識を身につけている必要がある。この点においては『總譯』は漢語初学者には適していない。中、上級の学習者向けの学習補助教科書であると言える。

(2) 『自修書』の特徴

『自修書』の注釈は 2497 個あり、フレーズを中心に解釈している。『自修書』は「例言」で「本書編纂に當り、前項の「官話指南」及吳泰壽著「官話指南總譯」に師事する所甚だ多い。」と述べたように、『總譯』を引用するところが多い。そのため、『總譯』のすぐれている点を全て吸収している。例えば、「語彙の意味を簡潔明瞭な言葉で説明する」、「同一の語句に文脈から異なる注釈をつける」などである。そのほかの特徴については以下のように整理できる。

- 1) 語彙を釈義した上で、例文を作成する。

⁽¹⁾ 高艾軍、傅民 2013、975 頁。

例えば、「提您／提は言ひ出す。例：你別提那件事。(お前はあの事を言ひ出すな。)」⁽¹⁾、「有七八年了／類例：我在中國有七年了。(私は支那に七年も居ります。）」、「還算／まあ…の方だ。類例：他的病還算好。(彼の病氣はまあ好い方だ。）」、「候補／各々の役にその候補なるものあり、例へば候補知府、候補知縣の如し。」「不咖／問ひの動詞を繰返へさずして否定して答ふる場合に用ふ。相手の發問に對して其言葉を繰返さずして其言葉を打消すに用ふ類例(你喝茶罷，不咖了)君茶を飲み玉へ飲まない。」「吃一頓挨一頓／一頓は食事の同数をいふ、例へば、一天吃三頓飯の如し。挨は挨餓ひもちい思ひをするの意。」「胡攪亂對／無暗に混ぜたり、やたらいたしたりする、對はたす。用例、這開水太熱對一點兒涼水(この湯はひどく熱いから水をたせ。)」など。

このように、解説の後に例文を提示する方法は、『總譯』には見えない。学習者にとって、例を挙げて語彙を解説するのはより理解しやすくなり、効果的な方法である。

2) 用語を積義した上で、類義表現も提示する。

例えば、「連…都…／…から…までも皆の意、連れるの意に非ず。類例：連家眷帶底下人都去(家族から召使まで皆行く。）」、「有話說／言ふべき話あり。類例：沒法吃。(吃ふべき飯がない。）」、「起的身／この的は過去を表はす。類例：你多嗜到的京(君は何時北京に着いたか。）」、「苦得…喝不得／類例：腳疼得走不得。(足が痛くて歩かれない。）」、「房東／家主。類例：東家(主人)、財東(出資者)」、「那盃茶好就喝那盃罷／類例、你能喝多少、喝多少、(君どれだけ飲めるかどれだけでも飲み玉へーのめるだけ飲み玉へ。）」、「住多少間下剩多少間／住むだけ住んであとは……類例(有多少拿多少來)有るだけ持つて来い。」「包租／請負借りをする。類例包做(請負で作る)包治(請負で治療する。）」、「要甚麼有甚麼／要るものは何でもある、類例「要甚麼買甚麼」要るものは何でも買へ、「要多少給多少」要るものは何でもやる。」「誰家的／類例「誰願意、我給誰」誰でもほしいなら私は誰にでもやる。」など。

これらの例は『官話指南』の語句を説明するだけでなく、関連表現を示し、『官話指南』以外の知識も重視している。

3) 『總譯』の漢語解釈を日本語に訳す。

例えば、「打眼／見そこなふ。」「堂上／衙門内の訊問所。」「食之者寡／之れを食ふ者は寡婦なり。」「五個嘴巴／大官に非るを以て自分にて刑を斷することを得ず、只五つ位打ち得るに過ぎず。」「六路通詳出得／小官と誰東西南北上下の六路の官府位には通信するを得。」「兩塊竹板拖得／典史は途上に於て他の大官の如く行列厳めしく練り歩くこと能はず只二つの竹板を引きづり呼び歩くことなり。」「算是／…といふものだ。」「由着他的性兒鬧／彼の性質に由つて鬧せしめば。」「縁

⁽¹⁾ 括弧内は「例」、「類例」の日本語訳である。

故／理由、わけ。」「始終／到頭、どうして。」「八字牆／門府の門形は八字形をなす。」「沒點の言字／言といふ字の首めの點がないもの。」「哦噠／しみ。」「前失／馬の前脚を折つてつまづく。」「船幫／船腹。」「首縣／府内最も繁盛の縣。」「抱屈／残念なり。」など。

『自修書』は『總譯』で漢語を使い解釈した部分を日本語で解説した。しかし、「食之者寡」については相変わらず間違っただけである。そして、「五個嘴巴」、「六路通詳出得」の解釈も理解しにくい。これらの注釈を『精解』と比較すると『自修書』がまだ十分ではないことは歴然としている（後述参照）。また、「就見／忽見也」は『總譯』と同じく、中国語で解釈している。

4) 地名及び北京地域特有の事物は簡潔明瞭に説明する。

例えば、「東單牌樓／北京城内の一つの大通りの名。」「上元縣／民国に至り江蘇省江寧府に合併せり。」「西河沿／北京城正陽門外の御河に沿へる地、東岸を東河沿といふ、西岸を西河沿といふ。」「東關外頭／東門外。」

『總譯』とは対比的に『自修書』は簡潔な説明を行っているがそれぞれに特徴がある。『總譯』の方は学習者は北京について深く多くの知識を得られるが、『自修書』は学習者に簡単に北京の事物を理解させると同時に、学習者の新事物に対する理解にも配慮している。過度に煩雑にするのは却って理解難しい可能性がある。

以上のことから、『自修書』の注釈は『官話指南』を学習する時の補助教科書であるだけでなく、そのほかの知識も重視している。しかし、『自修書』の注釈は『總譯』の間違いを修正できていない箇所がある。例えば、「食之者寡／之れを食ふ者は寡婦なり」、「爬到去／爪にて搔き上る」など。

(3) 『精解』の特徴

『精解』の注釈はフレーズを中心に解釈している。『精解』は「書外一步應用上の示唆を與へんことに力を致せり」と「緒言」にあるように、その注釈方法は『總譯』と異なり、『自修書』と類似点がある。『精解』の注釈の特徴は以下のようにまとめられる。

1) 『精解』は語彙の意味を解釈した上で、さらに割注をつけている。その割注には例文作成、類義語、中国語の釈義などの内容がある。

例えば、「趕緊的／急いで、少しでも早く。(註) 趕快的。」「照應／世話する、幹旋する。(註) 照料和幫助。」「打發／使ひ出す。(註) 派人去做事、我打發他送信去啦。」「如數／極めた金額。(註) 照着某種數目改日如數奉還。」「悶得慌／退屈で仕様がなない。(註) 心裏不暢快、愁悶。」「打夜作／夜業する。(註) 做夜工。」「丁憂／父母の喪に服すること。(註) 死了父母稱丁憂。」「代為先容／豫め都合を伺つて貰ふ。(註) 先介紹一下兒、請您先容、隨後我再來接洽。」「擇吉／黃道吉日をトす。(註) 選擇好日子。」「家母年邁／母親が老齡である。(註) 年邁、年紀老。」「如數／極めた金額。(註) 照着某種數目、改日如數奉還。」「彷彿／如何にも…の様だ。(註) 好像。」

「茶錢／敷金、茶代、心附。(註) 北平的習慣，賃房子的時候，在房錢以外另繳的一種錢，搬家的時候，可以多住一個月抵算的。」、「封印／官衙の御用納。(註) 清朝在年底，新年中停辦公事，把印封起來，叫做封印。」、「徼倖／こぼれ幸(註) 出於意料之外的得到，同(僥倖)。」など。

『精解』のこのような注釈は『自修書』と類似している。いずれも注釈の対象語句を使い例文を作成するか、類義語を挙げるか、中国語での解説をするかである。しかしながら、『精解』は『自修書』のように割注の類義語、例文などを日本語に翻訳していない。『精解』にはこのような注釈方法が非常に多い。著者は「書外應用」の理念を徹底的に実践したと言える。また、「悶得慌」、「打發」、「打夜作」などは北京語特有の語彙であり、中国語の割注は北京語以外の言い方を紹介したかったのだろう。

2) 謎謎の言葉、「拳を打つ用語」でも簡潔な言葉を用い、『總譯』と『自修書』より理解しやすい。このような注釈は以下の三つしかない。

例えば、「五金奎／拳を打つ用語・五の數を呼ぶに用ゆ。」、「四季發財／四季金子が儲かる。」、「六六順／一年三百六十五日順調に暮らせる。」。

「五金奎」は『自修書』で「五金は価値あるの意、奎とは角形の玉、古の笏をいふ、又五經魁の意に通ず、詩、書、易、禮春秋の試験に第一に及第したるを五經魁といふ。」と解釈している。詳細ではあるが、実際は『精解』が説明するように「拳を打つ用語」である。そして『自修書』は最後まで「拳を打つ用語」には言及していない。学習者にとって『自修書』のこのような注釈はおそらく理解しにくいだろう。しかしながら、『精解』では同じ「拳を打つ用語」である“四季發財”、“六六順”には「拳を打つ用語」とは明示されていない。

3) 語彙を中心に解釈しているが、フレーズの注釈も重視している。

例えば、「批的貨／注文した商品。」、「拉躺下了／共倒れになる。」、「準願意／必ず希望する。」、「一面承管／一切引受ける。」、「打夜作／夜業する。(註) 做夜工。」、「夾着點兒時令／時候あたりが加はる。」、「下夜的兵招了／夜警の兵士。」、「臉水打來了／洗面水を汲んで来ました。」、「煮的是筋斛兒／よい好減に煮へた。」、「總攪多一半兒水／半分以上水が雜つて居る。」、「也許有這個事／そう云ふことがあるかも知れない。」、「要上某老爺屋裏去／サンのお宅へ伺ふ。」、「我邀了邀／私が目方を量りました。檢斤しました。」、「把油撇淨了／油を掬ひ取る。」、「我直想不出來／私にはどうも思出せません。」、「藍白線兒的布褲子／藍縞のリンネルズボン。」、「翻過來熨的／裏返して火熨斗をかけてある。」、「胯在車沿兒上／車の脇に跨る。(註) 跨轅兒、坐在轎車的外邊兒。」など。

わざわざフレーズとして取り上げた理由はおそらく単なる語彙と文字で解釈すると、その場面での意味をはっきりと説明できないからであると思われる。

4) 『總譯』、『自修書』の誤謬を修正する。

例えば、「接過去／受取る。」、「幸虧／幸ひ。」、「爬到牆上去／塀によじ上る。」、「兩塊竹板拖得／二枚の竹板を持ったお供が外出には隨行する。」、「六路通詳出得／小役人でも東西南北上下の官衙に公文書を出すことが出来る。」、「五個嘴巴打得／處罰權はないけれど頬を五度位は叩く威力を認められて居る。」、「食之者寡／之を食する者寡し、即ち寡婦之を食すの意に解す。」。

『精解』は「接過」、「幸虧」、「爬到牆上去」などの注釈を修正し、いずれも正しい解釈である。例えば、『精解』の「接過去／受取る」の視点は著者ではなく、受取人の視点から訳したと思われる。「食之者寡」は「之を食する者寡し」と訳し、正しい解釈であるが、3書ともに「食之者寡」の「寡」を「寡婦」と訳しているが、「寡婦」と寡が共通するからの誤訳であろう。

5.2 三書の語彙注釈

三書は北京語教科書『官話指南』を学習する際の補助教科書として北京語語彙に多くの注釈をつけている。本節では、それらの北京語特有の表現、生活用語、役所用語に分けて分析する。

5.2.1 北京語語彙と北京語文法の注釈

(1) 『總譯』の北京語語彙

『總譯』において北京語特有の表現と“兒化詞”は257個ある。

例えば、「茶錢／北京地方ノ俗、家ヲ借入ル際必ズ家主ノ召使等ニ與フ茶代是ヲ茶錢トイン」、「成衣鋪／仕立屋、裁縫鋪」、「從先／從前、以前」、「出馬／往診、往昔支那ノ医者ハ総テ、馬ニ騎リテ往診セシニ因リ今モ豫斯克言フナリ」、「抽冷子／不意に」、「打尖／道中ニテ食ヲスルヲ言フ」、「抖擻／振フ意」、「多嗜／何日、又何時也本ハ多早晚トイヒシヲ音便ニヨリ轉訛シテ多嗜トイフニ至ナルナリ」、「犯潮／犯ハ發也、發濕氣也」、「光景／日数、間」、「會子／久シク、暫ク」、「見天／毎日、日日」、「腳下／目下、現今」、「老子娘／兩親」、「冷不防／突然、不意」、「約摸／オヨソ、大概」、「左皮氣／人に逆らう氣質」など。

(2) 『自修書』の北京語語彙

『自修書』において北京語特有の表現は323個ある。

例えば、「您納／您是呼人之尊稱にして您一字よりは丁寧なり尊稱なり。」、「拾掇／片付ける。」、「整天家／一日中。」、「老子娘／兩親。」、「多咱／何時、多嗜ともかく、咱嗜共に當て字、多嗜は「多早晚兒」の轉化したるもの。」、「寶局／賭博場。」、「月裏頭／本月内。」、「不得勁／面目なし、愧ぢらひ。」、「勾起／引き起した。」、「白事／裏葬祭祀をいふ。」、「素日／平素。」、「街坊／同居、同町

村、同邸内などの居住者をいふ。」「定規／きめた。」「戳子／捺印、割印。」「放印子／日歩の金を貸す、放は放資の意」など。

『自修書』では「整天家」に対する注釈が二箇所あり、それぞれ「一日中」と「一日中家に居る」を解釈した。「整天家」は“天天；一天到晚。”⁽¹⁾の意味を表し、「一日中家に居る」の解釈は誤植だと思われる。

(3) 『精解』の北京語語彙

『精解』において北京語特有の語彙表現は全215個ある。

例えば、「従先／嘗て、以前。」「這盪／今度、この度。」「本主兒／主人、當主。」「相好的／友人、懇意な人。」「欠項／負債、借金。」「一宗／一種。」「紙籤兒／紙札。」「下剩／残り、殘部。」「腳下／目下、近頃。」「瞧門脈／宅診する。」「無頼子／無頼漢。」「先頭裏／以前に、これ迄に。」「傍帳兒／幌馬車の小窓の日覆。」「力把兒頭／不熟練の者。(註) 劣把兒，外行，劣把兒趕車，翻啦。」「屁股蛋兒／臀部。」「這陣兒／只今。」「娘兒們／婦人。」「走動／大小便をなす。(註) 解手兒。」「東嘎拉兒／東の片隅。」「月頭兒／月初。」「向陽兒／日に當てる、陽に向ける。」「跑堂兒的／料理屋のボーイ。」「有眼裏見兒／眼端が利く・氣轉がの利く。」「不咖／イーエ、然うでない。」など。

『官話指南』を学習することは主に北京官話を学ぶためである。そのため、北京語特有の語彙に対する注釈は極めて重要であると考えられる。『總譯』は3書の中に注釈数が最も少なくが、その北京語語彙に対する注釈は『精解』より多い。『自修書』において北京語特有の語彙に対する注釈は最も多く、そのうち“兒化詞”にも大量に注釈をつけている。そこから、『自修書』の著者飯河道雄が語彙に対して注釈をする時、多くの北京語特有の語彙に注釈を付けたことは、著者が北京語特有の語彙の重要性を認識していたからだと言える。

また、3書において北京語特有の語彙に対する意味解釈が正確であるか考察し、『精解』はこのような問題がなく、『總譯』と『自修書』は誤謬の注釈はそれぞれ9個、13個ある。

『總譯』において誤謬の注釈は「您納／您ハ呼人之尊稱ニシテ您一字ヨリハ丁寧ナリ尊稱ナリ。」「性兒／意思。」「兜着走／逃ケ隠ル。」「整工夫／極マツタ時間。」「扎掙／ツトメテ、病ヲカメテ。」「打發／遣ハス意。」「生分／不和ヲ生ス。」「年下／新年。」がある

「您納」は第二人称代名詞の敬称であり、上述の解釈のように“您”より丁寧の表現という説明がない⁽²⁾。賈采珠(1990:168)により、「性兒」は“脾气，性情”の意味を表し、上述の「意思」と違う。「打發」、「兜着」、「年下」、「生分」、「扎掙」はそれぞれ“应酬，应付”、“承担责任，后果等”、“春节”、“感情淡薄，关系疏远”、“勉強支撐”の意味を表し、『總譯』の解釈と

⁽¹⁾ 陈明娥 2014、97 頁。

⁽²⁾ 杨杏红 2014、68-69 頁。

異なっている⁽¹⁾。また、「打圍」は『自修書』のように「獵をする」を訳すのがより適切だと思われる。「行市」は「同」を訳し、『總譯』の本文を見ると、同章は「行情」の注釈もあり、おそらく「同行情」と解釈したいが、印刷のミスで「同」となった。「整工夫」は「極マツタ時間」と訳し、「貴重な時間、厳選された時間」という意味である。『官話指南』の本文を見ると、これは誤謬の注釈だと思う。

『自修書』には『總譯』において誤謬の注釈である「您納」以外にも存在している。それら以外の注釈は「訛／だます。」、「小吃兒／一寸した食物。」、「封兒／封じた物。」、「着落／落着。」、「打印子／検査済の印を押捺する意。」がある。

賈采珠(1990:200, 484)により、「小吃兒」と「封兒」は“一般指年糕封兒豌豆黄儿、爱窝窝、麻团、驴打滚儿、豆粥、豆腐脑儿灯北京风味食品”と“内装赏钱的红纸封套”の意味を表し、『自修書』の解釈と違い、誤謬の解釈であると思う。「打印子」、「訛」、「着落」はそれぞれ“昔时放钱取利或类似地计算利息”、“找借口，向人敲诈财物或委以责任”、“头绪，下落”の意味を表示し、『自修書』の解釈と全く異なる意味である⁽²⁾。

3書の中に『自修書』は北京語特有の語彙に対する注釈が一番多いが、誤謬がある解釈も多い。『總譯』と『自修書』はいずれも正確な北京語特有の語彙を学習することに影響する。以上のことから、『精解』は『官話指南』の北京語特有の語彙に注釈を加えた学習補助教科書のうちで正確性が最も高いなものであると言える。

(4) 三書の北京語文法

文法に関わる注釈を見ると、『總譯』は介詞の「解、趕」を「由也、從也」と「後置詞の…カラト譯ス」、助詞「來着」を「ヲシテ居タ過去ヲ示ス語ナリ」と訳している。また、「打了」は「收穫セルカ、因ニ言フ打ノ字ハ動詞トシテ種々ノ場合ニ用ヒラル隨テ各ノ場合ニヨリ譯語異レリ。」と訳し、動詞ということを提示した。『自修書』は「解」と「來着」はそれぞれ「から」、「して居る」と解釈している。また、『自修書』では「不咖」、「瞎」はそれぞれ「問ひ動詞を繰返へさずして否定して答ふる場合に用ふ。」、「輕悔の意を表はす感嘆詞。」と訳し、動詞と感嘆詞ということを提示した。3書において注釈の中には、上述の後置詞、動詞、感嘆詞以外に、他に文法に関わることは提起していない。

5.2.2 生活用語の特徴について

(1) 『總譯』

『總譯』の生活用語に関する注釈は店舗、金銭、日常生活で使用している言語を対象とし、61個ある。

⁽¹⁾ 傅民、高艾军《北京话词典》2013、第163頁、第241頁、第655頁、第778頁、第1042頁。

⁽²⁾ 傅民、高艾军《北京话词典》2013、第176頁、第254頁、第1057頁。

例えば、「母錢鋪／北京市中公然開店セル銀行トアリ母錢鋪トハ即チソノ暗ニ開店シツ、アル銀行ヲイフ故ニ母錢鋪ノ手形ハ人皆之ヲ使用スルヲ厭フナリ因云母者公母之母也俗言以好為公以不好為母云」、「白契／官ノ朱印ナク個人間ノ讓受渡ノ證書」、「錢鋪／兩替店」、「錢糧／現金納ノ地租ヲ言フ、因ニ清國ニテハ或地方ニ由リ地租米穀ニテ納付スル所アルナリ」、「日壇／天子太陽ヲ拜セラル、高臺ナリ」、「耍去／賭博ヲシニ行ク」、「術士／魔術使」、「丫頭／下婢」、「拜師／師ノ門ニ入り始メテ師ニ対シ禮ヲナスナリ之ヲ拜師傅トイヒテ滿禮漢禮共ニ頗ル重要ナル儀式ナリ滿禮ニテハ一跪三叩首漢禮ニテハ四起八拜ノ禮ヲ為スナリ」、「廂房／正房ノ左右直角ニ建テラレシ所謂庇間ヲ言フ」、「鑣車／旅客保護車、護衛付の車」、「口磨／萬里長城地方ヨリ出ル菌ナリ」など。

(2) 『自修書』

『自修書』の生活用語は71個ある。

例えば、「母錢鋪／北京市中役所の許可を受けて開店せる銀行と、無許可にて開店せる銀行とあり、母錢鋪とは即ち後者の銀行をいひ、公然と手形を發行するを得ず、故に母錢鋪の手形は人皆之を使用するを嫌ふなり。」、「錢糧／現金納の地租をいふ、中國にては或地方に由り地租を米穀にて納付する所あるなり。」、「土局子／阿片間屋。」、「洋行／西洋商館」、「東家／主人」、「在旗／旗人の籍に在る。」、「銀兜子／胴巻、財布。」、「鑣車／旅客を保護する。護衛付の車。」、「口磨／萬里長城地方より出づる菌。」、「廂房／正房の左右直角に建てられた家。」、「胡同／衚衕とをかく、横町、同は元來は二聲」、「包租／請負借りをする。類例包做（請負で作る）包治（請負で治療する。）」、「舖保／中國に於ては店舖の主人の保證が最も確實として喜ばれる。」、「城外／旅館に宿泊するにも言ふ。」、「寶字號／字號は屋號、寶字號は他人の屋號を尊敬していふ、單に寶號ともいふ。」など。

また、『自修書』が生活用語に付けた注釈の数は『總譯』とさほど変わらない。さらに一部の解釈は『總譯』と極めて似ている。また、『總譯』では「不敢當」⁽¹⁾、「豈敢」⁽²⁾、「當不起」⁽³⁾、「那兒的話呢」⁽⁴⁾は4つの語とも「痛ミ入りマス」と訳している。「痛ミ入りマス」は「相手の手厚い配慮、好意などに対して、深く感じる。」⁽⁵⁾という意味を表し、謙讓語である。『自修書』は“不敢當”、“豈敢”、“當不起”、“那兒的話呢”それぞれ「どういたしまして、又は恐れ入りますといふ程の意、敢て尊意に當らんやの略。」「豈敢て貴下の尊稱を受くるに當らんやの意、恐れ入ります又は痛み入りますなどと譯す。」「氣の毒、恐れ入る。對不起ともいふ。」「どういたしまして」と訳している。『官話指南』の原文を見ると、同じように相手の手厚い配慮に対する表現でありながら、4つの異なる言語で表していることから、著者飯河道雄が翻譯する際、多様な言語を用い、その解釈は更に面白くしていることがうかがえる。

(1) 我在通州做買賣，我和你令叔相好，故此特來請安。不敢當，請問寶號。小號信昌。（應對須知）

(2) 您貴姓。豈敢，賤姓王。（官商吐屬一）

(3) 那實在當不起，這就勞駕得很了。（官商吐屬一六）

(4) 那兒的話呢，我這不過效點兒勞，你倒不必這麼多心。（應對須知）

(5) 『新明解國語辭典』第五版2001、70頁。

(3) 『精解』

生活用語に関する注釈は店舗、金銭、日常生活で使用している語であり、75 個ある。

例えば、「散學／獨學する、耳學問、聞覺へ。」、「雜貨棧／雜貨問屋。」、「止當侯贖／新質を停止して、戻質のものを扱ふ。(註) 當舖停止營業、只贖不當。」、「包租／丸借りする、纏めて借りる。」、「賣法蘭的／七寶屋。」、「洋廣雜貨／洋雜貨。」、「局子／製造場」、「紅契／登記済の地巻。(註) 田地房產の文契、上過稅而上邊兒印有官印的。」、「白契／未登記の地。(註) 沒有納稅和經過官廳蓋印的契據。」、「磚瓦窯／煉瓦製造所。」、「搭窩棚／番小屋を造つ」、「土局子／阿片製造所」、「皮貨／毛皮類。」、「藥棧／藥種商。」、「道新喜／新年の挨拶をする。」、「失票／紛失した手形。」、「包袱／風呂敷。」、「賣法蘭的／七寶屋。」、「出口／蒙古方面に行く。」、「佃戸／小作人。(註) 代地主種地的人。」、「照地／土地を檢分する。」など。

『精解』は3 書の中で生活用語についての注釈が最も多く、極めて詳細である。3 書の著者は店舗、金銭、日常生活の語彙まで訳していることから、この教科書を使用した人が清末の文化をより詳細に理解する上で、大いに役立つものであると思われる。

5. 2. 3 役所用語の特徴について

(1) 『總譯』

『總譯』の「使令通話」と「官話問答」には清国公使館及び清の官吏との外交交渉の会話が多くあり、清朝の役所用語を大量に使用している。職名、科挙試験、役所用語等に関する注釈は 88 個ある。

例えば、「被參／參革セラル、彈劾セラル」、「傳案／傳ハ召喚案ハ訊問所ナリ」、「頂戴／頂戴トハ官帽ノ頂ニ飾付クル徑七八寸ノ球ニシテ品位ニ依リ其類ヲ分ツ」、「封印／御用納ヲ言フ官印ヲ緘シテ官吏ニ休暇ウイ與ヘラル、ヨリ然カイフ毎年十二月十九日、二十二、十一日ノ三日ノ内ヨリ封印ノ期初マル」、「過堂／詢問所ニ出ツルコト即チ詢問ヲ開クヲ言フ」、「枷號／首ニ枷ヲ箝メ街上ニ曝ス」、「老公／公中宦官、宮人」、「仵作／檢屍ノ役人」、「會試／五年毎ニ北京ニ於テ各省ノ舉人ヲ集メテ試験ス之ヲ會試トイフ。コノ試験ニ登第スレバ、進士ノ學位ヲ授ケラル」、「進學／秀才トナルノ謂ナリ、凡ソ支那ニテハ各府縣皆孔子ノ廟ヲ設ケ之ヲ學ト稱ス。府ニアルヲ府學トシ、縣ニアルヲ縣學ト稱シ、皆教官ヲ置ク凡秀才トナレバ、各自本籍ノ學中ニ名ヲ列シ始メテ、秀才タルコトヲ證明シ得ルナリ故ニ秀才トナルヲ學ニ進ムトイフナリ」、「學差／學政使ヲイフ、學差ハ一學區即チ一省内ノ教育事項ヲ管理シ生員ノ賞罰及郷試ニ應試ノ人員ヲ錄シテ禮部ニ進達スルヲ掌ル」など。

(2) 『自修書』

『自修書』の役所用語は 111 個ある。

例えば、「被參／彈劾せられる。」、「封印／役所の御用納、官印が封減するによつていふ。」、「過堂／訊問所に出づること即ち訊問を開く。」、「老公／宮中宦官」、「會試／五年毎に各省の舉人を北京に集めてする試験。」、「煩缺／煩劇なる役。」、「舉人／省城に集めて行はるる試験（郷試といふ）に及第したるものに興へらるる学位。」、「撫台／前清時代の一省の長官。」、「汎官／街上に巡還する武官。」、「奉官／役所の許可を受ける。」、「枷號／首に枷をはめ、街上にさらす。」、「衙役／役所の小吏、小使の如きもの、今假に小使と譯す。」、「院上／巡撫の衙門、撫部院。」、「典史／地方官街の文書係。」、「封印／役所の御用納、官印が封減するによつていふ。」、「通別／知府の下にある役。」、「捐／清朝の制、人民より金を以て役を買ふを許したるなり。」、「候補／各々の役にその候補なるものあり、例へば候補知府、候補知縣の如し。」、「太守／知府の別名。」、「接署／代理を交代する。」、「俸滿／俸は官府より官僚に給する給料、ここにでは職務の意。」、「雨造／原告、被告の両方をいふ。」、「被參／彈劾せられる。」など。

(3) 『精解』

職名、科挙試験等に関する注釈は105個ある。

例えば、「上憲／上官、上司。」、「官督商辦／官廳より直接監督を受ける特殊會社を云ふ。」、「總辦／頭取、社長。」、「總辦／頭取、社長。」、「幫辦／副社長、副頭取。」、「煩缺／煩雜なる官職。」、「封印／官衙の御用納。（註）清朝在年底，新年中停辦公事，把印封起來，叫做封印。」、「開印／官廳の御用始。」、「會試／進士の資格試験。」、「堂上／法庭。」、「仵作／検屍醫。」、「王爺／親王殿下。」、「秋審／秋季の裁判。」、「題名錄／科挙試験の及第者を掲載せる名簿。」、「房師／試験官。」、「太史／翰林院修撰。」、「座師／試験委員長。」、「經承／税務司の首席書記。」、「互結官／投供に付き保證に立つ官吏。」、「藩司／布政使。」、「刑席／法律顧問。」、「進學／秀才の資格を得るしものを云ふ。」など。

3書の役所用語に対する注釈の数は量的にはさほど変わらない。『總譯』の著者吳泰寿は読者のために、上述の清朝の制度に関する用語を詳しく紹介している。詳細な注釈から著者が大いに工夫していることがうかがえる。そして、この教科書を勉強した日本人は中国役人との会話が可能となり、意志疎通ができるようになると推測される。『總譯』と比べると『自修書』、『精解』の役所用語についての解釈は比較的簡単ではあるが、学習者がこれらの職名、科挙試験などの意味の理解には何ら影響しない。

『總譯』、『自修書』、『精解』の語彙注釈はともに大量の北京語語彙、生活用語、役所用語について注をつけている。『總譯』の生活用語以外に、三書における北京語語彙、生活用語、役所用語の注釈数はそれほど大きな差異がない。この点から、3書の著者は『官話指南』を学習する際に北京語語彙、生活用語、役所用語が一つの難関を認識していると考えられる。

5.3 三書注釈の学習補助価値

5.3.1 中国語教科書編纂史上における『總譯』、『自修書』、『精解』の位置づけ

本研究の第四章では、『總譯』、『自修書』、『精解』の中国語教科書編纂史の翻訳類の学習補助教科書における位置づけを考察した。ここでは同じように表2を参照しつつ、『總譯』、『自修書』、『精解』の注釈が明治時代の中国語学習補助教科書としての位置づけを分析する。

明治時代の中国語学習補助教科書において注釈類の教科書は比較的少ない。調査した範囲では注釈の形式のみを取る学習補助教科書は、「フランス人のカトリック神父 H. Bourher」⁽¹⁾ 編集した『官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin』、1900年出版のものしかない。すなわち『官話指南』のフランス語注釈版である。そのほかには注釈と翻訳両方を取り入れた日訳注釈版がある。

『語言自彙集』から派生した『清語階梯語言自彙集』(1881-1882)は日訳注釈版の学習補助教科書の中で最も早くに出版されたものである。2番目は1905年に出版した『總譯』で、日訳注釈版である。3番目は木全徳太郎が1922年12月に著した『支那語教科書総訳』である。この『支那語教科書総訳』の底本は岡本文正が1904年に著した『支那語教科書』である。しかし、『支那語教科書総訳』は『總譯』のように多く難解語句に注釈をつけたのではなく、「必要に応じて注を加えている。」⁽²⁾、さらに、第七課の訳文の終わりに「注意」、「類語」、「注解」などの形式で注釈をつけている⁽³⁾。『自修書』は3冊から成り、それぞれ1924、1925、1926年に出版され、4番目の日訳注釈版学習補助教科書である。そして、『精解』(1939)の出版より前に、『談論新篇総訳』(1933)と『急就篇総訳』(1934)の2種の日訳注釈版学習補助教科書がある。岡本正文が翻訳した『談論新篇総訳』は1933年出版、その底本は金國璞と平岩道知が著した『北京官話談論新篇』(1898)である。『談論新篇総訳』の体裁は『總譯』と類似し、各章の語句に注釈を施した。『急就篇総訳』は宮島大八が編纂し1934年7月に出版したもので、底本は自身の著作『急就篇』(1933)である。『急就篇総訳』の「問答」編では、「語句や中国の習慣などの説明が「註」として」⁽⁴⁾加えられている。以上から明治時代の日本語注釈類の学習補助教科書で最も早くに出版されたのが『總譯』であるとわかる。注目すべきは『官話指南 Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin』が明治時代唯一フランス語注釈の学習補助教科書となったことである。『官話指南』の認知度は国際的にも認可されていたのだろう。

なお、『官話指南』だけが唯一3度も出版された日訳注釈版の学習補助教科書である。つまり、『官話指南』が非常に強い影響力を持っており、明治時代のみにとどまらず昭和時代に至るまで再編集、改訂されている。

5.3.2 注釈の学習補助価値

『總譯』、『自修書』、『精解』は注釈する語彙の選択においてそれぞれの対象も数量も異なるが、

(1) 六角恒廣 1994、44 頁。

(2) 六角恒廣 1994、127 頁。

(3) 例えば、「注意：石 (shih², tan⁴) / shih²石」、「類語：看門的 (kan¹ mèn² ti¹) / 門番」、「注解：起了一点兒了 / 少し騰った。」のようにである。

(4) 六角恒廣 1994、199 頁。

『總譯』は主に語彙を中心に解釈し、1580 例の注釈がある。『精解』と『自修書』は主にフレーズを中心に解釈し、それぞれ 2497 例と 2304 例の注釈がある。3 書は自らの学識により注釈を設け解説し、それぞれ独創性に優れている。3 書にある注釈の考察から、明治、大正、昭和と 3 つの時代に渡り、それぞれの著者により、その解釈、表現も変わってきた。しかしながら、3 書の編纂者らには北京語文法という概念がなく、ただ釈義をただけである。3 書の注釈は『官話指南』を学習する際にそれぞれの補助価値は以下のようにまとめられる。

『總譯』は簡潔明瞭な表現で注釈内容をまとめていたが、北京特有の事物、地名、役所用語などについては詳細に説明しただけでなく、多くの北京語特有の語彙に注釈を付けた。学習者が『官話指南』の用語をよく理解できるように大いに工夫したことがわかる。その注釈は『官話指南』の要点あるいは難点をしっかりおさえていると思われる。しかし、いくつかの箇所の注釈に誤謬があり、中国語による注釈も見られた。しかも、その解釈は中国語として通じない例もある。このような注釈の数は量的には少ないが、学習者の理解には大きく影響するものである。『總譯』の中国語による注釈という現象からみると、『總譯』は中国語初学者には適さず、一定の中国語のレベルを有する学習者の使用を想定していた可能性がある。

『自修書』は『總譯』の後に出版された学習補助教科書として、『總譯』の注釈のすぐれた点を活かしつつ、不十分だった中国語での釈義、難解な釈義を修正した。注釈の対象語句の類義語を挙げるだけでなく、例文も作成し、場合によっては例文翻訳を加えた。多方面から注釈の対象語句の意味を理解させようと試みた傾向がある。このような例は少ないものの、『自修書』はその語彙の理解、応用を重要な学習目標に据えていることがわかった。しかし、『自修書』の注釈は北京語特有の語彙を対象とすることが比較的多くが、北京語特有の語彙に対する解釈にも誤謬がある。そして、第四章の翻訳と同じように『總譯』の注釈についての誤謬にも修正していない。それらはいずれも『官話指南』の学習補助価値に影響してくる。

『精解』は 3 書のうちで最も遅く出版された教科書で、注釈に使用した日本語は『總譯』と『自修書』より平易で理解しやすく、さらに簡潔明瞭である。しかも、『總譯』、『自修書』の注釈にある誤謬を基本的に修正した。『精解』は 3 書の中で注釈の解釈が最も正確である。また、『精解』の注釈は『自修書』と類似していて、類義語、例文作成が含まれている。しかし、『精解』は作成した例文の翻訳はつけていない。『精解』の注釈方式は、自身が言及した「書外應用」の編纂目的と関係がある。また、その語句に対する注釈から見ると、『總譯』と『自修書』は北京語特有の語彙、生活用語、役所用語につけた注釈はかなり全面的に作成されている。両著者が『官話指南』を学習する時に、これらの語彙が相対的に重要であることを認識していた。それに対し、『精解』の注釈はこれらの語彙に対する注釈がより少ない。この差異はおそらく 3 書の著者らは『官話指南』に対する認知がそれぞれ異なっていたことと、『精解』が「應對須知」を収録されていないことに起因するものと思われる。『精解』『官話指南』の難点に対する認識、および解釈の正確性において補助価値が最も突出しているといえ、著者は『官話指南』の学習時にこれらの語彙の重要性を十分に理解していたことも見て取れる。総合的に言えば、3 書の注釈数量、内容の正確性、理解度から、『精

解』の注釈は『官話指南』を学習する際の補助価値が最も大きかったと言える。

第六章 学習補助教科書の音声研究

6.1 『官話指南』の「凡例」における北京語音声の説明

『官話指南』は「凡例」で四声、有気音、鼻音韻尾などを紹介するのみで、本文では文言だけで音声については触れていない。このため、『官話指南』の北京語音声に対する研究は非常に少なく李无未(2007)と徐麗、石汝杰(2010)のみである。

李无未(2007)は『官話指南』本文の四声表記について考察した。『官話指南』は計4535個の漢字に声調記号をつけていて、重複する漢字を除くと3037個であると指摘した。しかし、筆者も同じ文献⁽¹⁾を確認したが、漢字の四隅には圈点が付けられてない。一方、1900年出版の『官話指南』重印版(「上海本」)には表記がある⁽²⁾。「上海本」は漢字の四角に赤い色で「、」のような符号を打ち四声を表記している。しかし、この四声の表記はとも学習者が勉強時に行った書き込みのようにも感じられる。このため、李无未(2007)の論述については本節の参考としない。

徐麗、石汝杰(2010:78-79)は、『官話指南』「凡例」の発音説明について解説し、その音声上の問題を取り上げ、次のように述べた。「凡例」は“对四声如何发音,说得很详细,但还是语焉不详。如果光看这样的说明,读者大概是无法真正了解汉语声调的发音方法。”(筆者訳:四声の発音法については詳細に説明しているが、このような説明だと、学習者はおそらく真の漢語の声調についての発音方法を理解できない。)と指摘した。さらに、『官話指南』は“提出了类似四呼的概念,但显然在说明上有点混乱。”(筆者訳:四呼に類似する概念を提示したが、説明においては混乱も些かに見られる。)と述べた。

「凡例」の「京話有二,一為俗話,一為官話。其詞氣之不容相混,猶涇渭之不容並流,是編分門別類。令學者視之井井有條,釐然不紊,庶因人因地而施之,可以知所適從。」を見ると、『官話指南』の著者は北京官話の発音を重視していると分かる。本節は徐麗、石汝杰(2010)の研究を踏まえた上で、「凡例」の北京語音声の説明に対して解説し、さらに、この音声表記方法の由来について考察する。

(1) 四声と変調

「凡例」は「初學華語者,須知有四聲。(中略)初學四聲之法,最難解說。」と述べ、声調については漢字の四隅に圈点をつけて、“上平(陰平)、下平(陽平)、上聲、去聲”を表わした。圈点を付ける位置については「上平則在字之右肩加一圈,其下平在字之右腳加一圈,其上聲在字之左肩加一圈,其去聲在字之左腳加一圈。」と説明している。そして、四声の発音法を以下のように説明する。

⁽¹⁾ 李无未(2007:261)は使用した底本について「《官話指南》,日本人吳昌太、鄭永邦合編,由楊龍太郎出版(又見六角恒廣《中国語教本集成》第一集第二卷,不二出版社1991年4月,東京。以下所引頁碼均此為準)。」と述べている。

⁽²⁾ 初版は上海美華書院の発行で、表紙に「西曆一千九百年 官話指南 光緒二十六年歲次庚子」とある。尾崎文庫所蔵、以下「上海本」と称する。

如上平，其發聲時，係自上落下而止，聲音較短。如下平，其發聲時，係向右傍一擲而止，聲音較短。如上聲，其發聲時，係半含其音，漸漸垂下，聲音較長。又如上平，其發聲時，係如點首之壯。如下平，其發聲時，係如人將首向右傍稍轉之壯。如上聲，係如人仰首之壯。如去聲，係如人將首向左下垂之壯。（「凡例」）

徐麗、石汝杰（2010：78）は、これらの発音描写は読者にとって理解しにくいと指摘したが、“对于两个上声连读时的变调，则说的相当正确。”（筆者訳：2つの上声が連続される時の変調について、その説明は非常に正確である。）と指摘した。

また、「凡例」は変調について以下のように述べた。

凡言語内，如值有兩上聲字相連者，其上一字，應讀下平，其下一字，應讀上聲，所謂逢上必倒是也。（「凡例」）

『官話指南』の著者はこの現象を「逢上必倒」と称する。また、呉、鄭両氏は唐通事の後裔であるが、『官話指南』の発音表記が唐話教科書の影響を受けている可能性はないだろうか。本節はこの点を解明するために、『唐話辞書類集』（1-20冊）と比較した。

最初に漢字の四隅に圈点をつけて四声を表したのは『唐話纂要』（1718）の卷之六である。その声調の表し方は左下から右に平、上、去、入となっている。『官話指南』の学習補助教科書である『自修書』にも四声の表記がある。ただ、『自修書』の「凡例」には声調記号の表示方法についての説明がなく、本文の漢字に付けられた表記から推測すると左下から右に上平、下平、上聲、去聲を記したと見られる。また、鄭永邦、呉大五郎の共編による『日清英語言合璧』、『日清英露四語合璧』も同様に左下から右に上平、下平、上聲、去聲を表す表記がある。筆者が調査した範囲で漢字の四隅に圈点で四声を表す教科書には『支那語独習書 第1編』（1889）、『最新清語捷徑』（1906）『清語正規』（1906）などがあり、ともに『自修書』と同じ方法を取っている。このため、『官話指南』における漢字の四隅に圈点をつける方法は当時既に定着したものであると言えよう。

（2）軽重音

「凡例」では「軽重音」の「軽音」と「重音」は又「窄音」、「寛音」とも呼ばれ、現代漢語の“鼻音韻尾”に相当する。例えば、「又如敦字，屬舌音，而係輕音。東字亦屬舌音，而係重音。」は鼻音韻尾に対する説明である。また、「凡例」によると、日本語と中国語でともに鼻音韻尾がある場合、その音は「軽音」（前鼻音）になる。

“鼻音韻尾”の発音方法は以下のように説明した。

蓋漢字音未有ンム音，而日本原音亦有ンム音者，均屬輕音。如心、金等字是也。音末無ンム音者，概係重音。如星字、經字等是也。「凡例」凡輕音字，則不多用喉力。如係重音字，則

多用喉力。如金字本屬牙音，係輕音則讀時，宜多用牙力，少用喉力。如輕字亦屬牙音，係重音則讀時，宜多用喉力，少用牙力。（「凡例」）

上述を見ると、ある漢字の日本語の音読みに「ン、ム」の音がない場合、「重音」（後鼻音）としている。また、『唐話辞書類集』（1-20冊）の中には“鼻音韻尾”を「軽重音」で表す教科書はない。これより遅れる『語言自邇集 散語問答』⁽¹⁾（1877）は「窄音」、「寛音」で鼻音韻尾を説明するが、『亜細亜言語集』は鼻音韻尾について言及していない。『官話指南』以降に出版された教科書の多くは「窄音」、「寛音」で鼻音韻尾を表した。宮島大八が著した『支那語独習書』（1900）は「廣音」、「窄音」で[-ng]、[-n]を表した。よって、『官話指南』は初めて「軽重音」で“鼻音韻尾”を表す教科書であると思われる。

(3) 出入氣

『官話指南』において「出入氣」は有氣音と無氣音のことを表示す。「凡例」は

凡出氣之音，讀時應用力，將其音向外放出。字音由タチツテト、カキクケコ、パピプペゴ各等音而出者，皆有出入氣之別、餘者無此分別也。（「凡例」）

と記しており、有氣音と無氣音の発音方法を説明した。日本語のタ行、カ行、パ行などは漢語の送氣音である。そして、有氣音の場合は「在字之左肩加一豎」と説明している。しかし、本文には有氣音の表記がない。

(4) 四呼

「凡例」では四呼について以下のように説明した。

此外尚有張口音，閉口音又有嘍口音。如巴，寒，張，大，等音，皆是張口音也。如木，父，不，屋等音皆是閉口音。也如火，去，出，姑等音皆是嘍口音也。

上述を見ると、現代漢語の開口呼、合口呼はそれぞれ「張口音」、「閉口音」と対応している。「嘍口音」は現代漢語の“撮口呼”と違い、合口呼の「火、出、姑」と撮口呼の「去」をともに「嘍口音」としている。“齊齒呼”について提示されていない。

また、舌上音の発音方法は以下のように述べた。

由タチツテト母音所出之音，如倒、將、跳、知、早、斗、頭、登、地、釘、天、秋等音。必須舌端用力達至上牙床，方為盡善，不然則往往制有謬誤。此雖屬末節，而讀者不可不知也。

（「凡例」）

⁽¹⁾ 『語言自邇集 散語問答』は明治10年（1877）に川崎近義が著す『語言自邇集』の鈔本であり、東洋文庫に所蔵している。

上述の「倒、斗、登、地、釘」と「跳、頭、天」は歯茎音であるが、それぞれ国際音声字母[t]と[tʰ]と対応している。「將、秋」は硬口蓋音であり、国際音声字母[tɕ]、[tɕʰ]と対応している。「知」、「早」はそれぞれそり舌音[tʂ]、歯茎音「[tʂ]と対応している。現代中国語から見ると、「凡例」の発音説明は混乱を生じやすいと思われる。

(5) 重念

「輕重念」について「凡例」は以下のように述べた。

凡説清話字句之間，有宜重念者，最為緊要，蓋重念之字，實與語言之意，大有關切。凡字之應重念者在字之右邊畫一橫，如船字是也。凡字之重音，在字之左邊加一橫，如京一字是也。（「凡例」）

如我可以給你錢，唯一句言語，而有四種念法如：

我-可以給你錢。我字重念，其意我獨能與汝錢，而他人不能與汝錢也。

我可-以給你錢。可字重念，其意我實能與汝錢，非不能與也。

我可以給你-錢。你字重念，其意我止能與汝錢，而不能與他人錢也。

我可以給你錢-。錢字重念，其意我止能與汝錢，而不能與汝他物也。

徐麗、石汝杰（2010）は“这一观念相当于现代语音学的‘逻辑重音’。”（筆者訳：この概念は現代音声学の“逻辑重音”に相当する。）と指摘した。その表記の記号は同じく本文が付されていない。また、『自修書』本文の漢字にも「重念」の符号を付しているが、特に説明はない。「重念」については第4節で詳細に分析する。

以上、『官話指南』は正確な北京語の発音が身につくように、主に発音方法を詳細に説明していることが分かる。呉、鄭両氏は四呼についての説明は正確ではないところもあるが、北京語の声調、発音方法、鼻音韻尾、有気音などまで紹介していることから、著者は一定の音韻知識を持っていたに違いない。しかし、『官話指南』における四声の表記方法、鼻音韻尾の呼称などは全てそれ以前に編纂した教科書の記述とは異なり、これらは呉、鄭両氏の創作と言える。前人の影響を受けた可能性はあり、北京音声の重要性を理解したからこそ「凡例」に言及したのだろう。残念なことに四声、重念、送気音などを『官話指南』の本文に表記しなかったことである。『官話指南』以降に出版された学習補助教科書の『自修書』、『精解』は『官話指南』のこの欠点を改善した。本章は『自修書』、『精解』の表記について分析を加え、『官話指南』を学習する時の音声方面の補助価値、『自修書』、『精解』の表記と『官話指南』「凡例」の関係を考察する。

6.2 『總譯』『自修書』『精解』三書の表記

『總譯』には漢字に対する表記がないが、注釈で発音に言及した表現として「倒／讓ノ意上聲ニ読ム」、「倒過／讓受、買受，注意倒字上聲ニ読ム倒過」、「當舖／質店、注意當舖去聲ニ読ム」、「當是／必定…センコトト思ヒノ意常字上聲ニ読ム」、「看果子的／果園ノ番人，看字上平聲ニ読ム」

ム」などの5箇所に見え、いずれも多音字（倒、當、看）の声調説明に限られている。

『自修書』の「例言」で「捲舌音」、「長音」、「寛音」、「窄音」などに対応する符号、仮名について説明した。さらに、ローマ字表記の形式で「捲舌音」、「長音」、「寛音」、「窄音」の音節を列挙した。「例言」の説明は以下の通りである⁽¹⁾。

(1) 捲舌音は、凡て頭に舌を捲いた心持の「ㄣ」を附ける。

例へば、cha, chai, chan, chang, chao, chih, cho, chou, chu, chui, chua, chuai, chuan, chuang, chui, chun, chung, chuo 及び sha, shai, shan, shang, shao, shih, shou, shu, shua, shuai, shuan, shuang, shui, shun は、皆「チ」又は「シ」の頭に「ㄣ」を附けて、^ㄣチャ、^ㄣシャ等とする。且つ、jan, jo, jung 等の如き凡て j の音はラ行の捲舌音であると信ずるから、矢張り頭に「ㄣ」の頭に「ㄣ」を附けて^ㄣラ、^ㄣレ、^ㄣリ、^ㄣロ等とする。

(2) 長音は凡て「ー」で表はす。

例へば、ko は「コー」を書いて、kou の「コウ」と區別し、lo は「ロー」と書いて lou の「ロウ」と區別をする。

(3) 寛音 ng は「ン」で、窄音 n は「ヌ」で表はす。

例へば、chang, lung は「^ㄣチャン」「^ㄣロン」と書き、chan, lun は「^ㄣチャヌ」「^ㄣロヌ」で表はす。

(4) 拗音を表はす母音の假名は、右に寄せて書く。

例へば、cha は「^ㄣチャ」と書いて chia の「^ㄣチア」と區別し、sha は「^ㄣシャ」と書いて、hsia の「^ㄣシア」と區別し、chên は「^ㄣチエヌ」とかいて chien の「^ㄣチエヌ」と區別する。

(5) chêng, ê, fêng, hêng, jêng, kêng, lêng, nêng, mêng, pêng, sêng, shêng, têng, sêng, wêng の「ê」は凡て「^ㄣエ」で表はす。然しこゝに列挙した chêng, fêng 等に對應する窄音の chên, fên 等の「ê」は凡て「^ㄣエ」で表はす。例へば chêng, fêng は「^ㄣチエン」と「^ㄣフエン」で表はし。chên, fên は「^ㄣチエヌ」と「^ㄣフエヌ」で表はす。

上述の表記説明から、窄音、寛音は前鼻音、後鼻音のことを指し、「ン」と「ヌ」で表していることが分かる。しかも、寛音をとまなう chêng, fêng, hêng, jêng, kêng などの ê は^ㄣエで表し、窄音をとまなう chên, fên などの ê は^ㄣエで表している。

また、「例言」に掲載されたローマ字表記を『語言自邇集』⁽²⁾ (1867) と比較した結果、そのローマ字表記は『語言自邇集』と同じであることが確認できた。また、『自修書』の著者である飯河道雄は長年生活をした大連と旅順では、「捲舌音 (zh, ch, sh, r)」と「齒茎音 (z, c, s)」を區別しないため、あえて捲舌音の発音符号をつけている。著者飯河道雄は「捲舌音 (zh, ch, sh, r)」と「齒茎音 (z, c, s)」について極めて重視されていると思われる。

⁽¹⁾ 『自修書』は3冊それぞれに「凡例」があり、さらにその表記方法についての説明が異なる。第1、2冊と比べて、第3冊の「官話問答篇」はより詳細に説明しているため、ここでは「官話問答篇」を引用する。

⁽²⁾ 『語言自邇集』の声母と韻母の説明は『精解』のローマ字表記を説明する際、詳しく紹介する。

『精解』は「新出字」の右側にウェード氏のローマ字表記で漢字の発音を表記している。四声の表記は四角に圏点を付ける方式を取らないが、ローマ字表記の右上に 1、2、3、4 と数字をふり陰平、陽平、上声、去声を表した。

6.3 『自修書』 仮名表記の研究

6.3.1 『自修書』における仮名表記の特徴

(1) 声母、韻母

『自修書』の3冊で1735個^①の漢字に仮名表記を施した。ここでは本書の仮名表記を整理し、ピンインと仮名表記の音節対照表(表2)を作成した。以下で声母、韻母、特殊の3方面から仮名表記を分析する。

1) 声母

声母 b、p は濁音のバ行と半濁音のパ行と対応している。m、n、l、s はそれぞれマ行、ナ行、ラ行、サ行と対応し、g と k はカ行と対応している。x、j は「シ」、q は「チ」、z と c は「ツ」と対応している。f は「フ、ブ」、d と t は「タ、ト、テ」、h は「ハ、フ、ホ」と対応している。捲舌音である zh と ch は「ヂ」、sh は「シ」、r は「ラ、リ、ル、レ、ロ」と対応している。ゼロ声母 y は「ヤ、イ、ユ、ヨ」、w は「ワ、ウ」と対応している。

また、『自修書』の「凡例」には説明がないが、『自修書』の送気音は黒丸(●)で表示している。即ち、有気音の字に「●」印を付して、その四声を示す。例えば、「特●、請●」など。有気音 p、t、k、c、ch、q と無気音 b、d、g、z、zh、j の仮名表記は全く同じである。例えば、拼音「pa/ba (パー)」、「tai/dai (タイ)」、「kao/gao (カオ)」、「qian/jian (チエヌ)」、「chen/zhen (チエヌ)」など。しかし、同じ漢字に何度も仮名表記を付けている以外に、同じ漢字に2つ以上の仮名表記を表記する場合もある。有気音、無気音の中にも、同じ漢字に2つ以上の仮名表記を表記する状況が存在する。例えば、「pai (パイ/バイ)」、「bai (バイ)」、「ta (ター/タ)」、「da (ター)」などである。つまり、「パイ」は「pai」と「bai」の両方に使えるが、「バイ」は「pai」の表記にしか使えないと理解できるが、『自修書』では「排」にのみ「バイ」で表記し、「裊」にのみ「タ」で表記しているため、この2つは誤植だと考えられる。

2) 韻母

① 韻母 e、er、ai、ao、ou、an、en、i、ya、ye、yao、you、yan、yin、yang、ying、yong、wu、wa、wei、wan、wang、weng、yu、yue、yuan、yun はそれぞれ「エ/エー」、「アル」、「アイ」、「アオ」、「オウ」、「アヌ」、「エヌ」、「イー/イ」、「ヤー」、「イエ/イエー/イエ」、「ヤオ」、「ユー/ヨー/ユウ/ユ」、「イエヌ/イエヌ」、「イヌ」、「ヤン」、「イン」、「ヨン」、「ウー/ウオー」、「ワー」、「ウェイ/ウェー」、「ワヌ」、「ワン」、「ウェヌ」、「ユイ/ユー」、「ユエ」、「ユアヌ」、「ユヌ/ユイヌ」と対応している。

^① 本稿における同じ漢字は2種類以上の仮名表記(多音字を除く)がある場合、一つ漢字として取り上げた。

②f、zh、ch、sh、z、c、s 以外の声母と綴る際、“開口呼”の a、o、ai、ei、ao、ou、an、en、ang、eng はそれぞれ「一、オ、イ、イ、オ、ウ、ヌ、ヌ、ン、[△]エン」で、“齊齒呼”の ia、ie、iao、iou、ian、in、iang、ing、iong は「ア、イエ/エ、アオ/イアオ、イウ/ウ、イエヌ/エヌ、ヌ、アン、ン/イン、ン」で、“合口呼”の u、ua、uo、uai、uei、uan、uen、uang は「一/ウ/ウー、ア、オ/ウ、アイ、イ、アヌ、ヌ、アン」で、“撮口呼”ü、üe、üan、ün 「ユイ、ユエ/アオ、ユアヌ、ユヌ/ユイヌ」と対応している。

③ 声母 zh、ch、sh の場合、韻母は a (ヤー/ヤ)、e ([△]エ/[△]エー)、ai (ヤイ)、ei (アイ)、ao (ヤオ)、ou (ヨウ)、an (ヤヌ)、en (エヌ)、ang (ヤン)、eng ([△]エン)、ong (ヨン)、u (ユ/ヨ)、ua (ヨア)、uo (ヨオ/ユオ)、uai (ヨアイ)、uei (ヨイ)、uan (ヨアヌ)、uen (ヨヌ/ユヌ)、uang (ヨアン) となる。

④ 声母 z、c の場合、韻母は a (アー/ー)、e ([△]エ/[△]エ)、ai (アイ/イ)、ao (アオ/オ)、ou (オウ)、ang (アン)、eng ([△]エン)、i (ー)、ong (オン)、u (ウ)、uo (オオ)、ui (オイ)、un (オヌ/ヌ) となり、声母 s の場合、韻母は a (ー)、e (エ)、ai (イ)、ao (オ)、an (ヌ)、i (ー)、ong (ン)、u (ウ)、uo (オ/ー)、ui (イ)、uan (アヌ)、un (ヌ) となる。

⑤ 声母 “f” の場合、韻母は a (アー)、ei (エイ)、ou (オウ)、an (アヌ)、en (エヌ)、ang (アン)、eng ([△]エン)、u (ウー/ー) となる。

以上の韻母における仮名表記の対応状況を見ると、『自修書』の仮名表記の対応は極めてきちんとし、一定の規則があると言える。

また、「前鼻音 n」 と「後鼻音 ng」については『自修書』で「窄音」、「寛音」と称し、「ヌ」と「ン」を使って表している。例えば、拼音 bang (パン)、mang (マン)、fang (ファン)、zhang (チャン)、chong (チョン)、shang (シャン) などがある。しかし、『自修書』では前鼻音であるはずの「暖(nuan)」に対してだけ後鼻音を表す仮名表記「ン」を付け、「ヌアン」とした。つまり『自修書』「凡例」の法則に従うと nuang と表記したことになる。声母「n」は仮名「ナ」、「ニ」、「ネ」、「ノ」を表記し、「暖」だけ「ヌ」で表記した。「ヌ」の場合は、「u」の音も含んで表わしていると思われる。また、北京語の中に (nuang) という発音はないが、遼東半島⁽¹⁾では「暖和」の「暖」を「nang」という。『自修書』の著者飯河道雄は大連に長い間暮らしていることから、ヌアン (nang) という発音は、遼東半島の方言の影響を受けている可能性が高いと考えられる。

(2) 音節字

音節字表から『自修書』の仮名表記を総合的に見れば、その正確性と簡易性は評価できる。例えば、韻母 a の場合はほぼ長音符号「一」を付し、巴 (バー/ba) などのように表記も簡単し、発音も正確になった。

表 3 『自修書』の音節字表

韻母	
----	--

⁽¹⁾ 遼東半島は遼寧省の南部に位置し中国第二の大きい半島である。大連、丹東、營口などの都市がある。

i	<p> ピー/bi : 敝。ビー/bi : 必、彼、避、庇、弊。ビー/pi : 皮、屁。ピー/pi : 脾、霹、匹、批、俾。ミ/mi : 彌。ミー/mi : 密、迷、昧。ティー/di : 底、弟、低、帝、遞。テイ/di : 遞。テイ/ti : 剃、替。ティー/ti : 提、梯、屨、體、剔、題、替。ニー/ni : 膩、泥、逆。リ/li : 離。リー/li : 利、歷、力、離、璃、裡、粒、俐、禮、立、理、吏、例。チー/ji : 劑、計、季、極、及、激、既、机、雞、吉、己、紀、集、忌、急、蹟、祭、擠、籍、際。チー/qi : 氣、豈、欺、沕、起、其、騎、齊、器、戚、期、契、棄、啓、旗、棋、崎。シー/xi : 喜、細、惜、息、稀、洗、西、錫、戲、係、希、席。チー/zhi : 址、緻、直、致、至、治、摺、織、支、蚰、置、止、職、執、姪、之、旨、只、志、值、指、秩、制、芝。チー/chi : 匙、吃、遲、尺、持、馳、齒、飭。シー/shi : 實、石、拾、師、史、詩、使、侍、施、匙、市、試、屍、始、誓、士、識、飾、屎、勢、視、示、食、世、失、似。リー/ri : 日。ツー/zi : 字、自、咨、滋、嗣。ツー/ci : 此、辭、伺、磁、次、詞、祠、賜。スー/si : 思、死、寺、司、巳、似。イ/yi : 疑、貽。イー/yi : 彝、依、尾、依、意、衣、醫、椅、宜、議、藝、遺、異、已、益、矣、譯、伊、儀、毅、肄。 </p>
u	<p> ブー/bu : 布、部、補、步。ブウ/bu : 步。プー/pu : 鋪、鋪、撲、圃、葡。ムー/mu : 慕、木、畝、睦。フー/fu : 副、甫、府、福、服、復、夫、傅、腐、赴、附、幅、袱、咐、撫、富、輔、符、覆、佛。フー/fu : 副。トゥ/du : 度、讀、肚、堵。トウ/du : 督。トゥ/tu : 徒、途。ルー/lu : 錄、祿、路。ルウ/lu : 路。クー/gu : 貴、故、姑、櫃、古、固、咕、估、葵、顧、雇。クウ/gu : 雇。クー/ku : 褲、庫、哭、窟、苦。グイ/ku : 苦。クイ/ku : 苦。フー/hu : 胡、糊、湖、忽、呼、乎、壺、焮、戶、惚、護、虎、互。チュ/zhu : 住、祝、煮、柱、助、珠、蛛、主、朱、豬、囑。チュウ/zhu : 駐、諸。チュ/chu : 楚、廚、出、除、鋤、處。シヨ/shu : 鼠、屬。シュ/shu : 叔、暑、熟、舒、術、樹、秫、署、贖、數、輸、孰、庶、恕。シュー/shu : 數。シュウ/shu : 恕。ルー/ru : 乳、如。ルウ/ru : 如。ツウ/zu : 粗、足、租、阻。ツウ/cu : 醋。スウ/su : 蘇、嗽、俗、素、訴、素、漱、搜、束、肅、疎。スー/su : 訴。ウオー/wu : 踳。ウー/wu : 霧、武、無、悞、屋、吳、惡、務、物、仵、悟、吾。ユイ/yu : 與。ユー/yu : 與。 </p>
ü	<p> リユイ/lu : 慮、驢、褸、律、屨。チュー/ju : 矩。チュイ/ju : 居、舉、具、局、句、俱、據、聚。チュイ/qu : 趣、去、取、屈。シュイ/xü : 虛、鬚、續、許、敘、須、徐。シュー/xü : 徐。ユイ/yü : 於、慮、預、語、魚、餘、雨、玉、俞、遇、逾、譽、諭、愚、虞、寓。 </p>
a	<p> バー/ba : 巴、拔。パー/ba : 拔。パー/pa : 爬。マー/ma : 麻、罵、馬。ファー/fa : 髮、發、法、罰。ター/da : 打、搭、答、達。タイ/da : 大。タ/ta : 榻。ター/ta : 塔、蹋。ナ/na : 納。ラー/la : 鑷、拉、刺、攏、喇。カー/ka : 哈。カー/ga : 嘎。チャ/zha : 喳、扎、乍、詐、札。チャー/zha : 炸。チャー/cha : 茶。チャ/cha : 差、茶、岔、詫、插、察、查。チャ/cha : 挿。シャ/sha : 廈、莎。シャ/sha : 抄、煞、沙、殺。ツ </p>

	ア/za : 紫、砸。ツア/ca : 擦。ツァー/za : 俗、雜。ツァー/ca : 擦。サー/sa : 撒。
ia	リア/lia : 倆。チア/jia : 甲、駕、假、加、架、價、傢、咖、夾、枷、稼、佳。チア/qia : 掐、恰。シア/xia : 夏、瞎、匣、蝦、嚇、暇、洽。ヤー/ya : 牙、壓、衙、押、雅。
ua	コア/gua : 颯、瓜、掛、掛、寡。コア/kua : 跨。ホア/hua : 話、花、化、滑。チョア/zhua : 抓。ショア/shua : 耍、涮、刷。ワー/wa : 瓦、窪。
o	ポオ/bo : 薄、剝、伯、泊。ポオ/po : 破、頗、博。モオ/mo : 莫、沒、沫、抹、磨、磨、摸、脈、磨、末。モー/mo : 末。ウオオ/wo : 窩。ウオー/wo : 窩。
uo	トオ/duo : 掇、朶、馱、躲、舵。トオ/tuo : 妥、脫、駝、託。トア/tuo : 妥。トー/tuo : 托。ト/tuo : 陀。ノオ/nuo : 挪。ノー/nuo : 挪。ロオ/luo : 落、騾、鑼、囉、樂、露。クオ/guo : 過、國、菓、裏、果、鍋、郭。フオ/huo : 活、伙、火、或、貨、惑。チョオ/zhuo : 卓、鑄、酌。チョオ/chuo : 戳、拙。シュオ/shuo : 說。ツォオ/zuo : 做、作、坐、座。ツォオ/quo : 錯、搓、措。ソー/suo : 鎖、索。ソオ/suo : 唆、鑿、索。ノオ/suo : 瑣。ロー/ruo : 若。
e	エー/e : 惡、額、訛。エ/e : 俄。トエ/de : 德、得。コー/ge : 隔、榻、閣、各、哥、恪、擱。コオ/ge : 擱。コー/ke : 渴、咳、客、刻、嗑、革、鴿、磕、科。コオ/ke : 棵、殼。コウ/ke : 殼。ハー/he : 和。ホー/he : 合、和、夥、賀、盒、荷、喝、河、郝、何。チエ/zhe : 摺、折、遮、浙、掣、者。チエ/che : 撤、車、掣。シエ/she : 捨。シエ/she : 設、涉、舍。レエ/re : 熱。ツエ/ze : 則、責、擇。シエ/se : 澀、吝。スエ/se : 齧。シヤイ/se : 色。ソエ/se : 色。イエ/ye : 葉、夜、掖。イエ/ye : 掖。イエー/ye : 野、業、謁。イエー/ye : 爺。
ie	ビエ/bie : 別、撇。ミエ/mie : 滅。ティエ/die : 疊、碟。ティエ/tie : 鐵、貼。ニエ/nie : 乜、捏。リエ/lie : 咧、列。チエ/jie : 介、皆、結、街、解、芥、稽、藉、截、節、接、捷、姐、劫、竭、喙、揭、屆、借。チエ/qie : 且、切、妾。シエ/xie : 謝、洩、斜、鞋、卸、歇、邪、些、携。
üe	リアオ/lue : 畧。チュエ/jue : 覺、決、絕、蹶。チュエ/que : 缺。シュエ/xüe : 靴、雪。ユエ/yue : 越、約、曰。
ai	アイ : 愛、挨、哎、礙、摔。パイ/bai : 拜、白、擺、掰、百。パイ/bai : 拜。パイ/pai : 牌、派。パイ/pai : 排。マイ/mai : 埋、邁。タイ/dai : 怠、代、待、歹、戴、袋、帶。ター/tai : 帶。タイ/tai : 台、擡(抬)、太、泰。ナイ/nai : 耐、奈。ライ/lai : 賴。カイ/gai : 概、該、改、蓋。カー/gai : 蓋。カイ/kai : 開。ハイ/hai : 害、嗜、孩、海、還。チャイ/ : 宅、齋、摘。チャイ/chai : 差、拆。シャイ/shai : 曬。シャイ/shair : 色。ツァイ/zai : 載、栽、再、嘴、哉。ツァイ/cai : 纜、才、菜、晒、猜、縲。ツァイ/cai : 彩。サイ/sai : 搥。
uai	クアイ/guai : 怪、拐。タアイ/kuai : 筷。クアイ/kuai : 塊、快。ホアイ/huai : 懷、

	壞。ホア ^ˇ ／huai : 壞。チョアイ ^ˇ ／zhuai : 踐。ショアイ ^ˇ ／shuai : 率。
ei	ペイ／bei : 倍、背。ベイ／bei : 被、備、盃。テイ ^ˇ ト ^ˇ ／dei : 得。ペイ／pei : 陪、賠、佩、配。ペイ／pei : 培、配。メイ／mei : 味、煤、每、眉。メ ^ˇ ／mei : 眉。フェイ／fei : 飛、費、啡、肥、廢、非。レイ／lei : 雷、累、勒、淚。ヘイ／hei : 黑。ネイ／nei : 內。ツァヌ ^ˇ ／zei : 賊。
uei	トイ／dui : 對、堆、兌。トイ／tui : 推、退。クイ／gui : 規、櫃、歸、跪。クイ／kui : 愧、鬼、虧、奎、癸。ホイ／hui : 會、灰、悔。シュイ ^ˇ ／shui : 睡、誰。スイ／shui : 睡。ソイ shui : 睡。ソイ／sui : 稅、隨、歲、雖、碎。ゾイ／sui : 隨。ウエ ^ˇ ／wei : 位、為。ウエイ ^ˇ ／wei : 違、味、圍、位、未、尾、委、衛、餒、微、慰。
ao	アオ : 熬、襖。バオ ^ˇ ／bao : 薄、抱、包。パオ ^ˇ ／bao : 包、寶、報、薄、保。ボオ ^ˇ ／bao : 雹、撥、寶。パオ ^ˇ ／pao : 跑。マオ ^ˇ ／mao : 冒、貓、毛、帽、茅、貿、貌、卯。タオ ^ˇ ／dao : 倒、刀、叨、盜、道、島。タオ ^ˇ ／tao : 套、討、桃、萄、逃、淘、陶。ナオ ^ˇ ／nao : 鬧、惱、腦。ラオ ^ˇ ／lao : 勞、老、落、癆。カオ ^ˇ ／gao : 高、告、稿。カオ ^ˇ ／kao : 靠、烤、考、拷。ハオ ^ˇ ／hao : 號、耗、毫。チャオ ^ˇ ／zhao : 着、照、找、招、罩、趙。チャオ ^ˇ ／chao : 吵、朝、抄。チャオ ^ˇ ／chao : 潮。シアオ ^ˇ ／shao : 稍。シャオ ^ˇ ／shao : 少、紹、燒。ラオ ^ˇ ／rao : 遶、繞、擾。ラヌ ^ˇ ／ran : 然、饒。ツァオ ^ˇ ／zao : 糟、早、造、棗、遭。ツァオ ^ˇ ／zao : 澡。ツァオ ^ˇ ／cao : 草、操。サオ ^ˇ ／sao : 掃。
iao	ビアオ ^ˇ ／biao : 表、標、裱。ビャオ ^ˇ ／biao : 臄。ピアオ ^ˇ ／piao : 瓢。バアオ ^ˇ ／piao : 票。ミアオ ^ˇ ／miao : 廟、妙、苗、渺。ティアオ ^ˇ ／diao : 吊、弔、掉、調。ティアオ ^ˇ ／tiao : 條、挑。チアオ ^ˇ ／tiao : 調。ニアオ ^ˇ ／niao : 鳥。リアオ ^ˇ ／liao : 料、聊。チアオ ^ˇ ／jiao : 教、覺、交、腳、嚼、叫、焦、狡、澆、嬌、傲、僥。チアオ ^ˇ ／qiao : 巧、悄、瞧、俏。チアオ ^ˇ ／qiao : 瞧。シアオ ^ˇ ／xiao : 效、學、霄、笑、孝、曉、消、筱。ヤオ ^ˇ ／yao : 搖、藥、咬、邀、吆、窑、鑰、窰。
ou	モウ ^ˇ ／mou : 某。フオウ ^ˇ ／fou : 否。トウ ^ˇ ／dou : 都、毒、豆、荳、斗、度、抖、獨、賭、兜。トウ ^ˇ ／tou : 頭、塗、投、土、透、偷、圖。ロウ ^ˇ ／lou : 漏、簍、樓、樓。コウ ^ˇ ／gou : 溝、扣、勾、構。コウ ^ˇ ／kou : 口。ホウ ^ˇ ／hou : 厚、候。チョウ ^ˇ ／zhou : 周、皺、粥、咒、週、州、肘、舟。チョウ ^ˇ ／chou : 臭、抽、稠、綢、仇、籌。ショウ ^ˇ ／shou : 守、受、手、收、獸、首、售、壽。シュウ ^ˇ ／shou : 授。ロウ ^ˇ ／rou : 肉、弱。ツォウ ^ˇ ／zou : 走、奏。ツォウ ^ˇ ／cou : 湊。オウ ^ˇ ／ou : 藕、偶。ヨー ^ˇ ／you : 呦。ユ ^ˇ ／you : 遊。ユウ ^ˇ ／you : 遊。
iou	ティウ ^ˇ ／diu : 丟。ミウ ^ˇ ／miu : 謬。ニウ ^ˇ ／niu : 牛、鈕。リウ ^ˇ ／liu : 溜、留、琉、劉、流。チウ ^ˇ ／jiu : 久、究、酒、舊、舅。チウ ^ˇ ／qiu : 秋、球、揪。シウ ^ˇ ／xiu : 袖、鏽、羞、修、秀、休。チョイ ^ˇ ／zhui : 贅、錐。チョイ ^ˇ ／chui : 吹、鎚、追。ツォイ ^ˇ ／zui : 最、罪。ツォイ ^ˇ ／cui : 脆、催。ユ ^ˇ ／you : 又、油。ユウ ^ˇ ／you : 憂。ユ ^ˇ ／you : 友、由、又、芋、酉、游、裕、御、尤、竽。

an	<p>アヌ：按、鞍、案、岸、諳、菴。パヌ/ban：伴、辦、班、板、半、搬、辨（辦）、阪。パヌ／pan：盤、判。マヌ/man：慢、滿。ファヌ/fan：凡、煩、飯、翻、犯、范、藩。タヌ/dan：但、單、耽、蛋、淡、胆、擔、擲、石。タヌ/tan：談、貪、痰、炭、坦、壇、毯、灘、彈、攤。ナヌ/nan：難。カヌ/gan：敢、趕、幹（干）、感、乾、杆、趕、肝、甘。カヌ/kan：看、坎、砍。ハヌ/han：含、汗、旱、翰、函、寒、罕。チャヌ/zhan：摑、湛、氈、暫、蘸、粘、棧、粘、沾、戰、展、佔、站。チャヌ/chan：產、饑。チャヌ/chan：攙。シャヌ/shan：山、膳、陝、善、扇。ツアヌ/can：參。サヌ/san：散。</p>
ian	<p>ビエヌ/bian：邊、變、編、辯。ピエヌ/bian：扁、辨、匾、遍。ピエヌ/pian：騙、偏。ビエヌ/pian：片。ミエオ/mian：麵、麪。ミエヌ/mian：棉、免、勉、面。ティエヌ/dian：點、墊、惦。テエヌ/dian：墊、淀。テエヌ/tian：佃、添。ティエヌ/tian：田、添。ニエア/nian：捻。ニエヌ/nian：念。リエヌ/lian：聯。リエヌ/lian：臉、練、連、蓮、帘。チエヌ/jian：賤、健、薦、件、趁、慳、檢、檢、剪、尖、監、兼、牽、揀、簡、肩。チエヌ/qian：錢、謙、繹、淺、遣、欠、籤、前、鉗。シエヌ/xian：閒、顯、羨、嫌、涎、鹹、線、鮮、縣、限、險、憲。イエヌ/yan：嚴、鹽、醃、眼、沿、厭、掩、淹、驗、言、宴、延、研、顏。イエヌ/yan：齷、烟。</p>
uan	<p>トアヌ/duan：短、端、緞、斷。トイアヌ/duan：短。ルアヌ/luan：亂。クアヌ/guan：管、館、關、官、觀。コアヌ/guan：官。クアヌ/kuan：寬。ホアヌ/huan：換、歡、喚、宦、還、桓、緩。チュアヌ/juan：捲、眷、捐、卷。チュアヌ/quan：勸、泉、拳、權、全。チョアヌ/quan：圈。チョアヌ/zhuan：轉、磚、甄、專、賺。チョアヌ/chuan：穿、船、傳、川。ショアヌ/shuan：栓。ワヌ/wan：灣、彎、完、碗、晚、玩、萬。ルアヌ/ruan：軟。ソアヌ/suan：酸、算。ウヌ/wan：灣。ユアヌ/yuan：元、原、園、願、院、遠、圓、緣、員、冤、淵。</p>
üan	<p>シュアヌ/xuan：拴、揼、選、旋、軒。</p>
en	<p>エヌ/en：恩。ベヌ/ben：奔。ベヌ/pen：盆。ペヌ/pen：盆。メヌ/men/悶、妹。メヌー/men：門。フェヌ/fen：分、粉、扮。ネヌ/nen：嫩。ケエヌ/gen：根。ケエヌ/ken：懇。ケヌ/gen：跟。ケヌ/ken：肯、懇。チェヌ/zhen：真、陣、枕、斟、堅、鎮、建。チェヌ/chen：沉、陳、臣、辰。シェヌ/shen：身、甚、神、瀋、紳。シェヌ/shen：深、審。レン/ren：壬、認、任。</p>
in	<p>ビヌ/bin：賓、濱。ピン/pin：品、憑、評。ピヌ/pin：聘。ミン/min：民、敏。ニン/nin：您。チヌ/jin：緊、儘、盡、進、近、巾、筋、斤、金、晉。リン/lin：臨、鄰。チヌ/qin：親、芹、欽、勤、秦。シン/xin：信、辛。イン/yin：音、因、陰、印、癮、引。</p>
uen	<p>トヌ/dun：燉、墩、揷、頓。トヌ/tun：吞。ロヌ/lun：論、輪。コヌ/gun：棍、滾。コヌ/kun：昆、綱。ホヌ/hun：混、葷。チョヌ/zhun：準。チョヌ/chun：椿、春。シュ</p>

	ヌ/shun : 順。ロヌ/run : 潤。ツオヌ/zun : 尊、左、遵。ツオヌ/cun : 寸、存、村。ソヌ/sun : 損、孫。ウエヌ/wen : 聞、穩、溫。
ün	チュヌ/jun : 均。チュイヌ/jun : 幫、軍。チュヌ/qun : 群。シユヌ/xun : 巡、旬、循、遜、汎。シユイヌ/xun : 汎、尋。ユヌ/yun : 雲、運。エヌ/yun : 雲。ユイヌ/yun : 熨、勻、暈、允、運。
ang	パン/bang : 榜、榔、幫、棒、傍。バン/pang : 傍。マン/mang : 忙、茫、盲。ファン/fang : 訪、方、房、坊、放、彷彿。タン/dang : 檔、噹、當、盪。タン/tang : 躺、糖、湯、倘、堂、蕩、唐。ナン/nang : 囊。ラヌ/lan : 懶、爛、藍、檻、濫、攬。ラン/lang : 郎。カン/gang : 剛。カン/kang : 康、炕、損。ハン/hang : 行。チャン/zhang : 匠、掌、仗、章、彰。チャン/chang : 唱、帳、長、昌、常、廠、償、嘗、張。シャン/shang : 賞、晌、尚、裳、商。シァン/shang : 傷。ラン/rang : 嚷、讓。ツァン/zang : 贓、贖、贓。ツァン/cang : 藏、蒼、倉、艙。
iang	ニァン/niang : 娘。リアン/liang : 涼、亮、輜、晾、樑、梁、兩、量、糧、良、諒。チァン/jiang : 江、講、醬、漿、漿、將、獎、蔣。チァン/qiang : 腔、強、牆、槍、搶。シァン/xiang : 想、向、響、鄉、香、像、箱、相、項、鑲、祥、享、詳、象。ヤン/yang : 仰、恙、養、陽、洋、羊、漾。
uang	クァン/kuang : 逛、光。コァン/kuang : 廣。クァン/kuang : 誑。クァシ/kuang : 況。ホァン/huang : 謊、皇、黃、攄、慌、荒、恍、幌。チョァン/zhuang : 狀、粧、撞、莊、裝。チョァセ/zhuang : 莊。チョァン/chuang : 窓。ショァン/shuang : 霜、雙、爽。ワン/wang : 往、忘、望、網、汪、妄、枉。
eng	ブェン/peng : 朋、碰。ベェン/peng : 捧、碰。ペェン/peng : 蓬、棚。ポェン/peng : 棚。モェン/meng : 蒙。ムェン/meng : 蒙。ブェン/feng : 奉、縫、馮、封、俸、逢。フェン/feng : 豐。トェン/deng : 等、凳、燈、瞪、戥、蹬。トェン/teng : 疼、騰、騰。レェン/leng : 愣、冷。ルェン/leng : 冷。レェン/leng : 稜。ケエヌ/geng : 更。ケエン/geng : 耿、庚。ホエン/heng : 哼、恆。ヘエン/heng : 恆。チエン/zheng : 正、整、鄭、掙、證、政、爭。チエン/cheng : 城、成、誠、稱、承、程、呈、乘、盛。シエン/sheng : 省、聲、勝、生、牲、繩、剩、省、陞、升、贖、聖、盛。レェン/ren : 仍。ツエン/zeng : 增。ツエン/ceng : 層、僧、蹭。
ing	ビン/bing : 並、病、稟、兵。ピン/ping : 平、瓶。ミン/ming : 名、鳴、命。ティン/ding : 定、頂、釘、丁。ティン/ting : 亭、挺、停、聽、廳。ニン/ning : 擰。リン/ling : 令、領、靈、零、另、林。チン/jing : 敬、經、竟、景、徑、更、京、淨、晶、粳、勁、驚、靜、精、井。チン/qing : 請、輕、清、青、情、慶、頃。シン/xing : 姓、行、興、性、星、醒、杏、倖、形、刑。イン/ying : 營、硬、應、鷹、迎、蠅、贏、膺。
ong	トン/dong : 動、冬、懂、咚。トン/tong : 痛、通、桶、銅。ノン/nong : 弄。ロン/long :

	豐、籠、隆、窿、龍。コン/gong : 恭、公、功、工、宮。コン/kong : 空、恐、控、孔。 ホン/hong : 哄、紅。チヨン/zhong : 仲、重、鐘、種、腫、眾、中、忠、衷。チヨン/zhong : 終。チヨン/chong : 崇、充。ロン/rong : 榮、冗、融、鎔、絨、容。ツオン/zong : 總、 縱、宗、踪。ツオン/cong : 聰、從。ソン/song : 送。
iong	チュン/qiong : 窮。シユン/xiong : 兇 (凶)、兄。ヨン/yong : 用、庸、永、耀、擁。
er	アル : 耳、而。

また、間違った表現、多音字については表3に収録されていない。その表記は以下の通りである。

1) 捲舌音

捲舌音(zh、ch、sh、r)と歯茎音(z、c、s)の両方の表記がある漢字をまとめる。

壽(シヨウ) / (シヨウ)	扇(シヤヌ) / (シヤヌ)	涉(シエ) / (シエ)
處(チュ) / (チュ)	準(チヨヌ) / (チュヌ)	緻(チー) / (チー)
春(チヨヌ) / (チヨヌ)	展(チャヌ) / (チャヌ)	船(チョアヌ) / (チョアヌ)
裝(チョアン) / (チョアン)	酌(チヨオ) / (チヨオ)	摘(チャイ) / (チャイ)
賺(チョアヌ) / (チョアヌ)	佔(チェヌ) / (チャヌ)	川(チョアヌ) / (チョアヌ)
失(シー) / (シー)	慚(ツオヌ / ツアヌ)	而(アル / アル)

この18例は現代漢語では全て捲舌音(zh、ch、sh、r)であるが、『自修書』には歯茎音(z、c、s)としての表記、も見られる。これとは逆の例が「慚(ツオヌ / ツアヌ)」で、現代漢語では歯茎音(z、c、s)であるが、『自修書』は捲舌音(zh、ch、sh、r)の表記となっている。この2点から『自修書』の著者は捲舌音(zh、ch、sh、r)と歯茎音(z、c、s)の表記に混乱が生じていると考えられる。その理由の1つとして、中国遼寧省に住んでいる人は捲舌音(zh、ch、sh、r)と歯茎音(z、c、s)を区別しないことがあげられる。つまり、捲舌音(zh、ch、sh、r)は全て歯茎音(z、c、s)で読むことができる。また、著者飯河道雄も大連の生活体験があるため、表記においては多少なりとも現地の方言の影響を受けている可能性があるだろう。

また、而(アル / アル)のような「捲舌音(zh、ch、sh、r)」表記の付け方はこの一箇所だけである。そして、仮名の表記方法によると「アル」のような付け方は存在しないので、これは恐らく書き方及び印刷のミスと考えて差し支えないだろう。

『自修書』では声母「r」を「捲舌音(zh、ch、sh、r)」として表記しているが、実際には「捲舌音(zh、ch、sh、r)」の発音と違い、声帯の振動を伴う有声音である⁽¹⁾。東北方言の中では、声母「r」という発音は存在せず、声母「r」をゼロ声母「y」で読む。そうすると、声母「r」の発音について具体的な説明がない場合、東北方言では声母rを含む「人民」を「yinmin」と読む可能性が

⁽¹⁾ 『現代中国語総説』(2004:50)によると、rは「sh [ʃ]」とほとんど同じだが、「sh [ʃ]」のときは声帯を振動させず、「r [ʒ]」のときは振動させるところだけが異なる。」と述べた。

出てくる。著者は声母「r」と「捲舌音(zh, ch, sh, r)」を分けて表記していないが、声母「r」の発音を十分に重視していると言える。なお、「認」についてだけ「レヌ／レヌ」のように、捲舌音(zh, ch, sh, r)と歯茎音(z, c, s)両方の表記があるが、これは誤植だろう。

2) 多音字

盛(チ ^エ ン／シ ^エ ン)	石(タヌ／シー)	調(チ ^ア オ／テ ^ア オ／テ ^ア オ)
差(チャ ^イ ／チャ)	似(シー／スー)	尾(ウ ^エ イ／イー)
得(ト ^エ ／テ ^イ トー)	抄(シ ^ア ／チャ ^オ)	色(ソ ^エ ／セ ^エ ／シ ^ヤ イ)

これらの仮名表記を見ると、「盛、石、調、差」は多音字であり、「尾、得」は北京語であることがわかったが、しかし「抄、色」の仮名表記は著者飯河道雄が「凡例」で述べた表記方法とは一致していない。

『自修書』では「抄、色」についての原文は以下の通りである。

例 1-1. 我那天看你的病才好，臉上氣色還沒復元兒哪。(ソ^エ)

例 1-2. 若是把暑氣藏在裏頭，往箱子裏一擱，寶色就掉了。(セ^エ)

例 1-3. 爐子也不刷上黑色，就扔在那堆房裏了。(シ^ヤイ)

例 2-1. …把領子合上，摩抄平了。(シ^ア)

例 2-2. 請旨抄了他京城裏的家。(チャ^オ)

色には(se⁴)^①、「shai³」、「she³」、「shair³」の発音がある「shair³」は「色」を“兒化”にした読み方である。「shai³」と「shair³」両方とも“顔色”を表すという意味がある。しかし、具体的な“顔色”を付ける際、「shair³」と読む場合がより多い。従って、「黑色」の「色」は兒化を使っていないが、「shair³」と読む可能性があり、「シ^ヤイ」と表記する。また、「氣色」の「色 se⁴」は声母「s」に「ソ」を当て、韻母「エ(e)」と組み合わせて「ソ^エ」と表記した。「セ^エ」は著者飯河道雄が提示した表記方法では説明が不可能であるが、「寶色」の「色」は声母「s」に「ソ」ではなく「セ」を当て、韻母「エ(e)」と組み合わせて「セ^エ」と表記したものと推測でき、「セ^エ」という仮名表記は「se⁴」と読むことが考えられる。「抄…家」の「抄」は(チャ^オ)で表記すると読み取れるが、「摩抄」の「抄」には「シ^ア」を表記し、「sha¹」と読み、「掣(sh¹)」の読み方と同じである。《汉语大词典 第6卷》によると“抄(sa¹)”は“同‘掣’。参见‘摩掣’。”(626頁)とある。『自修書』では掣(sh¹)という音を取って表記した。しかしながら、“摩抄”の場合、“sa¹”を発音するので、この「抄」は「摩抄」の「抄」の誤字だと判断することができるし、発音も間違っていると思われる。

① 拼音と漢字の右上の1、2、3、4は陰平、陽平、上声、去声を表す。

次に、2つある仮名表記のうちの1つが当時の北京語である例を見る。

木 (ムー/ウー) 氈 (チャヌ/タヌ) 任 (レヌ/シエヌ) 若 (ロー/ヤオ) 容 (ロン/ヨン)

この例は全て前の表記が適切で、後の表記は現代漢語あるいは北京語の中には存在しないものである。原文は以下の通りである。

例 3-1. 這樣兒是真合我的口味，巧了是廚子擱了木魚了罷。(ムー)

例 3-2. 他有幾頃地，有一處果木園子，一處菜園子。(ウー)

例 4-1. 妳先把那塊花洋氈子拿到車裏頭去。(チャヌ)

例 4-2. 您是穿氈子的好，是穿布的好。(タヌ)

例 5-1. 老兄，我昨兒個聽人說，您現在升任太守了。(レヌ)

例 5-2. 像您這到省之後就可以上任去罷。(シエヌ)

例 6-1. 我想莫若就雇一送兒倒好。(ロー)

例 6-2. 現在您若有工夫兒，可以帶他進來。(ヤオ)

例 7-1. 還要請您代為先容。(ロン)

例 7-2. 好容易我今兒纔租妥了一所兒房子。(ヨン)

例 4-1、2 は同じ「氈子」という語に2種類表記があるが、似た字形の寔、壇、檀と混同していたのだろう。例 6-2 の「若」の「ヤオ⁴」は「yao」の発音と類似している。また、「容」の「ロン」は1例のみで、残りの「容」はすべて「ヨン」と表記している。『自修書』の表記方法に従えば「ロン」で表記されるべきであるにもかかわらず、「ヨン」と表記する理由は、上述で指摘したように東北方言の影響を受けて、声母「r」をゼロ声母「y」と読ませた可能性があり、「若(ヤオ⁴)」、「容(ヨン)」は東北方言の白話音の読み方と関連があると推測できる。

次に、長音の使用については、一定の法則性はなさそうである。以下にその例を示す。

幾位⁴ (ウエー) / 這位⁴ (ウエイ)

鋪蓋⁴ (カー) / 鋪蓋⁴ (カイ)

雇⁴車 (クー) / 雇⁴妥了 (クウ)

饒恕⁴ (シュ) / 寬恕⁴ (シュウ)

徐² (シュイ) / 徐² (シュウ)

帶⁴來 (タイ) / 帶⁴我去 (ター)

謝步⁴ (ブー) / 先前頭走一步⁴ (ブウ)

芥末⁴ (モー) / 末⁴尾 (モオ)

賊眉² (メイ) / 皺眉² (メー)

遊²手好閒 (ユー) / 遊²幕 (ユウ)

被窩¹ (ウオオ) / 窩¹棚 (ウオー)

苦³ (グイ) / 辛苦³ (クイ) / 苦³ (カクー)

擱¹了… (コー) / 擱¹着 (コオ)

數⁴ (シュ) / 數⁴ (シュウ)

告訴⁴ (スー) / 告訴⁴ (スウ)

替⁴ (ティー) / 替⁴ (ティ)

遞⁴ (テイ) / 遞⁴ (ティウ)

擡²過去 (ノオ) / 擡²用 (ノー)

撞壞⁴ (ホアー) / 壞⁴事 (ホアイ)

與³ (ユイ) / 與³我 (ユウ)

街路⁴ (ルー) / 一路⁴上 (ルウ) 如²今(ルー) / 不如⁴(ルウ)
 索²性 (ソー) / 索³性 (ソオ)

これらの例を見ると、「如²今、索²性」以外はすべて漢字の声調と発音が同じであるが、長音を用いるかで2種の仮名表記を使用している。特に、「鋪蓋⁴」、「告訴⁴」、「替⁴」は同じ語彙、意味を表すにもかかわらず、複数の用例で長音を用いる混乱が見られる。

本節では『自修書』の声母、韻母、特殊な音節字の分析を通して、以下のように結論づけをする。まず、声母と韻母の仮名表記の対応状況は比較的に規則的であることがわかる。次に、「例言」の捲舌音(zh, ch, sh, r)に関する説明と符号による区別は、読者にどの字が捲舌音であるかを明確にしたが、音節字表を利用した分析を経て捲舌音(zh, ch, sh, r)と齒茎音(z, c, s)を完全には区分できていないと分かり、個別の仮名表記に間違いが生じた。これは『自修書』の著者が長年大連、旅順で生活し、遼寧省の方言の影響を受けたことと無関係ではないだろう。最後に、漢語拼音の比較的特殊な捲舌音、鼻音韻尾、有気音などについてその大半を正確に表記したことから、『自修書』の著者は一定の中国語音韻に関する知識を有していたと考えられる。

6.3.2 明治時代における仮名表記の北京官話教科書

ここでは、『自修書』の仮名表記の由来と明治時代の仮名表記を有する中国語教科書における位置づけを解明するために、六角恒廣(1991-1998)、李无未(2015)、张美兰(2011)などの研究を参照し、表4の「明治時代仮名表記中国語教科書総表」を作成した。表4には計82種の仮名表記を有する中国語教科書を提示した。

表4 明治時代における仮名表記中国語教科書一覧表

順番	教科書	著者	出版年	発行者	種類
1	『亜細亜言語集支那官話部』	廣部精	1880年	青山清吉	仮名表記 ローマ字表記
2	『英清会話独案内』	田中正程	1885年07月	昇栄堂	仮名表記
3	『英和支那語学自在』	川崎華	1885年08月	川崎華	仮名表記
4	『日漢英語言合璧』	鄭永邦 呉大五郎	1888年12月	鄭永慶	仮名表記
5	『支那語独習書 第1編』	谷信近	1889年05月	支那語独習学校	仮名表記
6	『支那音並てにをは独案内』	三浦思則(曉山)	1890年06月	請肆館	仮名表記
7	『日清会話自在』	沼田正宣	1893年06月	法木書店	仮名表記
8	『実用支那語正篇』	中島謙吉	1894年07月	尚武学校編纂部	仮名表記
9	『支那語便覧第一』	加藤豊彦	1894年08月	松沢玳三	仮名表記

10	『日清会話』	参謀本部	1894年08月	八尾新助	仮名表記
11	『兵要支那語』	近衛歩兵第一旅 團〔ほか〕	1894年08月	東邦書院	仮名表記
12	『兵要支那語付朝鮮語』	近衛歩兵第一旅 團〔ほか〕	1894年08月	東邦書院	仮名表記
13	『独習日清対話捷徑』	星邦貞（蟠彭城）	1894年09月	鐘鈴堂	仮名表記
14	『日清会話付軍用語』	木野村政徳	1894年09月	日清協会	仮名表記
15	『兵事要語日清会話』	神代賤身	1894年11月	神代賤身	仮名表記
16	『学語須知』	松永清	1895年01月	岸田吟香	仮名表記
17	『筆談自在軍用日清会話付 実測里程表』	鈴木道宇〔ほか〕	1895年03月	山中勘次郎ほか	仮名表記
18	『軍用商業会話自在支那語 独案内』	星文山人	1895年04月	柏原政次郎	仮名表記
19	『支那語学楷梯』	中島長吉	1895年04月	小林新兵衛	仮名表記
20	『大日本国民必要下 附言三 国語大畧』	斎藤和平	1895年04月	斎藤和平	仮名表記
21	『漢話問答篇』	円山真逸	1895年05月	円山真逸	仮名表記
22	『支那語自在』	豊国義孝	1895年05月	獅子吼会	仮名表記
23	『日清字音鑑』	伊沢修二 大矢透〔ほか〕	1895年06月	並木善道	仮名表記 ローマ字表記
24	《支那音速知》	張廷彦	1899年06月	善隣書院	仮名表記 ローマ字表記
25	『日清韓三国千字丈』	荒浪平治郎	1900年05月	野村宗十郎	仮名表記
26	『清語会話案内』上巻	西島良爾	1900年07月	青木嵩山堂	仮名表記
27	『清語会話案内』下巻	西島良爾	1900年11月	青木嵩山堂	仮名表記
28	『支那語独習書』	宮島大八	1900年09月	善隣書院	仮名表記
29	『清語教科書』	西島良爾	1901年10月	石塚猪男蔵	仮名表記
30	『支那語』	金井保三	1901年	哲学館	仮名表記
31	『支那語学校講義録』	前田清哉	1901-1902年	善隣書院	仮名表記
32	『四声標註支那官話字典』	西島良爾 牧相愛	1902年07月	青木嵩山堂	仮名表記
33	『支那語助辞用法：附・応 用問題及答解』	青柳篤恒	1902年02月	文求堂	仮名表記
34	『支那語自在』	金井保三	1902年09月	勸学会	仮名表記

35	『和文対照支那書翰文』	中島庄太郎	1903年01月	欽英堂老舗	仮名表記
36	『日清会話編』	松永清	1903年05月	白川資始	仮名表記
37	『支那語速成兵事会話』	宮島大八	1904年02月	善隣書院	仮名表記
38	『対訳日露清韓会話』	米村勝藏	1904年02月	啓文社	仮名表記
39	『新編中等清語教科書』	西島良爾 林達道	1904年03月	石塚猪男蔵	仮名表記
40	『北京発音反切表』	鄭永邦	1904年05月	田中慶太郎	仮名表記 ローマ字表記 反切注音
41	『清語三十日間速成』	西島良爾	1904年05月	青木嵩山堂	仮名表記
42	『実用日清会話独修』	鈴木雲峰	1904年05月	修学堂	仮名表記
43	『北京官話支那語学捷徑』	足立忠八郎	1904年05月	金刺芳流堂	仮名表記
44	『清語会話速成』	東洋学会	1904年07月	又間精華堂	仮名表記
45	『日清会話独習』	山岸辰蔵	1904年07月	東雲堂書店	仮名表記
46	『貳週間成功清国語速成』	日清研究会	1904年08月	井上一書堂	仮名表記
47	『北京官話実用日清会話』	足立忠八郎	1904年08月	金刺芳流堂	仮名表記
48	『日清露会話』	粕谷元 平井平三	1904年09月	文星堂	仮名表記
49	『支那語辞彙』	石山福治	1904年12月	文求堂	仮名表記
50	『新編支那語独修』	三原好太郎	1905年04月	岡崎屋書店	仮名表記
51	『日清会話』	粕谷元	1905年06月	文星堂	仮名表記
52	『日漢辞彙』	石山福治	1905年06月	南江堂書店	仮名表記
53	『初歩支那語独修書』上、下 篇	原口新吉	1905年06月	広報社	仮名表記
54	『対訳清語活法附録支那時 文速知』	来原慶助	1905年06月	三省堂書店	仮名表記
55	『日華會話荃要』	平岩道知	1905年07月	岡崎屋書店	仮名表記
56	『日清会話語言類集』	金島苔水	1905年07月	松雲堂	仮名表記
57	『日清英語学独習』	林聖懋	1905年08月	中川玉成堂	仮名表記
58	『日清会話入門』	西島良爾	1905年09月	代々木商会	仮名表記
59	『注釈日清語学金針』	馬紹蘭 [ほか]	1905年09月	日清語学会	仮名表記
60	『実用日清会話』	湯原景政	1905年09月	石塚猪男蔵	仮名表記
61	『清語文典』	信原継雄	1905年11月	青木嵩山堂	仮名表記
62	『日韓清英露五国単語会話』	堀井友太郎	1905年11月	名倉昭文館	仮名表記

	篇』				
63	『清語新會話』	山崎久太郎	1905年02月	青木嵩山堂	仮名表記
64	『清語正規』	清語学堂速成科	1906年04月	文求堂	仮名表記 ローマ字表記
65	『支那語之勸』	大久保家道	1906年04月	支那語学会	仮名表記
66	『日清言語異同辨』	中島錦一郎	1906年06月	東亜公司	仮名表記
67	『北京官話日清會話捷徑』	甲斐靖	1906年07月	弘成館書店	仮名表記 ローマ字表記
68	『日華語学辞林』	井上翠	1906年10月	東亜公司	仮名表記
69	『最新清語捷徑』	西島良爾	1906年12月	青木嵩山堂	仮名表記
70	『日華時文辞林』	中島錦一郎 杉房之助	1906年06月	東亜公司	仮名表記
71	『北京官話万物声音附感投 詞及発音須知』	瀬上恕治	1906年12月	徳興堂印字局	仮名表記 ローマ字表記
72	『初歩支那語独修書』上、下 篇	原口新吉	1906年10月	広報社	仮名表記
73	『日清英會話』	谷原孝太郎	1907年06月	実業之日本社	仮名表記
74	『日清商業作文及會話』	中島錦一郎	1907年12月	広文堂書店	仮名表記
75	『支那語動詞形容詞用法』	皆川秀孝	1908年01月	文求堂	仮名表記 ローマ字表記
76	『清語講義録第1期第1 号』	皆川秀孝	1908年08月	皆川秀孝	仮名表記
77	『 華語 増補第7版』	御幡雅文	1908年09月	文求堂書局	仮名表記
78	『北京官話日清商業會話』	足立忠八郎	1909年02月	金刺芳流堂	仮名表記
79	『支那語要解』	寺田由衛	1909年09月	寺田由衛	仮名表記
80	『四民実用清語集附諺語用 法』	中西次郎	1910年08月	大阪屋号支店	仮名表記
81	『支那語の講義』	青砥頭夫	1910年05月	小林又七支店	仮名表記
82	『日清英露四語合璧』	鄭永邦 呉大五郎	1910年09月	島田太四郎	仮名表記

この表から、最初に仮名表記による表記を採用した北京官話教科書は廣部精『~~華語~~細細言語集 支那官話部』(1880年 以下は『言語集』と略称)であり、それ以降鄭永邦と呉大五郎の共編による『日漢英語言合璧』(1888)までの間に『英清會話独案内』(1885)と『英和支那語学自在』(1885)

年) なども出版された。その後、鄭永邦はさらに『北京發音反切表』(1904) と『日清英露四語合璧』(1910) を著した。上表を見ると、『日漢英語言合璧』から『日清英露四語合璧』までに計 79 種の仮名表記を有する北京官話教科書が出版された。ただ、『自修書』は大正時代の教科書であるため表 4 には提示していない。

表 4 にある明治時代の北京官話教科書の音声表記を見ると、主にローマ字表記、仮名表記、仮名表記とローマ字表記併用の 3 種類がある。初めてローマ字表記を採用した北京官話教科書は『語言自邇集』で、その後に日本で出版されたローマ字表記の北京官話教科書はおおよそ 20 種ある。また、表 2 にある 82 種の教科書と辞典のうち最初に仮名表記のみを採用した教科書は『英清会話独案内』である、その後、同類型のものは計 68 種出版された。仮名表記とローマ字表記併用の教科書はわずか 8 種である。以上のことから、明治時代の北京官話教科書は仮名表記形式が一般的だったと言えよう。

『言語集』から鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』までに仮名表記の教科書にどのような変化があるのか、『自修書』の仮名表記、および鄭永邦が著した『北京發音反切表』(1904)、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』(1910) の仮名表記と『言語集』にどのような関係があるのか、ここではこれらを明らかにするために、「明治時代北京官話教科書仮名表記変遷表」を作成した。なお、『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』の声母と韻母の対照などについては第八章で詳述する。

表 5 明治時代における北京官話教科書仮名表記の変遷年表⁽¹⁾

書名 表音 変化	言語集 (1880)	独案内 (1885)	自在 (1885)	語言合璧 (1888)	反切表 (1904)	四語合璧 (1910)	自修書 (1924- 1926)
仮名 種類	カタカナ	カタカナ	ひらかな	カタカナ	カタカナ	カタカナ	カタカナ
表記 種類	ローマ字 仮名表記	仮名表記	仮名表記	ローマ字 仮名表記	ローマ字 仮名表記 反切表記	ローマ字 仮名表記	ローマ字 仮名表記
声調	○	×	×	○	×	○	○
ウェード 式	○	×	×	○	○	○	○
声母 zi ci si	zi ツー ci ツー si スー	zi ツ/ツー /ツエ ci ツ	zi っー、 ci っー、 si っー、	zi ツ ci ツー si スー	zi ツー ci ツー si スー	zi ツ/ツ — ci ツー	zi ツ ci ツ si サ、

⁽¹⁾ ○は「ある」という意味を表し、×は「なし」という意味を表している。

si		si ス	そー、 しや			si ^ハ スー	ス、 セ、ソ
声母 x	シ	シ、ヒ	き、く、 し、じ、 ち、つ、 ひ、び、 へ	シ	シ	シ	シ
声母 r	ラ ^ハ リ ^ハ 、 ル ^ハ ロ ^ハ 、 ラ、リ、 ル、ロ	シ、セ	い、そ、 り、る、 れ、ろ、 じ、ぢ	ジ	ジ	ジ	ラ ^ハ 、 ル ^ハ 、 リ ^ハ 、 ロ ^ハ
声母 zhi chi shi の符号	×	×	×	zh ^ハ チ ch ^ハ チ sh ^ハ シ			
撮口呼üの 符号	#	#	×	符号 ..	×	符号 ..	ユイ ユー
有気音	×	×	×	彩 ^ハ ツァイ 疵 ^ハ ツー	疵 ^ハ ツー	菜 ^ハ ツァイ	●符號
兒化音	×	×	×	那兒 ^ハ ナール 兒 ^ハ エル	兒 ^ハ エル	點兒 ^ハ チ エル	×
鼻音韻尾	-n ^ハ ン -ng ^ハ ンヌ	-n ^ハ ン -ng ^ハ ン	△-n ^ハ ん △-ng ^ハ ん	-n ^ハ ヌ -ng ^ハ ン			
韻母-i	知 ^ハ チー ー	之 ^ハ チ	知 ^ハ チー ちい	直 ^ハ チー	知 ^ハ チー	直 ^ハ チー	只 ^ハ チー
韻母 e	ヲ、 一、 ヨ、 ヨ一、 ヲ	ヲ、ヨ	を、 一、 一ん等	一、 オー	オ	一、 オー	エ ^ハ 、 エ、 エー
韻母 ao	ヲ、 ヤヲ、 アヲ	ヲ、ウ	お一、 を、 う等	ウ、 ヤウ、 アウ	アオ	ウ、 ヤウ、 アウ	オ、 ヤオ、 アオ
韻母 ie	エ、エー	エ	い、	エー	イエ	エー	イエ、

			やう等				エ
韻母 iao	ヤフ	ヤウ	よう、 や等	ヤウ	×	ヤウ	アオ
韻母 iu	ウ、 ユウ	ユ、 ユウ	やう、 う等	ユウ、 ユー	×	ユウ、 ユー	イウ、 ウ、 ユ等
韻母 ou	ヲウ、 ユウ、 ヲ、 ウ	ヨウ	をう、 ふ等	ウ、オウ	オウ	ウ、オウ	ウ、 オウ、 ヨー等
韻母 er	イヤル	ル、アル	ある、る	アル	エル	アル	アル
韻母 u	ウ、一	ウ、ヨ	う、 一等	一、ユ一	ウ	一、ユ一	一、ウ等
韻母 ua	ワ、 ワー、 ウ、 ヨア、 ヨワイ	ワ	を、 あ一、 よわん等	ワー	×	ワー	ア、一
韻母 uo	ヲ、 ヲ一、 ヨ一、 一	ウ、 ヲ、 ヨウ	を、 な一、 一、 よう等	オ一、 ヲ一、 ヲ、 一	×	オ一、 ヲ一、 ヲ、 一	オ、 一
韻母 iong	ユン、 エンヌ、 イヨンヌ	ヨン	やん、 一ん、 ふ等	ヨン	×	ヨン	ユン

表5は兒化音、有気音、声母 zh、ch、sh の符号、韻母 iong などのような『言語集』から『自修書』までの仮名表記に変更がある、或は特定の符号をつけている声、韻母のみ取り上げた。例えば、有気音について、符号をつけているのは『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』のみであり、最初の仮名表記教科書である『言語集』にはない。韻母 iong については『言語集』は「ユン、エンヌ、イヨンヌ」の三種類の仮名で表記し、その後の『英清会話独案内』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』ではすでに定着し、「ヨン」で表記しているなどのような特殊な仮名表記である。

表5から『英和支那語学自在』以外の教科書は『言語集』を参照した可能性がある。『英和支那

『言語集』は声母と韻母どちらにおいてもほかの6種の教科書とは違い、その多くの仮名表記は『言語集』を参考にしたとは考えにくく、独自の表記体系を持っていると思われる。具体例を挙げると、まず意大利(いたり) / Italy (イタリ)、比利时(べるじゆむ) / Belgium (ベルジウム) などのような国名に対する仮名表記は英語の発音に従って仮名で表記したと思われる。また、腎(ちいん)、肩(けいん)、飯(はん)などの仮名表記は日本語の音読みに従った表記だろう。ただ、營(とわん)、閃(めん)、餌(しー)などのような一部の仮名表記は現代漢語の発音と全く違うので、理解が困難である。

『言語集』、『英清会話独案内』、『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』、『自修書』の関係は以下のようまとめられる。

(1) 『言語集』と『自修書』の声母は全く同じ仮名表記を使用している。その対応関係は声母bとpはハ行の濁音と半濁音を使い、dとtはタ行、gとkはカ行、mはマ行、nはナ行、lとrはラ行、hはハ行の仮名を用いる。j、q、zh、chはともに「チ」、xとshは「シ」、fは「フ」を使う。

『自修書』の仮名表記は『言語集』を参考にしたと言える。

(2) 表2に提示していないe、ao、ie、iao、iu、ou、er、u、ua、uo、iong以外の韻母については6書は全て同じ仮名表記を用いた。『反切表』は音韻対照表であるため、他の教科書とやや異なる。

(3) 符号「#」は『言語集』と『独案内』にのみ見られる。『言語集』において符号「#」は句(チュ#)、取(チュ#)、須(シユ#)のような韻母üの場合に付している。『独案内』は禧(シ#)、拜(ハ#)北(ペ#)、回(ホ#)、壞(ホワ#)、去(チュ#)のような韻母i、ai、ei、ui、uai、üの場合に用いている。鄭永邦の仮名表記は符号「¨」を用い撮口呼üを表す。『自修書』は「ユイ、ユー」で撮口呼を表示する。

(4) 鄭永邦が著した3書は6書のうちで唯一符号を使い送気音を表記した。また“兒化”の表記を施した唯一の教科書でもある。韻母との対応関係において鄭永邦の仮名表記は最少の仮名数で最も効率よく規則的である。

(5) 鄭永邦が著した3書と『自修書』は表3のほかの教科書とは異なるが、声母xとz、卷舌音、送気音、鼻音韻尾などの表記においてすでに統一の表記が形成されている。

6.4 『自修書』の「重念」の研究

『官話指南』「凡例」では「輕重念」を言及した。前述した「凡例」の例文を見ると、この「輕重念」は現代漢語の“輕音”と“重音”のことである。「凡例」では「凡説清話字句之間、有宜重念者、最為緊要、蓋重念之字、實與語言之意、大有關切。」と述べ、『官話指南』の著者は「重念」の重要性を認識していると考えられる。また、『自修書』の「例言」では「本文には、發音、四聲の圈點及重念の符號を付け」と述べたが、「重念」をどのような符号で表し、その発音の要領は何かなどについては解説していない。『自修書』の本文には四声を表す圈点のほか、黒丸(●)と漢字右側の縦線という2つの符号がある。上述で触れたように黒丸は送気音を表している。残る縦

線は「重念」の符号ということになる。「重念」という用法がいつから始まったのか、『官話指南』と『自修書』の「重念」はほかの教科書から影響を受けているのか、これらを明らかにするために、『唐話辞書類集』（1-20冊）と六角恒廣『中国語教本類集成』（1991-1998 全10集）の唐話教科書を調査した。

『唐話辞書類集』に収録された唐話教科書には「重念」という用語はなかった。鱒沢彰夫「北京官話教育と『語言自邇集 散語問答』明治10年3月川崎近義氏鈔本」（1988：151）によると、『語言自邇集』（1867）は「重念について言及していない」が、『語言自邇集 散語問答』（1877）は「字の右側に付された|印」で「重念」を表すと指摘した。しかし、その後出版された『官話指南』の「重念」の符号は『語言自邇集 散語問答』とは異なる。『官話指南』の「凡例」は「重念」について「凡字之應重念者在字之右邊畫一橫，如船一字是也。」と記している。

その後、宮島大八が編纂した『官話篇』（1903）、『支那語会話篇』（1921）、『急就編』（1933）などの教科書ではいずれも「重念」に言及している。『急就編』（1933）「急就編發音」では「其他重念（調子ヲ強メル處）の前後の字は、概して1聲に發すと謂はれをる。」と記している。『官話篇』（1903）「第三 腔調」の中には、「第一字重念」、「第二字重念」、「第三字重念」などを分けて「重念」を紹介している。例えば、「第一字重念」の節で、「那個人、這一回、什麼事、多少錢」などを列挙した。その中には最初の字が「重念」となる。『支那語会話篇』（1921）と『急就編』（1933）は共に漢字の右側に縦棒（|）を「重念」を表している。

「重念」について詳細に紹介し、その発音の要領を説明したのは、清語学堂速成科が編纂した『清語正規』（1906）からである。『清語正規』「第一編 官話聲音解」は「重念」について以下のように紹介した。

一語一句に調子を附することを音調と云ふ、即ち句調の事にして支那語にては之を重念と云ふ。
（中略）重念は重く讀むの義にして英語の所謂「Accent」に當るものなり。（中略）重念の附け方は會話問答に於て頗る重要なる關係を有し。（第一編 官話聲音解 16頁）

第一、一語一句中にて最も意味の肝要なる字に附することと、第二、其意味よりすれば左¹まで肝要ならざるも句調を整ふるが為に附すること。（第一編 官話聲音解 17頁）

宮島大八が編纂した教科書との比較を通して、『清語正規』は「重念」の説明、表記ルールが最も詳細に紹介していると分かる。学習者に「重念」の重要性と会話文でどのように重念を運用すべきかをさらに深く理解させたと言える。

その後の東亞學會所編『清語講義錄』（1908）、打田重治編『急就篇を基礎とせる支那語獨習』（1924）などの説明は『清語正規』のそれと大して変わらず、いずれも漢字右側に「|印」で重念を表した。

以上のことから重念について次のようにまとめられる。

¹ 『清語正規』の原文は縦書きなので、ここの「左」は「第一」のことを指す。

(1) 唐話教科書には重念という語は見られず、明治以降に学者らが中国語の「重念」を重視し始めた。

(2) 鱒沢彰夫(1988)の指摘通り『語言自邇集 散語問答』(1877)が明治時代の北京官話教科書で最初に「重念」という語を使用した。

(3) 『官話指南』(1882)は初めて「輕重念」の概念を導入し、既に使用されている「重念」以外に「輕念」という用語も含まれる。

(4) 明治の教科書で『官話指南』以外はいずれも「|印」で重念を表した。『官話指南』は「字之右邊畫一橫」(一印)で重念を表した。

(5) 『語言自邇集』(1867)から打田重治編『急就篇を基礎とせる支那語獨習』(1924)までの明治時代の教科書において“重音”を「重念」と呼び、ほかの用語は使用しなかった。

6.5 『精解』のローマ字表記と『語言自邇集』

6.5.1 『語言自邇集』の音韻体系

『官話指南』の成書の前に、当時の日本には北京官話の教科書はなく、『語言自邇集』(以下は『自邇集』と略称)を使用していた。『自邇集』はイギリス駐北京公使トーマス・ウェード(1818~1895)が外交秘書官在任中に著した北京語教科書である。初版は1867年に出版され、イギリス大使館、領事館の通訳学習者の為に編纂された教科書である。『自邇集』の「Part I Pronunciation (発音篇)」は「A, CH, E, F, H, HS, I, J, K, L, M, N, O, P, S, SH, SS, T, TS, TZ, W, Y」序に420個の音節字を挙げ、ローマ字表記を付けた。ここでは『自邇集』Part I Pronunciation (発音篇)にある音節字を考察した上で、声母と韻母の対照表(表6)を作成した。『自邇集』の声母は計26個ある。そのうち歯茎音z, c, sに「ts, tz」、「ts', tz'」、「s, ss」とそれぞれ2種類の表記している。そのほかの声母は現代漢語拼音と全く同じである。

韻母は計46個あり、現代漢語の韻母は全て含まれている。一方、現代漢語にない韻母は以下のものがある。現代漢語の韻母“ui”、“un”、“ei”、“üan”は『自邇集』で「規(kuei)」、「愧(k'uei)」、「為(wuei)」;「棍(kuên)」、「困(k'uên)」;「累(lêi)」、「喧(hsüen)」等のように2種類の表記方法を採用している。また「o」、「ü」、「io」、「iai」、「üo」の韻母があり、それぞれ「各(ko)」、「可(k'ó)」、「喝(ho)」、「子(tz ü)」、「次(tz'ü)」、「絲(ssü)」、「學(hsio)」、「約(yio)」、「楷(ch'iai)」、「涯(yiai)」、「略(lüo)」、「學(hsüo)」、「卻(ch'üo)」の音節字に対応している。「o」、「io」、「iai」、「üo」は現代漢語拼音にはすでに消えた古い発音である。

『自邇集』の音節字は計420字を使用しているが、「黒(hê/hei)」、「混(huên/hun)」、「喧(hsüan/hsüen)」、「各(ko/k'è)」、「可(k'ó/k'è)」、「棍(kuên/kun)」、「困(k'uên/k'un)」のように1字に2つのローマ字表記を付けている字もあるため、音節の表記は427種類になる。『語言自邇集』の声韻対照は表6通りである。

表6 『語言自彙集』の声韻対照表

		唇音				舌尖中音				舌面后音			舌面前音			舌尖后音						舌尖前音						Ø													
		p	p'	m	f	t	t'	n	l	k	k'	'h	ch	ch'	hs	ch	ch'	sh	j	ts	ts'	tz	tz'	s	ss	ts	ts'		tz	tz'	s	ss									
開口呼	1	ih																知	尺	事	日																				
	2	a	罷	怕	馬	法	大	他	那	拉	嘎	咋	哈						乍	茶	殺		雜	擦															阿		
	3	o	波	破	末	佛	多	妥	挪	駱									卓	擱		若	作	錯															索		
	4	ê					得	特		勒	各	可	黑						這	車	舌	熱	則	策															額		
	5	o									各	可	喝																										訛		
	6	êrh																																					兒		
	7	ai	拜	派	買		歹	太	奶	來	改	開	害						窄	柴	曬		在	才														賽	愛		
	8	ei	北	陪	美	非	得		內	累	給	刻	黑						這				賊	怎																	
	9	êi								累																															
	10	ao	包	跑	毛		道	逃	鬧	老	告	考	好						兆	吵	少	繞	早	草															掃	傲	
	11	ou	不	剖	謀	否	豆	頭	耨	陋	狗	口	後						晝	抽	手	肉	走	湊															搜	偶	
	12	an	半	盼	慢	反	單	炭	男	懶	甘	看	寒						斬	產	山	染	贊	慚															散	安	
	13	ên	本	盆	門	分			嫩		根	肯	很						真	臣	身	人	怎																森	恩	
	14	ang	幫	旁	忙	方	當	湯	囊	浪	剛	炕	夯						章	唱	賞	嚷	葬	倉																桑	昂
	15	êng	迸	朋	夢	風	等	疼	能	冷	更	坑	恒						正	成	生	扔	增	層																僧	哼
齊齒呼	16	i	必	皮	米		的	替	你	立				雞	七	西																								益	
	17	ũ																																					子	次	絲
	18	ia								倆								家	恰	夏																				牙	
	19	iai																楷																						涯	
	20	io							虐	略								角	卻	學																				約	
	21	ieh	別	撇	滅		疊	貼	捏	裂								街	且	些																				夜	
	22	iao	表	票	苗		弔	挑	鳥	聊								交	巧	學																				要	
	23	iu			謬		丟		牛	留								酒	秋	修																				有	
	24	ien	扁	片	面		店	天	念	連								見	欠	先																				音	
25	in	賓	貧	民				您	林								斤	親	心																						
26	en																																								
27	iang							娘	兩								江	搶	向																					羊	
28	ing	兵	憑	名		定	聽	寧	另								井	輕	性																					迎	
合口呼	29	u	不	普	木	夫	妒	土	奴	路	古	苦	戶					主	出	書	如	祖	粗																素	武	
	30	ua									瓜	跨	花					抓	欸	刷																				瓦	
	31	uo									果	闊	火						擱	說																				我	
	32	uai									怪	快	壞						拽	揣	衰																				外
	33	uei									規	愧																													為
	34	ui					對	退					回						追	吹	水	瑞	嘴	催																碎	
	35	uan					短	團	暖	亂	官	寬	換						專	穿	栓	輓	摺	竄															算	完	
	36	uên									棍	困	混																												文
	37	un					敦	吞	嫩	論	棍	困	混							准	春	順	潤	尊	寸															孫	
	38	uang									光	況	黃							壯	牀	雙																			往
	39	uêng																																							翁
	40	ung					冬	同	濃	龍	工	孔	紅							中	充		絨	宗	蔥															送	
撮口呼	41	ũ						女	律				句	取	須																									魚	
	42	ũo						虐	略					爵	却	學																									
	43	ũeh						虐	略						絕	缺	雪																							約	
	44	ũn							論						君	羣	巡																							雲	
	45	ũan							戀						捐	全	喧																							原	
	46	ũen																																							
	47	iung																	窘	窮	兄																			用	

6.5.2 『官話指南精解』と『語言自邇集』との関係

ここでは『精解』のローマ字表記と『自邇集』の関係を解明するために、『精解』のローマ字表記の音節字表(表7)を作成した。表6と表7の比較から声母では『精解』と『自邇集』は全く同じであり、韻母では『自邇集』の「io」が『精解』にはないだけある。『自邇集』の「io」は“虐、略、角、卻、學”に表記されており、それらは全て旧音である。『精解』は1930年代末の成立であるため、その時にはこのような旧音はすでに使用されていなかった可能性がある。これにより『精解』はそれらの旧音を収録しなかったのだろう。また、表7からわかるように、ローマ字表記においても『精解』と『自邇集』では異なる方式を採用することがある。例えば「益²、醫¹、依¹、遺²、疑²、役⁴、異⁴」などの字について『自邇集』は「yi」としたが、『精解』は「i」で表した。

表7 『精解』におけるローマ字表記の音節字表⁽¹⁾

音順	
ゼロ	ê/e: 訛 ² 、哦 ² 、惡 ³ 、額 ² 、俄 ⁴ 。ai/ai: 愛 ⁴ 、哎 ⁴ 、曖 ¹ 、挨 ¹ 、礙 ⁴ 。ao/ao: 熬 ² 、襖 ³ 。ou/ou: 藕 ³ 。an/an: 案 ⁴ 、鞍 ¹ 、諳 ⁴ 、菴 ¹ 、岸 ⁴ 。ên/en: 恩 ¹ 。êrh/er: 耳 ³ 。 yo/yo: 啣 ¹ 。i/yi: 益 ² 、誼 ² 、醫 ¹ 、依 ¹ 、遺 ² 、疑 ² 、役 ⁴ 、異 ⁴ 、矣 ³ 、伊 ¹ 、譯 ⁴ 、貽 ² 、毅 ⁴ 、肄 ⁴ 。ya/ya: 押 ¹ 、牙 ² 、壓 ¹ 、雅 ³ 。yeh/ye: 爺 ² 、夜 ⁴ 、野 ³ 、業 ⁴ 、謁 ⁴ 。yao/yao: 咬 ³ 、搖 ² 、窰 ² 、勒 ⁴ 、吆 ¹ 、鑰 ⁴ 。yu/you: 酉 ³ 、游 ² 、油 ² 、尤 ² 、憂 ¹ 。yen/yan: 沿 ⁴ 、淹 ¹ 、烟 ¹ 、驗 ⁴ 、眼 ³ 、顏 ² 、驗 ⁴ 、宴 ⁴ 、醃 ¹ 、嚴 ² 、厭 ⁴ 、掩 ³ 、延 ² 、研 ² 。yin/yin: 陰 ¹ 、引 ³ 、癮 ³ 、音 ¹ 。ang/yang: 羊 ² 、養 ³ 、陽 ² 、漾 ⁴ 、仰 ³ 。ying/ying: 迎 ² 、羸 ² 、鷹 ¹ 、硬 ⁴ 、膺 ¹ 。yü/you: 預 ⁴ 、與 ³ 、裕 ⁴ 、雨 ³ 、于 ² 、兪 ² 、遇 ⁴ 、寓 ⁴ 、御 ⁴ 、魚 ² 、餘 ² 、逾 ² 、竽 ² 、譽 ⁴ 、諭 ⁴ 、愚 ² 、虞 ² 。yüan/yuan: 院 ⁴ 、元 ² 、園 ² 、冤 ¹ 、淵 ¹ 。yün/yun: 雲 ² 、熨 ⁴ 、允 ³ 。yung/yong: 永 ³ 、庸 ¹ 。 wu/wu: 惡 ⁴ 、忤 ³ 、悟 ⁴ 、吾 ³ 、吳 ² 、悞 ⁴ 、武 ³ 、午 ³ 。wa/wa: 瓦 ³ 、窪 ¹ 、襪 ⁴ 。wo/wo: 窩 ¹ 、踞 ¹ 。wei/wei: 違 ² 、圍 ² 、味 ⁴ 、衛 ⁴ 、饑 ⁴ 、微 ¹ 、慰 ⁴ 。wan/wan: 萬 ⁴ 、晚 ³ 、碗 ³ 、灣 ¹ 。wên/wen: 穩 ³ 、溫 ¹ 。wang/wang: 王 ² 、忘 ⁴ 、妄 ⁴ 、網 ³ 、汪 ¹ 、枉 ³ 。
p(b)	pa/ba: 巴 ¹ 。po/bai: 百 ² 。pai/bai: 拜 ⁴ 、敗 ⁴ 、掰 ¹ 。pan/ban: 伴 ⁴ 、板 ³ 、搬 ¹ 、扮 ⁴ 、班 ¹ 、坂 ³ 。pang/bang: 幫 ¹ 、梆 ¹ 、棒 ⁴ 、榜 ³ 。pao/bao: 寶 ³ 、雹 ² 、抱 ¹ 。pei/pei: 盃 ¹ 、備 ⁴ 、背 ⁴ 、被 ⁴ 。pên/ben: 奔 ⁴ 。pi/bi: 彼 ² 、避 ⁴ 。pien/bian: 變 ⁴ 、扁 ³ 、匾 ³ 、辯 ⁴ 、弁 ⁴ 、遍 ⁴ 、辯 ⁴ 、編 ¹ 。piao/biao: 鑣 ¹ 、標 ¹ 、裱 ³ 、臆 ¹ 。pin/bin: 賓 ¹ 、檳 ¹ 、濱 ¹ 。ping/bing: 兵 ¹ 、稟 ³ 、冰 ¹ 。po/bo: 剝 ¹ 、薄 ² 、伯 ² 、撥 ¹ 、博 ² 。pu/bu: 部 ⁴ 、補 ³ 、步 ⁴ 。

⁽¹⁾ 斜線の前は『精解』のローマ字表記、後是对應する現代漢語の拼音表記である。漢字の右上に付けた数字1、2、3、4はそれぞれ現代漢語の陰平、陽平、上声、去声を表している。

p'(p)	p'a/pa : 帕 ⁴ 。p 'ai/pai : 排 ² 、拍 ¹ 。p'an/pan : 判 ⁴ 、盤 ² 。p'ang/pang : 傍 ² 。p'ao/pao : 跑 ³ 。p'ei/pei : 賠 ² 、倍 ⁴ 、培 ² 。p'en/pen : 盆 ² 。p'eng/peng : 棚、碰 ⁴ 、蓬 ² 。p'i/pi : 皮 ² 、屁 ⁴ 匹 ³ 。p'ien/pian : 騙 ⁴ 、片 ⁴ 。p'iao/piao : 瓢 ² 。p'ieh/pie : 撇 ¹ 。p'in/pin : 品 ³ 。p'ing/ping : 瓶 ² 、評 ² 。p'o/po : 破 ⁴ 、頗 ¹ 。p'u/pu : 撲 ¹ 、蒲 ² 。
m(m)	ma/ma : 馬 ³ 、罵 ⁴ 、嗎 ¹ 、麻 ² 。mai/mai : 邁 ⁴ 。man/man : 滿 ³ 、慢 ⁴ 。mang/mang : 茫 ² 、盲 ² 。mao/mao : 貓 ¹ 、茅 ² 、冒 ⁴ 、貿 ⁴ 、卯 ³ 。mei/mei : 妹 ⁴ 、煤 ² 。mên/men : 悶 ⁴ 。mi/mi : 眯 ⁴ 、迷 ² 、米 ³ 。mien/mian : 棉 ² 、勉 ³ 。miao/miao : 廟 ⁴ 、貌 ⁴ 、妙 ⁴ 、苗 ² 、渺 ³ 。mieh/mie : 滅 ⁴ 。min/min : 敏 ³ 。miu/miu : 謬 ⁴ 、摸 ¹ 。mo/mo : 磨 ⁴ 、抹 ³ 、摩 ² 、磨 ² 。mu/mu : 畝 ³ 、睦 ⁴ 、母 ³ 、慕 ⁴ 。
f(f)	fa/fa : 珐 ⁴ 、乏 ² 。fan/fan : 販 ⁴ 、煩 ² 、翻 ¹ 、凡 ² 、犯 ⁴ 、緋 ¹ 、範 ⁴ 、藩 ² 。fang/fang : 衍 ³ 、放 ⁴ 。fei/fei : 啡 ¹ 、廢 ⁴ 。fên/fen : 吩 ¹ 、粉 ³ 。fêng/feng : 俸 ⁴ 、豐 ¹ 、馮 ² 、縫 ² 、逢 ² 。fou/fou : 否 ³ 。fu/fu : 福 ² 、彿 ⁴ 、夫 ¹ 、撫 ³ 、袱 ² 、傅 ⁴ 、復 ⁴ 、咐 ⁴ 、輔 ³ 、付 ⁴ 、副 ⁴ 、腐 ³ 、赴 ⁴ 、幅 ⁴ 、麩 ¹ 、符 ² 、覆 ⁴ 。
t(d)	ta/da : 達 ² 、答 ¹ 。tai/dai : 戴 ³ 、大 ⁴ 、袋 ⁴ 、歹 ³ 。tan/dan : 膽(胆) ³ 、耽 ¹ 、蛋 ⁴ 、淡 ⁴ 、擔 ³ 、擔 ¹ 。tang/dang : 檔 ⁴ 、蕩 ⁴ 。tao/dao : 盜 ⁴ 、刀 ¹ 。tê/de : 德 ² 。têng/deng : 燈 ¹ 、瞪 ⁴ 、戥 ³ 、凳 ⁴ 、鐙 ⁴ 、蹬 ¹ 。ti/di : 低 ¹ 、帝 ⁴ 。tien/dian : 店 ⁴ 、典 ³ 、佃 ⁴ 、淀 ⁴ 、惦 ⁴ 。tiao/diao : 吊 ⁴ 、掉 ⁴ 、弔 ⁴ 、調 ⁴ 。tieh/die : 疊 ² 、碟 ² 。ting/ding : 釘 ⁴ 、丁 ¹ 。tiu/diu : 丟 ¹ 。tung/dong : 冬 ¹ 、咚 ¹ 。tou/dou : 斗 ³ 、荳 ⁴ 、抖 ³ 、兜 ¹ 。tu/du : 獨 ² 、度 ⁴ 、毒 ² 、毒 ³ 、肚 ⁴ 、堵 ³ 。tuan/duan : 短 ³ 、斷 ⁴ 、端 ¹ 。tui/dui : 堆 ¹ 。tun/dun : 頓 ⁴ 、墩 ¹ 、墩 ¹ 。to/duo : 掇 ⁴ 、朶 ³ 、舵 ⁴ 。
t'(t)	t'a/ta : 榻 ¹ 、榻 ⁴ 。t'ai/tai : 泰 ⁴ 、台 ² 、抬 ² 。t'an/tan : 談 ² 、坦 ³ 、貪 ¹ 、灘 ¹ 、炭 ⁴ 、痰 ² 、壇 ² 、毯 ³ 。t'ang/tang : 儻 ³ 、躺 ³ 、唐 ² 、燙 ⁴ 。t'ao/tao/套 ⁴ 、逃 ² 、淘 ² 、討 ³ 、桃 ² 、萄 ² 、陶 ² 。t'ê/te : 特 ⁴ 。t'êng/teng : 疼 ² 、膳 ² 、騰 ² 。t'i/ti : 屨 ⁴ 、剃 ⁴ 、剔 ¹ 、題 ² 。t'ien/tian : 添 ¹ 。t'iao/tiao : 挑 ² 、跳 ⁴ 。t'ieh/tie : 帖 ³ 。t'ing/ting : 廳 ¹ 、停 ² 。t'ung/tong : 桶 ³ 、衕 ⁴ 。t'ou/tou : 偷 ¹ 、透 ⁴ 、投 ² 。t'u/tu : 徒 ² 、塗 ² 、吐 ⁴ 、途 ² 、圖 ² 。t'o/tuo : 駝 ² 、馱 ² 、拖 ¹ 、脫 ¹ 。
n(n)	na/na : 納 ⁴ 。nai/nai : 奈 ⁴ 、奶 ³ 、耐 ⁴ 。nang/nang : 囊 ² 。nao/nao : 惱 ³ 、鬧 ⁴ 、腦 ³ 。nên/nen : 嫩 ⁴ 。ni/ni : 泥 ² 、膩 ⁴ 、逆 ⁴ 。nien/nian : 念 ⁴ 、捻 ³ 。niao/niao : 鳥 ³ 。nieh/nie : 乜 ⁴ 、捏 ¹ 。ning/ning : 擰 ² 。niu/niu : 牛 ² 、鈕 ³ 。nü/nv : 女 ³ 。
l(l)	lo/le : 樂 ⁴ 。la/la : 蠟 ⁴ 、拉 ¹ 、鑷 ⁴ 、刺 ² 、攆 ⁴ 、喇 ¹ 。lai/lai : 賴 ⁴ 。lan/lan : 藍 ² 、攔 ² 、懶 ³ 、襪 ² 、爛 ⁴ 、攬 ³ 。lao/lao : 癆 ² 。lei/lei : 淚 ⁴ 、勒 ¹ 。lêng/leng : 冷 ³ 、愣 ⁴ 、稜 ² 。li/li : 裡 ³ 、離 ² 、李 ³ 、禮 ³ 、利 ⁴ 、璃 ² 、歷 ⁴ 、粒 ⁴ 、梨 ² 、俐 ⁴ 、吏 ⁴ 、隸 ⁴ 。lien/lian : 臉 ³ 、練 ⁴ 、噉 ² 、蓮 ² 、帘 ² 。liang/liang : 糧 ² 、涼 ² 、良 ² 、亮

	<p>4、輛⁴、瞭⁴、樑²、梁²、諒⁴。lieh/lie:列⁴。lin/lin:鄰²、臨²、林²、吝⁴。 Ling/ling:領³、零²、靈²。liu/liu:劉²、溜¹、留²、琉²、流²。lung/long: 籠²、窿²、龍²。lou/lou:漏⁴、露⁴、簍³、摟³。lu/lu:爐²、錄⁴。lü/lü:慮⁴、 驢²、樓³、屢³。luan/luan:亂⁴。lo/luo:騾²、落⁴、鑼²、儻²、囉²。</p>
k(g)	<p>ka/ga:嘎¹、哈¹。kan/gan:干¹、乾¹、杆¹、肝¹。kang/gang:剛¹。kao/gao: 稿³、槁³。ko/ge:攔¹、榻²、革²、鴿¹、格²、葛²。kên/gen:根¹、跟¹。kêng/ geng:更¹、庚¹。kung/gong:弓¹、功¹、供¹、恭¹、宮¹。kou/gou:勾¹、溝¹、構⁴。 ku/gu:固⁴、雇⁴、咕¹、估¹。kua/gua:掛⁴、颯¹、寡³、瓜¹。kuai/guai:怪⁴、 拐³、癸³。kuan/guan:館³、灌⁴、罐⁴、觀¹。kuang/guang:廣³。kuei/gui: 鬼³、跪⁴。kun/gun:棍⁴、滾³。kuo/guo:郭¹、裹³、菓³、沽¹。</p>
k'(k)	<p>k'an/kan:看¹、坎³、砍³。k'ang/kang:損²、炕⁴、康¹。k'ao/kao:考³、拷³、烤³。 k'o/ke:磕¹、恪⁴、科¹、棵¹。k'ung/kong:孔³、控⁴、恐³。k'u/ku:褲⁴、庫⁴、 窟¹、苦³、孤¹。k'ua/kua:誇¹、胯⁴。k'uai/kuai:筷⁴。k'uei/kui:愧⁴、奎²。k'uang/ kuang:況¹、誑¹。k'un/kun:網³、昆¹。</p>
h(h)	<p>ha/ha:哈³。hai/hai:害⁴。han/han:汗⁴、翰⁴、函²、寒²、罕³、旱⁴。hao/hao: 郝³、毫²。ho/he:河²、和²、喝¹、盒²、荷²。hêi/hei:黑¹、嘿¹。hên/hen:恨⁴。 hêng/heng:恆²、哼¹。hung/hong:哄³、紅²。hou/hou:厚⁴。hu/hu:胡²、忽¹、 斛²、惚¹、蘊²、壺²、呼¹、護⁴、虎³、焯²、互⁴、湖²。hua/hua:化⁴、滑²。huai/ huai:懷²。huan/huan:喚⁴、宦⁴、歡¹、桓²。huang/huang:荒¹、恍³、幌³、 謊³、皇²、黃²。hui/hui:灰¹、悔³。hun/hun:混⁴、昏¹、葷¹。huo/huo:或⁴。</p>
ch(j)	<p>chi/ji:紀⁴、集²、忌⁴、雞¹、計⁴、季⁴、蹟⁴、祭⁴、机¹、己³、擠³、籍²、際⁴、 跡⁴。chia/jia:駕⁴、架⁴、枷¹、稼⁴、佳¹、假³、咖¹、夾¹。chien/jian:賤⁴、 檢³、薦⁴、堅¹、建⁴、檢³、剪³、尖¹、肩¹、漸⁴、揀³、監⁴、漿⁴。chiang/jiang: 漿³、匠⁴、江¹、蔣³、醬⁴、纒⁴。chiao/jiao:腳³、僥⁴、覺⁴、狡³、轎⁴、焦¹、嚼²、 澆¹、嬌¹、僥³。chieh/jie:節²、捷²、街¹、解³、姐³、劫²、屆⁴、揭¹、芥⁴、 截²、稽¹、藉⁴。chin/jin:勁⁴、筋¹、筋¹、斤¹、晉⁴、衿¹。ching/jing:更¹、 睛¹、晶¹、敬⁴、驚¹、靜⁴。chiu/jiu:揪¹、久³、舅⁴、九³、酒³。chü/ju:舉³、 矩⁴、局¹、聚⁴、拘¹。chüan/juan:卷⁴、捐¹、捲³。chüeh/jue:覺²、絕²、蹶²。 chün/jun:軍¹、均¹。</p>
ch'(q)	<p>ch'i/qi:七¹、契⁴、其²、騎²、棄⁴、啓³、欺¹、旗²、沏¹、棊²、齊²、崎¹。ch'ia/ qia:掐¹、恰⁴。ch'ien/qian:謙¹、籤¹、鉗²、遣³、牽¹、牽⁴。ch'iang/qiang: 強²、搶³、槍¹、牆²。ch'iao/qiao:瞧²、俏⁴、巧³、悄³。ch'ieh/qie:妾⁴、啞⁴。 ch'in/qin:芹²、欽¹、勤²、秦²。ch'ing/qing:頃³、輕¹、清¹、青¹、慶⁴。ch'iong/ qiong:窮²。ch'iu/qiu:球²。ch'ü/qu:屈¹、趣⁴。ch'üan/quan:泉²、圈¹、拳²、</p>

	權 ² 。ch'üeh/que : 缺 ¹ 。ch'ün/qun : 幫 ² 。
hs(x)	his/xi : 喜 ³ 、息 ² 、錫 ² 、息 ² 、戲 ⁴ 、稀 ¹ 、係 ⁴ 、希 ¹ 。hsia/xia : 夏 ⁴ 、嚇 ⁴ 、瞎 ¹ 、蝦 ¹ 。hsien/xian : 閒 ² 、縣 ⁴ 、嫌 ² 、險 ³ 、鹹 ² 、線 ⁴ 、鮮 ¹ 、顯 ³ 。hsiang/xiang : 享 ³ 、詳 ² 、象 ⁴ 、巷 ⁴ 、廂 ¹ 、鑲 ¹ 。hsiao/xiao : 霄 ¹ 、笑 ⁴ 、孝 ⁴ 、效 ⁴ 、曉 ³ 、筱 ³ 。hsieh/xie : 邪 ² 、洩 ⁴ 、歇 ¹ 、攜 ² 。hsin/xin : 辛 ⁴ 。hsing/xing : 姓 ⁴ 、倖 ⁴ 、醒 ³ 、性 ⁴ 、刑 ² 、星 ¹ 、杏 ⁴ 。hsiung/xiong : 兇。hsiu/xiu : 袖 ⁴ 、羞 ¹ 、脩 ¹ 、修 ¹ 、秀 ⁴ 、鏞 ⁴ 。hsü/xu : 戍 ¹ 、徐 ² 、虛 ¹ 、敘 ⁴ 、須 ¹ 。hsüan/xuan : 旋 ² 、軒 ¹ 、揅 ¹ 。hsüeh/xue : 雪 ³ 、靴 ¹ 。hsün/xun : 汛 ⁴ 、巡 ² 、旬 ² 、循 ² 、遜 ⁴ 、尋 ² 。
ch(zh)	cha/zha : 喳 ¹ 、扎 ² 、乍 ⁴ 、詐 ⁴ 、紮 ¹ 、炸 ⁴ 、劓 ² 。chai/zhai : 宅 ² 、摘 ¹ 、齋 ¹ 。chan/zhan : 粘 ¹ 、展 ³ 、站 ⁴ 、振 ³ 、湛 ³ 、蘸 ⁴ 、沾 ¹ 、戰 ⁴ 、種 ¹ 。chang/zhang : 仗 ⁴ 、帳 ⁴ 、彰 ¹ 。chao/zhao : 趙 ⁴ 、著 ² 、罩 ⁴ 。chê/zhe : 浙 ⁴ 、折 ² 、摺 ² 、者 ³ 、遮 ¹ 。chên/zhen : 鎮 ⁴ 、斟 ¹ 、枕 ³ 、陣 ⁴ 。chêng/zheng : 掙 ⁴ 、整 ³ 、鄭 ⁴ 、爭 ¹ 。chih/zhi : 置、姪 ² 、指 ³ 、值 ² 、旨 ³ 、志 ⁴ 、治 ⁴ 、摺 ¹ 、織 ¹ 、緻 ⁴ 、蚰 ¹ 、執 ² 、秩 ⁴ 、制 ⁴ 、芝 ¹ 。chung/zhong : 終 ¹ 、仲 ⁴ 、種 ⁴ 、忠 ¹ 、腫 ³ 、衷 ¹ 。chou/zhou : 週 ¹ 、州 ¹ 、肘 ³ 、皺 ⁴ 、粥 ¹ 、咒 ⁴ 、舟 ¹ 。chu/zhu : 豬 ¹ 、諸 ¹ 、囑 ³ 、竹 ² 、煮 ³ 、柱 ⁴ 、助 ⁴ 、珠 ¹ 、蛛 ¹ 、駐 ⁴ 。chua/zhua : 抓 ¹ 。chuai/zhuai : 跬 ³ 。chuan/zhuan : 轉 ³ 、甄 ¹ 、磚 ¹ 。chuang/zhuang : 莊 ¹ 、壯 ⁴ 、裝 ¹ 、粧 ¹ 、椿 ¹ 、撞 ⁴ 。chui/zhui : 追 ¹ 、錐 ¹ 。cho/zhuo : 鑊 ² 、酌 ² 、拙 ¹ 。
ch'(ch)	ch'a/cha : 查 ² 、岔 ⁴ 、詫 ⁴ 、鍤 ² 、插 ¹ 、差 ¹ 。ch'ai/chai : 差 ¹ 、拆 ¹ 。ch'an/chan : 產 ³ 、饑 ² 、攙 ¹ 。ch'ang/chang : 廠 ³ 、唱 ⁴ 、嚐 ² 、昌 ¹ 。ch'ao/chao : 抄 ¹ 、吵 ³ 、朝 ² 、潮 ² 。ch'è/che : 撤 ⁴ 、掣 ⁴ 。ch'ên/chên : 趁 ⁴ 、襯 ¹ 、沉 ² 、辰 ² 。ch'êng/cheng : 城 ² 、程 ² 、呈 ² 、稱 ¹ 、誠 ² 、盛 ² 、乘 ² 。ch'ih/chi : 尺 ³ 、持 ² 、馳 ² 、致 ⁴ 、匙 ² 、遲 ² 、齒 ³ 、飭 ⁴ 。ch'ung/chong : 崇 ² 。ch'ou/chou : 仇 ² 、抽 ¹ 、籌 ² 、稠 ² 。ch'u/chu : 除 ² 、鋤 ² 、廚 ² 。ch'uan/chuan : 川 ¹ 、傳 ² 。ch'uang/chuang : 窻 ¹ 、床 ² 。ch'ui : chui : 鎚 ² 。ch'ün/chun : 春 ¹ 。ch'o/chuo : 戳 ¹ 。
sh(sh)	sha/sha : 沙 ¹ 、殺 ¹ 、煞 ¹ 、莎 ¹ 。shai/shai : 曬 ⁴ 。shan/shan : 山 ¹ 、膳 ⁴ 、扇 ⁴ 、善 ⁴ 。shang/shang : 晌 ² 、裳 ¹ 、尚 ⁴ 、賞 ³ 。shao/shao : 燒 ¹ 、少 ⁴ 、梢 ¹ 。shê/she : 舍 ⁴ 、折 ² 、涉 ⁴ 。shên/shên : 沈 ³ 、審 ³ 。shêng/sheng : 剩、升 ¹ 、賸 ⁴ 、牲 ¹ 、繩 ² 、陞 ¹ 、聖 ⁴ 、勝 ¹ 。shih/shi : 勢 ⁴ 、式 ⁴ 、試 ⁴ 、識 ² 、師 ¹ 、石 ² 、使 ³ 、屍 ¹ 、拾 ² 、始 ³ 、誓 ⁴ 、士 ⁴ 、史 ³ 、屎 ³ 、侍 ⁴ 、施 ¹ 、視 ⁴ 、詩 ¹ 。shou/shou : 守 ³ 、受 ⁴ 、獸 ⁴ 、壽 ⁴ 、售 ⁴ 、授 ⁴ 。shu/shu : 署 ³ 、贖 ² 、舒 ¹ 、樹 ⁴ 、束 ⁴ 、輸 ¹ 、術 ⁴ 、漱 ⁴ 、恕 ⁴ 、庶 ⁴ 。shua/shua : 刷 ¹ 。shuai/shuai : 摔 ¹ 、率 ⁴ 。shuan/shuan : 拴 ¹ 、涮 ⁴ 。shui/shui : 睡 ⁴ 。棗 ³
j(r)	jang/rang : 讓 ⁴ 。jao/rao : 遶 ⁴ 、繞 ⁴ 、擾 ³ 。jê/re : 熱 ⁴ 。jên/ren : 任 ⁴ 、壬 ² 。

	jêng/reng : 扔 ¹ 。jung/rong : 榮 ² 、絨 ² 、冗 ³ 、融 ² 、鎔 ² 。jou/rou : 肉 ⁴ 。ju/ru : 褥 ⁴ 、汝 ³ 、乳 ³ 。juan/ruan : 軟 ³ 。jo/ruo : 若 ⁴ 、弱 ⁴ 。
ts(z)	tsa/tsa : 砸 ² 。tsai/zai : 哉 ¹ 、載 ⁴ 。tsan/zan : 贖 ¹ 。tsang/zang : 贓 ¹ 。tsao/zao : 遭 ¹ 、棗 ³ 。tsê/ze : 擇 ² 。tsei/zei : 賊 ² 。tsung/zong : 縱 ⁴ 。tsou/zou : 奏 ⁴ 。tsu/zu : 足 ² 、阻 ³ 。tsuan/zuan : 賺 ⁴ 、鑽 ⁴ 。tsui/zui : 嘴 ³ 、罪 ⁴ 。tsun/zun : 尊 ¹ 。tso/zuo : 坐 ⁴ 、左 ³ 。
tz (z)	tz ũ/zi : 咨 ¹ 、滋 ¹ 。
tz'(c)	tz'ũ/ci : 辭 ² 、詞 ² 、祠 ² 、伺 ⁴ 、賜 ⁴ 。
ts'(c)	ts'a/ca : 擦 ¹ 。ts'ai/cai : 跣 ³ 、縲 ⁴ 、猜 ¹ 、才 ² 、裁 ² 。ts'an/can : 慚 ⁴ 、參 ¹ 、叅 ¹ 。ts'ang/cang : 倉 ¹ 、蒼 ¹ 、艙 ¹ 。ts'ao/cao : 草 ³ 、操 ¹ 。ts'êng/ceng : 躡 ⁴ 、曾 ² 。ts'ung/cong : 聰 ¹ 。ts'u/cu : 醋 ⁴ 、粗 ¹ 。ts'ui/cui : 脆 ⁴ 、催 ¹ 。ts'un/cun : 寸 ¹ 。ts'ó/cuo : 搓 ¹ 、措 ⁴ 。
s (s)	sa/sa : 撒 ¹ 。sê/se : 澀 ⁴ 、嗇 ⁴ 。sou/sou : 漱 ⁴ 、搜 ¹ 。su/su : 素 ⁴ 、肅 ⁴ 。sui/sui : 碎 ⁴ 、歲 ⁴ 。sun/sun : 損 ³ 、孫 ¹ 。so/suo : 唆 ¹ 、鑠 ³ 、索 ² 、杪 ¹ 、鎖 ³ 。
ss (s)	ss ũ/si : 四、死 ³ 、似 ⁴ 、寺 ¹ 、嗣 ⁴ 。

『精解』は1227字にローマ字表記をつけた。そのうち重複するものはわずか9字だけである。現代漢語拼音と比較し、拼音表記、誤植、声調などに相違がある音節字は45個ある。以下に詳細について述べる。

(1) ローマ字表記の問題

表記の問題に関わるものは19個ある。

例えば、湊 tsou⁴ (zòu) / còu¹、石 tang¹ (dāng) / dàn、脈 mo⁴ (mò) / mài、圃 pu³ (bǔ) / pǔ、百 po² (bò) / bǎi、慳 chien¹ (jiān) / qiān、嘎 ka¹ (gā) / kā、殼 kou⁴ (guò) / kuò、沫 mi⁴ (mì) / mò、叨 t'ao¹ (tāo) / dāo、廁 ss ũ⁴ (sì) / cè、抄 sa¹ (sā) / shā、聘 p'ing⁴ (pīng) / pīn、洽 hsia⁴ (xià) / qià、鍋 kun¹ (gūn/guō)、鼠 shn³ (shn³) / shǔ、醜 yeu⁴ (yeu⁴) / yàn、午 hu⁴ (hu⁴) / wǔ、蜘蛛 chu¹ / (zhu¹) / zhī。

《現代漢語詞典》第5版によると「湊、嘎、圃、慳、叨」はそれぞれ cou⁴、ka¹、pu³、qian¹、dao¹と読むことになっている。例えば、「嘎」は「gā」の音を有するが、『官話指南』では「嘎啡」という語に使われていて、ここでは「kā」と読むべきである。これらは有気音と無気音を混同し表記を間違えたと考えられる。「石、聘」はそれぞれ dāng、pīng と読み、前後鼻音の問題である。「湊、脈」は多音字であり、『官話指南』における用例に従って判断する必要がある。例えば、『官話指南』には「湊」²の例文を見ると、zou⁴という発音ではなく、「瞧門脈」の「脈」は「mò」とは読まず、

⁽¹⁾ 斜線の前は『精解』のローマ字表記、括弧内はローマ字表記に対応している現代漢語拼音、斜線の後項は『精解』正解の現代漢語拼音である。

⁽²⁾ 他若是，果然真湊不出那五十兩銀子來，那還倒情有可原。(2-27)

「mài」と読むべきである。遼東半島の丹東では「吐沫」 「tù mo」を「tu⁴ miè」と読む⁽¹⁾。著者木全徳太郎は13歳から遼東半島の旅順にて中国語を学習しているため、この「沫(mi⁴)」は地方方言[mie]の影響を受けた可能性がある。

また、現代漢語の「鼠(shǔ)」、「醜(yàn)」、「午(wǔ)」、「蜘(zhī)」は『精解』では「鼠(shn³/shn³)」、「醜(yeu⁴/yeu⁴)」、「午(hu⁴/hu⁴)」、「蜘(chu¹/zhu¹)」と表記したが、『精解』の誤植である。

(2) 声調の問題

声調を間違えたものは26個ある。

例えば、況kuang¹/kuàng、寸/ts'un¹/cùn、掇/to⁴/duō、横hēng/héng、識shih⁴/shí、咧lieh²/liē、曰yüeh⁴/yuē、擻sai⁴/sāi、錘ch'a²/chā、芋yü²/yü、噴p'ên⁴/pēn、丫ya³/yā、暈/yün⁴/yūn、掖yeh⁴/yē、粳ching⁴/jīng、匙shih²/shi、袂chia¹/jiá、稔shu²/shú、攪/huang³/huàng、囉lo²/luō、唆so³/suō、妨/fang⁴/fáng、擁yung³/yōng、泊/po⁴/pō、證chēng¹/zhèng、蠅ying¹/yīng。

『精解』の表記は1字単位を基本としている。そのために、2音節語において轻声で発音するべきところをもととの声調、違った声調を表記した例がある。例えば、鑰匙(yào shi)、蒼蠅(cāng ying)など。また「丫、暈、擁、載」などは『官話指南』では「丫頭、頭暈眼花、擁擠、載在條約」の表現に使われており、その声調は「丫¹、暈¹、擁¹、載³」である。

以上、『精解』は『自邇集』のローマ字表記を参考にしているが、それは古い音である「io」、「üo」の韻母を削除した。『精解』のローマ字表記は現代音にさらに一步接近したと言えよう。

6.6 三書注音の学習補助価値

6.6.1 注音の学習補助価値

本章では『總譯』、『自修書』、『精解』に付した仮名表記、ローマ字表記の表記特徴を解明し、それぞれの音声面での補助価値を考察した。『總譯』には音声表記はないが、その注釈で声調の説明を行っていることから、発音の重要性は意識していたと思われる。本章は、『自修書』と『精解』の表記における両書の特徴の分析を通して、『官話指南』に対する補助価値、および『官話指南』の音声説明との関係について以下の結論を導き出した。

(1) 『自修書』

『自修書』は片仮名で1735字表記した。明治時代の仮名表記変遷により、『自修書』の仮名表記は『言語集』を参考にした箇所があることが明白になった。『言語集』では送気音について言及されておらず、『自修書』「凡例」にも触れていないが、『自修書』の本文に黒丸で送気音を表し音声表記の精密化を追求した。また、『自修書』における仮名表記の分析から見ると、『自修書』の音声は遼寧省の地方方言の影響を受けた現象があることがわかった。『官話指南』「凡例」で言及している四声、鼻音韻尾、重念、送気音などの項目は、『自修書』ではそれらが全て本文にあらわれてい

⁽¹⁾ 筆者は遼寧省丹東の出身であり、故郷ではこのように発音している。

る。これは恐らく、著者飯河道雄は『官話指南』「凡例」が提示した音声説明は本文に表示がないという不足を意識し、その上で「捲舌音」も加えた。『自修書』は『官話指南』の音声进行学习する際の補助教科書としての役割が高まったことを意味している。

(2) 『精解』

『精解』は各章で挙げた新出字 1227 個にウェード氏のローマ字表記で表記している。重複する漢字は極めて少ない。ローマ字表記の9割以上はウェード氏のローマ字表記と同じであるが、声調、誤植、ローマ字表記に関わる問題を持っている音節字はわずか45個あり、『官話指南』の用例に十分な判断がなされていないためである。『精解』は『自邇集』の音韻系統を参考にしたが、その旧音の「io」、「üo」を削除した。つまり当時はこのような旧音はすでに使用されていなかった可能性がある。『精解』は『官話指南』が提示した「重念」については言及していないが、四声、有気音、鼻音韻尾、撮口呼などの現象はすべて見て取れる。しかも、『精解』のローマ字表記は地方方言の影響を受けた『自修書』と異なり、より純粋な北京官話を表している。要するに、『精解』は『官話指南』を学習する際の補助教科書として、その音声表記の正確性、通用性、わかりやすさから、最も良い学習補助教科書であると言えよう。

6.6.2 明治期中国語教育における学習補助教科書の位置付け

本論文の第四、五章では『總譯』、『自修書』、『精解』の翻訳、注釈の位置づけを論じたが、ここでは音声面についてまとめたい。

明治時期では、仮名表記、ローマ字表記を有する教科書は数多いが、学習補助教科書の中ではそれほど多くない。木全徳太郎が著した『支那語教科書総訳』（1922）は初めてローマ字表記を用いた学習補助教科書である。その底本は岡本文正が著した『支那語教科書』（1904）である。2番目は『官話急就篇』（1904）から派生した『急就篇を基礎とせる支那語独習』である。しかも、同書は初めて仮名表記、ローマ字表記の両方で著した学習補助教科書である。3番目は飯河道雄が著した『自修書』（1924）であり、仮名表記を付している。宮島大八が著した『急就篇』（1933）から派生した『羅馬字急就篇』（1935）は4番目であり、ローマ字表記を付している。『急就篇発音』（1935）は同じく『急就篇』（1933）から派生し、仮名表記とローマ字表記の両方を記した5番目の学習補助教科書である。6番目は木全徳太郎が著した『精解』（1939）である。『自修書』と『精解』はともに近代中国語教育史上重要な音声表記を記した教科書である。

また、総合的に判断し、『總譯』、『自修書』、『精解』が明治時代の中国語学習補助教科書史上にどのように位置づけられるか、ここで論じたい。

明治時代では、『語言自邇集』、『官話指南』、『滬語便商』、『北京官話談論新篇』、『清国時文輯要』、『華語跬歩』、『官話急就篇』、『支那語教科書』、『北京官話土商叢談便覧』、『最新官話談論篇』などの10種の教科書シリーズがある。「明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書総表」により、明治時期において最初の北京官話教科書である『語言自邇集』から派生した各種の改訂版は『新校語言自邇集 散語の部』（1880）、『言語集』（1879-1880）、『自邇集平仄篇 四聲聯珠』（1887）

などがある。その中には『語言自邇集』の改訂版である『言語集』から、すでに音声、注釈、翻訳の多方面からの学習補助教科書が現れた。第一種は『言語集』（1879-1880）から派生した『総訳亜細亜言語集 支那官話部』で、日訳版である。第二種は『官話指南』（1882）から派生したフランス語対訳版『Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du language Mandarin』（1887）、英訳版『THE GUIDE TO KUAN HUA』（1990）、フランス語注釈版『BOUSSOLE DU LANGAGE MANDARIN』日訳注釈版『總譯』（1905）、日訳注釈及仮名表記版『自修書』、日訳注釈及ローマ字表記版『精解』、および上海話版、粵語版など 10 版の学習補助教科書と初版の改訂版である。第三種は、『滬語便商』（1892）から派生した日訳版『滬語便商意解』で、第四種は、『北京官話談論新篇』（1898）から派生した英訳本『CHATS IN CHINESE』（1901）、日訳注釈版『談論新篇総訳』（1933）で、第五種は、『清国時文輯要』（1902）から派生した日訳版『時文輯要総訳：清国時文』（1902）、第六種は、『華語跬歩』（1903）から派生した二つの日訳版『華語跬歩総訳』（1904）と『華語跬歩総訳』（1910）となる。第 7 種には、『官話急就篇』（1904）から派生した日訳版『官話急就篇総訳』（1916）、日訳版『官話急就篇詳訳』（1917）、および日訳注釈、ローマ字表記、練習問題を付けた『急就篇を基礎とせる支那語独習』となる。第 8 種には『支那語教科書』（1904）から派生した日訳注釈とローマ字表記をつけた『支那語教科書總譯』（1922）である。第 9 種は『北京官話士商叢談便覽』から派生した日訳版『東語士商叢談便覽』（1905）でなる。第 10 種には、1921 年に出版した『最新官話談論篇』から派生した日訳版『最新官話談論篇』（1922）である。

上述の整理からみると、明治時代においては日訳注釈の学習補助教科書を主としている。『總譯』と『自修書』は共に 2 番目の日訳注釈版と日訳注釈、仮名表記を有している学習補助教科書である。『精解』と異なり、『官話急就篇』から派生した『急就篇を基礎とせる支那語独習』（1924）は章末に「練習問題」、「應用問題」を加えている。例えば、「左の華語を邦語に譯し重念を附せ。我來了 他沒走 你買了麼 我們不要」など。要するに、『精解』は最初の日訳注釈、ローマ字表記、「例文練習」が付されている学習補助教科書であり、当時、総合的な編纂理念を有する率先てきな存在となるに違いない。また、『官話指南』は学習補助教科書の中に唯一の英訳版、フランス語対訳版、上海語訳版、広東語訳版などの多言語に対応可能な北京官話教科書である。『總譯』、『自修書』、『精解』はその体裁から日本の近代中国語教育史における代表的な学習補助教科書であると言える。

中編結論

中編は『總譯』、『自修書』、『精解』の翻訳、注音、音声面の側面から各学習補助教科書の編纂特徴、『官話指南』の学習に対する補助価値について考察した。『官話指南』は日本人が初めて編纂した北京官話教科書とし、そこから派生した学習補助教科書は日本の中国語教育史上の位置付けが判明した。具体的には次の傾向が見られる。

(1) 3書の翻訳特徴、文体の考察を通して、『總譯』の訳文は文言一致体という傾向が見られ、言葉を一対一対に置き換える翻訳方法を用い、当時の学習者が『總譯』のすべての語彙を理解するのに役立った。『自修書』の翻訳は『總譯』に大いに継承したが、著者飯河道雄による創作の部分の翻訳文体が直訳というより、意識に類似し、『總譯』と『自修書』の間には影響関係が見られた。大正時期に使用した文体として、『自修書』の学習補助価値は『總譯』より弱いと考えられる。『總譯』や『自修書』に異なり、『精解』の翻訳文体は意識になった。3書の中には翻訳内容、難易度、誤訳、使用対象など全体から見ると、『精解』は『官話指南』に対する翻訳面の学習補助が最も良いと言えよう。

(2) 『總譯』と『精解』は簡潔明瞭な表現で注釈内容をまとめたが、北京特有の事物、地名、役所用語などについては詳細に説明するだけでなく、多くの北京語特有の語彙に解釈を加えた。両書の注釈はともに『官話指南』の要点あるいは難点をおさえていると評価できる。しかしながら、『總譯』においていくつか部分の注釈に誤謬があり、中国語による注釈も見られるが、解釈は中国語として通じない例もある。『自修書』の注釈は北京語特有の語彙を対象とすることが比較的少ないが、注釈対象語句の類義語を挙げるのみならず、例文も作成し、ある種のものには例文に翻訳を加え、多方面から注釈対象の語句の意味を読者に理解させる工夫が見られる。また、『自修書』は『總譯』の注釈のすぐれた点を活かしつつ、不十分だった中国語での釈義、難解な釈義を修正したが、『總譯』の誤謬を修正していない。『總譯』と『自修書』の誤謬はいずれも『官話指南』の補助価値に大きく影響する。『精解』の注釈に使用した日本語は『總譯』と『自修書』より平易で理解しやすく、さらに簡潔明瞭であるし、その上、『總譯』、『自修書』の注釈にある誤謬を基本的に修正した。『精解』の注釈方式は『自修書』と類似していて、類義語、例文作成が含まれ、自身が言及した「書外應用」の編纂目的と関係があり、語学学習の目標は「実際的使用」にあるという理念がうかがえる。総合的に判断すると、3書の注釈数量、内容の正確性、理解度から評価する場合、『精解』の注釈は『官話指南』を学習する際にその補助価値が最大限に生かすことができる。

(3) 『自修書』、『精解』の音声表記の考察を通して、『自修書』の仮名表記は『言語集』を参考にすることが明白になった。『精解』の音声表記は9割以上ウェード氏のローマ字表記と同じであるが、『自邇集』の旧音の「io」、「üo」を削除し、その旧音は当時すでに使用されていなかった可能性がある。『官話指南』の用例の理解に欠けている箇所があるため、声調ミス、誤植、ローマ字など誤訳問題等のある音節は45例ある。遼寧省の地方方言の影響を受けた『自修書』とは異なり、『精解』のローマ字表記はより純粋な北京官話を表している。両書において音声表記の正確性、通

用性、分かりやすさなどの面で見ると、『精解』は『官話指南』に対する補助価値が最も優れていると言えよう。

(4) 『自修書』と『精解』は『官話指南』「凡例」に提示した四声、鼻音韻尾、有気音などの音声については本文に表示がないという不足点を補なった。『自修書』は『官話指南』「凡例」が提示した項目に「捲舌音」を加えた。

(5) 唐話教科書には「重念」という語は見られず、明治以降の学者が中国語の「重念」を重視し始めたと考えられる。『語言自邇集 散語問答』(1877) から打田重治編『急就篇を基礎とせる支那語獨習』(1924) までの明治時代の教科書において“重音”を「重念」と呼び、通用語となった。また、明治の教科書で『官話指南』以外はいずれも「|印」で重念を表し、『官話指南』は「字之右邊畫一横」(-印) で「重念」を表した。

(6) 『官話指南』(1882) は初めて「輕重念」の概念を導入し、既に使用されている「重念」以外に「輕念」という用語も含まれる。

(7) 仮名表記変遷から、最初に仮名表記による表記を採用した北京官話教科書『亜細亞言語集 支那官話部』から鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』の間に『日漢英語言合璧』は符号を使い有気音を表記し、および“兒化”の表記を施した唯一の教科書である。

(8) 明治時代においては、10種の学習補助教科書シリーズがあり、『官話指南』だけが唯一3度も出版された日訳注釈版の学習補助教科書である。『總譯』と『自修書』は共に2番目の日訳注釈版と日訳注釈、仮名表記を有している学習補助教科書である。『精解』は最初の日訳注釈、ローマ字表記、「例文練習」を加えた学習補助教科書である。『總譯』、『自修書』、『精解』はその体裁から日本の明治時代における代表的な学習補助教科書であると言える。しかも、『官話指南』は学習補助教科書の中では唯一の英訳版、フランス語対訳版、上海語訳版、広東語訳版などの多言語対応を有している北京官話教科書として、『官話指南』が極めて強い影響力を持っていた教科書であることをとうかがい知ることができる。

下編 『官話指南』の著者及び鄭永邦の
編纂によるその他北京官話教科書の研究

第七章『官話指南』の著者と編纂過程の研究

7.1 呉啓太の再検討

呉啓太は 37 歳で逝去したために、残存の資料はそれほど多くはないが、何盛三の『北京官話文法』(1928)、東亜同文会『対支回顧録』下巻(1936)、『中国語学新辞典』「官話指南」(1969: 255 尾崎実)、宮田安『唐通事家系論攷』(1979)、楊保筠主编《华侨华人百科全书 人物卷》(2000: 538) 氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』(2012)、楊鉄錚の博論『明治期中国語教育における伝統継承と近代化: 金國璞、張廷彦と『官話指南』を中心として』(2017)、長崎博物館所蔵渡辺文庫未刊行資料『史料摘録』(著述年不明)の 8 点が発見された。呉啓太に関する最初の著作は『北京官話文法』(1928)である。『対支回顧録』下巻(1936)の叙述は最も詳細で、生家の状況、ベルギー留学、外務省での勤務などにも触れている。『中国語学新辞典』の「官話指南」(1969: 255 尾崎実)の項目、《华侨华人百科全书 人物卷》(2000: 538)、氷野善寛(2012: 39)などの呉啓太に対する紹介は『対支回顧録』下巻(1936)とほぼ同じである。『史料摘録』(著述年不明)は呉啓太の家系を紹介し、それを基礎に『唐通事家系論攷』(1979: 785)は呉家の世代譜系をさらに研究した。楊鉄錚(2017)は呉啓太を中心に、呉家の墓地の構造図を作成した上で、呉系の三代目から代々唐通事をしていたことを指摘した。

以下、先行研究の記載を中心に呉啓太の生涯、語学学習の経歴、職歴などをまとめる。

呉啓太は安政 5 年(1858) 8 月 25 日生まれ、同族雄太郎の子で、呉碩に養われ家を継ぎ、呉大五郎、呉仙壽の兄とし、呉氏家系の第九代であった。明治 11 年(1878) 通弁見習として北京に派遣され、明治 14 年(1881) に外務書記生に任じ、北京公使館に在勤を命ぜられた。明治 18 年(1885) に官を辞し、官費留学生となり、その後、ベルギーブラッセル大学に留学し、カンヂター^①の学位を得て帰国した。明治 25 年(1892) 外務省試補となり、陸奥宗光外相の秘書官に任じられ、日清戦争の前後にかけて貢献する所多く、功に依り勲六等単光旭日章及び金圓を賜う。明治 28 年(1895) 11 月 21 日、病死、享年三十八。長崎聖福寺の後山に葬られる。外務秘書官正七位勲六等を勅授。

また、楊鉄錚(2017: 112)によると、呉啓太の墓の碑文には「安政五年戊午八月二十五生 明治廿八年乙未十一月廿一日卒」と刻まれているが、『対支回顧録』の歿年月日は明治 28 年(1895) 11 月 22 日となっている。記録に相違があることについては、歿年月日は碑文によるのが正しいと思う。そして、楊鉄錚(2017: 116)は国立国会図書館蔵の明治 15 年(1882)に上海美華書館から出版された『官話指南』を考察し、その奥付は「長崎県士族 呉啓太 長崎県下長崎区爐粕町十九番戸、東京府士族 鄭永邦 東京下谷区西黒門町二番地」と表示されていることから、「呉啓太は明治 11 年(1878)の北京赴任までに長崎にいったと考えられる。」と指摘した。本研究は内田慶市、氷野善寛(2016)に収録されている「影印本文」である明治 15 年(1882)に楊龍太郎が出版人とし

^① ベルギーでは、First cycle(学士)を卒業した後、取った学位はKandidaatといい、その発音は「カンヂター」と類似しているので、このカンヂターは学士学位のことを指すと思われる。

ている版本に基づく。この版本は前述の上海美華書館の版本と異なり、「長崎県下長崎区爐粕町十九番戸」と「東京下谷区西黒門町二番地」と記されていない。また、下述の鄭永邦の分析の通り、北京に赴任するまでに東京に移籍したため、『官話指南』の奥付に記されている「長崎縣士族吳啟太、東京府士族鄭永邦」はおそらく戸籍のことを指す可能性が高い。

先行研究から吳啓太が1878年北京に派遣されたことが分かるが、それ以前に中国語を学習した記録は全く見当たらない。しかしながら、『官話指南』は1882年に出版されている。もし北京に発つ前に中国語学習歴が全くなかったということであれば、わずかに3年余りでこのような「国際的名著」⁽¹⁾を上梓できるものかと疑問を抱く。このため、本節では吳啓太が北京公使館に派遣される前に、中国語学習歴があったのか、あるいは漢語学校で勉強したことがあったのか、について考察する。また、ベリギーのブラッセル大学での学習状況についても先行研究では詳細な紹介がなく、これを補足したい。さらに、外務省外交資料館で吳啓太がベリギー留学した時に外務省に提出した履歴書を発見した。この履歴書について目下の先行研究では言及されていない。本節は吳啓太の履歴書の紹介、中国語学習、ブラッセル大学での学習状況、この3方面から先行研究で触れられていない吳啓太の新しい経歴を考察する。

7.1.1 吳啓太の履歴書

1885年11月の「吳啓太外三名及松方正作白国留学」⁽²⁾という資料には吳啓太が官費留学生として外務省に提出した履歴書(図1)が添付されている。

この履歴書によると、吳啓太は長崎県士族で、旧族籍は肥前長崎である。実父は吳雄太郎、実母は吳喜美である。養父と養母は吳碩⁽³⁾と吳契娜である。しかも履歴書を提出した時点では実父吳雄太郎と養母吳契娜がすでに逝去したことがわかる。

その履歴書から、通弁見習からベリギーの官費留学生の申請までの経歴は、先行研究と全く同じである。また、在勤期間の年俸は明治14年(1881)北京公使館在勤時に銀貨八百円、明治16年(1883)銀貨九百円、明治17年(1884)に銀貨千百円となっている。

(1) 六角恒廣1994、40頁。

(2) 外務省外交史料館所蔵。件名：『外務省留学生関係雑件(欧州之部)』、請求番号：6-1-7-6_2

(3) 『対支回顧録』下巻(1936：95)によると、吳系の始祖は吳榮宗であり、吳碩は吳系の第八代とし、「領事館の生字引」と称された。子は啓太、大五郎、仙壽となる。

図1 ベリギーの官費留学生として提出した履歴書

明治十一年	五月四日	通辨見習申付候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十月十八日	在外務省書記生	長崎縣士族	吳 雄太郎	肥前長崎	吳 啓太
同	同	在清國北京公使館在勤申付年俸銀貫六百圓被下候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十六年	同	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十月十九日	自今年俸銀貫九百圓被下候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十七年	同	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	七月廿八日	年俸銀貫千五百圓被下候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十八年	同	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	九月二日	御用省之帰朝申付候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十月五日	帰朝	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
同	十月十六日	官費留学生申付候事	長崎縣士族	吳 喜美	肥前長崎	吳 啓太
但シ自其我國ニ留學可致事			外務省			

7.1.2 外務省漢語学所での学習

許海華『幕末明治期における長崎唐通事の史的研究』（2012：133）は以下のように述べている。

鄭永邦、吳啓太ら唐通事家子弟の語学習得という、鄭永寧、吳碩、何礼之等幕末最後の唐通事場合は決して一様ではない。彼らは幕末の長崎に生まれ、幼少より父兄について語学を習ったこともあったろうが、慶応3年(1867)7月の長崎地役人改革、さらに慶応4年(1868)1月に徳川幕府の長崎支配の崩壊に伴って唐通事が制度上に消失し、近世以来唐通事家特有の語学教育の基盤を失なったが、明治以降、外務省漢語学所の設立や留学など、語学習得において新たな環境や条件を得たのである。

許海華の論述から吳啓太は唐通事の後裔として、幼少より父兄のもとで漢語を学習していたと推測できる。また、許海華(2012)は外務省に在任した唐通事及び彼らの子弟は、計23名いたという。唐通事の子弟は鄭永昌、鄭永邦、吳啓太、吳大五郎、高尾恭治、穎川高清の6名のうち4名が東京

外国語学校漢語学科の出身である⁽¹⁾。六角恒廣(1988:74)は、東京外国語学校のロシア語、漢語学科の進路は、「もっぱら通弁のための教育であった。」と指摘した。そのために、北京公使館の通弁見習は東京外国語学校の学生から選ばれるのが普通だったと考えられるが、なぜ東京外国語学校に在籍していない呉啓太が通弁見習に選出され、清国北京公使に派遣されたのだろうか。この点については、呉啓太は確かに東京外国語学校での学習記録はないが、呉啓太は外務省漢語学所で学習した可能性はないだろうか。当時の外務省漢語学所の生徒募集条件は以下の通りである。

漢語稽古所出来次第近日開学ノ事

別紙 但旧年諸官省へ達ス 今般当省ニ於テ漢語通弁ノ稽古取開キ候ニ付年齢十一二歳ヨリ十五六歳マテニテ可也手跡モ出来且学庸論孟ノ素読出来候テ有志ノ者有之候ハハ子弟厄介ノ差別ナク当人ヨリ直ニ当省へ願出候様御申達可被成候此段申達候也

庚午十月二十四日 外務省

(『外務省日誌』明治四年辛未第一号 自正月元日至十日所載) (『外務省報附録』所収「外務省管制沿革」明治四年辛未正月の頃) (『外務省日誌』明治4年辛未第一号(自正月元日至十日所載))

この生徒募集の文書から、11、2歳から15、6歳まで《大学》《中庸》《论语》《孟子》を素読できる者を募集要項としている。呉啓太はこの条件を満たしていたと考えられる。

なぜなら、六角恒廣「唐通事と唐話教育」(1981:98-99)によると、唐通事の家生まれた子弟は幼児の頃から父親から唐話の訓練を受けていた。まず発音から始め、《三字经》、《大学》、《论语》、《孟子》、《诗经》などを使用した。これらの書籍を唐音で読み、発音を習得していく⁽²⁾。発音の習得後、『二才子』、『医生摘要』、『訳家必備』、『養兒子』、『今古奇観』、『三国志』、『水滸傳』などの書籍を学習し、単語、フレーズ、会話の順に進んでいた。呉啓太は長崎唐通事の末裔として、上述の書籍も習ったことがあると考えられる。また、東京外国語学校漢語学科の母体としての外務省の漢語学所は「中国(当時の清国)との通信・通商のうえで必要とする通弁を養成する」⁽³⁾のため、明治4年(1871)2月には開学の運びとなる。外務省は9名の教員を任命し、そのうち8名は長崎唐通事である。鄭永寧⁽⁴⁾は漢語学科の責任者として、潁川重寛⁽⁵⁾と一緒に生徒の募集にも参

⁽¹⁾ 『東京外国語学校官員並生徒一覽(明治7年3月)』によると鄭永昌、鄭永邦、潁川高濂はそれぞれ漢語学の「下等第一級」、「下等第三級」、「上等第六級」である。呉大五郎は明治11年(1878)に東京外国語学校漢語学科に入學し、明治13年(1880)2月に退學し、7月中旬北京に赴任し、私費留學で北京官話の學習を始めた。

⁽²⁾ 注目すべきは、これらの書籍は発音練習に用いるのみで、その意味を理解する必要はなかった。

⁽³⁾ 六角恒廣「北京官話教育の開始」1984、42頁。

⁽⁴⁾ 『対支回顧録』下卷(1936:32)によると、鄭系の始祖は鄭宗明であり、幕府に至って大通事鄭幹輔を出して大いに名家を上げた。鄭永寧は鄭幹輔の養子であり、子は永慶、永昌、永邦、女子となる。実父は呉用藏で、呉碩の弟であり、呉用藏の六子、呉泰藏、高尾和三郎、島田彌三次、呉碩、鄭永寧、呉来安は当時「呉家の六駿」と称されている。

⁽⁵⁾ 六角恒廣『漢語師家伝：中国語教育の先人たち』(1999)により、潁川重寛は天保2年(1831)、長崎本谷川町に生まれた。旧族籍は中国福建省漳州龍溪県である。長崎唐通事の後裔であり、鄭永寧と一緒に漢語学所を創立した。

与している。明治3年(1870)10月24日、生徒の応募文書は外務省に提出し、集められた生徒はおよそ5、60名であり、唐通事の子弟が多く含まれていた⁽¹⁾。

このような唐通事の幼少教育を鑑みると、漢語学所の開校時点に呉啓太は13歳であり、《大学》《论语》《孟子》などの発音にも通じていた。さらに、伯父の鄭永寧は漢語学所の督長を務め、その次男の鄭永昌も漢語学所に入学しているため、呉啓太は他の者よりも容易に漢語学所生徒募集の情報を得られたのだろう。このため、呉啓太は外務省の漢語学所で南京官話を学んだ可能性があるかと推測できる。また、父呉碩、伯父の鄭永寧はともに領事館の書記生であり、呉啓太も相当の中国語の能力をもっていたと考えられる。そのために、彼は北京公使館に派遣されたのであろう。

7.1.3 ブラッセル大学での学習

呉啓太は明治19年(1886)2月からベリギーブリュクセル府の私立大学校であるブラッセル大学に留学した。『外務省留学生関係雑件(欧州之部)』の「呉啓太外三名及松方正作白国留学」はブラッセル大学での修業場所、受学教師、修業科目及び授業料などの記録が残っている。その記録によると、呉啓太の修学場所はブラッセル大学とゼームス私宅の2つである。ブラッセル大学の在学期間に履修した科目は「理論学」、「道義哲学」、「白耳義政史」、「近世政史」、「中古及近古政史」である。ゼームス氏の私宅では「拉丁語」、「英語」を学習した。それぞれの教師は哲学がゼ・デベルケン、歴史がエル・ワンデルキンデルとエム・フィリップソン、拉丁語及英語がエ・ゼームスである。以上の学習履歴から、呉啓太は少なくともラテン語、英語、中国語を精通しているとわかった。

また、外務省の資料「松方正作外三名留学生延期ノ件」⁽²⁾、「呉啓太留学延期請願ノ件」⁽³⁾によると、明治23年(1890)、ブラッセル大学在学中にインフルエンザおよび脳病を患った。病氣療養のため3月の試験を受けなかった。同年7月10日、「留学延期願」を上申し、10月3日に帰国の許可をもらった。明治25年(1892)2月、カンヂターの学位を得て、6月17日に帰国の命令を受けた。8月頃、オクシス号に乗って帰国した。『対支回顧録』下巻によると、呉啓太は明治25年(1892)外務省試補となり、陸奥宗光外相の秘書官に任じられた。これ以降のことについては先行研究にも外交資料にも詳しい記述は見られない。陸奥宗光外相は明治27年(1894)から当時のアメリカ、ドイツ、イタリア、イギリスなどの15国との不平等条約を立て続けに改正した。そして、その秘書官であった呉啓太は数種類もの言語に精通していたため、陸奥宗光外相の条約改正にある程度関わっていたと推測される。

7.2 鄭永邦の再検討

鄭永邦は明治13年(1880)以来、各種の役職を歴任し、「日支外交の活字引」⁽⁴⁾と称された。鄭

かつて漢語学所、東京外国語学校などの学校に漢語教師を務めた。明治24年(1891)、病を以て逝き、享年六十一。

(1) 六角恒廣1984、42頁。

(2) 外務省外交資料館所蔵、件名：『外務省留学生関係雑件(欧州之部)』。請求番号：6-1-7-6_2

(3) 外務省外交資料館所蔵、件名：『外務省留学生関係雑件(欧州之部)』。請求番号：6-1-7-6_2

(4) 『対支回顧録』下巻1936、37頁。

永邦についての記録は 14 点が見つかった。最も早い著作は長崎県教育会編纂『大礼記念長崎県人物伝』(1919) であるが、東亜同文会編纂『対支回顧録』下巻(1936) は鄭永邦の生涯について、生年月日、生家所在、東京外国語学校での学業、清国北京公使館への派遣、外交官としての活躍、病死と埋葬地など最も詳細に記述している。その後、出版された鄭永邦に関する著作は黒竜会『東亜先覚志士記伝』(1936)、平凡社『大人名事典』(1953)、国务院外事辦公室編著《日本人物辞典》(1959)、尾崎実『中国語学新辞典』「官話指南」(1969)、中国社会科学院《近代来华外国人名辞典》(1981)、日外アソシエーツ『人物レファレンス事典 郷土人物編』(2008)、中村義など『近代日中関係史人名辞典』(2010)、氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』(2012) などがあり、『対支回顧録』下巻とほぼ同じ内容で、新たな記述がない。そのうち『大人名事典』(1953) と氷野(2012) は『東亜先覚志士記伝』、《近代来华外国人名辞典》などを参照した。また、『唐通事家系論攷』は『史料摘録』(前述) を参考にし、鄭氏家系の始祖である鄭宗明から、鄭永慶、鄭永昌、鄭永邦に至るまでを言及した。野中正孝『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』(2008) は鄭永邦が漢語学科を中退してからの事を簡単に紹介した上で、更に鄭永邦が外交官として重要な任務を果たしながら、日本の中国語教育にも大きく貢献し、「南に御幡、北の鄭」と評されたことを記した。前述の楊鉄錚(2017) は鄭家の家族墓地、鄭永邦の著作及び鄭永邦の子である鄭審一を紹介した上で、鄭永邦が鄭永寧の三男であるとし、他の研究とは異なる見解を示した。以下は先行研究の記載内容に基づき、鄭永邦の生涯、語学学習歴、職歴をまとめる。

鄭永邦は文久 2 年(1862) 12 月 28 日、長崎東古川町に生まれ、又は鄭邦二郎といった。鄭家系の始祖は鄭宗明であり、平戸生まれの鄭成功の子孫である。父鄭永寧は鄭家の在日八世であり、鄭家に同じ唐通事の家系である呉系から養子に来て家督を相続し、唐通事となり、「非常に格の高い大通事」⁽¹⁾ で、一等訳官である。一番上の兄である鄭永慶は「可否茶館」を経営し、二番目の兄永昌は鄭永邦と同じく外交官として活躍し、のち鄭家を相続した。妹の名は虎、『官話指南』の出版人である楊龍太郎に嫁いだ。鄭永邦は東京外国語学校を卒業し、明治 13 年(1880) に通弁見習として、清国北京公使に派遣された。北京会談の際、父鄭永寧に代わって、伊藤博文の通訳を務めた。その後、公使館書記生に昇任し、清国北京に在勤した。明治 20 年(1887) 帰国し、のち再び公使館書記生に任じられて、朝鮮京城に赴任した。明治 23 年(1890) 帰国を命じられたが、その後、再び朝鮮に赴任した。日清戦争には兄永昌と共に軍に従って出征した。日清講和談判には、「中田敬義、檜原陳政の諸先輩に伍して譯述の任」⁽²⁾ に当たった。明治 29 年(1896) に清国在勤を命ぜられ北京に赴任した。北清事変に際しては清国側との交渉事務に当たった。その後大使館二等書記生に任じられ、イギリス大使館に赴任した。明治 42 年(1909) 帰国し、同年清国に赴任した。清国載濤、載洵両皇族来日に当たり接待員となる。その後、再び北京公使館に戻った。大正 2 年(1913) 大使館一等書記官に昇進と同時に退官し、その後中華民国政府の顧問に聘せられ、袁世凱に重用された。大正 5 年(1916)、病気を患い、8 月 20 日、東京で永眠し、享年 54 歳であった。上野谷中の

⁽¹⁾ 古市友子 2012、13 頁。

⁽²⁾ 『対支回顧録』下巻 1936、38 頁。

墓地に葬る。生前の勲功により、従五位勲四等を授けられた。

先行研究では鄭永邦が通弁見習として北京に派遣された後の業績は詳細に記されている。しかし、東京外国語学校に入学し漢語学習を始めた時期については紹介されていない。かつて支那語研究舎で漢語教学に従事していたこともあるが、先行研究では記述がないが、支那語研究舎の紹介の時には、それが言及されている。また、外務省外交史料館で鄭永邦が大正5年8月に勲章授与時に、外務省が鄭永邦の功績、業績を紹介するために作成した「任職履歴書」が見つかった。この履歴書について先行研究では全く触れられていない。この履歴書には鄭永邦が在職中に授与した全ての勲章と在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録の経歴が記載されている。本節は先行研究で言及されなかった、あるいは詳細に紹介されなかった東京外国語学校の入学時期、履歴書、在職中に授与した勲章、在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録、中国語教育などの5点について考察し、鄭永邦に関する記述を補足する。

7.2.1 東京外国語学校の入学時期

鄭永邦についてはその出生から明治13年(1880)までの経歴はそれほど詳細に研究されていない。前述の許海華(2012)により、鄭永邦は唐通事の後裔として、幼児の頃から兄鄭永昌とともに父鄭永寧の膝下で漢語教育を受けたことが推測できる。しかも、呉啓太と異なり、外務省漢語学所の生徒募集時に鄭永邦は9歳であったため募集条件を満たしていなかった。そのため鄭永邦は外務省漢語学所で勉強したことがなかっただろう。また、鄭永邦は東京外国語学校漢語学科の出身であることが多く先行研究に述べられているが、いつ入学したかについては紹介していない。六角恒廣(1988:65-74)により、東京外国語学校は明治6年(1873)11月4日に開学し、修業年限4年間、前半の2年間が下等、後半の2年間が上等である。明治7年(1874)3月に漢語学科の生徒はすでに30名に達し、『東京外国語学校官員並生徒一覧』の名簿の中に鄭永邦の名前も見える。そこから鄭永邦は少なくとも明治7年(1874)3月の時期に既に在学している。また、中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育-南京官話から北京官話へ」(1999:882)によると、「長崎唐通事の血筋をひく者(鄭永昌[この時二十歳]や鄭邦二郎[鄭永邦。この時十二歳]の如く東京に移籍している者もある)が多いことは一見してわかる。かれらは入学当初から相当の語学力をもっていたことである」と指摘した。さらに、『東京外国語学校官員並生徒一覧』には鄭永昌と鄭永邦の籍は東京と書かれている。2人とも長崎の出身であるが、恐らく漢語学科に入学する前に、すでに東京に移籍したと考えられる。

7.2.2 鄭永邦の履歴書

鄭永邦の生涯については先行研究がすでに詳細に紹介しているが、『叙勲裁可書・大正五年・叙勲卷三・内国人三』「正五位勲四等鄭永邦勲章加授ノ件」には明治13年4月7日から大正3年7月10日の「任職履歴書」が添付されていて、それは図2の通りである。この履歴書から見ると、先行研究に触れていない在職期間の受勲歴、在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録を

も載せている。しかも、明治16年から明治20年までは2回天津領事館に在勤したことがわかる。

図2 鄭永邦の任職履歴書

年	月	日	任職履歴	備考
明治三年	四月	七日	清國北京公使館附通譯見習中付奉	
十七年	十月	二十日	歸朝、途天津に立寄	
		二十三日	復本公使に當り、富野天津領事館に勤中付奉	
十七年	二月	十二日	旨、辭令相違依同地に在勤入	
		十三日	御用有之、去條歸朝可致事	
十七年	六月	十七日	任外務大寺屬	
		廿六日	依願免本官	
十九年	三月	廿五日	清國北京公使館在勤中付奉事	
		廿五日	任公使館書記生	
十九年	七月	十六日	孟叙年俸銀債七百圓下賜	
		十六日	但身分取換准判任奉事	
二十年	九月	廿五日	兼任領事館書記生	
		廿五日	叙判任官五等	

正五位勳四等 鄭永邦
 文久二年十二月十八日生
 族籍東京府士族

全廿五年	十月六日	神奈川縣下出張ノ年又	全
	十月五日	檢別勅物有全三摺田愛塔又	全
全廿六年	十月六日	神奈川縣下出張ノ年又	全
	四月一日	神奈川縣下出張ノ年又	全
	六月八日	檢別勅物有全三摺田愛塔又	全
	全十日	神奈川縣下出張ノ年又	全
	九月七日	往公使館書託生	全
	全日	全二枚俸	全
全廿七年	十月十日	朝鮮國仕勤ノ年又	全
	十月十日	歸朝ノ年又	全
全廿八年	一月十日	御用有之本管所所在地及山縣下、出張ノ年又	全
	三月五日	御用有之本管所所在地及山縣下、出張ノ年又	全
	張ノ年又		全
	五月廿日	清國仕勤ノ年又	全
	七月一日	朝鮮國仕勤ノ年又	全
	十月九日	檢勤七等檢者也桐葉章	全
	全日	明深洋七等事件ノ勞、所、勤七等青他	全
全廿九年	二月四日	清國仕勤ノ年又	全
	十月廿日	全二枚俸	全
	十月廿日	檢別勅物有全五摺田愛塔又	全
全三十年	三月廿日	往公使館三等通譯官	全
	九月十日	往公使館三等通譯官	全
	全日	檢高寺官七等	全
	全日	清國仕勤ノ年又	全
	十月十日	敏從七位	全

外務省
獎勵局

全	日	三月十日	清國戰講陛下來航弁接伴員被仰付	全	宮内省
全	日	四月一日	高軍官官等俸 ^々 令改正有 ^二 叙俸	全	
全	日	九月一日	清國戰講陛下來航弁接伴員被仰付	全	
全	日	十月七日	特別勳 ^々 外官百五箇因賞賜 ^々	全	外務省
全	日	四月十四日	任公使館 ^二 書記官	全	
全	日	叙高等官四等		全	
全	日	賜 ^二 叙俸		全	
全	日	清國在勤 ^々 余 ^々		全	
全	日	六月廿八日	叙勳 ^四 等瑞寶章	全	
全	日	七月廿日	叙從五位	全	
全	日	十月廿五日	特別勳 ^々 外官百五箇 ^々 賞賜 ^々	全	
全	日	五月廿五日	歸朝 ^々 余 ^々	全	
全	日	六月廿六日	任公使館 ^一 書記官	全	
全	日	叙高等官三等		全	外務省
全	日	賜 ^二 叙俸		全	
全	日	支那在勤 ^々 余 ^々		全	
全	日	依願免本官		全	
全	日	七月十日	叙正五位	全	
全	日	時音 ^々 以 ^二 叙被進		全	

7.2.3 任職受勳

上述の「任職履歴書」により、鄭永邦は在職の期間中、大小合わせて 21 回受勳している。そのうち勳章を賜ったのは 4 回である。1 回目は、明治 27 年（1894）7 月、日清戦争に兄永昌とともに

出征したこと、明治28年(1895)4月17日に下関の春帆楼での日清講和談判において中田敬義、
 檜原陳政の諸先輩と一緒に翻訳の任に当たったこと、この2件の功勳により明治28年(1895)12
 月に賞勳局が勲七等青色桐葉章及び金貳百円を授与した。2回目は、明治33年(1900)拳匪の乱時、
 「杉山書記生、檜原書記官が相次で死去したので、支那側との交渉は大小となく君が専ら衛に當た
 り、講和談判に當つては適確なる譯述振りを列國使臣の間に示した。」⁽¹⁾の戦功により、明治34年
 (1901)8月単光旭日章及び金千円を賜るが、明治35年(1902)再び金六百を賜る。3回目は、明
 治38年(1905)11月、特派全權大使小村寿太郎の隨員として北京条約並に議定書の締結に力を尽
 した殊功により、明治39年(1906)4月雙光旭日章及び金百円をを賜る。4回目は明治44年(1911)、
 勲四等瑞寶章を賜る。また、これとは別に賞金全17回が賜与された。

表1 鄭永邦在職期間の賞典

	日期	賞金
1	明治23年12月15日	格別勲勵府金貳拾五円賞典ス
2	明治24年12月24日	格別勲勵府金貳拾円賞典ス
3	明治25年12月15日	格別勲勵府金三拾円賞典ス
4	明治26年06月08日	格別勲勵府金三拾円賞典ス
5	明治30年03月25日	格別勲勵府金五拾円賞典ス
6	明治31年03月26日	格別勲勵府金八拾円賞典ス
7	明治32年03月28日	特別勲勵府金百円賞典ス
8	明治36年03月31日	特別勲勵府金貳百円賞典ス
9	明治37年03月31日	特別勲勵府金貳百三拾五円賞典ス
10	明治38年03月31日	特別勲勵府金百七拾五円賞典ス
11	明治39年03月31日	特別勲勵府金百七拾五円賞典ス
12	明治40年03月31日	特別勲勵府金百円賞典ス
13	明治41年03月31日	特別勲勵府金百五拾円賞典ス
14	明治41年12月21日	特別勲勵府金百貳拾円賞典ス
15	明治42年12月27日	特別勲勵府金百円賞典ス
16	明治43年12月27日	特別勲勵府金百五拾円賞典ス
17	大正元年12月25日	特別勲勵府金貳百五拾圓賞典ス

7.2.4 在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張記録

前述の履歴書を見ると、鄭永邦は明治23年(1890)8月帰国し、外務省に赴任した。同年9月外
 務大臣秘書官室に在勤し、明治24年(1891)大臣官房秘書課を兼ねて勤務した。在職期間に4回

⁽¹⁾ 『対支回顧録』下巻1936、38頁。

神奈川県に出張した。その後再び朝鮮に赴き、明治28年（1895）1月帰国し、同年1月と3月大本営所在地及び山口県に出張した。

表2 鄭永邦在外勤務期間中における日本帰国時の各地への出張日期と場所

日期	出張場所
明治24年10月29日	神奈川県下小田原
明治25年11月06日	神奈川県下
明治26年01月16日	神奈川県下
明治26年06月11日	神奈川県下
明治28年01月11日	大本営所在地及び山口県下
明治28年03月05日	大本営所在地及び山口県下

明治24年（1890）から明治26年（1893）までの出張については、現在考証することができない。明治28年（1895）から大本営所在地に2度出張した。森松俊夫『大本営』（2013：15-20）によると、大本営とは陸軍軍令部により明治27年（1894）5月に設け、日清戦争から太平洋戦争までの戦時中に設置された日本軍の最高統帥機関であり、所在地は広島である。しかも、当著付録3に提示した「大本営関係年表」⁽¹⁾から見ると、鄭永邦が大本営所在地に出張した時期はちょうど「防務条例制定」と日清講和条約を調印した時期と重なる。この2つの調印はそれぞれ明治28年（1895）1月15と明治28年（1895）14月17日である。日清講和条約が調印された下関は山口県にあり、時間、場所、その後の勲功から見て鄭永邦の2度の出張先は大本営所在地の広島と山口県下関であったと推測され、「防務条例制定」と日清講和条約の調印に関与していた可能性がある。

7.2.5 中国での中国語教育の実践

鄭永邦の支那語研究舎における中国語教育活動については、黄漢青「支那語研究舎の変遷及びその実態：支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心として」（2007）の研究を主な参考とし支那語研究舎での勤務状況をまとめる。

明治36年（1903）に金國璞が東京外国語学校での任期を終え、北京に戻った。金國璞の東京外国語学校での教え子たちは、金國璞の「養老」と「同胞の清語研究の便を図らう美意」⁽²⁾のために、支那語研究舎を立ち上げた。支那語研究舎は明確な責任者を置かず、校則もなかった。上田三徳、古賀邦彦、林要五郎が本業に従事しながら、支那語研究舎の事務を兼務し、金國璞が授業をおこなった。支那語研究舎の運営資金は学生が支払う学費のほか、主に京師大学堂教習の服部宇之吉、

⁽¹⁾ 森松俊夫2013、221-224頁。

⁽²⁾ 井上翠『松濤自述』1950、9頁。

日本駐北京公使館書記官の鄭永邦、高等警務学堂監督の川島浪速ら 3 人の支援によって賄われた。鄭永邦は賛助の一員として明治 38 年（1905）11 月までの 2 年間、支那語研究舎の運営資金の一部提供した。1905 年 11 月、研究舎は窮屈になったため、小紗帽胡同東端に移転し、名称も清語同学会へと改称された。学生はレベルにより 3 班に分けられ、使用している教科書はそれぞれ第一班が『日漢英語言合璧』、『華語跬歩』や『官話指南』など、第二班が『華言問答』、『唐式尺牘』や『縉紳談論』など、第三班が『北京紀聞』であった。鄭永邦により編纂された教科書は『日漢英語言合璧』、『官話指南』である。また、清語同学会は通常の授業のほか、「毎月何回か茶話会を開いて、服部、巖谷、鄭、杉等の諸先輩に、特志講演をしてもらふ」⁽¹⁾ ことをした。そして、清國駐屯軍司令部編『北京誌』（1908：325）によると、清語同窓会は「毎週一回別に講演を開き、知名の士に請ひ清国制度、文法に関する講話を開く。」との紹介がある。序論に述べた野中正孝（2008）は鄭永邦は外交官として重要な任務を果たしながら、日本の中国語教育にも大きな貢献をし、「南に御幡、北の鄭」と評されたことを記した。このことから、鄭永邦は清国制度や中国語文法ともに教えた可能性があると思われる。

明治 40 年（1906）4 月、鄭永邦は大使館二等書記生に任じられ、イギリス大使館に赴任した。1911 年 5 月 17 日に再び北京公使館勤務に復帰した。平上去入生「清語同学会の近況（上）」（1911）は「同氏の来燕は正に是れ同學會振興案の一警策として特筆すべきものなるのみならず、學會創立の歴史上、同氏も亦欣然として該案に對する意見と盡力とを許諾せらるべきは、舊交諸士の齊しく依頼する所にして、諸事すべて同參贊の入燕を待て一氣に辦過する事に定め居たる」⁽²⁾ と述べ、その歓迎ぶりが読み取れる。鄭永邦は北京に戻った事をきっかけに、清語同学会の改革を行った。1911 年 6 月 30 日に清語同学会臨時評議員会を開き、会則改正及びその他の重要事項が議定された。会則によると、鄭永邦は教頭に就任しているから、授業を担当していたかどうか定かではない。

7.3 吳啓太・鄭永邦比較年表

吳鄭兩氏の履歷書、外交史料、公文史料などの資料の考察により、これまでの研究に新しい経歴を補足できた。今までの考察を総括して、表 3「吳啓太・鄭永邦比較年表」を作成した。

表 3 吳啓太・鄭永邦比較年表

年月	吳啓太の生涯	鄭永邦の生涯
安政 5 年 (1858)	0 歳。8 月 25 日に生まれ、旧族籍は肥前長崎の長崎県士族である。実父は吳雄太郎、実母は吳喜美、養父は吳碩、養母は吳娒娜である。弟に吳大五郎、	

⁽¹⁾ 淡水「北京清語同学会」1995、103 頁。

⁽²⁾ 平上去入生 1911、32 頁。

	呉仙壽、妹に虎がいる。	
文久 2 年 (1862)		0 歳。12 月 28 日、長崎東古川町に生まれる。鄭邦二郎の名もある。長崎唐通事鄭永寧の第三子、兄に鄭永慶、鄭永昌、弟に虎がいる。母親はツネ子。
明治 4 年 (1871)	13 歳。2 月、外務省漢語学所に入学し、南京官話を学ぶ。	
明治 7 年 (1874)		12 歳。東京外国語学校の漢語学科に入学する。3 月、下等第三級生として東京外国語学校漢語学科で北京語を習い始める。その後、東京外国語学校を中退する(時期不明)。
明治 8 年 (1875)		
明治 11 年 (1878)	20 歳。5 月 4 日、通弁見習として清国北京公使館に派遣される。金國璞に北京官話を教わる。	
明治 13 年 (1880)		18 歳。4 月 7 日、通弁見習として、清国北京公使に派遣される(月手当五十五円)。当時の公使は宍戸璣。
明治 14 年 (1881)	23 歳。10 月 18 日、外務書記生に任じる。同日、在清国北京公使館在勤を命じられる(俸銀貨八百円)。	
明治 15 年 (1882)	24 歳。鄭永邦との共著『官話指南』を出版する。	20 歳。呉啓太との共著『官話指南』を出版する。
明治 16 年 (1883)	25 歳。再び北京公使館に在勤する。11 月 19 日から「俸銀貨九百円」となる。	21 歳。依願帰国する。 11 月 23 日、帰国途中で天津に立ち寄った際に、天津領事館の榎本公使より同地勤務の辞令が出たことを受け、在勤する。
明治 17 年 (1884)	26 歳。北京公使館在勤している。(俸銀貨千百円)	22 歳。2 月 13 日、帰国の許可が下る。6 月 17 日、外務六等属に任じられ、公信局勤務を申付られる。 7 月 26 日、公信局勤務を依願退職する。

		同日、外務省から御用掛（身分は判任に準じる）と北京公使館在勤（年俸銀貨七百円）を申付られる。10月1日、「外務省伺同省御用掛鄭永邦徴兵免役の件」を上申する。同月28日、徴兵免役事務条例に準じて許可される。
明治18年 (1885)	27歳。9月2日、帰国の申請を提出する。11月5日、帰国する。11月16日、外務書記生の辞職を願い出る。同日、官費留学生の申請を上申する。	23歳。3月、伊藤博文大使と慶郡王の第一回北京会談に随行して北京に来る。第二回の北京公使館での会談では、父鄭永寧に代わり伊藤博文大使の通訳を務める。この外交談判は鄭永邦の「外交談判の初舞臺」 ⁽¹⁾ である。
明治19年 (1886)	28歳。2月15日、官費留学生としてベルギーのブラッセル大学に在学する。修学場所はブラッセル大学とゼームス私宅の2つである。ブラッセル大学では「理論学」、「道義哲学」、「白耳義政史」、「近世政史」、「中古及近古政史」を履修する。ゼームスの私宅では「拉丁語」、「英語」を学習する。	24歳。3月25日、公使館書記生に昇任し、清国北京在勤となる（年俸銀貨七百円）。7月12日、五級年俸銀貨七百円が下賜される。同日、判任官五等に任じられる。
明治20年 (1887)		25歳。9月22日、領事館書記生（判任官五等）の兼任を命じられ、天津領事館に臨時在勤となる。（五級年俸銀貨七百円）。 10月21日、帰国を命じられる。 12月15日、外務属（判任官五等）に任じられる。同日、翻訳局勤務となる。
明治21年 (1888)		12月15日、呉大五郎との共著『日漢英語合璧』を出版する。
明治22年 (1889)	31歳。12月末、留学中にインフルエンザおよび脳病を患いた。	27歳。1月19日、再び公使館書記生（判任官五等）に任じられ、朝鮮京城勤務となる（年俸銀貨七百円）。
明治23年	32歳。病氣療養のため3月の試験を欠	28歳。3月22日、官等改正により判任

⁽¹⁾ 『対支回顧録』下巻1936、38頁。

(1890)	席する。翌年2月に卒業できなくなる。 7月10日、ブラッセル大学に「留学延期願」を上申する。10月3日、延期の許可が下る。	官四等となる。 5月21日、帰国を命じられる。 8月18日、外務省に任じ、判任官三等(下級俸)に昇任する。再び翻訳局勤務となる。 9月20日、外務大臣秘書官室勤務を命じられる。 12月15日、勲励が評価され金二十五円の賞与を受ける。
明治24年 (1891)	2月、卒業予定を翌年に延期する。	29歳。7月1日、上級俸となる。 8月16日、大臣官房秘書課との兼勤を命じられる。俸給改正のため三級俸となる。 10月29日、神奈川県小田原への出張を命じられる。 12月24日、勲励が評価され金三十円の賞与を受ける。
明治25年 (1892)	34歳。2月、カンヂターの学位を取得する。6月17日、帰国の命を受ける。 8月頃、オクシュス号で帰国する。帰国後、高等文官の試験を経て外務省試験補となり、外務大臣陸奥宗光の秘書官となる。	30歳。11月6日、再び神奈川県小田原への出張を命じられる。 12月15日、勲励が評価され金三十円の賞与を受ける
明治26年 (1893)		31歳。1月16日、4月7日、6月11日の3度にわたり神奈川県への出張を命じられる。 6月8日、勲励が評価され金三十円の賞与を受ける。 9月7日、公使館書記生に任じられ(三級俸)、再び朝鮮国勤務となる。
明治27年 (1894)		32歳。7月、兄永昌とともに日清戦争に出征する。 12月27日、帰国を命じられる。

明治 28 年 (1895)	11 月 22 日死去、享年 37 歳。同月 30 日、生前の功勳により正七位勳六等を授与される。	33 歳。1 月 11 日、3 月 5 日の 2 度にわたり、大本營所在地（広島）と山口県への出張を命じられる。 4 月 17 日、下関の春帆楼での日清講和談判に中田敬義、檜原陳政とともに翻訳を担当する。 5 月 21 日、清国在勤を命じられる。 7 月 1 日、朝鮮国在勤を命じられる。 12 月 9 日、日清戦争と日清講和談判の功勞により、勳七等、青色桐葉章、金二百円を賜る。
明治 29 年 (1896)		34 歳。3 月 4 日、清国在勤を命じられ北京に赴任する。 9 月 1 日、清国皇帝陛下より三等第一双龍宝星を賜る。 12 月 21 日、二級俸となる。
明治 30 年 (1897)		35 歳。3 月 25 日、勳励が評価され金五十円の賞与を受ける。 4 月 7 日、内閣に三等第一双龍宝星の「勳章受領及佩用願」を上申する。 同月 14 日、裁許される。 9 月 11 日、公使館二等翻訳官（高等官七等）に任じられ、清国公使館在勤となる。 10 月 30 日、従七位を授けられる。
明治 31 年 (1898)		36 歳。3 月 26 日、勳励が評価され金八十円の賞与を受ける。 7 月 13 日、勳六等を授けら、瑞寶章を授与される。 10 月 4 日、公使館、領事館の費用條例改正。 同月 5 日、五級俸を賜る。 12 月 27 日、三級俸を賜る。
明治 32 年		37 歳。3 月 28 日、勳励が評価され金百

(1899)		<p>円の賞与を受ける。</p> <p>9月30日、二級俸を賜る。</p>
明治33年 (1900)		<p>38歳。3月31日、公使館一等通訳官に任じられる(高等官六等、三級俸)。</p> <p>6月11日、正七位を授けられる。</p> <p>9月29日、公使館三等書記官に任じられ(高等官六等、三級俸)、清国公使館在勤となる。</p>
明治34年 (1901)		<p>39歳。8月1日、休暇帰国を許可される。</p> <p>8月31日、北清事変での戦功により單光旭日章と金千円を賜る。</p> <p>9月30日、二級俸を賜る。</p>
明治35年 (1902)		<p>40歳。北清事変の功勳により、再び金六百円を賜る。</p>
明治36年 (1903)		<p>41歳。3月31日、勲励が評価され金二百円の賞与を受ける。</p> <p>同日、公使館二等書記官に任じられる(高等官五等、三級俸)。</p> <p>6月10日、従六位を授けられる。</p> <p>8月、支那語研究舎の賛助の一員として明治38年(1905)11月までの2年間、支那語研究舎の運営資金の一部提供した。</p>
明治37年 (1904)		<p>3月31日、勲励が評価され金二百三十円の賞与を受ける。</p> <p>5月10日、『北京發音反切表』を出版する。</p> <p>5月20日、勳五等、瑞寶章を授与される。</p>
明治38年 (1905)		<p>43歳。3月31日、勲励が評価され金五百円の賞与を受ける。</p> <p>11月18日、特派全權大使小村寿太郎の随員として北京条約並に議定書の締結に力を尽くし殊功があった。また、11月、支那語研究舎は清語同学会と改称され、</p>

		服部宇之吉、川島浪速とともに初代評議員となる。同時に特志講演を担当する。
明治39年 (1906)		44歳。2月20日、休暇帰国を命じられる。 同月27日、二級俸を賜る。 3月31日、勲励が評価され金百七十五円の賞与を受ける。 4月、イギリス大使館転勤のために北京から離れた。 4月1日、北京条約の調印の功勳により、雙光旭日章、金百円を賜る。 7月9日、大使館二等書記官に任じられ（高等官五等、二級俸）、英国大使館勤務となる。
明治40年 (1907)		45歳。3月28日、高等官四等に任じられ、三級俸を賜る。 同月31日、勲励が評価され金百円の賞与を受ける。 6月10日、正六位を授与される。
明治41年 (1908)		46歳。3月31日、勲励が評価され金百五円の賞与を受ける。 7月16日、帰国を命じられる。 12月21日、勲励が評価され金百二十円の賞与を受ける。
明治42年 (1909)		47歳。満州状況視察のため大使館二等書記官として満州へ派遣される。 3月31日、貞愛親王殿下に随従し、清国同治徳宗景皇帝（載淳）の葬式に参列する。 10月11日、満州に派遣される。12月27日、勲励が評価され金百円の賞与を受ける。
明治43年 (1910)		48歳。3月11日、9月1日、清国載濤、載洵両皇族の来日時に、接伴員を務め

		<p>る。</p> <p>4月1日、高等官の官等、俸給の改正により、三級俸となる。</p> <p>9月1日、呉大五郎との共著『日清英露四語合璧』を出版する。</p> <p>12月27日、勲励が評価され金百五十円の賞与を受ける。</p>
明治44年 (1911)		<p>49歳。4月14日、公使館二等書記官に任じられ、(高等官四等、三級俸) 清国勤務となる。</p> <p>6月28日、勲四等、瑞寶章を授与される。</p> <p>6月30日、清語同学会教頭となる。</p>
明治45年 (1912)		<p>50歳。7月20日、従五位を授けられる。</p>
大正元年 (1912)		<p>50歳。12月25日、勲励が評価され金百五十円の賞与を受ける。</p>
大正2年 (1913)		<p>51歳。公使館一等書記官に昇進と同時に退官した。</p>
大正3年 (1914)		<p>52歳。5月25日、帰国を命じられる。</p> <p>6月26日、公使館一等書記官に任じられ(高等官三等、二級俸)、支那勤務を命じられるが、同日、依願退官する。</p> <p>7月10日、正五位を授けられる。その後中華民国政府の顧問に聘せられ、袁世凱に重用される。</p>
大正5年 (1916)		<p>54歳。3月、『生産道案内』の訳版『生財大道』を出版する。</p> <p>病気に罹り、8月20日東京に永眠する。上野谷中の墓地に葬る。生前の勲功により、正五位勲四等を授けられた。</p> <p>北京在任30年、11代の公使に歴仕して、「日支外交の活字引」と称された人である。</p>

		る。
--	--	----

先行研究には呉啓太、鄭永邦について複数の伝記資料が存在するが、本章は公文資料により、両氏の外交活動、中国語教育の両方面から補足した。

呉啓太は若く逝去したため、その履歴が鄭永邦より少ない。呉啓太は明治 11 年（1878）通弁見習として清国北京公使館に派遣されてから明治 17 年（1884）まで 6 年間北京公使館に在職する。明治 19 年（1886）2 月、ブラッセル大学に留学し、その以降は北京公使館では活動せず、外務大臣陸奥宗光の秘書官として活躍している。呉啓太の短い一生は外交に尽力して、その後の留学も公使を補佐するために、学習したのであろう。また、呉啓太が中心となって出版した『官話指南』は日本の中国語教育史上相当の地位を有し、呉啓太も日本の中国語教育史上に大い貢献をしたのである。

鄭永邦は明治 13 年（1880）から通弁見習として、清国北京公使に派遣され、明治 17 年（1884）6 月外務六等属にして以来、在職三十余年、教官を歴任した。在職期間の受勲から、鄭永邦は日本公使を補佐し日中両国の国交のと親善に大いに貢献したことが伺える。鄭永邦により編纂された『官話指南』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』、『生財大道』は善隣書院、東京帝国大学、清語同学会などの漢語学科に教科書として使われている。その点から、鄭永邦が著す教科書は日本の中国語教育の学者にもその価値が認められたことになる。

7.4 初版『官話指南』の編纂過程

『官話指南』の来歴についての研究は内田慶市、氷野善寛（2012）⁽¹⁾と楊鉄錚（2017）以外には見当たらない。また、前述のように呉啓太と鄭永邦両氏はそれぞれ 1878 年、1880 年に北京に派遣されたが、『官話指南』の成書は 1882 年となる。「凡例」に「余駐北京學語言三年於今」との記述があるため「凡例」の執筆は呉啓太だと考えられる。しかしながら、呉、鄭 2 人は北京に来てそれぞれと 3 年、1 年で、このような質の高い北京官話教科書を完成させるのは可能だろうか。本節では前述の呉、鄭両氏の語学学習状況、『官話指南』の「凡例」、本文の内容などを合わせて、『官話指南』の体裁、編纂過程について分析する。

7.4.1 『官話指南』の体裁

ここでは『官話指南』の体裁を明確するため、呉、鄭両氏の家庭背景、北京公使館に派遣された通弁見習および中国語を勉強する経歴から、当時の両著者にとって中国語を習う際に使用する可能性が高い教科書を考察し、『官話指南』にある一問一答式の体裁がどこに由来するのか確認した⁽²⁾。著者の 2 人は唐通事の後裔であるため、唐話教科書を考察する必要があると思う。ここでは『唐話

⁽¹⁾ 内田慶市 氷野善寛『文化交渉と言語接触研究 官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』（2016 年、好文出版）第 66-75 頁に再録される。

⁽²⁾ 先行研究で呉、鄭両氏の漢語学習の過程において琉球官話教科書を利用したという指摘はないため、琉球官話教科書との比較は行わない。

辭書類集』(第1集-第20集)に収録された書籍について比較を行う。最も早い唐話会話教科書は岡島冠山著の『唐話纂要』(1716)に始まる。『唐話纂要』は全6巻、「本邦初の中国語会話入門書」⁽¹⁾である。1726年に同じく岡島冠山が編纂した『唐話使用』があるが、その巻之四、五、六に初めて短く簡潔な会話で一問一答式を取っている。例えば、

久聞大名，常自欽仰，今日天假良緣得拜尊顏，不勝欣躍之至。

答：多承錯愛，感謝不盡，但小弟下流之輩不識禮數，未必能無衝撞，請恕請恕。

(『唐話使用』巻之四 「初相見說話」)

前述した唐通事の後裔が漢語を学ぶ際に使用した教材には、『唐話纂要』あるいは『唐話使用』などに関する記載は見られないが、『唐話纂要』と『唐話使用』の仮名注音は杭州音と南京音⁽²⁾である。当時の唐通事の子弟が学んだ漢語も南京官話であった。体裁や発音の類似点から呉、鄭両氏はおそらく『唐話使用』を習ったか、あるいは読んだことがあると思われる。

また、内田慶市、氷野善寛(2016)が述べたように、『官話指南』の巻之一「應對須知」は『正音撮要』⁽³⁾の一部分を引用したと指摘した。それでは、『官話指南』の体裁は『正音撮要』の影響を受けているのか、『正音撮要』の会話文を見てみよう。『正音撮要』は4巻から構成され、わずか60段の会話文は巻之一の後半を集中し、しかも一問一答式の体裁である。例えば、

現成的館子，咱們進去喝個茶咯，歇歇再走了。我東兒就是了。

那裡話呢。又來擾你嗎？今兒該我的東兒了。你不用費心咯。(巻之一 上茶館)

『正音撮要』は『唐話使用』より口語の文章を使い、北京語の表現も使用している。

それから、『官話指南』が出版されるまで、『語言自邇集』が日本で唯一の北京官話教科書であった。そして、『語言自邇集』巻之四「問答篇」は『官話指南』と同じ一問一答の体裁である。例えば、

您貴處是那兒？敝處是天津，沒領教。我也是直隸人。啊！原來是同鄉。(『語言自邇集』第四章 問答章之一)

日本の北京語教育はドイツ公使、イギリス公使より遅れている。しかも、日本駐北京公使館の通弁見習は北京語を学習し始める際に、イギリス人向けの『語言自邇集』を使って、北京官話を学習

⁽¹⁾ 中村雅之A「唐話纂要の仮名音注について」2015、28頁。

⁽²⁾ 中村雅之B「唐話使用の南京官話音」2015、31頁。

⁽³⁾ 黄薇《〈正音撮要〉研究》(2014: 11)、《正音撮要》(1810)は清代中後期の重要な正音読本であり、作者は広東省南海の人、高静亭である。

していた⁽¹⁾。楊鉄錚 (2017 : 105) により、『官話指南』は『語言自邇集』からも、唐話教育からも影響を受けておらず、明治時代における独特な中国語教科書であった」と指摘した。しかしながら、本節の調査により、少なくともその体裁については唐話教科書、『正音撮要』、『語言自邇集』という前例があったことは認めなくてはならない。そして、「應對須知」は『正音撮要』の一部分を引用したことがある。これらのことから、『官話指南』の体裁は唐話教科書、『正音撮要』、『語言自邇集』の影響を受けたのであろう。

7.4.2 「應對須知」

「應對須知」の来歴については内田慶市、氷野善寛 (2016)⁽²⁾ がもっとも詳しく紹介している。内田慶市、氷野善寛 (2016 : 74-75) は以下のように述べた。

「應對須知」は全45段の短文、会話文からなり、そのうち、14カ所は『正音撮要』第一巻の「問答」の内容と一致していることが確認できた。「應對須知」は『官話指南』の導入部分にこのような教材が入り込んでいる理由としては、日本人編纂者である呉啓太と鄭永邦が唐通事の流れを組むことから、唐通事の中国語教育の中で『正音撮要』のような「正音」教育系のテキストを使っており、その教育から受け継がれたと仮定する考え方で、二人の中国語教師と目される金國璞が中国における正音教育の伝統に従い『正音撮要』をテキストとして用いて当時の最新の北京語も修正そ教えたと考えることができる。

上の論述を見ると、呉、鄭両氏の中国語教師である金國璞、黄裕壽⁽³⁾ は『正音撮要』をテキストとして2人に中国語を教えた。しかしながら、その前に呉、鄭両氏が当時『正音撮要』を読んだこと、あるいは学習したことがあるかは確定できない。教師であった金國璞、黄裕壽は容易に『正音撮要』を入手できたはずである。しかも、本研究第三章の表11「初版『官話指南』の北京語固有表現と九江版『官話指南』左文表現の分布」を見ると、「應對須知」の北京語特有の表現は「使令通話」に次いで多く、しかも“兒化音”は「應對須知」の北京語特有の表現において3分の1を占めている。また、北京官話の教育は明治9年(1876)9月から始められ、『官話指南』の主編呉啓太は明治11年(1878)5月に通弁見習として清国北京公使館に派遣された。このような短時期の学習で大量の“兒化音”を使い、および『正音撮要』の入手の可能性から、巻之一「應對須知」が呉、鄭両氏の創作というよりは、その教師であった金國璞、黄裕壽の手で成ったものであると考えるが妥当であろう。

⁽¹⁾ 楊鉄錚 2017、34-38頁

⁽²⁾ 楊鉄錚 (2017) にも内田慶市、氷野善寛 (2016) の研究を参考にし、「應對須知」の来歴を述べたが、新たな内容がないので、ここには内田慶市、氷野善寛 (2016) を中心に参考する。

⁽³⁾ 六角恒廣 (2002 : 106-107) は「呉啓太・鄭永邦の学習に関係のない人が「偶然過訪」と序文に書くわけもない。しかも「爰為之校對一番(爰にこれが為に、校對すること一番)」と述べている点からも、黄裕壽と金國璞が、編者の北京官話の教師であった問いえる」と指摘した。

7.4.3 「官商吐屬」

卷之二「官商吐屬」は「家の貸し借り」、「商売について」、「銀行の手形について」、「友達のアヘン吸引をいさめる話」などの日常生活に関する内容で40章から構成されている⁽¹⁾。それらの会話は通弁見習だった呉啓太、鄭永邦にとっては馴染みの薄い内容と思われる。また、「凡例」は

余駐北京學語言三年於今，時延請師儒賴其口講指畫，漸有所領悟。然不過滄海之一粟耳。是編係平日課本，其中遺漏指不勝屈。

となっている。ここの「是編係平日課本」から分かるように、『官話指南』は呉、鄭両氏が普段北京官話を勉強するために使用した教科書である。本論文の第一章と第二章の考察から見ても、「官商吐屬」は北京語の特色が比較的強い巻である。しかし、呉、鄭両氏は北京官話の学習を初めてからあまり時間が経っていない上に、「官商吐屬」の内容は一般の人々の日常生活に触れていて、通弁見習の2人はこのような光景に接する機会がなかっただろうし、想像するのも難しい場面であったのではないかと思われる。例えば、第10章「承包工程」、第12章「自己家的田地被鄰居家占了」、第13章「包果子園」、第22章「因貪污等被革職」、第25章「勸自己朋友不要吸鴉片」などの場面は全て清国の庶民たちとの出来事である。このため、巻之二「官商吐屬」は呉、鄭両氏の創作ではなく、2人の中国語教師である金國璞、黃裕壽が編纂した教科書なのだろう。

7.4.4 「使令通話」

卷之三「使令通話」の第1、2、3、4、5、13章は著者と同じ姓、「鄭」と「呉」が主人公として登場し、「日本茶」、「芥末」、「木魚」⁽²⁾等の日本特有の語彙も使用されている。第20章は、主人が自分の雇い人を領事官の付き人に推薦する話がある。このような話から、その主人は公使館に勤務している人であり、呉、鄭両氏の仕事と関連性がある。そのために、これらの章は呉、鄭両氏が自身の経験に基づいて創作したもの可能性がある

また金國璞、黃裕壽の序は次のように述べている。

茲有吳啓太 鄭永邦者。皆東洋長崎人也。因隨公使駐北京，公餘之暇，即潛心於語言之學。天資既敏，人力亦勤，積數年之攻苦，而憑空結篆，設為問答之詞，藏諸囊篋，久已累牘連篇。僕等偶然過訪，適其稿置案頭，急索而觀之，見其口吻之合，神氣之真，與其發揮議論之詳切，實為動中肯綮，因憇之，俾刷印成書，以公諸世，誠善本也。苟殫心於此者，按其程式，奉為楷模，循序漸進而學之，如行路者之有嚮導，絕不致為迷途所惑。較之偶聽人談論，依稀彷彿而倣顰者，其相去不已天淵乎，僕等觀是書而佩服深之，爰為之校對一番，并為之序以述其顛末云。

⁽¹⁾ 氷野善寛 2012、10 頁。

⁽²⁾ 『官話指南總譯』(1905: 149) により、木魚は「鯉節」の意味を表す。

この序の「積數年之攻苦，而憑空結篆」から、『官話指南』は何もない状況から編纂されたことが分かる。しかし、上述で『官話指南』について分析した内容から、その一部は自らの経験を織り交ぜて書かれている。「使令通話」のその他の章には、上述のような語彙あるいは物語は含まれていないが、全てが主僕間の会話である。これにより、上述以外の章は呉、鄭両氏の経験により編纂されたものであると推測できる。

7.4.5 「官話問答」

「官話問答」はこれまでの市井における会話とは一転して、正式な場面での問答で構成されている⁽¹⁾。「官話問答」20章中のどのくらいが両氏の編纂によるものか、ここでは『總譯』の翻訳を参照に、「官話問答」各章の内容を分析する。

まず、「官話問答」の第1、2、3、5、6章に“我們大人”、“大人”のような用語が大量に使用されている。しかし、表面上は具体的に誰を指しているのか分からない。しかし、『總譯』の翻訳から見ると、この“我們大人”は「公使閣下」を指している。また、第4、7、8、9、10、18、20章は両国における外交上の問題などの決裁に関するお伺いなど、領事としての仕事に関わる会話である。文中にも大量の“領事官、領事大人”のような名称が現れた。それに、第18章の本文にある「閣下是貴國那一縣。我是敝國長崎縣的人。那麼離敝國甚近哪。不錯，離貴國很近。閣下到敝國來有幾年了。我到貴國有三年了。閣下在敝國三年，官話能說得這麼好，實在是聰明絕頂，佩服佩服。」は「序」の「茲有吳啓太，鄭永邦者。皆東洋長崎人也」、「凡例」の「余駐北京學語言三年」と対応している。また、本研究の上編第一章の1.2.3節「文語語彙」における文語の分析から、『官話指南』にある文語表現はそのほとんどが「官話問答」に見える。そして、第三章の3.4節「『官話指南』(初版)に見える南京官話表現」南北官話の表現についても「官話問答」が大部分の用例を占める結論を出した。本章の呉、鄭両氏の漢語学習に対する考察を通して、呉、鄭両氏が北京官話を学習した時間は決して長くはないが、しかし両氏はともに幼少からすでに南京官話を学んでいるため、南京官話に関する知識を持っていると思われる。さらに、前述の郭鋭らの論述では“来自南京官話的词汇具有书面语色彩，较为正式。”(筆者訳：南京官話に由来する語彙は文語の色彩を有し、より正式である。)と述べている。以上のことから見ると、「官話問答」の第1、2、3、5、6、4、7、8、9、10、18、20章は呉、鄭両氏の経験、あるいはその他の公使館の人員の経験に基づいて自らが編纂されたと言えるだろう。

一方、第11、12、13、14、15、16、17、19章の内容は公使館と無関係である。それぞれ「お祝いを述べる(出世)」、「お祝いを述べる(試験に合格)」、「税金を払う」、「宴会に誘う」、「紹介」、「弟に師匠を探す」、「漢詩会」、「調停」、「手紙を人に預かる」⁽²⁾の話である。このような清国官吏たちの対話、科挙考試などの内容は、おそらく呉、鄭両氏が編纂したものではなく、その師である金國

⁽¹⁾ 氷野善寛 2012、10 頁。

⁽²⁾ 楊鉄錚 2017、82 頁。

璞と黄裕壽の手によるものだろう。

7.5 改訂版『官話指南』と金國璞

改訂版『官話指南』は金國璞による改訂で、明治36年(1903)4月に文求堂から出版された。改訂版『官話指南』と『官話指南』の最大の差異は序文、本文と卷之一「酬應瑣談」の3方面である。まず、『官話指南』にある「田邊太一」と「金國璞、黄裕壽」の序文を削除し、作者呉啓太と鄭永邦の書いた「凡例」のみを残した。そして、卷之一「酬應瑣談」を全て削除し、「酬應瑣談」が新しく加えられた。また、卷之二、三、四は変更が見られない。改訂で加えられた「酬應瑣談」は計20章あり、各章は約300字前後の対話で構成されている。では、なぜ金國璞はあえて「應對須知」を削除し、「酬應瑣談」を新たに加えたのか。「應對須知」の底本《正音撮要》と関係があると考えている。

「應對須知」を削除した理由について内田慶市、氷野善寛(2016:75)は「「應對須知」が『官話指南』の中で唯一古いものを残した箇所であったためであり、あえて書き直したと考えることができる。」と指摘した。

また、黄薇(2014:242)は“《撮要》词语系统主要载录的是清代中后期的北京官话词语，包括书面语词和口语词，其中也汇集了部分南方官话词汇。”(筆者訳：《撮要》の語彙は主に清国中後期の北京官話の語彙を採用し、書面語、口語文が含まれ、その中に一部分の南京官話の語彙もある。)と指摘した。これは《正音撮要》に南京官話が混同していることを説明している。本論文第三章の表11「初版『官話指南』の北京語固有表現と九江版『官話指南』左文表現の分布」から見ると、《正音撮要》に類似した『官話指南』卷之一「應對須知」は、全文が約3000字しかないが、南京官話と南北通用の用語の百分率は4巻の中に一番高いため、その巻の南方特性が極めて強いと思われる。以上の点が、おそらく金國璞が「應對須知」を削除した理由である。

なお、金國璞の生涯については、楊鉄錚(2017)がその出身、来日後、帰国後のことについて詳細に紹介している。以下では楊鉄錚(2017:43-63)の研究に基づいて、金國璞の経歴をまとめる。

金國璞、字卓庵(卓安、卓庵)、生卒年不詳。出身は北京で、出身校は同文館であった。日本に来る前に、長期間日本人留学生に中国語を教えていた。1881(明治14)年に鄭永邦に中国語を教えた。1888(明治21)年に宮島大八は北京に滞在していた時、金國璞について中国語を勉強した。1897年に高等商業学校附属外国語学校の中国語教師として来日し、日本で6年間勤務した。高等商業学校附属外国語学校の他、東京外国語大学、善隣書院などの学校でも仕事を兼ねていた。1903(明治36)年6月末に中国に戻った。帰国後に支那語研究舎という学校で「総教習」を担当し、中国語を教えていた。

楊鉄錚の論文はすでに鄭永邦が金國璞の学生であることを論じたが、呉啓太が金國璞の学生であるかどうかについて触れていない。しかし、六角恒廣(2002:106-107)は金國璞と黄裕壽の「序」

から、「吳啓太・鄭永邦の学習に関係のない人が〈偶然過訪〉と序文に書くわけもない。しかも〈爰為之校對一番〉と述べている点からも、金國璞と黃裕壽が編者の北京官話の教師であったといえる。」と述べた。また、日本に来る前に、長い間に日本人留学生に中国語を教えていたことから、金國璞は吳啓太、鄭永邦 2 人の中国語教師として、おそらく 1878 年に吳啓太が北京に赴任する時にはすでに日本公使館で漢語教育を行っていた可能性があると思われる。

7.6 『官話指南』の著者と編纂過程

本章は吳啓太と鄭永邦との再調査を通して以下の結論を得た。

(1) 吳啓太、鄭永邦の履歴更新

1) 調査を通して吳啓太が外務省に提出した履歴書を発見した。この履歴書により、実父が吳雄太郎、実母が吳喜美であることが確認できた。1885 年、吳啓太が履歴書を提出した時、実父と養母の吳娒娜は逝去していた。

2) 唐通事子弟の唐話教育に関する考察を通して、漢語学所の生徒募集要項、鄭永寧の漢語学所などででの任職などの関係から、吳啓太が漢語学所で漢語を学習したことが推測できる。

3) 吳啓太のブラッセル大学における学習記録を通して、吳啓太は少なくともラテン語、英語、中国語の 3 カ国語に精通していた。留学から帰国後陸奥宗光外相の秘書官として、下関条約の調印にも参与した可能性があるかと推測できた。

4) 鄭永邦は明治 7 年 (1874) 前後に東京外国語学校漢語学科に入学し、しかも、入学前にはすでに長崎から東京に移籍していると思われる。

5) 調査を通して鄭永邦が外務省に提出した、授勳時の「任職履歴書」を発見した。この履歴書から、鄭永邦は在職期間中に 17 度授勳があり、そのうち 4 度は勳章を授与され、それは「勳七等青色桐葉章」「単光旭日章」「雙光旭日章」「雙光旭日章」である。そして、大本營所在地広島と山口県の下関に 2 度出張し、「防務条例制定」と日清講和条約の調印に関与していた可能性も極めて高い。

6) 鄭永邦は支那語研究舎の支援者の一人として、毎週一回の講演に参加し、その講演内容は清国制度や中国語文法の可能性がある。

7) 以上の最新研究に基づき、「吳啓太・鄭永邦比較年表」を作成した。

(2) 『官話指南』編纂の問題

1) 唐話教科書と『語言自邇集』との比較から、『官話指南』の一問一答式の体裁は『唐話便要』、『正音撮要』、『語言自邇集』の影響を受けた可能性がある。

2) 『官話指南』の卷之一「應對須知」、卷之二「官商吐屬」は吳、鄭両氏の教師金國璞と黃裕壽により編纂された可能性が大きい。

3) 卷之三「使令通話」、卷之四「官話問答」の第 1、2、3、5、6、4、7、8、9、10、18、20 章は吳、鄭両氏の自身のことを基礎に編纂された。「官話問答」の第 11、12、13、14、15、16、17、19 章は先生である金國璞と黃裕壽の手に成る可能性が大きい。

4) 『官話指南』の編纂者は名義上呉啓太、鄭永邦の二氏になっているが、教師の金國璞と黄裕壽が編纂に関わったと考えられる。実質上、師弟四人の協力によりできた共著と言える。

(3) 改訂版『官話指南』

1) 金國璞が『官話指南』を改訂した時、「應對須知」を削除した理由はこの巻の使用言語が南京官話に傾斜しているためである。

2) 金國璞は呉啓太、鄭永邦の漢語教師として初版『官話指南』の改訂に踏み切った。

第八章 鄭永邦『北京發音反切表』の研究

8.1 『反切表』の構成

8.1.1 『反切表』の内容

『北京發音反切表』（以下は『反切表』と略称）は鄭永邦が編纂し、明治37年（1904年）に文求堂から出版された。その「凡例」に「北京語學習者カ發音ヲ講究スルニ便センカ為メニ編製セシモノ」と記され、發音學習に供することを目的としていることが分かる。六角恒廣（2001：19頁）の書誌記録によると、「發音心得」を附し、表一枚の形態となり、書目は上村幸次が著す『明治時代刊行中国語学関係書書目稿』に所収すると記され、それらが唯一の先行研究と言える。

『反切表』は「北京發音反切表」、「凡例」、「發音心得」の3部分から構成され、全2枚である。「凡例」は『反切表』の構成及び北京音について紹介している。「發音心得」は『反切表』の声母と韻母及び「北京音」の發音方法について説明している。『反切表』のサイズは縦77cm、横40cm、縦に声母の代表字、横に韻母の代表字を配置し、交差するところに該当の音節字を配し、計461字が採用されている。この『反切表』は漢字を用いた声母代表字（反切上字、計53字）と韻母代表字（反切下字、計18字⁽¹⁾）による反切注音の方式を採用しているだけでなく、仮名表記（片仮名）やローマ字表記⁽²⁾も併記している。

本章は『反切表』に反映されている「北京音」を分析し、本資料の独自性と時代性を探求するとともに、北京語語音研究史上の価値および著者鄭永邦の北京語の發音に対する研究実態を解明したい。

8.1.2 声母、韻母

(1) 縦列の声母

『反切表』の縦列は声母であり、横列は韻母である。以下、「凡例」における説明を交えて、縦列と横列の順で紹介する。

縦列は合計26列からなり、右から6列目は声母に関わる注記、7～24列目に音節字、25列目は「反切字数」、26列目は「兒」(er)音を配している。1列目は5行空け⁽³⁾で縦に1から53までの番号を振り声母の数を記している。この表の縦列は声母と介音の組み合わせである「声介合母⁽⁴⁾」や尖團音の区別を含むため、53行に分かれているが、実際のところは現代漢語と同じくゼロ声母を含めた22個の声母がある。

2、3、5列目は声母のローマ字表記である。2列目には〈ch〉と〈ch'〉、〈ch〉と〈ch'〉、〈hs〉

⁽¹⁾ なお、「兒」(er)音は別建てで『反切表』左端に縦に独立して配列されている。

⁽²⁾ 「凡例」では「羅馬字」としているが、『反切表』内では「英字綴」となっている。本論文ではそれを一律に「ローマ字表記」とした。

⁽³⁾ この5行に韻母に関する注記が入る。

⁽⁴⁾ “声介合母”は“在拼写法上把声母和介母（介音）当一个整体看，当声母看，这就叫‘声介合母’。”（拓牧〈谈声介合母连拼法〉（1961：16）と解釈している。

と ⟨h's⟩^① の記載のみで、それぞれ「祭」と「齊」、「几」と「期」、「西」と「希」に対応し、“尖音”と“團音”の由来を区別している。それ以外は全て横線で表示している。

3列目は声母 j、q と zh、ch をそれぞれ ⟨ch⟩ と ⟨ch̃⟩ で表し、x と sh を ⟨hs⟩ と ⟨sh̃⟩ で表示している。

5列目は声介合母と非声介合母をはっきり区別する為、ローマ字表記で列挙している。5列目の ⟨chi⟩ 以外の“声介合母”は3列目と異なり、3列目は ⟨ch̃⟩、⟨f⟩、⟨h⟩、⟨j⟩、⟨k⟩、⟨k'⟩、⟨l⟩、⟨m⟩、⟨n⟩、⟨p⟩、⟨p'⟩、⟨sh̃⟩、⟨su⟩、⟨t⟩、⟨t'⟩、⟨ts⟩、⟨t's⟩、⟨y⟩、⟨w⟩ と書かれている。つまり、非声介合母と韻母を綴る際、3列目の声母を使い、それに対して、声介合母の場合は5列目の声母を用いる。

以上の点から見ると、鄭永邦は『反切表』を編纂する際、非声介合母が存在するという考え方を持っている。そして、非声介合母、声介合母が韻母と綴る際、3列目と5列目は相互補助の関係にあるが、3列目が主要な位置を占めている。また、5列目の ⟨chi⟩ と ⟨ch'i⟩ (拼音 ji、qi に相当する) のローマ字の左肩に ⟨T⟩、⟨K⟩ の標記を付けて“尖音”、“團音”を区別した^②。尖團音の区別から鄭永邦は古代音韻にも通じていたことがわかる。

4列目は声母の仮名表記であり、6列目は反切上字である。すなわち5列目のローマ字表記はこの6列目の反切上字の発音を表している。表4の作表は『反切表』の反切上字とそのローマ字表記を現代漢語の声母と対応するものである。

表4『反切表』の反切上字と現代漢語の声母対照表

声母 四呼	b	p	m	f	d	t	n	l
開口呼	坡 po	坡 p'o	末 mē		德 tē	特 t'è	挪 no	勒 lē
齊齒呼	鼻 pi	皮 p'i	迷 mi		的 ti	梯 t'i	尼 ni	立 li
合口呼				夫 fu	都 tu	突 t'u	奴 nu	盧 lu
声母 四呼	g	k	h	j	q	x		
開口呼	哥 kē	克 k'è	何 ho					
齊齒呼				祭 chi	齊 ch'i	西 hsi		
				几 chi	期 ch'i	希 h'si		
合口呼	古 ku	苦 k'u	戶 hu					

① 「凡例」に「★符ヲ施シタル<キ><ヒ><ヒコ><シ>即<機>、<希><虚><西>ノ如キハ訛音ニシテ<チ><シ>等ノ音ニ混同スルモ反切ニテ之ヲ顯ハシ得ルニ因リ之ヲ掲記セリ」とある。「祭齊西」は“尖音”(中古精組細音字)で、「几期希」は“團音”(中古見曉組細音字)であり、現代声母はそれぞれ j、q、x に合流した。

② 「凡例」に「北京音ハ<キ>ヲ<チ>ニ<ヒ>ヲ<シ>ニ訛ルカ故ニ(祭)ト(几)ト及ヒ(希)ト(西)ノ音ヲ混同セリ然レトモ正音ハ其區別アルコトヲ知ラシメンカ為メ羅馬字發音綴リニ於テ左肩ニ本音ノ頭字ヲ記シタ」とある。「T」の印がある反切上字は尖音「祭齊疽趨」字、「K」の印がある反切上字は團音「几期居區」字となる。

撮口呼				居 chü 疽 chü	區 ch'ü 趨 ch'ü	虛 hsü		
声母 四呼	zh	ch	sh	r	z	c	s	ゼロ 声母
開口呼	知 chī	池 ch'ī	詩 shī	日 jī	茲 tz'ü	疵 tz'ü	糸 ssü	
齊齒呼								易 yī
合口呼	朱 chu	初 ch'u	書 shu	如 ju	租 tsu	粗 ts'u	素 su	屋 wu
撮口呼								遇 yü

表4から分かるように開口呼は全て非声介合母で18個ある。齊齒呼11個、合口呼15個、撮口呼4個は全て声介合母である。両唇音、舌尖音、舌根音は撮口呼と綴る反切上字がないので、表には提示していない。そして、表4の空白箇所は対応する声母がないことを意味している。

(2) 横列の韻母

『反切表』の横列は59行からなり、上から5行は韻母に関わる注記、6～58行目に音節字、59表目は反切字数の合計のみである。1行目は右から6列空けて、左に1から18の番号を振り韻母の数を表示している。2行目は韻母の仮名表記である。

3行目と4行目は韻母のローマ字表記であるが、3行目は〈un〉、〈ung〉、〈eh〉、〈en〉の記載のみで、4行目の〈èn〉、〈eng〉、〈ieh〉、〈ien〉と対応している以外は全て横線で表示している。なお、4行目と3列目については点線で「英字綴合セノ格」と注釈があり、声母と韻母を組み合わせると音節字の綴りになる、と説明していると思われる。ian以外の複母音韻母は声介合母と韻母の組み合わせで、その音を構成する。

5行目は韻母を表す反切下字で、全てゼロ声母字を用いている。以下で声母韻母の組み合わせ方について例で説明する。

表5 『反切表』 韻母〈ung/eng〉と声母の配列表

声母 四呼	d	t	n	l	g	k	h
開口呼	等 teng	疼 t'eng	能 neng	冷 leng	更 keng	坑 k'eng	恆 heng
合口呼	冬 tung	同 t'ung	濃 nung	龍 lung	工 kung	孔 k'ung	紅 hung
声母 四呼	zh	ch	r	z	c	s	b
開口呼	正 cheng	成 ch'eng	扔 jeng	增 tseng	層 t'seng	僧 seng	迸 peng
合口呼	中 chung	充 ch'ung	榮 jung	宗 tsung	葱 t'sung	送 sung	
声母	p	m	f	j	q	x	ゼロ

四呼							声母
開口呼	朋 p'eng	夢 meng	風 feng				
齊齒呼				窘 chiung	窮 ch'iung	兄 hsiung	用 yung
合口呼							翁 weng

『反切表』の韻母〈ung/eng〉は同じく反切下字「哼」に対応し、開口呼、齊齒呼、合口呼の声介合母と組み合わさる際、迸、「恆」、「窘」、「兄」、「冬」、「同」などの音節字となり、現代漢語の韻母 ong、eng、iong に対応する^①。上述と同じ状況の韻母はほかに2組ある。

〈eh〉と〈ieh〉、〈en〉と〈ien〉はiの声介合母と綴る際は、3行目の〈eh〉、〈en〉を使うべきであり、「些」、「列」、「先」、「千」などの音節字がある。それに対して、非声介合母と綴る際は、4行目の〈ieh〉、〈ien〉を使うべきで、「天tian」、「店dian」、「別bie」、「撇pie」などの音節字の発音になる。また、〈eh〉と〈ieh〉は撮口呼üの声介合母と綴る際、「絶」、「缺」、「雪」、「月」がある。つまり、〈eh〉、〈ieh〉に対応する現代漢語の声母はie、üe、enで、〈ien〉はianと対応している。故に、ローマ字表記で綴る必要性が生じた時、声母が非声介合母であるかにより、韻母は3行目と4行目のローマ字表記のどちらを使用するかの選択が迫られるため、この『反切表』のローマ字表記は一定の中国語基礎を持つ学習者向けの音韻対照表であると思われる。そして、著者鄭永邦は複母音韻母の概念を有していたと考えられる。

6行目以降の音節字について、「凡例」は反切により挙げる音節字の合計は434字であり、反切で表すことができない音節字、圏点を付した単独音は27^②字あり、及び反切列外となる「兒」の1字を加えて共計461字である。しかし、発音の種類は実に420字となる。また、「凡例」に書いたように「兒(êrh/エル)^③は声母、韻母に属せず、故に単独に同音の字「兒、而、耳、餌、爾、邇、二、貳」を集めて、縦の左側から一行に表記する。

左から2列目は各行の音節字数を示している。声母「如(ju)」、「立(li)」、「挪(no)」、「奴(nu)」の行はそれぞれ6、7、17、4字としているが、実際には7、6、18、3字であり、単純な数え間違いと思われるが、『反切表』に用いた音節字の総数は変わらない。

8.1.3 特殊な音節字

まず「等」と「疼」についてだが、『反切表』は反切上字の「徳〈t〉」と「特〈t'〉」の行に

^① 「un/èn」も同じ状況にあり、「眞」、「臣」、「准」、「春」、「巡」、「薰」などの音節字は現代漢語の韻母ではun、ènとなる。

^② 「凡例」は単独音26字と記しているが、実際には『反切表』に27字ある。声母は祭(chi)、齊(ch'i)、几(chi)、期(ch'i)、知(chi)、池(ch)、夫(fu)、西(hsi)、希(h'si)、何(ho)、戸(hu)、日(ji)、糸(ssü)、茲(tz'ü)、疵(tz'ü)などの15字があり、韻母は啊(a)、哀(ai)、安(an)、昂(ang)、傲(ao)、額(ê)、餒(êi)、恩(un/èn)、哼(ung/eng)、衣(i)、阿(o)、歐(ou)などの12字がある。

^③ 「凡例」に「兒ノ音ハ詩音ニ於テハ支紙真等に屬シ又羅馬字ノ綴リニ在テハ(êrh)〈エル〉ト為シ本表中子母兩音列ニ屬セサル音ナル」とある。

において「等」と「疼」の2字を韻母 en と eng それぞれに2度ずつ対応させている。つまり、「等」は den と deng、「疼」は ten と teng の発音を与えているが、北京音に deng と teng があるので問題はないのだが、den と ten は北京音にない発音である。『語言自邇集』にも den と ten の発音は記載されていない。

また、『反切表』は「歛(ch'ua)」、「稜(jua)」、「給(gēi)」、「刻(k'èi)」、「倆(liā)」、「哦(nē)」、「您(nin)」、「誰(shēi)」、「塞(sēi)」、「得(tēi)」の音節を収録している。「備考欄」によると、これらの漢字は「特ニ北京ノ普通語ニ用フル發音又ハ用字ナリ」と述べており、当時の北京語に存在する特殊な音節を挙げているようだ。

8.1.4 “声介合母”

『反切表』に53個の声母があり、現代漢語より多い理由は韻母の介音 i、u、ü を声母と組み合わせ「声介合母」を設けているからである。倪海曙〈最早用声介合母拼音的拉丁字母汉语拼音方案〉(1962:9)は“最早用声介合母拼音的拉丁字母汉语拼音方案，似为1908年刘孟扬的‘中国音标字’和1909年黄虚白《汉字音和简易识字法》一书附录《拉丁文臆解》中的拼音方案。”(筆者訳：最も早くに「声介合母」のローマ字中国語拼音方案を用いたのは、どうやら1908年劉孟揚の「中国音标字」と1909年黄虚白の『漢字音と簡易識字法』に付録された「ローマ字臆解」の拼音方案だろう。)と述べている。言い換えれば、『反切表』(1904)の「声介合母」は中国人がより早く利用し、また日本人としては最も早い時期にローマ字表記を使って、創作したものと言えよう。

『反切表』で介音 i をもつ「声介合母」には〈chi〉、〈ch'i〉、〈hsi〉、〈li〉、〈mi〉、〈ni〉、〈pi〉、〈p'i〉、〈ti〉、〈t'i〉、〈yi〉の11個で、介音 u は〈chu〉、〈ch'u〉、〈hu〉、〈ju〉、〈ku〉、〈k'u〉、〈nu〉、〈lu〉、〈shu〉、〈su〉、〈tu〉、〈t'u〉、〈tsu〉、〈t'su〉、〈wu〉の15個で、介音 ü は〈chü〉、〈ch'ü〉、〈hsü〉、〈yü〉4個で、非声介合母は〈f〉、〈h〉、〈j〉、〈k〉、〈k'〉、〈l〉、〈m〉の18個である。声介合母を見ると、介音 i、u は広く対応しているが、介音 ü は j、q、x、ゼロ声母 y のみと綴り、現代漢語の lü (驴、吕、绿など)、nü (女、悪など)の音節は示されていない。従って『反切表』の声介合母分布は完璧とは言えない。

声介合母と韻母の関係を見ると、現代漢語と比べて『反切表』に表示されていない韻母に、齊齒呼の ia、iao、iu、iang、合口呼の uo、ua、uai、ui、uan、uang、ueng、撮口呼の üe、üan、ün、iong など15個あるが、これらは声介合母から読み取れる⁽¹⁾。『反切表』には196個の声介合母を含む音節がある。そのうち介音 i をもつのは「見」、「先」、「兩」、「娘」、「迎」などの89個、介音 u をもつのは「壯」、「軟」、「亂」、「衰」、「竄」などの89個、介音 ü をもつのは「捐」、「圈」、「喧」、「月」などの18個である。

合口呼と声介合母について、『反切表』の音節字から「主」、「出」、「戸」、「如」、「古」、「苦」、「路」、

⁽¹⁾ 例えば、「修」は声介合母の「西(hsi)」と韻母の「烏(u)」を組み合わせ、「hsiu(現代漢語のxiu)」としている。

「牛」⁽¹⁾、「書」、「素」、「妒」、「土」、「祖」、「醋」は全て合口呼に属する字と分かる。しかし、『反切表』は合口呼の箇所に収録せず、韻母「u」の列に収録している。このことから著者は「u」のみを純粹な韻母と見なしたと分かり、声介合母を用いる際の規則だったと言えよう。

8.1.5 「發音心得」

「發音心得」は著者鄭永邦が日本の仮名の發音を参考にしながら、北京語の声母、韻母に發音要領を表示したものである。以下「發音心得」の語句を引用して解説する。

(1) 声母 j、q について

(祭) (齊) ノ (チ) ハ (tsi) 「ツィ」ニシテ、(几) (期) ノ (チ) ハ (ki) ニシテ、齒音牙音等ニ屬スレトモ、北京音ハ (チ) と (キ) ヲ訛リテ混同シ、我「タチツテト」ノ (チ) ト同様ニ發音ス、其喉口音ハ疍趨居曲ノ類是レナリ。

ここでは声母 j、q の齒音字 (祭齊)、「尖字音」と牙音字 (几期) いわゆる團字音が北京音において混同している (尖團合流) ために、同じ「チ」になったと發音変化の理由を指摘している⁽²⁾。

(2) 声母 zh、ch、sh、r について

(知) (chi) (池) (ch'i) (朱) (chu) (初) (ch'u) (詩) (shi) (書) (shu) (日) (ji) ノ發音ニ於ケル (チ) (シ) (ジ) ノ類ハ、何レモ卷舌音又ハ舌上音ト稱へ、本邦ノ五十音中ニ此類ノ發音ナシ、故ニ假リニ ㄷ ノ符號ヲ加へ (チ) (シ) (チュ) (シュ) (ジ) ト為シ、以テ其區別ヲ示ス、以上ノ發音ハ舌ヲ上腭ニ付ケ、舌ノ中央ヲ凹メ、舌尖ニテ (チ) (シ) ノ音ヲ發スレハ、普通ノ (チ) (シ) ヨリ圓ヤカナル音ヲ為ス、是レ蓋シ舌ノ凹ミタル處ニ聲ヲ含ムガ故ナリ。

(日) (ji) (ジ) 類ノ發音モ亦前掲ノ發音法ニ同シ、然レトモ少シニテモ舌尖ヲ動カストキハ (リ) ノ音ニ類似スル音ト成ル、注意スヘシ。

現代漢語の zh、ch、sh、r 声母に卷舌音と舌上音などの各称を加えて、「舌ヲ上腭ニ付ケ舌ノ中央ヲ凹メ舌尖ニテ (チ) (シ) ノ音ヲ發ス」という發音過程を描写している点納得ができる。ri (日) の發音は日本語の「り」にならない注意も大切である。

(3) 声母 z、c、s について

(糸) (ss ü) 茲 (tz ü) ノ (ス) (ツ) ハ齒頭音ニシテ、先ツ上下ノ齒ヲ咬締メ、唇ヲ開キ、前齒ノ間ヨリ音ヲ發スヘシ、但シ少シニテモ唇ヲ狭ムルトキハ、變シテ (素) (su) (租) (tsu)

⁽¹⁾ “牛”は“声介合母”である。

⁽²⁾ 「發音心得」に「北京音ノ「ヒ」ト「シ」ノ混同シタル原因ハ蓋シ「ヒ」ノ強音ナル為メ自ツカラ「シ」音ノ如ク發音スルモノナラン」ともある。

ノ音ト成ル、注意スヘシ。

歯茎音 z, s に対して歯と唇の発音要領を描き、zi と zu, si と su の混同に注意を喚起している。

(4) 単母音

(啊) (a) (ア) ハ充分ニ喉ヲ開キテ聲ヲ發スヘシ、喉ヲ少シク狭ムレバ (a) 「エー」 (e) 「イー」ノ音ニ轉ス。

(額) (ê) (オ) ハ喉ヲ開キ喉ノ奥ニテ發ス「ウ」「ヲ」ト混同セサル様注意スヘシ。

(阿) (o) (オ) ハ (額) (ê) (オ) ト殆ント同一ナルカ如キモ、此音ハ口ヲ窄メ喉ニテ (オ)ノ音ヲ發スヘシ。

(衣) (i) (イ) ハ即チ母音ニシテ (e) (イ) ト相通ス、但シ「ヤイユエヨ」即チ羅馬字ノ (y) 音ニ基キ「イ_ア、イ_ィ、イ_ウ、イ_エ、イ_オ」ノ區別アルヲ以テ子母音ヲ混スヘカラス。

(烏) (u) (ウ) ハ (ユー) ニ通シ母音ナリ、(wu) ノ (ウ) ト混同スヘカラス。

(于) (ü) (イユ_ィ) ハ「(u) (ユー) ノ撮口音ニシテ先ツ唇ヲ窄メテ發音ス (居)

(女) (須) の類是レナリ。

以上広母音の a から狭母音 e, i への開口の変化を喉の動きとして解釈している。また、非円唇の ê に対して、円唇母音 o への混同防止を提起している。次に、母音 i, u に対して接近音の y, w との違いを指摘した。最後に、ü は撮口音であり、唇を窄める必要性を述べた。

(5) 複母音

(餒) (êi) (エ_ィ) 歐 (ou) (オ_ウ) ノ如キ皆ナ喉頭音ニシテカヲ喉頭ニ用キテ發スルモノニシテ此等ノ音ハ喉ノ開閉廣狭微細ノ差ニテ區別セラルヘシ。

複母音の「開閉廣狭」の「微細ノ差」を正確に示したが、「喉頭音」の言い方は理解しづらい。

(6) 鼻音韻尾

(安) (an) (ア_ヌ) ハ始メ「ア」ノ音ヲ發シ、次ニ「ン」ノ音カ鼻ニ抜ケサル様舌ヲ顎ニ當テ「ヌ」ト發音スル如ク輕ク押フヘシ。

(恩) (ên) (エ_ヌ) 亦上ニ倣フ。

(昂) (ang) (ア_ン) ハ充分ニ喉ヲ開キ、「ン」ノ音ヲ鼻ニテ發シ。

(哼) (êng) (エ_ン) 亦上ニ倣フ。

中国語の前鼻音韻尾-n を「ヌ」、後鼻音韻尾-ng を「ン」に対応させているが、-n と「ヌ (nu)」の[n]、-ng と「アン (an)」の[ŋ]に発音の類似性があるためだと推測できるが、日本語の「ヌ」

と「ン」が全て中国語の-n と-ng に対応できるわけではない。

以上、鄭永邦は日本の仮名を用い、漢字の発音を説明し、日本の北京語学習者により正確に北京語を発音する為の発音指導を行った。鄭永邦は北京日本公使館の書記官として、北京語語音の知識を最大限に利用して、発音方法の解説に工夫をされていることがうかがわれる。解説の多くは学習者に大いに役立つが、韻母母音の喉音性、鼻音韻尾の区別などの記述は多少疑問が残る。

8.2 『反切表』の注音

8.2.1 『語言自邇集』との関係

『反切表』の「凡例」には「羅馬字ノ綴リヲ示ス為メ子音列ノ傍ニ単重ヲ掲ケ之ヲ母音列ノ羅馬字ニ合併シテ其発音ノ綴リヲ得ヘシ」と記されているが、そのローマ字表記の由来に関することについては説明がなされていない。そのローマ字表記の由来を考察するため、第六章の5節（『精解』のローマ字表記と『語言自邇集』）に提示した「『語言自邇集』の音韻対照表」と比較し、声母、韻母、音節の面から以下のようにまとめられる。

(1) 『反切表』の声母 53 個のうち『自邇集』にあるのは 41 個で、韻母は「*ei*」、「*eng*」を除き全て『自邇集』と一致している。

(2) 『自邇集』と『反切表』の違う声母は現代漢語の zh, ch, h に対してそれぞれ (ch/chi)、(ch'/ch)、(h /h)⁽¹⁾ となっている。『自邇集』と『反切表』の“j”、“q”と“zh”、“ch” 同様に「ch」で表示し、後者は両者と区別する為、zh, ch の上に^ˇ符号をつけている。『自邇集』にはそのような区別がない。『自邇集』の「^ˇ」記号は有気音を表しているが、『反切表』は「^ˇ」記号で表示されている。また、『自邇集』では声母 h は「^ˇh」を用いたが、『反切表』は「^ˇ」を削除し「h」を使った。『自邇集』（初版：6 頁）は、「The aspirate prefixed to the initial h is a very strong breathing, but the omission of it is not attended with the same serious consequences.」（筆者訳：有気符号「^ˇ」の前に付く h は強く息を吐き出すが、それを省略しても結果は大して変わらない）と述べている。つまり、『自邇集』において「h」と「^ˇh」はほとんど同じ音である。鄭永邦は『自邇集』からの引用にあたり、有気音と混同させないように、この符号を削除したと推測できる。

(3) 『自邇集』では〈en〉、〈eng〉と表記しているが、『反切表』では現代漢語の韻母と同じく〈en〉、〈eng〉を使用し、表記の問題である。そして、『自邇集』は韻母〈iao〉、〈uo〉、〈üe〉をはっきり区分しているが、『反切表』はこの3韻母を全て〈o〉に対応させている。これは声介合母の影響を受けたためだと思われる。これと関連して、『自邇集』の「學」には〈hsio〉、〈hsüa〉2つの読み方がある。「學」は元々文読〈hsio〉と白読〈hsiao〉の発音があったが、〈hsiao〉は『自邇集』にも『反切表』にも収録されていない。〈hsio〉の韻母は「io→yo→ye(üe)」の円唇音の変化から“üe”になったと考えられ、つまり〈hsio〉は「學」の旧音で、〈hsüa〉(xüe)は新しい音である。『反切

⁽¹⁾ 斜線の前項は『自邇集』のローマ字表記、後項は『反切表』のローマ字表記。

表』が収録する〈hsio〉は北京語の特徴を持つ発音と思われる。

(4) 『自邇集』では「黒」に〈hè〉(文読)と〈hei〉(白読)2つの読み方があり、『反切表』は〈hei〉のみを収録している。白読の〈hei〉の口語音を採用したのだろう。また、「若」について『自邇集』では文読の〈ruo〉だけを挙げるが、『反切表』では〈ruo〉と〈rue〉の2つの読み方がある。〈rue〉は「uo→ue」と変化した新たなものである。このような変化は清末の北京語音声の一つの特徴であるが現代北京語には消失した。

以上のことから、鄭永邦は正確で、より理解しやすい北京語音韻表を作るために、トーマス・ウェード氏のローマ字表記の良い点を取り入れただけでなく、符号などを活用して当時の北京語の発音を忠実に表記しようと工夫を凝らしたと判断できる。

8.2.2 『反切表』の反切注音

『反切表』の反切注音を用いた反切字は主に『自邇集』から取り入れている。しかし、声母53個のうち、「祭(chi)」、「齊(ch'i)」、「疽(chü)」、「趨(ch'ü)」、「几(chi)」、「期(ch'i)」、「居(chü)」、「區(ch'ü)」、「池(ch)」、「朱(chu)」、「初(ch'ü)」、「希(h'si)」、「虚(hsü)」、「何(h)」、「克(k')」、「盧(lu)」、「尼(ni)」、「玻(p)」、「坡(p')」、「鼻(pi)」、「詩(sh)」、「糸(s)」、「徳(t)」、「梯(t')」、「都(tu)」、「突(t'u)」、「茲(ts)」、「疵(t's)」、「租(tsu)」、「易(y)」、「遇(yü)」、「屋(w)」の23個は『自邇集』にはなく、韻母は「哀(ai)」、「阿(o)」、「歐(ou)」のみ『自邇集』にある。上述から見ると、著者のオリジナルな音節字は主に声母と韻母の列である。その理由は『反切表』が声韻対照表であり、『自邇集』はそうではないため、『反切表』の反切上下字に当てる適当な漢字を用意する必要があったからだと考えられる。

また、声母j、q、xの行にも『自邇集』にない字が多い。これは尖音と團音を区分するためにj(zii)、q(cii)、x(sii)に対応する音節字を2種の配置したからである。なお、團音の音節字はほとんどが『自邇集』に見られない字である。

『反切表』には『自邇集』の412字を用い、インデックスの順番により387字を取り上げた。声調練習の所に同音異調から「哀、歐、匠、晴、俏、妾、千、居、遮、詳、歐、閒、軟、榮、哥、樂、迷、哦、甯、誰、洒、妒、醋、屋、列」⁽¹⁾の25字が取り上げられた。また、『自邇集』で音節代表字として使われた「阿、綽、性、駱、謬、絲、奇、楷、尺、訛、子、次」などの字は、『反切表』では採用されず、代わりに「啊、戳、姓、羅、繆、糸、齊、開、池、額、茲、疵」などの字を使用した。上述の反切字から見ると、『自邇集』は殆ど入声字であり、一方、『反切表』は主に平声字を中心に取り上げる傾向が見られる。

鄭永邦は『反切表』を編纂する際、『自邇集』の音節字を9割以上採用したことから、ウェード氏の『自邇集』を極めて重要視していたことがうかがえる。そして、『反切表』は文字の筆画数が少ない簡単な字と平声字を採用している傾向が見られる。

⁽¹⁾ インデックスでは「愛」、「偶」、「江」、「井」、「巧」、「且」、「欠」、「句」、「這」、「向」、「偶」、「先」、「輒」、「絨」、「各」、「勒」、「米」、「訛」、「寧」、「水」、「撒」、「肚」、「粗」、「武」、「裂」となる。

8.2.3 『反切表』の仮名表記

『反切表』の声母、韻母の数が現代漢語のそれより多い理由は、前述のように声介合母があるためである。現代漢語の声母、韻母の分類基準に従い分析すると、『反切表』の声母はゼロ声母を含め22個あり、その仮名表記はb (ポー、ピー)、p (ポ̄ー、ピ̄ー)、m (モ一、ミ一)、f (フ_フ)、d (ト一、チ一、ツ一)、t (ト一、チ一、ツ_フ一)、n (ノ一、ニ一、ヌ一)、l (ロー、リー、ルー)、g (ゴ一、ク一)、k (コ一、ク一)、h (ホ一、ホ_フ)、j (チ一、チュ_イ)、q (チ一、チュ_イ)、x (シー、シ一、シユ_イ)、z (ツ一、ツウ)、c (ツ一、ツウ)、s (スウ、ス一)、zh (チ一、チュ)、ch (チ一、チュ)^①、sh (シー、シユ)、r (ジ、ジユ)、y (イー、イユ_イ)、w (ウ)となる。同じく『反切表』の韻母は18個あり、その仮名表記はa (ア)、ai (ア_イ)、an (ア_ヌ)、ang (ア_ン)、ao (ア_オ)、e (オ)、ei (エ_イ)、en (エ_ヌ)、eng (エ_ン)、i (イ)、ie (イエ)、ian (イエ_ヌ)、in (イ_ヌ)、ing (イ_ン)、o (オ)、ou (オ_ウ)、ü (イユ_イ)、u (ウ)となる。

ian以外の複母音韻母は声介合母と韻母の組み合わせで、その音を構成する。鼻音韻尾は、-nと「ヌ(nu)」の[n]、-ngと「アン(an)」の[ŋ]に発音の類似性があるため、「前鼻音n」を「ヌ」で表し、「後鼻音ng」は「ン」で表している。有気音は仮名表記の上に「一」をつけて表している。

また、中編第六章の第3節に提示した表5「明治時代における北京官話教科書仮名表記の変遷年表」により、『反切表』は『亜細亜言語集』と『日漢英語言合璧』の良い点を受け継ぎ、北京語の実態にそって仮名表記を改良したことが分かる。そして、3者の共通点の割合から考えると、『反切表』は主に『言語合璧』を参考にしたと思われる。そして、中編第四章の表2「明治時代から戦前までの中国語教科書とその学習補助教科書一覧表」と第六章の表4「明治時代における仮名表記中国語教科書一覧表」から見ると、初めて仮名表記を使用した北京官話教科書は『亜細亜言語集』である。『亜細亜言語集』は廣部精がトーマス・ウェード氏の『語言自邇集』を基にして編纂したものである。『亜細亜言語集』から『反切表』までの25年間に北京語の音声に関わる教科書や字典等の中で、声母と韻母の単位で別々に仮名表記を施した音節表は鄭永邦が編纂した『反切表』にしか見られない。つまり、この『反切表』は声母、韻母に仮名を表記した最初の北京語音節表であると言える。

8.3 鄭永邦による北京語音声研究の独創性

以上のことから見ると、『反切表』の声母、韻母の表記は現代漢語と異なる点が存在するが、その音節分布はほぼ同じである。鄭永邦の北京語音声の独創性は以下の5点にまとめられる。

(1) 『反切表』は反切注音、仮名表記、ローマ字表記を全て収録している声韻対照表であり、3種類の音声表記の形式は明治時代において唯一の資料であり、音声表記の集大成である。

(2) 鄭永邦はウェード氏の『語言自邇集』(1867)のローマ字表記と発音符号を参考にすると同時に、「声介合母」の理念を徹底的に運用した。先行研究から見ると、『反切表』は日本人が初め

^① 本文には「チ一」の上に「フ」をつけて、「ch」の仮名表記をしているが、入力制限で「フチ一」で表記した。

て声介合母を用いて編纂した北京語音韻対照表であり、その独創性は極めて優れている。

(3) 鄭永邦は広部精の『亜細亜言語集 支那官話部』(1880)と自身が呉大五郎と共編した『日漢英語言合璧』(1888)の仮名表記を参考にしつつ、声母と韻母の単位で仮名を振るなど、従前の仮名表記を改善し新たな仮名表記法を採用した。また、『反切表』は声母と韻母の単位で別々に仮名表記を付した最初の北京語音韻対照表であると言える。

(4) 鄭永邦は外交官として長年北京に駐在したことで、北京語の音声に対する鋭く深い見識を修得し、有気音、巻舌音のような中国語の特殊な発音に仮名、ローマ字以外に符号もを付して表記した。これは20世紀初期の日本人がどのように北京語の音声を認識していたのかを考察するのに役立つものと考えられる。

(5) 『反切表』に反映されている音韻知識は、反切注音、仮名表記、ローマ字表記の使用に留まらず、中古音韻から近代音韻の要素も見受けられる。例えば、中古音韻で扱う舌上音(そり舌音)、36字母の「支紙真」など発音、《広韻》の韻目、反切注音、韻図などや、近代音韻で扱う尖音、團音、声介合母などである。これらの知識の運用状況から、鄭永邦は中古近代音韻学に対して造詣が深ったと考えられる。

(6) 『反切表』が表す韻図、反切、ローマ字表記、仮名表記などの音韻特徴から、この表は鄭永邦の強い創意によるものだと判断できる。従って、『反切表』は明治時代末期の日本における北京語音声研究の代表的な音節対照表であり、鄭永邦は日本の北京語音声研究史においても大いに貢献したと評価できる。

第九章 鄭永邦による北京語多言語対照教科書の研究

9.1 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』

9.1.1 『日漢英語言合璧』

『日漢英語言合璧』(以下は『語言合璧』と略称)は鄭永邦、吳大五郎⁽¹⁾の共編により、1888年(明21)に出版され、発行人は可否茶館主鄭永慶で、鄭永邦の実兄である。本書は序論に述べたように劉慶汾の序、島田胤則の序、「凡例」、「自序」及び本文の5部分から構成され、全195頁である。本文は「單辞」、「短章」、「談論篇」の3部分に分かれている。本文は中国語を中心にし、英語と日本語それぞれ左側、右側に対訳形式を配置されている。中国語と英語の字頭には仮名で発音を表記し、日本語には振り仮名をつけている。以下に例を示す。

ユー カム ブウーレート ニーライタイワヌラ アナタ オイデ アマ オン
You come too late. 妳來太晚了。 汝ノ御來ガ餘リ晩フゴザイマス。

声調は漢字の四隅に圈点をつけて表示している。表紙には「従六位島田胤則校閲」や黎庶昌⁽²⁾が題字した「言語之科」と記している。劉慶汾、島田胤則の序と「自序」は主に成書の背景、執筆目的が記されている。それぞれ以下のように述べている。

劉慶汾⁽³⁾の序は

春秋叔向有言曰、子産有辞(辭)、諸侯賴之。若之、何其釋辞(辭)。今天下五州互市、聘使往來。苟言語不通、則事理不析、畛域之念、必由此而生。世至於今、辞之尤不可釋也。如是、吾友鄭君固旃、吳君希靜、日東世族也。游學我國久。於言語文字、隨時領略、積漸貫通。二君子復具兼人之才、旁及歐學、亦有所得。明治十八九季間、先後歸國、同仕外部。公餘之暇、合著日漢歐語言合璧一集。旁綴本邦字音、欲使便於公卿大夫、以逮商旅。

⁽¹⁾ 吳大五郎は『官話指南』の著者の一人である吳啓太の弟である。1861年(文久元年)8月生まれ。「清国へ本省留学生派遣雑件」所収の「履歴書」によると、1873年(明7)に長崎勝山小学校に入学し、1874年(明8)に卒業した。同年長崎英語学校に入学し、1875年(明9)4月に中退した。その後中国に渡り廈門、福州、上海など遊歴している。1878年(明11)7月に帰国し、東京外国語学校漢語学科に入学した。1880年(明13)2月に退学し、7月中旬北京に赴き、私費留学で北京官話を学習し始めた。1883年(明16)官費留学生として北京に派遣された。また、外交史料館所蔵の外務省記録「職員並履歴に関する各庁往復書」によると、1888年(明21)に英国倫敦領事館書記生を勤めていた。

⁽²⁾ 黄万机《黎庶昌評傳》(1989)により、黎庶昌は1837年8月15日に貴州遵义に生まれる。著名な外交官、散文家である。早期は鄭珍に師事し、経世の学を修める。1876年より中国は各国に公使を派遣するが、黎庶昌は推薦を得て欧州に赴き、駐イギリス、ドイツ、フランス、スペインの各使館の顧問を歴任する。1881年から1884年までと1887年から1889年まで、2度にわたり道台の身分で清国駐日本国公使に任じた。在日中は日本政府の文人雅士と広く交友し、文酒会を開くなど文学的な交流を行い、日本人士に深く敬慕される。これも日本人の著書に中国人の黎庶昌の題字を求めた原因である。『語言合璧』の題字は黎庶昌が二回目公使在任中のことである。

⁽³⁾ 秦国经主编《中国第一历史档案馆藏 清代官员履歴档案全编 7》(1997)により、劉慶汾は1854年に貴州遵义に生まれる。字は子真。黎庶昌の弟である黎庶誠の娘婿である。黎庶昌は清国朝廷に駐日本国公使を命じられた時、自身の娘婿と姪の婿劉慶汾を連れて日本で自ら教育に当たった。学問成就の後、1884年に公使徐承祖の抜擢により長崎理事署東翻訳員に任じた。1888年に東京使署翻訳兼箱館副理事に任じ、第六代公使の任期満了まで務めた。その数年後、清国駐日本公使館参贊に抜擢される。

島田胤則⁽¹⁾の序は

吳鄭二氏幼ヨリ清國ノ語ヲ學ビ、成童ノ年ニ及ンデ、更ニ北京ニ往キ、深ク研磨ヲ加ヘリ。時余我駐清公使ニ參贊タリ、二氏ニ謂テ曰ク。子等既ニ清語ニ通曉ス、亦應ニ英語ヲ兼修スヘシ。今ヤ英語ノ我東洋ニ於ル通商ニ交際ニ最モ緊要ニシテ。之ヲ解スル非レハ、事ニ臨ミ甚ハタ不便多カラント。是ニ於テ乎、二氏奮勵シテ英語ヲ學ヒ、而ソ得ル所ノ語言ニ一々清譯ヲ施セリ。蓋シ又其習熟スル所ノ清語活用ノ練磨ニ備ヘンガ為メナリ。既ニソ日積月累、衰然小冊子ヲ成スニ至レリ。

「自序」は

我國ニ於テ支那語ヲ學ブニ亜細亞言語集一書アリニ止リ。尚且ツ完備シタルモノニ非ラズ。其他二三ノ語學書無キニザルモ。我國現今勸學ノ道絶ヘ空シク志ヲ抱テ果サズルモノアルハ、亦痛嘆スル堪ヘタリ。要スルニ東洋ノ貿易ニ於テ尤モ首要タル者ハ、漢英ノ兩語ニテ、此レヲ當務ノ急トス。余輩清國ニ在テ之ヲ學ブ多年、曾テ課餘ノ雜記ヲ裒集シテ、之ヲ篋中ニ藏スル久シ。今ヤ日清ノ貿易振作ノ時期ニ際シ。之ヲ世ニ公ニセバ、未ダ裨益スル所無シトセズ。惟タ此書僅カ入門ノ階梯ニ過ギズ。

劉慶汾、島田胤則の序と「自序」から『語言合璧』が成立した時には、すでに英語は通商時に必要な言語のひとつになっていた。そして該書は官員、商人、一般の人々などのために編纂された初級教科書である。また、島田胤則については履歴と序文から英語への造詣が深いことが分かる。書名の下に「従六位島田胤則校閲」と明記されていることから、英語の校閲あるいは英語訳において重要な役割を果たしたと考えられる。この判断は後述の『四語合璧』の校閲者に、ロシア語翻訳官でもある陸軍大学教授正七位河津敬次郎⁽²⁾が名を連ねていることでさらに裏付けている。ちなみに、劉慶汾の序から鄭永邦と吳大五郎が鄭固旆、吳希靜とも呼ばれていたとも分かる。

9.1.2 『日清英露四語合璧』

『日清英露四語合璧』（以下は『四語合璧』と略称）は前述『語言合璧』の姉妹編であり、著者も同じく鄭永邦、吳大五郎である。1910（明43）の出版、発行者は島田太四郎である。「辯言」、島田胤則の序、「自序」、「凡例」、本文から構成され、全361頁である。表紙には「従六位島田胤則 陸軍大学教授正七位河津敬次郎校閲」と記されている。島田胤則の序、「自序」は『語言合璧』の内容と全く同じである。「凡例」で『語言合璧』には無かった「開口齒音 zi、ci、si」に関する記述が追加された。『語言合璧』と『四語合璧』の本文の構成、体裁、内容は殆ど同じであるが、『四語合璧』にはロシア語が加わえられた。4言語の配置は次の通りである。

⁽¹⁾ 島田胤則は生卒年不詳。元の名は嶋田種次郎といい、長崎県平民である。明治17年外務省書記官に任じ、清国北京公使館の在勤になる。長崎の済美館（全身は英語伝習所）で英語の教師をしていた。

⁽²⁾ 河津敬次郎は生卒年不詳。東京外国語学校露語科出身。そのうち、陸軍大学教授となる。日露戦争の時、ロシア語翻訳官として活躍している。

アナタ オイデ アマ オソ
汝ノ御来ガ餘リ晩フゴザイマス。

ニーライタイウス ラ
妳來太晚了。

ユー カム プウー レート
You come too late。

ウィ スリーシコム ポーズンノ
Вы слишком поздно。

『四語合璧』でロシア語を加わえた理由について、「辯言」は以下のように述べている。

緊鄰タル露國ハ正ニ其衝途ニ當リ、我國トノ親善ナル關係、厯大ナル商路密切スノ如キモノアリ、事ニ茲ニ從ハントスルモノ、先ツ其語言ニ通達スルヨリ須要ナルハナシ、此レ本編ヲ刊行シ、以テ世ノ同志初學入門ノ便ニ資セントスル所以ナリ。

『四語合璧』と『語言合璧』の出版時期には12年の隔りがある。『四語合璧』の出版は日露戦争後から第1次大戦前の期間にあたり、当時ロシア語は通商、外交などにおいて重要な言語であった。そこで、『語言合璧』を基礎にしてロシア語を追加した。『四語合璧』のロシア語の校閲は陸軍大学教授河津敬次郎が担ったのだらう。

また、『四語合璧』では『語言合璧』の語彙に対して13箇所修正している。以下の通りである。

顔色 (p. 35) → 顔料 (p. 61) ⁽¹⁾	鸚哥 (p. 46) → 鸚哥兒 (p. 81)
學房 (p. 51) → 學堂 (p. 89)	城府 (p. 51) → 城鎮 (p. 87)
火車站 (p. 52) → 火車站 (p. 91)	荳餅 (p. 69) → 油滓 (p. 119)
拏 (p. 109) → 拿 (p. 193)	狠公道 (p. 116) → 很公道 (p. 207)
中等車 (p. 119) → 二等車 (p. 213)	上等車 (p. 119) → 頭等車 (p. 213)
收條 (p. 127) → 掛號 (p. 231)	犯禁 (p. 131) → 絕版 (p. 239)
多僂 (p. 198) → 多嘴 (p. 357)	

これらの語彙の用例は1回に限らず、“火車站”は『語言合璧』に5回使われるが『四語合璧』ではすべて“火車站”に修正されている。

また、『四語合璧』で語句を追加した箇所は三つがある。

我還沒喝過這麼好的。(p. 114) → 我還沒喝過這麼好的酒哪。(p. 205)

天很冷，妳進來罷。(p. 178) → 天很冷，妳可以進去罷。(p. 327)

その上、「您總沒喝酒啊。」(p. 201)との一文が追加された。

⁽¹⁾ この用例は『語言合璧』の用例→『四語合璧』の用例としている。

9.1.3 両書の先行研究

両書の先行研究は音声と語彙に分けられる。『語言合璧』の音韻については吳菲(2007)、王雪(2017)があり、語彙については楊杏紅、楊艷君(2013)⁽¹⁾がある。『四語合璧』については林曉京(2014)がある。

吳菲《〈日漢英語言合璧〉语音教学研究》(2007)は『語言合璧』の音韻体系、仮名表記の教学上の有用性を考察した。音韻体系の解明のために、仮名表記を声母、韻母、声調ごとに分析し、発音表記符号、表記方法についても考察した。そして、仮名表記を国際音声記号に転写し、『語言合璧』の仮名表記の正確性を検討した。

王雪「明治・大正期における日本人のr化音の学習」(2017)は『語言合璧』のr化音(アル化音)に焦点を絞り、明治・大正時代の13点の北京官話教科書に記されているr化音を考察した。『語言合璧』の凡例に挙げられた特別な符号について現代漢語のピンイン符号と対比させて、その特徴も解説した。結論として「大部分の日本人のr化語とr化音に対する認識における科学性が乏しかった」と述べた。しかし、『語言合璧』については「ほぼ完璧に発音を表しうる仮名表記システムをもち、r化音と音交替に対する科学的な認識は、当時最高の位置付けがなされる。」(141頁)と評価している。

『四語合璧』について林曉京《〈日清英露四語合璧〉的汉语语音词汇研究》(2014)は音韻と語彙の2方面から分析した。音韻は声母、韻母、声調から考察し、仮名表記を国際音声記号に転写し、両者の異同を比較した上で、『四語合璧』の音声教育の方法と局限性を分析した。声調は主に連続変調の現象を検討している。語彙は英語、中国語の対訳を中心に、単音節語、二音節語、三音節語、外来語など語彙の特徴を考察した。それらの分析から、当時の北京官話音声の特徴を明らかにした。

楊杏紅、楊艷君《日本明治时期北京官话课本语言的词法偏误分析》(2013)は『語言合璧』、『英清会话独案内』の中英対訳について考察した。名詞、動詞、形容詞、量詞、代詞、副詞、介詞、連詞、助詞、語気詞に分け、各教科書の対訳には“誤用”、“誤加”、“残缺”、“重复”、“位置不当”などの問題が存在すると論じた。これらの誤りについては著者の漢語レベルと当時の時代特徴と関係があると指摘した。

9.2 二書の北京語表現

両書の第一部分は「単辞」、「数字、数目、時辰、天文、地理、人文、飯具、果子、顔色」などの単語グループに分けてあり、北京語語彙は多くはない。第二部分は「短章」、標題からも分かるように短文である。第三部分は「談論篇」、一問一答形式を取り、「上船、走海、飯館子、拜客、鐘錶鋪、鞋鋪、打聽人」などのテーマに沿って日常会話が展開される構成となっている。本章では本論文第一章でも使用した北京語辞典9種をもとに北京語特有の語彙を考察した。

語彙調査を経て、北京語語彙を166個見出すことができた。なお、これらの北京話特有の表現は

⁽¹⁾ 同論文は楊杏紅2014《东亚汉语史书系 日本明治时期北京官话课本语法研究》にも収録されている。

基本的に「短章」と「談論篇」に分布していた。両書の北京話特有の表現は『官話指南』と比べると数の上ではかなり少ないが、本論文第一、二章で見えてきたように『官話指南』は北京語の特徴が非常に強い教科書であり、自ずと北京語語彙が多く使用された。鄭永邦は『官話指南』の出版後に、『語言合璧』と『四語合璧』を編纂しており、特に『官話指南』と『語言合璧』の出版時期はわずか6年の時間的差しかない。では、『官話指南』と『語言合璧』、『四語合璧』比較した場合、この二書の北京語にはどのような特性があるのだろうか。本節では北京語語彙、兒化詞を中心に分析する。

(1) 北京語語彙

両書に見える北京語語彙は次の通りである。

1) 『官話指南』にもある語：43個。

晌午、年下、早起、娘兒們、茅廁、胰子、晌飯、野貓、飯莊子、跑堂兒的、合式、這麼着、吃烟、短、多嗜、來著、攔、光景、盪、約摸、刷白、覺着、僭們、舒坦、苦力、乏、您納、雞子兒、得、布、勞駕、所、老、起、打、拾掇、收拾、簡直、衚衕、儘溜頭兒、管保、竟、宗。

2) 『官話指南』にはない語：14個。

共總（所有的，整个）⁽¹⁾、嘟嚕（形状、分量相同或相近的东西簇成可下垂的串儿。用于其它事物喻量多。）、抖擻（气温起伏不定使人因为时常脱衣而容易得病。）、底下人（仆人、随吃。）、大發（超过适当的限度，过度，过分。）、胸匍子（胸部）、自來火（打火机）、太陽/日頭⁽²⁾、弟兄/哥兒們、姐妹/姐兒們、賤/便宜、顛頰/顛幫子（指腮部）、小牛/牛犢子、前半天/早半天（上午、午前）。

1) の語彙については明治時代の北京官話教科書にある北京語特有の語彙である。例えば、楊杏紅(2014)も明治時代の北京官話教科書に見える北京語特有の語彙の代表的なものとして「所、起、打、您納、僭們」などを挙げた。2) は『官話指南』に用例がなく、意味を解釈していないため、本研究では字面からは意味が分かりにくいと思われる語彙について、北京語辞典を参考に積義を加えた。

上述の例から両書の特徴として、一部の語彙に同義語を提示していることが指摘できる。上記で斜線のある例で、例えば“姐妹、弟兄、大年初一、老人”などは両書でその横にそれぞれ“姐兒們、哥兒們、年下、老頭兒”と記されている。斜線の後の語が北京語語彙である。このことから、当時において北京語特有の語彙は依然として使用されていたが、斜線の前の現代漢語の言い方がより普及していたと考えられる。あるいは学習者にこれらの北京語特有の語彙を修得させるためにあえて

⁽¹⁾ 括弧内は当該語の積義。

⁽²⁾ 「単辞」では「太陽（或）日頭」のように同義語を一緒に提示する例がある。本節では便宜上「/」を使い「太陽/日頭」と表記した。

列記した可能性もある。

上記で挙げなかったものに“鬧天氣”⁽¹⁾がある。北京語辞典9冊には収録されていない語であるが、傅民、高艾軍(2013:645)などの辞典には“鬧天兒”は収録されており、“阴雨风雪天气”の意味である。『語言合璧』と『四語合璧』の用例から“鬧天氣”は“鬧天兒”と同じ意味だと考えられ、“鬧天氣”も北京語特有の語彙であろう。

なお、“晚半天”と“後半天”について両書はこの2語をともに「午後」と訳しているが、宋孝才、馬欣華(1982)によると“後半天”は“午后，下午”の意味で、“晚半天”は“傍晚，晚上”の意味であるため、“晚半天”の意味を誤解したのだろう。

(2) “兒化詞”

本論文の第一章でも論じたが、兒化は北京語の最も重要な言語特徴のひとつである⁽²⁾。『語言合璧』と『四語合璧』には78個の“兒化詞”(重複を除く)がある。具体的には以下の通りである。

妞兒、女孩兒、小孩兒、老頭兒、嘴唇兒、姪兒、姪女兒、媳婦兒、下巴頰兒、花兒、房頂兒、机檯兒、燈兒、砍肩兒、汗褸兒、七星罐兒、戒指兒、烟卷兒、鼻煙壺兒、頂針兒、兜兒、裏兒、鈕子眼兒、信封兒、墨盒兒、胡椒麪兒、棗兒、山藥豆兒、羊羔兒、猴兒、家兔兒、松鼠兒、家雀兒、小雞兒、蝴蝶兒、火虫兒、麻子臉兒、等一等兒、這兒、一塊兒、那兒、聲兒、名兒、油味兒、靜靜兒的、會兒、這溜兒、店兒、步兒、半兒、工夫兒、飯廳兒、樣兒、總碼兒、門口兒、今兒個、今兒、下邊兒、樣兒、分兒、球兒、前兒、現成兒、鞋臉兒、鞋後跟兒、道兒、賠本兒、兩下兒、準兒、時候兒、幾兒、歲數兒、妞兒、抄近兒、歇歇兒、信封兒、刀兒、價兒、鸚哥兒。

『官話指南』に比べ、『語言合璧』にはわずか78個の兒化詞が採用され、『官話指南』のおよそ半分当たる。しかし、『語言合璧』の総字数は『官話指南』の半分程度であるため、このことを考慮すれば『語言合璧』も北京話の特徴が比較的現われていると言える。

9.3 二書の北京語仮名表記

9.3.1 『語言合璧』と『四語合璧』の発音表記

両書の「凡例」ではウェード氏のローマ字表記を取り上げ音声を説明しているが、本文にはそれを使わずに、仮名のみを使用した。また、鄭永邦は中国語の特殊な発音に対して、仮名以外に「ˊ」、「ˋ」、「ˊˊ」、「ˋˋ」のような符号も採用した。ここでは両書の「凡例」および『四語合璧』で追加した項目について説明する。

(1) 声調の説明。「凡例」では、「漢字ノ四方ニ圈點ヲ施セルハ。即チ四聲ノ別ヲ示スモノナリ。

⁽¹⁾ 天氣很悶。要鬧天氣了。(『語言合璧』、171頁)

⁽²⁾ 丁鋒2000、8頁。

此四聲ハ、北京官話ノ音聲ニシテ。」と記している。そして、四声の発音法について以下のように描写している。

詩韻ノ五聲トハ。悉トク相叶ハズト雖モ。此四聲ヲ正サレバ。言語ノ腔調ヲ成サズ。例ヘバ哀ハ上平。埃ハ下平。矮ハ上聲。愛ハ去聲。此四字音ヲ同フシテ聲ヲ異ニセリ。其別只タ發聲ノ輕重緩急ニ在リ。例ヘハ。上平ハ（ア）音ヲ重發シテ。急ニ（イ）音ニ止ム。恰カモ我應詞ノ調ニ彷彿タリ。下平ハ（ア）音ヲ輕發シテ。（イ）音ヲ抑フ。猶ホ染料籃玉ノ發音ニ近シ。上聲ハ平調ノ（ア）音ヲ緩ヤカニ發シ。（イ）音ニ止ム。即チ（アーイ）ト附音スベキカ。去聲ハ高調ノ（ア）音ヲ極メテ強ク發シ。（イ）音ヲ以テ急ニ止ム。即チ（アアイ）トモ附音スベシ。

(2) 有氣、無氣の説明。有氣音について「漢語字頭ニ一符ヲ施スモノハ。出氣ノ記號トス。」と記されている。両書の有氣符号は全て漢字の字頭に付けられたが、本文においては仮名の音声表記があるのみで、有氣符号は使われていない。

(3) 兒化音の説明。兒化については挙例して説明している。

孩兒二字ノ如キ。其字音ヲ分テバ。^{ハイアル}（孩兒）トナルモ。言語ノ勢ニ於テハ。（ハル）ト成ル。此他^{イチ° エスアル}一點兒ハ（イチ° エール）。^{‘コー・コーアル}個個兒ハ（‘コーコル）等。

(4) 前後鼻音の説明。鼻音について「漢音ニ寛窄ノ別アリ。我（ヌ）ハ即チ窄音ニシテ。（ン）ハ寛音ナリ。」と記している。両書では胖（パ^ヌ）⁽¹⁾ 以外は全て前鼻音韻尾-nを「ヌ」、後鼻音韻尾-ngを「ン」に対応させている。胖（パ^ヌ）は誤植であろう。

(5) 符号「´」について。符号「´」は「喉頭音及び舌音。唇音ノ喉頭ニ響クモノ」とある。王雪（2017）によると、符号「´」は主に舌根音 g、k、h が声母の音節、一部の主母音が e の音節、韻母が ou の音節に付けられている。「唇音ノ喉頭ニ響クモノ」は「現代の音声学では理解できないが、彼自身の聴覚的に喉が響く音節を指す」⁽²⁾ と指摘している。また、「墨（‘モー）/磨（モー）」、「本（‘ボエヌ）/本（ボエヌ）」、「駱（‘ロー）/蘿（ロー）」、「盒（‘ホー）/合（ホー）」、「給（‘ケイ）/給（ケイ）」等の表記から見ると、符号「´」の使い方に混乱があると言えよう。

(6) 符号「·」について。符号「·」は「撮口音ニシテ。」⁽³⁾ とある。王雪（2017：146）は「正文では撮口音 u がある音節は一律に符号··を書き添えている」と指摘している。しかし、本文では「繞（シヤウ）」、「霜（シヨワン）」、「熱（‘ジオー）」などにも符号「·」を用いているが、これは誤植と思われる。

(7) 符号「°」について。符号「°」は「舌音ニシテ。」とある。王雪（2017：146）は「声母

(1) 『語言合璧』と『四語合璧』はそれぞれ75頁、131頁に用例がある。

(2) 王雪2017、145頁。

(3) 「撮口音」は現代漢語拼音の「撮口呼」に相当する。

が d、t で、韻母が i、e、ie、iao、ian、ing、u である音節に使用されている。」と指摘している。『語言合璧』と『四語合璧』では“這兒有床都是很乾淨得。”⁽¹⁾ の都に「ツ一」と注音し、du の近似音に読ませようとしているが、文意から dou と読むべきであり、誤記と思われる。

(8) 符号「ㄣ」について。符号「ㄣ」は声母 zh、ch、sh、r の音節に使っている。しかし、鎮(チエヌ)、主(チウ)などのような少数の例で「ㄣ」がないものも見られるが、それは誤植だと思われる。また、『語言合璧』の「走(ツォウ)」と『四語合璧』の「手(シォウ)」は卷舌音の符号「ㄣ」と歯茎音の符号「ㄣ」が付けられているが、符号の向きが上下逆さまであるので誤植だと思われる。

(9) 符号「ㄣ」について。符号「ㄣ」は『四語合璧』のみに見られ、「開口齒音ニシテ。」とある。すなわち、歯茎音 zi、ci、si の場合のみ符号「ㄣ」を用いる。王雪(2017)は『語言合璧』に子(ツ)、厠(ス一)などの例が見られると指摘したが、筆者が調査したところ、王雪が提示した頁にはそれらの表記を確認できず、全文でもその用例がないことが分った。

以上のことから、一部誤記、誤植はあるが、鄭永邦は正確な北京語を学習できるように、また北京語発音の特徴を説明するため、補助符号を導入したのである。

9.3.2 声母と韻母

『四語合璧』は『語言合璧』の語彙に対して多少の修正を加えたが、仮名表記はほとんど一致している。歯茎音 zi (ツ一)、ci (ツ一/ス一)、si (ス一) の表記にのみ相違が見られ、『四語合璧』では符号「ㄣ」を新たに加えた。ここでは両書の仮名表記を整理し、ピンインと仮名表記の音節対照表(表6)を作成した。以下で声母、韻母、特殊の3方面から仮名表記を分析する。

(1) 声母

両書ともに特殊な表記符号を多用することで、学習者に中国語の有気音や撮口呼などをさらに理解しやすいよう工夫している。特殊な表記符号を使うため、異なる韻母に対応するため同じ声母の発音であっても、複数の仮名表記が現れる。例えば、声母 b は濁音バ行と半濁音パ行に対応するだけでなく、‘ボ、‘ペ、‘ポなど符号付きの仮名にも対応している。

以下に具体例を挙げる。

b、p は濁音のバ行と半濁音のパ行、及び‘ボ、‘ペ、‘ポと対応している。m はマ行、‘ム、‘メ、‘モで、f はフのみ、d と t はタ行ツ、チ‘トで、n はナ行、‘ノ、ニで、l はラ行、リ、‘レ、‘ロで、g と k はカ行、‘ク、‘ケ、‘コで、h はハ行、‘ヘ‘ホで、j と q はチ、チで、x はシ、シで、zh、ch はチ、‘チ、チ、チで、sh はシ、‘シで、r はジ、‘ジ、シ、ヤで、z はツ、ツ、‘ツで、c はツ、ツ、ス、スで、s はサ行、ス、シと対応している。ゼロ声母はア、イ、ウ、エ、イ、‘オ、ユ、ヤ、ユ、ヨ、ワと対応している。

⁽¹⁾ 『語言合璧』106頁、および『四語合璧』187頁。

h, r に対応している仮名はそれぞれハ行、サ行であるが、実際にはカン（虹）、ヤウ（若）の音と対応する場合もある。詳細は下記の「特殊な仮名表記」にて考察する。また、上述のような符号「^ˊ」、「[˙]」、「^ˋ」の誤用、声母 g（ケ）、s（‘ソ）、r（^ˋシ）、sh（^ˋシ）z（^ˋツ）⁽¹⁾等の現象や、梁（liang）を（ニヤン）と注音したものなどである。

(2) 韻母

両書の韻母は 37 個あり、韻母 ueng は本文には見られないが、「凡例」に ueng（ウオン）と説明している。また、本文に「數^ˋシウ／樹^ˋシウ」などのように「ウ」を小文字と区別する箇所もあるが、ここでは同じ表記と見なして「ウ」に統一する。

韻母の仮名表記の対応関係は以下の通りである。

- 1) 声母 f, zh, ch, sh, r, z, c 以外の声母と綴る際、韻母 a, o, e, i, -i, u, ü は長音「一」で表示している。
- 2) 文末に使用している疑問詞や感嘆詞の「呢、呀、罷、阿、麼、哇、哪、啊」はほとんど長音「一」を使わず、「ニ、ヤ、バ、ア、マ、ワ、ナ、ア」で表記している⁽²⁾。
- 3) 声母 z, c の場合、韻母の仮名表記は a（アー）、ai（アイ）、ao（アウ）、ou（オウ）、an（アヌ）、en（エヌ）、ang（アン）、eng（エン）、ong（オン）、u（ウー）、uo（ワー/オー）、ui（ウイ）、uan（オワヌ）となる。
- 4) 声母 f は特殊な存在で、以上のルールとは関係なく各音節の発音と似ている仮名を用いたと思われる。韻母の仮名表記は a（アー/ワ/ワー）、ei（エイ）、an（ワヌ/アヌ）en（エヌ）、ang（アン）、eng（オン）となる⁽³⁾。
- 5) 韻母 ai, ei, ui は「イ」で、ao, ou は「ウ」で、an, in は「ヌ」で、iong は「ヨン」で、ang, ing, ong は「ン」、ie は「エー」、iao は「ヤウ」、uang は「ワン」、iang は「ヤン」、uan は「ワヌ」、ueng は「ウオン」、er は「エル」で表記する規則がある。
- 6) 声母 zh, ch, sh, r の場合、それらに対応している韻母は、必ず同じ仮名表記を用い、a（ヤー）、e（オー）、ai（ヤイ）、ao（ヤウ）、ou（オウ）、an（ヤヌ）、en（エヌ）、ang（ヤン）、eng（オン）、ong（ヨン）、u（ウー）、ua（ワー）、uo（ワー/オー）、ui（ウイ/ユイ）、uan（ヨワヌ）、uang（ヨワン）となる。

9.3.3 音節の対応性と特殊な仮名表記

(1) 音節の対応性

『語言合璧』、『四語合璧』と音節の対応性を分析するため、両書の音節字表を作成した。この表

⁽¹⁾ それぞれ対応している漢字は給（ケイ）、繞（^ˋシウ）、嗽（‘ソウ）、走（^ˋツウ）、霜（^ˋシヨワン）などである。

⁽²⁾ 「啊、呢、哪」は一部「アー、ニー、ナー」と長音で表記することもある。

⁽³⁾ それぞれに対応している漢字は乏（フアー）、發（フ^ˋ）／髮（フワ）發（フ^ˋ）、啡（フ^ˋイ）、飯（フ^ˋヌ）／翻（フ^ˋヌ）、分（フ^ˋヌ）、方（フ^ˋアン）、風（フ^ˋオン）である。

から、『語言合璧』、『四語合璧』は総合的に言えば、その正確性が評価できると思われる。しかし、初(チエー)、出(チウ)などのような同じ音節にもかかわらず、異なる表記を使用していることから、鄭永邦はおそらくその音節の発音に対して統一せず、幾つの近似音を表記したのだろう。また、『語言合璧』、『四語合璧』は現代漢語と同じく介音 i, u は韻母として扱っているが、略(リㄛ)、泉(チエヌ)、雲(イェヌ)の介音 ü の音節のみ、撮口音の符号「ㄛ」を声母に付けているため、声母として扱っているように思われる。その意図は不明である。

表6 『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の音節字表

韻母	『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の音節字
i	イー/yi : 椅、ビー/bi : 鼻。ピー/pi : 皮。ミー : 米。チー/di : 地。チー/ti : 剃。ニー/ni : 泥。リー/li : 禮。チー/ji : 雞。チー/qi : 七。シー/xi : 西。チー/zhi : 直。チー ‘チー/チー/chi : 池、吃。シー/shi : 失。ジー/ri : 日。ツ、ツー、ツー、ツ/zi : 子、字。 ツー、ツー/ci : 次。スー、スー/si : 四。
u	ウー、ウ、‘ホウー、ホウー、ブー/五、悞。午。プー/pu : 葡。ムー、‘ムー/mu : 目、木。 フー、フ/fu : 服、夫。ブー/bu : 布。ツー/du : 嘟。‘トー、ツー/tu : 塗、土。ルー/lu : 路。‘クー、クー/gu : 姑、菇。‘クー、クー/ku : 褲、袴。‘ホウー、ホウー、‘ホウ/hu : 戸。 チウー、チウ/zhu : 主、豬。チエー、チユー、チユウ、チウ、チユ、‘チュ/chu : 初、出、 廚。シウー、シウ、シユー、シユー/shu : 書、樹、數。ジユー、ジウ/ru : 入、褥。ツウー/zu : 祖。ツウー/cu : 醋。スウー/su : 素。
ü	イー/yu : 應。ニー/nu : 女。リー/lu : 呂。チー/ju : 句。チー/qu : 取。シー/xu : 須。
a	パー、パター/ba : 八。パー/pa : 怕。マ、マー/ma : 麼、馬。フアー、フワ、フワー/乏、發。 タ/da : 大、達、ター/ta : 踏。ナー、ナイ、ナ/na : 哪、那。ラー/la : 蠟。カー/ga : 嘎。 カー/ka : 咖。ハー/ha : 蛤。チヤー/zha : 詐。チヤー、チヤー/cha : 叉。シヤー/sha : 鯊。ツ アー/za : 雜ツアー。サー/sa : 撒。パア/アー/a : 啊。
ia	ヤー/ya : 鴨。リヤー/lia : 倆。チヤー、チヤ、チヤー/jia : 傢、家、甲、頰。シヤー/xia : 夏。
ua	‘クワー、クワー/gua : 颯、褂。‘ホワー/hua : 花。シワー、シヨワー/shua 刷。ワー、ワ /wa : 哇、襪。
o	ウオー/wo : 我。ボー/bo : 脖、‘モー、モー/mo : 磨、墨。
uo	トヲ、トオ、‘トオー/duo : 多、朶、掇。トヲ、トヲー/tuo : 駝、妥。‘ロー、ロー、ロウ/luo : 駱、落、蘿。‘クオー、‘クワ、‘コヲ、‘コオー、/guo : 果、過。ホヲ : huo : 火。チオー/zhuo : 桌。シヲー/shuo : 說。‘ジオー、‘ジオー/re : 熱。ジヲー、ヤウ/ruo : 若。ツウオ、ツヲー、 ツオー/zuo : 坐、昨、左。ツオー/cuo : 錯。ソオー、ソヲ、ソー/suo : 所、鎖。
e	‘トー/‘ト/de 得。‘トー/te : 特。‘ロー/le : 勒。‘コ、‘コー、コ、コー/擱、個。‘コ

	一/ke : 刻。‘ホ一、ホ一、‘ホ一、ハウ/he : 盒、合、鶴、和。‘チ ^ホ 一、チ ^エ 一、‘チ ^オ 一、チ ^エ 一、‘チ ^エ 一/zhe : 這。‘チ ^ホ 一/che : 扯。‘シ ^ホ 一、シ ^ホ 一/she : 麝、舍。ス一、ス一/ce : 廁。‘ソ一/se : 畜。
ie	イエ一、エ一/ye : 爺、也。ペ ^エ 、ペエ一/bie : 別。ミエ一/mie : 滅。チ ^エ 一/ie : 碟。チ ^エ 一/tie : 鐵。ニ ^エ 一/nie : 涅。チエ一/jie : 街。チエ一/qie : 茄。チヤウ、チ ^ヨ ヲ/que : 雀シエ一/xie : 寫。
üe	ユ ^エ /yue : 月。リ ^エ /lue : 略。チ ^エ /jue : 覺。シエ一、シ ^エ 一/xue : 血、雪。
ai	アイ/ai : 埃。パイ/bai : 百。パイ/pai : 排。マイ/mai : 買。タイ/dai : 袋。タイ/tai : 台。ナイ/nai : 奶。ライ/lai : 來。カイ/gai : 改。カイ/kai : 開。ハイ/hai : 海。チヤイ/zhai : 窄。チヤイ/chai : 柴。シヤイ/shai : 色。ツアイ/zai : 再。ツアイ/cai : 彩。サイ/sai : 頤。
uai	‘クワイ、クアイ、クワイ/kuai : 塊、快。‘ホワイ/huai : 懷。ワイ/wai : 外。
ei	テイ/dei : 得。ペイ、ペイ/bei : 北、臂。ペイ/pei : 陪。メイ/mei : 妹。フ ^エ イ /fei : 啡。‘レイ/lei : 雷。‘ケイ、ケイ/gei : 給。‘ヘイ/hei : 黑、
uei	ウ ^オ イ、ウ ^エ イ、ワイ/wei : 胃、危、トイ/dui : 對、トイ/tui : 腿。‘クイ/gui 貴。ホイ、‘ホイ/hui : 回、灰。シウイ、シ ^ユ イ、シ ^ユ イ/shui : 誰、水。ツウイ/zui : 嘴。スイ、スウイ、スウイ/sui : 歲、隨。
ao	アウ/ao : 傲。パウ/bao : 雹。パウ/pao : 砲。マウ/mao : 毛。タウ、タウル、ター/dao : 島、道。タウ/tao : 套。ナウ/nao : 鬧。ラウ/lao : 老。カウ、カヲ/gao : 羔、告。カウ/kao : 烤。ハウ/hao : 號。チヤウ、チ ^ア ウ/zhao : 照。チヤウ、チ ^ア ウ/chao : 抄、潮。シヤウ/shao : 燒。繞シヤウ、シヤウ/rao : 繞。ツ ^ア ウ/zao : 早。サウ/sao : 掃。
iao	ビヤウ/biao : 錶。ビヤウ/biao : 票。ミヤウ/miao : 廟。チヤウ/diao : 雕。チヤウ/tiao : 條。ニヤウ/niao : 鳥。リヤウ/liao : 料、了。チヤウ/jiao : 腳。チヤウ/qiao : 橋。シヤウ/xiao : 小。ヤウ、ヤ一/yao : 要、藥。
ou	‘オ一、‘オウ/藕、俄。ツ一、‘トウ/dou : 都、斗、頭。‘ホウ、ホウ : hou : 後。モウ、‘モウ/mou : 某。ロ ^オ 、‘ロウ/lou : 樓、樓。‘コウ/gou : 狗。‘コウ、‘コー/kou : 口。チ ^オ ウ/zhou : 籌。チ ^オ ウ/chou : 臭。‘シ ^オ ウ/shou : 手。‘ジ ^オ ウ/rou : 肉。ツ ^オ ウ、‘ツ ^オ ウ/zou : 走。‘ソウ、ソウ/sou : 嗽。
iou	ニ ^ユ ウ/niu : 鈕。リ ^ユ 、ウリ ^ユ 一/liu : 六。チ ^ユ ウ、チ ^ユ 一/jiu : 就、九。チ ^ユ 一、チ ^ユ ウ/qiu : 求、秋。シ ^ユ ウ、シ ^ユ 一/xiu : 袖、朽。ユ一/you : 友。
an	アヌ/an : 鞍。パ ^ヌ /ban : 半。パ ^ヌ /pa : 盤。マ ^ヌ /man : 慢。タ ^ヌ /dan : 單。タ ^ヌ /tan : 毯。フ ^ヌ 、フ ^ア ヌ、フ ^ア ヌ/fan : 飯、礬、翻。ナ ^ヌ /nan : 南。ラ ^ヌ /lan : 蘭。カ ^ヌ 、カ ^ヌ 一/gan : 橄、趕。カ ^ヌ /kan : 砍。ハ ^ヌ /han : 旱。チヤ ^ヌ /zhan : 毡。チヤ ^ヌ /chan : 鎗。シヤ ^ヌ /shan : 山。シヤ ^ヌ /ran : 染。ツ ^オ フ ^ヌ /zan : 鑽。ツ ^ア ヌ/can : 蠶。サ ^ヌ /san : 三。
ian	イエ ^ヌ 、エ ^ヌ /yan : 眼、煙。ビエ ^ヌ /bian : ミエ ^ヌ /mian : 麩。便。ピエ ^ヌ /pian : 片。チ ^エ エ ^ヌ

	/dian : 點。チ ^{ㄉㄧㄢˊ} /tian : 天。ニ ^{ㄋㄧㄢˊ} /nian : 年。リエ ^{ㄌㄧㄢˊ} /lian : 臉。チ ^{ㄐㄧㄢˊ} /jian : 剪。チ ^{ㄑㄧㄢˊ} /qian : 前。シ ^{ㄒㄧㄢˊ} /xian : 線。
uan	ト ^{ㄉㄨㄢˊ} /duan : 短。‘ノ ^{ㄋㄨㄢˊ} /nuan : 暖。ロ ^{ㄌㄨㄢˊ} /luan : 亂。‘ク ^{ㄍㄨㄢˊ} /guan : 罐。‘ク ^{ㄍㄨㄢˊ} /kuan : 寬。‘ホ ^{ㄏㄨㄢˊ} /huan : 歡。チ ^{ㄑㄩㄢˊ} /quan : 泉。チ ^{ㄓㄨㄢˊ} /zhuan : 磚。チ ^{ㄔㄨㄢˊ} /chuan : 船。ジ ^{ㄐㄩㄢˊ} /ruan : 軟。ソ ^{ㄙㄨㄢˊ} /suan : 算。ワ ^{ㄨㄢˊ} /wan : 萬。
üan	イ ^{ㄩㄢˊ} /yuan : 圓。ユ ^{ㄩㄢˊ} /yuan : 園、院。チ ^{ㄐㄩㄢˊ} /juan : 卷。シ ^{ㄒㄩㄢˊ} /xuan : 懸。
en	‘ベ ^{ㄅㄣˊ} /ben : 本、笨。‘ボ ^{ㄅㄣˊ} /pen : 盆。‘メ ^{ㄇㄣˊ} /men : 們。フ ^{ㄈㄣˊ} /fen : 分。‘ノ ^{ㄋㄣˊ} /nen : 嫩。‘ヘ ^{ㄏㄣˊ} /hen : 很。チ ^{ㄗㄣˊ} /chen : 枕、眞、鎮。‘チ ^{ㄗㄣˊ} /chen : 辰。シ ^{ㄕㄣˊ} /shen : 身、深。ジ ^{ㄐㄣˊ} /ren : 忍、人。‘ツ ^{ㄗㄣˊ} /zen : 怎。
in	イ ^{ㄩㄢˊ} /yin : 銀。ビ ^{ㄅㄧㄢˊ} /bin : 濱。ニ ^{ㄋㄧㄢˊ} /nin : 您。リ ^{ㄌㄧㄢˊ} /lin : 林。チ ^{ㄐㄧㄢˊ} /jin : チ ^{ㄑㄧㄢˊ} /qin : 親。今。シ ^{ㄒㄧㄢˊ} /xin : 心。
uen	ウ ^{ㄨㄣˊ} /wen : 文、
ün	イ ^{ㄩㄢˊ} /yun : 雲。ト ^{ㄉㄨㄢˊ} /dun : 敦。‘ロ ^{ㄌㄨㄢˊ} /lun : 輪。‘ク ^{ㄍㄨㄢˊ} /gun : 棍。‘ク ^{ㄍㄨㄢˊ} /kun : 困。チ ^{ㄓㄨㄢˊ} /zhun : 准。チ ^{ㄔㄨㄢˊ} /chun : 春。シ ^{ㄕㄨㄢˊ} /shun : 順。ツ ^{ㄗㄨㄢˊ} /sun : 尊。寸。ソ ^{ㄙㄨㄢˊ} /sun : 孫。
ang	パン/pang : マン/mang : 忙。ファン/fang : 方。螃タン/tang : 盪。タン/tang : 堂。ラン/lang : 狼。カン/gang : 缸。ハン/hang : 行。シ ^{ㄕㄨㄢˊ} /shang : 晌。シ ^{ㄕㄨㄢˊ} /rang : 讓。チ ^{ㄗㄨㄢˊ} /zhang : 丈。チ ^{ㄗㄨㄢˊ} /chang : 腸。ツ ^{ㄗㄨㄢˊ} /zang : 臟。ツ ^{ㄗㄨㄢˊ} /cang : 蒼。サン/sang : 嗓。ワン/wang : 忘。
iang	ニヤン/niang : 娘。ニヤン/liang : 梁。リヤン/liang : 兩。コン/kuang : 礦。カン/jiang : 韁。シヤン/xiang : 向。ヤン/yang : 洋。
uang	‘ク ^{ㄍㄨㄢˊ} /guang : 光。ホ ^{ㄏㄨㄢˊ} /huang : 黃。チ ^{ㄔㄨㄢˊ} /zhuang : 莊。シ ^{ㄕㄨㄢˊ} /chuang : 窗。シ ^{ㄕㄨㄢˊ} /shuang : 霜、雙。
eng	ウ ^{ㄨㄣˊ} /wen : 翁。ポン/beng : 捧。ポン、‘ポン/peng : 朋、碰。モン/meng : 蒙。フ ^{ㄈㄣˊ} /feng : 風。‘ト ^{ㄊㄣˊ} /deng : 櫓。‘ト ^{ㄊㄣˊ} /teng : 疼。‘ノ ^{ㄋㄣˊ} /neng : 能。‘レン/leng : 冷。‘ケン/geng : 更。‘ホン/heng : 橫。‘チ ^{ㄗㄣˊ} /zheng : 正。‘チ ^{ㄗㄣˊ} /cheng : 橙、城。‘シ ^{ㄕㄣˊ} /sheng : 繩。ツ ^{ㄗㄣˊ} /ceng : 曾。ス ^{ㄙㄣˊ} /seng : 僧
ing	イン/ying : 櫻。ビン/bing : 氷。ピン/ping : 瓶。ミン/ming : 名。チ ^{ㄐㄧㄢˊ} /ding : 頂。チ ^{ㄑㄧㄢˊ} /ting : 亭。ニン、‘ノ ^{ㄋㄧㄢˊ} /ning : 擰、凜。リン/ling : 領。チヤン、チン、チ ^{ㄑㄧㄢˊ} /jing : 井、晴、惝。チン/qing : 青。シン/xing : 星。
ueng	ウ ^{ㄨㄣˊ} /weng : 翁。
ong	トン/dong : 東、懂。トン/tong : 銅、筒。ノン/nong : 弄。ロン、‘ロン/long : 籠、龍。コン、‘コン/gong : 拱、公。カン、ホン/hong : 虹、缸。チ ^{ㄓㄨㄢˊ} /zhong : 鐘。チ ^{ㄔㄨㄢˊ} /chong : 虫。ジ ^{ㄐㄨㄢˊ} /rong : 絨。ツ ^{ㄗㄨㄢˊ} /cong : 蔥。ソン/song : 松。

iong	チヨン/qiong : 窮。 シヨん/xiong : 兄。 ヨン/yong : 用。
er	耳アル。

(2) 特殊な仮名表記

1) 『語言合璧』の「這」は「^ˇチォー」、「^ˇチォ」、「^ˇチェイ」、「^ˇチエイ」の4種類の仮名表記がある。『四語合璧』はこれに「^ˇチェイ」を加えた5種類がある。「凡例」の符号についての解説により、「^ˇチォー」の仮名表記は拼音“zhe”と同じ音を表している。「^ˇチェイ」は恐らくピンインの“zhei”に相当する。鄭永邦は“zhei”の読み方を認識しているものの、その仮名表記については一貫性がない。

2) 鶴(ハウ²)⁽¹⁾は元代周德清《中原音韻》(1324)に“蕭豪韻 入聲作平聲”とあり、擬音“háo”は「ハウ²」に音価が近く、白読音である。和(ハイ⁴)は弥松頤《京味兒夜話》(1999:93)に、“连接词‘和’，在当作‘跟’、‘与’、‘同’等意思讲时，北京人不仅说hài(害)，而且也说hàn(汗)、huì(会)，都是‘和’的同声之转。”と述べている。虹(カン⁴)については王璞《京音字彙》(1913)では“虹虫部蟬螻也又音洪又俗音楨”(周建設2015主編、429頁)となり、韁(カン¹)は“韁革部同韁”(同上、428頁)となる。以上の発音は全て北京語の方言音である。

3) 両書には「孔雀」という単語が見られるが、その「雀」には「チヨヲ」と「チヤウ」の仮名表記があり、ピンインの“qiao³”に相当する。《現代汉语词典》(2005:1100)には、雀“qiao³”は“义同‘雀’(què)，用于‘家雀兒’、‘雀盲眼’。”とある。この「孔雀」は“kong³que⁴”と読むが、“kong³qiao³”と読むのも白読音である。また、「若」に「ジォヲー⁴」と「ヤウ⁴」の仮名表記があり、前者は“ruo⁴”、後者は“yao⁴”の発音となり、“yao⁴”は白読音である。

9.3.4 鄭永邦による仮名表記と『亜細亜言語集』との関係

本研究の第六章ではすでに『亜細亜言語集』から『四語合璧』までの仮名表記の変遷について考察し、『北京発音反切表』は主に『語言合璧』を参考にしていたという結論を得た。しかし、『語言合璧』、『四語合璧』と『亜細亜言語集』の3書の関係については触れていない。ここではその関係を究明するために、『亜細亜言語集』と比較した結果をまとめる。

1) 現代漢語のゼロ声母以外の21個声母は『亜細亜言語集』『語言合璧』、『四語合璧』の3書で同じようにア行からラ行までの仮名を使った。ただ、『語言合璧』と『四語合璧』には補助符号があり、『亜細亜言語集』より複雑な構造になっているが、北京官話の発音さらに正確に表記した。

2) 鼻音について、『亜細亜言語集』は「前鼻音 n」に「ン」、「後鼻音 ng」に「ンヌ」をあてたが、『語言合璧』と『四語合璧』は「前鼻音 n」に「ヌ」、「後鼻音 ng」に「ン」をあてた。

3) 撮口呼 ü について、『語言合璧』、『四語合璧』は「呂リー」、「女ニー」、「雲ニヌ」、「月ユエ」のように「…」という補助符号を使用した。『亜細亜言語集』はほとんど拗音「ヨ、ユ」を対応させ

⁽¹⁾ 教科書では漢字の四方に圏点で声調を表しているが、本節では仮名右肩の数字1、2、3、4をつけ、それぞれ現代漢語の第1声、第2声、第3声、第4声を表す。

たが、虐「(ニエヲ)」や「略(リヤヲ)」など例外もある。補助符號「…」を使用した場合、撮口呼を際立たせ視覚的に識別しやすく、学習者にメリットがあると考えられる。

4) 有気音について、『亜細亜言語集』には有気音を区別する表記はなく、『語言合璧』は漢字字頭に補助符號「一」を付けた。鄭永邦は仮名表記においても有気、無気の区別を重視していたと分かる。また、『四語合璧』の齒茎音 zi、ci、si に対する表記からも分かるように、鄭永邦は仮名表記の改良を重ねていた。

9.4 『語言合璧』『四語合璧』の語彙と音声の特徴

本章における『語言合璧』と『四語合璧』の北京語特有の語彙と仮名注音の分析から得られた結論は以下のようにまとめられる。

(1) 両書の北京語の特徴

両書の北京語の特性は比較的顕著である。北京語語彙と“兒化詞”は計 166 個あり、純粋な北京語口語である。日本明治時代の北京官話教科書に使用された語彙はもちろん、北京話の特徴が顕著な『官話指南』に使用された語彙も多く見られたため、『語言合璧』と『四語合璧』は北京語の特徴が比較的顕著な教科書と言える。

(2) 両書の仮名表記

①鄭永邦は長年北京駐在の外交官だったため、北京語の音声に対する深い認識の持ち主である。ウェード氏の『語言自邇集』(1867)、広部精の『亜細亜言語集』(1880)の2書を参照した上で、当時の北京語音声と自身の考察したものをベースとしながら、声母韻母の仮名表記に対する独創の規則を採用し、正確さと簡易性を兼ね備えた表記を作成した。

②『語言合璧』は「ˊ」、「ˋ」、「ˊˋ」などの補助符號を使い、喉頭音、撮口呼、卷舌音等を簡略に表記した。『四語合璧』は『語言合璧』の符號を継承しつつ、齒茎音の符號「ㄣ」をさらに加えた。両書とも符號の使用に曖昧な箇所はあるが、学習者に正確な北京語を習得させるために、工夫された面が見て取れる。

③両書の本文には白読音、北京語の方言音に至るまで徹底して表記したことから、鄭永邦は北京語音韻面での深い知識が推測される。

下編結論

下篇は『官話指南』の著者呉啓太、鄭永邦の伝記研究、『官話指南』の編纂研究、改訂版『官話指南』とその改訂著者金國璞および鄭永邦が著した『北京發音反切表』と多言語対照教科書2種について研究を行った。整理分析を通して、結論は以下の通りである。

(一) 『官話指南』の著者

(1) 呉啓太が外務省に提出した履歴書により、実父が呉雄太郎、実母が呉喜美であることが確認できた。

(2) 漢語学所の生徒募集要項、鄭永寧の漢語学所などでの任職などの関係から、呉啓太が漢語学所で漢語を学習した可能性が高い。

(3) 呉啓太のブラッセル大学における学習記録を通して、呉啓太は少なくともラテン語、英語、中国語の3カ国語に精通していた。留学から帰国後陸奥宗光外相の秘書官として、下関条約の調印にも参与した可能性がある。

(4) 鄭永邦は明治7年(1874)前頃、東京外国語学校漢語学科に入学する前に、すでに長崎から住居を東京に移籍している。

(5) 鄭永邦が外務省に提出した、授勳時の「任職履歴書」により、在職期間中に17度授勳があり、そのうち4度は勳章を授与された。それは「勳七等青色桐葉章」「単光旭日章」「雙光旭日章」「雙光旭日章」である。そして、大本營所在地広島と山口県の下関に二度出張した。

(6) 鄭永邦は支那語研究舎の有力な支援者の一人であり、毎週一回講演も行い、その内容は清国制度、中国語文法が中心と考えられる。

(二) 『官話指南』の編纂

(1) 唐話教科書と『語言自邇集』との比較から、『官話指南』の一問一答式の体裁は『唐話便要』、『正音撮要』、『語言自邇集』の影響を受けた可能性がある。

(2) 『官話指南』の卷之一「應對須知」、卷之二「官商吐屬」は呉、鄭両氏の教師である金國璞と黄裕壽により編纂された可能性がある。

(3) 卷之三「使令通話」、卷之四「官話問答」の第1、2、3、5、6、4、7、8、9、10、18、20章は呉、鄭両氏の自身のことを基礎に、編纂された。「官話問答」の第11、12、13、14、15、16、17、19章は師の金國璞と黄裕壽の手によって編まれた可能性が高い。

(三) 改訂版『官話指南』

(1) 金國璞は改訂に際し、「應對須知」を削除した理由はこの巻の使用言語が南京官話に傾斜しているためであるとした。

(2) 金國璞は呉啓太、鄭永邦の漢語教師として初版『官話指南』の改訂に踏み切った。

(四) 鄭永邦の著書

(1) 『反切表』は反切注音、仮名表記、ローマ字表記を総合的に運用した声韻対照表である。明治時期において『反切表』は唯一の3種の注音方式を採用した音節表である。

(2) 『反切表』は日本人が編纂した「声介合母」の分析手法を利用した最初の北京語音韻資料である。

(3) 『反切表』は声母と韻母の単位で別々に仮名表記を付した最初の北京語音韻対照表と言える

(4) 『反切表』から20世紀初期の日本人が有気音、巻舌音などの特殊な発音、北京語の音声などについて、どのように認識していたのかを知る貴重な資料である。

(5) 『反切表』に反映されている音韻知識は、中古音韻から近代音韻の要素も見受けられる。これらの知識の運用状況から、鄭永邦は中国音韻学に造詣に関する深ったと考えられる。

(6) 『反切表』は鄭永邦の強い創意によるもので、明治時代末期の日本における北京語音声研究の代表的な音節対照表とし、鄭永邦が日本の北京語音声研究史にも大いに貢献したことが評価される。

(7) 『語言合璧』と『四語合璧』における声母韻母の仮名表記は独創的な規則を採用し、正確さと簡易性を兼ね備えた。

(8) 『語言合璧』と『四語合璧』で「ˊ」、「ˋ」、「ˊˋ」、「ˋˋ」などの補助符号を用いて、喉頭音、撮口呼、巻舌音、齒茎音を明確に表記した。このことから、編纂者は学習者に中国語の特殊発音を理解させるために、多くの工夫を凝らしたことが分かる。さらに白読音、北京語の方言音に至るまで徹底して表記したことから、鄭永邦は北京語音声面の知識が深かったことが推測される。

(9) 『語言合璧』と『四語合璧』は北京語語彙の特徴が比較的顕著な教科書と言える。

終 論

1 本研究の成果

本研究は近代日本における中国語教育史の全視野の下で、北京官話教科書『官話指南』、『官話指南』の学習補助教科書、『官話指南』編纂者の一人である鄭永邦が著したその他北京官話教科書を中心に、教科書の語学研究、教科書の編纂研究、教科書の編纂者研究など3分野に涉り、多元的考察を行うと同時に、以下の結論と成果を導き出した。

一 語学研究

(1) 語彙

①『官話指南』の語彙について、北京語語彙の先行研究成果(218語)を踏まえ、9冊の先行北京語辞典を利用して、『官話指南』における北京語特有の語彙、“兒化詞”、成語などにさらに1.5倍に上る語数(356語)を精査・選出した上に考証を加えた。更に、それらの北京語語彙における各巻の使用頻度を調査し、北京語語彙は7割以上が「官商吐屬」と「使令通話」に集中し、「應對須知」の北京語語彙は総数の1割ぐらゐを占め、「官話問答」の北京語語彙が一番少ないことが解明できた。その上で、文語の表現にも考察し、9割以上の文語は巻之一「官話問答」に見える。語彙使用の側面から『官話指南』は清末北京官話会話教科書として反映された北京語の地域性、時代性と口語性を実証した。

②鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』と『日清英語四語合璧』の両書にある北京語特有の語彙を考察し、166語項目を取り上げた。それらの語彙は北京話の特徴が顕著な『官話指南』に使用された語彙にも多く見られたため、『日漢英語言合璧』と『日清英語四語合璧』は『官話指南』に類似して、北京語特徴が比較的濃厚な教科書であることを明らかにした。

③学習補助教科書の語句注釈については、『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』において注釈特徴、北京語語彙、北京語文法、役所用語、生活用語の面から考察を試みた。『官話指南總譯』と『官話指南自修書』は簡潔明瞭な表現で注釈内容をまとめ、北京特有の事物、地名、役所用語などについて詳細に説明したうえで、多くの北京語特有の語彙に解釈を加えた。両書の注釈はともに『官話指南』の要点あるいは難点をおさえていることが評価される。『官話指南自修書』は『官話指南總譯』の注釈利点を活かしつつ、不十分だった中国語での積義、難解な積義を修正したが、両書ともに注釈の誤謬があり、中国語による注釈も見られ、解釈は中国語として通じない例もある一面が存在する。『官話指南精解』の注釈に使用した日本語は『官話指南總譯』や『官話指南自修書』より平易で理解しやすく、簡潔明瞭である。また前2書に比べると、『官話指南精解』の北京語語彙、文法、役所用語、生活用語などの注釈は量的には少ないが、誤謬が見られず、『官話指南總譯』の誤謬も訂正した。3書の注釈数量、内容の正確性、理解度から全般的に評価すると、『官話指南精解』の注釈は『官話指南』を学習するにあたり補助価値が最も高いと言える。

(2) 文法

①『官話指南』の文法について、北京語文法研究の権威である太田辰夫（1950、1965、1969）と周一民（1998、2002）の論説を包括的に導入し、『官話指南』における文法表現に全般的に再検討を行い、北京語の特徴をもつ文法表現約 70 種類を導き出し、逐一に考察を行った。全種類の中、太田辰夫が提示した北京語文法現象は 9 割以上『官話指南』に現れたことが分かり、その原因は太田辰夫が指摘した北京語特有文法表現のほとんどが明治時代の北京官話教科書に収録されているものと関連する。また、北京語の文法表現は『官話指南』の各巻における使用頻度を検討し、北京語特徴を有する文法表現が「應對須知」、「使令通話」に最も多いこと、「官話問答」に最も少ないことなどを明らかにした。北京語の語彙・文法を合わせて、北京話特有表現が最も集中している巻は「應對須知」と「使令通話」となる。本研究は文法使用の側面から『官話指南』は清末北京官話会話教科書として反映した北京語の地域性、時代性と口語性を実証した。

②『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』において学習補助教科書の語句注釈の資料は大変豊富だが、後置詞、動詞、感嘆詞以外に、文法の専門用語は使用していない。これは明治・大正・昭和の 3 時代に中国語文法の研究がまだ十分に展開されていない現状を反映していると考えられる。

(3) 音声

①『官話指南』の「凡例」には四声、有気音、鼻音韻尾、有気音・無気音、四呼、「輕重念」の説明、発音方法を提示したが、四声についての説明は正確ではない点もある。四声の表記方法、鼻音韻尾の呼称などは全てそれ以前の教科書の記述とは異なり、呉、鄭両氏の創見と言える。

②『官話指南』の「凡例」に言及した「輕重念」は『官話指南自修書』では「重念」と称する。「重念」という述語の由来を考察した結果、唐話教科書には「重念」という語は見られず、『語言自邇集 散語問答』（1877）が北京官話教科書で最初に「重念」を使用した教科書であり、明治時代の学者が中国語の「重念」を重視し始めたと言える。また、『語言自邇集 散語問答』（1877）から打田重治編『急就篇を基礎とせる支那語獨習』（1924）までの明治時代の教科書に現れた現代中国語研究の“重音”という用語が「重念」と称され、通用語となった。『官話指南』（1882）は初めて「輕重念」の概念を導入し、既に使用されている「重念」以外に「輕念」という用語概念も含めた北京官話教科書となる。明治時代北京語教科書や北京語教育に始まった「重念」や「輕重念」の使用と解釈は北京語の“重音”研究に大いに参考価値を有する。

③『官話指南』「凡例」に提示した音声項目は本文に表示されていないのは『官話指南』の欠点であるため、『官話指南自修書』、『官話指南精解』の著者は改善を試み、特に『官話指南自修書』は「凡例」に提示した音声項目以外に「捲舌音」も加えた。本研究は両書の音声表記を考察し、『官話指南自修書』の仮名表記は『亜細亜言語集』を参考した結論を得た。また、『官話指南自修書』には声調ミス、誤植、ローマ字誤記など問題があり、また遼寧方言の影響を受けた発音も存在することを明らかにした。

④『官話指南精解』の音声表記は 9 割以上『語言自邇集』のローマ字表記と同じであるが、旧音の「io」、「üo」が削除され、旧音がすでに使用されていないのが削除の原因と分析した。『官話指

南精解』のローマ字表記はより純粋な北京官話音を表し、音声表記の正確性、通用性、分かりやすさなどの面で見ると、『官話指南精解』は『官話指南』に対する補助価値が最も優れていると言える。

⑤鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』の声母、韻母の表記を考察し、現代漢語音と異なる点は存在するが、音節分布はほぼ同じであるとの判断に至った。また、三書は共にウェード氏の『語言自邇集』(1867)、広部精の『亜細亜言語集』(1880)を参照した箇所があるが、そのローマ字表記、仮名表記は独創の声母、韻母の表記規則を採用し、正確さと簡易性を兼ね備えた。しかも、『北京發音反切表』は声母と韻母の単位で別々に仮名表記を付した最初の北京語音韻対照表である。『北京發音反切表』に反映されている音韻知識は、反切注音、仮名表記、ローマ字表記の使用に留まらず、中古音韻で扱う舌上音(そり舌子音)、36字母の「支紙寘」などの子音発音、《広韻》の韻目、反切注音、韻図などや近代音韻で扱う尖音、團音、声介合母などの要素も見受けられる。そのうち『北京發音反切表』にある「声介合母」の運用は日本人が編纂した最初の北京語音韻資料であることが確認され、これらの音韻知識の運用状況から、鄭永邦は中国音韻学の造詣が深かったことが考えられる。一方、『日漢英語言合璧』と『日漢英語言合璧』の仮名表記は「^ˊ」、「[˙]」、「^ˋ」、「^ˊ」などの補助符号を用いて、喉頭音、撮口呼、卷舌音、歯茎音を明確に表記した上で、白読音、北京語の方言音まで徹底的に表記した。編纂者鄭永邦は学習者に北京語の特殊発音を理解させるために、多くの工夫を凝らしていたことが分かる。

(4) 翻訳

①学習補助教科書の翻訳については、『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』における翻訳特徴、翻訳文体、言語使用、翻訳上の問題などの考察を通して、『官話指南總譯』の訳文は文言一致体という傾向が見られ、言語表現を一対一対に置き換える翻訳方法は当時の学習者が『官話指南總譯』のすべての語彙を理解するのに役立つと考えられる。『官話指南自修書』の翻訳は『官話指南總譯』に大いに継承したが、著者飯河道雄による創作の部分における翻訳文体が直訳というより、意識に類似し、『官話指南總譯』と『官話指南自修書』の間には影響関係が見られた。また、『官話指南總譯』と『官話指南自修書』はともに誤訳箇所がある、『官話指南精解』はこのような状況が存在しない。『官話指南自修書』の出版は大正末期であり、明治前期に流行した文語体に比べ、当時の学習者にとっては、『官話指南自修書』の学習補助価値はより弱いと考えられる。『官話指南總譯』や『官話指南自修書』と異なり、『官話指南精解』の翻訳文体は意識となり、当時の学習にとっては理解しやすい口語体を用いた。3書の中には翻訳内容、難易度、誤訳、使用対象など全体から見ると、『官話指南精解』は『官話指南』に対する翻訳面の学習補助が最も良いと言える。

二 教科書の編纂研究

『官話指南』の教科書研究については、各巻の体裁、編纂の面から考察した。

①『官話指南』における一問一答式体裁の由来について、呉、鄭両著者の家庭背景、北京公使館

に派遣された通弁見習の資格およびその中国語学習の経歴要求を出発点としながら両氏が中国語を学ぶ際に使用した唐話会話教科書、『正音撮要』、『語言自邇集』を検討し、その比較から、『官話指南』の一问一答式の体裁は『唐話便要』、『正音撮要』、『語言自邇集』の影響を受けた可能性があるとの認識を示した。

②『官話指南』各巻の編纂について、語彙・文法の考察、使用頻度の統計、北京官話表現・南京官話表現・南北官話共通表現の割合分析および呉、鄭両氏の中国語教師である金國璞、黄裕壽は『正音撮要』を利用した事実から、『官話指南』の巻之一「應對須知」は教師金國璞と黄裕壽が編纂した可能性が高いと認識し、巻之二「官商吐屬」は北京語特性が比較的強い巻であり、内容は庶民の日常生活に触れていて、北京官話の学習を初めて間もない通弁見習の2人はこのような光景に接する機会がなかったし、想像するのが難しい场景であったため、当巻も教師金國璞と黄裕壽の編纂である可能性が大きい。巻之三「使令通話」の用語は日本語特有の語彙を使用し、各章の内容にも公使館の勤務に関するものが多いため、呉、鄭両氏自身の経験により編纂され、教師金國璞と黄裕壽が添削・校閲してあげた部分と思われる。巻之四「官話問答」は前3巻と異なり、より正式な場面である上に、文語の使用、南京官話表現の使用が際立っている。第1、2、3、5、6、4、7、8、9、10、18、20の各章は呉、鄭両氏自身のことやその他公使館人員の経験に基づいての内容構成となり、呉、鄭両氏による編纂である、との仮説をたてることができる。「官話問答」の第11、12、13、14、15、16、17、19の各章内容は公使館と無関係であり、清国官吏たちの対話、科挙考試などから構成されており、教師金國璞と黄裕壽による編纂が仮説できる。以上の分析から見ると、『官話指南』の編纂者は名義上呉啓太、鄭永邦の二氏になっているが、教師の金國璞と黄裕壽が編纂に深く関わり、実質上、師弟四人の協力によりできた共著と言えよう。

③『官話指南』初版(1882)の序文執筆者の一人である金國璞が20年後に初版『官話指南』の改訂を踏み切り、「應對須知」を削除した代わりに「酬應瑣談」を加えた。「應對須知」の底本《正音撮要》には南京官話の表現が多い、また『官話指南』初版の四巻中、南京官話と南北官話通用表現の比率は「應對須知」が最も高い。この二点は金國璞が「應對須知」を削除した理由であるとの認識を示した。

④『官話指南』の言語学的側面を解明するため、北方官話表現(右文)と南京官話表現(左文)の双行対照版「九江版『官話指南』」の比較研究を行った。まず双行注の諸先行研究を踏まえながら、九江版『官話指南』の左文として追記した南京官話の特徴を有する語彙をさらに精査して分析した。その分析から、左文の部分は南京官話の特徴を有し、対照的な右文の部分は北京官話の特徴を有することがわかった。更に、九江版『官話指南』の双行注で左文の追記がない部分は南北官話共通の言語表現であることが確認された。そこから、右文とする『官話指南』の北京語特質は非常に強いことと九江版『官話指南』左文の南京官話の特質が強いことの両側面が一層浮き彫りにされた。その上で整理した九江版『官話指南』の南京官話の表現を使い、初版『官話指南』にも存在する南京官話表現を調査し、出現頻度も考察した。なお、「使令通話」において九江版『官話指南』の左文表現は最も少ないことが分かり、北京語語彙、文法の表現分布を合わせてみると、四巻の中

には「使令通話」の北京語特性が最も強いことが解明された。また『官話指南』に存在する九江版『官話指南』の左文表現の検討を通し、『官話指南』の本文には北京官話、南京官話、南北官話共通表現の3種類が共存していることが確認され、北京官話の部分が大半を占めており、南京官話、南北官話共通の表現はわずかであることが分かった。それらの語彙は各巻の分布により、「應對須知」「官商吐屬」「使令通話」に南北官話共通の表現が多く、南京官話表現及び文語はほぼ「官話問答」にある。以上の分析から、『官話指南』における言語表現の多様な特徴が観察された。

⑤九江版『官話指南』の底本を明らかにするため、九江版『官話指南』の前に出版された初版『官話指南』の各版本を精査し、初版と九江版右文の比較、相違文言の分析などの手法を運用し、異体字、脱字、増字、誤字、誤字の修正、用語表記の相違など約790箇所の一一致を見出した。初版『官話指南』と異なる箇所が数多く表れたことから、九江版『官話指南』右文が反映された底本は正規な『官話指南』版本ではなく、編纂者が編纂作業の際に底本を混同させた誤植、誤記の多い不正規なものだと結論した。この点は九江版『官話指南』の最新研究成果として意義が大きい。

⑥『官話指南』の学習補助教科書として『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』は明治時代における中国語学習補助教科書における位置づけを明らかにするため、明治時代から戦前までの学習補助教科書を調査し、全10種の学習補助教科書シリーズを見出した。そのうち『官話指南』は唯一3度も出版された日訳注釈版の学習補助教科書である。『官話指南總譯』と『官話指南自修書』は共に2番目に出版された日訳注釈版と日訳注釈、仮名表記を有している学習補助教科書である。『官話指南精解』は最初の日訳注釈、ローマ字表記、「文型練習」(章末問題)が付されている学習補助教科書である。『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』はその体裁から明治時代における代表的な学習補助教科書だと言える。しかも、『官話指南』は学習補助教科書の中に唯一の英訳版、フランス語対訳版、上海語訳版、広東語訳版などの多言語対応を有している北京官話教科書とされ、強い影響力を持っていたことがうかがわれる。

⑦上述した通り、『官話指南總譯』、『官話指南自修書』、『官話指南精解』の3書において翻訳、注釈、音声の比較研究から、『官話指南精解』は『官話指南』を学習する際の補助教科書とし、最も良質な教科書であることが確認された。

三 教科書の編纂者研究

①『官話指南』の編纂者研究については諸先行研究を参考しながら、呉、鄭両氏の新しい履歴を考察した。呉啓太については北京公使館に派遣される前に漢語学習の状況、外務省に提出した履歴書、ブラッセル大学での学習状況の3方面から考察した。漢語学所の生徒募集要項、鄭永寧の漢語学所などでの任職などの関係から、呉啓太が漢語学所で漢語を学習した可能性がある。呉啓太は明治11年(1878)から明治18年(1885)にわたり北京公使館在勤をしている。明治18年11月日本に戻り、同月、外務省に官費留学生の申請履歴書を提出した。この履歴書により、呉啓太の実父が呉雄太郎、実母が呉喜美であると確認できた。明治19年(1886)2月からブラッセル大学に留学し、『外務省留学生関係雑件(欧州之部)』に当該学校の学習記録を発見した。その記録を通して、呉

啓太は少なくともラテン語、英語、中国語の3カ国語に精通していた。呉啓太は留学から帰国後陸奥宗光外相の秘書官とし、数種類もの言語に精通していたため、下関条約の調印、および条約改正に部分的に参加していた可能性があることが推測できた。

②鄭永邦については東京外国語学校漢語学科の入学時間、受勲した時の「任職履歴書」、在職期間の任職授勲、日本帰国時の各地への出張、中国で中国語教育に従事の4方面から検討した。東京外国語学校の名簿により、当時の鄭永邦は下等第三級生となり、修業年限4年間、前半の2年間で下等のことから、鄭永邦は少なくとも明治7年(1874)3月の時期に既に在学している。しかも、名簿により、鄭永邦は明治7年(1874)前頃、東京外国語学校漢語学科に入学する前に、すでに長崎から東京に移籍している。また、「正五位勲四等鄭永邦勲章加授ノ件」に添付された授勲時の「任職履歴書」を発見した。「任職履歴書」により、在職期間は全17度授勲があり、そのうち4度は勲章を授与された。それは「勲七等青色桐葉章」「単光旭日章」「雙光旭日章」「雙光旭日章」である。しかも、在職期間は「防務条例制定」と日清講和条約の調印に関与していたため、大本營所在地広島と山口県の下関2度出張した。中国で中国語教育に従事していた経緯については、明治36年(1903)から明治38年まで、鄭永邦は中国にある支那語研究舎の有力な支援者の一人として、毎週一回の講演にも参加し、内容は清国制度、中国語文法となる。

③諸先行研究、両氏の履歴書、公文図書館、外交史料館で得られた呉、鄭両氏の新たな履歴を踏まえ、「呉啓太、鄭永邦比較年表」を作成した。比較年表から見ると、呉啓太は37歳の若さで死去したが生涯を国の外交事業に捧げた。日本の中国語教育の面には呉啓太を主編として出版した『官話指南』は日本人が初めて編纂した北京官話教科書であり、当時の日本は北京官話教科書がない状況を補足した。呉啓太も日本の中国語教育史に大いに貢献したと言える。鄭永邦は在職三十余年数官に歴任し、日本公使を補佐して日中両国の国交の親善に大いに貢献した。また、鄭永邦により編纂した『官話指南』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』、『生財大道』は善隣書院、東京帝国大学、清語同学会などの漢語学科の教科書として使われている。そこから、鄭永邦が著す書籍は日本の中国語教育圏の学習者に認められ、価値の高いものであった。

④改訂版『官話指南』の著者金國璞と『官話指南』の著者である呉、鄭両氏の関係については井上翠が著した『松濤自述』により、鄭永邦が明治14年(1880)頃から金國璞の学生として中国語を学習し始めたと言う。呉啓太はいつから金國璞のもとに中国語を学習し始めたのか、といった点について論じていない。本研究は金國璞が日本に来る前の教育経歴を調査し、呉啓太、鄭永邦2人の中国語教師として、おそらく1878年に呉啓太が北京に赴任する時にはすでに日本公使館で漢語教育を行っていた可能性がある認識を示した。

⑤『官話指南』の学習補助教科書編纂者である呉泰壽、飯河道雄、木全徳太郎については諸先行研究と国立公文書館に所蔵している資料を参考にし、3氏はそれぞれの伝記以下のようにまとめられる。『官話指南總譯』の著者呉泰壽は商業の面で活躍しただけでなく、外交、教育方面においても卓越した貢献を残している。6歳から、父呉敬十郎のもとで、「漢学」と「清国南話」を学び始める。16歳の時、東京外国語学校漢語学科で北京官話を学び始める。22歳の前に、すでに帝国水

産学校教授となり、若くしてすぐれた能力を持っていたと言える。36歳の時、東京外国語学校の清語学科の初代教授に就任した。外交の面にはかつて中日天津条約を締結する時の通訳、台湾の淡水支庁陸軍通訳、台湾總督府法院の通訳、大本營の「清語通譯」を務め、日清戦争、北清事変、日露戦争の時に隨軍出征した。商業の面では22歳から商業に従事し、後に他国との戦争のために商売の事業を一時的にやめ、翻訳者として活躍した。吳泰壽は41歳の時に再び商業に従事し、自ら和泰錢莊を創設すると同時に、「日華興業」、「大連證券交換所」、「大連製油各株式会社」で重要な職務に就いた。

⑥『官話指南自修書』の著者飯河道雄は在華30余年の間、文化活動は主に教育と出版方面が中心であった。教育については22歳の時に河南省開封の優級師範学堂で理化科と数学科の教習を務めた。1911年から、10数年間に満鉄付属地域内の複数の公学堂と日語学堂の創設に関わり、日本語教育と日本語教師として尽力した。出版の面については1924年から、出版社「東方文化会」を立ち上げ、出版活動を始めた。その後、『泰東日報』の編集長に就任し、昭和9年(1934)に瀋陽で東方印書館と東方印刷廠を創設した。大正13年(1924)から昭和12年(1937)まで、中日言語文化に関する書籍を大量に編集発行した。1938年4月に新民印書館の中国側の副社長に就任し、同年6月に病気のため瀋陽で逝去した。

⑦『官話指南精解』の著者木全徳太郎は13歳に満州に行き、在華活動は主に教育と満鉄事業である。教育の面では、かつて大連語学校と大連実業補習学校支那語科講師を兼任した。生涯で9冊の著作を残し、8冊は教育に事業する時、作成した。満鉄事業の面では1924年、満鉄に入社し、約6年間で秘書課、総務部、庶務課、総裁室、人事課などを経験し、最後に総局人事局養成課に務めた。

⑧「吳啓太、鄭永邦比較年表」を見ると、鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』が成立した時には、ちょうど鄭永邦は日本に戻る時期である。『北京發音反切表』は北京に在勤している際に編纂した。また、鄭永邦の音声研究の北京語音声研究史における価値、明治末期の中国語教材における位置付けを究明するため、「明治時代仮名表記中国語教科書総表」と「明治時代北京官話教科書仮名表記変遷表」を作成した。比較年表から見ると、『北京發音反切表』は反切注音、仮名表記、ローマ字表記を総合的に運用した声韻対照表であり、明治時期において唯一の3種の注音方式を採用した音節表である。一方、『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』は声母、韻母の仮名表記が独創的な規則を採用した。仮名表記変遷表から、最初に仮名表記による表記を採用した北京官話教科書『亜細亞言語集 支那官話部』から鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』までに『日漢英語言合璧』は符号を使い送気音を表記し、および“兒化”の表記を施した唯一の教科書である。三書は20世紀初期の日本人が有気音、巻舌音などの特殊な発音、北京語の音声などについて、どのように認識していたのかを知る貴重な文献となり、鄭永邦が日本の北京語音声研究史にも大いに貢献したと評価できる。

2 今後の課題

本研究は上述のように研究を進め、一定の成果に到達することができたが、明治時代における北京官話研究史の視野で『官話指南』を中心に据えた研究は本論文が最初の試みであり、今後の課題として探究をさらに進めていく余地が多々ある。

①内田慶市、氷野善寛『文化交渉と言語接触研究 官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』（2016）の研究によると、『續支那語速成講座合本』（1930）に収録されている「飯河道雄先生講述官話指南 酬應瑣談篇講話」という資料が存在し、『官話指南』、『官話指南新篇』、『北京官話伊蘇普喻言』などの北京官話教科書の関連内容を収録している。『官話指南』については、その全文の対訳に加え、注釈、発音記号、四声の圈点、重念にも付している。また、幸勉が著した『官話指南談論新篇應用問題並解答』（1931）は『官話指南』の語句に対する翻訳を付している。以上の教科書は『官話指南』の学習補助類に分類され、今後は入手した上に内容の研究分析、諸先行学習補助教科書との比較研究などを行う必要性がある。

②音声の面で本論文は飯河道雄が著した『官話指南自修書』と鄭永邦が著した『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の仮名表記と『官話指南精解』のローマ字表記の考察に集中している。『官話指南自修書』、『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』の本文には四声圈点が施されたが、本研究では四声の考察に触れていない。今後は3書の仮名表記と四声を合わせた考察が必要となる。

③本論文が取り組んだ研究に関して、まだ十分に解明されていない部分が残っている。『官話指南』の編纂に関しては、教師金國璞は呉、鄭二氏と関わりが多いが、詳細な情報が乏しい。黄裕壽というもう一人の教師は未だに関連資料が見つかっていない。九江版『官話指南』は大変ユニークな編纂で清末の中国全土の語史解明に寄与するところが多いが、編纂者、出版経緯など肝心の情報が依然として欠けたままである。また、学習補助教科書に関して大量な語句注釈資料がデータ化されているが、明治以降の学者が遺した貴重な中国語語彙解釈の基礎材料として学術性ある分析が待たれる。また『官話指南』とその学習補助教科書が明治・大正・昭和時代に日本の中国語教育に大いに貢献した一方で、学校や個人のレベルでどのような学習状況が有ったかについて具体性のある研究が求められる。

参考文献

一 資料類

(1) 教科書

(日本語)

- 広部精 1880 『亞細亞言語集 支那官話部』 発行者 青山清吉
吳啓太 鄭永邦 1882 『官話指南』(初版) 発行者 楊龍太郎
鄭永邦 吳大五郎 1888 『日漢英語言合璧』 発行者 鄭永慶
九江書会 1893 『官話指南』(九江版) 九江印書局
金國璞 1903 『官話指南』(改訂版) 文求堂書店
鄭永邦 1904 『北京發音反切表』 発行者 田中慶太郎
吳泰壽 1905 『官話指南總譯』 文求堂書店
鄭永邦 吳大五郎 1910 『日清英露四語合璧』 発行者 島田太四郎
飯河道雄 『官話指南自修書』(全3冊) 大阪屋號書店
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 應對須知篇 使令通話篇』(1924)、
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇』(1925)、
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官話問答篇』(1926)

- 木全徳太郎 1939 『官話指南精解』 文求堂書店
古典研究会編 1969-1976 『唐話辞書書類』(1-20冊) 古典研究会
六角恒廣 1991-1998 『中国語教本類集成』(全10集) 不二出版

(中国語)

- (英国) T.F.Wade (トーマス・ウェード) 1867 『語言自邇集』 発行者 Kelly & Walsh L.T.D
张美兰 2011 《日本明治時期汉语教科书会刊》 广西师范大学出版社
李無未主編 2015 《日本明治教科書匯刊(江戸明治編)》 中华书局

(2) 伝記資料

(日本語)

- 東京外国語学校編 1874 『東京外国語学校官員並生徒一覽』
長崎県教育会 1919 『大礼記念長崎県人物伝』 長崎県教育会
何盛三 1928 『北京官話文法』 太平洋書房
伊藤博文 1933-1936 『秘書類纂第 台湾資料』18卷 秘書類纂刊行会
黒竜会 1936 『東亜先覚志士記伝』 黒龍会出版社
東亜同文会編 1936 『対支回顧録』下巻 対支功労者伝記編纂会
平凡社編 1953 『大人名事典』 平凡社
尾崎実 1969 『中国語学新辞典』「官話指南」(尾崎実執筆) 中国語学研究会編
宮田安 1979 『唐通事家系論攷』 長崎文献社
芳賀登[ほか]編 1999 『日本人物情報大系』11巻 満州編1 皓星社

- 芳賀登[ほか]編 1999 『日本人物情報大系』 12 卷 満州編 2 皓星社
- 芳賀登[ほか]編 1999 『日本人物情報大系』 15 卷 満州編 5 皓星社
- 芳賀登[ほか]編 1999 『日本人物情報大系』 19 卷 満州編 9 皓星社
- 日外アソシエーツ 2008 『人物レファレンス事典 郷土人物編』 日外アソシエーツ
- 野中正孝 2008 『東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち』 不二出版
- 中村義 藤井昇三 久保田文次 2010 『近代日中関係史人名辞典』 東京堂出版
- 長崎博物館所蔵渡辺文庫未刊行資料 『史料摘録』、請求記号：～13 311 1。
- 国立公文書館所蔵 「台湾総督府法院通訳官吳泰壽任官ノ件」 『任免裁可書・明治三十三年・任免卷十四』 請求番号：任 B00241100
- 国立公文書館所蔵 件名：「陸軍通訳官吳泰壽休職ノ件」 『任免裁可書・明治三十四年・任免卷十二』 請求番号：任 B00266100
- 国立公文書館所蔵 件名：「東京外国語学校教授吳泰壽以下二名依願本官並本職被免ノ件」 『任免裁可書・明治三十六年・任免卷十一』 請求番号：任 B00332100
- 防衛省防衛研究所所蔵 件名：「木下賢良、岡部次郎、西川光太郎、吳泰壽を第 2 軍司令部通訳に村田勤、松尾音次郎、酒井勝軍、中村邦佐を大本営付通訳採用方移牒村田勤削除の件」 『大本営大日記』 請求番号：C09121994700
- 外務省外交史料館所蔵 件名：『清国傭聘本邦人名表』 「安徽省／河南省／湖北省」 請求番号：B02130225600
- 国立公文書館所蔵 件名：「関東庁中学校長飯河道雄休職ノ件」 『任免裁可書・昭和二年・任免卷十六』 請求番号：任 B01354100
- 外務省外交史料館所蔵 件名：「新民学院講師並課目ニ関スル件」 『H門 東方文化事業』 請求番号：B05016176200。
- 外務省外交史料館所蔵 件名：「軍特務部第三課（文教課）組織表送付ノ件」 『H門 東方文化事業』 請求番号：B05016158900
- 外務省外交資料館所蔵 件名：「吳啓太外三名及松方正作白国留学」 『外務省留学生関係雑件（欧州之部）』。請求番号：6-1-7-6_2
- 外務省外交資料館所蔵 件名：「松方正作外三名留学生延期ノ件」 『外務省留学生関係雑件（欧州之部）』。請求番号：6-1-7-6_2
- 外務省外交資料館所蔵 件名：「吳啓太留学延期請願ノ件」 『外務省留学生関係雑件（欧州之部）』。請求番号：6-1-7-6_2
- 外務省外交史料館所蔵 件名：「北京留学生増員ノ儀ニ付建議」 『清国へ本省留学生派遣雑件』 第一卷 請求番号：6-1-7-1_001
- (中国語)
- 国务院外事办公室编著 1959 《日本人物辞典》 国务院外事办公室
- 中国社会科学院近代史所翻译室编 1981 《近代來华外国人名辞典》 中国社会科学出版社

杨保筠主编 2000《华侨华人百科全书 人物卷》 中国华侨出版社

(2) 辞典

(日本語)

国語学会編 1955『国語学辞典』 東京堂

金田一京助〔等〕編 2001『新明解国語辞典』第五版 三省堂

松村明 2006『大辞林』第三版 三省堂

小久保崇明編者代表 2014『学研全訳古語辞典』改訂第2版 学研教育出版

(中国語)

金受申 1964《北京话语汇》 商务印书馆

宋孝才 马欣华 1982《北京话词语例释》 铃木出版

陈刚 1985《北京方言词典》 商务印书馆

贾采珠 1990《北京话儿化词典》 语文出版社

徐世荣 1990《北京土语辞典》 北京出版社

常锡桢 1992《北京土话》 文津出版社

陈刚 宋孝才 張秀珍 1997《现代北京口语词典》 语文出版社

中国社会科学院语言研究所词典编辑室 2005《现代汉语語词典》(第5版) 商务印书馆

齐如山 2008《北京土话》 辽宁教育出版社

傅民 高艾军 2013《北京话词典》 中华书局

刘延武 2015《老北京方言俗语趣味词典》 群众出版社

二 著述類

(1) 著書

(日本語)

山田孝雄 1935『漢文訓読によりて傳へられたる語法』 宝文館

井上翠 1950『松涛自述』 大阪外国語大学中国研究会

六角恒廣 1975『中国語への道』 大修館書店

六角恒廣 1984『近代日本の中国語教育』 不二出版

六角恒廣 1985『中国語関係書書目：1867～1945』 不二出版

六角恒廣 1988『中国語教育史の研究』 東方書店

六角恒廣 1989『中国語教育史論考』 不二出版

六角恒廣 1994『中国語書誌』 不二出版

六角恒廣 1998『中国語学習余聞』 同学社

六角恒廣 2001『中国語関係書書目：1867～2000 (増補版)』 不二出版

六角恒廣 2002『中国語教育史稿拾遺』 不二出版

築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会

森岡健二 1988『文体と表現(現代語研究シリーズ 6)』 明治書院

- 李思敬著；慶谷壽信 佐藤進編訳 1987『音韻のはなし：中国音韻学の基本知識』 光生館
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編、松岡榮志 古川裕監訳 2004『現代中国語総説』三省堂
- 森松俊夫 2013『大本營』吉川弘文館
- 古田島洋介 2013『日本近代史を学ぶための文語文入門 漢文訓読体の地平』吉川弘文館
- 内田慶市 氷野善寛 2016『文化交渉と言語接触研究 官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』
好文出版
- 楊鐵錚 2018『明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』』 兩風
堂

(2) 論文

- 太田辰夫 1950「清代の北京語について」『中国語学』第34号 日本中国語学会
- 太田辰夫 1965「北京語の文法特点」『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生
還暦記念』久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念行事準備委員会
- 太田辰夫 1969『中国語学新辞典』「近代漢語」（太田辰夫執筆）中国語学研究会編
- 太田辰夫 1974「〈鏡花縁〉考」『東方学』48 輯
- 那須清 1970「(改訂) 官話指南の語彙」『文学論輯』第17号
- 六角恒廣 1881「唐通事と唐話教育」『早稲田商学』総第292号
- 六角恒廣 1984「北京官話教育の開始」『早稲田商学』総第305号
- 六角恒廣 1985「中国語教育史の時期区分」『早稲田商学』総第313号
- 平上去入生 1911「清語同学会の近況(上)」『燕塵』第4年第7号
- 鱒沢彰夫 1988「北京官話教育と『語言自邇集 散語問答』明治10年3月川崎近義氏鈔本」『中国語
学』235号 日本中国語学会
- 高野繁男 1991「漢文訓読体の語法」森岡健二編著『近代語の成立 文体編』明治書院
- 中嶋幹起 1990「唐通事の担った初期中国語教育-南京官話から北京官話へ」『東京外国語大学史』東
京外国語大学史
- 淡水 1995「北京清語同学会」那須清編『北京同学会の回想』不二出版
- 黄漢青 2007「支那語研究舎の変遷及びその実態：支那語研究舎から北京同学会語学校までを中心と
して」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』39号 慶應義塾大学日吉
紀要刊行委員会
- 氷野善寛 2010「『官話指南』の多様性—中国語教材から国語教材」『東アジア文化交渉研究』第3号
関西大学文化交渉学教育研究拠点編
- 氷野善寛 2012『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』 関西大学 博士論文
- 氷野的 2011「明治初期の翻訳文体規範：予備的考察」『翻訳研究への招待』(5) 日本通訳翻訳
学会
- 許海華 2012『幕末明治期における長崎唐通事の史的研究』 関西大学 博士論文
- 古市友子 2014『近代日本における中国語教育に関する総合研究-宮島大八の中国語教育を中心に』

大東文化大学 博士論文

- 中村雅之 2015A 「唐話纂要の仮名音注について」『KOTONOHA』第 156 号古代文字資料館発行
- 中村雅之 2015B 「唐話使用の南京官話音」『KOTONOHA』第 157 号古代文字資料館発行
- 園田博文 2016 「『官話指南総訳』（明治三八年刊）の日本語—当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに—」『近代語研究』 近代語学会編
- 王雪 2017 「明治・大正期における日本人の r 化音の学習」『東アジア研究』15 号 山口大学大学院 東アジア研究科
- 杉崎夏夫 2017 「明治時代語の一考察：言文一致と標準語教育と新聞の文体の関係を中心に」『武蔵野教育学論集』武蔵野大学教育学研究所
- 楊鐵錚 2017 『明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金國璞、張廷彦と『官話指南』』東京学芸大学 博士論文

(1) 著書

(中国語)

(元) 周德清輯《中原音韻》 芸文印書館 1997 影印本

Edkins, Joseph 1864 『A Grammar of the Chinese Colloquial Language, Commonly Called the Mandarin Dialect』董方峰、楊洋译 (2015) 《汉语官话口语语法》 外语教学与研究出版社

王璞 1913 《京音字彙》 周建設主編(2015) 《明、清、民国时期珍稀老北京话历史文献 整理与研究》 影印本、首都師範大學出版社

王力 1985 《中国现代语法》(王力文集 第二卷) 山东教育出版社出版

鲁允中 1995 《普通语的轻声和儿化》 商务印书馆

李思敬 1986 《汉语儿音史研究》 商務印書館

黄万机 1989 《黎庶昌评传》 贵州人民出版社

秦国经主編 1997 《中国第一历史档案馆藏 清代官员履历档案全编 7》 华东师范大学出版社

周一民 1998 《北京口语语法·词法卷》 语文出版社

周一民 2002 《现代北京话研究》 北京师范大学出版社

吕叔湘 2002 《中国文法要略》 辽宁教育出版社 2002 年版

张卫东译 2002 《语言自述集：19 世纪中期的北京话》(英) 威妥瑪著 北京大学出版社

弥松颐 1999 《京味儿夜话》 人民文学出版社

黄伯荣、廖序东主編 (2011) 《现代汉语》(增订五版) 上、下册 北京高等教育出版社

魏 薇 2013 《北京官话教科书词汇研究》 吉林大学出版社

陈明娥 2014 《日本明治时期北京官话课本词汇研究》 厦门大学出版社

杨杏红 2014 《日本明治时期北京官话课本语法研究》 厦门大学出版社

徐 丽 2014 《日本明治时期汉语教科书研究—以〈官话指南〉、〈谈论新篇〉、〈官话急就篇〉为中心》 北京外国語大学 博士論文

卢小群 2017 《老北京土话语法研究》 中国社会科学出版社

張美蘭 2018 《〈官話指南〉匯校與語言研究（下）—〈官話指南〉（六種）異文比較研究》上海教育出版社有限公司

(2) 論文

拓牧 1961 〈談聲介合母連拼法〉《文字改革》第 2 期 語言文字報刊社

倪海曙 1962 〈最早用聲介合母拼音的拉丁字母漢語拼音方案〉《語文建設》10 期

陸儉明 1985 〈關於“去+vp”和“vp+去”句式〉《語言教學與研究》1985 年第 4 期

孟琮 1986 〈口語里的“得”和“得了”〉《語言教學與研究》第 3 期

鍾兆華 1988 〈動詞“起去”和它的消失〉《中國語文》第 5 期

孫錫信 1997 《〈官話指南〉語法拾零》《漢語歷史語法叢稿》 漢語大詞典出版社

丁鋒 2000 《〈官話萃珍〉所見清末北京話兒化現象》、《漢語教學研究》第 3 號

王禮華 2006 〈日編漢語讀本《官話指南》的取材與編排〉《上海師範大學學報（哲學社會科學版）》2006 年第 3 號

李無未 2007 〈十九世紀末葉北京官話聲調初探—以日本人編《官話指南》為依據〉《近代官話語音研究》 語文出版社

張美蘭 李穎 2007 〈清末漢語介詞在南北方言中的區別特徵—以九江書局改寫版《官話指南》為例〉《繼往開來的語言學發展之路》 語文出版社

張美蘭 2007 〈明治期間日本漢語教科書中的北京話口語詞〉《南京師範大學文學院學報》2007 年第 2 期

吳菲 2007 《〈日漢英語言合璧〉語音教學研究》 吉林大學 碩士論文

張美蘭 2008 〈十九世紀末漢語官話詞匯的南北特徵—以九江書局版《官話指南》為例〉《韓漢語語言研究》韓國：學古房出版社

張美蘭 2009 〈清末北京官話的句法特點—以幾部域外北京官話資料為例〉《人文中國學報》第十五期 香港浸會大學《人文中國學報》編輯委員會編

李宗江 2008 〈近代漢語完成動詞向句末虛成分的演變〉《歷史語言學研究》（第一輯） 商務印書館

吳麗君 2008 〈日編北京口語教材《官話指南》的言語特點分析〉《人文叢刊》第三輯

李小軍 2009 〈語氣詞“得了”的情態功能〉《北方論叢》第 4 期

徐麗 石汝杰 2010 《〈官話指南〉的版本和語言》『開篇』第 29 號

李無未 楊杏紅 2011 〈清末民初北京官話語氣詞例釋—以日本明治時期北京官話課本為依據〉《漢語學習》2011 年第 1 期

顏峰 徐麗 2011 〈《官話指南》的代詞〉『中國語研究』第 53 號 中國語研究編纂委員會

陳明娥 李無未 2012 〈清末民初北京話口語詞匯及其漢語史價值—以日本明治時期北京官話課本為例〉《廈門大學學報》2012 年第 2 期

徐麗 2013 〈《官話指南》副詞研究〉『中國語研究』第 55 號 中國語研究編纂委員會

楊杏紅、楊艷君 2013 〈日本明治時期北京官話課本語言的詞法偏誤分析〉《湖州師範學院學報》2013

年2期

- 邓苗雯 2013 《〈官话指南〉词汇研究》 四川外国语大学 硕士论文
- 颜峰 徐丽 2014 《〈官话指南〉里的词汇和语汇现象》《黑龙江史志》2014年第1期
- 徐丽 2014 《〈官话指南〉常用句式》『中国語研究』第56号 中国語研究編集委員会編
- 林晓京 2014 《〈日清英露四语合璧〉的汉语语音词汇研究》 厦门大学 硕士论文
- 黄薇 2014 《〈正音撮要〉研究》福建师范大学 博士论文
- 郭精宇 2015 《饭河道雄在华文化活动研究》 吉林大学 硕士论文
- 山田忠司 2015 《北京话的特点—围绕太田博士提出的七个特点—》《现代汉语的历史研究》 浙江大学出版社
- 山田忠司 2016 《太田辰夫的北京话研究》『中国語研究』第58号
- 李磊 2016 《〈官话指南〉虚词研究》《艺术科技》2016年第1期
- 齐灿 2016 《19世纪末南北京官话介词比较研究—以〈官话指南〉〈官话类编〉注释为例》『東アジア文化交渉研究』関西大学文化交渉学教育研究拠点
- 赵葵欣 2017 《〈官话指南〉助动词系统研究》『福岡大学人文論叢』49号 人文論叢編集委員会編
- 郭锐 翟赞 徐菁菁 2017 《汉语普通话从哪里来?—从南北官话差异看普通话词汇,语法来源—》『中国言語文化学研究』第6号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
- 曹保平 邓霁月 2019 《〈官话指南〉的敬辞、谦辞初探》《海外华文教育》2019年第1期

既発表論文と各章の関係

- 序論 「《官話指南》の研究現状」『語学教育研究論叢』第33号 大東文化大学語学教育研究所 2016 pp. 153-168
- 第1章 「《官話指南》における北京語語彙」『中国言語文化学研究』第5号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2016 pp. 153-167
- 第2章 「『官話指南』における北京語文法の研究：“詞法”を中心に」『語学教育研究論叢』第35号 大東文化大学語学教育研究所 2018 pp. 257-272
- 第3章 「『官話指南』における北京官話特徴の再考察 —初版と九江書会版の対照研究—」『中国言語文化学研究』第8号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2019 pp. 73-88
- 第5章 「吳泰寿訳『官話指南総訳』における原文注釈について」『中国言語文化学研究』第7号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2018 pp. 124-133
『官話指南総訳』と『官話指南精解』の語彙解釈『研究会報告』第44号 日本語文法研究会 2019 pp. 143-151
- 第6章 「《官話指南自修書》仮名注音の考察」『中国言語文化学研究』第6号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2017 pp. 80-93
- 第8章 「鄭永邦『北京發音反切表』の考察」『語学教育研究論叢』第36号 大東文化大学語学教育研究所 2019 pp. 103-121
- 第9章 「明治末期における中国語教科書仮名表記の考察：鄭永邦の著書を中心に」『外国語学研究』第20号 大東文化大学大学院外国語学研究科 2019 pp. 25-32

附録：『總譯』『自修書』『精解』三書における注釈一覧表⁽¹⁾

『官話指南總譯』	『官話指南自修書』	『官話指南精解』
應對須知		
您納／您ハ呼人之尊稱ニシテ您一字ヨリハ丁寧ナリ尊稱ナリ。	您納／您是普通你を丁寧にいふ場合に用ふ、納は軽く添へたるもの意味なし、哪とも訥などとも書く。	
	貴姓／國にては普通人の姓だけを尋ね、名を問ふ場合少し、若し姓と名と両方共に尋ねる時は尊姓大名などといふ。	
台甫／台甫ハ人ノ號ヲ尋ネルトキニ用ユル尊敬ナリ	台甫／相手の戸籍面の名を呼ぶことは肉身の者が下僕にでもなければ常になきことなり、依て常に號を尋ね、甫は字名、台は他人を尊敬して云ふなり。	
草字／己ノ號ヲ稱スル謙遜ノ辭ナリ。	草字／自分を卑下して草の如しといふ。	
昆仲／昆仲ハ兄弟ノ文語也。	昆仲／昆は兄、仲は兄弟長幼の順序をいふ、二字にて兄弟。	
	弟兄／中國俗語にては我が兄弟といふべき所を顛倒して弟兄といふ。	
省城／トハ其ノ省ノ首府即チ最高官ノ駐在所ヲ云フ故ニ河南省城トハ河南省ノ首府開封府ヲ云フナリ。	省城／一省の首府、江蘇省城は南京。	
府上 ^{ヤシキ} ／御宅、御邸。	府上／他家に對する尊稱。	
久仰／久シキ以前ヨリ欣慕セリトノ意。一トハ将来永ク敬慕スベシトノ意ヲモ含ム。	久仰／久し大名を仰ぐの意。	
高壽／老人ノ歳ヲタツヌル言葉。	高壽／高は他人を敬ふ言葉、二字にて他人の年齢をいふ、常に三四十歳以上の人に對していふ。	
虛度／何ノ効ヲモ立テ得ズ空シク年	虛度／虚は空、度はわたる、二字にて	

⁽¹⁾ 1. 本表は『官話指南』4巻の順に凡での注釈を表示する。2. 本表は時代順で『總譯』の注釈を第一列とし、『自修書』、『精解』にも注釈がある場合、併記し、ない場合に空白とする。

ヲトレリトノ意ニシテートハ即ワ ガ年ヲトリタル謙遜ジナリ。	歲月のこと。	
並／一向、格別決シテナドト譯ス。		
	鬚髮／鬚は鼻下のひげ髪は頭の毛。	
	托福／あなたの福氣に托しての意。	
	纒／やつとしたばかり。	
	已經／已も經も共にすでに、經は此時 は第四聲に讀む、經過する意の時は第 一聲。	
	尊姓大名／姓も名も両方尋ねる時に 云ふ。	
官名／戸籍上ノ本名也。	官名／戸籍面の本名。	
	行一排／行本来の意義は同輩の意、排 は排列の排、排行と合わせて兄弟を男 女を通じて年齢順に列べたるものを いふ。順次に排大、排一、排二を稱す。	
還／尚也所ニヨリ未又ノ意モアルナ リ。		
貴甲子／人ノ年ヲ尋ネルニ用フル辭。	甲子／甲、子は各十干、十二支の首、 合わせて年齢の意。	
恭喜／他人ニ対ソ賀喜スル意ニテ其 ノ人ノヲ尋ネルニ官人商売ノ別ナク 此語ヲ用フ、例、恭喜那衙門、恭喜在 那兒ナドノ如シ、御勤先ト譯ス。	恭喜／他人の職業を祝福して恭喜と いふ。	
相好／懇意。		
請安／安否ヲ訪フ。	請安／他人の安否を問ふの意、ご機嫌 伺ひをすること。	
	特／態々。	
敢當／痛ミ入りマスト譯ス。	不敢當／どういたしまして、又は恐れ 入りますといふ程の意、敢て尊意に當 らんやの略。	
久違／久シク懸違ヒ面會セヌ時ノ挨拶。	久違／違は離るといふ字、久しく會は ざること。	
	聽見／見には意義なし。	
	老兄／對當位の相手を尊敬して言ふ。	
勞駕／御足勞ナリ。	勞您駕／あなたの駕を勞し相濟まざ るの意。	
拾掇／仕分、片付ケナドト譯ス。	拾掇／片付ける。	

	都／皆の意、此時はトウと読み、其他はトウ。	
兄弟／弟ノ稱ナルヨリ転ジテ自稱ニモ用フ、ココモ亦自稱ナリ、猶小弟トイフガ 如シ同輩間ニモチフル語。	兄弟／私の意。	
	再／再度の意にあらず、…になつてからの意。	
謝歩／先方ノ歩ヲ枉ゲンヲ謝シ答禮ニ行クヲイフ。	謝歩／他人の訪問に對し答禮するをうふ。	
少見／久違ト同意味ナリ。	少見／久違と同意。	
那總得／其必須也。		
竟／唯又ハハかり。		
	莫不／……あらざる莫きか。	
	可不是麼／尤もです。其通りです。	
	纔好／やつとよくなつたばかり。	
	復元兒／元に復す。	
	怕是／恐らくは、多分。	
	重落／重は重複の重、再びの意、落は病氣が重くなること。	
	着涼／風を引く。	
	渾身／全身。	
	酸痛／ひどく痛む。	
	請大夫／醫者を呼ぶことを請といふ。	
	一治／一は原来唯一つ讀むときは第一聲、下の字が第四聲ならば變じて第二聲となる。	
	好好兒／同じ字が二つ重なる時は下の字一聲に讀む。	
	靠不住／靠はもたれるの意、あてにならぬ、あてになるは、靠得住。	
	雲山霧照的／雲の山霧の光、誇張すること。	
	和他要準兒／彼に確實を要求する。	
算是／可謂也。	算是／…といふものだ	
白／徒也。	白用心／無駄に心を勞する。	
^{ヘキナリ} 脾氣／癖也。	脾氣／癖、缺點。	
一味的／一邊。	一味的／單一なる。	

	胡吹混傍／胡も混も無暗にの意、吹も傍も法螺を吹くこと。	
	您要是／您若是と同じ。	
	上檔／ペテンにかかる、上當とも書く。	
這一向／此項、此間中、ナドト譯ス。	這一向／此頃。	
還得／尚須也。		
關照／御世話、御心付、ナド、譯ス。		
	恙／病氣又憂愁の意、つつがと訓ず、古昔、草居の時代に善く人をかむつつがといふ虫あり、その毒を被る者多きより勞問の辭に恙なきやといひしより轉義すといふ。	
	輕省／輕はかるくなる、省は少くなる。	
	補藥／身力を補ふ藥。	
	調養／ととのひ養ふ、この場合は調は有氣二聲。	
隨便／自由、勝手、氣儘。	隨便／便に隨ふ、勝手氣儘にすること。	
愛／受顧。		
肯叫／敢使也。		
那就是／其即也。		
	不要／不の字第四聲の上に来る時は第二聲に變ず。	
	拘禮／禮に拘泥する、遠慮すること。	
	照／……の通りに。	
賞我臉了／私ノ顔ヲオ立テクダサルノダ。	賞臉／顔を立てる、其反對は「丟臉」。	
賞我的／私ニ下サレタ。	蒙ニ你賞ン我的	
	味道／あぢはひ、にはひは味氣又は味兒。	
	好說／どう致しまして。	
	崇安／福建省建安道崇安縣。	
武夷山／崇安縣ニアリ有名ノ茶場ニシテ猶我國ノ宇治ノ如シ。	武彝山／崇安縣内烏龍茶の産地、武夷とかく方よし。	
逛了／遊歴ス。	逛了兩天／二日遊んだ。	
	不成敬意／敬意をなさず、失礼しました	

老師／コノ稱ハ多クハ己ニ用フマタ己ノ受験セル考試ノ房師即チ試験委員ニモ用フ。	老師／自分の恩師。	
	拜客去／訪問に行く。	
問好／安好ヲ問フ。	替我問他好／我に替はり彼に好きかと問へ、よろしく申してくれとの意。	
來着／……ヲシテ局タ過去ヲ示ス語ナリ。	來着／……して居る。	
欠安／微恙、恭敬ノ意ヲ含ム、二人稱ニ用フル場合モアリ。	欠安／安を欠く、身體に故障があるをいふ。	
總沒能／一切出來ナイ。		
説話／談語。		
	一定的理／きまつた理屈で少しの疑もない。	
撒謊／虚言ヲ吐ク。	撒謊／うそを言ふ。	
	騙人／人をだます。	
丟臉／丟ハ失也、面目ヲ失スルヲイフ。	丟臉／顔をつぶす。	
這麼着／其通り。		
顔色／顔ノ色ニアラズ。		
	你看／看は見る又は思ふ。	
	假的／にせ物。	
	分辨／見分ける。	
	光潤／つや。	
	如今／いま。	
	閒着／職業なしに遊んで居る。	
生意／營業、商賣。	做生意／生業をなす。	
本錢／資本金。	本錢／資本。	
夥計／手代、丁稚。	夥計／手代、丁稚。	
	手藝／手先の仕事。	
偕們倆／御互兩人。	偕們／お互、我々。	
究竟／到底、畢竟、結局。	究竟／つまり、畢竟。	
慢慢／寬々、緩々。		
就是了／セン而已。	就是了／……すればよろしい。	
您々／遊歩、散歩		
	等・再／…してから。	
	逛逛／遊ぶ。	
懶怠去／行クコトカ厭ニナツタ。	懶怠去／「懶怠」だけならば怠ける、「懶怠去」は行くものうしといふ	

	意。	
下高興／興ガナイ、氣ガ引立タヌ。	高興／面白い、氣乗する。	
既是這麼着／既ニファウイフコトナラバ。		
好不好／如何トナス。		
	一同／一緒に。	
搭伴兒／連立。	搭伴／一緒に往く。	
人好些個／人々はハ多クノ人好些個ハ許多也。		
	與我／我に取つて。	
	清楚／はつきりする。	
	對人／人と相對して。	
	嚷／ロやかましく言ふこと。	
顯著／…ノ様モ見ユ。	顯著／のやうである	
嗓子／咽喉ナリ転ジテ音声ノコトヲモ言フ。	嗓子／のど。	
	響亮／ひびきが明亮なること。	
含糊／糲糊。	含糊／曖昧なる。	
剛纔／今シ方。		
榻扇／支那ノ障子。	榻扇／木製のつい立の窓のあるもの。	
	耳朵／みみ。	
	聾／つんぼ。	
	不管／かまはない。	
千萬／決シテ。	千萬／決して、何卒。	
別／勿也。		
僅得／解ス。		
	不至於／するに至らず、…のやうな事はない。	
	壞事／事を破る、妨げをする。	
	畧／ほぼ。	
	廈門／福建省のアモイ。	
	甚／はなはだの意の時は第四聲。	
鄉談／方言、土語	鄉談／田舎言葉、方言。	
	官話／説に官話とは官界の言葉なりと、又一説には官話とは公用語のことなりと、その何れなるか確ならず、前朝時代北京官界を中心として北京城内に通用し一種の標準語として使用せられたるものなり。北京官話の外に	

	南京官話あり。	
就是／唯也。	就是／ただ	
腔調兒／語調、語勢調子。	腔調／口調	
差不多／大概也、差多カラズ也、幾以事。		
老／久シキ間。		
認得／識也。	認得／人を見知る、此場合「知道」とは言はず。	
好／甚なり。		
面善／面識アリ。	面善／面識の間。	
不記得／記憶セズ。	記得／記憶する。	
冒昧／無暗、慢然、漫ニ。	冒昧／無暗に言ふ。	
張二／二ハ排次ノ數、張家ノ次男トイフ義ナリ以下之ニ倣へ。		
	稱呼／名前。	
提起來／左様言イ出セバ。	提起來／話を言ひ出す。	
前天／一昨日。		
會／能事、為シ能フ也。		
所以／其故也。		
	您納這一向好／あなたご機嫌よろしくといふ常用の挨拶語。	
	字畫／掛軸や額等を書いてある字を云ふ。	
閣下／呼人之尊稱也同輩間ニモ用フ。	閣下／我邦の閣下よりも地位の低さ人に對しても言ふ、改まつて言ふ場合には對等の人にて言ふ、我邦の閣下に相當するのは大人。	
介紹／紹介。		
給您／汝ノ為ニ。		
安心罷／安心セヨ		
交給我了／私ニ渡セ、私ニ一任セヨ。		
	代為／代つて……をなす。	
所有／有ラユル。	所有／あらゆる。	
就是／即也	就是／これこそ。	
二三裏／清國ノ一里ハ凡ソ我カ國ノ六丁ニ當ル。		
	晌午／正午、「晌」一字にて正午の意あり。	
	喜歡／好む、喜ぶ。	

轉過灣兒去／角ヲ折曲ツテ行ク。	轉過灣兒／角をまがる	
叫人／人ヲシテ…セシム、叫ハ公語ノ使ノ字ト同シ。		
	…啊是…哪／…がそれとも…か。	
四更天／四更ノ刻、午前二時頃ナリ、一夜ヲ五分シテ五更トセル四更目ノ刻ナリ。	四更天／昔、日没に漏刻を設け、漏の盡くる迄を五分して初更（戌刻八時）二更（亥刻事時）三更（子刻十二時）四更（丑刻二時）五更（寅刻四時）と稱せり、更はチンと讀むに注意。	
比／比較ノ比也ヨリモト譯ス。		
白天／白晝、晝間。		
好看／美觀也。		
算定／可謂…ノ意又大概ノ意ヲ含ム。		
	月亮／月	
	廟／佛寺、神社。	
寶塔／塔。	寶塔／塔のこと。	
拿開了／取外ス。		
為什麼／何ガ為ニ、何故ニ。		
竟／竟ニ也又只管也。		
噪躑／踏荒ス。	好上去麼／この好は「可以」の意。	
	混躑躑／混は無暗に、躑躑は踏みあらす。	
炕／支那北方ニ於テハ磚ニテ土床ヨリ凡ソ二尺計リ積上ケ其中ニ火道ヲ通シ暖ヲ取ル工夫ヲナシ上面ハ泥ヲ以テ塗り蘆席ヲ敷キタル一種ノ臥床ナリ今假ニ煖床ト譯ス。	炕／北方の支那にては常にオンドルの上に睡る、炕はオンドル。	
窗戶／窓		
捨不得／捨テ能ハヌ別離ノ情ニ堪ヘヌ意		
可是／併シ。		
趕／後置詞ノ…カラト譯ス。	趕到了／…になると。	
颺起來／吹き起ル吹き来。		
利害／烈也、甚也	很利害／非常に烈しい、ひどい。	
巧了／大概、想像ノ想。	巧了／多分、大概。	
我可知道／可ハ則也		
毒／烈也、酷也。	太陽很毒／太陽がつよく照らす。	
但是／併シ、但シ。		
沒法子／詮方ナシ、己ムヲ得ズノ意。		

	好出門／好は「可以」に同じ。	
就是／たとひ。	就是／「たとへ」といふ程の意。	
一會兒／暫時。		
也好／其即也。		
起來／起き出デ。		
	等・再／…してから。	
	天亮／夜が明ける。	
走動／廁ニ行く。	走動／便所に行く。	
怪不得／道理デ。	怪不得／道理で。	
五更天／五更ノ刻、午前四時頃。	五更天／午前四時頃。(本卷二一の註を見よ)	
可就／其即也。		
	嫌／…なる嫌がるやつだ。	
棉被窩／木棉蒲團。	被窩／かけ蒲團、敷蒲團は「褥子」。	
自鳴鐘／鈴打チ時計		
嚙嚙的／時計ノ時ヲ打ツ音ヲイフ。		
	兩下兒／二時、午前午後共に用ふ、鐘を打つ回数より来れる言葉。	
	不準／あつてない。	
?亦錶ト書シ懷中時計。	表／懷中時計「錶」とも書く。	
到底／畢竟也、究竟也。		
頂／第一、最。		
喜歡／喜ブ、好ム。		
聽説／聞ク所ニ據レバ嘗聞之也		
就／直也。		
	不用問／問ふを用ひされ、聞くな。	
	學房／前清の末までは所謂近來の學校なし、皆學房といふ塾に通學したるなり。	
拐彎兒／曲り角。	拐彎兒／「彎兒」は角、「拐」はまがる、まがり角。	
報子／一種ノ門札ナリ清國ニテハ紅キ紙ニ校長塾主ナドノ姓ナドヲ書キ門柱ニ貼附ス是ヲ報子トイフ。	報子／紙にかいた門標。	
	師傅／先生、今は餘り、言はず、多くは「先生」「教習」「教員」等を言ふ。	
	史記／漢司馬遷の史記。	
	讀書人／支那に讀書人といふ社會的の一階級あり、今の智識階級と云ふに	

	も當らんか。	
好歹／善惡。	好歹／善惡を俗には好歹といふ。	
學／習也。		
王右軍／王羲之。	王右軍／書聖王羲之のこと右軍將軍たりしによりいふ。	
字帖／法帖。	字帖／手本、多くは折手本。	
好不好／如何、善キカ悪キカ也。		
阿彌陀佛／凡ソ清國ノ僧侶ハ他人ト對談ノ際一問一答阿彌陀佛ト稱ス、應答ノ詞ナリト知ルベシ。		
僧人／僧ノ自稱。		
不中用了／役ニ立たヌ。		
種／植也、又播種ノ場合モアリ。		
	讀書／書物の講釋。	
	講究／重きを置く、やかましい、こつて居るなどとも譯す。	
	埋沒／埋める、没は此時は「モオ」と讀む。	
	用心／心を用ふる、勉強する。	
	進盆／進歩する。	
	還怕一麼／それでも尚…なるを恐れるのか。	
	大和尚／僧侶の頭目。	
	在山上／寺に居るをいふ。	
	並沒／少しも…しない。	
令尊大人／御尊父。		
千秋／誕生日。	千秋／千年と同じ、時の久しきに喩ふ、後世人の誕生日を祝ふに言ふ。	
別推辭／辭退スルコト勿レ。		
費心／御配慮。		
	賞收／賞納に同じ、顔を立てて納めてくれ。	
	見一見／引き合はせる。	
嘻／歎聲、嗚呼也	瞎／輕悔の意を表はす感嘆詞。	
沒出息／氣概ガナイ、成業シ能ハヌトノ意ヲ含ム。	沒出息／将来の見込がない。	
整天家／終日。	整天家／一日中家に居る。	
	遊手好閒／手を遊ばし閒を好む、好は好む意の時は四聲。	

	正經事／正經の真面目な仕事。	
老子娘／両親。	老子娘／両親。	
由着／任せ、通り。		
性兒／意思。	由着他的性兒鬧／彼の性質によつて 鬧せしめば。	
多嗜／何日、又何時也本ハ多早晚トイ ヒンヲ音便ニシテ多嗜轉訛トイフニ 至レルナリ。		
是個／本當ニ。		
	了手／やめる。	
	依我說／我れの言ふに依れば。	
	不如／…に如かず。	
	能勾／…能ふ、能夠又は能殻ともか く。	
	哄／笑ふ。	
往 upper 巴結／段々巴結ハ這ヒ上ル意ナ リヨリ転ジテ立身ノ意ニ用フ。	巴結／立身する、媚びる。	
像人家／他人ノ如ク。		
	差使／公務。	
	不悞／怠らず。	
耍馬前刀兒／馬前デ刀ヲ振舞ス謂ニ シテ即チ人前バカリヲツクラフ意唯 人前バカリツクラヒ仕事ヲ為スノ謂。	耍馬前刀兒／人前をつくらふ。	
溜溝子棒臭脚／泥溝ノ中ニ落チテ他 人ノ臭イ脚ヲ捧クヲ即チ賤シキ阿諛 ノ甚シキ意	溜溝子／おべつかを使ふ。	
	捧臭脚／溜溝子と同じくおべつかを 使ふ。	
來不及的／為ス得ザル事。	來不及／やり切れない。	
好官的／良官吏、伎們才能ノアリ官 員。		
各人／自身。		
保得住／保ツ事ヲ得。		
	耍錢／賭博する。	
	回家／役を失つて家に歸る。	
	京官大人／在京の大官。	
本事／技藝、才能。	有本事／抜量がある。	
?? 真誠意外ニ當ルライフ。		
事官／地方官。		

	認真／真面目に。	
	外官／地方官	
	學得好／習い方がよい。	
榜樣兒／模範、手本。	榜樣兒／手本。	
	上行下效／上行つて下之に倣ふ、行は動作を表す時はシンとよむ。	
貪贓／賄賂ヲ貪ル、喜苞苴也。	貪贓／賄賂を貪る、贓は賊に同じ。	
涎皮賴臉的／鐵面皮ノ意。	涎皮賴臉的／厚顏無恥	
儘自來／度々來ル、勝手次第ニ來ル。	儘自／勝手に	
	欺軟怕硬／弱い者いぢめ。	
	草雞毛／草雞がみずぼらしき雞、きたない雞の毛のやうにも輕薄な。	
	姑娘／娘。	
	長得很標緻／生れつき器量よし。	
	舍親／自分の親戚。	
	跟前的／育てたもの。	
	有出息／将来の見込がある。	
熬夜／深更マデ眠ラズ有事故意不眠 曰熬夜、亦曰徹夜。	熬夜／夜仕事をする。	
	作活／仕事をする。	
	耐心煩兒／面倒に耐へる、我慢をする。	
	靠得住／あてになる、信用が置ける、たよりになる。	
疼可愛 <small>イタハ</small> ガル、勞ル	疼愛／非常に可愛がる。	
一黑／日ガ暮ル、ヤ否ヤ		
素日／平常。		
	俗語兒／諺。	
栽培／世語。	栽培／陶冶、教育。	
像這麼／像ハ如也、此ノ如ク也、コノヤウニ。		
	承您抬愛／親切にしてもらふ。	
那兒的話呢／何ヲ仰アルノDESTOイフ意味痛ミ入りマスト意譯ス。	那兒的話呢／どういたしまして	
	效勞／盡力する。	
多心／心遣	多心／心配する、疑深き。	
齒		
嚙不動／咀嚼ガ出来ヌ。	嚙不動／嚼はかむ、かみきれない。	

	燉／煮る。	
爛々兒的／クダクダニ煮ヘタル貌。	爛々兒的／くづれるやうに。	
	弄的／弄菜は料理を作ること。	
挺榭硬的／コツコツシタル物。	挺榭硬／挺硬は堅固なること、榭は物を嚙む時する音。	
…マデモ…デサヘモ。		
	脆的／もろい。	
瓜子兒／瓜ノ核、特ニ水瓜ノ核ヲイフ。	嗑瓜子兒／瓜子兒を割り食ふこと、瓜子兒は南瓜や西瓜の種子の乾したもの。	
嗑／嚙ミツズス。		
	不依／従はない	
實端出來／實情ヲ明ス意	實端出來／事實を打明ける。	
耿直／耿ハ耿介也即チ剛直ヲイフ	耿直／耿は正しき、二字にて正直。	
	隨和／柔順なる。	
罷了／ソレデ好イ。	罷了／おしまひ、終わり。	
	何苦／何を苦しんで…せざる。	
總不管間事／全ク無頓着。	管間事／原来の意味は余計な世話をやくこと。	
滿地的／許多也		
耗子／鼠。		
咬／嚙也。		
	不拿／拿捕しない。	
	餽／獸に食物をやる。	
	兇／兇惡なる。	
	睡不着覺／睡つかれない。	
稀爛／細カク嚙ミ碎ク貌。	稀爛／稀は稀薄などといふ、稀爛は物のくづれたる貌。	
臺階兒上／階段（石段等ノ）		
着／佇立。		
抽冷子／突然、不意。		
觔斗／跌仆之形也。		
促狹的／惡戯者、陰險者。		
攢足了勁兒／カヲ籠メテ、力限り。		
冷不防／突然、不意。		
兜着走／逃ケ隠ル。		
官商吐屬第1章		
吐屬／口振、物ノ言ヒ振		
	貴姓／中國にては普通人の姓だけを	貴姓／御姓。

	尋ね、名を問ふ場合少し、若し姓と名と両方尋ねる場合には尊姓大名などといふ。	
豈敢／痛ミ入りマスト譯ス。	豈敢／豈敢て貴下の尊稱を受くるに當らんやの意、恐れ入ります又は痛み入りますなどと譯す。	
		賤姓／私の姓。
		王／王姓。
	府上／他家を尊敬して云ふ。	府上／お宅、お邸。
	舍下／我家を卑下して云ふ。	舍下／私の宅。
東單牌樓總布胡同／北京城内東西ニ各四牌樓、單牌樓アリ十字街上四個ノ樓門アリユエニ之ヲ四牌樓トイフナリ一條街ニ一個樓アリ單牌樓トイフ都テ之ニ依テ界區トナスナリ	東單牌樓／北京城内の一つの大通りの名。	
	胡同／衚衕とをかく、横町、同は元來は二聲	胡同／横町。
行走／出仕	行走／一定の官職もなく又専任者にも非る官を行走といふ。	行走／勤務する。
	兵部／清朝六部の一、兵政を掌る、今の陸軍部。	兵部／兵部。
	當差／差は官職、役人をして居る、當は當兵、當教員の如く…になるの意。	當差／役人を勤める。
		西院裏／西鄰の邸。
	我聽見説／我れ言ふを聴く、見には意義なし。	
打聽／尋ネ		
租／貸出サウトシテ居ル、要ハ文語將ノ意欲スルノ意。	租／代賃。	出租／貸出す。
		來遲了／お出が遅かった。
		安福胡同／安福胡同。
不錯／イカニモ、左様ソノ通り。	不錯／錯は誤りの意、不錯にてあなたの仰のことは間違なし、いかにも尤なりとの意。	
怎麼／何故デス。		
打算／ツモリ、心組。		

已經／スデニ也モハヤとト譯ス	已經／已も經も共にすでにと譯す、此場合經は四聲。	
	那就是了／夫れ即ち然るかとうなづくなり。	
有個／有一個ナリ或也。		
房子／家	房／普通房子といふ、家のこと、屋子は部屋。	
住不了／住ミキレヌ。	住不了／住みきれぬ。	住不了／住みきれぬ。(廣くて)。
	住多少間下剩多少間／住むだけ住んであとは……類例「有多少拿多少來」有るだけ持つて來い。	
		除了／…を除いて。
	就是／すなはち。	
可以／以テ…スベシニテ口語ニ手ハ…スルガヨイナ譯スベシ	聽見／言ふを聴く、見には意義なし。	
下剩／其餘、殘餘。		下剩／残り、殘餘。
		轉租／又貸しする、轉賃する。
包租／悉ク引受借ル。	包租／請負借りをする。類例包做(請負で作る)包治(請負で治療する。)	包租／丸借りをする、纏めて借りる。
如數／員數通り、悉ク。	如數／數の如く、皆。	如數／極めた金額。(註) 照着某種數目、改日如數奉還。
		可慮的／心配になる。
那層／ソノ段ハ、ソノ事ハ。	那層／その段は、その事は。	
房東／家主。	房東／主。類例：東家(主人)。財東(出資者)。	
房錢／借家賃		
腳下／目下、現今。	腳下／目下、此頃。	腳下／目下、近頃。
租妥之後／借トトノヘシ後妥ハ妥當ノ意即チ程ヨク事ノナルヲ言フ。	租妥／妥は妥當に物事のまとまつたこと。	
	替…／…の爲めに、…の替りにの意。	
下餘／下剩ト同シ。		下餘／餘り、残り。
招租／借家人ヲ搜ス。	招租／租人を招募す。	
	趕…之後…／…してからあとで。	
	間／日本の間と同じからず、我が約一丈位の間口の部屋を一間といふ。	
那好辦／ソレハ為シ易シトノ意、常用		

語也。		
告訴／告ケ知ラス。		
勾出來／引分ケ。	勾出來／元來は平均にすること、此處 こては戸別に間敷を引き分け按梅す ること。	勾出來／融通する。
	一吊／一錢銅貨十枚を云ふ、約我十錢 に當る。	
找／搜也、尋也。		
住房的／住フ人、借家人ノ意	住房的／家に住む者。	住房的／借家人、間借りする人、店子。
		七十吊錢／七十吊文。
吊錢／一千文ヲ吊トイフナリ。		
彷彿／ラシイ、ヤウダ。	彷彿／恰も…のやうだ。	彷彿／如何にも…の様だ。(註) 好像。
	房子可是頂好／この可是は家賃は高 くても家はよいと家に力を入れるた めに用ひたるもの。	
院子／庭園、邸内。	院子／庭園、邸内。	院子／中庭
	還有／その外尚とも解すべきも、此處 にては「世間並に矢張り」と解すべし。	
地勢／位置。		地勢／場所、地點。
茶錢／北京地方ノ俗、家ヲ借入ル際必 ズ家主ノ召使等ニ與フ茶代是ヲ茶錢 トイフ。	茶錢／北京の習俗にて家を借りる時 家主の召使に興ふる心付け。	茶錢／敷金、茶代、心附。(註) 北平 的習慣、賃房子的時候、在房錢以外另 繳的一種錢、搬家的時候、可以多住一 個月抵算的。
		我起您手裏／私は貴下の手を通し て…。
	雖然／だけれども。	
中人／紹介人、周旋人。	中人／周旋人。	中人／仲介者。
	到底／つまりは、	
	告訴／話をする。	
		並不是我落／決して私が貰ふのであ りません。
		也不是我那個朋友得／そして又私の 友人が取るのでもありません。
	並不是／決して…でない。	
我落／私ノ手ニ入ル。	我落／我的手に入れる。	

底下人／召使、小廝。	底下人／召使	底下人／召使、使用人。
大家／一同、皆ノ者。	大家／多勢の人、皆さん。	
	幾分兒／何割何分か。	幾分兒／幾つ分。
		瞧那房子去／その家を檢分に行く
	那就是了／それでよろしい、就行了、 那使得ともいふ。	
一茶一房／例へハ七十吊錢ノ家賃ナ ラハ、初月ニ別途ニ七十吊錢ヲ茶錢ト シテ支出スルヲイフ。		
官商吐屬第2章		
鋪保／請人、保證人。	鋪保／中國に於ては店舗の主人の保 證が最も確實として喜ばれる。	
		李／李姓。
		領教／教を乞ふ、お尋ね致します。
		您納／貴下。
		趙／趙姓。
		店裏／宿屋。
	保／證人。	
	自然／勿論。	
	找得出來／捜すことができる。	
都是／全體、都テ、大方ノ意モアリ。	都是／ここにては一體全體などの意。	
	要甚麼有甚麼／要るものは何でもあ る、類例「要甚麼買甚麼」要るものは 何でも買へ、「要多少給多少」要るも のは何でもやる。	
	打算／…する積り。	
那就行了／ソレナラバ、ソレデヨロシ イ。		
準見／必ず再見セム。	準／必ず、屹度、一定、一準などとも いふ。	
未領教／未ダ承リマセヌ、承リタシノ 意ヲ意外ニ含ム。	未領教／未だ教を領せず。	
貴幹／御用向、官吏商買ヲ論セズ一般 ニ使フ。	貴幹／幹は用幹、用向の意、ご用向。	貴幹／貴下の御職業。
	販來／仕入れて来る、販賣にあらず。	販來／仕入れて来る。

	住着／旅館に宿泊するにも言ふ。	
	城外／旅館に宿泊するにも言ふ。	
	店／唯店といへば必ず宿屋のこと。	
西河沿／北京城正陽門外御河ニ沿ヘル地東岸ヲ東河沿トイヒ西岸ヲ西河沿トイフナリ。	西河沿／北京城正陽門外の御河に沿へる地、東岸を東河沿といふ、西岸を西河沿といふ。	西河沿／西河沿。
行情／相場	行情／行市的情形、相場の様子。	行情／相場。
		平和／平穩。
		貨短／品薄。
		帶來的貨／待つて来た品、仕入れて来た品。
	還算／まあ…の方だ、類例「他的病還算好」（彼の病氣はまあ好い方だ。）	
	聽見説／言ふを聴く。	
	不錯／行市的情形、相場の様子。	
行市／同	行市／相場。	
緣故／理由、所以。	緣故／理由、わけ。	
	總是／つまり。	
短／不足、寡少。	短／不足。	
	帶來／身につけて来る、手に持つて来るは拿來。	
	是…呀…還是…呢／…ですかそれとも…ですか。	
販貨／貨物ヲ仕入レル。		
洋廣雜貨／洋ハ東西洋廣ハ廣東ニテ洋廣雜貨トハ東西洋又ハ廣東ノ雜貨ヲイフ。		洋廣雜貨／洋雜貨。
		寶字號／貴下の屋號。
		小號益泰／私の屋號は益泰と申します。
		合式／適當、恰好、氣に入る。
		哈達門／哈達門。
	洋廣／洋は東西洋即ち外国、東洋は日本のこと、廣は廣東。	
	雜貨／雜貨	

	寶字號／字號は屋號、寶字號は他人の屋號を尊敬していふ、單に寶號ともいふ。	
	向來／これまで	
	往回裏／歸り途に。	
	也倒／やはり。	
	誰家的／類例「誰願意、我給誰」誰でもほしいなら私は誰にでもやる。	
	既／已に…なる以上は。	
雜貨棧／雜貨問屋。		雜貨棧／雜貨問屋。
置來／仕入來ル。	置來／仕入れて來る。	置貨／商品を仕入れる。
		皮貨／毛皮類。
		城外頭／城外。
		德發／德發號。
		藥棧／藥種商。
		關了／廢業した。
	可以／…するがよろしい。	
	令友／お友達。	
宜／廉。		
底下／今後、イツカ。	底下／今後。	
	等底下／今後いつか。	
	提您／提は言ひ出す、例、你別提那件事（お前はあの事を言ひ出すな。）	
一盪／一次也、一度。	一盪／一遍、一回、主として來往の場合に用ふ。	
	當初／最初。	
	有七八年了／類例「我在中國有七年了」私は支那に七年も居ります。	
行醫／營業醫。	行醫／醫を業として居る。	行醫／醫者をする。
瞧門脈／宅診。	瞧門脈／瞧病は病氣を診察する、門脈は宅診。	瞧門脈／宅診する。
出馬／往診、往昔支那ノ医者ハ総テ、馬ニ騎リテ往診セシニ因リ今モ豫斯ク言フナリ。	出馬／昔支那の醫者は馬にのりて往診せしにより今も尚出馬といふ。	出馬／往診する。
	晌午／晌は正午。	晌午／晝、正午、この場合「午後」の意に用ゆ。
		強／好い、割がよい。
	比・強／よりしました。	
累心／心配。	累心／心配。	累心／氣苦勞する。

		東四牌樓／東四牌樓。
	胡同／この時の同は四聲。	
	等…再／…してから。	
望看／訪問。	望着／訪問する。	望看／訪問する。
		談一談／話をする。
官商吐屬第3章		
老弟／年長者が年少者ニ對スル敬稱。	老弟／年長者が年少者を敬稱する場合にいふ。	老弟／貴下。親しき年下の者に對して
喳／元來滿州語ヨリ出テシ語ナリ、返辭ナリ。	喳／北京の方言、もと滿州語、ハイといふ返辭。	喳／ハイ。返事
也就／僅ノ意、茲ニテハモウ直ニナドノ意ナリ。 <small>ヂキ</small>	也就是／普通は僅かの意、ここではもう直ぐ。	
	特意／態々、又特々兒ともいふ。	特意／特に、わざわざ。
	兄台／年少者より年長者を敬稱するといふ。	兄台／貴下。(親しき年長者に對して)
辭行／暇乞。	辭行／暇乞。	辭行／暇乞。
多禮／丁寧。	多禮／丁寧。	多禮／御鄭寧でございます。
		家眷／家族。
	連…都…／…から…までも皆の意、連れるの意に非ず、類例「連家眷帶底下人都去」家族から召使まで皆行く。	
	可不是麼／いかにもさうです。	
		搭幫／道伴れ。
搭幫走／連立ヲ行く。	搭幫走／連れ立つて行く搭伴ともいふ。	
		單走／一人で行く。
	作官的／役人。	作官的／役人。
		新捐的通判／新に金力に依つて任命された通判。
	通別／知府の下にある役。	
	上任去／赴任する。	
	候補／各々の役にその候補なるものあり、例へば候補知府、候補知縣の如し。	候補／候補。
		缺／官職。

	像您／像は…の如し、あなたの如きは。	
捐／捐官ナリ、捐官トハ人民士庶ヨリ捐資ヲ納レサセテ官職或ハ虚銜ヲ給與スル制ナリ元ト國帑ノ紕屣ヲ彌縫スルー時ノ權宜策ニシテ常制ニハアラザルナリ而シテ試験ヲ經テ登用セラル、ヲ正路出身トイヒ捐官出身ハ捐班トモイフナリ。	捐／清朝の制、人民より金を以て役を買ふを許したるなり。	
	補缺／缺は官職、補は任ずる。	補缺／官に任命される。
通判／知府ノ下ニアル官ナリ。		
上任／就任。		
煩缺／繁劇ナル役。	煩缺／煩劇なる役。	煩缺／煩雜なる官職。
	署缺／役を代理する。	
	是一位姓周的／類例「有一位姓周的」 (周といふ方があります)	
簡缺／閑ナル役。		簡缺／閑散なる官職。
實缺／本官、實任。	實缺／本官	實缺／本官。
		署您這個缺的／貴下の職務を代理する人。
		到任之後／着任してから。
	新近／近頃。	
交卸／ワタシオロス即チ引繼也。	交卸／事務引繼。	交卸／事務の引繼をする。
	還要／ここでお目に懸つたばかりでなく此上尚の意。	
送行／見送り。	送行／送別。	送行／見送り、他の土地に轉ずる人に對してお別れの挨拶をする意。
請安／安否ヲ伺フ。	替我請安問好／請安はご機嫌伺ひ、問好も安否を問ふ、我に替つて安否を問へ、よろしく申し上げて下さい。	
官商吐屬第4章		
回稟／召使ガ主人ニ向ヒ復命スル時ニ用フル語。	回稟／召使が主人に話しする時にいふ言葉。	
		回稟老爺／旦那様に申し上げます。
老爺／長者又は主人を尊敬して呼ぶ	老爺／旦那。	

稱。		
拜年／年賀。	拜年／年賀。	拜年／年賀をする。
	讓客／は客を通す。	讓客／…に案内する、…に通す。
		新喜／お芽出度う。
		喝茶／お茶を飲む。
	請上／どうぞ上座に坐つて下さい。	
	給您拜年／改めて	
一説就是了／ロデ言へバ宜イデハアリマセンガ下輩ガ長者ニ對シ叩頭シテ年賀ヲ述ベントスルヲん長者ガ遮リテイフ辭、ソレニハ及バズトナリ。	一説就是了／一遍言へばそれによろしい、改めて年賀の祝詞を叩つしやるには及ばない。	
頭一天／第一日、初日。	頭一天／第一日。	頭一天／最初の日。
		得拜幾天哪／何日位廻禮しなければなりませんか。
	也不過／ほんの…に過ぎず。	
	節／節句、ここにては正月十五日、上元節又は元宵節又は燈節ともいふ。	
過了節／節句スギ、ココノ節ハ上元節即チ正月十五夜元宵燈節ヲ言フ。		過了節／節句を済ます、節は舊一月十五日の元宵節を云ふ。
		過節／節句。
頭年／昨年、前年。	頭年／昨年。	
封印／御用納を言ふ官印を封緘して官吏に休暇ウイ與へらる、より然かいふ毎年十二月十九、二十、二十一日ノ三日ノ内ヨリ封印ノ期初マル。	封印／役所の御用納、官印が封滅するによつていふ。	封印／官衙の御用納。(註) 清朝在年底, 新年中停辦公事, 把印封起來, 叫做封印。
		零碎的事情／細々した用事。
	零碎／瑣細な。	
	趕…之後…／…になつてから。	
	開了之後／開印之後の意。開印は封印したるものを開封するなり。	
	所／すつかり。	
	閒工夫／ひま	閒工夫／閑暇。
不像事／禮儀ニカナハストノ意。	不像事／事に似合はず、不體裁 失禮	不像事／相濟まぬ、具合が悪い。
開印／御用初ナリ、封印ノ際封緘セラ		開印／官廳の御用始。

レタル官印ヲ開封セラル、ユエシカイ フ毎年十二月十九日、二十二、十一日 ノ三日ノ内ニ開印ノ期初マル。		
所没／全ク無シ、皆無		
忙甚麼／何デ御急ギニナルカ。		
		勞駕／御足勞でした。
道新喜／新年ノ賀ヲイフ。	道新喜／道は述べる、年賀を述べる。	道新喜／新年の挨拶をする。
官商吐屬第5章		
	聽人説／人の説ふを聴く。	
		升任太守／知府に昇任する。
	升任／升は昇に同じ。	
太守／知府ノ別稱。	太守／知府の別名。	
	道喜／喜びを述べる。	道喜／喜びを述べる、祝辭を云ふ。
	預定／預は豫と同じ。	預定／豫定、心積り。
上司／上官、長官。	上司／上官	上司／上官、上司。
	接署／代理を交代する。	接署／後任の代理者に所管事務を引 繼ぐ。
貴科分／何年ノ試験ニ登第セラレタ カ。	貴科分／何年の試験の御及第ですか、 科擧の試験は毎年一回行ふ。	貴科分／貴下の御受験年度は？
		辛酒科的擧人／辛酉の擧人です。
	辛酒／かのと、とり。	
擧人／學位ナリ、郷試ニ登第セル者ニ 與ヘラル。	擧人／省城に集めて行はるる試験（郷 試といふ）に及第したるものに興へら るる學位。	
會試／五年毎ニ北京ニ於テ各省ノ擧 人ヲ集メテ試験ス之ヲ會試トイフ。コ ノ試験ニ登第スレバ、進士ノ學位ヲ授 ケラル。連年ノ試験ニ合格スルヲイ フ。	會試／五年毎に各省の擧人を北京に 集めてする試験。	會試／進士の資格試験。
	壬戌／みづのえ、いぬ。	
	承過獎／獎は賞める、過分の賞贊を承 けて恐縮する。	
微倖／僥倖。	微倖／倖は僥と同字。	微倖／こぼれ幸（註）出於意料之外的 得到，同「僥倖」。
太謙了／餘リ謙遜ニ過グ。	太謙／謙遜に過ぐ。	太謙／御謙遜です。

	榮任／他人の任務を尊敬して言ふ。	
一任／一任期間。		
上元縣／江蘇省江寧府ノ管轄ニ屬スル縣。	上元縣／民国に至り江蘇省江寧府に合併せり。	上元縣／上元縣。
俸滿／任期滿了、大抵3年ヲ一任期トス)	俸滿／俸は官府より官僚に給する給料、ここには職務の意。	俸滿／任期が滿了する。
	撫台／前清時代の一省の長官。	撫台／巡撫。
		保升今職／現職に推舉された。
	保升／保は推薦する、升は昇任。	
	那兒的話呢／何處にさういふ事はありませんうか、ありません、どう致しましてと譯す。	
		寸功／僅かな功勞 (註) 極小的功勞。
		慚愧／恥ずかしい。
	無怪／道理で、怪不得ともいふ。	無怪／道理で…。
	太守／知府のこと。	
上游器重／上官ガ器重ヲ重ンズ。		上游器重／上官が才器を尊重する。
		壬戌科／壬戌の受験。
		連捷／毎次の試験に歩一歩首尾よく合格することを云ふ。
		才高得很／非常に才能が優れてて居る。
		過獎／お褒めに恐縮致します。
		榮任／榮任です。
		況且／況してや…。(例) 道兒很遠、況且交通不便、所以他不願意去。
		愛民如子／民を愛すること子の如し。
		彼處／彼の地。
		百姓之福也／人民の幸福なり。
百姓／人民、黎民。	百姓／は萬民のこと、農夫にあらず。	
	也…／…なり。	
行期有日／發程ノ日ガ極ラバノ意。	行期有日／出發の期日定まること。	行期有日／出發の日取が決まる。
	送行／行を送る、送別。	

當不起／痛ミ入りマスノ意。	當不起／氣の毒、恐れ入る。對不起ともいふ。	當不起／相濟みません、恐縮です。
	謝歩／人より訪問を受ければ必ず答禮として又訪問をするを常とす。	謝歩／答禮。(註) 回歩。
官商吐屬第6章		
	銀號／銀行	
搶去／強奪。	搶去／強奪し去る。	
打架／叩キ合、爭鬥。	打架／喧嘩する。	
為什麼／何カ為ニ、何故		
		東街上／東街の通り。
		搶去／強盜が入る。
		打架來着／喧嘩をしてたのです。
無賴子／無賴漢、惡徒。		無賴子／無賴漢。
撿／拾也	撿了／拾つた。	撿了／拾つた。
		失票／紛失した手形。
		掛了失票／手形の紛失を届け出た。
		丟／落す、紛失する。
掛了／揭示セリトノ意	掛了／揭示した。	
當面／面前、マノアタリ	當面／まのあたり。	
各人／自身、自己。	各人的／自分の。	
		謝和／謝禮する。(註) 贈送財務、表示感謝的意思。
	銀票／銀號より發行する一種の紙幣。	
	不能白／只で清ませはしない、返禮する。	
	答應／承知する。承諾する。	答應／承諾する。
這麼着／ソコデカクテノ意		
不與我相干／我ニハ關係シナイ。	不與我相干／我れと相干せず、我れに關係がない。	不與我相干／自分とは關係がない。
扣下／取上ゲル。	扣下／控除する。	扣下／差押へる、取上げる。
約了／カタラ人訳ス、頼ミテノ意ヲ含ム。	約了／かたらつく。	約了／誘ふ。
		罵／罵る。
櫃上／營業台	櫃上の／かたらつく。	
揪／引捉へ也。	揪出來／揪は握る、引つ張る、引つ張、出した。	揪出來／引張り出す。
		攔櫃上／カウンターの上。

	欄櫃／帳場。	
		擱着／置いてある。
		算盤／算盤。
	摔了／投げる	摔了／擲げ付ける。
摔／放り出す、棄於地也		
汎官／街上ヲ巡邏スル武官	汎官／汎官	汎官／汎官。
當是／必定…センコトト思ヒノ意常 字上聲ニ読ム。	當是／…だと思ふ、第三聲に請む。	
	拿了去／この拿は拿捕の意。	
枷號／首ニ枷ヲ箝メ街上ニ曝ス。	枷號／首に枷をはめ、街上にさらす。	枷號／首かせの刑に處す。
		放他們／彼等を釋放する。
官商吐屬第7章		
		坐着／坐つて居る。
包袱／風呂敷包ミ。	包袱／風呂敷包み。	包袱／風呂敷。
	玳藍／七寶燒	
	認得／人を知るをいふ。	
		幹甚麼／何をして居るのか。
賣法蘭的／七寶燒商人。		賣法蘭的／七寶屋。
		藍貨／七寶燒
		打開／開ける。
剛纔／先刻、今シ方。		
就是罷／左様デセウ、罷ハ推定ノ辭		
掌櫃的／商店ノ主任者ヲイフ、番頭ト 譯ス、蓋必ズシモ主任員ニ限ラズ商店 員ノ稱呼ニ用ユ二人稱ニ用フル時ハ 稍敬意ヲ帶ブルナリ。	掌櫃的／店の番頭、一般の店員を尊敬 して掌櫃的といふ。	
法蘭瓶／七寶燒ノ花瓶。		法蘭瓶／七寶燒の花瓶。
白問一問／試問之也、白ハ空也徒也	白問一問／只聞いて見る。	白問一問／参考の為め尋ねる。
定燒／誂へ燒カス。	定燒／誂へて燒く。	定燒／注文する・誂へて作らせる。
局子／事務所、店職場何レニモ通ズ。	局子／店、仕事場。	局子／製造場。
		尺寸／寸法。
	得／かかる。	
	像…／…の如き。	
		小物件／小間物。
		像甚麼／例へば…の様だ。
筆桶／筆筒。	筆桶／筆筒	小筆桶／筆筒

印色盒子／肉池。	小印色盒子／印色は印肉。	小印色盒子／朱肉盒。
		小蠟燈／燭臺。
		燒得了／出来上る、焼き上がる。
	得／この得はかかるの意。	
燧燈／手燭。		
合式／式ニ合フ意、茲ニハ氣ニ入ルト譯ス。	合式／適當なら、氣に入る。	
照樣兒／見本ニ照シ見本通りニ。	照樣兒／見本通りに。	照樣兒／雛形通りに、その型の様に。
後門／清國皇城ノ後門ナリ地安門トイフ。		
先頭裏／以前、從來。	先頭裏／これまで。	先頭裏／以前に、これ迄に。
	可以拿回去／可以は婉曲なる命令。	
公館／公使館又ハソノ他ノ官署井ニ大官ノ旅館ナド孰レニモ通ズ茲ニテハ公使館ナルベシ、因ニ言フ道臺以上大官ノ旅館ハ例令一夜ノ宿泊ニ充テラレシ旅館ヲモ猶公館トイフナリ。		公館／官舎、邸（註）對別人寓所的尊稱。
		我嫌他太大／私はそれが大き過ぎるので氣に入らぬ。（例）我嫌他太髒。
失陪／告別ノ辭也。	失陪／あなたに陪待するをやめる意より別れる時の挨拶に用ふ。	
官商吐屬第8章		
就提／就ハ直ニ也、提ハ言イ出スコト、ココニテハ取次ノ口上ニハノ意。	提／言ふ、提言する。	
		徐／徐姓。
	有話説／言ふべき話あり。類例「没法吃」吃ふべき飯がない。	
彼此彼此／御互様	彼此彼此／お互様。	
出了邊外／出了一次外也。	出了邊外／出外了一邊の意、出外は旅行すること。	出了邊外／一度旅行した。
		久違／お久しう、御機嫌やう。（註）好久不見面了。
出口／長城外ニ出ルヲ言フ。	出口／長城外に出づること。	出口／蒙古方面に行く。
		收租子／小作物を取立てる。
		大哥／君、貴下。
	租子／地代。	

		幾頃地／五六百畝の畑。(註)「頃」は 一百畝。
		果木園子／果樹園。
頃／百畝ヲ一頃トイフ日本ノ六町餘 ニ相當ス而シテ一頃トハ二百四十弓 ヲイヒ一弓トハ五尺平方ノ地積ヲイ フ。	頃／一頃は百畝、二百四十弓、一弓は 五尺平方の地積を云ふ、一頃は我が六 町歩餘に當る。	
菜園子／野菜畠。	菜園子／野菜畑。	菜園子／蔬菜園。
等錢用／金ヲ要ス。	等錢用／錢の用を待つ、すぐに金が要 る。	
		地畝／畑。
	典出去／抵當にやる。	典出去／質を出す。
願意／希フ、望ム		
還是／又ハ也。		
佃戸／小作人。	佃戸／小作人。	佃戸／小作人。(註)代地主種地的人。
	種着／耕作する。	種着／耕作する。栽培する。
湊不出來／湊ハ集也、集メルコトガデ キヌ。	湊不出／湊はあつめる、融通がつか ない。	湊不出來／(金子が)纏めらぬ。
		湊得出來／(金子が)纏まる。
		錢到回贖／金子が出来次第質を受戻 す。(註)贖回、拿錢去把抵押品取回 來。錢到回贖、錢一到就把抵押品贖回 來。
	那層／其の事は。	
	商量去／相談としに行く	
	回贖／抵當を受け戻す、贖はあがなふ と云ふ字。	
	不大妥當／餘りよろしくない。	
這層／ソノコトハ、ソノ段ハ。		
		這一向／近頃、この頃。
		放下來／官に任命される。
放下／轉任、補任。	放下／轉任、補任。	
外任／地方官。	外任／地方官。	外任／地方官。
約摸／オヨソ、大概。	約摸／想像する。	約摸／豫想する。
		約摸着／豫想する。
地契／地卷、土地所有ノ卷狀。	地契／地卷、土地所有を證明する書 付。	地契／地卷。
紅契／官ノ朱印ノアル券狀	紅契／官の朱印のある地契。	紅契／登記済ノ地卷。(註)田地房產 的文契、上過稅而上邊兒印有官印的。

白契／官ノ朱印ナク個人間ノ讓受渡ノ證書。	白契／人間讓渡の證書。	白契／未登記の地。(註) 沒有納稅和經過官廳蓋印的契據。
		銀數兒／金額。
		照地／土地を檢分する。
	照回地／照一回地の略、照は地卷に照し合はせて調へること。	
切實的保／確實ナル保證	切實的保／確實な保證	出切實的保／充分保證する。(註) 切實、實實在在的、不切實的做、怎麼做得好呢。
		出保／保證する。
落／為シ能フノ意。	落・保／保證をする。	落保／保證に立つ。
憑 ^{マカス} ／倚也、任也、恃也。	憑／依る。	
		憑您一句話／貴下の言葉を信用する。 (註) 憑、依靠、憑本事掙錢。
官商吐屬第9章		
	讓／案内する。	
	舒坦／舒は安らか、坦は平らか。心安靜なること。	
		布舖／木綿商、太物屋。
客廳／奥座敷、客間ト譯ス。		客廳／應接室、客間。
閒在呀／閑ナルカナ。		閒在／閑で暮らす。
坐下／着坐、着席。		
不舒坦／舒ハヤスラカ、坦ハタヒラカ也 不舒坦トハ心地惡シトノ意。		不舒坦／体の調子が悪い。
		一項銀子／一口の金子。
一項／一件、一口。		
俏貨／ホリダシ物、恰好ナル品物。	俏貨／掘り出し物。	俏貨／掘り出し物。(註) 便宜貨。
倒過／讓受、買受、注意倒字上聲ニ讀ム。		
	倒「現在は」と「は」に力を入れて云ふ。	
	一項／一とかど、一口。	
	到過舖子／倒過は讓受買受などにて引取ること、第三聲に讀む。	

錢鋪／兩替店。	錢鋪／兩替店。	
門面／間口、表口。		門面／店の間口、店の構へ。
		従命／お言葉に従ふ。
間／間口ノ隔ヲ言フ。兩間トハ二個ノ表口ナルヲ言フ。		
原先／以前。		
關／閉也。	關／閉じる。	
東家／主人	東家／東を主とし西を客とす、故に主人は東道といひ、被傭者主人を呼んで東家といふ。	
候選／候補也、缺ヲ生ジ選任セラル、ヲ候チ局ルユエカクイフ。	候選／候補に同じ、選任せらるを候つて居る意。	
照應／世話ヲスル。	照應世話をする。	
	連…部／から…まで。	
傢俱／家具、書具類ヲイフ。	傢俱／家具	
	一包在内／一に包んで内に在り、一切ある。	
給完了／渡濟、拂渡了ル。		
不穀週轉的／クリマハシニ足ラヌ、融通ガ利カヌ。		不穀週轉的／資金の繰廻しが付かぬ。
	不穀／足らぬ。	
	週轉／場合はす。	
	費心費心／御心配相かけて誠に有り難う。	
	作項／金高をきめる。	作項／金子を用立てる。
		利息／利子。
	提利錢／利息のことを言ひ出す。	
字號／屋號。		
		裕成／裕成號。
錢行／兩替屋、錢鋪ニ同シ。	錢行／錢鋪に同じ、兩替店。	錢行／兩替屋。
通達／熟練。	通達／熟練熟達。	通達／通曉する。
		八寶街路西裏／八寶街の西側。
	舍姪／自分のいとこ、めいこあらず、めいは姪女。	
	安置／安は据へる、据へて置く。	
		選上了／選任される。
		弟兄／兄弟。
		本家／身内、親族。
		都在期內／全部含まれる。

		通行／商賣に心得がある。
		舍姪／私の甥。
		安置／居らせる、使用する。
了事／事務ヲ扱フ。		了事／仕事をする。
開市／開市。	開市／開店。	開市／開店。
初間／初旬。		
不咖／北京ノ俗語ニシテ然ナサマル 意不ハ否也咖ハ助字	不咖／問ひの動詞を繰返へさずして 否定して答ふる場合に用ふ。相手の發 問に對して其言葉を繰返さずして其 言葉を打消すに用ふ類例「你喝茶罷、 不咖了」君茶を飲み玉へ飲まない。	不咖了／それには及びません。
道喜／悦ヲ述ブ。	道喜／道は述べる、喜びを述べる。	
	我也要回去了／也是もう…といふ程 の意。	
	就是就是／その通りにして下さい、ど うかよろしく。	
	您請進去罷／主人の門口迄客を送る に際し、客より「送らずに奥の方へお 這入り下さい」と言ふ程の意。	
官商吐屬第 10 章		
木匠／木工。		
		劉木匠／劉大工。
師傅／所謂師匠ナ今棟樑ト譯ス。	師傅／木匠廚子瓦匠の如き職人を尊 敬して師傅と呼ぶ、商人に對する掌櫃 的の如し。	師傅／棟樑、親方。
	莊稼／作物。	
這程子／此項中。		這程子／この頃。
年頭兒／作物ノ稔穀。	年頭兒／年柄。	
	穀／足る、八分作にはなるでせう。	
		八成／八割。
		年紀／作柄。
八成年紀／八分作。	八成年紀／八成は八割、年紀は歳又は 年齢、八分作の年。	

打了／收穫セルカ、因ニ言フ打ノ字ハ動詞トシテ種々ノ場合ニ用ヒラル随テ各ノ場合ニヨリ譯語異レリ。		
		多少石／何石。
石／二斛ヲ一石トイフ凡ソ日本ノ五斗六升弱ニ當ル。	石／二斛を一石といふ、我が五斗六升弱に當る	
糧食／穀物。		糧食／穀物。
		打糧食／作物を取入れる。
應着活／活ハ工事也應着ハ受負フ事、又有付クト言フ場合モアルナリ。	應…活／仕事を請負ふ。	
薦主／周旋人。	薦主／周旋人	薦主／推薦者。
	蓋房子／家を建てる。	
	包…活／仕事を請負ふ。應活に同じ。	
舉薦／推舉、トリモツ。		舉薦／推薦する。
		江老爺／江旦那。
		堅固／堅牢
蓋房／家ヲ建ツ		
包／受負。		
不但／音ニ…ノミナラズノ意。	不但／音に…のみならず且つ。	
	工程／工事。準	
	準／屹度、必ず。	
不能含糊／曖昧ナル事ヲセジノ意。	不能含糊／曖昧なことはしない。	
	那倒容易／倒は「それは」と「は」に力を入れて云ふ。	
可有一層／可ハ惟也但也但有一節之意。		
	只有一層／可は唯、只一事有り。	
合同／契約證書。	立合同／合同は契約書立合同は契約をきめる。	
		墊板／金子を立替へる。
墊辦の起麼／自分ノ金ニテ一時融通シ工事ニ取掛リ得ルカ。	墊辦の起／立替へる、墊款は立替金、起は起工する。	
磚瓦窯／甎ハ敷瓦、瓦ハ屋根瓦、窰ハカマナリ、今假ニ瓦屋ト譯ス。	甎瓦窰／甎は煉瓦、瓦は屋根瓦、窰はかま、煉瓦屋。	磚瓦窯／煉瓦製造所。
供／供給。	供／供給する。	供／供給する。

	現錢／現金。	
小舅子／妻ノ弟ヲ言フ。	小舅子／妻の弟。	小舅子／妻の弟。
木廠子／材木店。	木廠子／材木屋。	木廠子／材木屋。
	存着／貯へ置く。	
	開發工錢／工賃を支拂ふ。	
		預備着／準備する、手當とする。
		石頭／石。
灰／石灰、漆喰。		灰／石灰。
開出來／勘定シ支給ス。		
工錢／職工ノ賃銀。		
		開發／支拂ふ。(註) 支付、這錢是櫃上開發的。
不差什麼／大概ノ意。	不差甚麼／いくらも違はない。	
穀／足ル也。	穀了／十分です。	
		不差甚麼穀了／大體足りる。
	聽…信／たよりを聞く。	聽信／返事を聞く、返事を待つ。
後兒／明後日。		
官商吐屬第 11 章		
沒在家／不在、留守。		
叫受等／御待タセ申シタ。	受等／待たせる。	受等／お待たせしました、お待遠う様。
		出城去／城外に行く。
	出城／北京内城を出る。	
	莊稼地／莊稼は作物、莊稼地は田舎。	莊稼地／畑、畠。
長起來／成長シ来ル。		
		所都長起來了罷／すっかり成長しましたでせう。
按着腳下看／今ノ様子カラ考フレバ。	按着腳下看／脚下に按じて看ると。	
		秋收有望／秋の収穫は見込があります。
		豐收／豐作。
		地(裏)／畑。
		鋤地／畑を鋤く。
	種地的／土地を耕作する者即ち百姓。	
	一棵大樹／樹木の數を數ふる時に棵といふ。	一棵大樹／一本の大樹。
		樹底下／樹の下。

		涼快了半天／暫く涼んだ。
		放牛放羊的／牛や羊を放つて。
準／必也、屹度。		
晌飯／中食、晝食。		
一棵／一本、一株。		
半天／數時間、暫ク。	半天／暫く、必ずしも半日にあらず。	
會子／暫ク。	會子／暫くの間、第三聲に讀む。	
放／牧養。		
溜達着／緩歩也、ブラブラ歩キ。	溜達著／ぶらぶら歩く。	溜達者／ブラブラと、ポツリポツリと。
		高樂／高尚な趣味。
	會高樂／能く高樂を解す。	
悶得慌／退窟二堪へヌ無聊難堪也。	悶得慌／退屈でたまらない、…得慌は…でたまない。	悶得慌／太屈で仕様がなない。(註) 心裏不暢快、愁悶。
睡晌覺／午睡。	睡晌覺／晌覺を睡る。	睡晌覺／晝寝する。
	莫若／いつそ…なるに如かず。	
		莫若…倒好／むしろ…した方がよい。
	為難的事／難儀な事。	
	緣故／理由	
什麼緣故／如何ナル理由。		
挑唆／オダテ、教唆。	挑唆／そそのかす。	
	莫非／…でないとするば。	
親友／親戚、朋友。	親友／親戚や朋友。	
對勁／意氣相投合セル間柄。	對勁／勁はつよし、對勁は力の相當したもの、交情の良き者。	對勁／氣心が合ふ。(註) 彼此相合、他們倆的脾氣不同有點不對勁兒。
	無奈／如何せん。	
		令弟／お弟サン。
左皮氣／人ニ逆ラウ氣質	左皮氣／人に逆ふ氣質。	左皮氣／根性曲り、ひねくれ者。(註) 脾氣鬱扭、他是天生的左脾氣、左性。
	儻或／若しも	儻或／萬が一にも、若しも…であれば。
準聽／必ズ聞き入レル。		
只可／只…スルバカリ。	只可／只…するばかり。	只可／只だ…する外はない。(註) 只有這麼來才行、他再三的懇求、只可答應他。
	由着他／彼にまかせん。	由着他／本人の勝手にさせる。

		養身之法／健康法。
		忽然／突然。
		分家／分家する。
		素日／平素。
		和睦／仲睦じい
		挑唆／そそのかす。
		莫非…麼／屹度…でせう。
		離間／仲違ひさせる。
		交朋友／友達と交る。
		找來／呼び寄せる。
		勸勸他／本人に意見をする。
		無奈／如何せん、何分にも、何を云ふにも。
	房屋／家屋上の財産。	房屋／家産、家作。
舗面房／店家。	舗面房／店家。	舗面房／店舗。
住房／住宅。		住房／住宅。
房契／持家券狀 家券	房契／家屋所有證書。	
押着／抵當ニ入ル。	押着／抵當入れてある。	押着／抵當に入れてある。
	傢俱東西／家財道具	
公道／公平。	公道／公平。	
		議論／非難する、批評する、文句を云ふ。(註) 評論是非、評論是非的語言。
官商吐屬第 12 章		
	莊稼／作物	
收成／收穫。	收成／收穫	
還算／マジ…ノ方デス。	還算／まあ…の方だ。	
	打了一场官司／打官司は訴訟をする、一場は一案。	打了一场官司／一度訴訟をした。
		地鄰／鄰りの地主、鄰りの畑。
	畝／一畝は二百四十弓、一弓は五尺平方の地積、我六畝強	
打官司／訴訟提起。		
窪地／凹地。	窪地／凹み地。	窪地／窪地。
		夏天／夏。
		一…就／一度…すると、…すると直ぐに…。
		下大雨／大雨が降る。
	淹了／水に浸される。	淹了／水に浸かる。

没種／植付ヲセズ。		
		竟荒着／荒れた儘にして置く。
緊挨着／スグ續キノ、挨ハ旁排也凡物 相近謂之挨。	緊挨着／挨着は接する緊はきつちり。	緊挨着／直ぐ隣り、…に接して居る。
	零碎／少しつつ。	
佔／占ム、占領。	佔了／占める、占領する。	
		姓子的／于と云ふ男。
	長工／常雇の看夫	長工／常傭。
親自／自身。	親自／自分自身で	
	可不是…麼／いかにも…ではあり ませんか。	
告下／告訴。	告下來／告訴する。	
	退出來／もどす。	
	是…啊，還是…呢／かそれとも… か。	
下膳的／殘餘ノ、分餘リハ。	下膳的／殘餘、膳は剩の本字。	
鎮店（凡田舎ノ地ニ村莊アリ鎮店アリ 商店軒ヲ列ネ較雜鬧スル地之ヲ鎮店 トイヒ否ザルヲ村莊トイフ仍テ今本 書ニハ鎮店ヲ驛 町、宿場、市場ナド、 各ノ場合ニヨリ譯出セリ）	鎮店／宿場町、町。	鎮店／宿場。
牲口／馬、驢、牛、羊ナドノ家畜ヲイ フ。	牲口／家畜。	牲口／馬、家畜。
	駝上／負はせる。	駝上／馬の背に積む。
	糧食店／穀屋。	糧食店／米屋。
客人／旅商人。		
經濟／仲買人。	經紀／仲買入。	經濟／仲買人。
	奉官／役所の許可を受ける。	奉官／官許を受ける。
牙帖／鑑札、免許手形。	牙帖／鑑札。	牙帖／鑑札、許可證。
		親自／自ら、自ら親しく。
		一查／調べる、調べて見る。
		佔地／畑を横領する、他人の畑に喰込 む。
		一定不認／どうしても認めぬ、どうし ても白状せぬ。
		告下來了／訴へました。
		查明白了／取調べが付いた。
		退出來了／取戻した。
		留着／残して置く。

		下賸／残り。
		鎮店／宿場。
		每五天一集／五日目毎に市が立つ。
斛斗／衡ナリ	斛斗／はかり。	斛斗／升。
		掙錢／金子を儲ける。
掙／儲ナリ、因ニ言フ凡ソ資本ヲ卸シソレヨリ得タル儲ハ賺トイヒ唯掙ギ即チ勞働シテ得タル儲ケヲ掙トイフナリ。		
用錢／口錢。	用錢／口錢	用錢／口錢、手数料。
	行情／相場、行市に同じ。	
往上長／騰貴ス。		往上長／騰貴する、値が騰る)
往下落／下落ス。	往下落／下に落つ。	往下落／下落する、値が下がる。
		定出來／極める。
官商吐屬第 13 章		
把樹包給／樹ノマ々ニテ賣取ルヲ言フ。		
		包給別人／人に請負せる。
	一畝／我六畝強	
	把樹／樹のまま。	
	包給人／人に請負はせる。	
	乾果子舗／果物店。	
海淀／地名。	海淀／地名。	海淀／海淀。
相好的／懇意ナ人	相好的／親友。	
		現時／只今。
		乾果子舗／乾果物店。(註) 江浙一帶叫南貨店。
拉這緯／緯は紉也トリクム也拉ハ引ク也即チ在中為紹介之意也又云緯ハ纜也舟上牽緯曰拉ト何レニテモアルベシ。	拉這緯／緯はひきづな拉はひく、中に立つて仲介をする。	拉緯／世話する、取持つ。(註) 紹介雙方、使他們接近。
		規矩／規則、取決め。
		結果子／果物が實る。
過年／明年也	過年／来年。	
外行／素人、門外漢。	外行／素人、行は職業の意、業に通せざるは外行、通ざるは内行といふ。	
包價／受負代價。	包價／請負價額	包價／請負價格。

看果子的／果園ノ番人、看字上平聲ニ 讀ム。	看果子的／果物の番人。	看果子的／果物番人。
黒下白日／夜晝。	黒下／夜。	黒下白日／夜晝共に。
		看園子的／果樹園の番人。
	各人／自身で。	
		那是隨他使得／それは本人の自由で す。
		使得／よろしい。
也使得／ソノニテモ宜シノ意	也使得／それでもよろしい。	
	也好／也行等と同じ。	
	不至於／…するに至らず、するやう な事はない。	不至於／…にはならぬ。
		偷果子／果物を盗む。
下保／保證、引受。	下保／保証をする。	下保／保証をする。
		一面承管／一切引受ける。
一面／一切、一手ニ。	一面／一切	
承管／責ヲ負フ、引受	承管／責任を負ふ。	
搭窩棚／番小屋ヲ建ツ	搭窩棚／搭は小屋をかける、窩棚は小 屋。	搭窩棚／番小屋を造る。(註) 用木頭 搭起來的小屋子。
	席／高粱のからにて作りたるむしろ、 那人之をアンペラといふ。	席／アンペラ。
	包果子的／果物を請負つた者。	
		木板／板。
		繩子／繩。
杆子／丸太、杙。		杆子／丸太棒。
拆／毀也。	拆／こはす。	拆／取壊す。
掉下／落ツル也。	掉下／落つる。	掉下來／落ちる。
		偶然／偶然。
		遭大風／暴風に遭ふ。
擱着／其儘ニオク。	擱着／放置する。	
	遭雹子／大きな雹が降るために蒙む る害に遭ふ。	雹子／雹。
趕緊的去／急イデ行き。		

好去／就去トイウニ同ジ但好ノ字ハ機ヲ逸セズトノ意ヲ含ム。	好去收／行つて取入れるに都合のよいやうにする、好は可以に同じ。	
	照着／…の通りに。	照着／…の通りに。
	就是這麼樣罷／そんならさうしなさいといふ意にも取り得れとも茲にてはさうませうとする方軽くしてよし。	
官商吐屬第14章		
	劉才／召使を呼ぶに姓名共に言ふを常とす。	
	喳／ハイと云ふ返事。	
坐鐘／置時計	那架坐鐘／坐鐘は置時計、架は坐鐘の個數を表はす陪伴伺。	那架坐鐘／あの置時計。
回頭／後刻。		
		不走了／動かなくなつた。
鐘表鋪／時計店。		
收拾／修理。	收拾／修理する。	
	辛苦／人の勞をいたはる言葉。	
	宅裏／宅は大家の屋敷。	宅(裏)／宅、邸。
那宅／何レノ御邸、宅トハ大家ニ用フ		
	胡同／胡同の同は四聲。	
	未領教您納／まだ教を領せず、お名前を伺つたことがない。	
照應點兒罷／御懇意ニ願ヒマストノ意。	照應點兒罷／照應は世話をする、御心安く願ひますの意。	
	管事／事を管理する、執事の如きもの。	
還是／ヤハリ、今モ猶。		
		棉花／棉。
摺下／辭職。	摺下／辭職する。	摺下／辭める。
管事／支配スル人、今假ニ執事ト譯ス。		
散了／退職セリ。	散了／暇を取つた。	散了／辭めた。
	得了…病了／得病は病氣に罹る。	

		弱身子／病身。
吃煙／阿片煙ヲ喫ム。	吃烟／阿片を吸ふ。	吃煙／阿片を吸ふ。
忌煙／禁煙	忌烟／禁煙。	忌煙／阿片を断つ。
	沒断成／やめきれない。	
		断成／断つてしまふ。
簡直的／全クノ意。	簡直的／すつかり。	
癆病／肺病。	癆病／肺病、阿片から病氣にかかれば大概肺病となる。	癆病／肺結核。
		據我想／私が思ふに、私の考へでは。
		帶上／持つて行く。
		萬一／萬一。
	是…啊，是還…呢。／…かそれとも…か。	
	到底／つまり。	
	也不定／かもわからない。	
	這就／すぐに	
	打夜作／夜作は夜業、打はする。	打夜作／夜業する。(註) 做夜工。
	徒弟／技術上の弟子、夥計は一般商買上の手代。	徒弟／弟子、見習。
	上案子／案子は机、机に座つて。	上案子／仕事机に向ふ、職場に就く。
幹／為ス也。		
可沒提／言イ出ダサレナカツタガ。		
打／茲ニテハ為スノ意。		
見天／毎日、日日。	見天／毎日に同じ。	
整工夫／極マツタ時間。	整工夫／極まつた時間。	整工夫／しよつ中、時間を詰めて絶へず。
	手工／手仕事。	手工／手仕事。
		做手工／手仕事をする。
	也就／やつと。	也就是／凡そ、かれこそ。
	吊／北京の一吊は壹錢銅貨十枚、約我十錢に當る。	
	比上／比べると。	
	可差多了／可は軽く併し…といふ程の意。	
	早先／ずつと前は、	
從先／從前、以前。		從先 ^{かつ} ／嘗て、以前。

敢情／豈圖ランヤノ意ナルモ場合ニヨリ輕重アリト知るベシ、オ、何トマアナドトモ訳スベシ。	敢情／本當にまあ。	敢情／何んとも。(例) 敢情他也會說廣東話。
鑠子／往時廣東ニテ製セル時計ノ中ナル左右ノゼンマイヲ連鎖セル長五寸程ノ鎖ノ稱ナリ、當今製造スル時計ニハ之ヲ用ヒズ。	鑠子／時計のゼンマイ。	鑠子／時計のゼンマイ。
		一根／一本。
釘上／釘デ打ち止メル。	釘上／釘付けにする。	釘上／釘で打ち止める。
安上／崙ムル。	安上／くつつける。	安上／取付ける。
貴行／直にその店を指す場合もあるも茲には汝方の同業はとの意なり		貴行 (貴店, お店)
字據／證文。	字據／證文	
剛一／當初、初メテ。	剛一／始めて。	剛一／始め…する時。
耍手藝的／職工、職人	耍手藝／耍は凡て手先ですること、手仕事をする。	耍手藝／仕事をする。
		隨他的便／本人の自由です。
	隨…便／勝手だ。	
	開出工錢／開は計算するの意、賃金をやる。	
按着／…ノ通り、…ト同様ニノ意。	按着／通りに。	
	也使得／でもよろしい。	
		當夥計去／店員になる。
	醒鐘／目醒し時計。	醒鐘／目醒時計。
	同行の人／同職の者。	
	下天津／北京より天津に行くを下天津といふ。	下天津去／天津へ行く。
	累肯／累贅に同じ、肯は當て字。	
		累肯您納／御厄介を掛けました。
新近／近日、近頃。	新近／此頃。	
官商吐屬第 15 章		
解／由也、從也。	解／…から。	
		解家裏／家から。
打圍／獵。	打圍／獵をする。	打圍／狩りに行く。
街坊／鄰人、同居者、同町村ニ住居スル人、何レニモ通ズ。	街坊／隣人、同居者、同町村に居する者に通じて用ふ。	街坊／近隣。
野牲口／野獸。	野牲口／牲口は普通家畜をいふ、野牲	野牲口／野獸。

	口は野獸。	
	野雞／雉。	
		騎着／騎る。
		一匹馬／馬一匹。
野貓／兔。	野貓／うさぎ	野貓／兔。
	野豬／ゐのしし、唯の猪は豚。	野豬／猪。
受累／難儀ヲナセリ、ナドノ意。	受累／辭儀をした。	
	鎮店／宿場、町。	
住下／宿泊、泊り込み。	住下／泊り込んだ。	
寄放／預ケ置。	寄放／預け置く。	寄放／預ける。
損着槍／槍ハ銃ナリ、損着槍トハ銃ヲ肩ニシテノ意損與抗同	損着槍／小銃をかついで、	損槍／銃を荷ふ。
	遛達着／ぶらぶら歩く。	
天有平西的時候／日ノ傾イタトキ分。	天平西的時候／日が西に傾いた時分。	
	跑来／駈けて来る。	
		跑来／飛出して来た、馳けて来た。
	雇不出人來／人を雇ふことが出来ない。	
		雇不出來／雇はれない、雇へぬ。
	擡／かつぐ	抬／かつぐ。(註) 幾個人合力搬動一件東西、高攀起來。
		拉回去／引張つて歸る。
	馱着／馬に荷をつける。	馱着／馬背に乗せる。
累的／疲勞シテ	累的／疲勞して。	
換替着／交ル、交代ニ。	換替着／交るく	換替着／交替して、代り合つて。
	您説…還…麼／これでも尚…と仰つしやるか、さうじはありません。	
	打着野牲口／牲口は家畜、野牲口は野獸、打着は取ること。	
	怎麼…會／どうして…のやうなことがありませうか。	
		累的動不得了／疲勞して身動きが出来なくなつた。
		栓馬／馬を繋ぐ。
拴住／繋ぎ置ク	栓在／繋ぎ置く。	

		不輕／輕くない。
		沒了／無くなつた、紛失した。
		下雪／雪が降る。
山底下／山麓	山底下／山麓	
沒找着／見出し得ナイ	沒找着／見出し得ない。	
下起來／降り來ル。		
頂着雪／雪ヲ冒シテ。	頂着雪／雪を冒して。	頂着雪／雪に降られる。
黒上來／暮レカカツテクル。	黒上來／暮れかかつて来る。	黒上來了／日が暮れた、暗くなつて来た。
跑來了／驅來る。		跑來了／飛出して来た・馳けて来た。
		破廟／荒れ果てた寺。
將就着／我慢シテノ意。	將就着／我慢して。	將就着／辛抱し乍ら。
		覺着／感じる。
扎掙／ツトメテ、病ヲカメテ。	札掙着／つとめて、病を力めて。	扎掙着／我慢し乍ら。
這就／直ニ也	這就／直に。	
	偷了／盗んだ。	
		派差／役人を差立てる。
終久／早晚ト譯ス。	終久／早晚。	終久／結局・終ひには。
		捜し出せる。
路過的人／通りガカリノ。	過路的人／通りがかりの人。	路過的人／通行人。
		驢／驢馬。
		病更利害了／病氣が一層重くなつた。
		有多麼背呀／何んと不運なことでは ありませんか。
多麼／何ト、如此也	多麼／なんと。	
背／裏向キ也、茲ニテハ不運ノ意。	背／ここには不運の義。	
官商吐屬第 16 章		
吞烟／阿片ヲ吞ム。	吞烟／阿片を吞む。	吞烟／阿片を嚥下する。
		馮子園／馮子園。
		死了／死んだ。
		晚上／晩。
		不是好死的／よい死方をしたのではない。
外郷人／地方ノ人。	外郷人／地方の人。	外郷人／他郷の者。
	交給他收着／彼れに渡して受取らせた。	交給他收着／あの人に保管を頼んだ。
	和他要／彼に要求した。	

不認／否定スル。	不認／否定する。	
傳到／拘引、召喚。	傳到／拘引、召喚	
憑據／證文、證據。	憑據／證文、證據	
		他訛我了／あの人は私にを難癖を云ふのです
	訛／だます。	
竟憑口説／只口頭ノ論ダ。	竟憑口説／只口先に憑つて話しても。	
起那麼一氣／ソノコトカラ腹ヲ立テ。	起那麼一氣／そのやうに腹を立ててから。	起那麼一氣／それでスッカリ憤慨した。
不多幾天／幾日ナラズシテ。	不多幾天／幾日ならずして。	
弔死／縊死。	弔死／縊死。	弔死／縊死する。
驗屍／死骸検メ。	驗屍／死骸検め。	驗屍／屍體の検査をする。
死鬼／死人。		死鬼／死人。
套褲／上袴ウハズボン)	套褲／普通の褲子の上に又は袴。	套褲／支那服ズボンの上掛。
	翻出來／振つたら出てきた。	翻出來／発見した。
陰狀／遺言ノ密訴狀。	陰狀／遺言の密訴狀。	陰狀／遺言狀。
	風聲／評判、風説。	
		他一害怕／あの人は恐ろしくなつて…。
一害怕／一ハモツバラ也、害怕ハ恐レテ也。	一害怕／害怕は恐れて、一は…するを直ぐに。	
		春天／春。
恍惚／ボンヤリ記憶スルヲ言フ。	恍惚／ぼんやり記憶する。	恍惚／薄すボンヤリと（註）心裏不清晰的様子。
巧了／丁度。	巧了／丁度。	巧了／確かに。
光景／…アリソウダノ、大概ノ意也	光景／大概	光景／多分。
	管保／屹度	管保／屹度…です。
屈心的事／心ノ歪ンダ行ヒ悪事。	屈心的事／心の歪んだ行ひ、悪事	屈心的事／不正な事・曲つた事。
		外省的人／他生の人。
	外省／他の省。	
		臨死的時候／臨終の時に。
相好一場／懇意ニナツタノ間柄ナレバノ意。	相好一場／一場は始終の意。	相好一場／親しい間柄。
		寄回去／送り届ける。
	寄回／送り返へす。	
		變心／氣が變る。
	味起來／ごまかす。	味起來／ごまかす。（註）隠藏、拾金

		不昧。
留下／残シ置ク。	留下／残して置く。	
得了一场病／不圖病氣ニ罹ツタ。	得了一场病／不圖病氣に罹つた。	得了一场病／一度病氣に罹る。
		悔改／改心する、悔ひ改める。
		各人把各人的命要了／自分と自分で命を縮めました。
		凡／凡そ。
	跑了／逃げて行つた。	
收了／片付ク閉ツル意。	收了／片付ける、閉づる意。	
	有…一個徒弟説的／一人の丁稚が言つたのを。	
	徒弟／丁稚	
纔是的／然ルベキニノ意。	纔是的／然るべきに。	
	要了／取つた。	
這宗／這樣又ハ這様ニ同じ。	這宗／這樣又ハ這様に同じ。	這宗／こうした・こう云ふ様な。
		沒良心的人／良心のない人。
	天理報應／きまつた道理の報應。	天理報應／因果應報、天の報ひ。
		全部／全部。
		忘在九霄雲外／すっかり忘れてしまふ。(註) 九霄是天上極高的地方。
九霄雲外／雲外ト言フニ同じ。	九霄雲外／霄は天上、九霄は非常に遠い意、四字にて非常に遠い意。	
	簡直／全く、すっかり。	
	遭報／應報に遭ふ。	
		遭了報了／罰があつたのです。
官商吐屬第 17 章		
要贖當／質受フシタシ意、要ハ欲ノ意ナリ。	要贖當／質受をしたいの意、要は欲する。	
		贖當／質を受け出す。
另外／ソノ外ニ、別ニ。	另外／其外に、別に。	
跟官／官人ノ從者。	跟官／官人の從者。	跟官的／ボーイ。
使喚／使費也	使喚／使ふ人を使ふ、金を使ふ共に言ふ。	使喚／使ふ、使用する。
		依我勸您／私が貴下にお勧めします。
打主意／考ヲ運ラス、手段ヲ講ス。	打主意／考を運らす、手段を講ずる。	
找事這層／勤メロヲ探スノ事ハ。	找事這層／勤め口を探すその事。	

	等底下／其の内に。	
別給他管／彼ニ構フテヤウテレルナ。	別給他管／彼に構つてやるな。	
	不還您／還はかへす。	
	況且／且つ、その上。	
没還過／返シタ事ガナイ。		
		別説…就是／…は愚か…でさへも。
		要錢／賭博する。
要去／賭博ヲシニ行く。	要去／賭博をしに行く。	
	整天家／一日中。	整天家／一日中、終日。
寶局上／賭博場	寶局上／賭博場。	寶局／賭博。
		母親／母。
	活着／生きて居る。	活着／存命する、生きて居る。
		姐妹／姉妹。
		姐姐／姉。
早就／疾ニ。	早就／疾くに。	
出了門子了／他家ニ嫁ス、於歸也。	出門子／他家に嫁入りする。	出門子／嫁入りする。
成家／娶婦ヲ言フ。	成家／妻を娶る。	成家／世帯を持つ。
多大年紀／幾歲。	年紀／歲。	
	木作／大工の仕事仕事場をいふ此場合の作は一聲。	
	手藝／手仕事。	
	木廠／材木屋。	
仗着／…ニ倚リ也。	仗着／…に倚りて。	仗着／頼る、頼りにする。
	人家／他人。	
過日子／日ヲ過ス、度日也。	過日子／日を過ごす。	過日子／生活する、暮らす。
任什麼／何事ヲモ、不論何也。	任甚麼／何事でも。	任甚麼／何んにも。
花錢／金錢ヲ費フ、花ハ消費ノ意。	花錢／金錢を費ふ、花は消費の意。	花錢／金子を使ふ・無駄使用する。
		又…又／…でもあり、又…でもある。
	不要他／彼をやめる。	
饑／ロイヤシ、貪嗜飲食也。	饑／むさぼると訓す、口いやしい。	饑／口卑しい。
		懶／怠ける。
		舖規／店の規則。
		跟過一回官／一度ボーイをしたことがある。
	外任的官／地方官。	
進京／上京。	進京／上京	

引見／朝見也道台以上ノ大官ノ朝見ヲ陸見トイヒソノ以下ノ官人ノ朝見ヲ引見ト言フナリ。	引見／朝見、道台以上の大官の朝見を陸見をいひ、その以下の官人の朝見を引見といふ。	引見／謁見する。
會館／俱樂部也、元來會館なるものは當初同郷出身ノ官吏ガ相互ニ保護救援セントノ目的ニテ北京ニ建設セシニ始マレリ當時ハ官吏ノ外商買ヲモ加盟ソ各方面ニ於ケル同郷人ノ交誼ヲ温メ娛樂ヲ俱ニシ延テ相互ノ保護救援ヲ中ニハ建築頗ル宏壯ナルモノモアルナリ。	會館／俱樂部、會館は初め同郷の出身の官吏が相互共助の目的にて北京に建設せしに生まれり、其後官吏の外商人をも加盟し各面に於ける同郷人の交誼を温め娛樂を俱にして相互の共助をなす、其利益極めて大なり。	會館／同郷者の俱樂部を云ふ。
古玩／古董品。	古玩／古董品	
		跟班的／ボーイ、従僕。
	撒開／大びらにする、やたらに。	撒開／出鱈目をする。
		賺錢／金子を儲ける。
毛病／好カラヌ手癖。	毛病／好きからぬ癖、缺點	
花完了／使イ果シ。	花完了／使ひ果した	
	作臉／顔を立てる。	作臉／顔を立てる。(註)時臉上發生光榮、作臉的事誰都願意幹。
索性／イチソ、 ^{ムシロ} 寧。	索性／いつそ、寧ろ。	索性／いつそのこと。
		遭了／困つてしまふ。
要遭了／要遭難了ノ略	要遭了／要遭難了の畧。	
斷就／判斷ヲツケテ居ル、豫測シテ居ル。	斷就／この就は成就などといふ就、おはろの意。	斷就／見切りを付ける。
包沙鍋／沙ノ鍋ヲ抱ル乞食ニナル謂。	抱沙鍋／沙の鍋を抱へる、乞食になるの意。	包沙鍋／乞食をする。
就得了嗎／ソレデ宜意デハアリマセンカ。	就得了麼／それで宜いではありませんか。	
		回復／返事をする。
		指著／當てにする。
	指望／希望	
官商吐屬第 18 章		
		這套書／この書物。
琉璃廠／北京ニ於ケル書店、文具店、古董店ナドノ多クアル市街。	琉璃廠／北京外城にありて書店文具店古董店などの多くある町。	琉璃廠／琉璃廠。
		俞／俞姓。
配套／帙ヲ付ケル。	配書套／書物の帙を作る。	配書套／帙を拵へる

單子／書付。	單子／書付け。	
		原單子／前の書付。
	所開／開單子は書付けを書く。	
一套／一帙。	一套／一帙。	
	這就／今直ぐに	
	宅／大家の屋敷。	
打發／遣ハス意。	打發／遣はす。	
	就有／唯…だけ。	
	親自／自身に	
親身／自身。	親身／自身で。	
書架子／書棚。	書櫃子／書棚	書櫃子／書棚。
	李爺／爺は此種階級の間の尊稱。	
		幸苦李爺／李サンー今日は。
	起的身／この的は過去を表はす、類例 「你多啫到的京（君は何時北京に着いたか）」	
官差去／公用ニテ行ク。	官差去／公用にて行く。	
		官差／役人を勤める。
		留下／残す、預かる。
		價值／値段。
		配得了／出来上つた。
連來帶去／往キテカラ復ルマデ、往復共。	連來帶去／往つてから歸へるまで、往復共。	
	得十天／此得はかかるの意。	
算計着／推察スルニ。	算計着／推察するに。	算計着／豫想する。
		勞動／足を運ばせる。
那倒不用／其卻不要也。		
順便／序ニ、幸便。	順便／序に、幸便に。	順便／序手。
月底／月末	月底／月末	
	這麼着罷／かうしませうよ	
	那倒／それは却つて。	
官商吐屬第 19 章		
説合／仲裁示談。	説合／仲裁、示談。	説合／仲裁する、調停する。
		告訴得我／私に仰有つて預けます。
		告訴不得／話して頂けますか、話せません。
	舍親／自分の親戚を卑下して言ふ。	舍親／私の親戚。

		銀錢賬目的事情／金錢の貸借問題。
銀錢／金錢。	銀銀／金錢	
帳目／帳簿。	帳目／帳簿上の金高、かけ。	
	怎麼會／どうしてそんなことになつたのか、怎麼を強めている。	
		沈／沈姓。
東關外頭／東門外頭也	東關外頭／東門外。	
洋布／金巾。	洋布／金巾	
批單／買賣契約證、注文證書	批單／買賣契約證、注文證書。	
交貨／貨物ヲ引渡ス。	交貨／貨物を引渡す。	
	買妥了／買約定が整つた。	
	經紀／仲買人。	
		還沒兌了／未だ支拂ひません。
兌／金ヲ仕拂フコト。	兌／金を仕拂ふこと。	
		還沒起哪／未だ（品物を）受取りません。
起／荷渡シ。	起貨／貨物を引き取る。	
	貪多賺錢／多くの賺錢を貪り。	貪多賺錢／金子に慾を出す、金子に目を呉れる
		轉賣／轉賣する。、又賣りする。
		氣的了不得／非常に憤慨する。
	不認／事實を否定する。	
		指出來了／指摘した、圖星を指した。
指出來／名指シ言イ出ス	指出來／名指し言ひ出す	
下月／來月。	下月／來月	
定銀／手付金。	定銀／手付金	定銀／手付金。
	批單一燒／注文書を焼いてしまへば。	
		包賠賺利／利鞘を辨償する。
	包賠／すっかり引請けて賠償する。	
呈詞／訴狀。	呈詞／訴狀	呈詞／訴狀。
粘連／貼付、添付。	粘連／帖付、添付。	粘連／添付する。
前兒個／一昨日。	前兒個／一昨日。	
過堂／詢問所ニ出ツツコト即チ詢問ヲ開クヲ言フ。	過堂／訊問所に出づること即ち訊問を開く。	過堂／開庭する。
	兩造／原告、被告の兩方をいふ。	兩造／原告と被告。
	吩咐／言ひ付ける。	吩咐／云ひ付ける、申渡す。
	補一張呈詞／更に訴狀を出すこと。	

	幫着／助けて。	
和息呈詞／願下届、和解セシ皆ノ届書。	和息呈詞／願下届、和解せし皆の届書。	和息呈詞／和解届。
	就結了／了結した。	
官商吐屬第20章		
當舖／質店、注意當字去聲ニ読み。	當舖／質店、此場合當字去聲に讀む。	當舖／質屋。
		用飯／食事する。
封貨／質ノ流レ品ヲ入札シテ買フヲ言フ。	封貨／質の流れ品を入札して買ふをいふ。	封貨／入札。
		錫器／錫器。
廚子／料理人、賄人。	廚子／料理人、賄人。	廚子／コック。
預備／用意、支度。	預備／用意、支度。	
得便宜／利益ヲ得ルヲ言フ。	得便宜／利益を得る。	
上擋／他人ノ哄騙ニ罹ルヲ言フ。	上擋／他人の哄騙に罹る。	上擋／眼違ひする、つかまされる。
		碰運氣／運次第のもの。
	走紅運／走は當るの意、紅運とは中國にては吉事には總て紅を用ふ故に吉運を紅運といふ。	
		走紅運的人／好運な人。
走／ハ当ルノ意走		
紅運／吉運ナリ走紅運トハ清國ニテハ吉事ニハ總テ紅ヲ用フ故ニ吉運ヲトイフナリ。		
		遇見／會ふ、ぶつつかる。
就許／或者之意。	就許／或はに同じ。	
	俏貨／掘り出しもの。	
	賣落給他／見落しをして賣る。	
		賣漏給他了／眼こぼしをして賣つてしまふ。
	好錢／すてきな金高。	
打眼／看錯也。	打眼／見そこなふ。	打眼／品質の鑑定違ひをする。(註) 眼睛看錯了、買東西打了眼啦。
遠親／縁ノ遠キ親戚薄縁。	遠親／遠い親戚。	遠親／遠縁の親戚。
		一細瞧／よく注意して見る。
細瞧／仔細ニ見ル。	細瞧／仔細に見る。	
		拾掇／修繕する、手入れする。
		十倍利／十倍の利益。

		得了便宜了／儲け物をした。
官商吐屬第 21 章		
		棧 (裏) 宿屋、問屋。
迎着頭／行クコト、出遇フヤウニ。	迎着頭／出過ふやうに。	迎着頭／出会頭に・見當をつけて。
	火輪船／汽船	
		可巧／丁度幸ひ。
小車子／一輪車。	小車子／一輪車	小車子／一輪車。
推車子的／車夫、一輪車ノ車夫	推車子的／一輪車の車夫	
	沒了主意了／よい考えなくなつて	沒了主意了／途方に暮れる。
		纔起來／起きた許りの處。
		洗臉／洗面する。
		福建／福建省。
	起下來／おろす。	起下來／(荷物を) 卸す。
		短了兩隻紅皮箱／赤の支那鞆が二つ不足する。
	短了／不足した。	
沒注意／手段盡キ。		
錯／失策、錯誤。	錯／失策、錯談	
		徐子芹／徐子芹。
歸着／片付、取揃。	歸着／片付ける	歸着／取纏める、片付ける。
	零碎東西／こまくしたのもの。	
	搬下來／運び卸ろす。	搬下來／運び卸す。
		找回來／捜して来る。
		要定了箱子了／支那鞆を督促する。
		推小車子／手推車の車夫。
		運錯了／運び違へた。
		不答應了／承知しない。
要定了／是非ニト要求ス。	要定了／是非にト要求す。	
着忙／狼狽シテ、氣ヲ急イデ。	着忙／狼狽して氣をせく。	
		著了忙了／慌ててしまふ、マゴマゴする。
		挨着各棧一間／宿屋を軒並に尋ね廻る。(註) 挨着、按次序做、挨着寫下去。
挨着各棧／各旅館ニ就イテ	挨着各棧／各旅館に就いて。	

		回棧裏去／宿に歸る。
屋裏／座敷、部屋。	屋裏／座敷、部屋。	
	査點／數をかぞへて調べる。	
		推了去／一輪車に積んで行く。
		換回來了／引換へて歸つた。
		永利棧／永利棧。
		査點／調べる、確める。
		忙着找我／早くから私を訪ねに来る。
對了／符合ス。	對了／一致する。	
緊用項／急ナル入用金	緊用項／緊念なる入用金。	緊用項／至急に要る金子。
		摘給我們用／私に貸して頂き度い。 (註) 挪借、請您摘給我幾塊錢。
摘給／一時取換貨與スルヲ言フ。	摘給／一時融通する。	
跟我／私ニ隨イデ	跟我／私に隨つて	
官商吐屬第 22 章		
		王子泉／王子泉。
令親／御親戚、他人ノ親戚ヲ敬シテ呼 ブ稱。	令親／御親戚、他人の親戚を尊敬して いふ。	
被參／參革セラル、彈劾セラル。	被參／彈劾せられる。	被參了／彈劾された。
	兩案／官廳の事件の數を案にて表は す。	
壞的官／罷免。	壞的官／罷免、此の的は過去を表は す。	壞的官／役人をしくじる。
		一案／問題、事件。
		被刦／強盜に襲はれる。
	刦槍／刦はおびやかす槍は強奪。	
	贓去／贓は原來は盜品のこと、此處に てはぬすむ。	
		贓／贓品。
		賊／賊。
		拿賊／賊を逮捕する。
拿着／捕獲、逮捕。	拿着／捕獲、逮捕。	拿著／逮捕した
頂戴／頂戴トハ官帽ノ頂ニ飾付クル 徑七八寸ノ珠ニシテ品味ニ依リ其類 ヲ分ツ。	頂戴／頂戴とは清朝時代の官帽の頂 上に飾付くる徑七、八寸の珠にして品 位に依り其色を分つ。	頂戴／清朝時代に官吏が帽子の上に 附くる珠玉。
摘／取上グ。	摘／もぎ取る。	

出了參了／意見ヲ具シ下官ノ官ヲ免セラレンコトヲ上申スルヲ言フ。	出了參了／彈劾書を出した。	出了參了／彈劾書を提出した。
		摘了／褫奪した。
留在任上／任ニ留メ。	留在任上／任に留めて置く。	
		一夥子賊／一團の賊。
一夥子／一群、一團。	一夥子／一群、一團。	
		展限／期間を延長する。
		直展到／引續き…まで延期した。
		冬天／冬。
始終／到頭。	始終／到頭、どうして。	始終／結局、終始。
偏巧／生憎。	偏巧／生憎	偏巧／生憎。
		殺死／殺害する。
	兇手／下手人	兇手／下手人、犯人。
		逃跑了／逃走した。
		添上／殖へる、加へる。
		棄兇逃走的案／犯人を放任して逃走せしめた罪。
	參革／彈劾して免職する。	參革／彈劾する。
		離任／離任。
宦囊／在官中に作る財産。	宦囊／在官中に作る財囊。	宦囊／官吏の貯蓄。
兩袖清風／資産ノナキヲ形容シテイヘル語。	兩袖清風／資産のなきを形容して云へる語。	兩袖清風／一分の餘財なきこと。(註) 做官没落下錢。
羞澀／潤澤ナラザルヲイフ。	羞澀／元來は澀がる意、後轉じて俗に金錢の潤澤あらざるに用ふ。(杜甫詩) 囊空恐 _レ 羞澀一、留得一錢看。	羞澀／(家計の)不如意。
盤費／旅費。	盤費／旅費、盤はめぐる貌迴旋の費用。	盤費／旅費。
		革職／免職。
盤查／検査。	盤查／検査、この盤は調べるの意。	盤查／検査する。
		倉庫／倉庫。
		查出／發見する、露見する。
虧短／缺損、私消。	虧短／缺損、私消。	虧短／使込む・費消する。
錢糧／現金納ノ地租ヲイフ因ニ清國ニテハ或地方ニ由リ地租米穀ニテ納付スル所アルナリ。	錢糧／現金納の地租をいふ、中國にては或地方に由り地租を米穀にて納付する所あるなり。	錢糧／税金。

挪用／流用、私事ニ消費ス。	挪用／流用、私事に消費する、挪はうつすの意。	挪用／流用する。(註) 把別方面得錢移到这方面來用。
	稟報／上申する。	稟報／報告する。
		寓所／住居。
		封了／差押へた。
撫署／巡撫衙門。	撫署／巡撫衙門	
		調去／召喚する。
	調／任命する。	
請旨／勅裁ヲ仰キ。	請旨／勅裁を仰ぎ。	請旨／勅裁を仰ぐ。
抄／沒收、決處、抄ハカキウツス也家産ヲ書立テ官ニ沒收スルヲ言フ。	抄／沒收、抄ハ略取するの意。	抄了／沒收する。
		急了／心配する、氣を揉む。
		著急的了不得／非常に心配する。
	湊／あつめる、金を工夫する。	
	舗面房／店家。	
	還算好／まあよい方だ。	
交還上／返納。	交還上／返納する。	交還上／返還する。
啓封／封印ヲ切ル、封ヲ開ク。	啓封／封を開く。	啓封／差押を解除する。
官商吐屬第 23 章		
		錢輔臣／錢輔臣
止當候贖／質ヲ取ルコトヲ止メ受出ヲ待ツ。	止當候贖／質を取ることを止め受出を待つ。	止當候贖／新質を停止して、戻取のみを扱ふ。(註) 當舖停止營業、只贖不當。
		快收了／直きに廢業する。
		不知其外不知其内／表面のことだけ知つて内情を知らぬ。
		壯了／(氣が) 大きくなる、圖に乗る。
止／止也。	止／ただ、只と同じ。	
	使喚／人を使ふ、金を使ふ共に用ふ。	
	放下／任命せらるゝ。	
撤出／撤ハ除去也、撤出トハ引出ス意。	撤出／撤ハ除去也撤出とは引出す意。	
		撤出去／(資本を) 回収する。
支持得住／維持スルコトガデキル。	支持得住／維持することが出来る。	支持得住／維持が出来る。
	無故的／何の思慮もなく。	無故的／故なく。

起初／最初。	起初／最初	起初／最初
		膽子／度胸。
		放着穩當買賣／健實な商賣を放任する。
洋藥／阿片。	洋藥／阿片	
偏巧／生憎。	偏巧／生憎	
	封河／北方支那の河や近海は冬季すべて結氷する。	封河／河が結氷する。(註) 北方到了冬季、口岸冰凍不能行船、叫做封河。
	廣棧／廣東の間屋	廣棧／廣東人の間屋
烟土／阿片 (未製品)。	煙土／阿片 (未製品)	煙土／阿片。
買下／買入、購入。	買下／買入、購入。	買下／買ふ、買溜めする。
	好錢／すてきに多額の金。	
		留着冬天賣／冬まで持越して賣る。
		必賺好錢／屹度良い儲けになる。
買妥了／買受ノ約束調フ、妥ハ妥當ノ意ニシテ都合好ク事ノ運ビシ意ヲ含ム。	買妥了／買受の約束、妥は妥當の意にして都合好く事の運びしこと。	
	付銀子／金を渡す。	付銀子／金子を支拂ふ。
装了／積込ミ。	装了／積込んで。	装了／積んだ。
		直往下這麼一掉／(相場が) 急落する。
		拉躺下了／共倒れになる。
賠了／損ヲナス。	賠了／損をする。	
躺下／傾也、倒也。	躺下／傾く。	
放着／放擲シ置ク。	放着／放擲し置く。	
妄想發財／漫ニ金儲ヲセント思フ。	妄想發財／漫に金儲をせんと思ふ。	妄想發財／金儲けをあせる。
		獨／獨り。
		長久富貴／永遠に榮へる。
		眼前歡／眼前の歡び、その場限りの喜び。(註) 眼前的快活。
		自然的敗了／自然に衰微する。
		損人利己／人を泣かせて自分だけよいことをする。
壞了事／失敗。	壞了事／失敗	
	起這上頭／始めては。	
不多幾年／幾年ナラズシテ	不多幾年／幾年ならずして。	
	本郷／郷裏。	

		長享富貴／何時までも榮華をする。
土局子／阿片間屋。	土局子／阿片間屋。	土局子／阿片製造所。
	四遠馳名／四方に遠く名を馳せ。	四遠馳名／遠近の評判を取る。
		郝／郝姓
		所發了財了／すつかり儲け出した。
洋行／西洋商館。	洋行／西洋商館	
蓋／建造也。	蓋房／家を建てる。	
騾／馬ト驢馬ト交尾シテ生スルヲ騾トイフ。	騾／馬と騾馬の雜種をいふ。	
東家／主人。	東家／主人。	東家／主人。
	不上舖子／店に行かない。	
納福／樂居。	納福／樂居。	納福／暮らす。
大賑／收支決算、大勘定。	大賑／此支決算、大勘定。	
		上下／上は一家の主人より下は召使までを總稱する意。
		百數多號人／百人以上の者。
		騾馬成羈／家畜が澤山居る形容。
		財主／金持。
		一敗塗地／落ちぶれて惨々な目に遭ふ。(註) 土牆一倒、滿地的泥、不能再行振起、他的事業、一敗塗地了。
		竟在家裏納福／家許りに引込んで遊び暮らす。
		見天黑下／毎晩。
		一概不知道／全然知らぬ。
一概／一切。	一概／一切。	
毛病／弊害又ハ疵。	毛病／缺點、弊害。	
算賬／帳簿検査。	算帳／帳簿検査。	
盤貨／商品検査。	盤貨／貨物を查べる、盤は查べると訓ず。	盤貨／棚卸する・商品を調べる。
虧空／缺損。	虧空／虧空	
	牲口／家畜	
	歸上／片付ける。	歸上／支拂ふ。
	散了／ひまを取った。	
起那麼一口氣／アノ一腹立カラ。	那麼一口氣／そのやうな腹立から、一口氣は一遍腹立つこと。	起那麼一口氣／それが原因して立腹する。
	得了一场病／不圖病氣に罹った。	

本家の人／親族本家人。	本家の人／親族本家人。	
	吃一頓挨一頓／一頓は食事の同数をいふ、例へば、一天吃三頓飯の如し。挨は挨餓ひもちい思ひをするの意。	吃一頓挨一頓／一度の食事を喰つたり喰はなかつたりする。
苦法／苦境。	苦法／苦境。	苦法／苦しむ鹽梅・苦しみ方。
收場／末路。	收場／末路。	收場／末路、最後、斷末魔。(註) 事情得結果)
官商吐屬第 24 章		
	多咱／咱は當て字、原來はみづからと訓ずる字。	
原本／元、初。	原本／初め。	原本／最初。
	蘇州／江蘇省の省城。	蘇州／蘇州。
	不順／順當ならざる意。	
		舊居停／元の主人。(註) 居停、房東、東家。
局停／局停トハ主人ノ謂ナリ、茲ニテハ嘗テ幕友タリシ人ガソノ舊聘用主ヲ指シテ局停ト呼ヒ居ルモノ、如シ。	局停／主人。	
調任／轉任。	調任／轉任。	調任／轉任する。
		打算要邀我一同去／私を同伴して行かうとした。
邀／迎也	邀／迎へる。	
		嫌路太遠／餘り遠方で氣乗りしない。
同年的／己ト同年ニ進士、若クハ舉人トナリシ人ヲイフ。	同年的／自分と同年に進士若くは舉人となりし人をいふ。	同年的／同年に受験して及第した友人。
書啓師爺／幕友ノオ内文書ヲ掌ルモノヲイフ師爺ハ尊稱ナリ。		書啓師爺／文案顧問 (註) 従前衙門裏由家聘請的幕友、稱師爺。
		辦書啓／文案秘書を勤める。
	書啓／幕友の内文書を掌るものをいふ。	
	師爺／書啓の尊稱	師爺／私設顧問。
		浙江／浙江省。
欺生／新參者ト悔蔑ス。	欺生／新參者と悔蔑する、生は生人のこと。	欺生／新參者をいぢめる。
		諸事／諸事、何事に依らず。
	掣肘／掣肘を受ける。	掣肘／思ふ様にならぬ、不自由。(註) 做事受人牽制。
		打起鄉談來／お國訛りで話を始める。
	鄉談／土語、田舎言葉。	

		粧不知道／知らぬ振りをする。
		走走逛逛／外へ散歩に出掛ける。
拊着我／自分ヲケモノニスル拊ハ 分開也。	拊着我／自分をのけものにする、拊は 分ける。	
		拊着／のけものにする。(註) 用兩隻 手分開東西、把這個餅拊開、大家一半 兒。
		過於咬羣／仲間いぢめが過ぎる。
咬群／不和ノ意。	咬羣／不和の意。	
再往下／コノ上引續キ。	再往下／この上引續いて。	
		再往下混／この上一緒に暮らす。
混／一ツ處ニ居ル。	混／一つ處に居る	
生分／不和ヲ生ス。	生分／不和を生ずる。	生分／仲違ひをする(註) 疎遠。
		辭館／顧問の仕事を辭める。
還罷了的／マア宜シキ方、罷了ハ可以 ニ同ジ。	還罷了的／まあ宜しき方、罷了は可以 に同じ。	還罷了的／まあよい方です。(註) 罷 了=可以。
不便提／言出シ兼ネテ。	不便提／言出し兼ねて。	便提／云ひ出しにくい。
		我和同人不合／私は同僚と折合ひが 悪い。
同人／同僚、同勤者。	同人／同僚、同勤者。	
要考供事／書記ノ登用試験ニ応ゼン トシ。	要考供事／書記の登用試験に應ぜん とし。	要考供事／供事の試験を受けやうと する。
着比／譬如也、例へば。	着比／例へば。	著比／例へば。
考上／登第。	考上／及第する。	考上／及第する。
		過去了／済んだ。
合宜的事／適當ナル事、相応ナル事。	合宜的事／適當なること、相應なるこ と。	合宜的事／適當な仕事。
		願意就／就職を希望する。
	就／つく…なる。	
	放下／任命せられる。	
		遺缺知府／知府の補缺。
	遺缺／現任者なき役目を云ふ、私の親 友が豫て空位になつて居つた山西太 原府に知府となつて来た。	
		沒人可薦／誰も推薦する人がない。
		怎麼稱呼／何と云ふお名前ですか。
		常春圃／常春圃
	在旗／旗人の籍に在る。	在旗／旗人です。

		旗人／旗人。
		忠厚／溫厚。
束脩／報酬、手當、給料禮物ノ意ナリ。	束修／報酬、手當、給料、禮物ノ意。	束脩／（顧問或は師匠ノ）報酬。
		作項／金額を決める、條件を定める。
		多多少少／多くても少くても、多寡は…。
		告病回來／病氣の爲め歸つて来る、病氣を理由に辭職して歸家するノ意。 （註）官吏因病辭職。
好説／話し易シトノ意。	好説／話し易しトノ意。	
	對勁／氣が合ふ、勁はつよし、對勁は力の相等したもの。	
	管保／保證する。	
		時常的犯／しょつ中（病氣が）起る。
時常的／始終。	時常的／ときどき。	
		颯風／風が吹く。
		清閒／閑暇。
		虛度歲月／無爲に暮らす。
	虛度／空しく歲月をわたる。	
官商吐屬第 25 章		
月裏頭／本月内コノ月内。	月裏頭／本月内。	
		可笑的事／面白い事。
有三更多天／三更過ぐる刻限ニ。	有三更多天／三更過ぐる刻限に、十二時過ぎ（應對須知篇二〇の註を見よ）	三更多天／夜の十二時、真夜中。
咕咚的／物音ノ形容。	估咚的／物音ノ形容。	
		估咚的一聲／ゴトンと音がする。
		跳進來／飛び込んで来る。
嚇醒了／驚キ目ヲ醒マシタ。	嚇醒了／驚き目を醒ました。	嚇醒了／びつくりして眼を醒す。
		打着燈籠／提燈を點けて。
燈籠／提灯。	燈籠／提灯	
	點上／棍棒	
棍子／棍棒。	棍子／棍棒	棍子／棒、ステツキ。
體面／立派、上品。	體面／立派、上品。	
別拉／捉ヘナシナ。	別拉／捉るな。	
		腳蹠了／足を挫く。
蹠／挫ク。	蹠／挫く。	

		很疼／非常に痛む。
		避難的／避難者。
		長得很體面／容貌の大層立派な。
	長得／生い立ち。	
年輕的人／青年、年若ナル人。	年輕的人／青年、年若い者。	
念書的人／讀書人。		
相得／相識。	相得／相識。	相得／顔見知り。
攙着／手ヲ執リ扶ケ起シ。	攙着／手を執り扶け起し。	攙着／手ですけてやる。
	溜了／ぶらぶら歩く	
不得勁／面目ナシ、愧ヂラヒ。	不得勁／面目なし、愧ぢらひ。	
	寶局／賭徒場。	
	耍錢／賭博をうつ	
抓局／博徒狩。	抓局／賭徒狩。	抓局／賭場狩りをする。
沒地方藏／隠レ場所ナシ	沒地方藏／沒地方藏	沒地方藏／隠れ場所がない。
爬到去／爪ニテ搔キ上ル。	爬到去／爪にて搔き上る。	
牆／塼。	牆／塼。	
天亮／夜明。	天亮／夜明。	
		趕倒天亮回去的／夜が明けてから歸りました。
	道謝／禮を云ふ。	道謝／お禮を云ふ。
起下誓／誓ヲ起テ。	起下誓／誓を起て。	起下誓了／誓を立てた。
能殼／能ク也。	能殼／能く…し得る。	
	志氣／意氣、氣概。	志氣／氣概。
		吃大烟／阿片を吸ふ。
	忌烟／禁烟。	
		惱了我了／私に感情を害した、私を恨んだ。(註) 生氣。
怨／惱也。	惱／怨む。	
別致／趣ヲ異ニス。	別致／趣を異にす。	別致／風變り、變屈。
		糊塗／沒曉漢。
挨着／近付、親ミ。	挨着／近付く、親しむ。	挨着／交る、接近する。
慢慢兒的／漸漸ニ	慢慢兒／漸くに	
吃上癮了／ノミイツタ、阿片ノ中毒ニテ病ヲ得ルヲ癮トイフ	吃癮了／みあげた、阿片の中毒にて病を得るを癮といふ。	吃上癮了／(阿片に) 中毒する、癮者になった。(註) 癮、煙酒的習慣性。
		所帶了烟氣了／すっかり(顔色が)阿片の中毒状態になった。

		念書の人／讀書人。
		蔣／蔣姓。
		相得／顔見知り。
方子／薬方書。	方子／處方書。	
		搦着／手ですけてやる。
		趨了半天／暫く足慣しをする。
		臉上很不得勁／面目なげな顔をする。
		沒地方藏／匿れる場所がない。
		爬倒牆上去／塀によじ上る。
		留他住了一夜／本人を一晩泊らせる。
		精神也不佳了／氣力も衰へた。
跟人／從僕、召使。	跟人／從僕、召使。	跟人／召使。
		多事無故的／餘計なお節介に。
多事／餘計な世話ヲスル。	多事／餘計な世話をする。	
		毒藥／毒藥。
		沒仇／怨恨はない。
	無故的／何の理由もなくやたらに。	
聽不道／聽兼ヌル意。	聽不過／聽兼ねる。	
不説理／不道理	不説理／不道理。	
起那麼／それから。	起那麼／それから。	不説理／無茶な話をする、非常識なことを云ふ。
年下／新年。	年下／新年	年下／年末、除夜を云ふ。
	拜年／年賀をする。	
		絶了交了／絶交した。
		人性／性格、性質
官商吐屬第 26 章		
可氣的事／腹立タシキコト。	可氣的事／腹立たしきこと。	可氣的事／癪に触ること。
夥同一起／組合ツテ。	夥同一氣／組合つて。	夥同一起／グルになる・供謀する。
哄騙去／騙取。	哄騙去／騙取。	哄騙／騙す。
弄局／賭博場。	弄局／賭博場を開いて居る。	弄局／賭場を開く。
		引薦／紹介する。
	外人／知らない人。	
	輸了／敗けた。	
	贏／勝つ	贏了／勝つた。
	局也收了／賭博場も閉ぢた。	
賭賬／賭博勘定。	賭帳／賭博勘定	賭賬／賭博の借金。
藏起來／隠レテシマツテ	藏起來／隠れてしまつて。	藏起來／匿れる。

		可惡／憎らしい。
	幫看別人／外の者を助けて。	
		幫着別人賺我／外の者と一緒になつて私を胡魔化する。
		設局誑騙／賭場を開いてペテンにかける。
賺／哄騙ノ意。	賺／哄騙の意。	
		上了他們檔的人／彼等に騙された者。
人行／人タルモノ、行為	人行／人たるもの、行為。	
本郷／郷里、故郷	本郷／郷裏、故郷。	
	上檔／計畧にかかる。	
		兇橫的了不得／非常に悪辣な。
	凶橫的／兇惡、橫暴。	
	還不起／返へすことが出来ない。	
	房產／房產。	
	折給／折は物品を現金に代へる。	
		折給他們／彼等に物を處分して債務を拂ふ
		聰明／利巧。
		賭局／賭場。
背地裏／陰デ、座ヲ外シ竊ニノ意。	背地裏／蔭で座を外し竊にの意。	背地裏／物陰で。
乍來／乍ハ初メテノ意	乍來／乍は始めての意。	
		這乍來／今日始めて来た。
		肯來了／喜んで来るやうになる。
抽冷子／不意ニ。	抽冷子／不意に。	抽冷子／不意に、出突けに。
座下／着座。	坐下／着座	
		起定更天要起／宵の口から手遊びを始める。
定更天／初更ヲイフ。	定更天／初更をいふ、午後八時頃。	
		直要到天快亮了／夜明け頃迄賭博をし續ける。
火天大亮／全ク夜ノ明ケキリシ頃、天大明也。	大天大亮／全く夜の明けきりし頃。	大天大亮了／夜がスツカリ明けた。
回進去／取次ニ奥ニ行く。	回進去／取次に奥に行く。	回進去了／奥へ取次ぎに行った。
幹甚麼的／何ヲ為スモノ、何者。	幹甚麼的／何をやる者か。	
		我們那塊兒／私供の家。
別胡說／無稽ナル語ヲ吐クナ。	別胡說／馬鹿なことを言ふな。	

		胡說／馬鹿なことを云ふ。
發昏／眩暈也、精神錯亂也。	發昏／目がくらむ、精神錯亂。	發昏了／血迷ふ。
		瞎了眼了／眼がつぶれた、眼が見へなくなった。
瞎眼／盲目、茲ニ手ハ先見ノ明ナキニ喩ヘテイヘルナリ。	瞎眼／盲目、茲にては先見の明なきに喩へていへるなり。	
		是你們的便宜／それがお前達の利益だ。
		送衙門／役所へ突き出す。
		辦你們訛詐／お前達を恐喝として處分して貰ふ。
		嚇的也不敢言語了／ビツクリして何とも返答しなかつた。
便宜／利益、得策。	便宜／利益、得策	
不敢言語／語ヲ發シ得ズ。	不敢言語／語を發し得ず。	
跑回去／逃ゲ帰ル。	跑回去／逃げ歸る。	
官商吐屬第 27 章		
刷白的／蒼白キ、血色ノ悪キ様。	刷白的／蒼白き、血色の悪き様。	刷白／（顔色の）青白き。
	不舒坦／舒は心地よき、坦は平らか、不快なるをいふ。	
		管了件閑事／餘計な事にかかり合つた。
		肝氣的病／肝癩病。
關閑事／無益ナル事ニ關係ス。	管閑事／餘計な世話をする。	
勾起來／惹起ス。	勾起來／引き起した。	勾起來了／引き起した。
	受氣／肝癩をおこす。	
		溫子山／溫子山。
京東／北京城東ノ數縣ハ總テ京東ト稱スルナリ。	京東／北京城東の數縣は總て…と稱す。	
		說合價值／値段の折合を附ける。
兩下裏／雙方	兩下裏／雙方	兩下裏／雙方
過錢／錢ヲ渡ス。	過錢／錢を渡す。	過錢／金子を拂ふ。
大前兒個／一昨々日。		
	大前天／一昨々日	
一早／早朝。	一早／早朝。	一早／早朝。
		鬧得我好對不過那個姓孫的／私は孫サンに對して非常に氣拙い思ひをさせられた。

	湊了／集めた。	
對不過／面目ナシ、氣ノ毒。	好對不過／好はひどく、對不過は面目なし、氣の毒。	
情有可原／情ニ於テ原諒スベキコロアルモ。	情有可原／情に於て原諒すべき所あるも。	情有可原／事情に恕すべき點がある。 (註) 在情理方面, 可以原諒。
	現成／現に出来て居る。	現成／何でも無い、容易い、譯もないこと。
		安心估家的便宜／平氣で人の利益を壟斷する。(註) 得到別人的利益、他估便宜我吃虧。
安心／平氣。	安心／平氣で。	
估／占メ、占領	估／占め、占領。	
人家的便宜／他人ノ利益	人家的便宜／他人の利益。	
		叫我對不住人／人に顔向けの出来ぬことをさせる。
對不住／對不過ニ同ジ。	對不住／對不過に同じ	
		我可恨他／私は彼が憎らしくてならぬ。
越想越可氣／思へば思ふ程腹ガ立タシ。)	越想越可氣／思へば思ふ程腹が立つ。	越想越可氣／考へれば考へる程腹が立つ。
	夥辦／組合つてする。	
		夥辦買賣／共同して商賣をする。
分賺賬／利益配當。	分賺帳／利益配當	分賺賬／利益を分配する。
		他總短分給我／彼は必ず少く心配する。
短／不足。	短／不足	
	三千兩吊／三千は錢三千文即ち一吊文に同じ。	
嘴裏可老說／ロニテハ始終言フテ居ルガ。	嘴裡可老說／口にては始終言つて居るが。	他嘴裏可老說／彼は口先きでは、何時も…と云ふ。
	找補／找は金を返へす補はおぎなふ。	找補／不足分を補ふ、入合せを付ける。
	永遠／いつまでも。	
		永遠不提了／永遠に云ひ出さぬ、それから一切はぬ。
不提／再ビ言ヒ出サヌ。	不提／再び言ひ出さぬ。	
	化了／消える。	
吃虧／損ヲスル。	吃虧／損をする。	

走親戚的理／親切ニ接スル道。	走親戚的道理／親戚に接する道。	
	一概／一切	
上炕／炕ハ火床也、上炕トハ就蓐ノ意。	上炕／炕は火床、上炕とは就蓐の意。	
		上炕認得女人下炕認得錢／家に在つては女を知り、外に在つては金子を知る、即ち女と金子以外に何物もない意。
	這麼道人／かういふ風の者。	這麼道人／こう云ふ風な人間。
白事／喪葬祭祀謂之白事也。	白事／裏葬祭祀をいふ。	辦白事／葬式をする。(註) 喪事。
	熬夜／夜とぎする。	
熬熬夜／徹夜、通夜。	熬々夜／徹夜、過夜。	熬熬夜／お通夜する。
	盡心竭力／心をつくし、力をつくして。	盡心竭力／一生懸命に盡力する、親身になつて働く。
道乏／勞ヲ犒フ、勞ヲ謝ス。	道乏／勞を謝す。	道乏／お手傳のお禮を云ふ。
沒理人家／義理知らズノ人物。	沒理人家／理は人の世話をやくこと、人に構はない。	
	這宗／このやうな。	
	近起來／近頃になつて。	
		看透ス／見極めを付ける。
		刻薄成家、理世久享／人を泣かせて家産を作つた者に、天理として長く榮へる道理はない。
更好／更ニ甚シ。	更好／更に甚し。	
		低頭／頭を下げる。
		重利盤剝／高利を取つて人を泣かす。
放重利息錢／高歩ノ貸金ヲ為ス、放ハ為スノ意。	放重利息錢／高歩の金を貸す、放は貸す。	放重利息錢／高利の金子を貸す。
重利盤剝取の名聲／高利剝取ノ評判。	重利剝盤的名聲／高利剝取の評判。	
		擱得日子多了／日が段々と経つてしまふ。
		就算化了／それで沙汰なし(お流れ)になつてしまふ。
		小取／意地きたない、小慾。

		論外頭交朋友走親戚的道理／世間での友人や親戚付合ひの道理を云へば。
官商吐屬第 28 章		
受熱／中暑。	受熱／暑氣中り。	受了熱了／暑さあたりをした。
驚恐／驚愕恐怖。	驚恐／驚愕恐怖	驚恐／恐怖する。
		遇見賊了／匪賊に出會ふ。
	搭幫／同伴して。	
		灣在一个地方了／或る處に停泊した。
灣在／碇泊。	灣在／碇泊。	
		夜靜的時候／夜更け頃。
		岸上／岸邊。
火把／松明。	火把／松明	火把／松明。
刀槍／刀、銃。	刀槍／刀銃	刀槍／刀や鐵砲。
		馬頭上／埠頭、波止場。
		起早路走／陸行する。
		艙板／船室の間しきり。
	砍開／砍は刀で切る。	砍開／(刀で) 切り破る
		拿著刀指著我們舍弟問／刀を突付けて私の弟に尋ねた。
		那羣賊／その一團の賊。
艙裏頭／船房	艙裏頭／船房	
指着／サシツケ。	指着／さしつけ。	
擺著／排置、裝置。	擺着／ならべて置く。	
	包袱／風呂敷包。	
鋪蓋／蒲團、夜具。	鋪蓋／蒲團、夜具。	鋪蓋／布團。
幸虧／幸福ニモ、幸而也	幸虧／幸にも。	幸虧／幸ひ。
		身上／體。
銀兜子／胴卷、財布。	銀兜子／胴卷、財布。	銀兜子／胴卷。
	馬頭／波止場、碼頭ともかく、當て字。	
早路／陸路。	早路／陸路。	
馬頭上／胴卷、財布。	馬頭上／埠頭、波止場、碼頭とも書く。	
起早／陸カラ。	起早／陸から	
		驚嚇／恐怖する。
		夾着點兒時令／時候あたりが加はる。
夾着／加ハルノ意。	夾着／加はるの意。	
時令／時候ノ障り、時疫。	時令／時候の障り	
官商吐屬第 29 章		

走路／旅行。	走路／旅行中。	走路／旅行する。
先伯／亡伯父。	先伯／亡伯父	先伯／亡くなった伯父。
		同着／一緒に、…と共に。
		甘肅／甘肅省。
趕車的／馭者。	趕車的／馭者	
		路都不熟走岔了道了／道を間違へた。
走岔了／踏違フ行先ヲ誤ル。	走岔了／歩き遠へた、路に迷つた。	
掌燈的時候／黄昏	掌燈的時候／夕刻。	掌燈的時候／灯點し頃、夕暮。
瞎走／目途ナク、無暗ニ走ス。	瞎走／當途なく無暗に歩く。	瞎走／盲滅法に歩く、あてどなく歩く。
	定更／初更、午後八時頃。	
		大樹林子／大きい森。
	樹林子／森。	
露出來／アラハレ、洩レ来ル（火光ノ）。	露出來／あらはれ、洩れ来る。	露出來／（灯火など）もれる。
臨近／近寄り。	臨近／近寄り。	臨近／側に行く・近寄る。
麪幌子／麪類ヲ賣ル招牌。	麪幌子／麪類を賣る招牌。	麪幌子／饅頭屋の看板。
	臨街／街通に臨んだ所。	
冷冷清清／寂寞タル貌、殺風景ナル有様。	冷冷清々／寂寞たる貌。	冷冷清清／ひっそりとして居る。
挑／選也	挑／選ぶ。	
店家／店ノ者、店員。	店家／店員	店家／宿のボーイ。
	打水／水を汲む。	
		打洗臉水／洗面水を汲む。
賊眉鼠眼的／賊ノ相貌ヲ形容シテ言ヘル語。	賊眉鼠眼的／賊の相貌を形容して言へる語。	賊眉鼠眼的／悪黨面をして居る。
沏茶／茶ヲ煎ル。	沏茶／茶を煎ずる。	沏茶／茶を入れる。
	弄飯／飯を焚く。	
		弄飯吃／食事の用意して喰べる。
		賊眉鼠眼的／悪黨面をして居る。
犯疑／疑ヲ起ス。	犯疑／疑を起し。	犯疑／疑はしい・疑問が起きる。
		炕上／オンドルの上。
		拾掇行李／荷物を取片付ける。
		這個工夫兒／その間、そういうする内。
		不住的／絶へず、ジツト…。
這分光景／這様光景也、コノ有様	這分光景／這様光景、この有様。	
	疑惑／不思議に思ふ。	疑惑／疑ふ。

出恭去／廁ニ行く。	出恭去／廁に行く。	
		出恭／大小便をする。
他納／納ハ助字、您納ノ納ニ同ジ敵意 ヲ帶フ)	他納／納ハ助字、您納の納に同じ。	他納／彼。
茅房／廁。	茅房／廁	茅房／便所、廁。
		堆草料的屋子／秣を置く部屋。
草料／秣、枯草。	堆草料／秣、枯草、堆は一堆の意。	
		前頭院裏／前の中庭。
		推開／推し開ける。
		説開／話を付ける、話を決める。
説開了／約定ノ意。	説開了／話がきまつた。	
全不管／全ク關係セス。	全不管／全ク關係せず。	
趕着／御シテ（車ヲ）	趕着／車を御して。	
		奔了去了／走つて行つた、馳けて行つた。
		臨街／道理に面す、町通り。
		掛着／掛けてある。
		叫開／呼んで開けさす。
		店門／宿屋の入口、戸口。
		兩輛車／車二臺。
	改邪歸正／邪を改めて、正に歸す。	改邪歸正／邪道から正道に立ち歸る、真人間となる。(註) 改去不好的行為歸入正道。
	怪不得／道理で	怪不得／道理で、成程…だ。
		賊形可疑的／盜棒臭くて疑はしい。
黑店／賊ノ開キ居ル店)	黑店／賊の開き居る店。	黑店／賊の開業せる宿屋。(註) 謀財害命的賊店。
	為難／心配して。	
	沒有主意／意見もない。	
直／頻ニノ意	直／頻りに	
就見／忽見也。	就見／忽見也。	就見／…すると。
鑣車／旅客保護車、護衛付ノ車。	鑣車／旅客を保護する。護衛付の車。	鑣車／旅客又は貨物の安全を保護する馬車。
	保鑣的／護衛者。	保鑣的／鑣車の保護に當る者。(註) 有武藝的人、被人雇用、給人家護送錢財和貨物 以防強盜的劫掠 叫做保鑣
	放心／安心。	
	五更天／午前四時頃。	五更天／午前四時。

套上車／馬ニ車ヲ付ケルヲ言フ、車ヲ仕立ツ。	套上車／馬に車を付けるをいふ、車を仕立てる。	套上車／馬車の仕度をする。
		搭幫走／一緒に出発する。
官商吐屬第30章		
村莊兒／村里、邑。	村莊兒／村里、邑	村莊兒／村、部落。
		吝刻／吝嗇、けちん坊。
		不幫人／人に情をかけぬ、人の世話をさせぬ。
		海船／汽船。
小財主／小金持、小資産家	小財主／小金持、小資産家。	
	素日／平素	
幫／救助ノ意。	幫／求助の意。	
好事／功德ナル行為、慈善ノ行ヒ。	好事／功德なる行為、慈善の行ひ。	
	頂着雨／雨に遇つて。	
男人／夫	男人／夫	
	管帳的事情／會計の仕事。	管帳的事情／會計の仕事。
	開船／出帆。	
	一石米／我が五斗四升八合に當る。	
		出海去了／航海に出た。
		另上別處借去／餘所へ借りに行く。
辦不了／為ス兼ヌ、出来得ヌ。	辦不了／為し兼ねる。	
哭／慨也、號泣也。	哭／泣く。	哭了／泣き出すヲした。
躲開／避ケ隠ル。		躲開／その場をはづす、逃げてしまふ。
賭氣子／立腹シテ。	賭氣子／立腹して。	賭氣子／激怒する、カツとなる。
	躲開／避け隠る。	
		同院子／同じ屋敷内に住む者。
	街坊／同居、同町村、同邸内などの居住者をいふ。	街坊／近所の者。
		爽快人／氣輕な人、テキパキした男。
請過來／来テモラフ	請過來／来てもらつて。	
	不説長也不説短／長いとも言はず短いとも言はず。	
粧作／コソヒナス、佯為也	粧作／…の振りをする。	
	可巧／丁度。	
挖窟窿／穴ヲ切開ケ。	挖窟窿／穴を切開け。	
鬧賊／賊難ニ罹ル。	鬧賊／盜難に罹る。	鬧賊／盜人が入る。(註) 家裏來了賊。

趁願／宜イ気味ト嘲ル。	趁願／宜い気味と嘲る。	趁願／よい気味・ザマ見ろの意。
		失盗／盗難に罹る。
	囑付／頼んで。	囑付／頼む。
誰知道／圖ラズモ、思ヒ掛ケナクモ。	誰知道／圖らずも、思ひ掛けなくも。	
下夜的兵／夜警ノ兵士。	下夜的兵／夜警の兵士。	下夜的兵／夜警の兵士。
招了／白状ヲシタ。	招了／白状をした。	招了／白状した。
衙役／役所ノ小吏、小吏ノ如キモノ今假ニ小使ト譯ス。	衙役／役所の小吏、小使の如きもの、今假に小使と譯す。	衙役／役所の小吏。
		有意要收拾他／彼を懲らしめやうとする。
事主／當事者。	事主／當事者。	事主／被害者。(註) 出事情的主人。
領贓／贓品ヲ受取ル、盜マレシ物ヲ受取ル。	領贓／盗まれしものを受取る。	
		領贓去／盗難品を貰ひ下げに行く。
	為了難了／心配した。	
		頂名／他人の姓名を名乗る。
	頂他的名／名を詐稱する。	頂他的名／彼の氏名を利用する。
瞧不起／輕蔑。	瞧不起／輕蔑する。	瞧不起／輕蔑する、見こなす。
		也不説長也不道短／生んだともつぶれたとも云はぬ、知らぬ顔をする。 (註) 説長道短、批評好壞
		牆上／壁。
		挖了／穴を開ける。
		窟窿／穴。
		衣裳／着物。
有意／故意。	有意／故意に	
收拾／懲ケ、躰ク。 <small>シツ</small>	收拾／懲す、躰つける。	
	撒謊／うそをいふ。	撒謊／偽を云ふ。
		推辭／斷る。
		快人作快事／面白い人は胸のすく様なことをする。
親妹妹／肉身ノ妹。	親妹々／肉身の身。	
	大家／皆さん。世間の人。	
官商吐屬第 31 章		
		慳吝／慾が深い、吝嗇。
	遭報／應報に遇ふ、ばちがあたる。	遭報／報復される。
窮人／貧窮者。	窮人／貧乏人。	窮人／貧乏な人。

	襤褸／ぼろぼろ。	襤褸／ボロ着物
流落／流離落魄、オチブレル。	流落／流離落魄、おちぶれる。	流落／落ちぶれる（註）漂流在別處而不能回歸故郷。
	盤費／旅費、盤は廻旋の意。	
辦貨／商業用、商品仕入。	辦貨／商品を仕入れる。	
		苦的 了不得／非常に困窮する。
		念其／思ふ、思ひ出す。
	念／思つて。	
	作盤費／旅費にして。	
	打主意／工夫をする。	
		不能為力／力添えが出来ぬ。
為力／幫助。	為力／力となる、幫助する。	
掉眼淚／落涙。	掉下眼淚／落涙する。	
		眼淚／涙。
	閒談／世間噺。	
		裏間屋裏／奥の部屋。
		四川人／四川の人。
傷心／嘆ク、慨ク。	傷心／歎く。	傷心／悲しむ。
	緊街坊／すぐ隣の。	
當年／以前、前年。	當年／以前、前年。	
虧空／損耗。	虧空／損をする。	
		貴郷親／同郷のお友達。
郷親／同郷ノ親シミ	郷親／同郷の親友。	
	無奈／如何せん。	
借約／借用證書。	借約／借用證書	借約／借用證書。
		勉強説／嫌々乍ら云ふ。
勉強／止ムヲ得ズ、ツトメテ。	勉強／止むを得ず、無理に。	
收起來／受納メ、受取。	收起來／受納め。	
搬了走／引越ス。	搬了走／引越す。	
這纔／ココニ於テ初メテノ意。	這纔／ここに於て初めて。	
術士／魔術使。	術士／魔術使。	術士／魔術使。
搬運法／窃ニ物ヲ抜取ル咒ヒ)	搬運法／窃に物を抜取る呪ひ。	搬運法／物を抜取る方法。
		洩漏／（話を）漏らす。
	跟人／召使。	
	趁願／いい気味だ、趁は乗ずるの意。	
官商吐屬第 32 章		
打鴿子／鳩獵	打鴿子／鳩獵	

		鴿子／鳩。
放一槍／一發發砲	放一槍／一發發砲する。	
	誰知道／圖らずも。	
站着／佇立	站着／佇立	站著／立止つて居る。
冷孤丁的／不意ニ、忽然。	冷孤丁的／不意に、忽然	
驚中去／驚キ逸失ス。	驚下去／驚き逸失す。	
揪住／捉へ。	揪住／捉へ。	
不用着急／噪グニ及バス。	不用着急／噪ぐに及ばぬ。	
紅顔色／栗毛。	紅顔色／栗毛。	紅顔色／栗毛色。
好辦／處辦シ易シノ意。	好辦／し易しの意。	
		對舖保／店舖保證を立てる。(註) 沒有保人、去弄出一個保人來、叫做對保。
	對給舖保／商店の保證人を立てる。	
見個情／情ヲ汲ムノ意。	見個情／情を汲むの意。	見個情／事情を斟酌する、同情する。
		據實的說了／實際を話した、包み隠さず申立てた。
		紅馬／栗毛の馬。
		驚了／(馬が) 驚いて逃げた。
沒下落／行衛不明。	沒下落／行衛不落。	
		下落／所在。
便是／即是。	便是／即也	便是／即ち、つまり。
吵翻起來／口論ヲ初メタ。	吵翻起來／口論を初めて。	
		吵翻／口論する。
	勸開／仲裁をする。	勸開／仲裁する、なだめる。
		巡檢衙門／巡檢衙門。
	傳了去了／拘引して行つた。	傳了去了／呼出した。
堂上／衙門内會審室、詢問所。	堂上／衙門内の訊問所。	堂上／法庭。
	定規是／きめたのは。	
銃響／銃聲。	槍響／銃響	
追上／追イツク。	追上／追ひ付く。	追上／追ひかける。
見證／證言	見證／證言。	見證／證據。
	見有了／現に有つた。	
打板子／答ノ刑也	打板子／答の刑。	
		狡詐／狡猾。(註) 狡猾而奸詐。
官商吐屬第 33 章		
發／送也、渡也。	發／送也、渡也。	
笑話兒／可笑シキ談。	笑話兒／可笑しき談。	

籌／串、籤。	籌／串、籤	籌／數取りのサシ。
擡棉花的／棉花ヲ擔フ人夫。	擡棉花的／棉花を擔ふ人夫。	拾棉花的／棉をかつぐ人夫。
好大半天／數時間、餘程ノ間。	好大半天／數時間、餘程の長い時間。	
詫異／奇怪、怪訝。	詫異／奇怪に思ふ。	詫異／不審に思ふ。(註) 覺得很奇怪。
有氣の様子／立腹セル様子。	有氣の様子／立腹せる様子。	
不留心／不注意	不留心／不注意。	
		一摺籌／一度サシを數へて見る。
摺／數也。	摺／一本づ、數へるをいふ。	
	接的籌／串を受取つた的是過去を表はす。	
		誰接的籌／誰がサシを受取つたのか。
		傍邊兒／傍ら。
		接籌／サシを受取る
方纔／今シ方、先刻。	方纔／今し方、先刻。	
肚子疼／腹痛。	肚子疼／腹が痛い。	肚子疼／腹痛。
撿起來／拾ヒ上げ。	撿起來／拾ひ上げ。	
不要緊／構ヒナシ。		
		太冒失些個／如何にも粗骨です。
太冒失／大過失	太冒失／大過失	
		臉上很不得勁／大變きまり悪る相な顔をする。
不得勁／面目ナシ。	不得勁／面目ない。	
盤一盤／檢査ヲスベシ。	盤一盤／檢査をせよ。	盤一盤／(品物の) 數を當つて調べる。
		盤到院子來／中庭に運び出す。
		摺籌不盤貨／サシを數へただけで品物を調べない。
對了／相違ナシトイフ意	對了／相違なしといふ意。	
		假／贗品。
圈着／棄却ノ印。	圈着／棄却の印をつける。	圈着／消印する。
管賬的／會計員	管帳的／會計員。	
荒唐／無稽也。	荒唐／無稽、とんでもない事。	荒唐／輕卒、そそつかしい。
竟自／元來ノ意。	竟自／元來の意。	
磨不開／面目ヲ失セル貌。	磨不開／面目を失せる貌。	磨不開／恥し相にする。
		羞羞慚慚／物恥し相に
官商吐屬第 34 章		
退票／悪キ手形、贖札ヲモイフ、通用セザル手形。	退票／悪い手形、贖札、通用せざる手形。	

		打回来了／戻しに来た。
戳子／捺印、割印。	戳子／捺印、割印。	戳子／印判。(註) 木頭の圖書。
收號／手形ノ裏面ニアル空欄ニ二年 月日某銀行發行ナドト記入シ其ノ真 貨タルノ證トシ責任ノ歸スル處ヲ明 ニス此ノ記入ヲ收號トイフナリ。	收號／手形の裏面にある空欄に年月 日某銀號發行などと記入し其真實た るの證として責任の歸する處をか に明す此記入を收號といふ。	收號／領収したマーク。
		往回裏打／元へ戻してやる。
也許／或者也、事ニヨレバノ意。	也許／或者也、事によればの意。	
母錢鋪／北京市中公然開店セル銀行 ト、暗ニ開店セル銀行トアリ母錢鋪ト ハ即チソノ暗ニ開店シツ、アル銀行ヲ イフ故ニ母錢鋪ノ手形ハ人皆之ヲ使 用スルヲ厭フナリ因云母者公母之母 也俗言以好為公以不好為母云北京市 中公然開店セル銀行ト、暗ニ開店セル 銀行トアリ母錢鋪トハ即チソノ暗ニ 開店シツ、アル銀行ヲイフ故ニ母錢鋪 ノ手形ハ人皆之ヲ使用スルヲ厭フナ リ因云母者公母之母也俗言以好為公 以不好為母云。	母錢鋪／北京市中役所の許可を受け て開店せる銀行と、無許可にて開店せ る銀行とあり、母錢鋪とは即ち後者の 銀行をいひ、公然と手形を發行するを 得ず、故に母錢鋪の手形は人皆之を使 用するを嫌ふなり。	母錢鋪／官許を受けて居ない両替店。
		認這個苦子／自分に損をして置く。
給破／摧イテ下サイ (小札ト)。	給破／こわして下さい (小札と)	
認苦子／痛ヲ忍ブノ意。	認苦子／痛を忍ぶの意。	
磨／轉也、換換。	磨／轉ずる、繰換へる。	
		磨別處的／他店のものをやりくりす る。
黠點／數フ、檢也。		黠點／(金子を) 檢める。
官商吐屬第 35 章		
熱鬧／騷動。	熱鬧／騷動。	
		看了一個熱鬧／騒ぎを見ました。
		跟進出了／後から附いて入った。
巡檢衙門／警察署。	巡檢衙門／警察署。	
跟着去／隨イ行く。	跟着去／隨イ行く。	
就見／忽見也。	就見／忽見也。	
	衙役／役所の小使。	
		坐堂／裁判官が法庭に出る。

		跪下／跪く。
	跪下了／ひざまづいた、前清時代にては裁判をする時には原被両告は皆跪つて役人に言上するを例とす。	
		磕頭／おじぎをする。
成衣舗／仕立屋、裁縫舗。	成交舗／仕立屋。	成衣舗／仕立屋。
	犯疑／不思議に思ふ。	
		妾／妾。
		街門對着了／戸口が締つて居る。
對善／虚掩也只閉門扉不關也。	對着／門の扉が合つて居るだけでまだ鍵をかけざるをいふ。	
		又説又笑的／話をしたり、笑つたりして。
打茶圍／素見、白看。	打茶圍／素見。	打茶圍／素見かす。
		氣急了／ムツと腹を立てる。
		打嘴巴／頬を叩く。
嘴巴／口元	嘴巴／口元。	
回手／手向	回手／手向ひする。	回手／手を返す。
抓／爪ニテ抓ク。	抓／爪にて引つ搔く。	抓了／ひつ搔く。
	老爺／役人に對する尊稱。	
		紅竹衛衛／紅竹衛衛。
		放印子為生／金貸を渡世にする。
		取印子去／貸金の月賦を取立てに行く。
放印子／日歩ノ金ヲ貸ス放ハ為スのノ意。	放印子／日歩の金を貸す、放は放資の意。	
為生／生業トナスノ意。	為生／生業となすの意。	
印子／利息ノ意、通帳ニ貸何日ニ何程ヲ貸シ何日利息、何程領收ナド、認其メ都度捺印スルモノユエニスクイフ。	印子／利息の意、通帳に何日に何程を貸し何日利息何程領など、認め其都度捺印するもの故に斯くいふ。	
摺子／通帳ト譯ス。		摺子／通帳。
		一壺茶／土瓶のお茶。
一腦門子的氣／クワツト噪キ上ケタル貌。	一腦門子氣／くわつと急ぎ上げたる貌。	一腦門子的氣／血相を變へて怒る。
瞪著／ミハリ。	瞪着／みはり	
		瞪著兩眼睛／眼を見張る。
不准／許サズ。	不准／許さず。	

		太沒禮貌／餘りに禮儀がなさ過ぎる。
	沒禮貌／失禮だ	
		上了氣了／積に觸つた。
	上了氣／噪き上げ。	
		要治你罪的／お前を處罰する。
		治罪／處罰する。
官商吐屬第 36 章		
鐺子／腕輪。	鐺子／腕輪。	鐺子／腕輪。
戥子／天秤也。	戥子／天秤也。	戥子／金秤（註）小秤。
邀／量ル、秤也。		
		邀那隻鐺子／その片方の腕輪をはかる。
起懷裏／懷中ヨリ。	起懷裏／懷中より。	起懷裏／懷中から。
銀信／金子封入ノ書封。	銀信／金子封入の書信。	銀信／為替入りの手紙。
		説話之間／話の途中に。
		接過去／受取る。
接過／渡ス。	接過／渡す。	
		送信的／手紙を持つて来た男。
		不識字／字を識らぬ。
	拆开／手紙の封を開くを拆开といふ。	拆开／開封する。
		拿下去／下へ持つて行く。
前頭／前ノ方、冒頭。	前頭／前の方、冒頭。	
平安／平安無事	平安／平安無事。	
	順便人／ついでの人。	
		平一平／秤にかける。
平／量也、秤也。	平／量る。	
		打算味起他一兩銀子來／銀を十匁胡魔化そうとした。
	味起來／ごまかして。	
合好／勘定、兩替ノ意	合好／勘定してしまった。	
		合好了現錢／現錢に換算する。
	上檔／計略にかかる。	
騙子手／詐偽師、騙者。	騙子手／騙子手。	騙子手／詐偽師。
		叫他賺了／その人間に騙された
夾剪／鋏刀。	夾剪／鋏刀。	夾剪／鋏。
		夾開／鋏で切る。
		點心舖／菓子屋、飲食店。

	接過／受取る。	
	各人／自身で	
天平／天秤也。	天平／天秤。	天平／秤。
	訛我／私をだます。	
		還不出話來了／返答が出来なかつた。
		聽這件事都不平／その事を聞いて皆憤慨した。
官商吐屬第 37 章		
出名／出名	出名／有名なる。	
		大夫／醫者。
	功名／科擧試験で及第すればそれぞれ程度によつて學位を授く之を功名といふ。	功名／名譽の背書。(註) 舊時官職稱功名。
	門脈／醫者の自宅診察。	
打扮／風體。	打扮／いでたち、風體。	打扮／服装。
宅門子／大家。	宅門子／大家。	宅門子／邸。
太太／夫人。	太太／夫人。	
	瞧病／病氣を診察する。	
		跟班的樣兒／ボーイ風態。
要過來／受取	要過來／受取つて	要過來／受取る。
凳子／腰掛。	凳子／腰掛	凳子／こしかけ。
估衣鋪／古着屋。	估衣鋪／古着屋。	估衣鋪／古着屋。
	詫異／奇怪に思ふ。	
跟班的／從僕	跟班的／從僕	
女皮襖／毛皮ノ上衣襖トハ袖無半纏ノ如キ物。	女皮襖／婦人用の毛皮の上衣、襖とは半纏の如きもの。	女皮襖／女用の毛皮衣
合式／凡テ物ノ能ク適ヘルヲ合式トイフ。	合式／凡て物の能く適へたるをいふ。	
		叫我們跟一個人來／私共に一人ついて来る様にとの事でした。
		騙了去了／騙つて行きました。
官商吐屬第 38 章		
		郭福／郭福。
外間屋裏／入口ノ座敷、今假ニ玄關ト譯ス)	外間屋裏／入口の座敷。	外間屋裏／表の部屋。
歇過乏來了／旅行後主客初メテ相見ル時ノ挨拶。	歇過乏來了／旅行後主客初めて相見ル時の挨拶。	歇過乏來了／御疲勞が直りま下か。
		我倒不覺很乏／私は格別疲勞を感じません。

乏／疲勞。	乏／疲勞する。	
斟酌／想談。	斟酌／相談する。	斟酌／相談する（註）思量事情應該怎麼辦。
修飾／刪正	修飾／添刪する。	修飾／添消する、推敲する。
抄／寫也。	抄／寫す。	
草稿兒／草稿。	草稿兒／草稿	草稿兒／原稿、下書。
早尖的時候／朝飯ノ時刻（道中ニテ）。	早尖的時候／旅行中朝飯の時刻をいふ。	
	帶累的／緊累者。	
	記不清／記憶確かならず。	
		打尖的客人／辨當を使つて居た旅人。
打尖／道中ニテ食事ヲスルヲイフ。	打尖／道中にて食事をするをいふ。	
		水神廟／水神廟。
	報了官了／役所に届けた。	
仵作／檢屍ノ役人。	奸作／檢屍の役人。	仵作／檢屍醫。
彷彿／邈然タル貌。	彷彿／恰かも…如し。	
勒死／絞殺。	勒死／絞殺。	勒死／絞殺する。（註）把繩在脖子裏、雙方拉緊、把人殺死。
往日／從前ノ意。	往日／從前。	
		往日無仇近日無冤／過去んいも現在にも何の怨恨もない。
動刑拷打／拷問ノ刑ヲ行フ。	動刑拷打／拷問の刑を行ふ。	動刑拷打／拷問にかける。
		叫他招定了／本人に白状させやうとする。
白說不招／如何にニ詰問ルルモ白状セス)	白說不招／如何に詰問するも白状せず、白は百の意か、どんなにするもの意、第三聲。	白說不招／何處までも白状することがないと云ふ許りでした。
院上／巡撫ノ衙門、撫部院。	院上／巡撫の衙門、撫部院。	
鄰封／鄰縣ノ知縣、撫州共ニ通ズ。	鄰封／臨縣の知縣知府共に通す。	鄰封／鄰縣の意。
		幹練／熟練。（註）能幹而老練。
幹練的／熟練セル老練ナル	幹練的／熟練せる老練なる。	
		押起來／收監する。
		在院上告了／巡撫衙門に訴へる。
原驗的／前檢屍官		
原審的／罪ニ處ス。	原審的／前審判官。	
		原審／最初の裁判。
		敘在那日記裏頭／その日記に書き入れる。

		是叫誰贖呢／誰に浄書させますか。
		雇人抄寫／人に浄書させる。
	參革／彈劾して革職する。	
	治了罪／罪に處す。	
		得空兒／閑暇な時に。
膳／寫也。	膳／寫す。	
		膳出來（書き）寫す。
		代勞／厄介かける。
抄錯／誤寫。	抄錯／誤寫。	
		抄錯了／寫違へる。
	感情不盡／感謝の情盡きず。	感情不盡／有難い仕合せです。
官商吐屬第 39 章		
	空喝酒／只酒ばかり飲む。	空喝酒／只だ酒許り飲む。
		無味／趣がない。
	莫如／に如かず。	
斟滿／滿酌	斟滿／なみなみとつぐ。	斟滿了／杯に酒を一杯に酌ぐ。
	滑拳／拳を打つ。	滑拳／拳を打つ。
		白給／無意味に出す。(何にもならぬ)
四季發財／滑拳ヲ用フル語。	四季發財／拳の呼び聲、此拳は自分と相手との出す指の數を言ひ當つれば勝つなり、四季發財は四の呼び聲にして皆延喜よき言葉を呼ぶ。	四季發財／四季金子が儲かる。
六六順／同、六六三百六十五日即ち年中順境ト何レモ延喜ノ好き語ナリ。	六六順／六六三百六十五日即ち年年順境と何れも延喜の好き語なり。	六六順／一年三百六十五日順調に暮らせる。
五金奎／同、五金ハ價值奎トハ角形ノ玉古ノ笏、又五經魁ト名副ヘテ及第ノ名、詩書易禮記春秋ノ試験ニ第一ニ中リタルヲ五經魁トイフナリ)	五金奎／五金は價值あるの意、奎とは角形の玉、古の笏をいふ、又五經魁の意に通ず、詩、書、易、禮春秋の試験に第一に及第したるを五經魁といふ	五金奎／拳を打つ用語、五の數を呼ぶに用ゆ。
動手灌妳／手出シヲシテ汝ニ飲マズゾ。	動手灌你／手出しをして口の中につぐぞ。	動手灌妳／強制的に酒を飲ます。(註) 灌醉、用方法強迫別人喝酒、故意使人喝醉。
瞎貓／盲貓。	瞎貓／盲貓	
		瞎貓碰死耗子／盲貓が死んだ鼠にぶつかる(まぐれ當りの意)
耗子／鼠。	耗子／鼠。	
		罷咧／…と云つたやうなものだ。

		批評／批評する。
没理會／氣付カヌ。	没理會／氣が付かぬ。	
	足見／見るに足る。	足見／…であることが判る
	利害／利害とはひどいの意。	
		混酒／酒をごまかす。(勝負に敗けて當然飲むべき酒を)
		動手灌你／強制的に酒を飲ます。(註) 灌醉。用方法強迫別人喝酒、故意使人喝醉。
	刻薄／悪く云ふ。	
真厲害／真ニ酷グ、厲害とトハヒドイノ意		
御史／官名。	御史／清朝に於て行政を監察する官吏。	御史／官名。(都察院の官吏) (註) 古時候管理彈劾事情的官。
好在／幸ニモ。	好在／幸にも。	好在／幸ひこ。
	都老爺／御史のこと、都察院の旦那。	都老爺／御史。
	竟管／ひたすら。	竟管／かまわず…せよ。
郷下人／田舎者。	郷下人／田舎者。	
		没人不答應你／誰も君を咎める者はない。
没落子／便ル方ナリ。	没落子／便る方なし。	没落子／生活する方法がない。(例) 他窮的一點兒落子也沒有啦。
盤算／思ヒ運ラシ。	盤算／思ひ運らし。	盤算／思ひめぐらす。
老公／公中宦官、宮人。	老公／宮中宦官	
		當老公／宦官になる。
		又尊貴又弄錢／出世も出来、金子も儲かる。
	弄錢／原來は賭をすること、此處にては錢を儲けること。	
		拜在一个老太監門下／或る老宦官の門下生となる。
老太監／老公ニ同ジ。	老太監／老公に同じ。	
唵郷下老兒／世間知ラズノ田舎出ノ老人、唵ハ郷愚也、全ク世事ニ通セザル意。	唵郷下老兒／世間知らずの田舎出の老人、唵は郷愚、全ク世事に通ぜざる意。	唵郷下老兒／山出しの田舎者。
		進宮／宮中勤めをする。
好容易／容易ナラザル意	好容易／容易ならざる意。	
		好容易事／容易な事でない、至難な

		事。無性にまぜつ返しをする。
別混／マゼカヘスナ。	別混／まぜかへすな。	
		混挑字眼兒／人の話の揚足を取る。
挑着字眼兒／在一字一句之間挑出毛病之意。	挑着字眼兒／一字一句の間に缺點を摘出するの意。	
	老師／先生の尊稱。	
	照應／世話をする。	
	傳旨／令旨を傳へる。	
	用膳／食事する。	
		派／…せしめる。
		大内裏／宮中。
		内裏／宮中。
		傳旨用膳／御膳の御意を傳へる。
萬歲爺／天子。	萬歲爺／天子の俗稱。	萬歲爺／天子様。
喝呼／怒鳴り付ク、叱咤。	喝呼／怒鳴り付ける、しかる。	喝呼／怒鳴り付ける。
		要用御膳／御膳を仰出される。
		大宴羣臣／羣臣を召して御宴を張らせられる。
	別時説／馬鹿を言ふな。	
記下／記憶。	記下／記憶する。	
		記下了／覺へた。
		剛要罵／丁度痛罵しやうとした時…。
		那灘屎／踏みこねた大便。
		我一定罵你一頓／自分はお前を罵らずには措かない
		在坐／列席する、列座に加はる
	擺宴／宴を張る。	擺宴／宴會をする。
		擺御宴／御宴をお張りになる。
切／キツト、確ノ意。	切／きつと、確に。	
		切記著／確と覺へて置け。
假比／例エバ。	假比／例へば。	
		護衛的兵丁／禁裏守護の兵士。
	兵了／兵士。	
		御林軍／我國の近衛兵に當る。
恍然／ボンヤリ、無意識ニ。	恍然／ぼんやり	
		恍然大悟／突然に會得する。(例) 忽然領悟の様子。忽然全部明白啦。

		皇上／天子様。
	怪不得／道理で	
		眼頭裏的東西／お目に觸れる品物。
眼頭裏／手許ノ意、膝許。	眼頭裏／手許の意。	
老手／老功、有識。	老手／老功、有識。	老手／老練家、連達人。
晒／踏付ク。	晒／踏付ク。	
		晒了一腳屎／片腳に大便を踏付けた。
灘／ナダレ、廣踏ガルタル貌。	灘／なだれ、踏み廣がりたる貌。	
	一頓／一回。	
	幸虧／幸にも。	
	擰腫／擰はひねる、腫ははれる。	
		早叫人擰腫了／逸早くその人から（頬など）擰られて居る。
典史／官名。	典史／地方官街の文書係。	
挖苦／薄給ニテ物足ラヌヲイフ。	挖苦／薄給にて不如意なるをいふ。	
		挖苦典史／典史を皮肉る。（註）挖苦。用諷刺的話來譏笑人。
有趣兒／興味アリノ意。	有趣兒／興味ありの意。	有趣兒／面白い。
		典史十令／典史に關しての酒令。
		一命之榮稱得／一度拜命の辭令を受けたら占めたもの。
兩塊竹板拖得／典史走道不能大搖擺 列只可以拖兩片竹板喝道而走也	兩塊竹板拖得／典史は途上に於て他の大官の如く行列厳めしく練り歩くこと能はず只二つの竹板を引きづり呼び歩くことなり。	兩塊竹板拖得／二枚の竹板を持つたお供が外出には隨行する。
	俸銀／俸給。	
		三十兩封銀領得／三十兩の俸給にはあり附ける。
		四郷地保傳得／東西南北の村長サンを呼出す權力を與へらる。
五個嘴巴得／官不大不能專自用刑五個嘴巴得還可以打人	五個嘴巴／大官に非るを以て自分で刑を斷することを得ず、只五つ位打ち得るに過ぎず。	五個嘴巴打得／處罰權はないけれど頬を五度位は叩く威力を認められて居る。
六路通詳出得／雖小官可以通同東西上下官府	六路通詳出得／小官と誰東西南北上下の六路の官府位には通信するを得。	六路通詳出得／小役人でも東西南北上下の官衙に公文書を出すことができる。

七品堂官／知縣也。	七品堂官／知縣をいふ。	七品堂官／七品官の知縣階級迄は昇進の途がある。
八字牆／官府之門形八字土牆	八字牆／門府の門形は八字形をなす。	八字牆門開得／典史の居宅にも八字形の門牆を許されて居る。
九品補子／典史當九品官	九品補子／典史は九品官に當る、補子とは清朝の文武官が大禮服の背部と胸部とに禽獸の刺繡を美しく表はしたるものを云ふ。	九品補子繡得／九品の典史にも大禮服には「練雀」の補子を縫付けられる光榮がある。
	繡得／紋を縫ひ付ける。	
	饒／饒	
		十分高興不得／とは云ふものの十分満足だけは云はれない。
		末尾／最後。
		只要饒得了你／お前は恕しては置かれないだらう。
官商吐屬第 40 章		
		過年／年越しをする、新年を迎へる。 (度過年關慶祝新年。)
		存古齋／古董店の屋號。
打燈虎兒／謎判じ。	打燈虎兒／謎判じ。	打燈虎兒／懸行燈の謎解きをする。 (註) 猜想燈虎兒裏暗射的字句。
	舉人／科舉の御試一省首府にする試験に及第したる者をいふ。	
猜着／判じ中ツ	猜着／判じ中てる。	猜着／解いた、判じた、中てた。
揭／謎ヲ中ツレバソレテ認め掲クルナリ。	掲／謎を中つればそれを認め掲示するなり。	掲了／謎を解いて、その解答を認めて掲ぐる。
沒點の言字／謂沒言字、首頂一點畫也、即言形耳。	沒點の言字／言といふ字の首めの點がないもの。	
		沒點的言字打四書四句／點のない言の字を四書の四句で解く。
	打／…であてる。	
		吾與點也／吾は點を與ふるなり。
		前言戲之耳／前言は之を戲るのみ。
		十字口中擡／十の字を口の中に嵌める。
		莫作田字猜／田の字に解してはなら

		ぬ。
是何言也／是ハ何タル言ノ字ソノ意	是何言也／是は何たる言の字ぞや。	
為難／難儀スル、困ル。	為難／難儀する、困る。	
	子路曰是也／元来は子路曰く是れなりと讀むべきを茲にてはもちりて子路曰く也なりと言ひたるなり下の二句皆同じ。	
無頭又無尾／無ノ字ノ頭ノ無ノ字尾	無頭又無尾／無の字の頭 ^ハ 、無の字 ^ハ	無頭又無尾／無の頭と無の尾とがある。
		悶死一秀才／或る秀才が狂ひ死にした。
	累朝事蹟／朝の事蹟は歴史。過龍門は魚	
		累朝事蹟過龍門／累朝の事蹟龍門を過ぐ。
		史魚／人名。
	節孝祠／夫を失ひたる者が操節を守り、親を失ひたる者が孝節を全うするために祠堂を建てて専ら祭事に従ふなり。	
	祭品／供へ物。	
節孝祠的祭品／貞節孝行なりし人の靈屋の供物貞節孝行なりし人の靈屋の供物		節孝祠的祭品／孝子節婦の祠に用ひる御供者)。
食之者寡／寡婦食之之意	食之者寡／之れを食ふ者は寡婦なり。	食之者寡／之を食する者寡し、即ち寡婦之を食すの意に解す。
		誠哉是言也／誠なる哉、この言や。
		難為你猜／貴下が解かれるのに苦心されたでせう。
		子路曰是也／子路曰く是なり。
子路不對／駒(象棋)ノ路ガ合ハヌトノ意又子ハ此ノ同声同音ナルヨイリ此路不對ノ意ナリトモイフ。	子路不對／象棋の駒の路が合はぬとの意。	
		顔回曰似也／顔回曰く似るなり。
		孔子曰非也／孔子曰く非なり。
		直在其中矣／直其の中に在り。
		打一字セ字／セと云ふ字に解いた。

		這兩句都恰／この二つはどちらもよく出来ました。
洵溝／溝ノ流。	洵溝／溝の流。	洵溝／溝さらへをする。
		圍棋盤内著象棋／棋盤の上で象棋をさす。
這邊兒有水、那邊兒有鬼／支那ニテ子守等ガ常ニ言フ語ナリ言ハ此方ニハ水ノ流彼方ニハ幽靈居ルカラ注意シテ道ニ中シテ子供ノ守ヲセヨトナリ。	這邊兒有水那邊兒有鬼／支那にて子守等が常に言ふ言葉なり、其意は此方には水の流彼方には幽霊が居るから注意して子供の守をせよとなり。	
		也就算好的一路了／先づ上手な部類でせう。
算在好的一路／同様巧ミナル方ダ。	算在好的一路／これ他にも同様巧みな方だ。	
	頭年／去年	
當缺的／役所ノ書記ナドヲイフ、今假ニ書記生ト譯ス。	當缺的／役所の書記などをいふ。	當缺的／役人をする者。
春聯／支那ノ俗正月ニハ二枚ノ紅紙ニ延喜ノ好き語句ヲ書き門口ニ貼附ス之ヲ春聯トイフ。	春聯／支那の俗正月には二枚の赤い紙に延喜の好き語句を書き門口に貼附くるをいふ。	春聯／新年門戸に張る紅紙に書いた縁起良き對句。
上聯下聯／此方ヨリ向ヒテ右方ニ垂ルヲ上聯トイヒ左方ニ垂ルヲ下聯トイフ。	上聯下聯／向つて右方に垂るゝを上聯といひ、左方に垂るるを下聯といふ。	
		上聯／春聯の上の句。
		下聯／春聯の下の句。
		行話／専門語、お手の物の句調。
		這副／この一對。
		我可要收著／私は是非保存して置き度位のです。
		本色／本職、職分。
		等因前來辭舊歲／等因前來と極り文句に忙しい思ひで年の暮を送り。

等因前來、須至咨者 / 俱ニ是公用文ニ用ヒル熟語ナリ衙門ノ書記ナレバ常ニ此等ノ文字ヲ書キ居ルコトユエ等因前來マテ書イテ舊年ヲ送り今年ニ入リテ須知咨者ヲ書キ續ケタト暗ニ先方ノ年中齷齪セル様ヲ嘲リタルナリ大有年トハ豐年ノコトナリ。	等因前來須至咨者 / 俱ニ公用文に用ひらるゝ熟語なり、衙門の文書なれば常に此等の文字を書き居る故に等因前來まで書いて舊年を送り、今年に入りて須至咨者を書き續けたと、暗に年中刀筆に齷齪せる様を嘲りたるなり、大有年とは豐年のことなり、等因前來は…等の因前來とは即ち…の旨申越せりの意、須至咨者は須らく咨に至る者即ち右通知申上後也に當る。	
		須至咨者大有年 / そして又新年にも須至咨者などと書きなぐる生活の上に目出度い一年がやつて来るとの意。
		傳家寶 / 子孫に傳へる寶物。
		瞎咧咧 / 冗談を云ふ、輕口を叩く
使令通話第1章		
		鄭老爺 / 鄭旦那様。
行幾 / 兄弟中ニテ幾人メニ生レシカヲ尋塗ルニ用キル語。		行幾 / 何男ですか。
	(注意) この使令通話篇は外人の主人と中國の從僕とを配してあるから、其心して讀まなければならぬ。	
	誰呀 / 呀に意味なし、只語氣を添ふる用にふ。	
	進來 / 這入る。	
	老爺 / 下僕又は身分の低き者が、上に對し云ふ言葉、旦那に相當す。	
	可以 / 能ふに同じ、但し能よりは可以の方軽く聞ゆ。	
	就 / …ならば則ら。	
	自然的 / 無論のこと、當然のこと、	
	請安 / 安否が問ふこと、常に挨拶をするといふ意に用ふ。	請安 / おじぎする。(註) 問候。
	行幾 / 本書二頁三行目の註参照。	
排大 / 總領、嫡子。	排大 / 長男、嫡子。	排大 / 長男、總領。
		慢慢兒的 / 段々と、徐々に。
		歷練 / 經驗する、訓練する。

	伺候／主人に使ふる。	伺候／仕へる、奉公する。
	八／八は原来一聲なるも下に四聲の字ある時は二聲に變ず。	
	京裏／北京の中に。	
	不像／似合はない。	
	外郷人／地方の者。	
	街坊人／同町、同村又は同邸内に住店する者はいづれも街坊といふ。	
	向來／これ迄。	
	當過／當は…になる、過は過去を表す、「當教習」、「當兵」の如し。	
	跟班的／下僕。	
	得…纔行哪／…しなければなりません、只「得」一字よりは語氣強し。	
	那好辦／それは何んでもないことだ。	
	使喚／人や金をつかふ。	
	保人／保證人、請人。	
	隨…的意思／…の隨意だ。	
	既然／すでに…した以上は。	
	作保／保證をする。	
	解／…から。	
	多咱／何時、多咱ともかく、咱咱共に當て字、多咱は「多早晚兒」の轉化したるもの。	
	月底／月末。	
	索性／いつそ。	
	趕…再／…になつてから。	
	鋪蓋／蒲團、掛蒲團は「被窩」、敷蒲團は「褥子」。	
	喳／邦語のハイといふ返辭に當る。	
	定規／きめる。	
		哼／うん（肯く形）
儘溜頭兒／外れ、隅。	儘溜頭兒／外れ、隅、儘は一番（場處について）溜頭兒は隅。	儘溜頭兒／一番突當り。
		白牆兒／白塼。
		挨著洗澡房的西邊兒／湯殿の西隣り。
向陽兒／南向。	向陽兒／南向き。	向陽兒／南向き。
閒屋子／明き間。	閒屋子／明き間。	

敢自／實ニナドノ意。	敢自／「實に」などの意。	
	打發／つかはす。	
字兒／書付、手紙。	字兒／書付、手紙。	字兒／書付、簡単な手紙。
	請我／我を呼ぶ。	
	按着／…の通りに。	
	就是了／…としよう、…する方がよい。	
使令通話第2章		
	沏茶／茶をいれる。	嚙啡／コーヒー。
		錫罐／錫の茶入。
		格子／棚。
錫罐／錫	錫罐／錫	
	櫃子／戸棚。	
	隔子／棚。	
		洋鐵罐子／鉄力罐。
洋鐵／鉄力	洋鐵／鉄力。	
往後／今後	往後／今後。	
	完上來／おしまひになりかける。	完上來了／無くなりかける。
續上／續足ス、入足ス。	續上／續ぎ足す、入れ足す。	續上／足す、入れ足す。
	趕緊的／いそいで。	沏的殼多麼鹹／茶の入れ方が恐ろしく濃かつた。
		吳少爺／吳若旦那。
		苦的直皺眉／苦くて頻りに顔をしかめる。
自各兒／自身	自各兒／自身	自各兒／自身。
	那盃茶好就喝那盃罷／類例、你能喝多少、喝多少、(君どれだけ飲めるかどれだけでも飲み玉へーのめるだけ飲み玉へ)。	
		沏上／茶を入れる。
迷迷糊糊／譯ノ分ラヌ	迷迷糊糊／譯の分らぬ。	迷迷糊糊的／ウカウカト、不注意にも。
攔／入ル、意	攔／入れる。	
	殼／十分、甚だ。	
	多麼／なんとまあ。	
醞／濃也	醞／濃い。	
	苦得…喝不得／類例、脚疼得走不得、	

	(足が痛くて歩かれない)。	
	直／ひたすら。	
	皺眉／眉をしかめる。	
	小的／下僕が主人に對して私といふ時に用ふ。	
	留神／小心に同じ、氣を付ける。	留神／注意する。
		茶机兒／茶臺、茶机
	就是了／…するやうにしませう。	
茶盤兒／茶盆。	茶盤兒／茶盆。	茶盤兒／茶盆。
茶壺／急須	茶壺／急須	
茶船兒／茶托。	茶船兒／茶托。	茶船兒／茶托 (註)。茶托子。
火盆／火鉢。	火盆／火鉢。	火盆／火鉢。
		火快滅了／火が消へさうだ。
	快…了／ちきに…になります。	
就手兒／手序ニ。	就手兒／手序に。	就手兒／手序に。
	真是個／真は本當に、是個は本當の…だ。	
		熟炭／燠 (オキ)、紅く焼けて居る炭。
	糊塗人／馬鹿な奴。	糊塗人／物の判らぬ人間、ボンヤリ。
		沒燒過的炭／紅く焼けて居らぬ炭。
		生炭／火にならぬ木炭。
		燒紅了的炭／紅く焼けた炭。
	連…都／…でさへも。	
哼／略諾ノ詞		
痰盒兒／痰吐、唾壺。	痰盒兒／痰吐、唾壺。	痰盒兒／痰壺。
	吐沫／痰	吐沫／唾
		涮乾淨／綺麗にゆすぐ。(註) 涮、洗、涮茶壺。
	涮／すすぐ。	
使令通話第3章		
	叫門／訪づれる。	叫門／ドアーを叩く、ノックする。
		臉水打來了／洗面水を汲んで來ました。
	打水／水を汲む、打酒は酒を買ふ。	
	倒水／水を注ぐ。	
		漱口水／漱水。

胰子盒兒／石鹼容器	胰子盒兒／石鹼入れ。	胰子盒兒／石鹼入。
	架子／洗面台。	
刷牙散／齒磨	刷牙散／齒磨粉。	刷牙散／齒磨粉。
抽屜／抽斗	抽屜／抽斗。	抽屜裏／抽出
刷牙子／楊枝	刷牙子／楊枝	刷牙子／齒ブラシ。
		擦臉手巾／顔手拭。
		擦地板／居の間を拭く。
		疊好了／疊んでしまふ。
	不用／…するに及ばない。	
地板／床。	地板／牀板。	
	等…再／…してから、趕…再と同じ。	
枕頭籠布／枕覆。	枕頭籠布／枕覆。	枕頭籠布／枕カバー。
被單子／敷布。	被單子／敷布。	被單子／蒲團の皮。
		越嫩越好／柔い程よい。
		麵包／パン。
點心／輟耕錄に今以早飯前及飯に後 午前午後晡前小食為ニ點心トアリ朝 夕ノ飯ノ外ニ食フ物ヲイフ因ニ言フ 清國ノ俗大抵食事ハ一日二回ニシテ 其餘ニ朝夕ノ食前ニ饅頭ノ類ヲ食ス 之ヲ點心トイフナリ茲ニテハ假ニ朝 飯ト譯出スルモ場合ニヨリ菓子又ハ 下物ト譯ス。	點心／定まりたる食事と食事との間 に食ふ菓子などを云ふ、あひだぐひ、 胸に點ずるの意、中國にては大抵食事 は一日二回にして、其餘は朝夕の食事 の間に饅頭の類を食ず、之を點心とい ふなり、今假に朝食と譯す、蓋し西洋 式に朝、パンなどを食するに類すれば なり。	
雞子兒／雞卵。	雞子兒／雞卵。	
	越…越／すればする程。	
抹上／塗り過ク。	抹上／塗り付ける。	抹上／塗る。
黄油／幹酪。	黄油／乾酪。	黄油／バター。
烤／燒キ過ク。	烤／こがす。	烤／灸る、燒く。
		烤糊了／（灸り）こげた。
		匙子／さじ。
		倒來了／ついで来ました。
		臉盆架子／洗面臺。
		鹽盒兒／鹽入れ。
	糊／こがす。	
		煮的是筋斛兒／よい好減に煮へた。
斛節兒／恰好ノ加減	筋斛兒／恰好の加減、又斛節兒とも云 ふ、斛は節に同じ。	
		牛奶／牛乳。
		總攪多一半兒水／半分以上水が雜つ

		て居る。
攪／掻キ混ゼル。	攪／混ぜる。	
也許／或者也、事ニヨレバノ意。	也許／或は…かも知れん。	
		也許有這個事／そう云ふことがあるかも知れない。
胡攪亂對／無暗ニ掻キ混ゼ妄ニ差ス。	胡攪亂對／無暗に混ぜたり、やたらいたしたりする、對はたす。用例、這開水太熱對一點兒涼水（この湯はひどく熱いから水をたせ）。	胡攪亂對的／無暗に（水を）割る。
	論斤／斤目で物の値段を言ひ表はすこと。	論斤／斤賣りする。
		論瓶／瓶賣りする。
		論碗／碗賣りする。
		撤了去罷／（お膳を）下げなさい。
	撤了去／取下げ。	
	送信去／消息（手紙に限らず）を傳へる。	
		要上某老爺屋裏去／サンのお宅へ伺ふ。
使令通話第4章		
	知道了／承知した。	
磨蹭着／愚圖ツイテ。	磨蹭着／ひまどる、愚圖愚圖する、磨はみがく蹭はこする。	磨蹭著／グウグズする。／（註）。你別磨蹭啦、趕快去吧。
		送煤的／石炭の配達人。
煤球兒／炭團。	煤球兒／炭團。	煤球兒／炭團、練炭、豆炭。
		我邀了邀／私が目方を量りました。検斤しました。
		耽誤／暇がかかった。
邀／量ル、秤也	邀／大きな秤で量ること。	
	開帳／勘定書をかく。	
	查了一查／調べた。	
	摺子／折本になつた通帳。	
	為這個／このために。	
	吊／北京に手は、我が寛永通寶の二厘錢位のを四十九個又は五十個を一吊といふ、我が十錢位に當る。	
	開飯／食事にする。	

	雞湯／湯は凡て汁のこと、ゆにあらず。	雞湯／鶏肉のスープ。
		把油撇淨了／油を掬ひ取る。
		盛飯／御飯を盛る。
	撇／はねるやうにしてすくひ取ること。	
		合口味／（味が）口に合ふ。
開來／認め來タル		
錘子／肉刺。	插子／肉刺。	錘子／ホーク。
	匙子／しゃぢ。	
七星罐兒／藥味入	七星罐兒／藥味入。	
碟子／鉢	碟子／小皿。	
盤子／皿	盤子／大きな皿。	
筷子／箸	筷子／箸。	
提醒／提ハ言ヒ出ス意醒ハサスニテ付クル意。	提醒／提は言ひ出す意、醒は覚醒する意、言つて思ひ出させる。	
忘死了／全ク忘卻ス。	忘死了／すっかり忘れてしまった。	
芋頭／芋。	芋頭／さと芋。	芋頭／里芋。
	巧了／多分。	
木魚／鯉節。	木魚／鯉節。	木魚／鯉節。
	遞給我／おれに手渡ししてくれ。	遞給我／取次いで下さい。
芥末／芥。	芥末／粉からし。	芥末／からし。
哎呦／オヤオヤ。	哎呦／オヤオヤ。	哎呦／オヤオヤ。
拐躺下／引倒シタ。	拐躺下／引つかけて倒した。	拐躺下／（物を）引かけて倒す。
振布／拭巾。	振布／拭巾。	振布／布巾，雑巾。（註）擦去骯髒の布。
地板／床。		地板／板の間を拭く。
幹事／用事ヲスル。	幹事／用事をする。	
忙忙叨叨的／粗々ツカシイ。	忙忙叨叨的／粗々つかしい。	忙忙叨叨的／そそつかしい。
		湛新的台布／新しいテーブル掛。
湛新的／真新シノ。	湛新的／真新しい。	
		哦連半片的／シミだらけになる。（註）骯髒。
哦連／湯水漬痕也。	哦連／しみ。	
	半片／よつぼど澤山。	
饒恕／宥恕。	饒恕／宥恕する。	饒恕／怒す・勘辨する。
鹹菜／鹽漬。	鹹菜／鹽漬。	鹹菜／漬物。

	醃／漬ける。	
		醃白菜／白菜の鹽漬。
		七星罐兒／薬味入れ。
		碟子／皿。
		筷子／箸。
		我直想不出來／私にはどうも思出せません。
		提醒我罷／仰有つて下さい。御注意下さいまし。(註) 提補。
		直忘死了／すっかり忘れて居ました。
		芋頭／里芋。
	醬豆腐／味つけ豆腐。	醬豆腐／味噌にて作りたる豆腐。
		醃黃瓜／黃瓜の鹽漬。
		招點兒醋／少し酢をかける。
	招／かける	
牙籤兒／ツマ楊枝。	牙籤兒／ツマ楊枝。	牙籤兒／妻楊子。
使令通話第5章		
		隆福寺／隆福寺。
逛廟去／縁日へ行く。	逛廟去／縁日へ行く。	逛廟去／縁日へ行く。
	初九／九日、舊曆にては十日迄は初を附ケテいふ、新曆にては一號二號といふ。	
	約會／約束する。	約會／約束する。
西國的衣裳／西洋服。	西國的衣裳／洋服。	西國的衣裳／洋服。
氈子／羅沙織、毛織。	氈子／羅沙織、毛織。	氈子／羅沙、毛布。
布／亞馬、リンネル。	布／布は普通には木綿のこと、此處にては亞麻、タンネル。	
原青的／黒ノ。	原青的／黒の	
		原青的絨褂子／黒羅紗の上衣。
	絨褂子／褂子は上衣、絨は羅紗、絨は多くはネルを云ふ	
		藍白線兒的布褲子／藍縞のリンネルズボン。
藍白線兒的／藍縞。		
坎肩兒／短胴衣。	坎肩兒／短胴衣。	坎肩兒／チョツキ。
汗褌兒／襯衣、褲絆。	汗褌兒／襯衣、褲絆。	汗褌兒／シアツ。
鈕子／釧。	鈕子／釧。	鈕子／カフスボタン・ボタン。
領子／襟。	領子／襟、カラー。	領子／カラー。
		水晶／水晶。

		漿的這麼軟／糊付の仕方が柔い。
		泥也沒洗掉／垢も落ちて居ない。
漿得／糊ノシカタ。	漿得／糊のつけ方。	
泥／垢	泥／此處にては垢のこと。	
洗掉／洗ヒ落ス。	洗掉／洗ひ落す。	
	翻過來／ひつクリかへす。	
		翻過來熨的／裏返して火熨斗がかけてある。
粉子漿／糊粉。	粉子漿／糊粉。	粉子漿／糊。
噴上／吹キカケ	噴上／吹きかける。	
		噴上水／水を吹きかける。
		拿熨斗熨一熨／火熨斗で延ばす。
		周正／切目正しい。(註) 平常、拿熨斗熨就周正了。
		靴子／靴。
短靴子／半靴。		短靴子／半靴。
襪子／靴足袋、靴下。	襪子／靴足袋、靴下。	襪子／靴下。
丫頭／下婢。	丫頭／下婢、髪を了の字形にゆふによつて此名あり。	丫頭／下女。
補釘／フセギレ、ツギノキレ。	補釘／つぎ切れ。	補釘／ふせぎれ。
		補上／(伏せ切れで) 伏せをする、繕ふ。
		服侍／手傳ふ。
鞋拔子／穿靴匙。	鞋拔子／鞋べら。	鞋拔子／靴べら。
褲腳兒／袴ノ裾。	褲腳兒／袴の裾。	褲腳兒／ズボンの裾。
給往下／下ノ方ニ。		
	往下／下の方に。	
		攞一攞／伸き延す。
攞／引下ク。	攞／引下げる。	
手帕子／ハンカチチーフ。	手帕子／ハンカチチーフ。	手帕子／ハンカチ。
烟荷包／煙草入。	烟荷包／煙草入。	烟荷包／煙草入。
		脫下來／(着物を) 脱ぐ。
		疊起來／畳む。
縦着／皺ガヨル。	縦着／皺がよる。	縦着／(着物の) 皺がよる。
	舒展開／舒はのばす、展開はひらく。	舒展開／綺麗に延びた。(註) 把摺疊的放開、把皺的弄平。
	舒坦／平にのばす。	
	竟等着／ひたすら待つて居る。	
		得拉一拉／引張る。

使令通話第6章		
	回老爺／回稟老爺に同じ。	回老爺／旦那様に申し上げます。
交民巷／北京城内ノ地名各國公使館ノ在ル處ナリ。	交民巷／北京城内の地名、各國公使館のある一劃をいふ。	交民巷／交民巷。
	琉璃廠／北京外城内にて本屋骨董屋等多くありてかなる處。	
	莫若／…に若かず。	
一送兒／往キノ片道。	一送兒／往きの片道。	
車箱兒／馬車ノ箱。	車箱兒／馬車の箱。	車箱兒／馬車の胴。
站口子的車／辻待車。		站口子的車／辻待車。
宅門兒的車／邸付ノ車、自用車。		宅門兒的車／自家用車。(註) 宅門子、顯貴或財主人家。
跑海的車／一定ノ場處ニテ客待チセズ彼處此處ト引廻リ乗客ヲ求メル車。		跑海的車／流しの車。
		騾子／騾馬。
套出來／車ヲ仕立ツヲ言フ。		
車圍子／車ノ幌。	車圍子／車の幌。	車圍子／カマボコ馬車の周圍を蔽ふ布。
車褥子／車中ノ褥。	車褥子／車中の褥者。	車褥子／馬車の敷物。
		跟去／お供する、随ひて行く。
		跨在車沿兒上／車の脇に跨る。(註) 跨轅兒、坐在轎車の外邊兒。
應時對景的／時候ニ適ヒ又流行ノ格好	應時對景的／時候に適ひ又流に合ふもの。	應時對景／最新流行のもの。
傍帳兒／車篷兩側窗沿摺帳也、今假ニ窓ノ日覆ト譯ス。	傍帳兒／馬車の兩側にある窓の日覆と譯す。	傍帳兒／幌馬車の小窓の日覆。
力把兒頭／不熟練ナ人間。	力把兒頭／不熟練な者。	力把兒頭／不熟練の者。(註) 劣把兒、外行、劣把兒趕車、翻啦。
踐窩裏頭／車轍ノ窪處。	踐窩裏頭／車轍の窪處。	踐窩裏頭／車轍で窪んだ處。
頭暈眼花／頭痛眩暈。	頭暈眼花／頭痛眩暈、眼花は眼がまはること。	頭暈眼花／目まひする。
		坐車的／車に乗つて居る者。
屁股蛋／臀、尻コブシ。	屁股蛋／臀、尻こぶし。	屁股蛋兒／臀部。
好手／上手、熟練者	好手／上手、熟練者。	

車沿兒／車ノ脇。	車沿兒／車馬の前部の馭者の乗る處。	
		晒住了／踏まへる。
		棍子／ステツキ。
		掖在櫃子底下／敷物の下にはさむ。
花洋毯子／縞毛布。	花洋毯子／縞毛布。	花洋毯子／模様のある毛布。
官帽／禮貌ナリ。	官帽／禮貌。	
板櫪兒／踏臺、腳夾。	板櫪兒／踏臺。	板櫪兒／踏臺。
吆喝／馬ヲ馭スル語。	吆喝／御者が馬を馭する言葉。	吆喝罷／さあ出しなさい。
使令通話第7章		
用功／勉強	用功／勉強	
	讓他進來／案内して通す。	
凳子／腰掛。	凳子／腰掛。	
煙盤兒／烟草盆。	煙盤兒／煙草盆。	煙盤兒／烟草盆。
	吩咐／言ひ付ける。	
		熬一點兒／少し煮る。
	不必／…するに及ばない。	
熬／炊也	熬／炊く。	
	粳米／うる米、もち米は糯米。	
		粳米粥／粳米（うるち）の粥。
		爛爛兒的／柔かく。
		米粒兒／飯粒。
		弄碎了／碎ける。
	爛々的／煮えくづれた。	
	弄／いじる。	
	不稀不稠／稀はうすい、稠はこい。	不稀不稠／薄くもなく濃くもなく。
勻溜的／ムラナク煮エタル貌。	勻溜的／勻はむらなく一樣この意、溜は汁多く煮ること。	勻溜的／丁度よい加減。
	被窩／かけ蒲團	被窩／掛蒲團
	蓋一蓋／かぶせる、ふたをする。	
		往上蓋一蓋／（蒲團を）もつと上の方へかける。
這陣兒	這陣兒／今時分、今頃。	這陣兒／只今。
		插在那個汝窑花瓶／その汝窑花瓶にいける。汝窑は河南省の府城である。
汝窑／河南省ノ汝窑府ヨリ産スル燒物。	汝窑／河南省の舊汝寧府、今の汝南縣より産する燒物。	
沉／重也	沉／沈に同じ、沈重の意、重い。	

		覺着沉／（頭が）重い。
	悪心／胸もちがわるい。	悪心／吐氣／催す。
	名片／名刺。	名片／名刺。
	出馬／醫者の往診を出馬といふ、昔往診の際馬に乗りたるに起る。	
撲空／不在ノ處ニ行き合ハス意。		
	出名的／有名なる、有名的ともいふ。	
	靈／靈驗あるをいふ。	
	瞧病／病氣を診察すること、病氣見舞をもいふ。	
	撲空／不在の處に行き合はすこと。	
	也使得／…でもよろしい。	
		醫道／醫術。
	行…醫道／醫術を行ふ	
		醫藥靈極了／薬がよく効く。
		撲空／先方の人が不在の為め徒勞になる
		行本地的醫道／支那の醫術を行ふ。
施醫院／宗教ノ機關トシテ西洋人ノ設立シタル病院ダツヂョン市。	施醫院／布教の機關として西洋人の設立したる施療病院。	施醫院／施醫院。
	徳大夫／西洋醫者の姓の漢譯。	徳大夫／ダツヂョン先生。
	治／治療する。	
	巧極了／巧了は丁度、極めて都合よい。	
	望看／訪問する。	
		那不很妙麼／それが好都合ではありませんか。
	造化／幸福なる。	造化／幸ひ、仕合せ。
	三賓酒／シャンペンノ翻譯。	三賓酒／シアンパンの酒。
紅酒／葡萄酒。	紅酒／葡萄酒。	紅酒／葡萄酒。
	瞧有甚麼…拿甚麼／見てあるものは何でも持つて来い。	
酒鑽／木栓拔。	酒鑽／瓶の栓拔。	酒鑽／（酒瓶の）栓拔。
榻板兒／棚。	榻板兒／棚。	榻板兒／棚。
趕錐／螺旋廻、捻釘拔。	趕錐／螺旋廻し。	趕錐／罐切。
	斟酒／酒を斟する。	

烟捲兒／捲烟草。	烟捲兒／捲煙草。	烟捲兒／卷煙草。
		送送／お見送りする。
		開甚癡酒／どんな酒を出しませうか。
麪子藥／散藥、粉藥。	麪子藥／散藥、粉藥。	麪子藥／粉藥。
務必／ナルベク。	務必／なるべく。	務必／是非共。
		臨睡的時候／就寝の時。
		忌生冷／生物と冷い物を差控へる。 (註) 沒煮和不熟的食品。
		喝粥／お粥を食べる。
		梨／梨。
	忌／いむ、きらふ。	
生冷／生モノト冷ヘシ物ト。	生冷／生物と冷へた物。	
	服侍／介抱して。	
使令通話第8章		
轎子／轎。	居庸關／北京の西北萬里の長城より關外に出づる關所、兩山對峙し懸崖峭壁の難處、天下九塞の一と稱せらる。	居庸關／居庸關。
		遶到西山去／西山に立寄る。
	順便／ついでに。	
	遶まはり道をする。	
	景致／景色。	
	赴湯投火／湯に飛び込み、火に投ずる場合でも。	
	轎子／轎。	
	牲口／家畜、多くは馬に乗る。	
太太／妻 (敬稱)。	太太／奥様、下僕に對するが故に太太といふ、對等又は上長に對しては内人とか賤内とか云ふ。	
怎麼呢／何故トナラバ。	怎麼呢／何故とならば。	
	起身／出發する、動身に同じ。	
	店／宿屋。	
想不到／思ヒ掛ケナキ。	想不到／思ひ掛けなき。	
	走動／便所にゆく。	走動／大小便をなす。(註) 解手兒。
娘兒們／婦人等。	娘兒們／婦人等。	娘兒們／婦人。
走路／旅行	走路／旅行。	
馬桶／便器、假ニオマルト譯ス。	馬桶／便器。	馬桶／携帯便器、おまる。
竹杆子／竹杭。	竹杆子／竹の竿。	竹杆子／竹竿。

	住下／宿屋に泊まる。	
		拵起來／張りめぐらす。
拵起／力、グ。	拵起／かかげる。	
帳房／天幕。	帳房／天幕。	帳房／天幕、テント。
		茅廁／便所、廁。
	別説是／之は言ふまでもなく。	
	倘或／若し。	
		赴湯投火／火の中でも水の中でも行く。
		轎子／轎。
湯山／温泉場ノ地名。	湯山／温泉場の地名。	
		先雇停當了／先に雇つて置く。
雇停當／雇極メテ置クヲ言フ。	雇停當／雇極めて置く。	
簍子／竹籠。	簍子／竹籠。	簍子／竹籠。
	為得是／…の爲めである。	
操心／心配の意。	操心／心配する。	操心／心配する。
	歸着／荷造りをする。	
	單雇／ただ一つ雇ふ。	
	照看／世話をする。	
		照看着／番をする、目くばせをする。
使令通話第9章		
好容易／漸クニシテノ意。	好容易／やつとのことで。	
	租／家を借りること。	
	房錢／家賃。	
	齊化門／北京内城の東門、明朝の朝陽門、清朝之を齊化門といふ。	齊化門／齊化門。
日壇／天子太陽ヲ拜セラル、高臺ナリ。	日壇／天子太陽を拜せらる、高臺なり。	日壇／皇帝の太陽を禮拜せらる祭壇。
正房／奥座敷。	正房／奥座敷。	正房／奥座敷、重家。
廂房／正房ノ左右直角ニ建テラレシ所謂庇間ヲ言フ。	廂房／正房の左右直角に建てられた家。	廂房／正房の左右に在る家。
倒座兒／正房ニ對シ中庭ヲ隔テ中門ヲ後ニシテ建テラレシ一棟ヲイフ門ニ對スル方ニ入口ナクシテ正房ニ對スル方ヨリ出入スルヲ以テ此稱アリ。	倒座兒／正房に對し中庭を隔て中門を後にして反對の向に建てられし一棟をいふ、門に對する方に入口なくして正房に對する方より出入するを以て此稱あり。	倒座兒／正房と向ひ合ふ北向の家。
		東嘎拉兒／東の片隅。

嘎拉兒／隅又ハ角ノ意。	嘎拉兒／隅又は角の意。	
	挪過去／挪は移す。	
	好算／計算し易い。	
	零碎／こまこましたもの。	
		月頭兒／月初。
地毯／毛氈又ハ氈絨。	地毯／毛氈又は氈絨。	地毯／氈絨（註）用來鋪在床上桌上或地下的一種東西，用氈或絨做的。
	網上／くくる。	
	書隔子／書棚。	
	粗重的／粗は大きな。	
	挑／選ぶ。	
		捲起來／巻き付ける。
		網上／しぼる。
皮刺的／丈夫ニ壞ル、憂ナキ者。	皮刺的／丈夫で壞はれる憂ないもの。	皮刺的／丈夫な品物。
		散擱着／假りに置く。
		調度／見計らふ。
	挑／かつぐ。	
	倒／却つて。	
	磁器／瀬戸物、陶器は釉藥をひかないもの。	
		拿紙包上／紙で包む。
床／寢臺。	床／寢臺。	床／寢臺。
		不好搭／（車に）積みにくい。
	搭／のせる。	
	卸下來／おろす、取外づす	卸下來／（寢臺など）分解する。
	安上／組み立てる。	
帳子／蚊帳ノ類。	帳子／蚊帳ノ類。	
照舊的／元ノ通りニ。	照舊的／元の通りに。	
揸上／吊り掛ク	揸上／吊り掛ける。	揸上／しぼる。
		對聯／對句の懸軸
扁幅／扁額。	扁幅／扁額。	扁幅／横額。
		拔下來／抜き取る。
嘿嘿／急戒口氣。	嘿嘿／急に呼び口氣。	嘿嘿／オイオイ。（注意を促す言葉）
	牆／かべ。	
	掉下來／おちる。	

鉗子／釘抜。	鉗子／釘抜。	鉗子／釘抜。
鎚子／鎚子。	鎚子／金槌。	鎚子／金鎚。
		唵／オイ、コラ。(注意を促す言葉)
	磨傷／こすつて傷をつける。	磨傷／(道具に) すり傷をつける。
	鋪上／しく。	
	地毯／敷物。	
	暫且／しばらく。	
	散擱着／ばらばらにして置く。	
弄不了／扱ヒキレズ、為シキレズ。	弄不了／扱ひきれない。	弄不了／出来ぬ・手が廻らぬ。
	夥伴兒／仲間	夥伴兒／捧輩、友達。
	幫着／手傳ふ。	
	儘這一天／今日中に、「儘一年」は満一年。	儘這一天／今日中に。
		挪過去／引移る。
使令通話第10章		
		曬曬／天日に乾す。(註) 擱在太陽光裏使他乾燥。
	曬／日にさらす。	
	拴／しばる。	
	那棵樹／棵は株、木樹の數を表はす、あの木。	
	搭／かける。	
	皮箱／支那鞆、トランク等を云ふ。	
		柱子／柱。
		搭在繩子上／繩へかける。
		搭出去／持ち出す、運び出す。
	搭出／この搭は勾引の意、ひき出す。	
搭在／掛ケ置ク		
鑰匙／鍵。	鑰匙／鍵。	鑰匙／鍵。
自各兒／自身。	自各兒／自身。	
	衣架子／着物掛け。	
		皮褂子／毛皮の衣類。
	皮襖／毛裏の長上衣、真中にて合はせるもの、長短種々あり。	

斗篷／インバネスコート如キ者假ニ廻シ合羽ト譯ス。	斗篷／合羽、引廻し。	斗篷／引廻し。
		背陰兒地方／日蔭の場所。
背陰兒／日陰。	背陰兒／日陰。	
晾晾／蔭乾シ。	晾々／蔭乾しする。	晾晾／蔭乾しする。(註) 放在風前吹乾、把衣服晾在院子裏。
抖擻／振フ意。	抖擻／振ふ。	抖擻／(塵を) 拂ふ。(例) 衣裳上盡是雪、趕快脱下來抖擻抖擻。
		曬上／日に乾す。
	難道／なんとまあ。	難道／まさか…でもあるまい。
毛梢兒／毛尖。	毛梢兒／毛尖。	毛梢兒／毛尖。
		控到那棵樹上去／あちらの樹の方へくくり付ける。
		焦了／(天日に) 焦る。
		找根棍兒穿上／木切れを捜して(それに) 通す。
棍兒／木ノ切	棍兒／木の切れ。	
抖晾抖晾／風ヲトホス。	抖晾抖晾／風をとほす。	抖晾／風をとほす。(註) 衣服晾在風中吹乾。
袂衣／袷衣		
	袂的／袷衣	袂的／袷。
棉的／棉衣裳棉入	棉的／棉入	棉的／棉入
		從這一頭兒搭起／この端から(着物) をかける。
	搭起／かけ始める。	
磕打／叩ク。	磕打／叩く。	磕打／叩く(箱或はカバンの中の塵を拂ふのに裏返して)。
寶色／光澤。	寶色／光澤。	寶色／光澤。
	翻一翻／ひっくり返へす。	翻一翻／裏返しにする。
		倒一倒／取り替へる。(乾したものと、乾きぬものと)
	向陽兒／日に向ける。	向陽兒／日に當てる、陽に向ける。
		把他弄完了／(その仕事を) 片付けて…。
		等太陽壓山兒的時候／太陽が山に入る頃。
	弄完了／してしまふ。	
	壓山兒／日西山に。	

	不差甚麼／大概。	
	透透風／風をとほす。	透透風／風を通す。
		羊毛織的東西／羊毛織のもの。
		把暑氣藏在裏頭／熱のあるまま（箱の）中に入れる。
		そ那可就都糟了／うすると皆臺なしになる。
		一層一層兒的／一重毎に…。
		墊上紙／紙を敷く、紙を當てる。
	暑氣／熱氣。	
	糟了／わるくなる、壞了と同じ。	
綢子／紋縮緬。	綢子／紋縮緬。	
緞子／縐子。	緞子／縐子。	
墊上／挟ミ入ル。	墊上／挟み入れる。	
潮腦／樟腦。	潮腦／樟腦。	
		上下潮腦／樟腦を上と下へ置く。
	包袱／風呂敷。	
	蓋上／かぶせる。	
	掖嚴了／きつちりはさむ。	掖嚴了／空き間をよく詰める。
	走了／なくなる。	
		蓋上蓋兒／蓋をする。
繞起來／廻ラス。	繞起來／巻く。	繞起來／繩を手繰る。
堆房／物置部屋。	堆房／物置部屋。	
		樑上／梁
	廢物／役に立たない奴。	廢物／役に立たない人間の意。（註） 沒有用處的東西。
		用心的教給你／よく教へてやる。
		左底邊／左の裾
		折在上頭／上に折り重ねる。
		合上／合せる。
	沒記心／記隱がわるい。	
	疊上／たたむ。	
	擱／引つばる。	
領子／襟。	領子／襟。	
摩沙平／摩ヲ延ス。	摩沙平／摩で延ばす。	摩沙平了／摩で伸す。（註）用手摩撫。
使令通話第 11 章		
	請客／客を招待する。	

		定地方去／場所を決めに行く。
		打算着／…の心算りで居る。
飯莊子／上等ノ料理店也。	飯莊子／上等の料理屋、高等料理店などと譯す。	飯莊子／料理店。(規模の大きい。)
飯館子／普通ノ料理店也。	飯館子／普通の料理屋。	飯館子／料理店。(小規模)
	成桌的／料理を一テーブル幾らとして値段をきめるもの。	成桌的／テーブル料理、會席料理。 (註)一桌一桌的酒席、不是零碎點的。
	零要／テーブルきめでない一品つつ取ること。	零要／一品料理、随時に注文する料理。
	八大碗／大碗に盛った料理八個。	
	冷葷／冷はつめたい、葷は原来なまくさき物の意、冷葷とは薑絲肉、干貝、海蟹、香腸の如きものをいふ。	
		四冷葷／四種の冷肉を盛る前菜。
	小吃兒／一寸した食物。	小吃兒／突出し物、小鉢料理。
	現做／そこでつくらせる。	現做／注文の都度拵へさせる。
	清淡的／さつぱりしたもの。	清淡／あつさりしたもの。
葷／臭菜也、醒キ物ヲ言フ		
		不膩的／くどくないもの。(註)菜裏油多而覺得有粘性。
油膩的／油濃イ物。	油膩的／油濃イ物。	油膩／油濃イ
	合口味／口に合ふ。	
	叫不上來／呼び上げられない。	
		斟酌着定／適宜に眺へる。
	斟酌着／斟酌して	
黄酒／南清地方ヨリ釀出ス特ニ浙江省紹興府ヨリ出ツルモノ最モ名アリ造酒ノ原料ハ粟ナリ。	黄酒／南清地方より釀出し特に浙江省紹興府より出づるもの、依て紹興酒といふ、原料は粟なり。	黄酒／黄酒
燒酒／高粱ヨリ製セル燒酒ナリ重ニ北清ニテ釀造ス。	燒酒／高粱より製する燒酒なり、重に北清にて造る。	燒酒／燒酒
聽戲／戲ハ演劇ナリノハクコトニキヲクニトイフナリ。	聽戲／戲は演劇なり支那の演戲は聴くことに重きを置く、故に聽戲といふ。	聽戲／芝居を見物する。
		照那麼辦／その通りにする。
官座兒／高棧敷。	官座兒／高棧敷。	官座兒／棧敷。

	定卓子／支那の劇場にて普通の観覧席は腰掛て机に凭り観劇す、故に卓子といふなり。	定卓子／平場席を取る。
	吃柱子／柱で見物に邪魔になる。	
		不吃柱子的地方／柱で目觸りにならぬ場所。
卓子／支那ノ劇場ニテ普通ノ観覧席ハ腰掛ニ凭リ観劇スルナリ故ニ卓子トイフナリ。		
		上場／役者の登場口。(舞臺面の左口)
		下場／役者の降場口。(舞臺面の右口)
下場、上場／舞臺ヨリ見テ右方ヲ下場トシ左方ヲ上場トス。	下場、上場／舞臺に向つて右方を下場とし左方を上場とす。	
鑼／銅鑼。	鑼／銅鑼。	鑼／銅鑼。
		定菜／料理を誂へる。
討厭／厭忌スル意。	討厭／いやな。	討厭／うるさい。
		衆位／皆さん。
		叫不上來／説明が出来ぬ。(實物を知り乍ら。
對面兒／對ヒ側。	對面兒／向ヒ側。	對面兒／向ヒ側。
	相公／一種の役者、下に説明あり。	相公／酒席に侍す青年俳優。
		陪客／お客様にお相手する。
戲臺兒／舞臺。	戲臺／舞臺。	戲台／舞臺。
		小戲子／子役。
	戲子／役者。	
	長得／生れつき。	長得／容貌、風采。
	標緻／きりやうよし。	標緻／美貌。
		這麼項人／そう云ふ人。
		唱戲／芝居を演ずる。
		發一個條子／(藝妓などの)呼出狀を出す。
條子／書付、片楮也。	條子／書付。	
	有趣／面白い。	
		很助酒興／大層酒興を添へる。
	武戲／凡て演劇を文武兩戲に分つ、文戲は唱に重きを置き、胡弓を中心とす、武戲は武技に重きを置き板鼓を中心とす。	武戲／武勇傳などを仕組んだ劇。

	梆子／劇に調子によつて種々の名稱あり、梆子は粗野なる方の調子なり。	梆子／梆子。
		文戯／世話物芝居。
	二黄／又皮黄ともいふ、聲調の婉轉たる方なり。	二黄／二黄。
		三慶／三慶。
	三慶四喜／共に官設の劇場の名。	
		四喜／四喜。
	跑堂兒／料理屋の給仕人をいふ。	跑堂兒的／料理屋のボーイ。
		戯價／觀劇料。
使令通話第 12 章		
合／當ル。	合／當る。	
銀盤兒／銀相場。	銀盤兒／銀相場。	銀盤兒／銀相場。
		珠寶市／珠寶市。(地名)
		銀市／銀市場。
長／騰貴。清早	長了／騰貴して。	
	行市／相場。	
	前門／北京内城正南の正陽門のこと。	
清早／早朝。	清早／早朝。	一清早／早朝。(註) 一早。
市上／市場。	市上／市場。	
		錢數的／金額。
九城的／北京内城九門アリ故ニイフ城内即チ京中ノトイフ意ナリ。	九城的／北京内城に九門あり、故に城内即ち京全體のことを九城的といふ。	九城的／北京内城に九門あり即ち北京城内を云ふ。
	通行／普通の相場では。	通行／通用する。
七錢／一匁ヲ一錢トイフ。	七錢／一匁を一錢といふ。	
		貿易的洋錢／貿易銀。
鷹洋／墨西哥銀貨。	鷹洋／墨西哥銀貨、鷹のかたあるによりかくいふ。	鷹洋／メキシコドル。
一圓的／上海ノ圓銀、日本ノ一圓銀貨何レニモ通ズ。	一圓的／上海の圓銀、日本の一圓銀貨何れにも通ず。	
	票子／紙幣、手形。	
	這宗／この様な、這麼様に同じ。	
	簡直的／すつかり。	
	一整張／一枚きつちり五十吊文也の札	
	現錢／現金。	
	磨／さがす。	

	靠得住／あてになる。	
		磨別處的／他店のものを混ぜる。
		黠點／（金子を）數へる。
四恆家／東西牌樓ニアリ明朝ノ永樂年間ヨリ繼續セル有名ナリ銀行ナリ。	四恆家／東西牌樓にあり、明朝の永樂年間より繼續せる有名なる銀行なり。	四恆家／北京にて最も古き両替店である、恆利、恆興、恆源、恆合の四軒を總稱す。
使令通話第13章		
郷下／田舎。	郷下／田舎。	
		本家的哥哥／本家の兄。
搭出去／連出シ行き。	搭出去／伴つて行く。	搭出去／伴れ出す。
	説了會子／會子はしばらく、會見よりは長い時間。	
	半天／よつぽと長く。	
	不像話／不合理な話、不都合な話。	
	大意／小心の反對。不注意な。	
告假／暇ヲ乞フ。	告假／暇を乞ふ。	
		稟知／申上げる、挨拶する。
		回家瞧病去／家へ病氣見舞に歸る。
		謊假／虚言を云つて暇を貰ふ。
	瞧病／病氣見無。	
	告謊假／うその暇を乞ふ。	
天胆／大膽。	天胆／大膽。	天膽／生来大膽なること。
	咒／のろう。	咒／咒ふ。
不礙事／大事ナシ。	不礙事／大事なし、差支なし。	不礙事／差障りがない・心配なことはない。
	萬一／萬一。	
		有個好歹／萬一のことがあつたら、異常があつたら。
好歹／好ハ甚ノ意甚不好也。	好歹／好はよし、歹は悪し、此場合好に意味なし、例へば怨望は怨むの意にて、望には意義なきが如し。	
	替工／かはり、代人。	替工／代りに仕事をする者。
		法國府／佛蘭西公使館。
		不像話／道理に合はね言葉。（註）話不合理、豈有此理、這太不像話。
		大意／ずるい行為。（註）疏忽而不留神。

		告假／暇を貰ふ。
	幾口煙／煙は阿片、幾口は少しの意。	
		吃幾口烟／少し阿片を嗜む。
	放／放ちやる。	
		代管／代理をする。
		肯放小的去／私を歸らせて下されば…。
		趕出城去／急いで城外に行く。
	趕出／馬車にのつて出ること。	
愣着／呆着也。	愣着／ぼんやりして居る。	愣着／ボンヤリして居る。
	工錢／給金。	
	賞給／褒美にやる。	
	謝恩典／恩恵を謝す。	
棧過來／探シテ来テ。	找過來／探して来て。	棧過來／呼んで来る・伴れて来る。
燈罩子／洋燈ノ罩。	燈罩子／洋燈 ^{ホヤ} の罩。	燈罩子／ランプのホヤ。
		照樣兒配一個來／それと同じものを一つ買つて来る。
	配／合はせる、合ふのをさがす。	
使令通話第 14 章		
		上屋裏／客間。
棚／天井也、凡ソ北支那ニ於ケル家屋ノ天井ハ一面ニ黍殼若クハ葦ヲ縱横ニサシ渡シ之ヲ絲ニテ巧ニ結ヒ付ケテ張下トナシ彩色セル紙ヲ以テ一面ニ貼付ス、故ニ一見精巧ナル書壁ナルカヲ疑ハシムルナリ抑北支那ノ野ニ殆ド降雨ノ絶無ナルト木材ノ缺乏ナルトノ二原因ハ以テ如上ノ天井ヲ北支那ノ地ニ見ル所以ナリ。	棚／天井をいふ、凡そ北支那に於ける家屋の天井は、黍殼若くは葦を縱横にさし渡し、之を絲にて巧みに結び付けて張下となし、彩色せる紙を以て一面に貼付くるなり。	
捨掇／修飾也。	捨掇／ここにては修繕するの意。	
棚架子／前ニ記セル張下ヲ言フ。	棚架子／前に記せる張下を言ふ。	
犯潮／犯ハ發也、發濕氣也。	犯潮／犯は發するの意、濕氣を發する。	犯潮／濕氣。
	搭拉下來／だらつと下つて居る。	搭拉下來了／垂れ下がる。(註) 垂下來、他兩雙手都搭拉下來啦。
裱糊匠／表具師。	裱糊匠／表具師。	裱糊匠／表具師。
		糊糊／貼り付ける。
		收着／收つてある。

	銀花紙／銀色のかた紙。	銀花紙／銀模様の紙。
		好幾力／幾束（もある。）
刀／束也。	刀／束。	
底半截兒牆／壁ノ腰張。	底半截兒牆／壁の腰張。	底半截兒牆／壁の腰張。
		四面兒／（天井の）四方。
		藍條紙／藍色の細長く切った紙。
		擲淨了／綺麗に拂塵をかける。
	鑲上／ふちをとる。	鑲上／縁取りする。
秫稽／黍殻。	秫稽／きびがち。	秫稽／黍殻。
	紮／結び付ける。	
		紮架子／（天井の）張り下を作る。
	報結／結末を報ずる。	報結／出来る、完了する。
搭交手／足場掛ノ人夫。	搭交手／足場掛の人夫。	搭交手／足場を組む。（註）搭・架起來。
杪槁／丸太。	杪槁／丸太。	杪槁／丸太木。
鏡子／糊。	鏡子／糊。	鏡子／糊。
麵／粉。		
竹籤子／竹串。	竹籤子／竹串。	竹籤子／竹篋。
		藤繩／麻繩。
		蜘蛛網／蜘蛛の巣。
土／埃、塵。	土／埃塵。	
胡拉／拂フ意。	胡拉／拂ふ。	
		胡拉下來／拂ひ落す。
	榻扇／すかしのある衝立。	榻扇／襖、衛立障子の類。（註）一扇一扇像門的東西、排列起來、用來隔斷屋子的。
	擲／はたきではたく。	
墩布／竹ナドノ先ニ雜巾ヲ團クシテ結ビ付ケシモノ、高キ處ヲ拭フ時ナドニ用ルナリ。	墩布／竹など先に雑巾を團くして結び付けしもの、高き處を拭ふ時などに用ふ。	墩布／柄付の雑巾。
		蘸上水／水を濡らす。
	蘸上／水（又は其他液體を）をつける。	
		擲乾了／よく搾る。
		迎出去／出迎る。
		贖了牆／壁を汚す。
	贖了／きたなくなる。	
擯／少也、不足ノ意。	擯／不足する。	擯／不足する。

	將就着／暫らく我慢して。	
	打掃／掃除する。	打掃／掃除する。
	點一點／一つ一つ數へ調べる。	
	挪／移す。	
	安置／据置く。	
	打洗臉水／洗面水をとる。	
使令通話第 15 章		
炸／裂也、破壊。	炸了／こはれた。	炸了／（火熱で）こわれた。
	可不是麼／なる程。	
	點上／火をつける。	
燈苗兒／燈心。	燈苗兒／ランプの心。	燈苗兒／燈心。
	往大裏捻／大きくひねる。	往大裏捻／（燈火を）大きくする。
聽不進去／聽き入レル。	聽不進去／聽き入れない。	聽不進去／聽き入れぬ。
	沒記性了／覚えがわるい、沒記心とも云ふ。	
	不止／止まらず。	
	永遠／いつでも。	
		擱在心上／心に留める。
爐子／暖爐。	爐子／暖爐。	爐子／暖爐。
		撒火／火を焚かなくなる。
	弄／扱ふ。	
		剩煤／石炭の燃へのこり。
		不弄出來／取り出さぬ。掃除せぬ。
		不刷上黑色／黒いものを刷らぬ。
扔在／打捨アリトノ意。	扔在／打捨ててある。	
	堆房／物置部屋。	
	上了繡了／錆がついた。	上繡／錆が出る。
繡／錆。		
	許／…かも知れん。	
	着了／火がつく。	
	莫非／非るなきか。	
	滿嘴裏／口一杯に。	
	胡說／馬鹿をいふ。	
	混遮掩／混はごまかす、遮掩は掩ひか	

	くす。	
嘴哽／口剛情	嘴哽／口剛情	嘴哽／口強情。
瓢朝天碗朝地的／食器ノ散亂セル様ヲ形容シテイヘル語。	瓢朝天、碗朝地的／食器の散亂せる様を形容していへる語、瓢は杓杓子、朝は向く、杓子は上の方を向いて居り、碗は下の方を向いて居る。	瓢朝天晩朝地的／水柄杓は仰向きになり、晩飯は下向きになつて居る、即ち食器の散亂せる様を云ふ。
蒼蠅／蠅。	蒼蠅／蠅。	
俐羅／奇麗。	俐羅／奇麗にする。	俐羅／仕事をテキバキとする。(例) 把事情、都辦俐羅啦。
		小爐裏／火鉢、焜爐。
小爐子／火鉢ト譯ス。	小爐子／此處で火鉢と譯す。	
燒上／炭ヲ添ヘルヲ言フ。	燒上／炭を添へる。	
		使不得的東西／使へなくなつた品物。
培上／灰ヲ冠セルヲ言フ。	培上／灰を冠せる。	
扔／捨也。	扔／捨てる	扔／打捨てる。
有眼裏見兒／眼先ノ利ク人間氣ノ利キタル人間。	有眼裏見兒／眼先の利く人間、氣の利きたる人間。	有眼裏見兒／眼端が利く・氣轉がの利く。
		竟等着挨說／小言を云はれて許り居る。
		那還算人麼／そんなことで真人間と云はれるか。
		常愛／何時も…する癖がある。
		砸東西／物をこわす。
愛砸／イジクル。	愛砸／砸はたたくの意、又いぢくる愛は…したがる。	
		也不是事／それもよろしくない。
		這還像事麼／それもよいことと心得てゐるのか。
		堆着／積上げて置く。
		許着了／(火が) 燃付くかも知れぬ。
		應管的／受持の仕事。
		別滿嘴裏胡說／いい氣になつて馬鹿を云ふな。
		遮掩／隠しだてする。
		招了好些個蒼蠅／澤山な蠅がたかつてゐる。
		你別不認賬／お前白つばくれない。

像事／不都合ナキ事。	像事／不都合なき事。	
認帳／白狀。	認帳／白狀する。	
悄悄兒的／竊ニ、コツソリト。	悄悄兒的／窃に、こつそりと。	悄悄兒的／コツソリト。
	竟管／勝手に。	
		搜一搜／（物を）捜す。
	狡情／狡猾なる。	狡情／強情を云ひ張る。
	真贓實犯／真の盗品、實の犯罪物。	真贓實犯／證據物のある犯罪。（註） 真的犯人和贓證。
滾出去罷／轉ピ出口ト怒氣ヲ含ンデ 急調ニイフ詞。	滾出去罷／轉び出ると怒氣を含んで 急調にいふ詞、出でうせる。	你滾出去罷／お前出て行つてしまへ。 （註）滾蛋、拿人比蛋、叫他滾到別處 去、這是罵人的話。
	生氣／おこる。	
	寬恕／宥恕する。	寬恕／宥す。
使令通話第 16 章		
馬籠頭／韃ナリ、韃トハ馬ノ頭ニ掛ク ル組緒ノ稱ナリ。	馬籠頭／韃なり、韃とは馬の頭に掛く る組緒の稱なり。	馬籠頭／馬のオモガイ。
嚼子／轡。	嚼子／轡。	嚼子／轡。
鞍靴舗／馬具屋。	鞍靴舗／馬具屋、靴は鞍のかまはかざり の意。	鞍靴舗／馬具屋。
		近起來／近頃。
		鞍子／鞍。
		馬鐙／鐙。
肚帶／腹帶。	肚帶／腹帶。	肚帶／腹帶。
	沒有的話／そんなことはありません。	
		那一天都拾掇／いつも手入れをして みます。
鐵活／鐵物、カナモノ。	鐵活／鐵物、かなもの。	鐵活／金具。
磚麩子／研粉。	磚麩子／研粉。	磚麩子／磨粉。
腳底下／腳裏。	腳底下／腳裏。	腳底下／腳元。
	發軟／よはつた。	發軟／（腳元が）弱い、しっかりしな い。
		老愛／しよつ中…する癖がある。
前失／跪也、馬前蹄躓跌也。	前失／馬の前脚を折つてつまづく。	
		打前失／（馬が）前脚を折る。（註） 牲口向前跌倒、這驢老愛打前失。
馬掌／鐵蹄。	馬掌／蹄鐵。	馬掌／蹄鐵。
	釘錯了／釘をうち違へた。	釘錯了／打違へる。

	未可知/いまだ知るべからず。	
		獣醫椿子/家畜病院。
獣醫椿子/獣醫ノ宅、家畜病院。	醫椿子/獣醫の宅、家畜病院。	
	上臄/肥える。	
	就是了/だけのことである。	
臄/肥盛貌、肥胖長肉也。		
		上臄/ (男が) 肥へる、肉付く。(註) 牲口肥而毛有光澤、這匹馬上了臄啦。
餒/餌ヲ與へ養フ謂。	餒/餌を與へる、養ふ。	餒/餌を與へる。
		長肉/肉が付く、肥へる。
	包餒/馬夫に馬の食料を請負はせる。	包餒/馬の餌料を請負ふ。
麩子/糖。	麩子/麥粉の糠。	麩子/ふすま。
		黑豆/黒豆
紅高粱/アカキビナリ高粱ニハ紅黒二種アリナリ。	紅高粱/あかきび、高粱には紅黒二種あり。	紅高粱/高粱。
棒子/蜀黍。	棒子/蜀黍。	棒子/玉蜀黍。
		餒足了/充分餌を與へる。
馬棚/廄。	馬棚/廄。	馬棚/廄。
汪着/汪トハ停水セル謂ナリ。	汪着/水が溜つて居る。	汪着/ (水が) 溜っている
	我弄的/私がしたのである。	
	管洗澡房的/風呂番。	
澡盆/湯槽。	澡盆/湯槽。 ^{エフネ}	
		贖水/汚水。
溝眼/樋口、溝ノ水抜。	溝眼/溝の水抜。	溝眼/水のはき口。
	堵住了/つまつた。	
		堵住/つまる。
漾出來/溢レ出ズル意、漾水動搖貌。	漾出來/溢れ出つる。	
		水漾出來了/水が溢れ出る。
		通開/ (棒で) 突き通す。
		燒得了水/ (風呂の) 湯が沸いた。
		你先前頭走一步/お前一步先きに行け。
	胰子/石鹼。	
解手/大小便ヲ達ス。	解手/大小便をする。	解手兒/大小便をする。
		刷乾淨/綺麗にタワシで磨く。
溜滑的/ナメナメシタル。	溜滑的/ぬらぬらしたる。	溜滑/ (板などが) ナメナメする、ヌラヌラする。(註)

		非常的滑。
		凉水/水。
	對水/水をたす。	
	搓搓/こする。	
搓搓澡/石鹼ヲツケ擦ルコトヲイフ。		搓搓澡/背中を流す。(註) 在澡堂子裏洗澡、叫人在身上、擦去骯髒。
	油泥/あか。	油泥/垢。(註) 身體上的骯髒、一臉的油泥、還不洗洗臉。
使令通話第 17 章		
	歸着/片付ける、くくる。	
		多宗晚兒/何時。
多早晚兒/何日ノ意即チ多嗜トイフニ同ジ多嗜ハ元來多早晚兒音便ニテ轉訛セシモノナリ。	多早晚兒/何日の意、即ち多嗜といふに同じ、多嗜は元來多早晚兒の轉訛せしもの。	
		粗重的傢伙/荒物。
	粗重的/大きくて重いもの。	
	不咖/問ひ動詞を繰返へさずして否定して答ふる場合に用ふ。	不咖/イーエ、然うでない。
	拍賣/競賣、糶賣。	拍賣/競賣する。
賣/競賣、糶賣。 <small>セリウリ</small>		
連夜/徹夜。	連夜/徹夜。	連夜/夜通しする。
	打點/點檢する、しらべる。	打點/始末する。
騰空/内ニ在ル品物ヲ取出シ空トナス謂。	騰空/内に在る品物を取り出し空となす。	騰空/ (箱を) 空にする。)
滑籍/麥稈、藁屑、ナドノ總稱。	滑籍/麥稈藁屑、などの總稱。	滑籍/藥屑。
揎/栓同、物ノ間ニ差込み意。	揎/栓に同じ、物の間に差込む意。	
		揎滋實/しつかりと物の好きに詰める。
滋實/丈夫也	滋實/丈夫にする。	
搖擺/搖り動く。	搖擺/搖り動く。	搖擺/動搖する、ゆれる。
軟片/軟カナル物。	軟片/軟かなる物。	軟片/軟かなもの。
		打包/包む、くるむ。
	字帖/法帖。	字帖/法帖。
條幅/聯掛。	條幅/軸物。	條幅/軸物。(註) 掛在對聯中間的字畫。(條扇兒)

裏上／物ヲ包ムヲ言フ。	裏上／物を包む。	裏上／包む。
	匾額／がく。	匾額／額。(註) 刻頌揚的文字在木板上、掛在屋子裏的一種名譽物品。
		撤出來／(書畫を) 抜取る。
架子／額縁ヲ言フ。	架子／ここにては額縁をいふ。	架子／額縁。
		釘死了／釘付けにしてしまふ。
釘死／釘付けニスルヲイフ。	釘死／釘付けにする。	
籤子／札。	籤子／札。	籤子／荷札。
		上鎖／鍵をかける、錠を卸す。
	錠を卸ろす。	
	蕪蓮包／蕪むしろ。	
馬蓮包／薦。		馬蓮包／薦包。
	網上／縛る。	網上／縛る。
		省得車磨了／車で磨れない。
		繩子扣兒／繩の結び目。
扣兒／結び目。	扣兒／結び目。	
勒死／十分ニ堅ク細ルヲイフ。	勒死了／結びきりにする。	勒死／十分堅く縛る意。
	看／…せぬやうにする。	
捩蕩開／ユルメキ動イテ開ク。	捩蕩開／ゆられて動いて開く。	捩蕩開／(車などの) 動揺して結目が解ける。
軟帘子／暖簾。	軟帘子／暖簾。	軟帘子／暖簾。
	摘下來／取下ろす。	摘下來／(取付けたものを) 取りはずす。
	套上／くびり付ける。	套上／カバーに入れる。
		捲上／巻く。
		旱傘／洋傘、日傘。
白拜匣／小サナ鞆。	白拜匣／小さな鞆。	白拜匣／手箱。
	夾被／衾の掛蒲團。	夾被／衾の夜具。
		棉被／棉入の夜具。
	褥套／支那に於て旅行する時は蒲團を持ち歩く故、特に旅行用の夜具包を作り置くなり。	褥套／夜具包、夜具入れ。
		鋪在車上／車の上に敷く。
		煞在車尾兒／車んお後部に縛り付る。 (註) 用繩欄住。
	煞／くくりつける。	
		拿紙蘸上水糊上／紙を濡して張る、水

		張りをする。
	蘸上／水（其他液體）をつける。	
		送行的禮物／餞別品。
	送行／送別。	
	禮物／贈り物。	
	道謝／禮を言ふ。	
使令通話第 18 章		
	澆花兒／花に水をかけるを澆といふ。	澆花兒／花に水をかける。
		盛開／真盛りに咲く。
		見事に花が咲いてゐる。
		弄土來着／土をいぢつて居りました。
	弄／いぢる。	
	剃頭／前清時代には辮髪をつけ頭を剃りたるなり。	剃頭／頭を剃る
	打辮子／辮髪を結ぶ。	打辮子／辮髪を組む。
一回事／暫時ノ間ニ出来ル事デストノ意。	一回事／暫時の間に出来る事です。	
		做粗活／荒仕事をする。
粗活／荒仕事。	粗活／荒仕事。	
		那原不講究／それは元よりどうでもよい。
	講究／重きを置く、構ふ。	
原不講究／原ヨリ講究ヲ要セズ也、何ウデモ好イガトノ意。		
撒俐／小奇麗。	撒俐／さらつと小奇麗なる。	撒俐／小綺麗、小ザツパリする。
	夥伴兒／朋輩。	夥伴兒／仲間、朋輩。
磨稜子／時間ヲ費ス。	磨稜子／時間を空費す、稜子は四角の材木。	磨稜子／グズグズする。
	打點／點檢する、しらべる。	
職名／官職ノ入レアル名刺。	職名／官職の入れてある名刺。	職名／背書入りの名刺。
		嬌嫩／（形が）壊れ易い、くずれ易い。
嬌嫩東西／柔カク壊レヤスイ品物。	嬌嫩東西／柔かく壊れやすい品物。	
		怕車撒／車では揺れる心配がある。
撒／揺也	撒／ゆれる。	
		原不敢接／頂かうとはしなかつた。
		跟去／隨ひて行く。
挑着／擔着。	挑着／かつぐ。	

土物／土産物。	土物／土産物。	土物／土産物。(註)土産。
	這就／今すぐ。	
		奉送／差上げる。
		拵幾朵花兒／五六枝花を折る。
拵／數也。	拵／手にて折り取る	
	朶／えだ。	
		留着自己用就結了／残して置いて自分でお用ひになればよろしい。
結了／ソレデヨシノ意。	結了／それでよい。	
	何必／どうしてそんなにするには及びませうや、及ばない。	
		惦記着／心にかける、心配する。
惦記／心ニ掛ケテノ意。	惦記／心に掛けて。	
		心裏不安得很／お氣の毒に堪へません。
	回片子／返事の名刺。	回片子／お返しの名刺、贈物を頂いた印としての名刺。(註)收件人收到了東西、給來人帶回去的名片、用來做收到憑據的。
		紅封兒／祝儀袋。
		賞封兒／心附。
		歇歇兒／休息する。
	封兒／封じた物。	
	接／受取る。	
	只管／構まず、勝手に。	
	有了氣了／生氣に同じ、おこる。	
	勉強／已むを得ず無理に	勉強／餘儀なく、よんどころなく。
使令通話第 19 章		
口蘑／萬里長城地方ヨリ出ル菌ナリ。	口蘑／口蘑／萬里長城地方より出づる菌。	口蘑／蒙古産の菌。
大蝦米／干蝦。	大蝦米／干蝦。	大蝦米／干蝦。
掛麪／素麵。	掛麪／素麵。	掛麪／素麵。
		路東／道路の東側。
	四牌樓／北京の賑かな一つの町名。	
	海味店／海産物店。	海味店／海産物店。
		斤半／一斤半。
		十子兒／(素麪)十把。

	有限的／知れたものだ。	
		賤的／安いもの。
賤的東西／安價ナル物。	賤的東西／安價なる物。	
總次罷／総テ品質ガ二番ダラウトノ意ナリ。	總次罷／どうしても品質が落ちるだらう。	總次罷／迄度品質が落ちるでせう。
分兩／量目。	分兩／量目方。	分兩／斤兩。
邀足／邀ハ秤也、足ハ足ル也、十分ニ秤ラセル意。	邀足／邀は秤る、足は足る、十分に秤らせる。	邀足了／たつぷり量らせる。
習氣／風習。	習氣／風習。	習氣／習慣、風習。
		都愛要誑價／皆懸値をしたがる。
		你也別竟聽他們要／お前もあれらの云ひな理になつてはいけない。
		總要還個價兒／是非値切りなさい。
		退票／贖札。
	誑價／掛け値する。	
	還價／値切る。	
		大字號／大きな店
		給帶些個來／少し買って来なさい。
		鮮菓子／果物。
言無二價／掛價ナシトノ意ニテ常用キラル、商売用語ナリ。	言無二價／掛價なしとの意にて、常用みらるる商賣用語なり。	
	杏兒／あんづ。	杏兒／杏。
	李子／すもも。	李子／李。
		桃／桃。
沙菓子／檳子共ニ林檎ノ一種ナリ。	沙菓子／檳子共に林檎の一種なり。	沙菓子／林檎の一種。
		檳子／ピンラウ。
平菓／林檎。	平菓／りんご。	平菓／林檎。
脆棗兒／ザクツイタル棗。	脆棗兒／ざくついたる棗。	脆棗兒／生棗。
		葡萄／ブドウ。
		冰糖／氷砂糖。
藕粉／葛。	藕粉／葛。	藕粉／葛。
		熟裁縫舖／何時もの(懇意ま)仕立屋。
想着／忘レズニノ意。	想着／忘れずに。	
	退票／贖札、偽手形。	
	假票子／贖札、偽手形、退票に同じ。	
找給我的／釣錢ニヨコシタノ、釣錢ヲ找錢トイフ。	找給我的／釣錢によこしたの、釣釣錢を找錢といふ。	

	回頭的時候兒／歸る時に。	
熟／懇意ノ意	熟／懇意の。	
使令通話第 20 章		
	陞到／昇任する。	
		陞到…去／…へ榮轉して行く。
		薦給他／あの方に推薦する。
		蒙老爺的抬愛／旦那様のお引立に預り有難うございます。
	蒙抬愛／愛顧を蒙る。	
		自備盤費／旅費を自辨する。
	倘或／若し。	
	盤費／旅費、盤は回旋の意、めぐりあるく費用。	
		一概不管／一切構はぬ。
	管／引受ける。	
		兌給錢／金子を渡す。
	兌給／渡す。	
安家的錢／家族ノ生計費。		
囉瑣／手數、面倒。	囉瑣／手數、面倒、麻煩ともいふ。	
		省得帶錢囉瑣了／送金する手數がありません。
	安家的錢／家族の生計費。	安家的錢／家族の生活費。
扣法／扣除ノ仕方。	扣法／扣除の仕方。	扣法／差引く方法。
	執照／證書、鑑札、免許狀。	執照／證明書。
多大了／幾歳ナルカノ意。	多大了／幾歳になるか。	
俄國／露西亞國。	俄國／露西亞。	
		俄國公館／露西亞公使館。
	挨一挨兒／ゆつくり。	挨一挨兒／（話を）保留する、見合わせる。
	齊截／揃へる。	
		歸着齊截了／よく取纏める。
新手兒／新參ノ者。	新手兒／新參の者。	新手兒／新參の者。
	腳下／目下、今。	
		外頭首尾的事情／外の一切切切の用事。
上工／著手スル、初メル。	上工／仕事に著手する。	
官話問答第 1 章		

欽差／待命全權公使。	欽差大人／清朝時代の特命全權公使	
		欽差大人／公使閣下。
王爺／親王。	王爺／親王。	王爺／親王殿下。
中堂／大臣也尚書官ヲ言フ。	中堂／清朝政府各部の尚書、我が各省大臣相當す。	中堂／大臣。(注) 君主時代宰相的別稱。
大人／三品以上ノ大官。	大人／前清の官制高等官を八品に分つ恰も我が官を八品に分つ恰も我が八等に分つが如し、その三品以上の官にある者を尊稱して大人といふ、我閣下に當る。	大人／三品以上の大官に對する尊稱。
		久仰／久しく高名を欣慕する。
		幸得相會／幸ひに御面會が叶ふ。
		實在是有緣哪／誠に御縁のあることです。
		不取那麼坐／其處に坐る譯には参りません。
		初到敝署／初めて當衙門にお越しになりました。
	問好／ご機嫌を伺ふ。	
	請王爺上坐／對等の者の間に於ては客は上座に坐るに何の遠慮も必要なければども先方は親王にして皇族なれば特に遠慮したるなり。	
	理當／理として當然なり。	理當／當然…なさるべきです。
		處事公平／事務を處理することが公平である。
		尤重和好／取分け平和を重んずる。
		駐劄敝國／我國に駐劄する。
不成格局／體裁ヲ為サズ失礼デストノ意。		
嚐一嚐／嘗メ試ミラレヨノ意。	嚐一嚐／嚐め試みられるの意。	嚐一嚐／召上つて下さい。
不布了／不布菜也、不另擺也。	不布了／布は佈置するの意、別に菜を列べません。	不布了／(料理を) お取次しません。
	不會／…を解せず。	
料理／裁決處理。	料理／裁決處理。	料理／處理する。
	到的京／この的は了の如く過去を表	

	はす。	
	處事／事を處理する。此場合には處は第三聲。	
	如今／今や。	
簡慢得很／甚粗末ナル設テ失礼デシタトノ意。	簡慢得很／待遇の到らざること。	
	遇事／事に遇はゞ	遇事／問題に臨んで。
		持平和衷商辦／協調の精神を以て處理する。
		均有利益／双方に利益がある。
	何幸如之／何の幸か之に如かんや。	
		謬膺重任／重任を受ける。
	謬膺／謬は誤つて、膺は受ける。	
養法／攝生。	養法／攝生。	
		高壽／御年齢は？の意。
		年逾六旬／六十歳を迎へる。
		燙酒／酒の爛をする。
叨擾／饗膳ニ奔走スル意。	叨擾／叨は貪る、擾はみだす、御馳走になる。	
		那有就叨擾的理呢／御馳走に預る譯には参りません。(註) 叨擾、吃了人家東西的感謝話。
説遠了／不親密ノ意。	説遠了／不親密の意。	
		這話說遠了／御挨拶は御遠慮と申すものです
		初會／初對面。
	如同故交／舊交の如く。	
	為得是／…の為めである。	
賞臉／賜光也。	賞臉／顔を立てる。	
	推辭／推は推し退ける辭は辭退する。	
		如同故交一樣／一見舊知の感があります。
		長談／緩つくり話をする。
	於心不安／心に於て安からず。	於心不安／心苦しく思ふ。
	不成敬意／敬意を成さず。	不成敬意／お粗末千萬です。
	別見怪／怪まる勿れ。	
		粧假／遠慮する。

	圖書／全權公使の捧呈する圖書。	圖書／信任狀、圖書。
	呈遞／捧呈する。	呈遞／捧呈する。
	那層／その事。	
		奉上皇上／陛下に奉上する。(註) 把某種事情、對皇帝說明。
		請旨定於何日／陛下に御都合を伺ひ申上げる。
	何妨／何ぞ…を妨げんや。	何妨／何んぞ…を妨げん…でもよいでせう。
		緊要公事／大切な公務。
		這太盛設了／大變な御馳走です。
	不成格局／體裁を為さず、失禮ですとの意。	
		不成格局的很了／何等御勸待が出来ません。
	敬一盃／一杯差上げる。	
		敬盃／獻杯する。
	回敬／ご返杯	回敬／返杯する。
	當不起／気の毒なり、痛み入る。	當不起／恐縮に存じます。
	如何敢當／如何んぞ敢て當らんや。	
	斟酒／酒を注ぐ。	
		恭敬不如從命／折角のお言葉に従ひます。
		別周旋了／どうかお構ひ下さらない様に。
		自取／自分で隨意に頂戴する。
	肯依實／實に依るを肯んず。	肯依實／遠慮しない。
		不能在此久坐／此處に緩つくりお邪魔が出来ません。
	道費心／道は言ふの意お禮を言ふ、道謝の如く。	
	些須／僅かの	些須／ほんの僅か。
		微意／心ばかり。
	何足掛齒／何んぞ齒牙に掛くるに足らんや。	何足掛齒／何もお氣に掛けられる程ではありません。(註) 夠不上說甚麼感謝一點兒粗點心、給您帶到船上消遣消遣、何足掛齒。

	謝歩／先方の訪問に酬ゆる返禮の訪問。	
官話問答第2章		
		列位／各位。
		恕我們來遲／遲刻致して相済みません。
承問々々／他人ヨリ安否等ヲ問ハレシ時ノ返辭ナリ御尋ヲ蒙リ有難ウ存ジマスノ意ニテ御陰ニテ無事ニ居マスナドノ意ハ言外ニ含マルルナリ。	承問々々／他人より安否等を問はれし時の返辭なり、御尋ねを蒙り有難う存じますとの意にて、御陰にて無事に居ますなどの意は言外に含まる、なり。	
一來…二來／一ツニハ…二ツニハ。	一來…二來／一つには…二つには。	
	恕…來遲／來るの遲きを恕せ。	
	怎麼稱呼／お名前はへと仰せられますか。	
	我們倒忘了／我々こそ忘れて居ました。	
		可是／時に、處で。
		光顧／御來訪。
		故此／それ故。
	告假／缺勤する。	
原諒／原有諒察。	原諒／原有諒察、ゆるす。	原諒／お宥し、御寬恕。
	行走／出仕。	
	貴科分／何年の科擧の試験に及第せられしか	
		吏部侍郎／吏部侍郎。
		兼管／兼任する。
		己卯／己卯の年。
		癸未科／癸未の年の試験。
	擧人／學位なり、郷試に及第せる者に與へらる。	
	進士／五年毎に北京に於て各省の擧人を集めて試験し之に及第せるを進士といふ。	進士／進士。
	僥倖／試験に及第したるを謙遜していふ。	
		僥倖之後／試験に登第して後。
供職／奉職。	供職／奉職。	

	放過／任ぜられた	
學差／學政使ヲイフ、學差ハ一學區即チ一省内ノ教育事項ヲ管理シ生員ノ賞罰及郷試ニ應試ノ人員ヲ録シテ禮部ニ進達スルヲ掌ル。	學差／學政使をいふ、學差は一學區即ち一省内の教育事務を管理し生員の賞罰及郷試に應試の人員を録して禮部に進達するを掌る。	
試差／郷試ノ試験官ナリ禮部ヨリ派遣セラル。	試差／郷試試験官なり、禮部より派遣せらる。	
貴庚／他人ノ年齢ヲ尋ヌル語。	貴庚／他人の年齢を尋ねる語。	貴庚／貴年のお歳は？。
	虚度／虚しくわたる、自分の歳を謙遜している。	
	五旬／五十才。	
	榮膺／膺はうける。	
		榮膺顯秩／顯職に就任する。
		自愧無才／自ら無能を愧づる。
濫竽充數／ソノ器ニ非ズシテ任ニ在ルヲイフナリ韓非子卷九内儲説篇、齊宣王使人吹竽必三百人南郭處士請為王吹竽宣王悅之廩食以數百人宣王死湣王立好一一聽之處士逃云々トナリ蓋コノ故事ヨリ出デシ語ナリ竽ハ説文ニ竽三十六簧樂也周禮疏ニ竽長四尺二寸トアリ。	濫竽充數／その器に非ずして任に在るをいふ韓非子卷九内儲説篇「齊宣王使人吹竽必三百人、南郭處士請為王吹竽、宣王悅之、廩食以數百人、宣王死湣王立好一一聽之處士逃」と、この故事より出てし語、竽は簧樂なり。	濫竽充數／その器に非ずして任にあるを云ふ。(註) 心裏受領對方人的好意、是交際場中辭謝不受的客氣話。
討擾／馳走、御邪魔。	討擾／馳走、御邪魔。	討擾／御馳走になる。
		心領／御厚意丈けを頂く。(註) 心裏受領對方人的好意、是交際場中辭謝不受的客氣話。
		強留／印留める。
		侯承／(車馬に) お召し下さい。(註) 送客到大門外、等候客坐到車上了再進來這是極客氣的禮節。
侯承侯承／他人ニ乗物ヲススムル時ノ挨拶	侯承侯承／他人に乗物をすすむる時の挨拶	
磕頭磕頭／頭ヲ地ニテ叩クヲイヒ平伏極マル時ノ挨拶語ナリ。	磕頭／頭を地にて叩くといふ程の意。	
官話問答第3章		
	讓／…をして。	
新聞／珍ラシキ事	新聞／新奇な噂。	
	動的身／出發、的は過去を表はす	
	住了／滞在した。	

		哦／オー（註）表示領悟的感歎聲、哦我明白啦。
		大皇帝／皇帝陛下。
		聖體康泰／聖體御安泰に涉らせられる。
		聖駕安康／玉體御健やかにあらせられる。
		膽大／無遠慮に互ります。
		福庇／お陰様。
		沿途／道中。
		沿路上／途中
		古蹟／古跡。
		關係國政の事情／政治に關する事柄。
		北上／北京に行く。
		緊急／急ぐ。
	欽限／勅命の期限。	
	旱路／陸路。	
		欽限將滿／赴任期日が切迫する。
		不敢久延／長逗留が出来ぬ。
		船隻／船舶。
武弁／下級ノ武官ナリ。	武弁／下級の武官なり。	武弁／武官。
	帶領／率ゐて。	
	通州／北京の東にあり。	
		效勞／幹旋する、世話する。
		領情／御厚志夫け受ける。（註）領收別人的情意。
咨報 / 書面ニテ通知スルヲイフ咨ハ咨文ノ咨ナリ凡ソ支那ノ公文書式ニテ彼我對等ノ位置ニ在リテ往復スル文書ヲ咨行文又ハ咨文トイフナリ。	咨報 / 書面にて通知するをいふ、咨は咨文の咨なり。凡そ支那の公文書式にて彼我對等の位置に在りて往復する文書を咨行文又は咨文といふ。	咨報 / 報告する。
陶潛歸去來辭ニ雲無心以出岫鳥倦飛而知還景翳以將入撫孤松以盤桓トアルヨリ出ヅ。		
	盤桓／進まざる貌、通俗に打寛ぐ意に用ふ。	盤桓／逗留する。
官話問答第4章		
		齊備了／準備が出来た。

		俱己／既に。
榮行／御出立。	榮行／御出立。	
一準／屹度、必ス。	一準／屹度、必ず。	
啓節／發程。	啓節／發程。	啓節／出發する。
	過來／やつて来る。	
	約摸／考へる、估摸、打算などと同じ。	
		巳初／午前九時。
		辰正／午前八時。
		遵命不過來了／お言葉に従ひお見送り致しません。
冬子／十一月ナリ十一月建冬故名。	冬子月／十一月なり。	冬子月／十一月。
		先期／前以て。
		便當／必ず…する。
		掃榻以待／席を設けてお持ち申上げます。
	預先／預は豫めなり。	預先／豫め。
		問及於我／私にお尋ね下されば…。
		詳細告知／詳しくお話申上げる。
		以副呼御屬／御期待に副ふ様にする。
		過加榮譽／御過獎に預る
彼時／ソノ時ニハトノ意。	彼時／その時にはとの意。	
	倘或／若しも。	
	先期賞我個信／期んい先つて我に一個の信を賞せよ。	
	便／即ち。	
榻／坐席也。	榻／坐席なり。	
		奉告／御通知する。
托附／依托。	托附／依托。	托附／願ひする。
擔待／寛容之意。	擔待／寛容之意。	擔待／寛容する・大目に見る。(註)包涵和原諒，請您擔待點兒吧。
	俾伊／俾はなり、彼をして…せしむ。	俾伊／本人に…せしめる。
	遵循／共にしたがふと訓ず	遵循／見習ふ、お手本にする。
	我感／我れ身に受けたると同じく感ず。	
	風聞／噂に聞く。	
		感同身受矣／私に與へられる御厚志と同様に感謝する。

		才情敏捷／頭腦明哲。
		均甚妥善／總て穩健である。
		制度／制度。
		恐還不能周知／未だ充分判つては居ない。
		以慰遠念／安心させて下さい。
		奉致／差上げる。
		聽侯／（お指圖を）待つ。
		指使／指圖、命令。
遠念／遠クヨリ想フ。	遠念／遠くより想ふ。	
官話問答第5章		
	見論／論さるゝ、お話があるか。	見論／お話を承る。
		繙譯官／翻譯官
護照／旅行免狀。	護照／旅行免狀。	護照／旅券。
	赶…すると。	
	誰知／誰か知らん、何ぞ圖らん。	
百姓／人民。	姓／人民。	
少見多怪／奇怪ナリトシトノ意。	少見多怪／奇怪なり。	少見多怪／物珍らしい相にする。（註） 沒看見過 就以為奇怪 其實不算甚麼
		三五成羣／三々五々と人群を作る。
	擁擠／擁は路で押す、擠は足を踏む、 人多くして押して合ふ態をいふ。	
擁擠觀看／山ノ如クタカリテミル。		擁擠觀看／人山を築いて見物する。
		口出不遜者／不穩な言動を放つ者。
有意滋事／事ヲシデカシソウダトノ意。	有意滋事／事をしてかさうとする考がある。	有意滋事／問題を惹起する下心がある。（註）滋事、惹亂兒。
	意在／…せんと欲した。	
		汎官衙門／汎官衙門。
		設法彈壓／鎮壓の方法を講ずる。
		免生事端／問題を發生せぬ様にする。
		等候許久／長い時間待つ。
		公事煩冗／公務が多忙である
彈壓／鎮撫。	彈壓／鎮撫。	
竟自／元來ノ意。	竟自／只。	
無法／詮方ナク。	無法／詮方なく。	
許久／暫ク。	許久／暫く。	

陪客／客ニ接ス。	陪客／客に接す。	
書辦／書吏。	書辦／書吏。	
科房／書辦ノ執務室。	科房／書辦の執務室。	
	有意生事／事を生ずるの意あり。	
満口應允／十分ニ承諾セル意。	満口應允／十分に承諾した。	満口應允／充分承諾する。(註) 満應満許。
信口胡言／口ロニ暴言ヲ吐クヲイフ、言ハ伸ブ即謂也。	信口胡言／口々に暴言を吐くを云ふ、信は述る。	信口胡言／口々に暴言を吐く。
稟貼／上申書。	稟貼／上申書。	稟貼／報告する。
		稟報／報告する。
	轉飭／飭は命令する、我が移牒するに當る。	轉飭／轉達する。
	詫異／奇怪だ。	
	領有／もらつてある。	
	照章／規則通りに。	
	纔是／始めて可なり。	
	奉旨／勅旨を奉じて。	
	督撫／總督巡撫、總督は一省或は二省の長、巡撫は一省の長官。	
		妥為保護／充分保護を加へる。
		嚴飭／嚴重に指令する。
		不但…而且／只に…のみならず、その上に。
		載在條約／條約に記載されてゐる。
		屢次／屢。
	恪遵／恪はつゝしむ、遵はしたがふ。	恪遵／遵守する、遵奉する。
	何以／何を以て、何故に。	
		視為無足輕重之事／取るに足らぬ問題と考へて居る。
	咨請／咨は通知する、請は依頼する。	咨請／通牒を發する。
		以符條約／條約の精神に副ふ様にする。
	符／副ふ、合ふやうにする。	
	行文／文書をやる。	行文／書類を發する。
		查問／取調べる。
		辦理不善之處／取扱不當の點。
	煩冗／煩は繁雜、冗は忙し。	

原故／理由。	原故／理由、緣故とも書く。	
開參／革職。	開參／革職。	開參／免職する。
	奏參／奏上して革職す。	
		指名奏參／指名して免職を奏請する。
日後／今日以後。	日後／今日以後。	
回明／復命。	回明／復命。	
	提我／我が…の事を話してくれ。	
	面求／面會の上依頼する。	
官話問答第6章		
	説知／話し知らせる。	説知／お話する。
	貨輪商船／蒸汽商船。	
		行至葛沽の上邊兒／葛沽上流まで来ると…。
	大沽／白河に沿ひたる船着き場の名。	
葛沽／白河ニ沿ヒタル地名。		
	撞壞／衝き當つてにはした。	撞壞了／衝突して破損する。
		停泊／停泊する。
	業／既に。	
	將此事／將は以て又は…をの意。	
		業將此事／既にこの事を…。
稟明／稟告説明。	稟明／稟告説明。	稟明／届け出る。
	礙／碍に同じ、障礙になる。	
		有礙輪船往來之路／汽船の通路に支障がある。
		行走之間／船行中。
		船舵／舵。
		撞折了／衝突して折れた。
		以致被碰／為に衝突するに至つた。
河泊章程／河川規則。	河泊章程／河川規則。	
碰壞／衝突破壊。	碰壞／衝突して破壊する。	
	便／即ち。	
船戸／船頭、船長。	船戸／船頭、船長。	
	不應認賠／應に賠償を認むべからざるものなり。	
船幫／船傍也。	船幫／船腹。	船幫／船腹。
	照復／回答する。	
	提／…の事を提言する。	
灣着／碇泊。	灣着／碇泊。	

原稟的／最初ノ上申。		原稟／最初の届出。
	為足憑／據るに足るとなす。	
	無話可答／話の答ふべきなし。	
	修費／修繕の費用。	
	供説／供述。	
	不以…為然…／を以て然りとなさず。	
	方免／始めて…を免るゝを得るや。	
		先與原稟不符／先づ最初の届出と符合せぬ。
		正走之間／丁度進行中に。
		阻礙／阻害する。
		只舉此一端／彈にこの一事を以てしても…。
		堅請／執拗に要求する。
		強令／強制する。
		辯論不休／辯論が盡きぬ。
		爭論／爭論する。
	兩造／原被兩造。	
各執一詞／各々自分ノ勝手ヲ云フ。	各執一詞／各々自分の勝手を云ふ。	各執一詞／各々主張を持つて居る。
	札飭／書面を以て命令する。	札飭／訓令する。
		各尋見證／各々證人を挙げる。
	見證／證據とするもの。	
	會訊／共同訊問。	會訊／共同訊問する。
水落石出／事實發見ノ意。	水落石出／事實發見の意。	水落石出／事件の真相が判明する。
	如以為可／若し以て可となさば。	
		此節／この點。
		回明／復命する。
		請賜一信來／御返事に預り度い。
		可否／可否
官話問答第7章		
	福州／福建省の首府。	
		光臨／御來訪。
		雇定了／雇つた。
夾板船／帆前船。	夾板船／帆前船。	夾板船／帆船。
		裝載／積載する。
		議定／約束する。
		經管／幹旋する。

水脚／運送料金。	水脚／船費。	
付過／渡シ置き。	付過／渡して置いた。	
	下欠／不足の分。	
	付清／金額拂渡す。	
付消／全額拂渡スライフ。		
行棧經管／運送店ノ手ヲ経ル。	行棧經管／運送店の手を経る。	
對講／協議。	對講／相對して協議する。	對講／相對の約束。
撥船／貨物運送船。	撥船／貨物運送船。	撥船／解船。
		候驗／検査を待つ。
		措辦水脚／船賃を調達する。
起下來／荷卸シ。	起下來／荷卸し。	
	候驗／検査を待つ。	
	措辦／措置辦理、都合する。	
下欠的／殘額		
交清／渡シ済。	交清／渡し済。	
	開了住址／住處を書き記した。	
住址／住處。		住址／住所。
		遣人／人を呼びに出す。
正經商人／實着ナル商人。	正經商人／實着なる商人。	
函致／函は書面也書面を以て意を致すとなり。	函致／函は書面、書面をやる。	函致／書面を以て回答する。
	直等／ひたすら待つた。	
	仍未／尚ほいまだ。…せず。	
	設疑／疑を起す。	
		扣留／差押へる。
完清／全納。	完清／全納。	
税項／税金。	税項／税金。	
放行／解放。	放行／放してやる。	放行／通過を許す。
		函致／手紙を出す。
	扣留／差押へて置く。	扣留／差押へる。
		函復／書面を以て回答する。
		完清税項／税金を完納する。
		暫行扣留／暫く差押へる。
	礙難照辦／その通にしがたし。	礙難照辦／御申出通りに取扱へぬ。
		無着落了／解決する途がない。
		還清水脚／船賃を清算する。

		千萬費心／是非御配慮を願ひ度い。
		以公事而論／法規の上から云へば… 表向きに云へば。
着落／落着。	着落／落着。	
	我好／我が…するに都合の好いやう に。	
		按着私交情／個人關係に依つて…。
		通融辦理／臨機に處置する。
		以此為例／これを前例とする。
官話問答第8章		
	批定了／注文して取り極めた。	
哈喇／羅紗。		哈喇／羅紗。
	批單／注文契約書。	
		洋商／外國商店。
		催／催促する。
	藉詞／言葉を借り。	
		藉詞挑別／難辭を付けて撥付ける。
		傳案査訊／召喚して取調べる。
挑別／拒ミ、跳付ケ。	挑別／拒絶、跳付ける。	
傳案／傳ハ召喚案ハ訊問所ナリ	傳案／傳ハ召喚、案ハ訊問所。	
	封河／結氷のために河の通行が止ま る。	
	定銀／手付金。	
	兌銀子／品物と引かへて金を渡す。	
兩無耽誤／雙方トモ錯誤スルコトナ シ也。		兩無耽誤／双方約束を違へない。
原樣／當初ノ見本。	原樣／もとの見本。	原樣／最初の見本。
		貨包／商品の包装。
	拆開／破り開く。	拆開／荷造りを解く。
		貨樣不符／現品と見本とが一致せぬ。
		退回／返却する。
		另行出售／他へ賣渡す。
		也沒說開就散慮／それも話が付かず 物別れとなつた。
		不料／圖らず。
		藉詞推托／理由を構へて拒絶する。 (註) 藉詞、以某種話為由。
		稟復／復命。

		所供的情形／申立てた情況。
	出售／售は賣に同じ、賣り出す、	
	竟自／自分勝手に。	
稟控／告訴。	稟控／告訴。	稟控／訴訟する。
	推托／事に托して退ける。	
	所供的／供述したる。	
一面之詞／一方ノ申立。	一面之詞／一方の申立。	一面之詞／一方的な申立て。(註) 一邊的話，你別聽他一面之詞，也要各方面打聽打聽。
	仍舊／元の通りに。	
		供出／供述する。
勒令／強イテ…セシム。	勒令／強いて…せしむ。	勒令／強制する。
	折服／納得させる。	折服／納得せしめる。
	未必肯服／未だ必ずしも服するを肯んぜず。	未必肯服／納得するものと考へられぬ。
	遣我來／我を遣はし來り	
	會訊公所／上海にある支那人と外人との混合裁判所なり。	會訊公所／共同審判所。
	過一回堂／一通り詢問する。	
		拾到公所去／公所に運搬する
		是否與原樣相符／現品と見本とが一致して居るかどうかを…。
		何れが是じゃ、何れが非か。
		自然力判／必らず直ぐに判斷出来る。
		尊意／御意見。
	道意／道義上の意見、正當なる意見。	
	原無定見／もと定見なし。	原無成見／元來成案がない。
	若果／若し果して。	
		各供一詞／お互に主張を持つて居る。
		難以定案／判決が下しにくい。
		愚見／私見。
		飭令／命令する。
		邀兩個洋商／二人の外商を同伴する。
		是日／當日。
		齊集／集合する。
		盡善盡美／懇切を盡して申分がない。
華商／支那商人	華商／支那商人。	
	便／すなわち。	

	若此／此くの若し。	
	將此節／將は把と同じ多く文書うに用ふ、以てと誦ず。	
官話問答第9章		
		寶昌行／寶昌號。
		朱曉山／朱曉山。
		虧空銀兩／金錢を費消する。
		聘請／招聘する。
		晉昌／晉昌號。
		保單／身元保證書。
		家私變價／私財を處分して金子にする。
	以為如何／以て何故となす。	
信單／保證書。		
	保單／保證書。	
嗣後／以後。	嗣後／以後。	嗣後／今後、将来。
	將／…を。	
家私／家屋器具	家私／家屋器具	
下欠／不足。	下欠／不足。	
	一律／一律に同様に。	
	攤賠／攤は平均する。	
一律攤賠／均シク賠償ノ責ヲ帶ブトノ意。		一律攤賠／均分賠償をする。
		各無異議／夫々異議はない。
		斷令／命ずる。
		分賠／賠償を分擔する。
着落／落着	着落／落着する、責を歸する。	
	傳來／召喚し來り。	
時常／常ニ、始終。	時常／常に、始終。	
沾光／沾ハ霑也、沾光トハ餘澤ニ霑ヒトノ意ニテ御蔭ヲ蒙リナド、譯スベシ。		沾光／お蔭を蒙る。
冤屈／無理氣ノ毒ノ意ヲ含ム。	冤屈／無實なる、氣の毒の意を含む。	
	供認／供述する、白状する。	
		情願具輸服甘結／承認書を作成する頃を承知した。
	情願／心から願ふ。	

輪服甘結／判決ニ服シ穩便ニ落着セリトノ意。	輪服甘結／判決に服し穩便に落着する事。	
		我斗胆說一句話／私は率直にお話致します。
斗膽／大膽也臆セズ忌憚ナクトノ意。	斗膽／大膽、忌憚なく。	
	別見怪／怪まるな。	可別見怪／どうか悪からずお思召し下さい。
	以為／思ひらく。	
		有話不妨明言／御意見があれば遠慮なく仰有つて下さい。
		斷法／處置、處分方法
		與保單原議不符／保證書の趣旨と一致せぬ。
		應著落保家／保證人をして…せしむべき物である。
		落保家／保證人。
		著／をして…せしむ。
		均攤／均分負擔する。
		審訊／審問
		也頗沾朱曉山之光／…も亦大層朱曉山の厄介になつて居る。(註) 沾光、受別人的好處。
		交往錢銀的事情／金錢貨借の關係。
		實在冤屈供認／誠に迷惑な次第です
		供認／供述する。
		幸免之詞／厄のがれをしたと云ふ世評。
		與此案無涉／この事件とは何等關係がない。
		牽涉伊等私情之理／彼等の私交に迄關連せしめる道理。(註) 牽涉、連累。
		希圖少賠錢／隼害を少くせしめる様に圖る。
		任意混供／出放題な申立をする。
		置身事外／自分夫けが責任のがれする。
		賠多賠少之分／賠償額の多寡。
無涉／關繫ナシ。	無涉／關繫なし。	

	牽涉／關係する。	
	伊等／彼等。	
混供／混ハ妄也、供ハ口供也。	混供／混は妄、供は口供。	
設若／若也。	設若／若し	設若／若し…なれば。
		方為公允／それでこそ公平と云ふも のです。
		據理而論／道理上から云へば。
		隨勢對情／情狀を斟酌する。
		權變之法／臨機の處置。
		萬難之處／非常に難しき點。
		礙難之處／支障のある處。
	方為／始めて…と為す。	
公允／公平。	公允／公平。	
從長計議／長ハ宜也、宜シキ方ニ從ヒ テ商議ヲ為ストノ意。	從長計議／長は宜なり、宜しき方に從 ひて商議を為すの意。	從長計議／篤と相談する。
官話問答第 10 章		
		面商／面談する。
貨銀／買入品ノ代金。	貨銀／買入品の代金。	
屢次／屢。	屢次／屢々。	
催討／返金催促。	催討／返金催促、討は求める。	催討／催促する、督促する。
		富裕／餘分、餘剩。
	追出來／取る立てる。	追出來／取戻す。
	為得是好／…するに都合のよい為め に。	
		歸還／返還する。
		大老爺／四品、五品の官員に對する尊 稱。
		捏詞／理由を捏造する。
		代為控追／代理として訴訟する。
欠款／借金。	欠款／借金。	
託出／依頼シテ。	託出／依頼して。	
		包攬插訟之端／訴訟に介在すること を引受ける前例。
	包攬／引受けて	
	插訟／訴訟に關係する。	
包攬插訟／訴訟ニ干係スル。		
有賬可憑／帳簿ガアレバ証拠トナル トノ意。	有賬可憑／證據となる帳簿がある。	有賬可憑／證據となる帳簿を所持す る。
		訊追欠款／證據となる帳簿を所持す

		る。
		各清各賬／負債を追及する。
		方為正辦／それが正當なる取扱と云ふべきである。
		隨便牽扯／紊りに牽連關係を付ける。
		滋生弊端／弊害を醸す。
		預為防範／豫め防止する。
		遵辦／御意見通りに取運ぶ。
		暫且失陪／ではお暇致します。
該／借也。	該／借りる。	
弊病／弊害。	弊病／弊害。	
	牽扯／共にひくと調ず干涉する。	
官話問答第 11 章		
官差／公務		
	老弟／親友の間歳下なる者を老弟と呼ぶ。	
	官差／公務。	
		總暇未得／どうも餘暇がありませんので…。
秋審／毎年秋季ニ國內ノ罪人ヲ審判スルヲイフ。	秋審／毎年秋季に國內の罪人を裁判するを云ふ。	秋審／秋季の裁判。
	驗放／放差は役に任命される、驗が調べる。	
缺分／役目。	缺分／缺は職務、缺分は役柄、役目。	缺分／地位・役目。
中缺／繁簡中間ノ缺ヲイフ。	中缺／繁簡中位の役目をいふ。	中缺／繁簡相半する地位。
調／轉任ノ意。	調／轉任。	
首縣／府内最繁之縣也。	首縣／府内最も繁盛の縣。	首縣／一等縣。
		免有竭蹶之虞／職責に過失のないやうにする。
		煩難之缺／勤め難い地位。
	指望／希望。	
	但願／せめて。	
竭蹶／蹉躓	竭蹶／ケツケツと讀む、顛倒する。	
	轉／うたた。	
	賄／のこす。	
	冬至／十一月。	
		辦結了／取調べが完了する。
	須／用ゐる。	

	驗放／しらべ任する。	驗放／任命。
		恐才不勝任／才能がその任に勝へぬことを懸念する。
		必致貽笑大方／必ず社會の物笑ひとなる。
		無須／必要がない。
		攜眷／家族を同伴する。
		不敢久留／長くお引留めをしません。
官話問答第 12 章		
題名録／會試又ハ郷試ニ登第セル人名ヲ印刷セシモノ賣品ナリ。	題名録／會試又は郷試に及第せる人名を印刷せしもの賣品なり。	題名録／科擧試験の及第者を掲載せる名簿。
高中／優等合格。	高中／優等合格。	高中／優等にて合格する。
房師／考試委員ナリ、副委員長ト譯ス。	房師／試験委員なり、副委員長と譯す。	房師／試験官。
座師／考試主席委員ナリ、委員長ト譯ス。	座師／試験主席委員なり委員長と譯す。	座師／試験委員長。
太史／翰林院修撰ノ別稱ナリ尚同院編修檢討、庶吉士モ太史ト稱スルナリ。		太史／翰林院修撰。
		抱屈的很／どうも後残念なことでした。
抱屈／嘆人落第之言也。	抱屈／残念なり。	
出了房了／房師ヨリ座師ノ許ニ各受験者中ニ就キ好成績ノ者ヲ報ズルヲイフ、斯クテ座師ニ於テソノ及落ヲ判定スルナリ。	出了房了／房師より座師の許に各受験者中に就き好成绩の者を報するをいふ、斯くて座師に於てその及落を判定するなり。	出了房了／試験の成績が房師より座師に廻付されるを云ふ。
薦卷／座師ノ許ニ報告サレシ謂也。	薦卷／座師の許に報告すること。	薦卷／試験の答案を房師より座師に廻付することを云ふ。
		中的很高／好成绩にて及第する。
		學問有素／學問に素養がある。
	批落／判定に落ちた。	批落／落第する。
		一時的科名增躋／一寸したことで試験に失敗する。
增躋／行不前貌。	躋躋／行不前貌、つまづく。	
		縣試／舉人試験。
		取中／及第する。
解銅／解ハ看守ノ意。	解銅／解は看守の意、シエと讀む。	解銅／貢物の銅を輸送する。

		交代／引渡す、納付する。
覆試／再考一會看其真才蓋恐前其者 作卷也。	覆試／舉人に及第したる者の再試験。	覆試／再試験。
官話問答第13章		
		一概茫然／全熟事情に暗い。
		安置好了／手筈を決める。
		迎貨去／商品を迎へに行く。
	奉懇／お願い。	
	有何見教／何の教へらる有りや。	
	郷親／同郷の者。	
	川土／四川省産の阿片。	
	上税／税金を納めること。	
	茫然／ぼんやりしてはつきりしらぬ。	
經承／首席書記ヲイフ。	經承／首席書記をいふ。	經承（稅務司の首席書記）
		押着貨車到務／商品を積んだ車に付 いて税關に行く。
		放行／通關する。
		科房／事務室。
		保其平安／無事を保證する。
		造化／幸ひ。
		萬無一失／絶対に間違は起らぬ。
	開清單／荷物の目錄書を書く。	
清單／荷物ノ目錄書。		
打印子／検査済ノ印ヲ押捺スル意。	打印子／検査済の印を押捺する意。	
	造化／幸福。	
若許／許多也		
佳音／御返辭、音御信ナドノ意。	佳音／御返辭、御音信等の意。	佳音／吉報。
		驚弓之鳥／心中ビクビクして居る形 容。（註）受過驚恐遇事胆怯。
		彰儀門／彰儀門。
		煙土／阿片。
		巡役／監視人。
		私卸貨物／貨物を官許なくして卸す。
		若許銀兩／多額の金子。
		膽戰心驚／心中不安の為めビクビク する。
		萬安／大丈夫。

		差錯／間違、齟齬。
官話問答第 14 章		
		枉顧／御来訪を蒙る。
	稍微／少し。	
消停一點兒／稍閑ニナレリトノ意。	消停一點兒／稍閑になれりとの意。	消停一點兒／やつと少し閑になる。
		能者多勞／有能な者は多忙です。
		以勤補拙／無能な者はせめて精勤に 依つて不足を補ふことに努る
		聚會／集會する、會合する。
		千萬賞臉／是非御出席下さい。
		一見如故／一見舊知の感があります。
		拘此行跡／禮儀にこだわる。
		聊盡地主之情／ほんの心許りの主人 役を勤める。
形跡／禮式。	形跡／禮式。	
	地主之情／土地の主人即ち此地の者 として遠来の客を迎ふるの情誼。	
地主／土地ノ主人則チ其地ノ人間ト 云フ意。		
道義中人／同主義ノ人間。	道義中人／同主義中の者。	道義中人／同好の士・趣味を同じうす る人達
	賜光／光榮を賜はる。	
		備帖過來／案内状を送る。
	時辰／時刻。	時辰／時刻。
		午初／午前十一時。
		會面／會面する。
	屆時／時に至り。	屆時／時間になつたら。(註) 到那個 時候
	舉目無親／皆目親近者なし。	舉目無親／誰も知友がない。
投供／候選官ガ吏部ニ出ス届書。	投供／候選官が吏部に 出す届書。	投供／候選の官吏が就職願書を提出 すること。
互結官／投供ニ就キ保證ニ立ツベキ 官吏。	互結官／投考に就き保證に立つべき 官吏。	互結官／投供に付き保證に立つ官吏
		素職／豫て知つて居る。
		萬分湊巧／何よりの幸ひ。
官話問答第 15 章		
		朱筱園／朱筱園
		黃毅臣／黃毅臣

		李芝軒／李芝軒
		學問淵博／學問が深い。(註) 淵博、 學問充足。
		仰慕得恨／欽慕に堪へぬ
		才疏學淺／淺學菲才。
		謬獎／誤つて獎められる。
丁憂／支那ノ俗父母ノ喪ニハ三年ヲ 以テ法トナス然レドモ今日ニテハ二 十七ヶ月ヲ以テ限リトシ旗人ハ百日 ヲ以テ滿限トナス凡官途ニ在ル者ハ 父母ノ喪ニ丁レバソノ喪期間ハ仕途 ヲ停ム之ヲ丁憂トイフナリ。	丁憂／支那の俗父母の喪には三年を 以て法となす、今日にては二十七ヶ月 を以て限りとし、旗人は百日を以て滿 限となす凡官途に在るものは父母の 喪にあたればその喪の期間は仕途を 停む、之を丁憂といふ丁はあたるな り。	丁憂／父母の喪に服すること。(註) 死了父母稱丁憂。
給事中／都察院隸屬ノ官名。	給事中／都察院の隸屬。	給事中／給事中。(官名)
		京察一察／京察一察
	官名／給の第四聲なるに注意。	
京察／中央政府ノ官吏ノ優劣ヲ查覈 スルヲイフ。	京察／中央政府の官吏の優劣を查覈 するをいふ。	
	簡放／勸派される。	簡放／勸命される。
	出缺／缺員となる。	出缺／在官中に死去する
督糧道／貢米監督ノ道臺。	督糧道／貢米監督の道臺。	督糧道／督糧道。
藩司／布政使。	藩司／布政使。	藩司／布政使。
		老伯大人／御尊父。
	供職／奉職。	供職／奉職する。
庶常／庶吉士。	庶常／庶吉士即ち翰林院の試補官吏。	庶常／庶吉士。
編修／官名。	編修／官名。	
		授職編修／編修に任ぜられる。
		回籍守制／歸郷して服喪する。
		國史館／國史館。
		貴昆仲／御兄弟。
	守制／喪に服する。	
副榜／舉人登第試験ニ合格セシモ人 員ニ餘剩アリ選ニ漏レタルヲイフ。	副榜／舉人登第試験に合格せしも人 員に餘剩あり選に漏れたるをいふ。	副榜／舉人試験に及第せるも定員關 係にて其の資格を與へられざりし者。
		隨侍任所／任地に隨いて行く。
		未諳／知らぬ。
遊幕／幕遊ト稱シ、地方長官ノ顧問ト ナルヲイフ。	遊幕／幕遊と稱し地方長官の顧問と なるをいふ。	遊幕／地方長官の顧問を云ふ。

		曾／嘗て。
刑席／法律顧問。	刑席／法律顧問。	刑席／法律顧問。
		因案去任／或る事件の為め任を退く。
		脱館／顧問を辞する。
		選授此缺／この官職を選授される。
	執意／切に。	執意／無理に、強ひて。
	誼不容辭／誼辭を容れず。	誼不容辭／友誼上辭しかねる。
老父臺／地方長官ノ尊稱。	老父台／地方長官の尊稱。	
	議敘／官吏の昇進を詮議する。	議敘／議敘。
官話問答第 16 章		
		孔竹菴／孔竹菴
造次／假初、猥ニ。	造次／假初、猥に。	造次／猥りに、無遠慮に。
晉謁／御面謁、拜訪。	晉謁／来り面謁する、晉はすすむ。	晉謁／御面會。
		代為先容／豫め都合を伺つて貰ふ。 (註) 先紹介一下兒、請您先容、隨後 我再來接洽。
		深慰下懷／誠に嬉しく存じます。
		仰仗／お願いする。
		釐捐局／税務局。
		稟見／御面會する。
		徒負虛名而已／只だ虚名を得て居る 丈けであります。
		面求／面會してお願いする。
		率允／輕々しく承諾する。
		得親大教／親しく御指導を受ける。
		允許／許す。
		感激非錢／誠に有難いことでありま す。
		稟見／御面會する。
	先容／先に申し入れる。	
	下懷／私の心。	
人地／人情地理	人地／人情地理	
生疎／不案内、生ハ熟知セザル意。	生疎／不案内、生は熟知せざる意。	
貴班次／御同列。	貴班次／御同列。	貴班次／御同列。
		名次／任官する順序の意。
		起服／除服、忌明け。
		崇正書院／崇正書院。
紳衿／紳士連。	紳衿／紳士連。	紳衿／紳士。
主講／講師	主講／講師	主講／講師。

斗胆／大膽ノ意、茲ニテハ無様ニ、又ハ卒爾ナガラナドト譯スベシ。	斗膽／大膽の意、茲にては無様に又は卒爾ながらなどと譯すべし。	
		公舉／推選する。
	問道於盲／道を盲人に問ふ	問道於盲／道を盲に問ふ即ち不學の自分に教へを乞はるるの意。
擇吉／吉日ヲ擇ビ池。	擇吉／吉日を擇び。	擇吉／黃道吉日をトす。(註) 選擇好日子。
拜師／師ノ門ニ入り始メテ師ニ對シ禮ヲナスナリ之ヲ拜師傳トイヒテ滿禮漢禮共ニ頗ル重要ナル儀式ナリ滿禮ニテハ一跪三叩首漢禮ニテハ四起八拜ノ禮ヲ為スナリ。	拜師／師の門に入り初めて師に對し禮をなすなり、之を拜師傳といひて滿禮漢禮共に頗る重要なる儀式なり、滿禮にては一跪三叩首、漢禮にては四起八拜の禮をなす。	拜師／先生に對し入門の挨拶をする。
進學／秀才トナルノナリ謂ナリ、凡ソ支那ニテハ各府縣皆孔子ノ廟ヲ設ケ之ヲ學ト稱ス府ニアルヲ府學トシ縣ニアルヲ縣學ト稱シ皆教官ヲ置ク凡秀才トナレバ各自本籍ノ學中ニ名ヲ列シ始メテ秀才タルコトヲ證明シ得ルナリ故ニ秀才トナルヲ學ニ進ムトイフナリ。	進學／秀才となるの謂なり、凡そ支那にては各府縣皆孔子の廟を設け之を學と稱す、府にあるを府學とし、縣にあるを縣學と稱し、皆教官を置く、凡秀才となれば各自本籍の學中に名を列し始めて秀才たることを證明し得るなり、故に秀才となるを學に進むといふなり。	進學 (秀才の資格を得るしものを云ふ。)
		荒疎學業／學業が退步する。
		肄業／修業する。
		以圖上進／學問の向上を計る。
陶鎔／薰陶。	陶鎔／薰陶。	陶鎔／薰陶。
		學家感戴／一家舉つて御恩を感謝する。
	沒齒難忘／死に至る迄忘れず。	沒齒難忘也／永遠に御高恩を忘れぬ。
官話問答第 17 章		
遊玩／遊歴、遊覽。	遊玩／遊歴、遊覽。	遊玩／見物する。
		可逛足了罷／定しよく御見物が出来ましたでせう。
		竟住了好幾天／只だ幾日も滞在してた許りです。
		關帝廟／關帝廟
		詩會／詩會。
		雅的很／實に高尚なことですネ。
		每月逢幾／毎月何の日に催しがあり

		ますか。
		作會的日子／會合何の日。
	下榻／牀の狭くて長きものを榻といふ。	下榻／宿泊する。
		每逢／何時も…の度毎に。
		彼處／彼處
		與這個會更増光了／この會合に一層の光採を添へると云ふ物です。
		不長於做詩／作詩は不得手です。
		給衆位研墨／皆さんのために墨研りの御手傳でも致しませう。
		無須介意／御懸命なさるには及びません。
		都在兄弟身上就是了／皆私の方で計らふことに致しませう。
		同席吃飯／一緒に食事する。
		各自會錢／各自が金子を出し合せる。
		會首／會の主催者、會主。
	均攤／均は等しく、攤は平均に分つ。	
	便／すなわち、就に同じ。	
	約上／きそふ。	
官話問答第 18 章		
	絶頂／頂上、俐巧の骨頂。	
		長崎／長崎
		聰明絶頂／誠に利巧です。
		毫無差別／少しも差別がない。
		當面奉承／面と向つてお世辭を云ふ。
奉承／阿諛ヲ呈スル意。	奉承／阿諛を呈する。	
		罕見／珍しい。
		會辦的事件／會合して處理する問題。
		互相討論／お互に討議する。
		進益／有益。
		揀發到此／當地に來任する。
		湖北／湖北
		家母年邁／母親が老齡である。(註) 年邁、年紀老。
		不耐舟車之苦／船車の苦痛に堪へられぬ。
		雙身在此／單身で暮らして居る。

		往來交際／交際する。
		ど均甚水乳／どの方面とも折合ひがよい。
兩下裏／兩人ノ間。	兩下裏／兩人の間。	
寶眷／御眷屬、御家族。	寶眷／御眷屬、御家族。	
邁／高年ノ意。	邁／高年の意。	
雙身／單身。	雙身／單身。	
水乳／融合スルノ意。	水乳／融合するの意。	
洋情／海外ノ事情。	洋情／海外の事情。	
上憲／上官。	上憲／上官。	
幫辦／補助處理。	幫辦／補助處理	幫辦／補助處理
		令人欽佩／感心の外はない。
		熟諳洋情／海外の事情に精通する。
		以實心行實事／誠意を以て事に當る。
		兩無猜疑／双方に猜疑心が起らぬ。
		推誠相信／誠意を以て相信じる。
		自可融合／自然と融和が出来る。
		面頰大教／よいお話を伺ふ。
		不棄嫌／うるさがらぬ、毛嫌ひしない。
		恭候大駕／貴下の御來訪を待上げます。
		承上／どうぞ(車馬に)お召し下さい。
官話問答第19章		
		替我為力／お力添へを願ひます。
		秦寶臣／秦寶臣。
		索取此款／この金子を請求する。
		言語不合／意見が齟齬する。
		吵鬧／喧嘩する。
		構訟／訴訟沙汰にする。
		莫逆之交／親友。(註) 情投意合的朋友。
		去世／死去する。
		分半利錢／一分五厘の利息。
		等這項銀子用／この金子が至急に入用。
		停利歸本／利息を停止して元金を返済して貰ふ。

		盡力湊辦／極力金子の調達をする。
		再緩幾個月／後數ヶ月猶豫する。
紮取／督促	索取／督促。	
要構訟／訴訟ヲ起サント欲ス也。	要構訟／訴訟を起さんと欲す。	
借字兒／借用證書	借字兒／借用證書	
要置／置ハ買フノ意	要置／置は買ふの意	
不依／承知セズノ意。	不依／承知せず。	不依／承知しない。
		定要歸本／是非共元金を歸して貰ひ度い。
		沒到約期／約束の期限にならぬ。
		拖欠／滞る。
不拖欠／缺損セシメズトノ意	不拖欠／缺損せしめず。	
	悞差／役目をしくぢる。	
	承管／引き受ける、請け合ふ。	
官話問答第 20 章		
專誠／特意トイフニ同シ態々也。	專誠／特意といふに同じ、態々。	專誠／態々、特に。
認識／知見ル。	認識／知見る。	
		大阪／大阪。
		横濱／横濱。
老世交／數代前ヨリ交際間ヲイフ。	老世交／數代前より交際の間柄をいふ。	老世交／親代々の交り。
		結為文字之交／時文の交りをする。學問上の交りをする。
		最相契厚／お互いに深い交際を續ける。
		直隸／直隸。
		踪跡渺茫／居所が不明しなくなった。
	遇便／便に遇は。	遇便／お序手に。
		親近／實懇。
		似不必拘此行跡／こうした形式張つたことは無用と存じます。
		不遠送了／では御見送りを宥して頂きます。

謝辞

本研究を進めるにあたり、丁寧かつ熱心なご指導を頂いた博士卒業論文指導教員一大東文化大学の丁鋒教授及び大東文化大学外国語学研究科の田中寛教授に深く御礼申し上げます。大東文化大学外国語学研究科の大島吉郎教授、元大東文化大学教授瀬戸口律子先生、順天堂大学国際教養学科藤本健一先生は貴重な提言、ご助言をいただき、日本語表現の訂正に至るまで丁寧に直していただき心より感謝の意を表します。そして、本論文を作成するにあたり、関西大学外国語学科の内田慶市教授、目白大学外国語学部の氷野善寛先生は言語資料を提供して頂き、心より感謝致します。生活では温かく応援して下さった家族、友人、同じ研究室の先輩や後輩に感謝致します。

2020年3月